

# Solaris のシステム管理 (基本編)

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

# 目次

---

はじめに .....	19
<b>1 Oracle Solaris 管理ツール (製品概要) .....</b>	<b>25</b>
Oracle Solaris 管理ツールの新機能 .....	25
Oracle Solaris 管理ツールとサポートされるリリースを示すマトリックス .....	27
Oracle Solaris 管理ツールの機能説明 .....	28
Solaris 9 管理ツールの機能説明 .....	29
Solaris 管理コマンドの有効性 .....	30
Solaris 10 システム管理コマンド .....	30
Oracle Solaris 管理ツールの詳細情報 .....	31
<b>2 Solaris 管理コンソールの操作 (手順) .....</b>	<b>33</b>
Solaris 管理コンソール (概要) .....	33
Solaris 管理コンソールについて .....	33
Solaris 管理コンソールツール .....	34
Solaris 管理コンソールを使用する理由 .....	36
Solaris 管理コンソールの構成 .....	37
Solaris 管理コンソールウィンドウの変更 .....	38
Solaris 管理コンソールのマニュアル .....	38
役割によるアクセス制御の程度 .....	38
スーパーユーザー (root) になるか役割を引き受ける .....	40
▼ スーパーユーザー (root) になるか役割を引き受ける方法 .....	40
Solaris 管理ツールを RBAC と組み合わせて使用する (作業マップ) .....	42
コンソールに最初にログインした場合 .....	43
プライマリ管理者の役割を作成する .....	44
▼ 最初の役割 (プライマリ管理者) を作成する方法 .....	45
▼ プライマリ管理者の役割を引き受ける方法 .....	46

Solaris 管理コンソールを起動する .....	46
▼ スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法 .....	47
ネームサービス環境で Solaris 管理ツールを使用する (作業マップ) .....	48
RBAC セキュリティーファイル .....	49
ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを使用するための前提条件 .....	50
管理範囲 .....	51
/etc/nsswitch.conf ファイル .....	51
▼ 特定環境用のツールボックスを作成する方法 .....	51
▼ ツールボックスにツールを追加する方法 .....	53
▼ ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法 .....	54
Solaris 管理コンソールにツールを追加する .....	55
▼ レガシーツールをツールボックスに追加する方法 .....	55
▼ 別製品のツールをインストールする方法 .....	56
Solaris 管理コンソールのトラブルシューティング .....	56
▼ Solaris 管理コンソールのトラブルシューティングの方法 .....	57
<b>3 Oracle Java Web Console の操作 (手順) .....</b>	<b>59</b>
Oracle Java Web Console の管理に関する新機能 .....	59
Java Web Console サーバーの管理 .....	59
Java Web Console で使用できるアプリケーション .....	60
Oracle Java Web Console (概要) .....	60
Java Web Console について .....	61
Java Web Console の管理コマンド .....	62
サポートされている Web ブラウザ .....	62
Java Web Console を開始する (作業マップ) .....	62
Java Web Console を開始する .....	63
▼ Oracle Java Web Console の起動ページからアプリケーションを起動する方法 .....	64
コンソールサービスの管理 .....	66
▼ コンソールサービスを起動する方法 .....	66
▼ システムの起動時に実行されるようコンソールサービスを有効にする方法 .....	66
▼ コンソールサービスを停止する方法 .....	67
▼ コンソールサービスを無効にする方法 .....	67
Java Web Console を設定する .....	68
▼ Java Web Console のプロパティーを変更する方法 .....	71
Oracle Java Web Console のユーザー ID .....	72

コンソールのデバッグトレースログを使用する .....	73
Java Web Console ソフトウェアのトラブルシューティング (作業マップ) .....	75
Java Web Console ソフトウェアのトラブルシューティング .....	76
コンソールの状態とプロパティの確認 .....	76
コンソールへのアクセスに関連する問題 .....	79
アプリケーションの登録に関連する問題 .....	79
Java Web Console のリファレンス情報 .....	84
Java Web Console のセキュリティーに関する注意事項 .....	84
authTypes タグを使って承認を指定する .....	87
Java Web Console へのリモートアクセスを使用可能にする .....	88
Java Web Console へのリモートアクセスを使用不可能にする .....	88
Java Web Console の内部パスワードを変更する .....	89
<b>4 ユーザーアカウントとグループの管理 (概要) .....</b>	<b>91</b>
ユーザーとグループの管理における新機能または変更点 .....	91
ユーザーアカウントとグループアカウントの管理用のツール .....	92
ユーザーアカウントとグループとは .....	93
ユーザーアカウントの構成要素 .....	93
ユーザー名、ユーザー ID、およびグループ ID を使用するガイドライン .....	100
ユーザーアカウントとグループ情報の格納場所 .....	101
passwd ファイルのフィールド .....	102
デフォルトの passwd ファイル .....	102
shadow ファイルのフィールド .....	104
group ファイルのフィールド .....	104
デフォルトの group ファイル .....	104
ユーザーアカウントとグループを管理するツール .....	106
Solaris ユーザーおよびグループ管理ツールの作業 .....	107
プロジェクトでユーザーおよびリソースを管理する .....	109
ユーザーの作業環境のカスタマイズ .....	110
Bash シェルのカスタマイズ .....	111
サイト初期設定ファイルの使用方法 .....	111
ローカルシステムへの参照を避ける .....	112
シェル機能 .....	112
シェル環境 .....	113
PATH 変数 .....	116

ロケール変数 .....	117
デフォルトのファイルアクセス権 (umask) .....	118
ユーザー初期設定ファイルとサイト初期設定ファイルの例 .....	119
<b>5 ユーザーアカウントとグループの管理 (手順) .....</b>	<b>123</b>
ユーザーアカウントの設定 (作業マップ) .....	123
ユーザー情報の収集 .....	124
▼ユーザー初期設定ファイルをカスタマイズする方法 .....	125
▼Solaris 管理コンソールのグループツールを使ってグループを追加する方法 .....	127
▼Solaris 管理コンソールのユーザーツールを使ってユーザーを追加する方法 .....	128
コマンド行ツールを使ってグループやユーザーを追加する .....	129
Solaris 管理コンソールによるホームディレクトリの設定 .....	130
▼ユーザーのホームディレクトリを共有する方法 .....	131
▼ユーザーのホームディレクトリをマウントする方法 .....	132
ユーザーアカウントの管理 (作業マップ) .....	134
ユーザーアカウントを変更する .....	134
▼グループを変更する方法 .....	136
▼グループを削除する方法 .....	137
パスワードの管理 .....	137
パスワード有効期限を設定する .....	138
▼ユーザーアカウントを無効にする方法 .....	138
▼ユーザーのパスワードを変更する方法 .....	139
▼ユーザーアカウントのパスワード有効期限を設定する方法 .....	140
▼ユーザーアカウントを削除する方法 .....	141
<b>6 クライアントとサーバーサポートの管理 (概要) .....</b>	<b>143</b>
クライアントとサーバーサポートの管理に関する新機能 .....	144
bootadm - p コマンドによるプラットフォーム指定のサポート .....	144
nfs4_domain キーワードがディスクレスクライアントのブートに与える影響 ...	144
x86: GRUB ブート環境のディスクレスクライアントの変更点 .....	144
x86: smdiskless コマンドの変更点 .....	145
クライアントとサーバータスクの操作手順 .....	146
サーバー、クライアント、およびアプライアンスとは .....	146
クライアントサポートとは .....	147
システムタイプの概要 .....	147

サーバー .....	148
スタンドアロンシステム .....	149
ディスクレスクライアント .....	149
アプライアンス .....	150
システムタイプ選択のガイドライン .....	150
ディスクレスクライアント管理の概要 .....	151
OSサーバーおよびディスクレスクライアントのサポート情報 .....	152
ディスクレスクライアント管理機能 .....	153
OSサーバーに必要なディスク容量 .....	156
<b>7 ディスクレスクライアントの管理(手順) .....</b>	<b>159</b>
ディスクレスクライアントの管理(作業マップ) .....	160
ディスクレスクライアントの管理の準備 .....	161
▼ x86: GRUB ベースのブート環境にディスクレスクライアントを追加するための準備方法 .....	163
▼ Oracle Solaris 10 にディスクレスクライアントを追加するための準備方法 .....	166
▼ ディスクレスクライアントサポートの OS サービスの追加方法 .....	168
▼ x86: GRUB ベースのブート環境にディスクレスクライアントを追加する方法 ..	170
▼ Oracle Solaris 10 でディスクレスクライアントを追加する方法 .....	173
▼ x86: GRUB を使用してディスクレスクライアントをブートする方法 .....	176
▼ SPARC: Oracle Solaris 10 でディスクレスクライアントをブートする方法 .....	177
▼ ディスクレスクライアントサポートの削除方法 .....	177
▼ ディスクレスクライアントの OS サービスを削除する方法 .....	178
ディスクレスクライアント OS サービスにパッチを適用する .....	179
ディスクレスクライアントの OS パッチの表示 .....	179
▼ ディスクレスクライアントの OS パッチの追加方法 .....	180
ディスクレスクライアント問題のトラブルシューティング .....	182
ディスクレスクライアントのインストールの問題 .....	182
ディスクレスクライアントの一般的な問題のトラブルシューティング .....	186
<b>8 システムのシャットダウンとブートの概要 .....</b>	<b>191</b>
システムシャットダウンとブートに関する新機能 .....	191
Oracle Solaris 自動登録の導入 .....	191
ブートアーカイブの自動復旧 .....	192
SPARC でのインストール時更新のサポート .....	193

iSCSI ブート .....	193
Oracle Solaris 10 のインストール時およびブート時における 2T バイトディスクのサポート .....	194
Oracle Solaris での ZFS ブートのサポート .....	194
x86: findroot コマンド .....	195
bootadm コマンドによるプラットフォーム指定のサポート .....	195
SPARC ブートストラッププロセスの再設計 .....	196
x86: 電源ボタンによるシステムシャットダウン開始のサポート .....	196
シャットダウンとブートについての参照先 .....	197
シャットダウンとブートの用語 .....	197
システムのシャットダウンに関するガイドライン .....	198
システムのブートに関するガイドライン .....	199
システムをシャットダウンする場合 .....	200
システムをブートする場合 .....	201
<b>9 システムのシャットダウンとブート (概要) .....</b>	<b>203</b>
Oracle Solaris ブートデザインの基礎 .....	204
新しい SPARC ブートアーキテクチャーについて .....	205
ミニルートの圧縮と展開 .....	206
ソフトウェアのインストールとアップグレード .....	207
インストールのメモリー要件 .....	207
ネットワークブートサーバーの設定プロセスの変更点 .....	207
複数のカーネルのブートのサポート .....	208
SPARC でのブートアーカイブの実装 .....	208
x86: GRUB ブートローダーの管理 .....	209
GRUB ベースのブートの動作 .....	209
findroot コマンドの GRUB サポート .....	210
Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブート .....	211
Oracle Solaris ZFS のインストール要件 .....	211
Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブートの動作 .....	212
SPARC: Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブートをサポートするオプション .....	213
x86: ZFS ルートファイルシステムからのブートをサポートするオプション .....	213



10	システムのシャットダウン(手順).....	215
	システムのシャットダウン(作業マップ) .....	215
	システムのシャットダウン .....	216
	システムシャットダウンコマンド .....	216
	システムのダウン時間をユーザーに通知する .....	217
	▼システムにログインしているユーザーを知る方法 .....	218
	▼サーバーをシャットダウンする方法 .....	218
	▼スタンドアロンシステムをシャットダウンする方法 .....	222
	すべてのデバイスの電源を落とす .....	224
	▼すべてのデバイスの電源を落とす方法 .....	224
11	<b>Oracle Solaris</b> ブート動作の変更(手順).....	225
	SPARC システムでのブート動作の変更(作業マップ) .....	225
	SPARC: ブート PROM の使用 .....	226
	▼ SPARC: システムの PROM リビジョン番号を確認する方法 .....	227
	▼ SPARC: システム上のデバイスを確認する方法 .....	227
	▼ SPARC: デフォルトのブートデバイスを調べる方法 .....	229
	▼ SPARC: ブート PROM を使用してデフォルトのブートデバイスを変更する方 法 .....	229
	▼ SPARC: eeprom コマンドを使用してデフォルトのブートデバイスを変更する方 法 .....	231
	SPARC: システムのリセット .....	231
	▼ SPARC: ブート PROM を使用してデフォルトのカーネルを変更する方法 .....	232
	▼ SPARC: eeprom コマンドを使用してデフォルトのカーネルを変更する方法 .....	232
	SPARC での ITU 構築ツールのサポート .....	233
	x86 システムでのブート動作の変更(作業マップ) .....	235
	x86 システムのブート動作を変更する .....	235
	x86: ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更する .....	237
	Oracle Solaris 10 で GRUB メニューを編集する .....	238
	ブート時に GRUB メニューを編集して指定できるブート引数 .....	238
	▼ x86: ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更する方法 .....	239
	x86: menu.lst ファイルを編集してブート動作を変更する .....	241
	▼ x86: menu.lst ファイルを編集してブート動作を変更する方法 .....	242
	x86: アクティブな GRUB menu.lst ファイルを検出する .....	246
	x86: findroot コマンドの実装 .....	246
	▼ x86: findroot コマンドを使用する GRUB メニューエントリを追加する方法 .....	248

<b>12 Oracle Solaris システムのブート(手順)</b> .....	251
SPARC システムのブート (作業マップ) .....	251
SPARC システムのブート .....	253
▼ SPARC: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法 .....	253
▼ SPARC: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法 .....	254
▼ SPARC: システムを対話式でブートする方法 .....	255
▼ SPARC: デフォルトのカーネル以外のカーネルをブートする方法 .....	257
SPARC システムで指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする .....	259
▼ SPARC: ZFS ルートプール内の使用可能なブート可能データセットのリストを表示する方法 .....	259
▼ SPARC: 指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする方法 .....	261
SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする .....	263
▼ SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする方法 .....	264
SPARC システムをネットワークからブートする .....	268
▼ SPARC: システムをネットワークからブートする方法 .....	268
GRUB を使用して x86 システムをブートする (作業マップ) .....	270
▼ x86: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法 .....	271
▼ x86: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法 .....	272
▼ x86: システムを対話式でブートする方法 .....	275
x86: x86 システムで指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする .....	277
▼ x86: 使用可能な ZFS ブート環境のリストを表示する方法 .....	277
▼ x86: 指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする方法 .....	278
x86 システムをフェイルセーフモードでブートする .....	281
▼ x86 システムをフェイルセーフモードでブートする方法 .....	282
▼ x86: フェイルセーフモードでブートして、破壊されたブートアーカイブを強制的に更新する方法 .....	284
x86 システムをネットワークからブートする .....	286
x86: DHCP マクロについて .....	288
▼ x86: GRUB ベースのブートをネットワークから実行する方法 .....	289
<b>13 Oracle Solaris ブートアーカイブの管理(手順)</b> .....	293
Oracle Solaris ブートアーカイブの管理 (作業マップ) .....	293
Oracle Solaris ブートアーカイブの説明 .....	295
boot-archive サービスの管理 .....	296
▼ boot-archive サービスを有効または無効にする方法 .....	296
ブートアーカイブの自動復旧 .....	297

▼ x86: auto-reboot-safe プロパティを使用して自動ブートアーカイブ更新障害を 消去する方法 .....	297
▼ bootadm コマンドを使って自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法 .....	298
bootadm コマンドを使用してブートアーカイブを管理する .....	299
▼ bootadm コマンドを使ってブートアーカイブを手動で更新する方法 .....	299
▼ Solaris ボリュームマネージャー RAID-1 (ミラー) ルートパーティション上の ブートアーカイブを手動で更新する方法 .....	300
▼ ブートアーカイブの内容を一覧表示する方法 .....	302
▼ x86: アクティブな GRUB メニューを検出し、現在のメニューエントリを一覧表示 する方法 .....	302
▼ x86: アクティブな GRUB メニューのデフォルトのブートエントリを設定する方 法 .....	303
<b>14 Oracle Solaris システムのブートのトラブルシューティング (手順) .....</b>	<b>305</b>
SPARC プラットフォームのブートのトラブルシューティング (作業マップ) .....	305
▼ SPARC: 復旧を目的としてシステムを停止する方法 .....	306
SPARC: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする .....	307
▼ SPARC: 復旧を目的としてシステムをブートする方法 .....	309
▼ SPARC: ZFS ルート環境をブートして、パスワード消失または類似の問題から復 旧する方法 .....	311
▼ SPARC: カーネルデバッグ (kmdb) を使ってシステムをブートする方法 .....	311
x86 プラットフォームのブートのトラブルシューティング (作業マップ) .....	312
▼ x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法 .....	313
x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする .....	313
▼ x86: GRUB ブート環境でカーネルデバッグ (kmdb) を使ってシステムをブートする 方法 .....	314
<b>15 x86: GRUB ベースのブート (参照情報) .....</b>	<b>317</b>
x86: ブートプロセス .....	317
x86: システム BIOS .....	317
x86: カーネル初期化プロセス .....	318
x86: Oracle Solaris OS での GRUB のサポート .....	318
x86: GRUB の用語 .....	318
x86: GRUB の機能コンポーネント .....	320
GRUB で複数のオペレーティングシステムをサポートする方法 .....	322
x86: サポートされる GRUB のバージョン .....	323

<b>16</b>	<b>x86: GRUB を実装しないシステムのブート (手順)</b> .....	327
	x86: システムのブート (作業マップ) .....	327
	x86: GRUB を実装しないシステムをブートする .....	329
	▼ x86: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法 .....	329
	▼ x86: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法 .....	332
	▼ x86: システムを対話式でブートする方法 .....	333
	x86: ネットワークからのブート .....	335
	▼ x86: システムをネットワークからブートする方法 .....	336
	x86: Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) の使用 .....	338
	▼ x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法 .....	339
	▼ x86: 復旧を目的としてシステムをブートする方法 .....	339
	▼ x86: カーネルデバッガ (kmdb) を使ってシステムをブートする方法 .....	342
	x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする .....	344
	x64: 64 ビットブートの失敗のトラブルシューティング .....	346
	x86: ブートプロセス (参照情報) .....	347
	x86: ブートサブシステム .....	347
	x86: ブートプロセス .....	352
	x86: ブートファイル .....	354
<b>17</b>	<b>Oracle Solaris 自動登録コマンド regadm の操作 (手順)</b> .....	357
	Oracle Solaris 自動登録 (概要) .....	358
	Oracle Solaris 10 9/10 システムの登録方法 .....	358
	サービスタグデータを転送する場合と方法 .....	359
	自動登録構成の管理 .....	360
	自動登録プロセスが動作する方法 .....	360
	regadm コマンドの開始 .....	362
	regadm コマンド行インタフェースを使用する場合 .....	362
	regadm コマンドの使用要件 .....	363
	自動登録 SMF サービスの管理 .....	363
	▼ 自動登録 SMF サービスが有効かどうかを確認する方法 .....	364
	▼ 自動登録 SMF サービスを無効にする方法 .....	364
	▼ 自動登録 SMF サービスを有効にする方法 .....	365
	regadm コマンドを使用した自動登録機能の構成 .....	365
	登録前に実行する必要があるタスク .....	366
	現在の自動登録構成を表示する .....	366

▼現在の自動登録構成を消去する方法 .....	367
自動登録プロパティを構成する .....	368
名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する .....	371
regadm コマンドを使ってシステムを登録する .....	373
▼まだ登録していない製品の登録情報を表示する方法 .....	373
▼regadm コマンドを使ってシステムを登録する方法 .....	374
現在登録されている製品の情報を取得する .....	376
自動登録に関する問題のトラブルシューティング .....	377
認証に失敗した .....	377
HTTP プロキシパスワードを送信できない .....	377
HTTP 通信エラー .....	377
<b>18 サービスの管理 (概要)</b> .....	379
SMF について .....	379
SMF 使用時の動作に関する変更 .....	381
SMF の概念 .....	381
SMF サービス .....	381
サービス識別子 .....	382
サービスの状態 .....	383
SMF 目録 .....	384
SMF プロファイル .....	384
サービス構成リポジトリ .....	385
SMF リポジトリのバックアップ .....	385
SMF スナップショット .....	385
SMF 管理およびプログラミングインタフェース .....	386
SMF コマンド行管理ユーティリティ .....	386
サービス管理構成ライブラリインタフェース .....	386
SMF コンポーネント .....	387
SMF マスターリスタータデーモン .....	387
SMF 委任リスタータ .....	387
SMF とブート .....	388
SMF 互換性 .....	388
実行レベル .....	389
実行レベルとマイルストンの使い分け .....	390
システムの実行レベルを確認する .....	390

/etc/inittab ファイル .....	391
システムが実行レベル3になると実行される処理 .....	392
<b>19 サービスの管理(手順) .....</b>	<b>393</b>
サービスの管理(作業マップ) .....	393
SMF サービスの監視 .....	394
▼ サービスの状態を一覧表示する方法 .....	394
▼ 特定のサービスに依存するサービスを表示する方法 .....	396
▼ 特定のサービスが依存するサービスを表示する方法 .....	396
SMF サービス(作業マップ) .....	397
SMF サービスの管理 .....	397
RBAC 権利プロファイルを使って SMF を管理する .....	398
▼ サービスインスタンスを無効にする方法 .....	398
▼ サービスインスタンスを有効にする方法 .....	399
▼ サービスを再起動する方法 .....	400
▼ 保守状態のサービスを復元する方法 .....	400
▼ 別の SMF スナップショットに戻す方法 .....	401
▼ SMF プロファイルを作成する方法 .....	402
▼ SMF プロファイルを適用する方法 .....	403
▼ ネットワークに提供するサービスを generic*.xml で変更する .....	403
SMF サービスの設定 .....	404
▼ サービスを変更する方法 .....	404
▼ サービスの環境変数を変更する方法 .....	405
▼ inetd 制御サービスのプロパティを変更する方法 .....	406
▼ inetd 制御サービスのコマンド行引数を変更する方法 .....	407
▼ inetd.conf エントリを変換する方法 .....	408
実行制御スクリプトの使用(作業マップ) .....	409
実行制御スクリプトの使用 .....	409
▼ 実行制御スクリプトを使用して従来のサービスを起動または停止する方法 .....	409
▼ 実行制御スクリプトを追加する方法 .....	410
▼ 実行制御スクリプトを無効にする方法 .....	411
サービス管理機能のトラブルシューティング .....	412
▼ 起動していないサービスをデバッグする .....	412
▼ 破壊されたりポジトリを修復する方法 .....	412
▼ どのサービスも起動しないでブートする方法 .....	415

▼ ブート中に <code>system/filesystem/local:default</code> サービスで障害が発生した場合に <code>sulogin</code> プロンプトを強制的に表示する方法 .....	416
<b>20 ソフトウェアの管理 (概要) .....</b>	<b>419</b>
Oracle Solaris オペレーティングシステムでのソフトウェア管理における新機能 .....	420
Oracle Solaris 自動登録 .....	420
Oracle Solaris ゾーンをサポートするためのパッケージおよびパッチツールの拡張 .....	420
遅延起動パッチ .....	421
Oracle Solaris OS に組み込まれた Common Agent Container .....	421
<code>patchadd -M</code> コマンドが複数のパッチを処理する方法の改善 .....	422
パッケージおよびパッチツールの拡張 .....	422
ソフトウェア管理作業についての参照先 .....	423
ソフトウェアパッケージの概要 .....	423
署名付きのパッケージ、パッチ、およびソフトウェア更新 .....	424
ソフトウェアパッケージを管理するためのツール .....	426
ソフトウェアパッケージの追加または削除 ( <code>pkgadd</code> ) .....	427
ソフトウェアパッケージの追加にあたっての重要な注意点 ( <code>pkgadd</code> ) .....	428
パッケージの削除に関するガイドライン ( <code>pkgrm</code> ) .....	428
ゾーンに対応していない Solaris リリースでソフトウェアパッケージおよびパッチを追加および削除する際の制限 .....	429
パッケージ追加時のユーザーの対話操作を省略する ( <code>pkgadd</code> ) .....	429
管理ファイルの使用 .....	429
応答ファイルの使用 ( <code>pkgadd</code> ) .....	430
<b>21 Oracle Solaris システム管理ツールによるソフトウェアの管理 (手順) .....</b>	<b>433</b>
Oracle Solaris Product Registry および Solaris インストール GUI ツール (ソフトウェア管理用) .....	433
Oracle Solaris インストール GUI によるソフトウェアの追加 .....	434
▼ Oracle Solaris インストール GUI プログラムを使ってソフトウェアをインストールする方法 .....	434
Oracle Solaris Product Registry の GUI によるソフトウェアの管理 (作業マップ) .....	436
▼ インストールまたはアンインストールしたソフトウェアの情報を Oracle Solaris Product Registry の GUI を使って表示する方法 .....	437
▼ Oracle Solaris Product Registry の GUI を使ってソフトウェアをインストールする方法 .....	438

▼ Oracle Solaris Product Registry の GUI を使ってソフトウェアをアンインストールする 方法 .....	439
Oracle Solaris Product Registry のコマンド行インタフェースによるソフトウェアの管理 (作業マップ) .....	440
Oracle Solaris Product Registry のコマンド行インタフェースによるソフトウェアの管 理 .....	441
▼ インストールまたはアンインストールしたソフトウェアの情報を表示する方法 (prodreg) .....	442
▼ ソフトウェア属性を表示する方法 (prodreg) .....	445
▼ ソフトウェアの依存関係を確認する方法 (prodreg) .....	446
▼ 損傷を受けたソフトウェア製品を特定する方法 (prodreg) .....	447
▼ ソフトウェアをアンインストールする方法 (prodreg) .....	449
▼ 損傷を受けたソフトウェアをアンインストールする方法 (prodreg) .....	452
▼ 損傷を受けたソフトウェアコンポーネントを再インストールする方法 (prodreg) .....	454
<b>22 Oracle Solaris</b> パッケージコマンドによるソフトウェアの管理 (手順) .....	457
pkgadd コマンドによる署名付きパッケージの追加および削除 (作業マップ) .....	457
pkgadd コマンドによる署名付きパッケージの追加および削除 .....	458
▼ 証明書の情報を表示する方法 (pkgadm listcert) .....	458
▼ 証明書を削除する方法 (pkgadm removecert) .....	459
▼ プロキシサーバーをセットアップする方法 (pkgadd) .....	459
▼ 署名付きパッケージを追加する方法 (pkgadd) .....	461
パッケージコマンドによるソフトウェアパッケージの管理 (作業マップ) .....	462
パッケージコマンドによるソフトウェアパッケージの管理 .....	462
▼ ソフトウェアパッケージを追加する方法 (pkgadd) .....	463
ソフトウェアパッケージをスプールディレクトリに追加する .....	466
▼ インストール済みのすべてのパッケージに関する情報を表示する方法 (pkginfo) .....	468
▼ インストール済みのソフトウェアパッケージの整合性を検査する方法 (pkgchk) .....	469
▼ インストール済みオブジェクトの整合性を検査する方法 (pkgchk -p、pkgchk -P) .....	471
ソフトウェアパッケージを削除する .....	473
▼ ソフトウェアパッケージを削除する方法 (pkgrm) .....	473



---

<b>23</b>	patchadd コマンドによるパッチの管理 (手順) .....	475
	パッチの種類 .....	475
	署名付きパッチと署名なしパッチ .....	476
	Oracle Solaris パッチへのアクセス .....	476
	パッチの番号付け .....	477
	Oracle Solaris パッチの管理 .....	477
	Oracle Solaris オペレーティングシステムでのパッチ管理 .....	478
	システムに署名付きパッチ、署名なしパッチのいずれを適用するか決定 .....	478
	信頼される証明書のパッケージキーストアとの間のインポートおよびエクスポート .....	478
	パッチ管理の用語と定義 .....	479
	patchadd コマンドによるパッチの管理 (作業マップ) .....	481
	▼ Web プロキシを指定する方法 .....	481
	patchadd -R を使って代替 root パスを作成する際の制限 .....	482
	▼ パッチをダウンロードおよび適用する方法 .....	482
	▼ パッチの情報を表示する方法 .....	484
	▼ patchrm コマンドを使用してパッチを削除する方法 .....	485
<b>A</b>	<b>SMF サービス</b> .....	487
	索引 .....	493



# はじめに

---

『Solaris のシステム管理 (基本編)』は、Oracle Solaris システム管理に関する重要な情報を提供するマニュアルセットの一部です。本書には、SPARC および x86 の両方のシステムに関する情報が含まれています。

本書では、次のことを前提としています。

- Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム (OS) がインストールされていること
- 使用するネットワークソフトウェアの設定が完了していること

システム管理者にとって重要と思われる Oracle Solaris 10 リリースの新機能については、各章の初めにある新機能に関する節を参照してください。

---

注 - この Oracle Solaris のリリースでは、SPARC および x86 系列のプロセッサアーキテクチャーを使用するシステムをサポートしています。サポートされるシステムについては、[Solaris OS: Hardware Compatibility Lists \(http://www.sun.com/bigadmin/hcl\)](http://www.sun.com/bigadmin/hcl) を参照してください。本書では、プラットフォームにより実装が異なる場合は、それを特記します。

本書の x86 に関連する用語については、以下を参照してください。

- 「x86」は、64 ビットおよび 32 ビットの x86 互換製品系列を指します。
- 「x64」は、具体的には 64 ビット x86 互換 CPU を指します。
- 「32 ビット x86」は、x86 をベースとするシステムに関する 32 ビット特有の情報を指します。

サポートされるシステムについては、[Solaris OS: Hardware Compatibility List](#) を参照してください。

---

## 対象読者

このマニュアルは、Oracle Solaris 10 リリースが稼働しているシステムの管理者を対象としています。このマニュアルを読むには、UNIX のシステム管理について 1-2 年の経験が必要です。UNIX システム管理のトレーニングコースに参加することも役に立ちます。

# Solaris システム管理マニュアルセットの構成

システム管理マニュアルセットに含まれる各マニュアルとその内容は、次のとおりです。

マニュアルのタイトル	トピック
『Solaris のシステム管理 (基本編)』	ユーザーアカウントとグループ、サーバーとクライアントのサポート、システムのシャットダウンとブート、管理サービス、およびソフトウェアの管理 (パッケージとパッチ)
『Solaris のシステム管理 (上級編)』	端末とモデムの設定、システムリソースの管理 (ディスク割り当て、アカウントティング、および crontab ファイルの管理)、システムプロセスの管理、および Oracle Solaris ソフトウェアの障害追跡
『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』	リムーバブルメディア、ディスクとデバイス、ファイルシステム、およびデータのバックアップと復元
『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』	TCP/IP ネットワーク管理、IPv4 と IPv6 アドレス管理、DHCP、IPsec、IKE、Solaris IP フィルタ、モバイル IP、IP ネットワークマルチのパス化 (IPMP)、および IPQoS
『Solaris のシステム管理 (ネーミングとディレクトリサービス : DNS、NIS、LDAP 編)』	DNS、NIS、および LDAP のネーミングとディレクトリサービス (NIS から LDAP への移行、および NIS+ から LDAP への移行を含む)
『Solaris のシステム管理 (ネーミングとディレクトリサービス : NIS+ 編)』	NIS+ のネーミングとディレクトリサービス
『Solaris のシステム管理 (ネットワークサービス)』	Web キャッシュサーバー、時間関連サービス、ネットワークファイルシステム (NFS と Autofs)、メール、SLP、および PPP
『Solaris のシステム管理 (印刷)』	印刷に関するトピックや、サービス、ツール、プロトコル、およびテクノロジーを使って印刷サービスおよびプリンタを設定および管理する方法
『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』	監査、デバイス管理、ファイルセキュリティ、ティー、BART、Kerberos サービス、PAM、Solaris 暗号化フレームワーク、特権、RBAC、SASL、および Solaris Secure Shell
『Oracle Solaris のシステム管理 (Oracle Solaris コンテナ : 資源管理と Oracle Solaris ゾーン)』	リソース管理に関連する計画と作業、拡張アカウントティング、リソース制御、フェアシェアスケジューラ (FSS)、資源上限デーモン (rcapd) による物理メモリーの制御、および資源プール (Solaris Zones ソフトウェア区分技術と lx ブランドゾーンによる仮想化)

マニュアルのタイトル	トピック
『Oracle Solaris ZFS 管理ガイド』	ZFS ストレージプールとファイルシステムの作成および管理、スナップショット、複製、バックアップ、アクセス制御リスト (ACL) を使用した ZFS ファイルの保護、ゾーンがインストールされた Oracle Solaris システムでの ZFS の使用、エミュレートボリューム、およびトラブルシューティングとデータ復旧
『Oracle Solaris Trusted Extensions 管理の手順』	Oracle Solaris の Trusted Extensions 機能に固有のシステム管理
『Oracle Solaris Trusted Extensions 構成ガイド』	Solaris 10 5/08 リリース以降での、Oracle Solaris の Trusted Extensions 機能の計画、有効化、および初期設定の方法

## 関連する Sun 以外の Web サイト情報

注 - このマニュアルで説明している Oracle 以外の Web サイトの利用については、Oracle は責任を負いません。こうしたサイトやリソース上の、またはこれらを通じて利用可能な、コンテンツ、広告、製品、その他の素材について、Oracle は推奨しているわけではなく、Oracle はいかなる責任も負いません。こうしたサイトやリソース上の、またはこれらを経由して利用可能な、コンテンツ、製品、サービスを利用または信頼したことに伴って発生した (あるいは発生したと主張される) いかなる損害や損失についても、Oracle は一切の責任を負いません。

## マニュアル、サポート、およびトレーニング

追加リソースについては、次の Web サイトを参照してください。

- マニュアル (<http://docs.sun.com>)
- サポート (<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>)
- トレーニング (<http://education.oracle.com>) - 左のナビゲーションバーで「Sun」のリンクをクリックします。

## Oracle へのご意見

Oracle はドキュメントの品質向上のために、お客様のご意見やご提案をお待ちしています。誤りを見つかったり、改善に向けた提案などがある場合は、<http://docs.sun.com> で「Feedback」をクリックしてください。可能な場合には、ドキュメントのタイトルやパート番号に加えて、章、節、およびページ番号を含めてください。返信を希望するかどうかもお知らせください。

Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technetwork/index.html>) では、Oracle ソフトウェアに関する広範なリソースが提供されています。

- ディスカッションフォーラム (<http://forums.oracle.com>) で技術的な問題や解決策を話し合う。
- Oracle By Example (<http://www.oracle.com/technology/obe/start/index.html>) のチュートリアルで、手順に従って操作を体験する。
- サンプルコード ([http://www.oracle.com/technology/sample\\_code/index.html](http://www.oracle.com/technology/sample_code/index.html)) をダウンロードする。

## 表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。  ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。  system%
<b>AaBbCc123</b>	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	system% <b>su</b>  password:
<i>AaBbCc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「 」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。  この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% grep '^#define \  XV_VERSION_STRING'

Oracle Solaris OS に含まれるシェルで使用する、UNIX のデフォルトのシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを次に示します。コマンド例に示されるデフォルトのシステムプロンプトは、Oracle Solaris のリリースによって異なります。

- C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

- C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

- Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェル

```
$ command y|n [filename]
```

- Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[ ] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

## 一般規則

このマニュアルでは次の規則が使用されています。

- このマニュアルでは、英語環境での画面イメージを使っています。このため、実際に日本語環境で表示される画面イメージとこのマニュアルで使っている画面イメージが異なる場合があります。本文中で画面イメージを説明する場合には、日本語のメニュー、ボタン名などの項目名と英語の項目名が、適宜併記されています。
- このマニュアル中の手順を実行したり、例 (コマンド入力、コードなど) を使用する場合には、二重引用符 ("), 左一重引用符 ('), 右一重引用符 (') をそれぞれ間違えないように注意してください。
- このマニュアル中で「Return キー」と表記しているキーは、キーボードによっては「Enter キー」という名前になっていることがあります。

- /sbin、/usr/sbin、/usr/bin、/etc ディレクトリにあるコマンドについては、このマニュアルでは絶対パス名で表記していません。ただし、それ以外のあまり一般的でないディレクトリにあるコマンドについては、このマニュアル中の例では絶対パスで表記します。
- このマニュアル中の例は、SunOS ソフトウェアが標準的にインストールされていることを前提としています。つまり、バイナリ互換パッケージがインストールされていることや /usr/ucb が検索パスに設定されていることは、前提としていません。



---

注意 - /usr/ucb を検索パスに設定する場合は、パスの一番最後に設定してください。ps コマンドや df コマンドなどは、SunOS コマンドと /usr/ucb コマンドとで形式やオプションがそれぞれ異なります。

---



# Oracle Solaris 管理ツール (製品概要)

---

この章では、Solaris 管理ツールの製品概要について説明します。

- 25 ページの「Oracle Solaris 管理ツールの新機能」
- 27 ページの「Oracle Solaris 管理ツールとサポートされるリリースを示すマトリックス」
- 28 ページの「Oracle Solaris 管理ツールの機能説明」
- 29 ページの「Solaris 9 管理ツールの機能説明」
- 31 ページの「Oracle Solaris 管理ツールの詳細情報」

## Oracle Solaris 管理ツールの新機能

Oracle Solaris 10 初期 3/05 リリースでは、次のツールが新たに追加または変更されました。

- `admintool` – Oracle Solaris 10 以降、このツールは使用できなくなりました
- パッケージおよびパッチツールの拡張

新機能の完全な一覧や各 Oracle Solaris リリースの説明については、『[Oracle Solaris 10 9/10 の新機能](#)』を参照してください。

次の表は、新たに追加または変更された管理ツールの簡単な説明です。

表 1-1 このリリースで新たに追加または変更された Oracle Solaris 管理ツール

Solaris 管理ツール	説明	詳細
admintool	<p>このツールは使用できなくなりました。</p> <p>代わりに、次のツールを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris 管理コンソール (ユーザー、グループ、端末、およびモデムの管理)</li> <li>■ Oracle Solaris Product Registry (ソフトウェアの管理)</li> <li>■ Solaris 印刷マネージャー (プリンタの管理)</li> </ul>	<p>123 ページ の「ユーザーアカウント の設定 (作業マップ)」</p> <p>436 ページの「Oracle Solaris Product Registry の GUI によるソフトウェア の管理 (作業マップ)」</p> <p>『Solaris のシステム管理 (印刷)』の第 5 章「LP 印 刷コマンドを使用したプ リンタの設定 (作業)」</p> <p>『Solaris のシステム管理 (上級編)』の「シリアル ポートツールによる端末 とモデムの設定 (概要)」</p>
パッケージツール とパッチツール	<p>Oracle Solaris 10 以降では、パッケージツールと パッチツールが拡張されています。grep -pattern /var/sadm/install/contents の代わりに、P オプ ションを指定して pkgchk コマンドを使用してくだ さい。-P オプションでは部分パスが使えます。</p>	<p>422 ページ の「パッケージおよび パッチツールの拡張」</p> <p>第 23 章「patchadd コマ ンドによるパッチの管理 (手順)」</p>

表 1-1 このリリースで新たに追加または変更された Oracle Solaris 管理ツール (続き)

Solaris 管理ツール	説明	詳細
Solaris 印刷マネージャー	<p>Solaris 印刷マネージャーの拡張されたプリンタサポートには、Oracle Solaris 10 で導入された次の機能が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「バナーを印刷しない」オプション</li> <li>■ ラスターイメージプロセッサ (RIP) のサポート</li> <li>■ PostScript プリンタ記述 (PPD) ファイルのサポート: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <code>lpadmin</code> コマンドの <code>-n</code> オプションで、プリンタの作成または変更時に PPD ファイルを指定できます。</li> <li>■ Solaris 印刷マネージャーの「PPD ファイルを使用」オプションで、プリンタの作成または変更時に PPD ファイルを指定できます。</li> <li>■ <code>lpstat</code> コマンドの出力に、PPD ファイルを使用する印刷待ち行列の PPD ファイルが表示されます。</li> </ul> </li> </ul>	『Solaris のシステム管理 (印刷)』の「印刷の新機能」

## Oracle Solaris 管理ツールとサポートされるリリースを示すマトリックス

この節では、主としてユーザー、グループ、クライアント、ディスク、プリンタ、シリアルポートの管理に使われるツールについて説明します。

次の表に、Oracle Solaris 管理用の各種 GUI ツールと、それらの現在のサポート状況を示します。

表 1-2 Solaris 管理ツールのサポート状況を示すマトリックス

	Solaris 9	Solaris 10
admintool	サポートされています	サポートされていません
Solstice AdminSuite 2.3	サポートされていません	サポートされていません
Solstice AdminSuite 3.0	サポートされていません	サポートされていません
Solaris Management Tools 1.0	サポートされていません	サポートされていません
Solaris Management Tools 2.0	サポートされていません	サポートされていません
Solaris Management Tools 2.1	サポートされています	サポートされています

コンソールにテキストベースの端末を使用しているシステムで管理作業を行う必要がある場合は、Solaris 管理コンソールのコマンドを使用してください。詳細は、表 1-5 を参照してください。

## Oracle Solaris 管理ツールの機能説明

この表では、Oracle Solaris リリースで使用可能なツールについて説明します。

表 1-3 Solaris 管理ツールの説明

機能またはツール	Solaris 管理コンソール 2.1 でのサポート
コンピュータとネットワークツール	サポートされています
ディスクレスクライアントサポート	ディスクレスクライアントのコマンド行インタフェースを使用できます
ディスクツール	サポートされています
拡張ディスクツール (Solaris ボリュームマネージャー)	サポートされています
ジョブスケジューラツール	サポートされています
ログビューアツール	サポートされています
メール別名サポート	サポートされています
マウントと共有ツール	サポートされています
ネームサービスサポート	ユーザー、グループ、ネットワーク情報に対してのみ
パフォーマンスツール	サポートされています
プリンタサポート	サポートされていません。ただし、独立したツールとして Solaris 印刷マネージャーを使用可能です
プロジェクトツール	サポートされています
役割によるアクセス制御 (Role-Based Access Control、RBAC) のサポート	サポートされています
RBAC ツール	サポートされています
シリアルポートツール	サポートされています
ソフトウェアパッケージツール	サポートされていません
システム情報ツール	サポートされています
ユーザー/グループツール	サポートされています

# Solaris 9 管理ツールの機能説明

この表では、Solaris 9 リリースで使用可能なツールについて説明します。

表 1-4 Solaris 9 管理ツールの機能説明

機能またはツール	admintool でのサポート	Solaris 管理コンソール 2.1 でのサポート
コンピュータとネットワークツール	サポートされていません	サポートされています
ディスクレスクライアントサポート	サポートされていません	ディスクレスクライアントのコマンド行インタフェースを使用できます
ディスクツール	サポートされていません	サポートされています
拡張ディスクツール (Solaris ボリュームマネージャー)	サポートされていません	サポートされています
ジョブスケジューラツール	サポートされていません	サポートされています
ログビューアツール	サポートされていません	サポートされています
メール別名サポート	サポートされていません	サポートされています
マウントと共有ツール	サポートされていません	サポートされています
ネームサービスサポート	サポートされていません	ユーザー、グループ、ネットワーク情報に対してのみ
パフォーマンスツール	サポートされていません	サポートされています
プリンタサポート	サポートされています	サポートされていません。ただし、独立したツールとして Solaris 印刷マネージャーを使用可能です
プロジェクトツール	サポートされていません	サポートされています
RBAC サポート	サポートされていません	サポートされています
RBAC ツール	サポートされていません	サポートされています
シリアルポートツール	サポートされています	サポートされています
ソフトウェアパッケージツール	サポートされています	サポートされていません
システム情報ツール	サポートされていません	サポートされています
ユーザー/グループツール	サポートされています	サポートされています

## Solaris 管理コマンドの有効性

以下の各表に、Oracle Solaris 管理ツールの処理に対応するコマンドを示します。ディスクレスクライアントサポートについては、第7章「ディスクレスクライアントの管理(手順)」を参照してください。

### Solaris 10 システム管理コマンド

次の表に、Oracle Solaris 管理ツールと同じ機能を備えたコマンドを示します。これらのコマンドを使用する場合は、スーパーユーザーになるか、それと同等の役割を引き受ける必要があります。コマンドの中には、ローカルシステム専用のものもあります。また、ネームサービス環境で動作するものもあります。それぞれのマニュアルページで、-D オプションを参照してください。

表 1-5 Solaris 管理コマンドの説明

コマンド	説明	マニュアルページ
smc	Solaris 管理コンソールを起動します	<a href="#">smc(1M)</a>
smcron	crontab ジョブを管理します	<a href="#">smcron(1M)</a>
smdiskless	ディスクレスクライアントサポートを管理します	<a href="#">smdiskless(1M)</a>
smexec	exec_attr データベースのエントリを管理します	<a href="#">smexec(1M)</a>
smgroup	グループエントリを管理します	<a href="#">smgroup(1M)</a>
smlog	WBEM ログファイルを管理/表示します	<a href="#">smlog(1M)</a>
smmultiuser	複数のユーザーアカウントに対する一括操作を管理します	<a href="#">smmultiuser(1M)</a>
smosservice	OS サービスとディスクレスクライアントサポートを追加します	<a href="#">smosservice(1M)</a>
smprofile	prof_attr および exec_attr データベースのプロファイルを管理します	<a href="#">smprofile(1M)</a>
smrole	役割アカウントの役割とユーザーを管理します	<a href="#">smrole(1M)</a>
smserialport	シリアルポートを管理します	<a href="#">smserialport(1M)</a>
smuser	ユーザーエントリを管理します	<a href="#">smuser(1M)</a>

次の表は、コマンド行から RBAC を管理するためのコマンドです。これらのコマンドを使用する場合は、スーパーユーザーになるか、それと同等の役割を引き受ける必要があります。なお、これらのコマンドは、ネームサービス環境で RBAC 情報を管理する場合には使用できません。

表 1-6 RBAC コマンドの説明

コマンド	説明	参照ページ
auths	ユーザーに付与されている権限を表示します	<a href="#">auths(1)</a>
profiles	ユーザーの実行プロファイルを表示します	<a href="#">profiles(1)</a>
roleadd	システムに新しい役割を追加します	<a href="#">roleadd(1M)</a>
roles	ユーザーに付与されている役割を表示します	<a href="#">roles(1)</a>

次の表は、コマンド行からユーザー、グループ、RBAC 機能を管理するためのコマンドです。これらのコマンドを使用する場合は、スーパーユーザーになるか、それと同等の役割を引き受ける必要があります。なお、これらのコマンドは、ネームサービス環境でユーザーやグループの情報を管理する場合には使用できません。

表 1-7 Oracle Solaris のユーザーおよびグループコマンドの説明

コマンド	説明	参照ページ
useradd, usermod, userdel	ユーザーを追加、変更、削除します	<a href="#">useradd(1M)</a> 、 <a href="#">usermod(1M)</a> 、 <a href="#">userdel(1M)</a>
groupadd, groupmod, groupdel	グループを追加、変更、削除します	<a href="#">groupadd(1M)</a> 、 <a href="#">groupmod(1M)</a> 、 <a href="#">groupdel(1M)</a>

## Oracle Solaris 管理ツールの詳細情報

次の表に、Oracle Solaris リリースの管理ツールの詳細情報を入手できる場所を示します。

表 1-8 Solaris 管理ツールの詳細情報

ツール	対応するリリース	詳細
Solaris 管理コンソール 2.1 のツール群	Solaris 9 および Oracle Solaris 10 の各リリース	このマニュアルとコンソールのオンラインヘルプ

表 1-8 Solaris 管理ツールの詳細情報 (続き)

ツール	対応するリリース	詳細
Solaris 管理コンソール 2.0 のツール群	Solaris 8 1/01、4/01、7/01、10/01、2/02 の各リリース	Solaris 管理コンソールのオンラインヘルプ
admintool	Solaris 9 および以前の Solaris リリース	admintool
AminSuite 3.0	Solaris 8、Solaris 8 6/00、Solaris 8 10/00 の各リリース	『Solaris Easy Access Server 3.0 のイン ストール』
ディスクレスクライアントの コマンド行インタフェース	Solaris 8 1/01、4/01、7/01、10/01、2/02、 9、および Oracle Solaris 10	<a href="#">第7章「ディスクレスクライアントの管理 (Solaris)」</a>



## Solaris 管理コンソールの操作 (手順)

---

この章では、システム管理作業を行うための管理ツールについて説明します。この章は、Solaris 管理コンソールの起動、コンソールで使用する役割によるアクセス制御 (RBAC) の設定、ネームサービス環境での Solaris 管理ツールの操作から構成されています。

Solaris 管理コンソールを使用したシステム管理作業の実行手順については、次の作業マップを参照してください。

- 42 ページの「Solaris 管理ツールを RBAC と組み合わせて使用する (作業マップ)」
- 48 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理ツールを使用する (作業マップ)」

Solaris 管理コンソールに関する問題のトラブルシューティングについては、56 ページの「Solaris 管理コンソールのトラブルシューティング」を参照してください。

## Solaris 管理コンソール (概要)

この節では、Solaris 管理コンソールの概要を説明します。

### Solaris 管理コンソールについて

Solaris 管理コンソールは、「ツールボックス」というコレクションに格納されている GUI ベースの管理ツール用のコンテナです。

このコンソールには、多数の基本管理ツールが含まれているデフォルトのツールボックスがあります。基本管理ツールには、次のものを管理するためのツールが含まれています。

- ユーザー
- プロジェクト

- ファイルシステムをマウント/共有するための cron ジョブ
- ディスクやシリアルポートを管理するための cron ジョブ

それぞれの Solaris 管理ツールについては、表 2-1 を参照してください。

既存のツールボックスにツールを追加することも、新しいツールボックスを作成することもできます。

Solaris 管理コンソールには、主に次の 3 つの構成要素があります。

- **Solaris** 管理コンソールクライアント  
「コンソール」と呼ばれるビジュアルインタフェースで、管理作業を行うための GUI ツールが含まれています。
- **Solaris** 管理コンソールサーバー  
コンソールと同じシステム上またはリモートに配置されます。コンソールによる管理を可能にするすべての「バックエンド」機能を提供します。
- **Solaris** 管理コンソールツールボックスエディタ  
コンソールによく似たアプリケーションで、ツールボックスを追加または変更したり、ツールボックスにツールを追加したり、ツールボックスの適用範囲を広げたりする場合に使用します。たとえば、ネームサービスのドメインを管理するためのツールボックスを追加する場合に使用します。

コンソールを起動すると、デフォルトのツールボックスが表示されます。

## Solaris 管理コンソールツール

次の表に、Solaris 管理コンソールのデフォルトのツールボックスに含まれているツールと、各ツールの説明の参照先を示します。

表 2-1 Solaris 管理コンソールツール群

カテゴリ	ツール	説明	詳細
システムの 状態	システム情報	日付、時間、時間帯などのシステム情報を監視および管理します	『Solaris のシステム管理 (上級編)』の第 5 章「システム情報の表示と変更(手順)」
	ログビューア	Solaris 管理コンソールツールのログとシステムログを監視および管理します	『Solaris のシステム管理 (上級編)』の第 14 章「ソフトウェアの問題解決 (概要)」

表 2-1 Solaris 管理コンソールツール群 (続き)

カテゴリ	ツール	説明	詳細
	プロセス数	システムプロセスを監視および管理します	『Solaris のシステム管理 (上級編)』の「プロセスとシステムのパフォーマンス」
	パフォーマンス	パフォーマンスを監視します	『Solaris のシステム管理 (上級編)』の第 11 章「システムパフォーマンスの管理 (概要)」
システムの構成	ユーザー	ユーザー、権利、役割、グループ、メーリングリストを管理します	93 ページの「ユーザーアカウントとグループとは」および『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「役割によるアクセス制御 (概要)」
	プロジェクト	/etc/project データベースのエントリを作成および管理します	『Oracle Solaris のシステム管理 (Oracle Solaris コンテナ: 資源管理と Oracle Solaris ゾーン)』の第 2 章「プロジェクトとタスク (概要)」
	コンピュータとネットワーク	コンピュータとネットワークの情報を作成および監視します	Solaris 管理コンソールのオンラインヘルプ
サービス	スケジュールされたジョブ	スケジュールされる cron ジョブを作成および管理します	『Solaris のシステム管理 (上級編)』の「システムタスクを自動的に実行する方法」
ストレージ	マウントと共有	ファイルシステムをマウントおよび共有します	『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の第 18 章「ファイルシステムのマウントとマウント解除 (手順)」
	ディスク	ディスクパーティションを作成および管理します	『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の第 10 章「ディスクの管理 (概要)」
	拡張ストレージ	ポリューム、ホットスベアの集合、状態データベースの複製、ディスクセットを作成および管理します	『Solaris ボリュームマネージャの管理』
デバイスとハードウェア	シリアルポート	端末とモデムを設定します	『Solaris のシステム管理 (上級編)』の第 1 章「端末とモデムの管理 (概要)」

ツールを起動すると、コンテキストヘルプが利用できるようになります。コンテキストヘルプよりも詳細なオンライン情報については、拡張ヘルプトピックを参照してください。拡張ヘルプトピックは、コンソールの「ヘルプ」メニューから利用できます。

## Solaris 管理コンソールを使用する理由

このコンソールには、管理者にさまざまなメリットをもたらすツールセットが用意されています。

コンソールは、次の処理を実行します。

- あらゆる経験レベルをサポートする

ダイアログボックス、ウィザード、コンテキストヘルプなどの GUI を使用すれば、経験の浅い管理者でも作業を完了することができます。また、経験を積んだ管理者であれば、何十または何百にも及ぶシステム上に分散している何百もの構成パラメータを管理する場合に、テキストエディタよりもこのコンソールを使用した方が便利で安全性が高いことに気がつきます。

- システムへのユーザーアクセスを管理する

デフォルトではどのユーザーもこのコンソールにアクセスできますが、初期設定を変更できるのはスーパーユーザーに限られます。『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「役割によるアクセス制御(概要)」に説明されているように、「役割」と呼ばれる特別なユーザーアカウントを作成して、特定のシステム変更を許可されているユーザー (通常は管理者) に割り当てることができます。

RBAC の主なメリットは、ユーザーがジョブの実行に必要な作業にしかアクセスできないように役割を制限できることです。Solaris 管理ツールを使用する場合に、RBAC は必須ではありません。何も変更せずスーパーユーザーとしてすべてのツールを実行できます。

- コマンド行インタフェースを提供する

管理者は、必要に応じてコマンド行インタフェース (CLI) から Solaris 管理ツールを操作することができます。コマンドの中には、ユーザーを管理するコマンドなどの、特に GUI ツールの機能をまねて作られたものもあります。表 1-5 に、これらのコマンドの名前と簡単な説明が記載されています。各コマンドのマニュアルページもあります。

専用のコマンドを持たない Solaris 管理ツール (マウントツールや共有ツールなど) では、標準の UNIX コマンドを使用します。

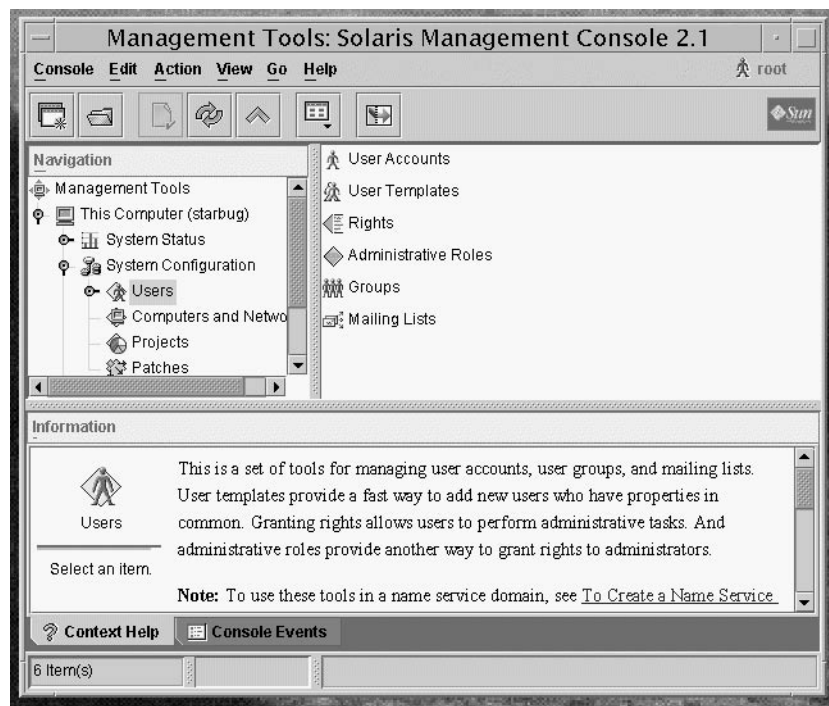
RBAC の機能、メリット、ユーザーサイトでのそれらのメリットの活かし方については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「役割によるアクセス制御(概要)」を参照してください。

RBAC を Oracle Solaris 管理ツールと組み合わせて使用する方法については、[42 ページの「Solaris 管理ツールを RBAC と組み合わせて使用する \(作業マップ\)」](#)を参照してください。

## Solaris 管理コンソールの構成

次の図は、ユーザーツールが開いた状態でのコンソールです。

図 2-1 Solaris 管理コンソールのユーザーツール



コンソールの主要部分は、次の3つの区画で構成されます。

- ナビゲーション区画 (左側) - ツール (ツールセット)、フォルダ、ほかのツールボックスへのアクセス用。ナビゲーション区画内にあるアイコンは「ノード」と呼ばれ、それがフォルダやツールボックスである場合は拡張可能です。
- 表示区画 (右側) - ナビゲーション区画で選択したノードに関する情報の表示用。選択したフォルダの内容、従属ツール、選択したツールに関連付けられたデータが表示されます。
- 情報区画 (下側) - コンテキストヘルプまたはコンソールイベントの表示用。

## Solaris 管理コンソールウィンドウの変更

コンソールウィンドウのレイアウトは、非常に柔軟に設定することができます。次の機能を使用して、コンソールウィンドウのレイアウトを変更できます。

- 「表示 (View)」メニュー - 「表示 (View)」メニューの「表示部分 (Show)」オプションを使用すると、オプションのバーと区画を表示または非表示にすることができます。「表示 (View)」メニューのほかのオプションは、表示区画内にあるノードの表示を制御します。
- 「コンソール (Console)」メニュー - 「設定の変更 (Preferences)」オプションを使用すると、次の設定ができます。初期ツールボックス、区画の向き、選択肢のクリックまたはダブルクリック、ツールバーのテキストまたはアイコン、フォント、デフォルトのツールロード、認証プロンプト、拡張ログイン。
- 「コンテキストヘルプ (Context Help)」と「コンソールイベント (Console Events)」のトグル - 情報区画の一番下にあるアイコンを使用すると、コンテキストヘルプとコンソールイベントの表示を切り替えることができます。

## Solaris 管理コンソールのマニュアル

コンソールやそのツールの使用方法に関するマニュアルは、主にオンラインヘルプシステムから利用できます。オンラインヘルプは、次の2つの形式で利用できます。

- コンテキストヘルプは、コンソールツールの使用状況に対応しています。タブ、入力フィールド、ラジオボタンなどでカーソルをクリックすると、該当するヘルプが情報区画に表示されます。情報区画を閉じたり、開き直したりするには、ダイアログボックスやウィザードの疑問符ボタンをクリックします。
- 拡張ヘルプトピックは、「ヘルプ」メニューから使用可能であり、一部のコンテキストヘルプから相互参照リンクをクリックしても使用できます。これらのトピックは個別のビューアに表示され、コンテキストヘルプよりも詳細な情報が含まれています。具体的には、各ツールの概要、各ツールの機能説明、特定のツールで使用されるファイル、トラブルシューティング情報などです。

各ツールの概要については、[表 2-1](#) を参照してください。

## 役割によるアクセス制御の程度

36 ページの「[Solaris 管理コンソールを使用する理由](#)」に説明されているように、Solaris 管理ツールを使用する主な利点は、役割によるアクセス制御 (RBAC) を使用できることです。RBAC を使用すると、管理者はジョブの実行に必要なツールとコマンドだけを使用できます。

組織のセキュリティー要件に応じて、さまざまなレベルの RBAC を使用できます。

RBAC の方法	説明	詳細
RBAC を使用しない	すべての作業をスーパーユーザーとして実行できます。ユーザーとしてログインできます。Solaris 管理ツールを選択するときは、ユーザーとして root を指定し、root のパスワードを入力します。	40 ページの「スーパーユーザー (root) になるか役割を引き受ける方法」
root を役割とする	匿名の root ログインを削除し、ユーザーが root としてログインできないようにします。この方法では、ユーザーが root の役割を持つ前にユーザー自身としてログインする必要があります。  この方法はほかの役割を使用しているかどうかに関係なく適用できるので注意が必要です。	『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の実装を計画する方法」
単一の役割のみ	プライマリ管理者の役割を使用します。これは、事実上、root アクセス権を持つことを意味します。	44 ページの「プライマリ管理者の役割を作成する」
推奨される役割	簡単に設定できる 3 つの役割 (プライマリ管理者、システム管理者、オペレータ) を使用します。これらの役割は、責任の異なるレベルの管理者がいて、それぞれのジョブ機能が推奨される役割に合っている組織に適しています。	『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「役割によるアクセス制御 (概要)」
カスタムの役割	組織のセキュリティーの必要性に応じて、独自の役割を追加できます。	『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の管理」および『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の実装を計画する方法」

## スーパーユーザー (root) になるか役割を引き受ける

ほとんどの管理作業 (ユーザーの追加、ファイルシステムの管理など) では、まず root (UID=0) としてログインするか、役割を引き受ける (RBAC を使用している場合) 必要があります。root アカウント (「スーパーユーザーアカウント」とも呼ばれる) は、システムを変更したり、緊急時にユーザーファイルの保護を無効にしたりする場合に使用します。

システムの変更がむやみに行われないように、スーパーユーザーアカウントと役割は、管理作業を実行するためだけに使用してください。スーパーユーザーアカウントに関連するセキュリティ問題は、小さな作業を行うときにでもこのユーザーがシステムへの完全なアクセス権を持ってしまふことにあります。

RBAC が実装されていない環境では、スーパーユーザーとしてシステムにログインすることも、su コマンドを使ってスーパーユーザーアカウントに変更することもできます。RBAC が実装されている場合は、コンソールを介して役割を引き受けることも、su を使用して役割を指定することもできます。

コンソールを使用して管理作業を行う場合は、次のいずれかを実行できます。

- ユーザーとしてコンソールにログインし、root ユーザー名とパスワードを入力する
- ユーザーとしてコンソールにログインし、役割を引き受ける

RBAC の大きなメリットは、特定の機能しか使用できないように役割を作成できることです。RBAC を使用している場合は、スーパーユーザーになるのではなく役割を引き受けることで、制限付きのアプリケーションを実行できます。

プライマリ管理者の役割の作成手順については、[45 ページの「最初の役割 \(プライマリ管理者\) を作成する方法」](#)を参照してください。RBAC の概要については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の第 9 章「[役割によるアクセス制御の使用 \(手順\)](#)」を参照してください。

### ▼ スーパーユーザー (root) になるか役割を引き受ける方法

スーパーユーザーになるか役割を引き受ける場合は、次のいずれかの方法を使用します。各方法では、スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを知っている必要があります。

- 1 次のいずれかの方法でスーパーユーザーになります。
  - ユーザーとしてログインしたあとで管理ツールを利用する方法。
    - a. Solaris 管理コンソールを起動します。



b. Solaris 管理ツールを選択します。

c. root としてログインします。

この方法では、コンソールから任意の管理作業を実行できます。

Solaris 管理コンソールの起動方法については、54 ページの「[ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法](#)」を参照してください。

- システムコンソールでスーパーユーザーとしてログインする方法。

```
hostname console: root
Password: root-password
#
```

ポンド記号 (#) は、シェルにおける、スーパーユーザーアカウント用のプロンプトです。

この方法では、すべてのシステムコマンドとツールに完全にアクセスできます。

- ユーザーとしてログインし、コマンド行で su コマンドを実行してスーパーユーザーアカウントに変更する方法。

```
% su
Password: root-password
#
```

この方法では、すべてのシステムコマンドとツールに完全にアクセスできます。

- スーパーユーザーとしてリモートでログインする方法。

この方法は、デフォルトでは使用できません。システムコンソールのスーパーユーザーとしてリモートログインするには、`/etc/default/login` ファイルを変更する必要があります。このファイルの変更方法については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の第 3 章「システムアクセスの制御 (作業)」を参照してください。

この方法では、すべてのシステムコマンドとツールに完全にアクセスできます。

## 2 役割になります。

次のいずれかの方法を選択します。

- ユーザーとしてログインし、コマンド行で su コマンドを実行して役割に変更する方法。

```
% su role
Password: role-password
$
```

この方法では、設定した役割がアクセスできるすべてのコマンドとツールを使用できます。

- ユーザーとしてログインしたあとで管理ツールを利用する方法。

a. Solaris 管理コンソールを起動します。

b. Solaris 管理ツールを選択します。

c. 役割になります。

Solaris 管理コンソールの起動方法については、47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」を参照してください。

この方法では、引き受けた役割がアクセスできるすべての Solaris 管理ツールを使用できます。

## Solaris 管理ツールを RBAC と組み合わせて使用する (作業マップ)

この作業マップでは、スーパーユーザーアカウントを使わず、RBAC セキュリティ機能を利用して管理作業を実行する場合に必要な作業について説明します。

注- この節の内容は、コンソールを RBAC と組み合わせて使用する方法について書かれています。最初にコンソールを使って RBAC を設定する方法について説明するため、RBAC の概要や作業にも触れています。

RBAC の詳細や、RBAC をほかのアプリケーションと組み合わせて使用する方法については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「役割によるアクセス制御 (概要)」を参照してください。

作業	説明	参照先
1. コンソールを起動します。	ユーザーアカウントをすでに設定してある場合は、まずユーザーとしてコンソールを起動し、次に root としてコンソールにログインします。ユーザーアカウントを設定していない場合は、まずスーパーユーザーになり、次にコンソールを起動します。	47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」

作業	説明	参照先
2. 自分のユーザーアカウントを追加します。	アカウントが存在しない場合は、自分のユーザーアカウントを追加します。	Solaris 管理コンソールのオンラインヘルプ 43 ページの「コンソールに最初にログインした場合」
3. プライマリ管理者の役割を作成します。	プライマリ管理者の役割を作成し、自分をこの役割に追加します。	45 ページの「最初の役割 (プライマリ管理者) を作成する方法」
4. プライマリ管理者の役割を引き受けます。	プライマリ管理者の役割を作成後、その役割を引き受けません。	46 ページの「プライマリ管理者の役割を引き受ける方法」
5. (省略可能) root を役割にします。	root を役割にし、ほかのユーザーが su コマンドを使用して root になれないように、root の役割に自分を追加します。	『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の実装を計画する方法」
6. (省略可能) ほかの管理役割を作成します。	ほかの管理役割を作成し、各役割に適切な権利を付与します。次に、各役割に該当するユーザーを追加します。	『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の第 9 章「役割によるアクセス制御の使用 (手順)」

次の節では、Solaris 管理コンソールと RBAC のセキュリティー機能の使い方に関する概要とその手順について説明します。

## コンソールに最初にログインした場合

管理者としてコンソールに最初にログインした場合は、まずユーザー (自分自身) としてコンソールを起動します。次に、スーパーユーザーとしてログインします。この方法では、コンソールのすべてのツールに完全にアクセスできます。

ここで、RBAC を使用しているかどうかに応じて、一般的な手順を示します。

- **RBAC を使用しない** - RBAC を使用しない場合は、スーパーユーザーとして作業を続けます。ほかのすべての管理者も、ジョブを実行するのに root アクセス権が必要になります。
- **RBAC を使用する** - 次の手順を実行する必要があります。
  - まだアカウントを持っていない場合は、自分のユーザーアカウントを設定します。
  - プライマリ管理者という役割を作成します。
  - 作成中の役割にプライマリ管理者の権利を割り当てます。
  - この役割にユーザーアカウントを割り当てます。

プライマリ管理者の役割の作成手順については、45 ページの「最初の役割(プライマリ管理者)を作成する方法」を参照してください。

RBAC の機能の概要については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の第 9 章「役割によるアクセス制御の使用 (手順)」を参照してください。

## プライマリ管理者の役割を作成する

「管理役割」は、特殊なユーザーアカウントの 1 つです。この役割を引き受けたユーザーは、定義済みの管理作業を実行することができます。

プライマリ管理者の役割は、スーパーユーザーと同様に、すべての管理機能の実行が許可されています。

スーパーユーザー、またはプライマリ管理者の役割を引き受けたユーザーは、ほかの管理者が実行できる作業を定義することができます。「管理役割を追加」ウィザードを使用すると、役割を作成し、その役割に権利を付与し、その役割を引き受けられるユーザーを指定できます。「権利」とは、特定のアプリケーションを使用するためのコマンド (または承認) の集合に、名前を付けたものです。権利を使用すると、アプリケーション内にある特定の機能を実行できます。権利の使用は、管理者が付与または拒否できます。

次の表に、プライマリ管理者の役割の作成時に入力を要求される情報を示します。

表 2-2 Solaris 管理コンソールを使用して役割を追加するためのフィールドの説明

フィールド名	説明
役割名	管理者が特定の役割にログインするために使用する名前を選択します。
正式名	この役割の名前をフルネームでわかりやすく入力します。(省略可能)
説明	この役割の詳細な説明を入力します。
役割 ID 番号	この役割に割り当てられている ID 番号を選択します。この番号は、UID の ID セットと同じです。
役割のシェル	ユーザーが端末またはコンソールのウィンドウにログインするか、そのウィンドウで役割を引き受けるときに実行するシェルを選択します。
役割のメーリングリストを作成	項目をチェックすると、役割と同じ名前でメーリングリストを作成します。メーリングリストを使用すると、その役割に割り当てられているすべてのユーザーに電子メールを送信できます。
役割パスワードとパスワードを確認	役割のパスワードを設定および再入力します。

表 2-2 Solaris 管理コンソールを使用して役割を追加するためのフィールドの説明 (続き)

フィールド名	説明
有効な権利と許可された権利	「有効な権利」のリストから権利を選択し、「許可された権利」のリストに追加することにより、この役割に権利を割り当てます。
ホームディレクトリの選択	この役割の専有ファイルが格納されるホームディレクトリサーバーを選択します。
ユーザーの役割への割り当て	特定のユーザーが特定の作業を行うための役割を持てるようにユーザーを役割に追加します。

RBAC の詳細と、役割を使用してよりセキュリティー保護された環境を作成する方法については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「役割によるアクセス制御 (概要)」を参照してください。

## ▼ 最初の役割 (プライマリ管理者) を作成する方法

この手順では、プライマリ管理者の役割を作成し、それをユーザーアカウントに割り当てる方法について説明します。ユーザーアカウントはすでに作成してあるものとします。

- 1 ユーザーとしてコンソールを起動します。

```
% /usr/sadm/bin/smc &
```

コンソールの起動方法については、47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」を参照してください。

ユーザーアカウントの作成方法については、コンソールのオンラインヘルプを参照してください。

- 2 ナビゲーション区画で「このコンピュータ」アイコンをクリックします。
- 3 「システムの構成」->「ユーザー」->「管理役割」の順にクリックします。
- 4 「アクション」→「管理役割を追加」の順にクリックします。  
「管理役割を追加」ウィザードが開きます。
- 5 次の手順に従って、「管理役割を追加」ウィザードでプライマリ管理者の役割を作成します。
  - a. 役割名に加えて、役割の正式名、備考欄、役割 ID 番号、役割シェル、役割のメーリングリストを作成するかどうかを指定します。「次へ (Next)」をクリックします。

- b. 役割パスワードを設定および確認し、「次へ」をクリックします。
- c. 「有効な権利」欄からプライマリ管理者の権利を選択し、「許可された権利」欄に追加します。
- d. 「次へ (Next)」をクリックします。
- e. 役割のホームディレクトリを選択し、「次へ」をクリックします。
- f. この役割を引き受けることができるユーザーのリストに自分を割り当て、「次へ」をクリックします。

必要に応じて、[表 2-2](#) で役割の各フィールドの説明を参照してください。

- 6 「完了」をクリックします。

## ▼ プライマリ管理者の役割を引き受ける方法

プライマリ管理者の役割を作成し終わったら、まずユーザー(自分自身)としてコンソールにログインし、次にプライマリ管理者の役割を引き受ける必要があります。役割を引き受けるときは、その役割の権利を含むすべての属性を引き受けます。同時に、自分自身のユーザープロパティーはすべて放棄します。

- 1 コンソールを起動します。

```
% /usr/sadm/bin/smc &
```

コンソールの起動方法については、[47 ページ](#)の「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」を参照してください。

- 2 ユーザー名とパスワードを使ってログインします。  
引き受けることができる役割のリストが表示されます。
- 3 プライマリ管理者の役割にログインし、役割のパスワードを入力します。

## Solaris 管理コンソールを起動する

次の手順では、コンソールを起動し、Solaris 管理ツールにアクセスする方法について説明します。

コンソールに最初にログインするユーザーが実行する手順については、[43 ページ](#)の「コンソールに最初にログインした場合」を参照してください。

## ▼ スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法

自分自身のユーザーアカウントを使ってユーザーとしてコンソールを起動する場合は、Solaris 管理ツールへのアクセスが制限されます。十分なアクセス権を得るために、まずユーザー (自分自身) としてログインしたあと、引き受けることができる役割のいずれかでログインできます。プライマリ管理者の役割を引き受けることができる場合は、すべての Solaris 管理ツールにアクセスできます。この役割はスーパーユーザーと同等です。

- 1 GNOME 環境などのウィンドウ環境で操作していることを確認します。
- 2 コンソールを起動します。

```
% /usr/sadm/bin/smc &
```

コンソールが初めて起動するときは 1 2 分かかります。

「Solaris 管理コンソール」ウィンドウが表示されます。

---

注 - Solaris 管理コンソールのスタートアップメッセージを表示する場合は、自分のウィンドウ環境でコンソールを開いてください。Solaris 管理コンソールアプリケーションを起動する前に、Solaris 管理コンソールサーバーを手動で起動しないでください。このサーバーは、Solaris 管理コンソールを起動すると、自動的に起動します。コンソールに関する問題のトラブルシューティングについては、[56 ページの「Solaris 管理コンソールのトラブルシューティング」](#)を参照してください。

---

- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをダブルクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。
- 4 (省略可能) 適切なツールボックスを選択します。  
デフォルト以外のツールボックスを使用する場合は、ナビゲーション区画から該当するツールボックスを選択します。あるいは、コンソールメニューから「ツールボックスを開く」を選択し、任意のツールボックスをロードします。  
各種ツールボックスの使用方法については、[51 ページの「特定環境用のツールボックスを作成する方法」](#)を参照してください。
- 5 特定のツールを使用するには、カテゴリアイコンをダブルクリックします。  
特定の作業の実行方法を確認する場合は、オンラインヘルプを使用します。
- 6 ツールのアイコンをダブルクリックします。  
「ログイン」ポップアップウィンドウが表示されます。

- 7 スーパーユーザーまたは役割のどちらでこのツールを使用するかを決めます。
  - スーパーユーザーとしてログインしている場合は、root のパスワードを入力します。
  - ユーザー (自分自身) としてログインしている場合は、root ユーザー名をバックスペースで消去し、自分のユーザー ID とユーザーパスワードを入力します。  
ユーザーが引き受けることができる役割のリストが表示されます。
- 8 プライマリ管理者の役割、またはそれと同等の役割を選択し、役割のパスワードを入力します。  
プライマリ管理者の役割の作成手順については、45 ページの「最初の役割 (プライマリ管理者) を作成する方法」を参照してください。  
ツールのメインメニューが表示されます。

## ネームサービス環境で Solaris 管理ツールを使用する (作業マップ)

デフォルトでは、Solaris 管理ツールはローカル環境で動作するように設定されます。たとえば、マウントと共有ツールを使用すると、特定のシステム上でディレクトリをマウントおよび共有できますが、NIS や NIS+ 環境ではできません。ただし、ネームサービス環境では、ユーザーツールやコンピュータとネットワークツールを使って情報を管理できます。

ネームサービス環境でコンソールのツールを使用する場合は、まずネームサービスのツールボックスを作成し、次にそのツールボックスにツールを追加する必要があります。

作業	説明	参照先
1. 前提条件を確認します。	ネームサービス環境でコンソールを使用する前に、前提条件が満たされていることを確認します。	50 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを使用するための前提条件」
2. ネームサービス用のツールボックスを作成します。	新規ツールボックスウィザードを使用して、ネームサービスツール用のツールボックスを作成します。	51 ページの「特定環境用のツールボックスを作成する方法」
3. ネームサービスツールボックスにツールを追加します。	作成したネームサービスツールボックスにユーザーツール、またはほかのネームサービスツールを追加します。	53 ページの「ツールボックスにツールを追加する方法」



作業	説明	参照先
4. 直前に作成したツールボックスを選択します。	直前に作成したツールボックスを選択して、ネームサービス情報を管理します。	54 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法」

## RBAC セキュリティーファイル

Solaris 管理コンソールで使用する RBAC セキュリティーファイルは、Solaris 9 以降のリリースへのアップグレードまたはそのインストール時に作成されます。Solaris 管理コンソールのパッケージをインストールしない場合、RBAC を使用するのに必要なデータがない状態で RBAC セキュリティーファイルがインストールされます。Solaris 管理コンソールのパッケージについては、56 ページの「Solaris 管理コンソールのトラブルシューティング」を参照してください。

Solaris 9 以降のリリースを実行している場合、RBAC セキュリティーファイルは、ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールのツールを使用できるように、ネームサービスに組み込まれます。

ローカルサーバー上のセキュリティファイルは、標準アップグレードの一環として、ypmake コマンド、nispopulate コマンド、または同様の LDAP コマンドによってネームサービス環境に作成されます。

サポートされているネームサービスは次のとおりです。

- NIS
- NIS+
- LDAP
- files

RBAC セキュリティーファイルは、Oracle Solaris 10 へのアップグレードまたはそのインストール時に作成されます。

次の表では、Oracle Solaris リリースが稼働するシステムにインストールされる、定義済みのセキュリティファイルについて簡単に説明します。

表 2-3 RBAC セキュリティーファイル

ローカルファイル名	テーブルまたはマップ名	説明
/etc/user_attr	user_attr	ユーザーと役割を承認と権利プロファイルに関連付けます
/etc/security/auth_attr	auth_attr	承認とその属性を定義し、関連付けられたヘルプファイルを識別します

表 2-3 RBAC セキュリティーファイル (続き)

ローカルファイル名	テーブルまたはマップ名	説明
/etc/security/prof_attr	prof_attr	権利プロファイルを定義し、承認に割り当てられた権利プロファイルのリストを表示し、関連付けられたヘルプファイルを識別します
/etc/security/exec_attr	exec_attr	権利プロファイルに割り当てられている特権付きの操作を定義します

アップグレードに失敗した場合は、次のときに `smattrpop` コマンドで RBAC セキュリティーファイルを作成してください。

- 権利プロファイルを作成または変更するとき
- `usr_attr` ファイルをカスタマイズして、ユーザーと役割を追加する必要があるとき

詳細は、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「役割によるアクセス制御 (概要)」を参照してください。

## ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを使用するための前提条件

次の表に、ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを使用する前に行う必要のある操作を示します。

前提条件	詳細
Oracle Solaris 10 リリースをインストールします。	『Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド (基本編)』
ネームサービス環境を設定します。	『Solaris のシステム管理 (ネーミングとディレクトリサービス : DNS、NIS、LDAP 編)』
管理範囲を選択します。	51 ページの「管理範囲」
ネームサービスデータにアクセスできるように <code>/etc/nsswitch.conf</code> ファイルが構成されていることを確認します。	51 ページの「 <code>/etc/nsswitch.conf</code> ファイル」

## 管理範囲

Solaris 管理コンソールでは、選択した管理ツールで使用するネームサービス環境を指すときに「管理範囲」という用語を使用します。ユーザーツールおよびコンピュータとネットワークツールの管理範囲は、LDAP、NIS、NIS+、files の中から選択します。

コンソールセッションで選択する管理範囲は、`/etc/nsswitch.conf` ファイルで特定されるもっとも優先度の高いネームサービスと一致するべきです。

## `/etc/nsswitch.conf` ファイル

各システムの `/etc/nsswitch.conf` ファイルは、そのシステムのネームサービス検索 (ここからデータが読み取られる) のポリシーを示します。

---

注- コンソールからアクセスされるネームサービス (コンソールのツールボックスエディタで指定する) が `/etc/nsswitch.conf` ファイルの検索パスに含まれていることを確認する必要があります。指定のネームサービスがその検索パスにない場合、ツールが予測のつかない動作をしてエラーまたは警告が発生する可能性があります。

---

ネームサービス環境で Solaris 管理ツールを使用するときは、1 回の操作で多数のユーザーに影響を及ぼす可能性があります。たとえば、NIS または NIS+ ネームサービスのユーザーを削除すると、そのユーザーは NIS または NIS+ を使用しているすべてのシステムで削除されます。

ネットワーク内のさまざまなシステムで `/etc/nsswitch.conf` 構成が異なっていると、予期しない結果が生じる可能性があります。これを回避するために、Solaris 管理ツールで管理するすべてのシステムには、一貫したネームサービス構成を設定する必要があります。

## ▼ 特定環境用のツールボックスを作成する方法

Oracle Solaris オペレーティングシステムの管理用アプリケーションは「ツール」と呼ばれます。これらのツールは「ツールボックス」というコレクションに格納されます。ツールボックスは、ローカルサーバー (コンソールがある場所) にもリモートマシンにも配置できます。

ツールボックスエディタで次の操作が可能です。

- 新しいツールボックスの追加
- 既存のツールボックスへのツールの追加

- ツールボックスの範囲の変更

たとえば、このツールを使ってドメインをローカルファイルからネームサービスに変更できます。

---

注- ツールボックスエディタは、通常のユーザーとして起動できます。ただし、変更を加えたり、変更内容をデフォルトのコンソールツールボックス `/var/sadm/smc/toolboxes` に保存する場合は、`root` としてツールボックスエディタを起動する必要があります。

---

- 1 ツールボックスエディタを起動します。

```
# /usr/sadm/bin/smc edit &
```

- 2 「ツールボックス」メニューから「開く」を選択します。

- 3 「ツールボックス」ウィンドウで「このコンピュータ」を選択します。

- 4 「開く」をクリックします。

「このコンピュータ」ツールボックスが開きます。

- 5 ナビゲーション区画で、もう一度「このコンピュータ」アイコンを選択します。

- 6 「アクション」メニューから「フォルダを追加」を選択します。

- 7 「フォルダウィザード」を使用して、ネームサービス環境用の新しいツールボックスを追加します。

- a. 名前 (Name) と説明 (Description) - 「名前 (Full Name)」ウィンドウに名前を入力して、「次へ」をクリックします。

たとえば、NIS 環境なら「NIS tools」と入力します。

- b. 「説明」ウィンドウに説明を入力して、「次へ」をクリックします。

たとえば、「tools for NIS environment」と入力します。

- c. アイコン-アイコンのデフォルト値を使用して、「次へ」をクリックします。

- d. 管理範囲 (Management Scope) - 「上書き (Override)」を選択します。

- e. 「管理範囲」プルダウンメニューでネームサービス `u` を選択します。

- f. 必要に応じて、ネームサービスのマスター名を「サーバー」フィールドに追加します。

g. 「ドメイン」フィールドに、サーバーによって管理されるドメインを追加します。

h. 「完了」をクリックします。

左側のナビゲーション区画に新しいツールボックスが表示されます。

8 新しいツールボックスのアイコンを選択し、「ツールボックス」メニューから「別名保存」を選択します。

9 「ローカルツールボックス」ファイル名ダイアログで、ツールボックスのパス名を入力します。

接尾辞 `.tbx` を使用します。

```
/var/sadm/smc/toolboxes/this_computer/toolbox-name.tbx
```

10 「Save」をクリックします。

コンソールウィンドウのナビゲーション区画に新しいツールボックスが表示されます。

参照 ネームサービスツールボックスを作成し終わったら、その中にネームサービスを入れることができます。詳細は、53 ページの「ツールボックスにツールを追加する方法」を参照してください。

## ▼ ツールボックスにツールを追加する方法

コンソールに添付されているデフォルトのツールのほかに、コンソールから起動できるツールがあります。これらのツールが使用可能になったら、既存のツールボックスに追加できます。

また、ローカル管理またはネットワーク管理用に新しくツールボックスを作成し、その新しいツールボックスにツールを追加することもできます。

1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。

2 必要に応じて、ツールボックスエディタを起動します。

```
# /usr/sadm/bin/smc edit &
```

- 3 ツールボックスを選択します。  
ネームサービス環境で作業する場合は、直前に作成したツールボックスをツールボックスエディタで選択します。詳細は、51 ページの「特定環境用のツールボックスを作成する方法」を参照してください。
- 4 「アクション」メニューから「ツールを追加」を選択します。
- 5 「ツールを追加」ウィザードを使用して新しいツールを追加します。
  - a. 「サーバーの選択」-ネームサービスのマスターを「サーバー」ウィンドウに追加します。「次へ (Next)」をクリックします。
  - b. 「ツールの選択」-追加するツールを「ツール」ウィンドウから選択します。「次へ (Next)」をクリックします。  
このツールボックスがネームサービス用のツールボックスである場合は、そのネームサービス環境で作業に使用するツールを選択します。たとえば、ユーザーツールを選択します。
  - c. 「名前と説明」-デフォルト値のまま「次へ」をクリックします。
  - d. 「アイコン (Icons)」-カスタムアイコンを作成していない場合は、デフォルト値を使用します。「次へ (Next)」をクリックします。
  - e. 「管理範囲 (Management Scope)」-デフォルト値「親から継承 (Inherit from Parent)」を使用します。「次へ (Next)」をクリックします。
  - f. 「ツールの読み込み (Tool Loading)」-デフォルト値「選択された時にツールを読み込む (Load tool when selected)」を使用します。「完了」をクリックします。
- 6 更新したツールボックスを保存するには、「保存」を選択します。  
「ローカルツールボックス」ウィンドウが表示されます。

## ▼ ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法

ネームサービスのツールボックスを作成し、そのツールボックスにツールを追加し終わったら、Solaris 管理コンソールを起動し、作成したツールボックスを開いてネームサービス環境を管理できます。

始める前に 次の前提条件を満たしていることを確認します。

- ログインしているシステムがネームサービス環境で動作するように設定されているかを確認します。
- `/etc/nsswitch.conf` ファイルがユーザーのネームサービス環境に適合するように設定されているかを確認します。

1 **Solaris 管理コンソールを起動します。**

詳細は、47 ページの「[スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法](#)」を参照してください。

2 **ネームサービス用に作成したツールボックスを選択します。**

ツールボックスがナビゲーション区画に表示されます。

ネームサービス用のツールボックスの作成方法については、51 ページの「[特定環境用のツールボックスを作成する方法](#)」を参照してください。

## Solaris 管理コンソールにツールを追加する

レガシーツールや別製品のツールをコンソールに追加できます。これらのツールに認証を追加する場合は、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の管理](#)」を参照してください。

### ▼ レガシーツールをツールボックスに追加する方法

レガシーツールとは、特に Solaris 管理ツールとして設計されていないアプリケーションのことです。ツールボックスに追加した各ツールは、Solaris 管理コンソールから起動できます。

コンソールのツールボックスには、次の種類のレガシーツールアプリケーションを追加できます。

- X アプリケーション
- コマンド行インタフェース (CLI) アプリケーション
- HTML アプリケーション

1 **スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。**

2 **必要に応じて、Solaris 管理コンソールのツールボックスエディタを起動します。**

```
# /usr/sadm/bin/smc edit &
```

3 **レガシーアプリケーションを追加するツールボックスを開きます。**

選択したツールボックスはツールボックスエディタで開きます。

- 4 レガシーアプリケーションを追加するツールボックス内のノードを選択します。  
レガシーアプリケーションは、ツールボックスの最上位のノードにも別のフォルダにも追加できます。
- 5 「アクション」 → 「従来のアプリケーションを追加」の順にクリックします。  
「従来のアプリケーションのウィザード」の「基本」パネルが表示されます。
- 6 ウィザードの指示に従います。
- 7 ツールボックスエディタでツールボックスを保存します。

## ▼ 別製品のツールをインストールする方法

Solaris 管理コンソールから起動できる新しいツールパッケージを追加するには、次の手順に従います。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 新しいツールパッケージをインストールします。  

```
# pkgadd ABCDtool
```
- 3 コンソールを再起動して、コンソールに新しいツールを認識させます。
  - a. コンソールサーバーを停止します。  

```
# /etc/init.d/init.wbem stop
```
  - b. コンソールサーバーを起動します。  

```
# /etc/init.d/init.wbem start
```
- 4 新しいツールが表示されることを確認するため、コンソールを起動します。  
詳細は、[47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」](#)を参照してください。

## Solaris 管理コンソールのトラブルシューティング

このトラブルシューティングの手順を実行する前に、次のパッケージがインストールされていることを `pkginfo(1)` コマンドで確認してください。

- SUNWmc – Solaris 管理コンソール 2.1 (サーバー構成要素)
- SUNWmcc – Solaris 管理コンソール 2.1 (クライアント構成要素)
- SUNWmccom – Solaris 管理コンソール 2.1 (共通の構成要素)
- SUNWmcdev – Solaris 管理コンソール 2.1 (開発キット)



- SUNWmcex – Solaris 管理コンソール 2.1 (例)
- SUNWwbmc – Solaris 管理コンソール 2.1 (WBEM 構成要素)

これらのパッケージには、基本的な Solaris 管理コンソール起動ツールが用意されています。Solaris 管理コンソールとそのすべてのツールを使用するには、SUNWCprog クラスタをインストールする必要があります。

## ▼ Solaris 管理コンソールのトラブルシューティングの方法

Solaris 管理コンソールを起動すると、クライアントとサーバーが自動的に起動します。

コンソールは表示されるがツールを正常に実行できない場合は、サーバーが稼働していないか、サーバーが問題のある状態になっている可能性があります。この問題は、サーバーの停止と再起動で解決できます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 次のコマンドでコンソールサーバーが稼働しているかどうかを調べます。

```
# /etc/init.d/init.wbem status
```

コンソールサーバーが稼働している場合は、次のようなメッセージが表示されます。

```
SMC server version 2.1.0 running on port 898.
```

- 3 コンソールサーバーが稼働していない場合は、次のコマンドで起動します。

```
# /etc/init.d/init.wbem start
```

すぐに、次のようなメッセージが表示されます。

```
SMC server is ready.
```

- 4 サーバーが稼働しているのに問題が引き続き発生している場合は、次の操作を行います。

- a. コンソールサーバーを停止します。

```
# /etc/init.d/init.wbem stop
```

次のようなメッセージが表示されます。

```
Shutting down SMC server on port 898.
```

- b. コンソールサーバーを起動します。

```
# /etc/init.d/init.wbem start
```



## Oracle Java Web Console の操作 (手順)

---

この章では、システムにインストールおよび登録されている Web ベースの Sun システム管理アプリケーションを管理するための Oracle Java Web Console について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 59 ページの「Oracle Java Web Console の管理に関する新機能」
- 60 ページの「Oracle Java Web Console (概要)」
- 63 ページの「Java Web Console を開始する」
- 66 ページの「コンソールサービスの管理」
- 68 ページの「Java Web Console を設定する」
- 76 ページの「Java Web Console ソフトウェアのトラブルシューティング」
- 84 ページの「Java Web Console のリファレンス情報」

Oracle Java Web Console の使用に関連する手順については、62 ページの「Java Web Console を開始する (作業マップ)」および 75 ページの「Java Web Console ソフトウェアのトラブルシューティング (作業マップ)」を参照してください。

## Oracle Java Web Console の管理に関する新機能

この節では、この Oracle Solaris リリースの新機能について説明します。新機能の完全な一覧や各 Oracle Solaris リリースの説明については、『Oracle Solaris 10 9/10 の新機能』を参照してください。

## Java Web Console サーバーの管理

**Solaris 10 11/06:** Java Web Console サーバーは、サービス管理機能 (SMF) によってサービスとして管理されます。SMF の詳細は、第 18 章「サービスの管理 (概要)」を参照してください。

## Java Web Console で使用できるアプリケーション

**Solaris 10 6/06:** Oracle Java Web Console では、Oracle Solaris ZFS Web ベース管理ツールを使用できます。このツールでは、コマンド行インタフェース (CLI) で実行できる管理タスクの大部分を実行できます。たとえば、パラメータを設定したり、さまざまなプールやファイルシステムを表示したり、それらを更新したりできます。

次に、このツールを使って実行できる主な手順の例を示します。

- 新規ストレージプールを作成する。
- 既存のプールに容量を追加する。
- 既存のプールを別のシステムに移動 (エクスポート) する。
- 以前にエクスポートしたストレージプールをインポートして、別のシステムで使用できるようにする。
- ストレージプールに関する情報を表示する。
- ファイルシステムを作成する。
- zvol (仮想ボリューム) を作成する。
- ファイルシステムまたは zvol ボリュームのスナップショットを取る。
- ファイルシステムを以前のスナップショットにロールバックする。

Oracle Solaris ZFS Web ベース管理ツールの使用に関する詳細は、『[Oracle Solaris ZFS 管理ガイド](#)』を参照してください。

---

注 - Java Enterprise System ソフトウェアには、Oracle Java Web Console 内で実行される管理アプリケーションがいくつか含まれています。

---

## Oracle Java Web Console (概要)

Java Web Console は、ユーザーが Web ベースのシステム管理アプリケーションにアクセスするための共通の場所を提供します。Web コンソールにアクセスするには、サポートされている Web ブラウザのいずれかを使用し、安全な https ポートを介してログインします。Web コンソールが提供する単一のエン트리ポイントを使用すれば、複数のアプリケーションの URL を覚える必要がなくなります。また、単一のエン트리ポイントにより、Web コンソールに登録されているすべてのアプリケーションのユーザー認証や承認も行うことができます。

Web コンソールベースのアプリケーションはすべて、同一のユーザーインタフェースのガイドラインに準拠しているため、より使いやすくなっています。また、Web コンソールは、登録されているすべてのアプリケーションに対し、ユーザーセッションの監査およびロギングサービスも提供します。

## Java Web Console について

Java Web Console とは、システムにインストールおよび登録されている Sun システム管理の Web ベースのアプリケーションを得られる Web ページのことです。登録は、自動的にアプリケーションのインストールプロセスの一環となります。したがって、登録に管理者が介入する必要はありません。

Java Web Console には、次の機能が用意されています。

- ログインと、ブラウザベースのシステム管理アプリケーションの起動用の単一のエントリポイント

このコンソールから、各種のブラウザベース管理アプリケーションをアプリケーション名をクリックするだけで起動できるので便利です。Java Web Console と Solaris 管理コンソールとの間に互換性はありません。Java Web Console はブラウザを介して利用する Web アプリケーションで、Solaris 管理コンソールはコマンド行から起動する Java アプリケーションです。これらのコンソールは完全に独立しているため、両方のコンソールを同じシステム上で同時に実行することができます。

- 安全な **https** ポートを介したシングルサインオン

ここでのシングルサインオンは、Web コンソールに対して認証を行なったあとで、管理アプリケーションごとに認証を行う必要がないことを意味します。ユーザー名とパスワードの入力は、コンソールセッションにつき一度だけ行います。

- 動的に編成および集約されたアプリケーション

アプリケーションは、コンソールの起動ページで、もっとも適切な管理作業のカテゴリに分類されてインストールおよび表示されます。

カテゴリには次のものがあります。

- システム
- ストレージ
- サービス
- デスクトップアプリケーション
- その他

- 共通の外観と操作性

Web コンソールアプリケーションはすべて、同じユーザーインタフェース (UI) コンポーネントを使用し、同じ動きをするため、管理者の習得にかかる時間が短くなります。

- 標準の拡張可能な認証、承認、および監査機構

Java Web Console では、プラグ接続できる認証モジュール (PAM)、役割に基づくアクセス制御 (RBAC) の役割、および基本セキュリティーモジュール (BSM) の監査をサポートしています。

## Java Web Console の管理コマンド

Java Web Console には、次の管理コマンドがあります。

- `smcwebserver` – このコマンドは、コンソールの Web サーバーを起動および停止します。
- `wcadmin` – **Solaris 10 11/06** リリース以降では、コンソールを設定したりコンソールアプリケーションを登録および配備したりする際にこのコマンドが使用されます。詳細は、[wcadmin\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。
- `smreg` – **Oracle Solaris 10**、**Solaris 10 1/06**、および **Solaris 10 6/06 OS** では、すべてのコンソールアプリケーションを登録する際にこのコマンドが使用されます。  
**Solaris 10 11/06** リリース以降では、このコマンドを使用するのは、Java Web Console 3.0 より前のバージョンのコンソール用に作成されたレガシーアプリケーションを登録する場合だけにしてください。

これらのコマンドを使用して、この章で説明されているさまざまな作業を実行します。

各コマンドの詳細は、[smcwebserver\(1M\)](#)、[wcadmin\(1M\)](#)、および [smreg\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## サポートされている Web ブラウザ

Java Web Console は、Oracle Solaris の稼働中に、次のいずれかのブラウザで使用できます。

- Mozilla (バージョン 1.4 以降)
- Netscape (バージョン 6.2 以降)
- Firefox (バージョン 1.0 以降)

## Java Web Console を開始する (作業マップ)

作業	説明	参照先
Oracle Java Web Console の起動ページからアプリケーションを起動します。	Oracle Java Web Console の起動ページには、ユーザーが使用する権限を持っている登録済みのすべてのシステム管理アプリケーションが表示されます。特定のアプリケーションに接続するには、そのアプリケーション名をクリックします。	64 ページの「Oracle Java Web Console の起動ページからアプリケーションを起動する方法」

作業	説明	参照先
コンソールサーバーの起動、停止、有効化、および無効化を行います。	コンソールと登録済みアプリケーションを実行するための Web サーバーを管理できます。	<a href="#">66 ページの「コンソールサービスを起動する方法」</a> <a href="#">66 ページの「システムの起動時に実行されるようコンソールサービスを有効にする方法」</a> <a href="#">67 ページの「コンソールサービスを停止する方法」</a> <a href="#">67 ページの「コンソールサービスを無効にする方法」</a>
Java Web Console のプロパティを変更します。	<p>Web コンソールのデフォルトのプロパティは変更する必要がありません。変更できるプロパティは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ コンソールのセッションタイムアウト</li> <li>■ ログインレベル</li> <li>■ 監査実装</li> </ul>	<a href="#">71 ページの「Java Web Console のプロパティを変更する方法」</a>

## Java Web Console を開始する

Java Web Console の起動ページには、ユーザーが使用する権限を持つ登録済みのシステム管理アプリケーションのリストと、各アプリケーションの簡単な説明が表示されます。特定のアプリケーションに接続するには、そのアプリケーション名をクリックします。アプリケーション名は実際のアプリケーションへのリンクです。デフォルトでは、選択されたアプリケーションが Web コンソールのウィンドウで開きます。「各アプリケーションを新しいウィンドウで起動する」チェックボックスをクリックすると、アプリケーションを別のブラウザウィンドウで開くことができます。アプリケーションを別のウィンドウで開くと、Web コンソールの起動ページを引き続き利用できるため、そのページに戻って1回のログインで複数のアプリケーションを起動できます。

コンソールの起動ページにアクセスするには、Web の場所を示すフィールドに次の形式の URL を入力します。

**https://hostname.domain:6789**

これらの内容は次のとおりです。

- https は Secure Socket Layer (SSL) 接続を指定します
- hostname.domain には、コンソールを提供するサーバーの名前とドメインを指定します

- 6789 は、コンソールに割り当てられているポート番号です

---

注 - 特定のシステムから初めて Java Web Console にアクセスしたときは、Web コンソールの起動ページが表示される前に、サーバーの証明書に同意する必要があります。

---

RBAC がシステム上で有効になっていて、かつユーザーの ID が役割に割り当てられている場合、ログイン成功後に役割のパスワードの入力を求められます。役割を引き受けた場合、その引き受けた役割の承認チェックが行われます。NO ROLE を選択して役割を引き受けないことも可能ですが、その場合、そのユーザーの ID に対して承認チェックが行われます。承認チェックに成功すると、Web コンソールの起動ページが表示されます。

## ▼ Oracle Java Web Console の起動ページからアプリケーションを起動する方法

- 1 **Java Web Console** と互換性のある **Web ブラウザ (Mozilla 1.7 または Firefox 1.0 など)** を起動します。  
サポートされているブラウザの一覧は、[62 ページの「サポートされている Web ブラウザ」](#) を参照してください。
- 2 **Web ブラウザ** の場所を示すフィールドに、コンソールの **URL** を入力します。  
たとえば、管理サーバーホストの名前が `sailfish`、ドメインが `sw` である場合、URL は `https://sailfish.sw:6789` となります。この URL によって Web コンソールのログインページが表示されます。
- 3 サーバーの証明書を受け入れます。  
サーバー証明書への同意は、ブラウザセッションにつき一度だけ行います。コンソールにログインしたりアプリケーションを起動したりするたびにを行う必要はありません。  
次の図に示すようなログインページが表示されます。



図 3-1 Oracle Java Web Console のログインページ



- 4 ユーザー名とパスワードを入力し、必要に応じて **RBAC** の役割も入力します。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。  
コンソールサービスは、ユーザーを認証するために資格を調べ、ユーザーがコンソールと登録済みアプリケーションの使用を承認されていることを確認します。
- 5 アプリケーションを別のウィンドウで実行したいときは、「各アプリケーションを新しいウィンドウで起動する」チェックボックスをクリックします。  
このオプションを選択しないと、アプリケーションはデフォルトのウィンドウ(起動ページと置き換わる)で実行されます。
- 6 実行するアプリケーションのリンクをクリックします。

ヒント-個々のアプリケーションを直接起動して、起動ページを省略することもできます。その場合は、次の構文を使用します。

```
https://hostname.domain:6789/app-context-name
```

ここでの *app-context-name* は、アプリケーションが配備されるときに使われる名前です。

アプリケーションのコンテキスト名を調べるには、次のいずれかを実行します。

- アプリケーションのマニュアルを読みます。
- `wcadmin list -a` コマンドまたは `smreg list -a` コマンドを実行して、配備済み Web アプリケーションとそのコンテキスト名の一覧を表示します。
- Web コンソールの起動ページからアプリケーションを実行して、アドレスの場所を示すフィールドに表示されている URL を書き留めます。次にそのアプリケーションを使用するときは、この URL を直接入力してアクセスできます。または、この場所をブックマークに追加して、ブックマークからアプリケーションにアクセスすることができます。

## コンソールサービスの管理

**Solaris 10 11/06:** Java Web Console サービスは、サービス管理機能 (SMF) を介して管理されます。コンソールサービスの起動、停止、有効化、および無効化は、SMF のコマンドまたは `smcwebserver` スクリプトを使用して行うことができます。SMF でコンソールに使用される FMRI は `system/webconsole:console` です。

### ▼ コンソールサービスを起動する方法

この手順では、サーバーを一時的に起動します。サーバーがシステムのブート時に起動しないよう無効にされていた場合、サーバーは無効のままになります。サーバーが有効にされていた場合、サーバーは有効のままになります。

**Solaris 10 11/06** リリース以降では、サーバーが無効の状態で作働している場合、その時点の `enabled` の状態は `true (temporary)` と表示されます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 有効状態を変更せずに、サーバーをすぐに起動します。  

```
# smcwebserver start
```

### ▼ システムの起動時に実行されるようコンソールサービスを有効にする方法

この手順では、システムの起動時に実行されるようコンソールサービスを有効にします。現在のセッションではコンソールは起動されません。

**Solaris 10 11/06** リリース以降では、この手順によって SMF で `general/enabled` プロパティが `true` に設定されるため、システムのブート時にサーバーが起動されます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 システムのブート時に起動されるようサーバーを有効にします。

```
# smcwebserver enable
```

**Solaris 10 11/06:** また、サーバーをすぐに起動するとともに、システムのブート時に起動するようサーバーを有効にするには、次のコマンドを使用します。

```
# svcadm enable system/webconsole:console
```

---

注 - Solaris 10 11/06 リリースを実行している場合には、`smcwebserver` コマンドを使ってコンソールを有効にすることはできません。`svcadm` コマンドを使用する必要があります。

---

## ▼ コンソールサービスを停止する方法

この手順では、サーバーを一時的に停止します。サーバーがシステムのブート時に起動しないよう無効にされていた場合、サーバーは無効のままになります。サーバーが有効にされていた場合、サーバーは有効のままになります。

**Solaris 10 11/06** リリース以降では、サーバーが有効の状態では停止している場合、その時点の `enabled` の状態は `false (temporary)` と表示されます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 有効状態を変更せずに、サーバーをすぐに停止します。

```
# smcwebserver stop
```

## ▼ コンソールサービスを無効にする方法

無効にされている場合、コンソールサーバーはシステムのブート時に起動しません。

**Solaris 10 11/06** リリース以降では、この手順によって SMF でコンソールの `general/enabled` プロパティが `false` に設定されるため、システムのブート時にコンソールサーバーは起動しません。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 システムのブート時に起動しないようサーバーを無効にします。

```
# smcwebserver disable
```

**Solaris 10 11/06:** また、サーバーをすぐに停止するとともに、システムのブート時に起動しないようサーバーを無効にするには、次のコマンドを使用します。

```
# svcadm disable system/webconsole:console
```

---

注 - Solaris 10 11/06 リリースを実行している場合には、`smcwebserver` コマンドを使ってコンソールを無効にすることはできません。`svcadm` コマンドを使用する必要があります。

---

## Java Web Console を設定する

Java Web Console は、管理者が介入しなくても実行できるように事前設定されています。ただし、Web コンソールの設定プロパティを上書きすることで、コンソールのデフォルトの動作の一部を変更することもできます。

---

注 - **Solaris 10 11/06 OS** 以降では、これらのプロパティを変更するには `wcadmin` コマンドを使用する必要があります。以前は `smreg` コマンドが使用されていました。`wcadmin` コマンドの詳細は、`wcadmin(1M)` のマニュアルページを参照してください。

---

コンソールの設定ファイル内のプロパティは、コンソールの動作を制御します。この動作を変更するには、プロパティに新しい値を定義して、デフォルト値を上書きします。ほとんどのプロパティのデフォルト値は、独自のログインサービスを指定するなど、デフォルト値では満たせない特別なニーズがある場合を除き、上書きしないようにしてください。

通常、変更の対象となる可能性があるのは、次のプロパティー値です。

- コンソールのセッションタイムアウト

Web コンソールのセッションタイムアウト時間は、`session.timeout.value` プロパティーによって制御されます。このプロパティーでは、セッションが時間切れになるまで、ユーザーの対話的操作がない状態で Web コンソールページを表示できる時間を制御します。タイムアウトに達すると、ユーザーは再度ログインする必要があります。デフォルト値は15分間です。ユーザー自身のセキュリティポリシーに従って、新しい値を分単位で設定できます。ただし、このプロパティーはすべてのコンソールユーザーおよび登録されているすべてのアプリケーションのタイムアウト時間を制御するので注意が必要です。

セッションタイムアウトの変更方法の例については、[例 3-1](#) を参照してください。

- ログingleベル

ログingleのプロパティーは、ログingleサービスを設定するために使用します。コンソールのログファイルは `/var/log/webconsole/console` ディレクトリに作成されます。`logging.default.level` プロパティーは、どのメッセージがログingleされるかを決定します。コンソールログは、問題のトラブルシューティングに役立つ情報を提供します。

このログingleレベルはログingleサービス経由で書き込まれるすべてのメッセージに適用されますが、ログingleサービスはデフォルトで Oracle Solaris リリースの `syslog` を使用します。`syslog` のログファイルは `/var/adm/messages` です。ファイル `/var/log/webconsole/console/console_debug_log` に含まれるログメッセージは、デバッグサービスを有効化した場合に書き込まれます。これを行うには、[Using the Console Debug Trace Log](#) の説明に従って [73 ページの「コンソールのデバッグトレースログを使用する」](#) プロパティーを設定します。デフォルトログingleサービスとデバッグログingleサービスは別個のものですが、`syslog` への Java Web Console ログingleメッセージはデバッグの助けになるように `console_debug_log` にも書き込まれます。一般に、`logging.default.level` で設定されるログingleサービスは、コンソールアプリケーションによるログingle用として常に有効にしておきます。`debug.trace.level` で設定されるデバッグログingleを有効にするのは、問題を調査する場合だけにしてください。

`logging.default.level` に使用できるプロパティー値は、次のとおりです。

- `all`
- `info`
- `off`
- `severe`
- `warning`

ログingleレベルの変更方法の例については、[例 3-2](#) を参照してください。

- 監査実装

監査とは、セキュリティー関連の管理イベントを生成および記録する処理です。イベントは、特定のユーザーがシステム上の管理情報を更新したことを示します。監査実装は、監査イベントを生成するサービスとアプリケーションで使用されます。

Web コンソールでは、次の監査イベントが定義されます。

- ログイン
- ログアウト
- 役割の引き受け

監査イベントが発生すると、そのイベントのレコードが監査ログに作成されます。監査ログの場所は、使用されている監査実装によって異なります。Web コンソールの監査サービスは、基になるオペレーティングシステムによって提供される監査実装を使用します。

Web コンソールは、次の3つの監査実装をサポートしています。Solaris、Log、およびNone です。これらのキーワードのいずれかを `audit.default.type` 設定プロパティの値として指定することで、監査実装を選択できます。一度に有効にできる監査実装は1つのみです。

サポートされている監査実装の種類は次のとおりです。

- Solaris

Solaris はデフォルトの実装です。この実装は、BSM 監査機構に対応しています。この監査機構では、`/var/audit` ディレクトリのシステムファイルに監査レコードが書き込まれます。

これらのレコードは、`praudit` コマンドを使って表示できます。イベントを取り込むためには、システムでBSM 監査機構を有効にする必要があります。また、`/etc/security/audit_control` ファイルに、どのイベントを生成するかを指示するエントリを入れておく必要があります。ユーザーごとにログインとログアウトのイベントを表示するために、`lo` イベントをフラグオプションとして設定する必要があります。詳細は、`praudit(1M)` と `bsmconv(1M)` のマニュアルページ、および『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』のパート VII 「Solaris 監査」を参照してください。

- Log

この実装を設定すると、システムの `syslog` サービスに書き込むことができます。ロギングサービスが `info` レベルで有効になっている場合は、監査メッセージがコンソールログに書き込まれます。詳細は、例 3-2 を参照してください。

- None

監査イベントは生成されません。監査メッセージは、デバッグトレースログ(有効な場合)に書き込まれます。

監査実装の指定方法の例については、例 3-5 を参照してください。

## ▼ Java Web Console のプロパティを変更する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBAC の構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 実行している Oracle Solaris リリースに応じて、選択したプロパティの値を次のように変更します。

- Solaris 10 11/06 以降のリリースを実行している場合は、次のコマンドを使用します。

```
# wadmin add -p -a console name=value
```

-p オブジェクトタイプがプロパティであることを指定します。

-a console console というアプリケーションに対するプロパティ変更であることを指定します。コンソールのプロパティを変更する場合は、常に -a console オプションを使用する必要があります。

name=value プロパティ名とそのプロパティの新しい値を指定します。

- Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06 リリースの場合は、次のコマンドを使用します。

```
# smreg add -p -c name
```

- 3 (省略可能) コンソールのプロパティをそのデフォルト値にリセットします。

- Solaris 10 11/06 以降のリリースを実行している場合は、次のコマンドを使用します。

```
# wadmin remove -p -a console name=value
```

- Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06 リリースの場合は、次のコマンドを使用します。

```
# smreg remove -p -c name
```

-p オブジェクトタイプがプロパティであることを指定します。

-c コンソールアプリケーションに対するプロパティ変更であることを指定します。コンソールのプロパティを変更する場合は、常に -c オプションを使用する必要があります。

name プロパティ名とそのプロパティの新しい値を指定します。

**例 3-1 Java Web Console のセッションタイムアウトプロパティを変更する**

この例では、セッションタイムアウトの値を5分に設定する方法を示します。

```
# wadmin add -p -a console session.timeout.value=5
```

**例 3-2 Java Web Console のロギングレベルを設定する**

この例では、ロギングレベルを all に設定する方法を示します。

```
# wadmin add -p -a console logging.default.level=all
```

**例 3-3 Java Web Console のロギングレベルをデフォルト値にリセットする**

この例では、ロギングレベルをデフォルトにリセットする方法を示します。

```
# wadmin remove -p -a console logging.default.level
```

**例 3-4 Java Web Console の Java バージョンを指定する**

この例では、コンソールの Java バージョンを設定する方法を示します。

```
# wadmin add -p -a console java.home=/usr/java
```

**例 3-5 Oracle Java Web Console の監査実装を選択する**

この例では、監査実装を None に設定する方法を示します。

```
# wadmin add -p -a console audit.default.type=None
```

有効な監査タイプは次のとおりです。

None	監査なし
Log	syslog への監査メッセージの格納
Solaris	BSM への監査メッセージの格納

## Oracle Java Web Console のユーザー ID

デフォルトでは、Web コンソールは noaccess というユーザー ID のもとで実行されます。ただし、システム構成によっては、noaccess ユーザーが無効にされていたり、noaccess ユーザーのログインシェルが無効なエントリに設定されてこのユーザー ID が使用できなくされていたりすることがあります。



noaccess ユーザーが使用できない場合は Web コンソールサーバーの起動や設定を行うことができないため、代替りのユーザー ID を指定する必要があります。最初の起動でコンソールサーバーが設定される前に、ユーザー ID を 1 回だけ変更することが理想的です。

コンソールを起動する前に次のいずれかのコマンドを使用して、root 以外の代替ユーザー ID のもとで実行されるように Web コンソールを設定できます。

```
# smcwebserver start -u username
```

このコマンドを実行すると、Web コンソールサーバーが指定のユーザー ID のもとで起動されます。コンソールの初回起動時にこのコマンドが発行された場合には、Web コンソールサーバーはそれ以降起動されるたびにこの ID で実行されます。

Solaris 10 11/06 以降のリリースを実行している場合は、次のコマンドも使用できません。

```
# wcadm add -p -a console com.sun.web.console.user=  
username
```

---

注 - **Solaris 10 11/06** リリース以降では、システムの初回起動時にコンソールも起動し、noaccess の下で実行するように自動的に設定されます。その結果、ユーザー ID は、変更する機会が得られないまま noaccess に設定されてしまいます。その場合は、まず次のコマンドを使ってコンソールを初期の未設定状態にリセットしてください。続いて、コンソールの再起動時に別のユーザー ID を指定します。

```
# smcwebserver stop  
# /usr/share/webconsole/private/bin/wcremove -i console  
# smcwebserver start -u new_user_identity
```

---

Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06 リリースの場合は、次のコマンドを使用します。

```
# smreg add -p -c com.sun.web.console.user=username
```

このコマンドを実行すると、次回以降サーバーが起動されるたびに、Web コンソールサーバーが指定のユーザー ID のもとで起動されます。

## コンソールのデバッグトレースログを使用する

デフォルトでは、コンソールはデバッグメッセージを記録しません。デバッグのロギングをオンにして、コンソールサービスの問題のトラブルシューティングに利用することができます。

デバッグのロギングをオンにするには、`debug.trace.level` プロパティを 0 以外の値に設定します。

可能な選択肢は次のとおりです。

- 1 - 重大エラーの可能性のあるエラーを記録する場合は、この設定を使用します。
- 2 - 重要なメッセージやレベル 1 のエラーメッセージを記録する場合は、この設定を使用します。
- 3 - 考えられるすべてのメッセージを詳細な情報とともに記録するには、この設定を使用します。

Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06 リリースの場合、デバッグトレースログはデフォルトで `/var/log/webconsole` ディレクトリ内に作成されます。**Solaris 10 11/06** リリース以降では、`/var/log/webconsole/console` ディレクトリ内にログが作成されます。ログファイルの名前は `console_debug_log` です。`console_debug_log.1` や `console_debug_log.2` などの履歴ログがこのディレクトリに格納されている場合もあります。このディレクトリには最高 5 つ (デフォルトの設定) の履歴ログを格納しておくことができ、そのあとはもっとも古いログが削除され、新しいログが作成されます。

例 3-6 コンソールのデバッグトレースログレベルを設定する

次のコマンドを使用して、デバッグトレースログレベルを 3 に設定します。

**Solaris 10 11/06** リリースの場合は、次のコマンドを使用します。

```
# wadmin add -p -a console debug.trace.level=3
```

**Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06** リリースの場合は、次のコマンドを使用します。

```
# smreg add -p -c debug.trace.level=3
```

例 3-7 `debug.trace.level` プロパティの状態を確認する

`debug.trace.level` プロパティの状態を確認する場合は、`wadmin list` コマンドまたは `smreg list` コマンドを使用します。

**Solaris 10 11/06:**

```
# wadmin list -p | grep "debug.trace.level"
```

**Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06** リリースの場合は、次のコマンドを使用します。

```
# smreg list -p | grep "debug.trace.level"
```

# Java Web Console ソフトウェアのトラブルシューティング (作業マップ)

作業	説明	参照先
コンソールが稼働しているか、および有効かどうかを確認します。	smcwebserver、wadmin、および svcs の各コマンドを使用して、コンソールが稼働しているか、および有効かどうかを確認します。この情報は問題のトラブルシューティングに役立ちます。	77 ページの「コンソールが稼働しているか、および有効かどうかを確認する方法」
コンソールのリソースとプロパティを一覧表示します。	トラブルシューティングの目的で、コンソールのリソースとプロパティに関する情報を収集できます。	77 ページの「コンソールのリソースとプロパティを一覧表示する方法」
アプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定します。	現行アプリケーションの登録と配備は、コンソールサーバーの稼働中に単一のコマンドで実行されます。レガシーアプリケーションの場合は、登録時にコンソールサーバーを停止する必要があります。アプリケーションの登録や登録解除を行うときは、まずアプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する必要があります。	79 ページの「アプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する方法」
登録済みのアプリケーションを一覧表示します。	Oracle Java Web Console に登録されているすべてのアプリケーションの一覧を表示できます。登録済みのアプリケーションを一覧表示すると、トラブルシューティングに役立つ情報が得られます。	80 ページの「配備済みのアプリケーションを一覧表示する方法」
レガシーアプリケーションを Oracle Java Web Console に登録します。	レガシーアプリケーションを使用する必要がある場合は、まずアプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する必要があります。	81 ページの「レガシーアプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する方法」

作業	説明	参照先
Oracle Java Web Console からレガシーアプリケーションを登録解除します。	レガシーアプリケーションを Oracle Java Web Console に登録しない場合は、手順に従ってレガシーアプリケーションを登録解除します。	82 ページの「Oracle Java Web Console からレガシーアプリケーションを登録解除する方法」
現行アプリケーションを Oracle Java Web Console に登録します。	新しいアプリケーションを使用するには、まずアプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する必要があります。	83 ページの「現行アプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する方法」
Oracle Java Web Console から現行アプリケーションを登録解除します。	場合によっては、Oracle Java Web Console から現行アプリケーションを登録解除する必要がありますが生じることがあります。	83 ページの「Oracle Java Web Console から現行アプリケーションを登録解除する方法」
Oracle Java Web Console へのリモートアクセスを使用可能にします。	ほかのアクセス制限はそのまま、コンソールへのリモートアクセスだけを使用可能にすることができます。	88 ページの「Java Web Console へのリモートアクセスを使用可能にする方法」
コンソールの内部パスワードを変更します。	Oracle Java Web Console では内部パスワードが使用されません。セキュリティ侵入の可能性を低減するために、これらのパスワードを変更することができます。	89 ページの「コンソールの内部パスワードを変更する方法」

## Java Web Console ソフトウェアのトラブルシューティング

次の情報は、Java Web Console ソフトウェアの使用時に検出される可能性がある問題のトラブルシューティングに役立ちます。

### コンソールの状態とプロパティの確認

smcwebserver、wadmin、およびsvcsの各コマンドを使用して、各種の情報を取得できます。これらの情報は問題のトラブルシューティングに役立つ場合があります。

## ▼ コンソールが稼働しているか、および有効かどうかを確認する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 サーバーの状態を確認します。

```
# smcwebserver status
Sun Java(TM) Web Console is running
```

- 3 **Solaris 10 11/06:** コンソールの SMF 状態と有効状態を確認します。

```
# svcs -l system/webconsole:console
```

smcwebserver コマンドを使用して、サーバーの有効または無効の状態を変更せずにサーバーを起動または停止すると、enabled プロパティは false (temporary) または true (temporary) と表示されます。

## ▼ コンソールのリソースとプロパティを一覧表示する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 コンソールのリソースとプロパティを一覧表示します。

Solaris 10 11/06 以降のリリースを実行している場合は、次のコマンドを使用します。

```
# wadmin list
```

Deployed web applications (application name, context name, status):

```
console    ROOT          [running]
console    com_sun_web_ui [running]
console    console       [running]
console    manager       [running]
legacy     myapp         [running]
```

Registered jar files (application name, identifier, path):

```
console  audit_jar      /usr/lib/audit/Audit.jar
console  console_jars   /usr/share/webconsole/lib/*.jar
console  jato_jar       /usr/share/lib/jato/jato.jar
console  javahelp_jar   /usr/jdk/packages/javax.help-2.0/lib/*.jar
console  shared_jars    /usr/share/webconsole/private/container/shared/lib/*.jar
```

Registered login modules (application name, service name, identifier):

```
console ConsoleLogin userlogin
console ConsoleLogin rolelogin
```

Shared service properties (name, value):

```
ENABLE          yes
java.home        /usr/jdk/jdk1.5.0_06
```

---

注-SMFは前の手順で示した独自の enabled プロパティを使用するため、この ENABLE プロパティは無視されます。ENABLE プロパティは、コンソールサーバーがSMFによって管理されない、以前のシステムで使用されます。

---

Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06 リリースの場合は、次のコマンドを使用します。

#### # smreg list

The list of registered plugin applications:

```
com.sun.web.console_2.2.4      /usr/share/webconsole/console
com.sun.web.ui_2.2.4          /usr/share/webconsole/com_sun_web_ui
com.sun.web.admin.example_2.2.4 /usr/share/webconsole/example
```

The list of registered jar files:

```
com_sun_management_services_api.jar scoped to ALL
com_sun_management_services_impl.jar scoped to ALL
com_sun_management_console_impl.jar scoped to ALL
com_sun_management_cc.jar scoped to ALL
com_sun_management_webcommon.jar scoped to ALL
com_iplanet_jato_jato.jar scoped to ALL
com_sun_management_solaris_impl.jar scoped to ALL
com_sun_management_solaris_implx.jar scoped to ALL
```

The list of registered login modules for service ConsoleLogin:

```
com.sun.management.services.authentication.PamLoginModule optional
use_first_pass="true" commandPath="/usr/lib/webconsole";
com.sun.management.services.authentication.RbacRoleLoginModule requisite
force_role_check="true" commandPath="/usr/lib/webconsole";
```

The list of registered server configuration properties:

```
session.timeout.value=15
authentication.login.cliservice=ConsoleLogin
logging.default.handler=com.sun.management.services.logging.ConsoleSyslogHandler
logging.default.level=info
logging.default.resource=com.sun.management.services.logging.resources.Resources
logging.default.filter=none
logging.debug.level=off
audit.default.type=None
audit.None.class=com.sun.management.services.audit.LogAuditSession
audit.Log.class=com.sun.management.services.audit.LogAuditSession audit.class.fail=none
authorization.default.type=SolarisRbac
authorization.SolarisRbac.class=
```

```
com.sun.management.services.authorization.SolarisRbacAuthorizationService
authorization.PrincipalType.class=
com.sun.management.services.authorization.PrincipalTypeAuthorizationService
debug.trace.level=0
.
.
.
No environment properties have been registered.
```

## コンソールへのアクセスに関連する問題

コンソールへのアクセスに問題がある場合は、コンソールサーバーが有効になっていないか、セキュリティ設定の制限が厳しいことを示している可能性があります。詳細は、76 ページの「コンソールの状態とプロパティの確認」および 84 ページの「Java Web Console のセキュリティに関する注意事項」を参照してください。

## アプリケーションの登録に関連する問題

この節では、コンソールアプリケーションの登録で発生する可能性のある問題の解決方法について説明します。特定のコンソールアプリケーションの詳細は、そのアプリケーションのマニュアルを参照してください。

---

注-通常、コンソールアプリケーションはインストールプロセスの一環として登録されるため、通常はユーザー自身がアプリケーションを登録する必要はありません。

---

Solaris 10 11/06 リリース以降では、Web コンソールでのアプリケーション登録の方法が変更されましたが、以前のバージョンのコンソール用に開発されたアプリケーションも引き続きサポートされます。現行アプリケーションの登録と配備は、コンソールサーバー稼働中に単一のコマンドで実行されます。以前のバージョンのコンソール用に開発されたアプリケーションは「レガシー」アプリケーションと呼ばれ、その登録時にはコンソールサーバーを停止する必要があります。アプリケーションの登録や登録解除を行うときは、次の手順に従って、まずアプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する必要があります。

### ▼ アプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する方法

- 1 アプリケーションの app.xml ファイルを表示します。  
app.xml ファイルは、アプリケーションの WEB-INF ディレクトリにあります。

- 2 app.xml ファイル内の registrationInfo タグを調べます。  
レガシーアプリケーションの場合、registrationInfo タグのバージョンは 2.x です。たとえば、registrationInfo version="2.2.4" となります。  
現行アプリケーションの場合、registrationInfo タグのバージョンは 3.0 以上です。たとえば、registrationInfo version="3.0" となります。

## ▼ 配備済みのアプリケーションを一覧表示する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 配備済みのアプリケーションを一覧表示します。  
Solaris 10 11/06 以降のリリースを実行している場合は、次のコマンドを使用します。

```
# wadmin list -a
```

```
Deployed web applications (application name, context name, status):
```

```
console ROOT [running]
console com_sun_web_ui [running]
console console [running]
console manager [running]
legacy myapp [running]
```

このコマンドは、登録済みかつ配備済みのアプリケーションをすべて表示します。レガシーアプリケーションは legacy というアプリケーション名で表示されません。詳細は、79 ページの「アプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する方法」を参照してください。一覧に表示されるその他のアプリケーションはすべて現行アプリケーションであり、83 ページの「現行アプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する方法」に説明されている方法で登録されます。

通常、アプリケーションに対して表示される状態には running、stopped のいずれかが含まれます。状態が running の場合、アプリケーションはその時点で読み込まれており、使用可能な状態になっています。状態が stopped の場合、アプリケーションはその時点で読み込まれておらず、使用不可能な状態になっています。アプリケーションのなかには、登録と配備は成功したが、アプリケーション内の問題により読み込まれないものもあります。その場合、アプリケーションの状態は stopped になります。console\_debug\_log をチェックし、そのアプリケーションの読み込み時にコンソールの背後の Web コンテナである Tomcat からのトレースバックを含むエラーが発生していないか確認してください。console\_debug\_log の詳細については、73 ページの「コンソールのデバッグトレースログを使用する」を参照してください。



コンソールアプリケーションを含むすべてのアプリケーションの表示が `stopped` になっている場合、それは通常、コンソールの Web コンテナが動作していないことを意味します。この場合、その Web コンテナに登録された静的な `context.xml` ファイルからアプリケーションの一覧が取得されます。

Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06 リリースの場合は、次のコマンドを使用します。

```
# smreg list -a
```

The list of registered plugin applications:

```
com.sun.web.console_2.2.4      /usr/share/webconsole/console
com.sun.web.ui_2.2.4          /usr/share/webconsole/com_sun_web_ui
com.sun.web.admin.yourapp_2.2.4 /usr/share/webconsole/yourapp
```

## ▼ レガシーアプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する方法

注 - この手順は、Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06 リリースのすべてのコンソールアプリケーションに適用されます。**Solaris 10 11/06** リリース以降では、この手順はレガシーアプリケーションと識別されるアプリケーションだけに適用されます。現行アプリケーションの登録手順については、[83 ページの「現行アプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する方法」](#)を参照してください。[79 ページの「アプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する方法」](#)も参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 Web サーバーを停止します。

```
# smcwebserver stop
```

- 3 アプリケーションを登録します。

```
# smreg add -a /directory/containing/application-files
```

`smreg` コマンドは、Oracle Java Web Console の登録テーブル内の情報を管理します。さらに、このスクリプトはアプリケーションを配備するための作業も行います。このコマンドのその他のオプションについては、[smreg\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 4 Web サーバーを再起動します。

```
# smcwebserver start
```

### 例 3-8 レガシーアプリケーションを登録する

この例では、`/usr/share/webconsole/example` ディレクトリにファイルが置かれているレガシーアプリケーションを登録する方法を示します。レガシーアプリケーションの場合は、アプリケーションを登録する前にコンソールサーバーを停止し、アプリケーションの登録後に起動する必要があります。smreg はレガシーコンソールアプリケーションなので、これによって表示される警告は無視してかまいません。

```
# smcwebserver stop
# smreg add -a /usr/share/webconsole/example

Warning: smreg is obsolete and is preserved only for
compatibility with legacy console applications. Use wcadmin instead.

Type "man wcadmin" or "wcadmin --help" for more information.

Registering com.sun.web.admin.example_version.

# smcwebserver start
```

### ▼ Oracle Java Web Console からレガシーアプリケーションを登録解除する方法

注- この手順は、Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、および Solaris 10 6/06 リリースのすべてのコンソールアプリケーションに適用されます。**Solaris 10 11/06** リリース以降では、この手順はレガシーアプリケーションと識別されるアプリケーションだけに適用されます。現行アプリケーションの登録解除手順については、[83 ページ](#)の「[Oracle Java Web Console から現行アプリケーションを登録解除する方法](#)」を参照してください。

特定のレガシーアプリケーションを Web コンソールの起動ページに表示させたくないが、ソフトウェアのアンインストールは行いたくない場合、smreg コマンドを使用してアプリケーションの登録を解除できます。詳細は、[79 ページ](#)の「[アプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する方法](#)」を参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 アプリケーションの登録を解除します。

```
# smreg remove -a app-name
```

**例 3-9 Oracle Java Web Console からレガシーアプリケーションを登録解除する**

この例では、*app-name* として `com.sun.web.admin.example` を持つレガシーアプリケーションを登録解除する方法を示します。

```
# smreg remove -a com.sun.web.admin.example
Unregistering com.sun.web.admin.example_version.
```

**▼ 現行アプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する方法**

**Solaris 10 11/06:** この手順は、コンソールサーバーの停止や起動を行わずに登録および配備できる更新されたコンソールアプリケーション用です。レガシーアプリケーションと、Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、Solaris 10 6/06 の各リリースで実行されるすべてのコンソールアプリケーションの登録手順については、[81 ページの「レガシーアプリケーションを Oracle Java Web Console に登録する方法」](#)を参照してください。[79 ページの「アプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する方法」](#)も参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 アプリケーションの登録と配備を行います。

```
wcadmin deploy -a app-name -x app-context-name
/full path/to/app-name
```

**例 3-10 現行アプリケーションを登録する**

この例では、現在の Web コンソール用に開発または更新されたアプリケーションの登録と配備を行う方法を示します。

```
# wcadmin deploy -a newexample_1.0 -x newexample /apps/webconsole/newexample
```

**▼ Oracle Java Web Console から現行アプリケーションを登録解除する方法**

**Solaris 10 11/06:** この手順は、コンソールサーバーの停止や起動を行わずに登録解除および配備解除できる更新されたコンソールアプリケーション用です。レガシーアプリケーションと、Oracle Solaris 10、Solaris 10 1/06、Solaris 10 6/06 の各リリースで実行されるすべてのコンソールアプリケーションの登録解除手順については、[82 ページの「Oracle Java Web Console からレガシーアプリケーションを登録解除する方法」](#)を参照してください。アプリケーションがレガシーアプリケーションか更新されたアプリケーションかを判定する方法については、[80 ページの「配備済みのアプリケーションを一覧表示する方法」](#)および [79 ページの「アプリケーションがレガシーアプリケーションかどうかを判定する方法」](#)を参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 アプリケーションの配備解除と登録解除を行います。  

```
# wadmin undeploy -a newexample_1.0 -x newexample
```

## Java Web Console のリファレンス情報

このリファレンスの節では、次の内容について説明します。

- [84 ページの「Java Web Console のセキュリティーに関する注意事項」](#)
- [87 ページの「authTypes タグを使って承認を指定する」](#)

## Java Web Console のセキュリティーに関する注意事項

Java Web Console に含まれているアプリケーションを使用するときは、セキュリティーに関して注意しなければならないことがいくつかあります。

セキュリティーに関する注意事項は、次のとおりです。

- **Java Web Console** へのアクセス - ブラウザを介してコンソールに接続できるかどうか。
- アプリケーションへのアクセス - Java Web Console の起動ページに特定のアプリケーションを表示できるかどうか。
- アプリケーションのアクセス権 - アプリケーションの一部またはすべてを実行するために必要なアクセス権のレベル。
- リモートシステムへのアプリケーションのアクセス - セキュリティーの資格がリモートシステムにどのように関連しているか。
- コンソールで使用される内部パスワード - Solaris 10 11/06 リリース以降、コンソールの内部で使用されるデフォルトパスワードの変更。

### Java Web Console へのアクセス

通常、有効なユーザーはすべてログインできるように、Web コンソールの起動アプリケーションに対するアクセス権は開放されています。ただし、Web コンソールの `app.xml` ファイル内の `authTypes` タグに権利を指定することで、コンソールへのアクセスを制限できます。このファイルは

`/usr/share/webconsole/webapps/console/WEB-INF` ディレクトリにあります。詳細は、[87 ページの「authTypes タグを使って承認を指定する」](#)を参照してください。

非常に高いセキュリティーで保護されるようシステム構成が設定され、コンソールや登録済みアプリケーションの URL に対するリモートシステムからの接続が拒否される場合もあります。システムがリモートアクセスを防止するように設定されている場合は、`https://hostname.domain:6789` としてコンソールにアクセスしようとすると、ブラウザに次のようなメッセージが表示されます。

```
Connect to hostname.domain:6789 failed (Connection refused)
```

システムで有効になっている SMF プロファイルがアクセスを制限している場合もあります。プロファイルの詳細は、[384 ページの「SMF プロファイル」](#)を参照してください。リモートシステムからコンソールへのアクセスを許可する手順については、[88 ページの「Java Web Console へのリモートアクセスを使用可能にする」](#)を参照してください。

## Java Web Console のアプリケーションへのアクセス

Web コンソールに正常にログインしたあとで、そのコンソールに登録されているすべてのアプリケーションに自動的にアクセスできるようになるとは限りません。通常、アプリケーションはすべてのユーザーがコンソールの起動ページでそれを表示できるようにインストールされます。管理者は、アプリケーションに対するアクセスを付与および制限できます。

アプリケーションへのアクセスを制限するには、アプリケーションの `app.xml` ファイルに含まれている `authTypes` タグに権利を指定します。アプリケーションの `app.xml` ファイルは、`installation-location/WEB-INF/` サブディレクトリにあります。通常、このディレクトリは `/usr/share/webconsole/webapps/app-context-name/WEB-INF` になります。

アプリケーションのファイルが通常の場合に存在しない場合にそれらの格納場所を見つけるには、次のコマンドを使用します。

```
wcadmin list --detail -a
```

このコマンドは配備済みのすべてのアプリケーションを一覧表示しますが、その際、各アプリケーションの配備時刻とベースディレクトリへのパスが表示されません。`app.xml` ファイルはそのベースディレクトリ内のサブディレクトリ `WEB-INF` に格納されています。

詳細は、[87 ページの「authTypes タグを使って承認を指定する」](#)を参照してください。

## アプリケーションの特権

アプリケーションのリンクが Java Web Console の起動ページに表示される場合は、そのアプリケーションを実行できます。ただし、アプリケーションが認証ユーザーや役割の識別情報に基づいて承認チェックを別に行うことがあります。これらのチェックは、`authTypes` タグで制御されるのではなく、アプリケーション自体に明示

的にコード化されます。たとえば、アプリケーションによって、読み取りアクセスはすべての認証ユーザーに付与されるが、更新アクセスは一部のユーザーまたは一部の役割に制限されるようにすることができます。

## リモートシステムへのアプリケーションのアクセス

適切な資格をすべて持っているからといって、アプリケーションの操作の範囲内にあるすべてのシステムをそのアプリケーションで管理できるとは限りません。Oracle Java Web Console アプリケーションを使用して管理する各システムには、専用のセキュリティドメインがあります。Web コンソールシステムに対する読み取り/書き込み権を持っていても、それらの資格がほかのリモートシステムを管理するのに十分であるとは限りません。

一般に、リモートシステムへのアクセスは、セキュリティーが Web アプリケーションにどのように実装されるかによって変わります。通常、Web アプリケーションは、アプリケーションに代わって処理を実行する「エージェント」を呼び出します。これらのアプリケーションはその Web コンソールの資格とアプリケーションがエージェントシステムで認識されるときに使われる資格に基づいて認証される必要があります。このエージェントによる認証がどのように行われるかによって、エージェントでもこの認証された識別情報に基づいて承認チェックが行われることがあります。

たとえば、リモート WBEM エージェントを使用する Web アプリケーションでは通常、最初に Java Web Console に対して認証されたユーザーや役割の識別情報を使って認証が行われます。エージェントシステムでこの認証に失敗すると、そのシステムへのアクセスは Web アプリケーションで拒否されます。エージェントシステムで認証に成功しても、エージェントがアクセス制御チェックを行なってアクセスを拒否した場合は、引き続きアクセスが拒否されます。ほとんどのアプリケーションは、ユーザーが Web コンソールでの認証に成功し、正しい役割を引き受けた場合はエージェントでの認証や承認のチェックが失敗することのないように作成されます。

## コンソールで使用される内部パスワード

**Solaris 10 11/06** リリース以降、Oracle Java Web Console は、パスワードで保護された内部ユーザー名を使用して、基になる Web サーバーに対する管理タスクを実行したり、キーストアファイルやトラストストアファイルを暗号化したりします。コンソールをインストールできるよう、パスワードは初期値に設定されます。セキュリティー侵入の可能性を低減するために、インストール後はパスワードを変更するようにしてください。詳細は、[89 ページの「Java Web Console の内部パスワードを変更する」](#)を参照してください。

## authTypes タグを使って承認を指定する

ほとんどのシステム管理用の Web アプリケーションでは authTypes タグの使用に管理者が介入する必要はありませんが、場合によってはシステム管理者がこのタグの値を変更する必要があります。authTypes タグには、ユーザーが Java Web Console でアプリケーションを表示するのに必要な承認レベルが記述された情報の組が含まれています。Web コンソールでは、アプリケーション app.xml ファイル内の承認要件に基づいて、特定のアプリケーションを表示する権限がユーザーにあるかどうかを判定します。各アプリケーションでは、ユーザーがアプリケーションを実行するための適切な承認を受ける必要があるかどうかを判定できます。この判定は、アプリケーションのインストールプロセスの一環として行われることがあります。あるいは、ユーザーが独自のセキュリティ要件に応じて情報を提供する必要がある場合もあります。アプリケーションの製品マニュアルには、特定のアクセス権を指定する必要があるかどうかを判断するのに必要な情報が記載されています。

authTypes タグの内部にいくつかの authType タグを入れ子にすることができます。

authTypes タグには、次の必要事項が指定された authType タグが少なくとも 1 つ含まれている必要があります。

- 実行する承認チェックのタイプ
- Permission サブクラス名
- Permission サブクラスのインスタンスの作成に必要なパラメータ

次の例では、authType タグに属性 name が指定されています。必要となる name 属性は、承認サービスタイプの名前です。それぞれの承認タイプでは、classType と permissionParam の各タグに異なる値が必要となる場合があります。

```
<authTypes>
  <authType name="SolarisRbac">
    <classType>
      com.sun.management.solaris.RbacPermission
    </classType>
    <permissionParam name="permission">
      solaris.admin.serialmgr.read
    </permissionParam>
  </authType>
</authTypes>
```

次の表に、authType タグの内部で入れ子にできるタグを示します。

表 3-1 入れ子の authType タグ

タグ	属性	説明
classType		Permission サブクラス名。このタグは必須です。
permissionParam	name	classType で指定されたクラスのインスタンスを作成するのに必要となるパラメータ。

authTypes タグと入れ子の authType タグは、app.xml ファイルに必ず含まれる要素です。だれでも使用できるアプリケーションを登録する場合は、次の例に示すように、空の authType タグを指定します。

```
<authTypes>
  <authType name="">
    <classType></classType>
    <permissionParam name=""></permissionParam>
  </authType>
</authTypes>
```

## Java Web Console へのリモートアクセスを使用可能にする

コンソールが実行されているシステムにログインして `https://localhost:6789` の URL を使用する方法でしかコンソールに接続できない場合、そのシステムではリモートアクセスを防止する設定が使用されています。**Solaris 10 11/06** リリース以降では、次の手順を使用して、ほかのアクセス制限はそのまま、コンソールへのリモートアクセスだけを使用可能にすることができます。

### ▼ Java Web Console へのリモートアクセスを使用可能にする方法

- 1 コンソールが実行されているシステムで、スーパーユーザーになるか、同等の役割になります。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 コンソールサーバーがネットワーク要求に応答できるようにするためのプロパティを設定し、コンソールサーバーを再起動します。

```
# svccfg -s svc:/system/webconsole setprop options/tcp_listen = true
# smcwebserver restart
```

## Java Web Console へのリモートアクセスを使用不可能にする

ユーザーがリモートシステムからコンソールに接続できないようにすることが可能です。**Solaris 10 11/06** リリース以降では、次の手順を使用して、ほかのアクセス権はそのまま、コンソールへのリモートアクセスだけを使用不可能にすることができます。



## ▼ Java Web Console へのリモートアクセスを使用不可能にする方法

- 1 コンソールが実行されているシステムで、スーパーユーザーになるか、同等の役割になります。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 コンソールサーバーがネットワーク要求に応答しないようにするためのプロパティを設定し、コンソールサーバーを再起動します。

```
# svccfg -s svc:/system/webconsole setprop options/tcp_listen = false
```

```
# smcwebserver restart
```

再起動後、コンソールは、コンソールサーバープロセスと同じシステム上のブラウザにしか応答しなくなります。ブラウザでプロキシを使用することはできません。使用できるのは直接接続のみです。また、`https://localhost:6789/` URL を使ってコンソールにアクセスすることもできます。

## Java Web Console の内部パスワードを変更する

**Solaris 10 11/06** リリース以降、コンソールではいくつかの内部ユーザー名とパスワードが使用されます。コンソールの内部ユーザー名とパスワードは、コンソールのフレームワークでのみ使用され、ユーザーやシステム管理者が直接使用することはありません。ただし、パスワードが知られると、悪意のあるユーザーがコンソールアプリケーションに干渉する可能性があります。そのようなセキュリティ侵入の可能性を低減するために、パスワードを変更するようにしてください。新しいパスワードはソフトウェアの内部で使用されるため、ユーザーがパスワードを覚える必要はありません。

## ▼ コンソールの内部パスワードを変更する方法

パスワードは、管理パスワード、キーストアパスワード、およびトラストストアパスワードと呼ばれます。デフォルトの初期値を知らなくてもパスワードを変更することができます。この手順では、3つのパスワードすべてを個別のコマンドで変更する方法について説明します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 管理パスワードを変更します。

```
# wcadm password -a
```

新しいパスワードを2回入力するよう求められます。パスワードは8文字から32文字で指定してください。

- 3 キーストアパスワードを変更します。

```
# wadmin password -k
```

新しいパスワードを2回入力するよう求められます。パスワードは8文字から32文字で指定してください。

- 4 トラストストアパスワードを変更します。

```
# wadmin password -t
```

新しいパスワードを2回入力するよう求められます。パスワードは8文字から32文字で指定してください。

## ユーザーアカウントとグループの管理 (概要)

---

この章では、ユーザーアカウントとグループを管理するためのガイドラインと管理計画の概要について説明します。また、ユーザーの作業環境のカスタマイズについても説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 91 ページの「ユーザーとグループの管理における新機能または変更点」
- 93 ページの「ユーザーアカウントとグループとは」
- 101 ページの「ユーザーアカウントとグループ情報の格納場所」
- 92 ページの「ユーザーアカウントとグループアカウントの管理用のツール」
- 110 ページの「ユーザーの作業環境のカスタマイズ」

ユーザーアカウントとグループの管理手順については、第5章「ユーザーアカウントとグループの管理(手順)」を参照してください。

## ユーザーとグループの管理における新機能または変更点

この節では、この Oracle Solaris リリースで新たに追加または変更された、ユーザーとグループの管理機能について説明します。

この Solaris リリースで新たに追加または変更された機能はありません。

新機能の完全な一覧や各 Oracle Solaris リリースの説明については、『Oracle Solaris 10 9/10 の新機能』を参照してください。

# ユーザーアカウントとグループアカウントの管理用のツール

次の表に、ユーザーアカウントとグループの管理に使用できるツールを示します。

表 4-1 ユーザーアカウントとグループの管理用のツール

ツール名	説明	詳細
Solaris 管理コンソール	ユーザー、グループ、役割、権利、メーリングリスト、ディスク、端末、およびモデムを管理するためのグラフィカルツール。	123 ページの「ユーザーアカウントの設定 (作業マップ)」
smuser、smrole、smgroup	ユーザー、グループ、および役割を管理するためのコマンド。これらのコマンドを使用するには、SMC サービスを実行しておく必要があります。	130 ページの「smgroup および smuser コマンドを使ってグループやユーザーを追加する」
useradd、groupadd、roleadd、usermod、groupmod、rolmod、userdel、groupdel、roledel	ユーザー、グループ、および役割を管理するためのコマンド。	129 ページの「groupadd および useradd コマンドを使ってグループやユーザーを追加する」

次のツールを使ってグループを追加できます。

- Solaris 管理コンソールのグループツール
- Admintool

注 - この Solaris リリースでは Admintool は使用できません。

表 4-2 Solaris ユーザー/グループコマンドの説明

コマンド	説明	参照ページ
useradd、usermod、userdel	ユーザーを追加、変更、削除します	useradd(1M)、usermod(1M)、userdel(1M)
groupadd、groupmod、groupdel	グループを追加、変更、削除します	groupadd(1M)、groupmod(1M)、groupdel(1M)

# ユーザーアカウントとグループとは

基本的なシステム管理作業の1つに、サイトの各ユーザーにユーザーアカウントを設定することがあります。通常のユーザーアカウントには、ユーザーがスーパーユーザーのパスワードを知らなくても、システムにログインして、システムを使用するのに必要な情報が含まれています。ユーザーアカウント情報の構成要素については、[93 ページの「ユーザーアカウントの構成要素」](#)で説明します。

ユーザーアカウントを設定するときに、ユーザーをあらかじめ定義されたユーザーグループに追加できます。グループは一般に、ファイルまたはディレクトリへのグループアクセス権を設定して、グループ内のユーザーだけがファイルとディレクトリにアクセスできるようにするために使用されます。

たとえば、ごく少数のユーザーだけにアクセスさせたい機密ファイルを入れるディレクトリを作成できます。topsecret プロジェクトに携わるユーザーを含む topsecret という名前のグループを設定します。そして、topsecret ファイルの読み取り権を topsecret グループに対して設定します。こうすれば、topsecret グループ内のユーザーだけが、ファイルを読み取ることができます。

また、「役割」という特別な種類のユーザーアカウントは、指定したユーザーに特別な特権を与えるときに使用します。詳細は、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[役割によるアクセス制御 \(概要\)](#)」を参照してください。

## ユーザーアカウントの構成要素

次の節では、ユーザーアカウントのそれぞれの構成要素について説明します。

### ユーザー (ログイン) 名

ユーザーは、ユーザー名 (ログイン名とも呼ばれる) を使って、適切なアクセス権を持つ自分のシステムとリモートシステムにアクセスできます。作成するユーザーアカウントそれぞれに、ユーザー名を選択しなければなりません。

ユーザー名を探しやすいように、ユーザー名の標準的な割り当て方法を使用することを検討してください。また、ユーザー名はユーザーが覚えやすいものにしてください。単純な規則の例としては、ユーザーのファーストネームの頭文字とラストネームの最初の7文字を使用します。たとえば、Ziggy Ignatz は zignatz になります。ほかのユーザー名と重複する場合は、ユーザーのファーストネームの頭文字、ミドルネームの頭文字、ラストネームの最初の6文字を使用します。たとえば、Ziggy Top Ignatz は ztignatz になります。

さらに重複する場合、ユーザー名の作成には次の方法を検討してください。

- ファーストネームの頭文字、ミドルネームの頭文字、ラストネームの最初の5文字を使用します
- 固有の名前になるまで1、2、3などの数字を使用します

---

注-それぞれの新しいユーザー名は、システムまたはNISドメインに登録されているどのメール別名(エイリアス)とも異なるものでなければなりません。そうしないと、メールは実際のユーザーではなく別名に送られることがあります。

---

ユーザー(ログイン)名の設定方法の詳しいガイドラインについては、[100 ページ](#)の「[ユーザー名、ユーザーID、およびグループIDを使用するガイドライン](#)」を参照してください。

## ユーザーID番号

ユーザー名に関連するものとして、ユーザー識別 (UID) 番号があります。ユーザーがログインしようとするシステムは、UID 番号によってユーザー名を識別したり、ファイルとディレクトリの所有者を識別したりします。多数の異なるシステム上で、ある個人用にユーザーアカウントを作成する場合は、常に同じユーザー名とID番号を使用してください。そうすれば、そのユーザーは、所有権の問題を起こすことなく、システム間で簡単にファイルを移動できます。

UID 番号は、2147483647 以下の整数でなければなりません。UID 番号は、通常のユーザーアカウントと特殊なシステムアカウントに必要です。次の表に、ユーザーアカウントとシステムアカウントに予約されている UID 番号を示します。

表 4-3 予約済みの UID 番号

UID 番号	ユーザー/ログインアカウント	説明
0 - 99	root、daemon、bin、sys など	Oracle Solaris 用に予約
100 - 2147483647	通常のユーザー	汎用アカウント
60001 と 65534	nobody および nobody4	匿名ユーザー
60002	noaccess	アクセス権のないユーザー

0 - 99 の UID 番号を割り当てないでください。これらの UID は、Oracle Solaris による割り当て用に予約されています。システム上の定義により、root には常に UID 0、daemon には UID 1、擬似ユーザー bin には UID 2 が設定されます。また、UID が passwd ファイルの先頭にくるように、uucp ログインや、who、tty、ttytype などの擬似ユーザーログインには低い UID を指定するようにしてください。

UID の設定方法の詳しいガイドラインについては、100 ページの「ユーザー名、ユーザー ID、およびグループ ID を使用するガイドライン」を参照してください。

ユーザー (ログイン) 名と同様に、固有の UID 番号を割り当てる方法を決めてください。企業によっては、従業員に固有の番号を割り当て、管理者がその従業員番号にある番号を加えて固有の UID 番号を作成している場合もあります。

セキュリティ上のリスクを最小限に抑えるため、削除したアカウントの UID を再利用することは避けてください。どうしても UID を再利用する必要がある場合、はじめから作りなおして、新しいユーザーが前のユーザーの属性に影響されないようにしてください。たとえば、前のユーザーがプリンタの拒否リストに含まれていたためプリンタにアクセスできなかった場合、その属性を新しいユーザーに適用することが正しいとは限りません。

## 大きな数値のユーザー ID とグループ ID の使用

UID とグループ ID (GID) には、符号付き整数の最大値 (つまり 2147483647) までの数値を割り当てることができます。

ただし、60000 より大きな数値の UID と GID は機能的に完全でなく、多くの Oracle Solaris の機能と互換性がありません。したがって、60000 を超える UID と GID は使わないようにしてください。

次の表では、Oracle Solaris 製品と以前のリリースとの相互運用性に関する問題について説明します。

表 4-4 60000 より大きな数値の UID または GID の相互運用性に関する問題

カテゴリ	製品またはコマンド	問題
NFS 互換性	SunOS 4.0 NFS ソフトウェアとその互換リリース	NFS サーバーとクライアントのコードは、大きな UID と GID を 16 ビットに切り捨てます。この状況では、SunOS 4.0 およびその互換リリースが動作しているシステムが、大きな UID と GID を使用している環境で使用されると、セキュリティの問題が発生する可能性があります。この問題を回避するには、SunOS 4.0 およびその互換リリースが動作しているシステムにパッチをあてる必要があります。
ネームサービスの互換性	NIS ネームサービスおよびファイルベースのネームサービス	60000 より大きな数値の UID を持つユーザーは、Solaris 2.5 (およびその互換リリース) が動作しているシステムでは、ログインしたり、su コマンドを使用したりできますが、そのユーザーの UID と GID は 60001(nobody) に設定されます。

表 4-4 60000 より大きな数値の UID または GID の相互運用性に関する問題 (続き)

カテゴリ	製品またはコマンド	問題
	NIS+ ネームサービス	60000 より大きな数値の UID を持つユーザーは、Solaris 2.5 (およびその互換リリース) と NIS+ ネームサービスが動作しているシステムではアクセスが拒否されます。

次の表に、UID と GUI の制限事項を示します。

表 4-5 大きな UID および GID の制限の要約

UID または GID の値	制限
60003 以上	Solaris 2.5 (およびその互換リリース) と NIS ネームサービスまたはファイルネームサービスが動作しているシステムにログインしたユーザーは、 <i>nobody</i> の UID および GID を取得します。
65535 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris 2.5 (およびその互換リリース) が NFS バージョン 2 ソフトウェアとともに動作しているシステムでは、UID が 16 ビットに切り捨てられるため、セキュリティ上の問題が発生する可能性があります。</li> <li>■ ユーザーがデフォルトのアーカイブフォーマットで <code>cpio</code> コマンドを使用してファイルをコピーすると、ファイルごとにエラーメッセージが表示されます。そして、UID と GID はアーカイブにおいて <i>nobody</i> に設定されます。</li> <li>■ x86 システム: ユーザーが SVR3 互換のアプリケーションを実行すると、一部のシステムコールから <code>Eoverflow</code> が返される場合があります。</li> <li>■ x86 システム: ユーザーがマウントされた System V ファイルシステムでファイルまたはディレクトリを作成しようとした場合、System V ファイルシステムは <code>Eoverflow</code> エラーを返します。</li> </ul>
100000 以上	<code>ps -l</code> コマンドは最大 5 桁の UID を表示します。したがって、99999 より大きな UID または GID が含まれるときは、出力される列が揃いません。
262144 以上	ユーザーが <code>cpio</code> コマンドに <code>-H odc</code> を付けた形式または <code>pax -x cpio</code> コマンドを使用してファイルをコピーすると、ファイルごとにエラーメッセージが返されます。そして、UID と GID はアーカイブにおいて <i>nobody</i> に設定されます。
1000000 以上	ユーザーが <code>ar</code> コマンドを使用すると、そのユーザーの UID と GID はアーカイブにおいて <i>nobody</i> に設定されます。



表 4-5 大きな UID および GID の制限の要約 (続き)

UID または GID の値	制限
2097152 以上	ユーザーが <code>tar</code> コマンド、 <code>cpio -H ustar</code> コマンド、または <code>pax -x tar</code> コマンドを使用すると、そのユーザーの UID と GID は <code>nobody</code> に設定されます。

## UNIX グループ

「グループ」とは、ファイルやその他のシステム資源を共有できるユーザーの集合のことです。たとえば、同じプロジェクトで作業するユーザーはグループを構成することになります。グループは、従来の UNIX グループのことです。

各グループには、名前、グループ識別 (GID) 番号、およびそのグループに属しているユーザー名のリストが必要です。システムは GID 番号によって内部的にグループを識別します。

ユーザーは次の 2 つの種類のグループに所属できます。

- 一次グループ - オペレーティングシステムが、ユーザーによって作成されたファイルに割り当てるグループです。各ユーザーは、1 つの一次グループに所属していなければなりません。
- 二次グループ - ユーザーが所属する 1 つまたは複数のグループです。ユーザーは、最大 15 個の二次グループに所属できます。

グループ名の設定方法の詳しいガイドラインについては、[100 ページ](#)の「[ユーザー名、ユーザー ID、およびグループ ID を使用するガイドライン](#)」を参照してください。

ユーザーの二次グループは、場合によっては重要でないことがあります。たとえば、ファイルの所有権は、一次グループだけが反映し、二次グループは反映しません。ただし、アプリケーションによってはユーザーの二次グループが関係することがあります。たとえば、ユーザーは以前の Solaris リリースで `Admintool` ソフトウェアを使用するとき `sysadmin` グループ (グループ 14) のメンバーでなければなりません。グループ 14 がそのユーザーの現在の一次グループであるかどうかは問題にはなりません。

`groups` コマンドを使用すると、ユーザーが所属しているグループのリストを表示できます。ユーザーは一度に 1 つの一次グループにしか所属できません。ただし、`newgrp` コマンドを使用して、ユーザーがメンバーとなっているほかのグループに一時的に一次グループを変更することはできます。

ユーザーアカウントを追加するときは、ユーザーに一次グループを割り当てるか、デフォルトの `staff` グループ (グループ 10) を使用する必要があります。一次グループは、すでに存在しているものでなければなりません。存在しない場合は、GID 番号でグループを指定します。ユーザー名は、一次グループに追加されません。ユーザー名が一次グループに追加されると、リストが長くなりすぎるからで

す。ユーザーを新しい二次グループに割り当てる前に、そのグループを作成し、それにGID番号を割り当てなければなりません。

グループは、システムにとってローカルにすることも、ネームサービスを介して管理することもできます。グループ管理を簡単に行うには、NISなどのネームサービスやLDAPなどのディレクトリサービスを使用する必要があります。これらのサービスを使用すると、グループのメンバーを一元管理できます。

## ユーザーパスワード

ユーザーを追加するときはそのユーザーのパスワードを指定できます。または、ユーザーが最初にログインするときにパスワードを指定するよう強制できます。

ユーザーのパスワードは、次の構文に準拠している必要があります。

- パスワード長は、`/etc/default/passwd` ファイル内の `PASSLENGTH` 変数に指定された値に一致している必要があります。 `PASSLENGTH` にはデフォルトで6が設定されています。
- パスワードの最初の6文字には、2文字以上の英字と1文字以上の数字または特殊文字を含める必要があります。
- 最大パスワード長を9文字以上に増やすには、9文字以上に対応しているアルゴリズムで `/etc/policy.conf` ファイルを構成します。

ユーザー名は公表されますが、パスワードを知っているのは各ユーザーだけでなければなりません。各ユーザーアカウントには、パスワードを割り当てる必要があります。パスワードには、6-8文字の英数字と特殊文字を組み合わせることができます。

コンピュータシステムのセキュリティを強化するには、ユーザーのパスワードを定期的に変更する必要があります。高いレベルのセキュリティを確保するには、ユーザーに6週間ごとにパスワードを変更するよう要求してください。低いレベルのセキュリティなら、3カ月に1度で十分です。システム管理用のログイン (`root` や `sys` など) は、毎月変更するか、`root` のパスワードを知っている人が退職したり交替したりするたびに交換してください。

コンピュータセキュリティが破られる原因の多くは、正当なユーザーのパスワードが解読される場合です。ユーザーについて何か知っている人が簡単に推測できるような固有名詞、名前、ログイン名、パスワードを使わないよう各ユーザーに対して指示してください。

良いパスワードの例としては次のようなものが考えられます。

- 単語を組み合わせたフレーズ (たとえば、`beammeup`)。
- フレーズ内の各単語の頭文字だけを集めた、意味のない文字列。たとえば、`SomeWhere Over The RainBow` から取った `swotrB`。

- 文字を数字や記号に代えた単語。たとえば、snoopy から文字を代えた sn00py。

次のものは、パスワードに不適當です。

- 自分の名前そのもの、逆読み、飛ばし読みのもの
- 家族やペットの名前
- 免許証番号
- 電話番号
- 社会保険番号
- 従業員番号
- 趣味や興味に関連した単語
- 季節に関係のある名前(たとえば 12 月に Santa を使うなど)
- 辞書にある単語

## ホームディレクトリ

ホームディレクトリは、ユーザーが独自のファイルを格納するのに割り当てられるファイルシステムの一部です。ホームディレクトリに割り当てられる大きさは、ユーザーが作成するファイルの種類、サイズ、および数によって異なります。

ホームディレクトリは、ユーザーのローカルシステムまたはリモートファイルサーバーのどちらにでも配置できます。どちらの場合も、慣例により、ホームディレクトリは `/export/home/username` として作成します。大規模なサイトでは、ホームディレクトリをサーバーに格納してください。ホームディレクトリのバックアップおよび復元を簡単にするには、`/export/homen` ディレクトリごとに別々のファイルシステムを使用してください。たとえば、`/export/home1` と `/export/home2` を使用します。

ホームディレクトリが配置される場所に関係なく、ユーザーは通常 `/home/username` という名前のマウントポイントを介してホームディレクトリにアクセスします。Autofs を使用してホームディレクトリがマウントされていると、どのシステムでも `/home` マウントポイントの下にディレクトリを作成することは許可されません。Autofs が使用されていると、システムはマウントされている `/home` を特別なものと認識します。ホームディレクトリを自動マウントする方法については、『[Solaris のシステム管理\(ネットワークサービス\)](#)』の「[autofs 管理作業の概要](#)」を参照してください。

ネットワーク上の任意の場所からホームディレクトリを使用するには、`/export/home/username` ではなく、常に `$HOME` という環境変数の値によって参照するようにしてください。前者はマシンに固有の指定です。さらに、ユーザーのホームディレクトリで作成されるシンボリックリンクはすべて相対パス(たとえば `.././../x/y/x`)を使用する必要があります。こうすることによって、そのリンクはどのシステムにホームディレクトリがマウントされても有効になります。

## ネームサービス

大規模サイトのユーザーアカウントを管理する場合は、LDAP、NIS、NIS+などのネームサービスまたはディレクトリサービスの利用を検討することをお勧めします。ネームサービスまたはディレクトリサービスを使うと、ユーザーアカウント情報を各システムの `/etc` 内のファイルに格納するのではなく、一元管理できます。ユーザーアカウントにネームサービスまたはディレクトリサービスを使用すると、サイト全体のユーザーアカウント情報をシステムごとにコピーしなくても、同じユーザーアカウントのままシステム間を移動できます。ネームサービスまたはディレクトリサービスを使用すると、ユーザーアカウント情報を集中化および一元化して管理できます。

## ユーザーの作業環境

ファイルを作成して格納するホームディレクトリのほかに、ユーザーには仕事をするために必要なツールとリソースにアクセスできる環境が必要です。ユーザーがシステムにログインすると、初期設定ファイルによってユーザーの作業環境が決定されます。これらのファイルは、ユーザーの起動シェルによって定義されます。起動シェルはリリースによって異なる可能性があります。

ユーザーの作業環境を管理するのに便利な方法として、カスタマイズしたユーザー初期設定ファイル (`.login`、`.cshrc`、`.profile` など) をユーザーのホームディレクトリに置くという方法があります。

---

注 - システム初期設定ファイル (`/etc/profile` または `/etc/.login`) を使用してユーザーの作業環境を管理しないでください。これらのファイルはローカルシステムに存在するため、一元管理されません。たとえば、`Autofs` を使用してネットワーク上の任意のシステムからユーザーのホームディレクトリをマウントした場合、ユーザーがシステム間を移動しても環境が変わらないよう保証するには、各システムでシステム初期設定ファイルを修正しなければなりません。

---

ユーザー初期設定ファイルをユーザー用にカスタマイズする方法については、[110 ページの「ユーザーの作業環境のカスタマイズ」](#)を参照してください。

また、役割によるアクセス制御 (RBAC) でユーザーアカウントをカスタマイズする方法もあります。詳細は、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[役割によるアクセス制御 \(概要\)](#)」を参照してください。

## ユーザー名、ユーザー ID、およびグループ ID を使用するガイドライン

ユーザー名、UID、および GID は、複数のドメインにまたがることもあるユーザーの組織内で一意でなければなりません。

ユーザー名または役割名、UID、およびGIDを作成するときは、次のガイドラインに従ってください。

- ユーザー名-2-8文字の英数字を使用する必要があります。最初の文字は英字でなければならない、少なくとも1文字は小文字にする必要があります。

---

注-ユーザー名にはピリオド(.)、下線(\_)、ハイフン(-)を使用できますが、これらの文字により障害が発生するソフトウェアもあるため、使用はお勧めできません。

---

- システムアカウント-デフォルトの `/etc/passwd` および `/etc/group` ファイルに含まれているユーザー名、UID、またはGIDを使用しないでください。0-99のUIDとGIDは使用しないでください。これらの番号は、Oracle Solaris OSによる割り当て用に予約されており、どのユーザーも使用してはいけません。この制限は、現在使用されていない番号にも適用されます。

たとえば、`gdm`はGNOMEディスプレイマネージャーデーモン用に予約されたユーザー名とグループ名であるため、ほかのユーザーは使用できません。デフォルトの `/etc/passwd` と `/etc/group` のエントリの全リストについては、表4-6と表4-7を参照してください。

`nobody` と `nobody4` のアカウントは、プロセスの実行には使用しないでください。これらの2つのアカウントはNFS用に予約されています。これらのアカウントをプロセスの実行に使用すると、予期しないセキュリティー上のリスクにさらされる可能性があります。`root`以外のユーザーとして実行する必要があるプロセスでは、`daemon` または `noaccess` のアカウントを使用してください。

- システムアカウントの設定-デフォルトのシステムアカウントの設定は絶対に変更しないでください。この設定には、現在ロックされているシステムアカウントのログインシェルの変更が含まれています。ただし、`root`アカウントのパスワードとパスワード有効期限のパラメータ設定だけはこの規則に当てはまりません。

## ユーザーアカウントとグループ情報の格納場所

ユーザーアカウントとグループ情報は、サイトの方針に応じて、次のようにローカルシステムの `/etc` ファイル、ネームサービス、またはディレクトリサービスに格納されます。

- NIS+ ネームサービス情報はテーブルに格納されます。
- NIS ネームサービス情報はマップに格納されます。
- LDAP ディレクトリサービス情報はインデックス付きのデータベースファイルに格納されます。

---

注 - 混乱を避けるために、ユーザーアカウントとグループ情報の格納場所は、「データベース」、「テーブル」、「マップ」という3種類の呼び方ではなく、単に「ファイル」と呼びます。

---

ほとんどのユーザーアカウント情報は、`passwd` ファイルに格納されます。パスワード情報は次のように格納されます。

- NIS または NIS+ を使用するときは `passwd` ファイルに
- `/etc` ファイルを使用するときは、`/etc/shadow` ファイルに
- LDAP を使用するときは、`people` コンテナに

パスワード有効期限は、NIS+ または LDAP を使用するときは利用できますが、NIS を使用するときは利用できません。

NIS、NIS+、および `files` の場合、グループ情報は `group` ファイルに格納されます。LDAP の場合、グループ情報は `group` コンテナに格納されます。

## passwd ファイルのフィールド

`passwd` ファイルの各フィールドはコロンで区切られ、次のような情報が入っています。

```
username:password:uid:gid:comment:home-directory:login-shell
```

次に例を示します。

```
Kryten:x:101:100:Kryten Series 4000 Mechanoid:/export/home/kryten:/bin/csh
```

`passwd` ファイルのフィールドの完全な説明については、[passwd\(1\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## デフォルトの passwd ファイル

デフォルトの `passwd` ファイルには、標準のデーモン用のエントリが入っています。デーモンとは、通常ブート時に起動され、システム全体で有効な操作 (印刷、ネットワーク管理、ポートの監視など) を実行するプロセスのことです。

```
root:x:0:0:Super-User:/:/sbin/sh
daemon:x:1:1:/:/
bin:x:2:2:/:usr/bin:
sys:x:3:3:/:/
adm:x:4:4:Admin:/var/adm:
lp:x:71:8:Line Printer Admin:/usr/spool/lp:
uucp:x:5:5:uucp Admin:/usr/lib/uucp:
```

```

nuucp:x:9:9:uucp Admin:/var/spool/uucppublic:/usr/lib/uucp/uucico
smmsp:x:25:25:SendMail Message Submission Program:/:
listen:x:37:4:Network Admin:/usr/net/nls:
gdm:x:50:50:GDM Reserved UID:/:
webservd:x:80:80:WebServer Reserved UID:/:
postgres:x:90:90:PostgreSQL Reserved UID:/usr/bin/pfks
unknown:x:96:96:Unknown Remote UID:/:
svctag:x:95:12:Service Tag UID:/:
nobody:x:60001:60001:NFS Anonymous Access User:/:
noaccess:x:60002:60002:No Access User:/:
nobody4:x:65534:65534:SunOS 4.x NFS Anonymous Access User:/:

```

表 4-6 デフォルトの passwd ファイルのエントリ

ユーザー名	ユーザー ID	説明
root	0	スーパーユーザーのアカウント
デーモン	1	ルーチンシステムタスクに関連するシステム包括デーモン
bin	2	ルーチンシステムタスクを実行するシステムバイナリの実行に関連する管理デーモン
sys	3	システムのログの記録や一時ディレクトリのファイルの更新に関連する管理デーモン
adm	4	システムのログの記録に関連する管理デーモン
lp	71	ラインプリンタのデーモン
uucp	5	uucp 関数に関連するデーモン
nuucp	6	uucp 関数に関連する別のデーモン
smmsp	25	Sendmail メッセージ送信プログラムデーモン
webservd	80	WebServer アクセス用に予約されたアカウント
postgres	90	PostgreSQL アクセス用に予約されたアカウント
unknown	96	NFSv4 ACL のマップ不能なりモートユーザー用に予約されたアカウント
svctag	95	サービスタグレジストリアクセス
gdm	50	GNOME ディスプレイマネージャーデーモン
listen	37	ネットワーク監視デーモン
nobody	60001	匿名の NFS アクセス用に予約されたアカウント
noaccess	60002	あるアプリケーションを経由するが実際にログインをせずに、システムにアクセスする必要があるユーザーまたはプロセスに割り当てられるアカウント

表 4-6 デフォルトの `passwd` ファイルのエントリ (続き)

ユーザー名	ユーザーID	説明
nobody4	65534	SunOS 4.0 または 4.1 の nobody ユーザーアカウント

## shadow ファイルのフィールド

shadow ファイルの各フィールドはコロンで区切られ、次のような情報が入っています。

```
username:password:lastchg:min:max:warn:inactive:expire
```

次に例を示します。

```
rimmer:86Kg/MNT/dGu.:8882:0::5:20:8978
```

shadow ファイルのフィールドの完全な説明については、[shadow\(4\)](#) と [crypt\(1\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## group ファイルのフィールド

group ファイルの各フィールドはコロンで区切られ、次のような情報が入っています。

```
group-name:group-password:gid:user-list
```

次に例を示します。

```
bin::2:root,bin,daemon
```

group ファイルのフィールドの完全な説明については、[group\(4\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## デフォルトの group ファイル

デフォルトの group ファイルには、システム全体に有効な操作 (印刷、ネットワーク管理、電子メールなど) をサポートする次のようなシステムグループが記述されています。これらのグループの多くは、`passwd` ファイルのエントリに対応しています。

```
root::0:
other::1:root
bin::2:root,daemon
sys::3:root,bin,adm
adm::4:root,daemon
uucp::5:root
```



```

mail::6:root
tty::7:root,adm
lp::8:root,adm
nuucp::9:root
staff::10:
daemon::12:root
sysadmin::14:
smmsp::25:
gdm::50:
webservd::80:
postgres::90:
unknown::96:
nobody::60001:
noaccess::60002:
nogroup::65534:

```

表 4-7 デフォルトの group ファイルのエントリ

グループ名	グループID	説明
root	0	スーパーユーザーのグループ
other	1	オプションのグループ
bin	2	システムバイナリの実行に関連する管理グループ
sys	3	システムのログの記録や一時ディレクトリに関連する管理グループ
adm	4	システムのログの記録に関連する管理グループ
uucp	5	uucp 関数に関連するグループ
mail	6	電子メールのグループ
tty	7	tty デバイスに関連するグループ
lp	8	ラインプリンタのグループ
nuucp	9	uucp 関数に関連するグループ
staff	10	一般的な管理グループ
デーモン	12	ルーチンシステムタスクに関連するグループ
sysadmin	14	従来の Admintool と Solstice AdminSuite ツールに関連する管理グループ
smmsp	25	Sendmail メッセージ送信プログラム用のデーモン
gdm	50	GNOME ディスプレイマネージャデーモン用に予約されたグループ
webservd	80	WebServer アクセス用に予約されたグループ
postgres	90	PostgreSQL アクセス用に予約されたグループ

表 4-7 デフォルトの group ファイルのエントリ (続き)

グループ名	グループID	説明
unknown	96	NFSv4 ACL のマップ不能なりモートグループ用に予約されたグループ
nobody	60001	匿名の NFS アクセス用に割り当てられたグループ
noaccess	60002	あるアプリケーションを経由するが実際にログインをせずに、システムにアクセスする必要があるユーザーまたはプロセスに割り当てられるグループ
nogroup	65534	既知のグループのメンバーでないユーザーに割り当てられるグループ

## ユーザーアカウントとグループを管理するツール

次の表に、ユーザーとグループを管理するための推奨ツールを示します。これらのツールは、Solaris 管理コンソールツール群に含まれています。Solaris 管理コンソールの起動および使用方法については、第 2 章「Solaris 管理コンソールの操作(手順)」を参照してください。

表 4-8 ユーザーとグループを管理するためのツール

Solaris 管理ツール	目的
ユーザー	ユーザーアカウントを管理します
ユーザーテンプレート	学生、技術者、教師のように特定のユーザーの属性セットを作成します
権限	RBAC 権限を管理します
管理役割	RBAC の管理役割を管理します
グループ	グループ情報を管理します
プロジェクト	プロジェクト情報を管理します
メーリングリスト	メーリングリストを管理します

これらの作業の実行方法については、Solaris 管理コンソールのオンラインヘルプを参照してください。

ユーザーアカウントとグループの管理に使用できる Solaris コマンドについては、表 1-5 を参照してください。これらのコマンドは、認証およびネームサービスサポートを含め、Solaris 管理ツールと同じ機能を提供します。

## Solaris ユーザーおよびグループ管理ツールの作業

Solaris ユーザー管理ツールを使用すると、ローカルシステムまたはネームサービス環境のユーザーアカウントとグループを管理できます。

次の表で、ユーザーツールのユーザーアカウント機能を使って実行可能な作業について説明します。

表 4-9 ユーザーアカウントツールの作業の説明

作業	説明
ユーザーを追加します。	ユーザーをローカルシステムまたはネームサービスに追加します。
ユーザーテンプレートを作成します。	学生、契約者、技術者など、同じグループのユーザーを作成するために、定義済みのユーザー属性のテンプレートを作成します。
ユーザーテンプレートを使用してユーザーを追加します。	テンプレートを使って、定義済みのユーザー属性を使用してユーザーを追加します。
ユーザーテンプレートを複製します。	定義済みのユーザー属性を少しだけ変更して使用する場合は、ユーザーテンプレートを複製します。次に、必要な属性のみを変更します。
ユーザープロパティを設定します。	ユーザーを追加する前にユーザープロパティを設定します。プロパティには、ユーザーの追加時にユーザーテンプレートを使用するかどうかや、ユーザーの削除時にデフォルトでホームディレクトリやメールボックスを削除するかなどの指定があります。
複数ユーザーを追加します。	テキストファイルを指定する、それぞれの名前を入力する、または自動的に一連のユーザー名を生成することにより、ローカルシステムまたはネームサービスに複数のユーザーを追加します。
ユーザープロパティを表示または変更します。	ログインシェル、パスワード、またはパスワードオプションなどのユーザープロパティを表示または変更します。
ユーザーに権限を割り当てます。	特定の管理作業の実行を許可する RBAC 権限をユーザーに割り当てます。
ユーザーを削除します。	ユーザーをローカルシステムまたはネームサービスから削除します。オプションで、ユーザーのホームディレクトリまたはメールボックスも削除するかどうかを指定できます。ユーザーは、グループまたは役割からも削除されます。

ユーザーをローカルシステムまたはネームサービスに追加する方法については、[93 ページの「ユーザーアカウントとグループとは」](#) および [93 ページの「ユーザーアカウントの構成要素」](#) を参照してください。

表 4-10 権限ツールの作業の説明

作業	説明
権限の付与。	管理者だけが実行できた特定のコマンドまたはアプリケーションの実行権限をユーザーに付与します。
既存の権限のプロパティの表示および変更。	既存の権限を表示または変更します。
承認の追加。	承認、つまり役割またはユーザーに個別に付与できる権限を追加します。
承認の表示および変更。	既存の承認を表示または変更します。

ユーザーに権限を付与する方法については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[権利プロファイルの内容](#)」を参照してください。

表 4-11 管理役割ツールの作業の説明

作業	説明
管理の役割の追加。	RBAC の承認役割を追加します。
管理の役割への権限の割り当て。	作業を実行できるように、役割に特定の権限を割り当てます。
管理の役割の変更。	役割に権限を追加したり、役割から権限を削除したりします。

管理役割の使用方法については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の実装を計画する方法](#)」を参照してください。

表 4-12 グループツールの作業の説明

作業	説明
グループを追加します。	ユーザーを追加する前にグループ名を使用できるように、ローカルシステムまたはネームサービスにグループを追加します。
グループにユーザーを追加します。	グループが所有するファイルにユーザーがアクセスする場合、ユーザーをグループに追加します。
グループからユーザーを削除します。	ユーザーがグループファイルにアクセスする必要がなくなった場合、グループからユーザーを削除します。

ユーザーをグループに追加する方法については、97ページの「UNIXグループ」を参照してください。

表4-13 メーリングリストツールの作業の説明

作業	説明
メーリングリストの作成。	メーリングリスト(電子メールのメッセージの宛先のリスト)を作成します。
メーリングリスト名の変更。	メーリングリストの作成後、その内容を変更します。
メーリングリストの削除。	不要になったメーリングリストを削除します。

メーリングリストの作成方法については、Solaris 管理コンソールのオンラインヘルプを参照してください。

表4-14 プロジェクトツールの作業の説明

作業	説明
プロジェクトを作成または複製します。	新しいプロジェクトを作成するか、新しいプロジェクトに必要な属性が酷似している既存のプロジェクトがある場合は、そのプロジェクトを複製します。
プロジェクト属性の変更または表示します。	既存のプロジェクト属性を表示または変更します。
プロジェクトを削除します。	不要になったプロジェクトを削除します。

## プロジェクトでユーザーおよびリソースを管理する

ユーザーおよびグループを「プロジェクト」(システム使用率またはリソースアロケーションチャージバックの基礎として使用される、作業負荷の構成要素を示す識別子)のメンバーにすることができます。プロジェクトは、Solaris リソース管理機能の一部で、システムリソースの管理に使用されます。

Solaris 9 リリースを実行するシステムにログインするには、ユーザーはプロジェクトのメンバーになる必要があります。デフォルトでは、ユーザーは Solaris 9 リリースのインストール時に `group.staff` プロジェクトのメンバーになり、ほかのプロジェクト情報は設定されていません。

ユーザーのプロジェクト情報は、`/etc/project` ファイルに格納され、このファイルは、ローカルシステム(ファイル)、NIS ネームサービス、または LDAP ディレクトリサービスに保存できます。Solaris 管理コンソールを使用すると、プロジェクト情報を管理できます。

/etc/project ファイルは、ユーザーがログインするために必要ですが、プロジェクトを使用しない場合は管理する必要はありません。

プロジェクトの使用方法および設定方法については、『Oracle Solaris のシステム管理 (Oracle Solaris コンテナ: 資源管理と Oracle Solaris ゾーン)』の第2章「プロジェクトとタスク (概要)」を参照してください。

## ユーザーの作業環境のカスタマイズ

ユーザーのホームディレクトリの設定には、ユーザーのログインシェルにユーザー初期設定ファイルを提供することも含まれます。ユーザー初期設定ファイルは、ユーザーがシステムにログインしたあとにユーザーのために作業環境を設定するシェルスクリプトです。基本的にシェルスクリプトで行える処理はどれもユーザー初期設定ファイルで実行できます。主に、ユーザーの検索パス、環境変数、ウィンドウ機能の環境など、ユーザーの作業環境を定義します。次の表に示すように、各ログインシェルには、1つまたは複数の、固有のユーザー初期設定ファイルがあります。

表 4-15 Bourne、C、Korn シェルのユーザー初期設定ファイル

シェル	初期設定ファイル	目的
Bourne	\$HOME/.profile	ログイン時のユーザー環境を定義します
C	\$HOME/.cshrc	すべてのCシェルに対するユーザー環境の定義で、ログインシェルのあとに起動されます
	\$HOME/.login	ログイン時のユーザー環境を定義します
Korn	\$HOME/.profile	ログイン時のユーザー環境を定義します
	\$HOME/\$ENV	ログイン時のユーザー環境の定義で、Korn シェルの ENV 環境変数によって指定されます

表 4-16 デフォルトのユーザー初期設定ファイル

シェル	デフォルトファイル
C	/etc/skel/local.login
	/etc/skel/local.cshrc
Bourne または Korn	/etc/skel/local.profile

これらのファイルを変更して、すべてのユーザーに共通の作業環境を提供する標準のファイルセットを作成できます。異なるタイプのユーザーごとに作業環境を提供する場合にも、これらのファイルを利用できます。ユーザーツールを使って、カス

カスタマイズしたユーザー初期設定ファイルを作成することはできませんが、指定された「スケルトン」ディレクトリにあるユーザー初期設定ファイルでユーザーのホームディレクトリを生成することができます。この作業を行うためには、ユーザーテンプレートツールを使ってユーザーテンプレートを作成したあと、コピーするユーザー初期設定ファイルを保存するスケルトンディレクトリを指定します。

異なるタイプのユーザーにユーザー初期設定ファイルを作成する手順については、[125 ページの「ユーザー初期設定ファイルをカスタマイズする方法」](#)を参照してください。

ユーザーツールで新しいユーザーアカウントを作成して、ホームディレクトリを作成するオプションを選択すると、選択したログインシェルに合わせて次のファイルが作成されます。

表 4-17 ユーザーの追加時にユーザーツールによって作成されるファイル

シェル	作成されるファイル
C	/etc/skel/local.cshrc ファイルと /etc/skel/local.login ファイルがユーザーのホームディレクトリにコピーされ、それぞれ、.cshrc と .login という名前に変更されます。
Bourne と Korn	/etc/skel/local.profile ファイルがユーザーのホームディレクトリにコピーされ、.profile という名前に変更されます。

## Bash シェルのカスタマイズ

Bash シェルをカスタマイズする場合は、ホームディレクトリにある .bashrc ファイルに必要な情報を追加します。Oracle Solaris のインストール時に作成される初期ユーザーは、PATH、MANPATH、およびコマンドプロンプトを設定するための .bashrc ファイルを持っています。詳細については、bash (1) のマニュアルページを参照してください。

## サイト初期設定ファイルの使用方法

ユーザー初期設定ファイルは、管理者とユーザーの両者によってカスタマイズできます。この重要な作業は、「サイト初期設定ファイル」と呼ばれる、大域的に配布されるユーザー初期設定ファイルによって実現します。サイト初期設定ファイルを使用して、ユーザーの作業環境に新しい機能を絶えず導入でき、しかもユーザーはユーザー初期設定ファイルをカスタマイズすることもできます。

ユーザー初期設定ファイルでサイト初期設定ファイルを参照するとき、サイト初期設定ファイルに対して行なったすべての更新は、ユーザーがシステムにログインするときかユーザーが新しいシェルを起動するとき自動的に反映されます。サイト初

期設定ファイルは、ユーザーを追加したときにはなかったサイト全体の変更をユーザーの作業環境に配布するよう設計されています。

ユーザー初期設定ファイルでできるカスタマイズは、サイト初期設定ファイルでも行えます。これらのファイルは通常はサーバー、またはサーバーのグループにあり、ユーザー初期設定ファイルの最初の行に現れます。また、各サイト初期設定ファイルは、それを参照するユーザー初期設定ファイルと同じ型のシェルスクリプトでなければなりません。

C シェルユーザー初期設定ファイル内でサイト初期設定ファイルを参照するには、ユーザー初期設定ファイルの先頭に次のような行を記述します。

```
source /net/machine-name/export/site-files/site-init-file
```

Bourne シェルまたは Korn シェルユーザー初期設定ファイル内でサイト初期設定ファイルを参照するには、ユーザー初期設定ファイルの先頭に次のような行を記述します。

```
. /net/machine-name/export/site-files/site-init-file
```

## ローカルシステムへの参照を避ける

ユーザー初期設定ファイルに、ローカルシステムへの個々の参照を追加しないでください。ユーザー初期設定ファイルの設定は、ユーザーがどのシステムにログインしても有効になる必要があるからです。

次に例を示します。

- ユーザーのホームディレクトリをネットワーク上の任意の位置で利用できるようにするには、常に環境変数の値 `$HOME` を使用してホームディレクトリを参照してください。たとえば、`/export/home/username/bin` ではなく `$HOME/bin` を使用してください。`$HOME` 変数は、ユーザーが別のシステムにログインする場合でも有効で、その場合ホームディレクトリは自動マウントされます。
- ローカルディスクのファイルにアクセスするには、`/net/system-name/directory-name` などの大域パス名を使用してください。システムが AutoFS を実行していれば、`/net/system-name` で参照されるディレクトリはすべてユーザーがログインする任意のシステムに自動的にマウントできます。

## シェル機能

次の表に、各シェルの基本的な機能を示します。ユーザー初期設定ファイルを作成するときどのシェルがどのような機能を提供するか参考にしてください。



表 4-18 Bourne、C、Korn シェルの基本機能

機能	Bourne	C	Korn
UNIX で標準シェルとして知られる	該当する	該当しない	該当しない
Bourne シェルと互換性がある構文	-	該当しない	該当する
ジョブ制御	該当する	該当する	該当する
履歴リスト	該当しない	該当する	該当する
コマンド行の編集	該当しない	該当する	該当する
別名(エイリアス)	該当しない	該当する	該当する
ログインディレクトリの1文字省略形	該当しない	該当する	該当する
ファイルの上書き保護 (noclobber)	該当しない	該当する	該当する
CTRL+D 無視 (ignoreeof)	該当しない	該当する	該当する
拡張 cd コマンド	該当しない	該当する	該当する
.profile とは別の初期設定ファイル	該当しない	該当する	該当する
ログアウトファイル	該当しない	該当する	なし

## シェル環境

シェルは、login プログラム、システム初期設定ファイル、ユーザー初期設定ファイルによって定義される変数を含む環境を管理します。また、一部の変数はデフォルトで定義されます。

シェルには次の2種類の変数があります。

- 環境変数 - シェルによって生成されるすべてのプロセスにエクスポートされる変数。環境変数の設定値は env コマンドで表示できます。PATH などを含む環境変数の一部が、シェルそのものの動作に影響を与えます。
- シェル (ローカル) 変数 - 現在使用中のシェルだけに関係する変数。C シェルの場合は、シェル変数は環境変数と特別に対応しています。これらのシェル変数は user、term、home、path です。シェル変数は、対応する環境変数の値によって初期設定されます。

C シェルでは、小文字を使って set コマンドでシェル変数を設定し、大文字を使って setenv コマンドで環境変数を設定します。シェル変数を設定すると、対応する環境変数が設定されます。同様に、環境変数を設定すると、対応するシェル変数も変更されます。たとえば、path シェル変数を新しいパスで更新すると、シェルは PATH 環境変数も新しいパスで更新します。

Bourne、Korn の両シェルでは、任意の大文字の変数名を使って、シェル変数と環境変数の両方を設定できます。また、その後に行われるコマンドに対して変数を有効にするために、`export` コマンドを使用します。

すべてのシェルで、シェル変数と環境変数は一般的に大文字の名前で参照します。

ユーザー初期設定ファイルでは、ユーザーのシェル環境を、あらかじめ定義された変数の値を変更するか、変数を追加することによってカスタマイズできます。次の表に、ユーザー初期設定ファイルで環境変数を設定する方法を示します。

表 4-19 ユーザー初期設定ファイルでの環境変数の設定方法

シェルタイプ	ユーザー初期設定ファイルに追加する行
C シェル	<code>setenv VARIABLE value</code> 例: <code>setenv MAIL /var/mail/ripley</code>
Bourne または Korn シェル	<code>VARIABLE=value ; export VARIABLE</code> 例: <code>MAIL=/var/mail/ripley;export MAIL</code>

次の表では、ユーザー初期設定ファイルでカスタマイズできる環境変数とシェル変数について説明します。各シェルで使用される変数の詳細は、[sh\(1\)](#)、[ksh\(1\)](#)、[csh\(1\)](#) の各マニュアルページを参照してください。

表 4-20 シェル変数と環境変数の説明

変数	説明
<code>CDPATH</code> (C シェルでは <code>cdpath</code> )	<code>cd</code> コマンドで使用する変数を設定します。 <code>cd</code> コマンドの対象ディレクトリを相対パス名で指定すると、 <code>cd</code> コマンドは対象ディレクトリをまず現在のディレクトリ (.) 内で検索します。対象ディレクトリが見つからない場合、 <code>CDPATH</code> 変数内のパス名のリストが順に検索され、見つかると、ディレクトリの変更が行われます。 <code>CDPATH</code> で対象ディレクトリが見つからなかった場合は、現在の作業ディレクトリは変更されません。たとえば、 <code>CDPATH</code> 変数が <code>/home/jean</code> に設定されており、 <code>/home/jean</code> の下に <code>bin</code> と <code>rje</code> の 2 つのディレクトリがあるとします。 <code>/home/jean/bin</code> ディレクトリ内で <code>cd rje</code> と入力した場合、フルパスを指定していなくても、ディレクトリが <code>/home/jean/rje</code> に変更されます。
<code>history</code>	C シェルの履歴を設定します。
<code>HOME</code> (C シェルでは <code>home</code> )	ユーザーのホームディレクトリへのパスを設定します。
<code>LANG</code>	ロケールを設定します。

表 4-20 シェル変数と環境変数の説明 (続き)

変数	説明
LOGNAME	現在ログインしているユーザーの名前を設定します。LOGNAME のデフォルト値は、passwd ファイルに指定されているユーザー名にログインプログラムによって自動的に設定されます。この変数は参照用のみ使用し、設定を変更してはいけません。
LPDEST	ユーザーのデフォルトプリンタを設定します。
MAIL	ユーザーのメールボックスへのパスを設定します。
MANPATH	アクセスできるマニュアルページの階層を設定します。
PATH (C シェルでは path)	<p>ユーザーがコマンドを入力したときに実行するプログラムについて、シェルが検索するディレクトリを順番に指定します。ディレクトリが検索パス上にない場合は、ユーザーはコマンドの絶対パス名を入力しなければなりません。</p> <p>デフォルトの PATH は、ログインプロセスで .profile (Bourne または Korn シェル) あるいは .cshrc (C シェル) の指定どおりに自動的に定義され、設定されます。</p> <p>検索パスの順序が重要です。同じコマンドが異なる場所にそれぞれ存在するときは、最初に見つかったコマンドが使用されます。たとえば、PATH が Bourne および Korn シェル構文で PATH=/bin:/usr/bin:/usr/sbin:\$HOME/bin のように定義されていて、sample というファイルが /usr/bin と /home/jean/bin の両方にあるものとします。ユーザーが sample コマンドを、その絶対パスを指定しないで入力した場合は、/usr/bin で見つかったバージョンが使用されます。</p>
prompt	C シェルのシェルプロンプトを設定します。
PS1	Bourne または Korn シェルのシェルプロンプトを設定します。
SHELL (C シェルでは shell)	make、vi、その他のツールが使うデフォルトシェルを設定します。
TERMINFO	<p>代替の terminfo データベースが保存されているディレクトリに名前を付けます。/etc/profile または /etc/.login ファイルで TERMINFO 変数を使用します。詳細は、<a href="#">terminfo(4)</a> のマニュアルページを参照してください。</p> <p>TERMINFO 環境変数を設定すると、システムはまずユーザーが定義した TERMINFO パスを調べます。ユーザーが定義した TERMINFO ディレクトリ内に端末の定義が見つからなかった場合は、システムはデフォルトディレクトリ /usr/share/lib/terminfo で定義を探します。どちらにも見つからなかった場合、端末は dumb として定義されます。</p>
TERM (C シェルでは term)	端末を設定します。この変数は /etc/profile または /etc/.login ファイルで再設定する必要があります。ユーザーがエディタを起動すると、システムはこの環境変数で定義される名前と同じ名前のファイルを探します。システムは、TERMINFO が参照するディレクトリ内を探して端末の特性を知ります。

表 4-20 シェル変数と環境変数の説明 (続き)

変数	説明
TZ	時間帯を設定します。時間帯は、たとえば <code>ls -l</code> コマンドで日付を表示する場合に使われます。TZ をユーザーの環境に設定しないと、システムの設定が使用されます。設定する場合、グリニッジ標準時が使用されます。

## PATH 変数

ユーザーが絶対パス名でコマンドを入力すると、シェルはそのパス名を使ってコマンドを探します。ユーザーがコマンド名しか指定しないと、シェルは PATH 変数で指定されているディレクトリの順でコマンドを探します。コマンドがいずれかのディレクトリで見つければ、シェルはコマンドを実行します。

デフォルトのパスがシステムで設定されますが、大部分のユーザーはそれを変更してほかのコマンドディレクトリを追加します。環境の設定や、正しいバージョンのコマンドまたはツールへのアクセスに関連して発生するユーザーの問題の多くは、パス定義の誤りが原因です。

## パスの設定のガイドライン

次に、効率的な PATH 変数を設定するためのガイドラインをいくつか示します。

- セキュリティーが特に問題とならない場合は、現在の作業ディレクトリ (.) をパスの最初に指定します。しかし、現在の作業ディレクトリをパスに入れると、セキュリティ上の問題となることがあり、特にスーパーユーザーにとって問題となります。
- 検索パスはできるだけ短くしておきます。シェルはパスで各ディレクトリを探します。コマンドが見つからないと、検索に時間がかかり、システムのパフォーマンスが低下します。
- 検索パスは左から右に読まれるため、通常使用するコマンドをパスの初めの方に指定するようにしてください。
- パスでディレクトリが重複していないか確認してください。
- 可能であれば、大きなディレクトリの検索は避けてください。大きなディレクトリはパスの終わりに指定します。
- NFS サーバーが応答しないときに「ハング」の可能性が小さくなるように、NFS がマウントするディレクトリより前にローカルディレクトリを指定します。この方法によって、不要なネットワークトラフィックも減少します。

## ユーザーのデフォルトパスの設定

次の例は、ユーザーのデフォルトパスを設定する方法を示しています。

次の例は、ユーザーのデフォルトパスがホームディレクトリとほかの NFS マウントディレクトリを含むように設定する方法を示しています。現在の作業ディレクトリはパスの最初に指定されます。C シェルユーザー初期設定ファイルでは、次の行を追加してください。

```
set path=(. /usr/bin $HOME/bin /net/glrr/files1/bin)
```

Bourne シェルまたは Korn シェルユーザー初期設定ファイルでは、次の行を追加してください。

```
PATH=./usr/bin:/$HOME/bin:/net/glrr/files1/bin
export PATH
```

## ロケール変数

LANG と LC の各環境変数は、ロケール固有の変換と表記をシェルに指定します。指定できる変換と表記には、時間帯や照合順序、および日付、時間、通貨、番号の書式などがあります。さらに、ユーザー初期設定ファイルで `stty` コマンドを使って、端末のセッションが複数バイト文字をサポートするかどうかを指定できます。

LANG 変数は、ロケールのすべての変換と表記を設定します。ロケールの各種の設定を個別に行うには、次の LC 変数を使用します。

LC\_COLLATE、LC\_CTYPE、LC\_MESSAGES、LC\_NUMERIC、LC\_MONETARY、および LC\_TIME です。

次の表に、LANG と LC 環境変数の値の一部を示します。

表 4-21 LANG と LC 変数の値

値	ロケール
de_DE.ISO8859-1	ドイツ語
en_US.UTF-8	米国英語 (UTF-8)
es_ES.ISO8859-1	スペイン語
fr_FR.ISO8859-1	フランス語
it_IT.ISO8859-1	イタリア語
ja_JP.eucJP	日本語 (EUC)
ko_KR.EUC	韓国語 (EUC)
sv_SE.ISO8859-1	スウェーデン語
zh_CN.EUC	簡体字中国語 (EUC)
zh_TW.EUC	繁体字中国語 (EUC)

サポートされるロケールの詳細については、『国際化対応言語環境の利用ガイド』を参照してください。

#### 例4-1 LANG変数によるロケールの設定

次の例は、LANG環境変数を使ってロケールを設定する方法を示しています。Cシェルユーザー初期設定ファイルでは、次の行を追加してください。

```
setenv LANG de_DE.ISO8859-1
```

Bourne シェルまたは Korn シェルユーザー初期設定ファイルでは、次の行を追加してください。

```
LANG=de_DE.ISO8859-1; export LANG
```

## デフォルトのファイルアクセス権 (umask)

ファイルまたはディレクトリを作成したときに設定されるデフォルトのファイルアクセス権は、「ユーザーマスク」によって制御されます。ユーザーマスクは、初期設定ファイルで `umask` コマンドによって設定されます。現在のユーザーマスクの値は、`umask` と入力して Return キーを押すと表示できます。

ユーザーマスクは、次の8進値で構成されます。

- 最初の桁でそのユーザーのアクセス権を設定する
- 2桁目でグループのアクセス権を設定する
- 3桁目でその他(「ワールド」とも呼ばれる)のアクセス権を設定する

最初の桁がゼロの場合、その桁は表示されません。たとえば、ユーザーマスクを 022 に設定すると、22 が表示されます。

設定する `umask` の値は、与えたいアクセス権の値を 666 (ファイルの場合) または 777 (ディレクトリの場合) から引きます。引いた残りが `umask` に使用する値です。たとえば、ファイルのデフォルトモードを 644 (rw-r--r--) に変更するとします。このとき 666 と 644 の差 022 が `umask` コマンドの引数として使用する値です。

また、次の表から `umask` 値を決めることもできます。この表は、`umask` の各8進値から作成される、ファイルとディレクトリのアクセス権を示しています。

表4-22 umask 値のアクセス権

umask 8進値	ファイルのアクセス権	ディレクトリアクセス権
0	rw-	rwX
1	rw-	rw-
2	r--	r-x

表 4-22 umask 値のアクセス権 (続き)

umask 8 進値	ファイルのアクセス権	ディレクトリアクセス権
3	r--	r--
4	-w-	-wx
5	-w-	-w-
6	--x	--x
7	--- (なし)	--- (なし)

次の例は、デフォルトのファイルアクセス権を `rw-rw-rw-` に設定します。

```
umask 000
```

## ユーザー初期設定ファイルとサイト初期設定ファイルの例

ここでは、ユーザー自身の初期設定ファイルのカスタマイズを始める際に使用するユーザー初期設定ファイルとサイト初期設定ファイルの例を示します。例の中のシステム名やパス名は、実際のサイトに合わせて置き換えてください。

### 例 4-2 .profile ファイル

```
(Line 1) PATH=$PATH:$HOME/bin:/usr/local/bin:/usr/ccs/bin:.  
(Line 2) MAIL=/var/mail/$LOGNAME  
(Line 3) NNTPSERVER=server1  
(Line 4) MANPATH=/usr/share/man:/usr/local/man  
(Line 5) PRINTER=printer1  
(Line 6) umask 022  
(Line 7) export PATH MAIL NNTPSERVER MANPATH PRINTER
```

1. ユーザーのシェル検索パスを設定する
2. ユーザーのメールファイルへの検索パスを設定する
3. ユーザーの Usenet ニュースサーバーを設定する
4. マニュアルページへのユーザーの検索パスを設定する
5. ユーザーのデフォルトプリンタを設定する
6. ユーザーのデフォルトのファイル作成アクセス権を設定する
7. 指定された環境変数をエクスポートする

### 例 4-3 .cshrc ファイル

```
(Line 1) set path=($PATH $HOME/bin /usr/local/bin /usr/ccs/bin)  
(Line 2) setenv MAIL /var/mail/$LOGNAME  
(Line 3) setenv NNTPSERVER server1  
(Line 4) setenv PRINTER printer1
```

## 例4-3 .cshrc ファイル (続き)

```
(Line 5) alias h history
(Line 6) umask 022
(Line 7) source /net/server2/site-init-files/site.login
```

1. ユーザーのシェル検索パスを設定する
2. ユーザーのメールファイルへの検索パスを設定する
3. ユーザーの Usenet ニュースサーバーを設定する
4. ユーザーのデフォルトプリンタを設定する
5. history コマンドの別名を作成する。これにより、h と入力するだけで history コマンドを実行できる
6. ユーザーのデフォルトのファイル作成アクセス権を設定する
7. 指定されたサイト初期設定ファイルを読み込む

## 例4-4 サイト初期設定ファイル

次のサイト初期設定ファイルの例では、ユーザーは特定のバージョンのアプリケーションを選択できます。

```
# @(#)site.login
main:
echo "Application Environment Selection"
echo ""
echo "1. Application, Version 1"
echo "2. Application, Version 2"
echo ""
echo -n "Type 1 or 2 and press Return to set your
application environment: "

set choice = $<

if ( $choice !~ [1-2] ) then
goto main
endif

switch ($choice)

case "1":
setenv APPHOME /opt/app-v.1
breaksw

case "2":
setenv APPHOME /opt/app-v.2
endsw
```

次のようにして、このサイト初期設定ファイルをユーザーの .cshrc ファイル (C シェルユーザーのみ使用可能) で参照させることができます。

```
source /net/server2/site-init-files/site.login
```



**例 4-4** サイト初期設定ファイル (続き)

この行では、サイト初期設定ファイルは `site.login` という名前で、`server2` という名前のサーバー上にあります。また、自動マウンタがユーザーのシステムで実行されていることを前提としています。



# ◆◆◆ 第 5 章

## ユーザーアカウントとグループの管理 (手順)

---

この章では、ユーザーアカウントとグループを設定し、管理する手順について説明します。

ユーザーアカウントとグループの設定および管理手順については、次の節を参照してください。

- 123 ページの「ユーザーアカウントの設定 (作業マップ)」
- 134 ページの「ユーザーアカウントの管理 (作業マップ)」

ユーザーアカウントとグループの設定および管理手順については、123 ページの「ユーザーアカウントの設定 (作業マップ)」を参照してください。

ユーザーアカウントとグループの管理の概要については、第 4 章「ユーザーアカウントとグループの管理 (概要)」を参照してください。

### ユーザーアカウントの設定 (作業マップ)

作業	説明	参照先
ユーザー情報を収集します。	標準の書式を使ってユーザー情報を収集すると、情報を整理しやすくなります。	124 ページの「ユーザー情報の収集」
ユーザー初期設定ファイルをカスタマイズします。	新規ユーザーに一貫した環境を提供できるようにユーザー初期設定ファイル (.cshrc、.profile、.login) を設定します。	125 ページの「ユーザー初期設定ファイルをカスタマイズする方法」

作業	説明	参照先
グループを追加します。	Oracle Solaris コマンド行インタフェースツールを使用して、グループを追加します。	127 ページの「Solaris 管理コンソールのグループツールを使ってグループを追加する方法」 129 ページの「コマンド行ツールを使ってグループやユーザーを追加する」
ユーザーを追加します。	次のツールを使ってユーザーを追加できます。  Solaris 管理コンソールのユーザーツール  Solaris コマンド行インタフェースツール	128 ページの「Solaris 管理コンソールのユーザーツールを使ってユーザーを追加する方法」 129 ページの「コマンド行ツールを使ってグループやユーザーを追加する」
ユーザーテンプレートを設定します。	類似したユーザープロパティをすべて手動で追加する必要がないように、ユーザーテンプレートを作成できます。	Solaris 管理コンソールオンラインヘルプ
ユーザーへの権限または役割を追加します。	特定のコマンドまたは操作を実行できるようにユーザーに権限または役割を追加します。	Solaris 管理コンソールオンラインヘルプ
ユーザーのホームディレクトリを共有します。	ユーザーのシステムからそのディレクトリをリモートでマウントして、ユーザーのホームディレクトリを共有できるようにします。	131 ページの「ユーザーのホームディレクトリを共有する方法」
ユーザーのホームディレクトリをマウントします。	ユーザーのホームディレクトリをユーザーのシステムにマウントします。	132 ページの「ユーザーのホームディレクトリをマウントする方法」

## ユーザー情報の収集

ユーザーアカウントを追加する前に、ユーザーに関する情報を次のような書式で記録しておくことができます。

項目	説明
ユーザー名:	
役割名	

項目	説明
プロフィールまたは承認	
UID	
一次グループ	
二次グループ	
コメント:	
デフォルトシェル	
パスワードの状態と有効期限	
ホームディレクトリのパス名	
マウント方法	
ホームディレクトリのアクセス権	
メールサーバー	
所属部署	
部署管理者	
管理者	
従業員名	
役職	
資格	
従業員番号	
開始日	
メール別名への追加	
デスクトップシステム名	

## ▼ ユーザー初期設定ファイルをカスタマイズする方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 各タイプのユーザー用にスケルトンディレクトリを作成します。

```
# mkdir /shared-dir/skel/user-type
```

*shared-dir* ネットワーク上の別のシステムで利用できるディレクトリの名前。

*user-type* ユーザーのタイプに応じて初期設定ファイルを格納するディレクトリ  
の名前。

- 3 デフォルトのユーザー初期設定ファイルを、異なるタイプのユーザー用に作成したディレクトリにコピーします。

```
# cp /etc/skel/local.cshrc /shared-dir/skel/user-type/.cshrc
```

```
# cp /etc/skel/local.login /shared-dir/skel/user-type/.login
```

```
# cp /etc/skel/local.profile /shared-dir/skel/user-type/.profile
```

---

注-アカウントにプロファイルが割り当てられている場合、プロファイルに割り当てられた(セキュリティ属性付きの)コマンドを使用するために、ユーザーは特別なバージョンのシェルであるプロファイルシェルを起動する必要があります。シェルの種類に合わせて、`pfsh` (Bourne シェル)、`pfsh` (C シェル)、および `pfksh` (Korn シェル) の3つの「プロファイルシェル」があります。プロファイルシェルについては、『Solarisのシステム管理(セキュリティサービス)』の「役割によるアクセス制御(概要)」を参照してください。

---

- 4 各ユーザータイプ用にユーザー初期設定ファイルを編集し、必要に応じてカスタマイズします。

ユーザー初期設定ファイルをカスタマイズする方法については、[110 ページ](#)の「ユーザーの作業環境のカスタマイズ」を参照してください。

- 5 ユーザー初期設定ファイルのアクセス権を設定します。

```
# chmod 744 /shared-dir/skel/user-type/.*
```

- 6 ユーザー初期設定ファイルのアクセス権が正しいことを確認します。

```
# ls -la /shared-dir/skel/*
```

### 例 5-1 ユーザー初期設定ファイルをカスタマイズする

次の例では、特定のタイプのユーザー向けの、`/export/skel/enduser` ディレクトリにある C シェルユーザー初期設定ファイルをカスタマイズします。`.cshrc` ファイルの例については、[例 4-3](#) を参照してください。

```
# mkdir /export/skel/enduser
```

```
# cp /etc/skel/local.cshrc /export/skel/enduser/.cshrc
```

(Edit *.cshrc* file)

```
# chmod 744 /export/skel/enduser/.*
```

## ▼ Solaris 管理コンソールのグループツールを使ってグループを追加する方法

グループを追加するときに既存のユーザーをグループに追加できます。また、グループだけを追加し、その後でユーザーを追加するときに既存のユーザーをそのグループに追加することもできます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 Solaris 管理コンソールを起動します。  

```
# /usr/sadm/bin/smc &
```

Solaris 管理コンソールの起動方法については、47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」または 54 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法」を参照してください。
- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。
- 4 (省略可能)ネームサービス環境に適したツールボックスを選択します。
- 5 「システムの構成」アイコンをクリックします。
- 6 「ユーザー」アイコンをクリックし、スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを入力します。
- 7 「グループ」アイコンをクリックします。「アクション」メニューから「グループを追加」を選択します。  
コンテキストヘルプを使用して、グループをシステムに追加します。
- 8 「グループ ID」の下にある「グループ名」プロンプトで、グループ名を指定します。  
たとえば、mechanoids と指定します。
- 9 「グループ ID 番号」プロンプトで、グループ番号を指定します。  
たとえば、GID 101 と指定します。
- 10 「了解(OK)」をクリックします。

## ▼ Solaris 管理コンソールのユーザーツールを使ってユーザーを追加する方法

Solaris 管理コンソールのユーザーツールを使ってユーザーを追加するには、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 Solaris 管理コンソールを起動します。  

```
# /usr/sadm/bin/smc &
```

Solaris 管理コンソールの起動方法については、47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」または 54 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法」を参照してください。
- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。
- 4 (省略可能) ネームサービス環境に適したツールボックスを選択します。
- 5 「システムの構成」アイコンをクリックします。
- 6 「ユーザー」アイコンをクリックし、スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを入力します。
- 7 「ユーザー」アイコンをクリックします。  
コンテキストヘルプを使用して、ユーザーをシステムに追加します。
- 8 「アクション」メニューから「ユーザーを追加」→「ウィザードを使用」を選択します。  
次の手順に進むときは「次へ」をクリックしてください。
  - a. 「ユーザー名」プロンプトで、ユーザー名またはログイン名を指定します。  
たとえば、kryten と指定します。
  - b. (省略可能) 「正式名」プロンプトで、ユーザーのフルネームを指定します。  
たとえば、kryten series 3000 と指定します。



- c. (省略可能)「備考欄」プロンプトで、このユーザーの詳細な説明を入力します。
- d. 「ユーザー ID 番号」プロンプトで、ユーザー ID を入力します。  
たとえば、1001 と入力します。
- e. 「ユーザーは最初のログイン時にこのパスワードを使用する必要があります」オプションを選択します。
- f. 「パスワード」プロンプトで、ユーザーのパスワードを入力します。
- g. 「パスワードを確認」プロンプトで、パスワードを確認します。
- h. ユーザーの一次グループを選択します。  
たとえば、mechanoids と指定します。
- i. 「サーバー」と「パス」の各プロンプトでデフォルトを受け入れることにより、ユーザーのホームディレクトリを作成します。
- j. メールサーバーを指定します。
- k. これまでに入力した情報を確認し、必要なら前に戻って情報を訂正します。
- l. 「完了」をクリックします。

## コマンド行ツールを使ってグループやユーザーを追加する

この節では、コマンド行ツールを使ってユーザーやグループを追加する例をいくつか紹介します。

### groupadd および useradd コマンドを使ってグループやユーザーを追加する

次の例では、groupadd および useradd の各コマンドを使って、グループ scutters やユーザー scutter1 をローカルシステムのファイルに追加します。なお、これらのコマンドは、ネームサービス環境でユーザーを管理する場合には使用できません。

```
# groupadd -g 102 scutters
# useradd -u 1003 -g 102 -d /export/home/scutter1 -s /bin/csh \
-c "Scutter 1" -m -k /etc/skel scutter1
64 blocks
```

詳細は、[groupadd\(1M\)](#) および [useradd\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## smgroup および smuser コマンドを使ってグループやユーザーを追加する

次の例では、smgroup および smuser の各コマンドを使って、グループ gelfs やユーザー camille をホスト starlite の NIS ドメイン solar.com に追加します。

```
# /usr/sadm/bin/smgroup add -D nis:/starlitesolar.com -- -g 103 -n gelfs
# /usr/sadm/bin/smuser add -D nis:/starlite/solar.com -- -u 1004
-n camille -c "Camille G." -d /export/home/camille -s /bin/csh -g gelfs
```

詳細は、[smgroup\(1M\)](#) および [smuser\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## Solaris 管理コンソールによるホームディレクトリの設定

Solaris 管理コンソールを使用してユーザーのホームディレクトリを管理するときには、次のことに注意してください。

- ユーザーツールの「ユーザーを追加」ウィザードを使用してユーザーアカウントを追加し、ユーザーのホームディレクトリを `/export/home/username` として指定すると、ホームディレクトリが自動マウントされるように自動的に設定され、次のエントリが `passwd` ファイルに追加されます。

```
/home/username
```

- ユーザーツールを使用して、ホームディレクトリを自動マウントしないユーザーアカウントを設定するには、この機能を無効にするユーザーアカウントのテンプレートを設定し、そのテンプレートを使ってユーザーを追加するほかに方法はありません。「ユーザーを追加」ウィザードでこの機能を無効にすることはできません。
- `-x autohome=N` オプションを指定して `smuser add` コマンドを使用すると、ユーザーのホームディレクトリを自動マウントしないでユーザーを追加できます。ただし、`smuser delete` コマンドには、ユーザーを追加した後でホームディレクトリを削除するオプションはありません。その場合は、ユーザーツールを使用して、ユーザーとユーザーのホームディレクトリを削除する必要があります。

## ▼ ユーザーのホームディレクトリを共有する方法

ユーザーのホームディレクトリを共有するには、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 次のように入力して、mountd デーモンが動作していることを確認します。

このリリースでは、mountd デーモンは NFS サーバーサービスの一環として起動されます。mountd デーモンが動作しているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# svcs network/nfs/server
STATE          STIME      FMRI
online         Aug_26     svc:/network/nfs/server:default
```

- 3 mountd デーモンが動作していない場合は、**mountd** デーモンを起動します。

```
# svcadm network/nfs/server
```

- 4 システム上で共有されているファイルシステムをリスト表示します。

```
# share
```

- 5 ユーザーのホームディレクトリを含むファイルシステムがすでに共有されているかどうかによって、次のいずれかの手順を選択します。

- a. ユーザーのホームディレクトリがすでに共有されている場合、**手順 8**へ進みます。

- b. ユーザーのホームディレクトリが共有されていない場合、**手順 6**へ進みます。

- 6 /etc/dfs/dfstab ファイルを編集し、次の行を追加します。

```
share -F nfs /file-system
```

*/file-system* は、共有するユーザーのホームディレクトリを含むファイルシステムです。慣例上、このファイルシステムは /export/home になります。

- 7 /etc/dfs/dfstab ファイルで指定されたファイルシステムを共有します。

```
# shareall -F nfs
```

このコマンドは、/etc/dfs/dfstab ファイルにある share コマンドをすべて実行するので、システムをリブートする必要はありません。

- 8 ユーザーのホームディレクトリが共有されていることを確認します。

```
# share
```

### 例 5-2 ユーザーのホームディレクトリを共有する

次の例は、/export/home ディレクトリの共有方法を示しています。

```
# svcs network/nfs/server
# svcadm network/nfs/server
# share
# vi /etc/dfs/dfstab

(The line share -F nfs /export/home is added.)
# shareall -F nfs
# share
-                /usr/dist                ro        ""
-                /export/home/user-name    rw        ""
```

参照 ユーザーのホームディレクトリがユーザーのシステム上にない場合、それが配置されているシステムから、ユーザーのホームディレクトリをマウントしなければなりません。詳細な手順については、[132 ページの「ユーザーのホームディレクトリをマウントする方法」](#)を参照してください。

## ▼ ユーザーのホームディレクトリをマウントする方法

ホームディレクトリを自動マウントする方法については、『[Solaris のシステム管理 \(ネットワークサービス\)](#)』の「[autofs 管理作業の概要](#)」を参照してください。

- 1 ユーザーのホームディレクトリが共有されていることを確認します。  
詳細は、[131 ページの「ユーザーのホームディレクトリを共有する方法」](#)を参照してください。
- 2 ユーザーのシステムにスーパーユーザーとしてログインします。
- 3 /etc/vfstab ファイルを編集して、次のようなユーザーのホームディレクトリ用のエントリを作成します。

```
system-name:/export/home/user-name - /export/home/username nfs - yes rw
system-name                ホームディレクトリが配置されているシステムの名前。
```

`/export/home/username` 共有されるユーザーのホームディレクトリの名前。慣例上、`/export/home/username`にユーザーのホームディレクトリが含まれます。ただし、別のファイルシステムを使用しても構いません。

- エントリに必要な可変部分。

`/export/home/username` ユーザーのホームディレクトリがマウントされるディレクトリの名前。

`/etc/vfstab` ファイルにエントリを追加する方法については、『Solaris のシステム管理(デバイスとファイルシステム)』の「ファイルシステムのマウント」を参照してください。

- 4 ユーザーのホームディレクトリのマウント先を作成します。

```
# mkdir -p /export/home/username
```

- 5 ユーザーのホームディレクトリをマウントします。

```
# mountall
```

現在の `vfstab` ファイルにあるすべてのエントリ(このファイルの「mount at boot」フィールドが `yes` に設定されている)がマウントされます。

- 6 ホームディレクトリがマウントされているかどうかを確認します。

```
# mount | grep username
```

### 例 5-3 ユーザーのホームディレクトリをマウントする

次の例は、ユーザー `ripley` のホームディレクトリをマウントする方法を示しています。

```
# vi /etc/vfstab
```

```
(The line venus:/export/home/ripley - /export/home/ripley
nfs - yes rw is added.)
```

```
# mkdir -p /export/home/ripley
```

```
# mountall
```

```
# mount
```

```
/ on /dev/dsk/c0t0d0s0 read/write/setuid/intr/largefiles/xattr/onerror=panic/dev=...
/devices on /devices read/write/setuid/dev=46c0000 on Thu Jan 8 09:38:19 2004
/usr on /dev/dsk/c0t0d0s6 read/write/setuid/intr/largefiles/xattr/onerror=panic/dev=...
/proc on /proc read/write/setuid/dev=4700000 on Thu Jan 8 09:38:27 2004
/etc/mnttab on mnttab read/write/setuid/dev=47c0000 on Thu Jan 8 09:38:27 2004
/dev/fd on fd read/write/setuid/dev=4800000 on Thu Jan 8 09:38:30 2004
/var/run on swap read/write/setuid/xattr/dev=1 on Thu Jan 8 09:38:30 2004
/tmp on swap read/write/setuid/xattr/dev=2 on Thu Jan 8 09:38:30 2004
/export/home on /dev/dsk/c0t0d0s7 read/write/setuid/intr/largefiles/xattr/onerror=...
/export/home/ripley on venus:/export/home/ripley remote/read/write/setuid/xattr/dev=...
```

## ユーザーアカウントの管理 (作業マップ)

作業	説明	説明
グループを変更します。	グループツールを使用して、グループ名またはグループ内のユーザーを変更します。	136 ページの「グループを変更する方法」
グループを削除します。	不要な場合には、グループを削除できます。	137 ページの「グループを削除する方法」
ユーザーアカウントを変更します。	<p>ユーザーアカウントを無効にする。</p> <p>将来必要な場合、ユーザーアカウントを一時的に無効にすることができます。</p> <p>ユーザーのパスワードを変更する。</p> <p>ユーザーが忘れた場合、ユーザーのパスワードを変更する必要があります。</p> <p>パスワード有効期限を設定する。</p> <p>ユーザーアカウントツールの「パスワード」オプションメニューを使えば、定期的にユーザーにパスワードを変更させることができます。</p>	<p>138 ページの「ユーザーアカウントを無効にする方法」</p> <p>139 ページの「ユーザーのパスワードを変更する方法」</p> <p>140 ページの「ユーザーアカウントのパスワード有効期限を設定する方法」</p>
ユーザーアカウントを削除します。	不要になった場合には、ユーザーアカウントを削除できます。	141 ページの「ユーザーアカウントを削除する方法」

## ユーザーアカウントを変更する

既存のものと重複するユーザー名や UID 番号を定義しないかぎり、ユーザーアカウントのユーザー名や UID 番号を変更する必要はありません。

2つのユーザーアカウントが、同じユーザー名またはUID番号を持つ場合、次の手順に従ってください。

- 2つのユーザーアカウントが同じUID番号を持つ場合、ユーザーツールを使用して、どちらか一方のアカウントを削除し、もう一度、異なるUID番号で追加します。ユーザーツールを使用して、既存のユーザーアカウントのUID番号を変更することはできません。
- 2つのユーザーアカウントが同じユーザー名を持つ場合、ユーザーツールを使用して、どちらか一方のアカウントを修正し、ユーザー名を変更します。

ユーザーツールを使用してユーザー名を変更する場合、そのユーザーのホームディレクトリが存在すれば、ホームディレクトリの所有者も変更されます。

ユーザーアカウントの中で変更できる情報に、ユーザーのグループメンバーシップがあります。ユーザーの二次グループを追加または削除するには、ユーザーツールの「アクション」メニューから「プロパティ」オプションを選択します。また、グループツールを使ってグループのメンバーリストを直接修正することもできます。

ユーザーアカウントの次の部分も変更できます。

- 備考欄(コメント)
- ログインシェル
- パスワードおよびパスワードオプション
- ホームディレクトリおよびホームディレクトリアクセス
- 権限および役割

## ユーザーアカウントを無効にする

あるユーザーアカウントを一時的に、または永続的に無効にしなければならない場合があるかもしれません。ユーザーアカウントを無効にしたりロックしたりすると、無効なパスワード \*LK\* がユーザーアカウントに割り当てられ、それ以後ログインできなくなります。

もっとも簡単にユーザーアカウントを無効にする方法は、ユーザーツールを使用してアカウントのパスワードをロックすることです。

また、「ユーザープロパティ」画面の「有効期限」フィールドに有効期限を入力して、ユーザーアカウントの有効期間に制限を設けることもできます。

ユーザーアカウントを無効にする別の方法は、パスワード有効期限を設定するか、ユーザーのパスワードを変更することです。

## ユーザーアカウントを削除する

ユーザーツールでユーザーアカウントを削除すると、passwd ファイルと group ファイル内のエントリが自動的に削除されます。また、ユーザーのホームディレクトリとメールディレクトリにあるファイルも削除されます。

## ▼ グループを変更する方法

グループを変更するには、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 Solaris 管理コンソールを起動します。  

```
# /usr/sadm/bin/smc &
```

Solaris 管理コンソールの起動方法については、47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」または 54 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法」を参照してください。
- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。
- 4 (省略可能)ネームサービス環境に適したツールボックスを選択します。
- 5 「システムの構成」アイコンをクリックします。
- 6 「ユーザー」アイコンをクリックします。
- 7 スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを入力します。
- 8 「グループ」アイコンをクリックします。
- 9 変更するグループを選択します。  
たとえば、scutters を選択します。
- 10 「グループ名」テキストボックスで、選択したグループを変更します。作業が終了したら、「了解」をクリックします。  
たとえば、scutters を scutter に変更します。  
これで、scutters グループに含まれていたユーザーがすべて scutter グループに入ります。



## ▼ グループを削除する方法

グループを削除するには、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 Solaris 管理コンソールを起動します。  

```
# /usr/sadm/bin/smc &
```

Solaris 管理コンソールの起動方法については、47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」または 54 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法」を参照してください。
- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。
- 4 (省略可能)ネームサービス環境に適したツールボックスを選択します。
- 5 「システムの構成」アイコンをクリックします。
- 6 「ユーザー」アイコンをクリックします。
- 7 スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを入力します。
- 8 「グループ」アイコンをクリックします。
- 9 削除するグループを選択します。  
たとえば、scutter を選択します。
- 10 ポップアップウィンドウで「了解」をクリックします。  
このグループのメンバーだったすべてのユーザーからグループが削除されます。

## パスワードの管理

ユーザーツールを使用するとパスワードの管理を行えます。このツールには、次のような機能があります。

- ユーザーアカウントに通常のパスワードを指定する
- ユーザーが最初のログイン時にパスワードを作成できるようにする

- ユーザーアカウントを無効にするかロックする
- 有効期限とパスワード有効期限情報を指定する

---

注-パスワード有効期限は、NIS ネームサービスではサポートされません。

---

## パスワード有効期限を設定する

NIS+ または /etc 内のファイルを使用してユーザーアカウント情報を格納する場合は、ユーザーのパスワードにパスワード有効期限を設定できます。Solaris 9 12/02 リリース以降は、LDAP ディレクトリサービスでもパスワードの有効期限がサポートされています。

パスワード有効期限の設定によって、ユーザーに定期的なパスワードの変更を強制したり、あるパスワードを保持するのに必要な最低日数以前にパスワードを変更するのを防止したりできます。不正ユーザーが、古くて使用されていないアカウントを使用して、発覚せずにシステムのアクセス権を得るような場合を防止するために、アカウントが無効になる日付を設定することができます。パスワードの有効期限属性を設定するには、passwd コマンドまたは Solaris 管理コンソールのユーザーツールを使用します。

Solaris 管理コンソールの起動方法については、[47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」](#)を参照してください。

## ▼ ユーザーアカウントを無効にする方法

ユーザーアカウントを無効にする必要がある場合は、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 **Solaris 管理コンソールを起動します。**  

```
# /usr/sadm/bin/smc &
```

Solaris 管理コンソールの起動方法については、[47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」](#)または [54 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法」](#)を参照してください。
- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。

- 4 (省略可能) ネームサービス環境に適したツールボックスを選択します。
- 5 「システムの構成」アイコンをクリックします。
- 6 「ユーザー」アイコンをクリックし、スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを入力します。
- 7 「ユーザー」アイコンをクリックします。
- 8 ユーザーをダブルクリックします。  
たとえば、scutter2 を選択します。
- 9 「基本」タブ機能の「アカウントの有効/無効」セクションで「アカウントはロック状態」オプションを選択します。
- 10 「了解(OK)」をクリックします。

## ▼ ユーザーのパスワードを変更する方法

パスワードを忘れてしまった場合は、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 **Solaris** 管理コンソールを起動します。  

```
# /usr/sadm/bin/smc &
```

Solaris 管理コンソールの起動方法については、[47 ページ](#)の「[スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法](#)」または [54 ページ](#)の「[ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法](#)」を参照してください。
- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。
- 4 (省略可能) ネームサービス環境に適したツールボックスを選択します。
- 5 「システムの構成」アイコンをクリックします。
- 6 「ユーザー」アイコンをクリックします。

- 7 スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを入力します。
- 8 「ユーザー」アイコンをクリックし、新しいパスワードを必要とするユーザーをダブルクリックします。  
たとえば、scutter1 を選択します。
- 9 「パスワード」タブを選択し、「ユーザーは次のログイン時にこのパスワードを使用する必要があります」オプションを選択します。
- 10 ユーザーの新しいパスワードを入力し、「了解」をクリックします。

## ▼ ユーザーアカウントのパスワード有効期限を設定する方法

ユーザーアカウントのパスワード有効期限を設定するには、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 **Solaris** 管理コンソールを起動します。  

```
# /usr/sadm/bin/smc &
```

Solaris 管理コンソールの起動方法については、47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」または 54 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法」を参照してください。
- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。
- 4 (省略可能) ネームサービス環境に適したツールボックスを選択します。
- 5 「システムの構成」アイコンをクリックします。
- 6 「ユーザー」アイコンをクリックし、スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを入力します。
- 7 「ユーザー」アイコンをクリックします。

- 8 ユーザーをダブルクリックし、「パスワードオプション」タブを選択します。  
たとえば、scutter2 を選択します。
- 9 「パスワードオプション」タブを選択します。
- 10 「日数」オプションから該当するパスワードオプションを選択し、「了解」をクリックします。  
たとえば、ユーザーがパスワードを変更しなければならない日付を設定するには、「次のパスワード変更までに必要な日数」を選択します。

## ▼ ユーザーアカウントを削除する方法

ユーザーアカウントを削除するには、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 **Solaris** 管理コンソールを起動します。  

```
# /usr/sadm/bin/smc &
```

Solaris 管理コンソールの起動方法については、47 ページの「スーパーユーザーまたは役割としてコンソールを起動する方法」または 54 ページの「ネームサービス環境で Solaris 管理コンソールを起動する方法」を参照してください。
- 3 ナビゲーション区画の「管理ツール」アイコンの下にある「このコンピュータ」アイコンをクリックします。  
カテゴリのリストが表示されます。
- 4 (省略可能)ネームサービス環境に適したツールボックスを選択します。
- 5 「システムの構成」アイコンをクリックします。
- 6 「ユーザー」アイコンをクリックします。
- 7 スーパーユーザーのパスワードまたは役割のパスワードを入力します。
- 8 「ユーザー」アイコンをクリックします。
- 9 削除するユーザーアカウントをダブルクリックします。  
たとえば、scutter4 を選択します。

- 10 ユーザーアカウントを削除してもよい場合は、ポップアップウィンドウで「削除」をクリックします。  
ユーザーのホームディレクトリとメールボックスの内容を削除するよう指示されます。

## クライアントとサーバーサポートの管理 (概要)

---

この章では、ネットワーク環境でのサーバーとクライアントの管理について説明し、Oracle Solaris OS でサポートされる各システム構成(「システムタイプ」と呼ぶ)に関する情報を紹介します。また、目的に合った最適なシステムを選択するためのガイドラインも示します。

---

注 - Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムがインストールされているシステムでは、`smosservice` および `smdiskless` コマンドを使用できません。これは、ZFS ルートファイルシステムのインストールがサポートされているすべての Solaris リリースでの既知の問題です。

Solaris Flash インストール機能を使用すると、UFS ルートファイルシステムまたは ZFS ルートファイルシステムを実行するシステムをすばやくプロビジョニングできます。詳細は、『Oracle Solaris ZFS 管理ガイド』の「ZFS ルートファイルシステムのインストール (Oracle Solaris フラッシュアーカイブインストール)」を参照してください。

---

この章の内容は次のとおりです。

- 144 ページの「クライアントとサーバーサポートの管理に関する新機能」
- 146 ページの「クライアントとサーバータスクの操作手順」
- 146 ページの「サーバー、クライアント、およびアプライアンスとは」
- 147 ページの「クライアントサポートとは」
- 147 ページの「システムタイプの概要」
- 151 ページの「ディスクレスクライアント管理の概要」

ディスクレスクライアントサポートの管理手順については、第 7 章「ディスクレスクライアントの管理(手順)」を参照してください。

## クライアントとサーバーサポートの管理に関する新機能

この節では、この Solaris リリースで新たに追加または変更されたディスクレスクライアント機能について説明します。Oracle Solaris リリースの新機能の完全な一覧やその説明については、『[Oracle Solaris 10 9/10 の新機能](#)』を参照してください。

### bootadm - p コマンドによるプラットフォーム指定のサポート

bootadm コマンドに、`-p platform` 引数が新たに追加されました。このオプションを使用すると、クライアントプラットフォームがサーバープラットフォームと異なる場合(ディスクレスクライアントを管理している場合など)に、クライアントシステムのプラットフォームまたはマシンのハードウェアクラスを指定できます。

詳細は、[bootadm\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

### nfs4\_domain キーワードがディスクレスクライアントのブートに与える影響

Oracle Solaris 10 で配布されていた `set_nfs4_domain` スクリプトは、NFSv4 ドメインの設定で使用されなくなりました。NFSv4 ドメインを設定するには、新しい `nfs4_domain` キーワードをディスクレスクライアントの `sysidcfg` ファイルに追加してください。 `sysidcfg` ファイルに `nfs4_domain` キーワードがある場合は、ディスクレスクライアントの最初のブート時にドメインが適切に設定されます。

### x86: GRUB ブート環境のディスクレスクライアントの変更点

新しいディスクレスブート方式では、次の機能が拡張されています。

- OS サーバーから複数の Solaris リリースを同時に提供できます。  
新しいディスクレスブート方式で、`pxegrub` を使用してネットワークブートを実行すると、クライアントの GRUB メニューに複数のリリースを表示できます。
- ベンダー固有のオプションをブートアーカイブに指定できます。  
以前のリリースでは、クライアント固有のブートプロパティは通常、`bootenv.rc` ファイルに定義されていて、DHCP を設定するときにベンダー固有のオプションを使用する方法で適用していました。このとき、必要な情報の合計長が DHCP 仕様の制限を超えることがよくありました。



新しいブート方式では、この情報はブートアーカイブに含まれるようになります。PXE/DHCP サーバーは、Site Option 150 を使用してサーバー IP アドレス、ブートファイル、pxegrub、およびクライアント固有のメニューファイル (使用する場合) を指定する場合にのみ必要となります。

## x86: smdiskless コマンドの変更点

ディスクレスクライアントを設定するには smdiskless コマンドを使用します。以前の smdiskless コマンドは、ルート (/) および /usr ファイルシステムを設定してから、NFS 経由でこれらのファイルシステムをクライアントにエクスポートしていました。クライアントをブートするには、さらに /tftpboot 領域を手動で構成する必要がありました。この手動で構成する手順が、ディスクレスクライアントを設定するときに必要なくなりました。smdiskless コマンドが、/usr/sadm/lib/wbem/config\_tftp ファイルのスクリプトを自動的に呼び出して、PXE ブートのための /tftpboot 領域を準備します。

smdiskless コマンドの実行後に、/tftpboot/01 ethernet-address ファイルが pxegrub および /tftpboot/menu.lst.01 ethernet-address ファイルへのリンクとして表示されません。このファイルには、GRUB メニューエントリが含まれます。この例の ethernet-address では、クライアントネットワークインタフェースの Ethernet アドレスの先頭に 01 が付いています。クライアントネットワークインタフェースの Ethernet アドレスを指定するときには、大文字を使用し、コロンは含めないでください。

ディスクレスクライアントのブートアーカイブは、シャットダウン時に自動的に更新されます。シャットダウン時にクライアントのブートアーカイブの期限が切れている場合は、OS サーバーから次のコマンドを実行して、ブートアーカイブを更新する必要があります。

```
# bootadm update-archive -f -R /export/root/host-name
```

host-name はクライアントシステムのホスト名です。

詳細は、284 ページの「x86: フェイルセーフモードでブートして、破壊されたブートアーカイブを強制的に更新する方法」 and the bootadm(1M) のマニュアルページを参照してください。

---

注 - この情報は、x86 ベースのクライアントを運用する SPARC および x86 ベースの OS サーバーに適用されます。

---

DHCP の設定および構成の詳細については、『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』の第 14 章「DHCP サービスの構成 (手順)」を参照してください。

GRUB ブート環境でのディスクレスクライアントの管理方法の詳細は、270 ページの「GRUB を使用して x86 システムをブートする (作業マップ)」を参照してください。

## クライアントとサーバタスクの操作手順

サーバとクライアントサポートの設定手順については、次の表を参照してください。

クライアントとサーバサービス	詳細
インストールまたは JumpStart クライアント	『Oracle Solaris 10.9/10 インストールガイド (ネットワークインストール)』
Solaris OS でのディスクレスクライアントシステム	151 ページの「ディスクレスクライアント管理の概要」および第7章「ディスクレスクライアントの管理(手順)」

## サーバ、クライアント、およびアプライアンスとは

通常、ネットワーク上のシステムは、次の表に示されたいずれかのシステムタイプに該当します。

システムタイプ	説明
サーバ	ネットワーク上のほかのシステムにサービスを提供するシステム。ファイルサーバ、ブートサーバ、Web サーバ、データベースサーバ、ライセンスサーバ、印刷サーバ、インストールサーバ、さらに、特定のアプリケーション用のサーバなどもあります。この章では、「サーバ」とは、ネットワーク上のほかのシステムにブートサービスとファイルシステムを提供するシステムのことを意味します。
クライアント	<p>サーバから提供されるリモートサービスを利用するシステム。クライアントによっては、ディスクの記憶容量に限りがあったり、まったくディスクを持たないものもあり、このようなクライアントは、サーバから提供されるリモートファイルシステムに依存しなければ機能できません。ディスクレスシステム、およびアプライアンスシステムは、このタイプのクライアントの一例です。</p> <p>また、サーバが提供するリモートサービス(インストールソフトウェアなど)を利用しながらも、サーバに依存しなくても機能するクライアントもあります。このタイプのクライアントの例として、スタンドアロンシステムがあります。スタンドアロンシステムは、ルート(/)、/usr、/export/home の各ファイルシステムとスワップ空間を含む独自のハードディスクを備えています。</p>

システムタイプ	説明
アプライアンス	Sun Ray アプライアンスのようなネットワークアプライアンスを使うと、アプリケーションや Solaris OS にアクセスできます。アプライアンスを使うと、サーバー管理を一元化できるので、クライアント管理またはアップグレードを行う必要がなくなります。Sun Ray アプライアンスには「ホットデスク」機能も備わっています。ホットデスク機能を使用すると、サーバーグループのどのアプライアンスからでもただちに、作業中のコンピュータセッション (正確に言うと作業を中断したところ) にアクセスできます。詳細は、 <a href="http://www.sun.com/software/index.jsp?cat=Desktop[amp]">http://www.sun.com/software/index.jsp?cat=Desktop[amp]</a> を参照してください。

## クライアントサポートとは

サポートには、次の項目が含まれます。

- システムをネットワークに認識させる (ホスト名とイーサネットアドレス情報)
- システムをリモートからインストールおよびブートできるインストールサービスを提供する
- ディスク容量に限りがある、またはディスク容量がないシステムに Solaris OS サービスやアプリケーションサービスを提供する

## システムタイプの概要

システムタイプは、ルート (/) と /usr ファイルシステム (スワップ領域を含む) にアクセスする方法によって決まる場合があります。たとえば、スタンドアロンシステムとサーバーシステムでは、これらのファイルシステムをローカルディスクからマウントしていますが、その他のクライアントでは、これらのファイルシステムをリモートからマウントし、サーバーから提供されるサービスに依存しています。次の表にそれぞれのシステムタイプの特徴を示します。

表 6-1 システムタイプの特徴

システムタイプ	ローカルファイルシステム	ローカルスワップ空間	リモートファイルシステム	ネットワーク利用度	相対パフォーマンス
サーバー	ルート (/)  /usr  /home  /opt  /export/home	使用可能	使用不可	高	高

表 6-1 システムタイプの特徴 (続き)

システムタイプ	ローカルファイルシステム	ローカルスワップ空間	リモートファイルシステム	ネットワーク利用度	相対パフォーマンス
スタンドアロンシステム	ルート (/) /usr /export/home	使用可能	使用不可	低	高
OS サーバー	/export/root				
ディスクレスクライアント	使用不可	使用不可	ルート (/) スワップ領域 /usr /home	高 高	低 低
アプライアンス	使用不可	使用不可	使用不可	高	高

## サーバー

サーバーシステム上には、次のファイルシステムがあります。

- ルート (/) と /usr ファイルシステム、およびスワップ空間
- /export と /export/home ファイルシステム。クライアントシステムをサポートし、ユーザーにホームディレクトリを提供します
- アプリケーションソフトウェアを格納する /opt ディレクトリまたはファイルシステム

サーバー上には、ほかのシステムをサポートするために次のソフトウェアも格納できます。

- 別のリリースが動作するディスクレスシステム用の Oracle Solaris OS サービス



注意-GRUB を x86 プラットフォームで実装しているか、新しいブートアーキテクチャーを SPARC プラットフォームで実装している Solaris リリースを実行しているシステムが 1 つだけの OS クライアントサーバー構成では、深刻な互換性の問題が発生する可能性があります。このため、ディスクレスクライアントサポートを追加する前に、ディスクレスシステムをインストールまたはアップグレードして、サーバー OS と同じリリースにすることをお勧めします。

GRUB ベースのブートは、Solaris 10 1/06 リリースで x86 プラットフォームに導入されました。新しい SPARC ブートアーキテクチャーは、Solaris 10 10/08 リリースで導入されました。

- サーバーとは異なるプラットフォームを使用するクライアント

- ネットワークに接続されたシステムがリモートインストールを実行するのに必要な Oracle Solaris CD または DVD のイメージソフトウェアとブート用ソフトウェア
- ネットワークに接続されたシステムがカスタム JumpStart インストールを行うのに必要な Oracle Solaris JumpStart ディレクトリ

## スタンドアロンシステム

「ネットワークに接続されたスタンドアロンシステム」は、ネットワーク上のほかのシステムと情報を共有できますが、ネットワークから切り離されても機能できます。

スタンドアロンシステムは、ルート (/)、/usr、/export/home の各ファイルシステムとスワップ空間を含むハードディスクを自ら持つため、独立して動作できます。つまり、スタンドアロンシステムは、OS ソフトウェア、実行可能ファイル、仮想メモリー空間、ユーザーが作成したファイルにローカルにアクセスできます。

---

注-スタンドアロンシステムには、必要なファイルシステムを保持できるだけのディスク容量が必要です。

---

「ネットワークに接続されないスタンドアロンシステム」は、ネットワークに接続されていない点を除き、ネットワークに接続されたスタンドアロンシステムと同じです。

## ディスクレスクライアント

「ディスクレスクライアント」とは、ディスクが搭載されておらず、必要なすべてのソフトウェアおよび記憶装置をサーバーに依存しているシステムのことで、ディスクレスクライアントには、サーバーからリモートで、ルート (/)、/usr、および /home ファイルシステムがマウントされます。

ディスクレスクライアントでは、ネットワークを介して OS ソフトウェアや仮想メモリー空間に継続的にアクセスする必要があるため、多大なネットワークトラフィックが発生します。ディスクレスクライアントは、ネットワークから切り離されたり、そのサーバーが正しく機能しない場合は機能できません。

ディスクレスクライアントの概要については、[151 ページの「ディスクレスクライアント管理の概要」](#)を参照してください。

## アプライアンス

アプライアンス (Sun Ray アプライアンスなど) は、管理を必要としない X ディスプレイデバイスです。このデバイスには、CPU、ファン、ディスクがなく、メモリーもわずかしが搭載されていません。アプライアンスは、Sun のディスプレイモニターに接続されていますが、アプライアンスユーザーのデスクトップセッションは、サーバーで実行され、その結果がユーザーのモニターに表示されます。

ユーザーの X 環境は自動的に設定されます。この環境には次の特徴があります。

- ほかのファイルシステムおよびソフトウェアアプリケーションへのアクセスは、サーバーに依存します
- ソフトウェアの一元管理およびリソース共有機能を提供します
- 永続的なデータがない、FRU (現場交換可能ユニット) として使用します

## システムタイプ選択のガイドライン

次の特徴に基づいてそれぞれのシステムタイプを比較することにより、使用中の環境にどのシステムタイプが適切かを判断することができます。

一元管理:

- システムを FRU (現場交換可能ユニット) として扱えるか。  
これは、時間がかかるバックアップや復旧操作を必要とせず、またシステムデータを失わずに、障害が発生したシステムを直ちに新しいシステムと交換できることを意味します。
- システムをバックアップする必要があるか。  
数多くのデスクトップシステムのバックアップを実行するには、時間とリソースの点で多大の費用コストがかかる場合があります。
- システムのデータは、中央サーバーから変更できるか。
- クライアントシステムのハードウェアを操作せず、短時間で簡単にシステムを中央サーバーからインストールできるか。

パフォーマンス

- この構成は、デスクトップで使用しても性能が低下しないか。
- ネットワークにシステムを追加すると、既存のネットワーク上のシステムの性能に影響を与えるか。

ディスク使用率

この構成を効果的に導入するには、どれくらいのディスク容量が必要か。

次の表では、各システムタイプの点数を特徴別に表示しています。1 は、もっとも効果があることを意味します。4 は、もっとも効果が低いことを意味します。

表6-2 システムタイプの比較

システムタイプ	一元管理	パフォーマンス	ディスク使用率
スタンドアロンシステム	4	1	4
ディスクレスクライアント	1	4	1
アプライアンス	1	1	1

## ディスクレスクライアント管理の概要

次の節と第7章「ディスクレスクライアントの管理(手順)」では、Oracle Solaris OSでのディスクレスクライアントサポートの管理方法について説明します。

「ディスクレスクライアント」とは、オペレーティングシステム、ソフトウェア、および記憶装置を「OS サーバー」に依存しているシステムのことです。ディスクレスクライアントは、そのルート(/)、/usr、およびその他のファイルシステムをOSサーバーからマウントします。ディスクレスクライアントは独自のCPUと物理メモリーを持っており、データをローカルで処理することができます。しかしディスクレスクライアントは、ネットワークから切り離されたり、そのOSサーバーが正しく機能しない場合は機能できません。ディスクレスクライアントは、ネットワークを経由して継続的に機能する必要があるため、多大なネットワークトラフィックを発生させます。

Solaris 9以降のリリースでは、ディスクレスクライアントの `smoservice` コマンドと `smdiskless` コマンドを使って、OSサービスやディスクレスクライアントサポートを管理できるようになりました。Solaris 8リリースでは、Solstice GUI 管理ツールでディスクレスクライアントが管理されていました。

## OS サーバーおよびディスクレスクライアントのサポート情報



注意-一方のシステムは新しいブート方式を実装しているが、もう一方のシステムは実装していないOSクライアントサーバー構成を使用してディスクレスクライアントサポートを追加しようとする、深刻な互換性の問題が発生する可能性があります。新しいブート (GRUB) は、Solaris 10 1/06 リリースから x86 プラットフォームで実装され、Solaris 10 10/8 リリースから SPARC プラットフォームで実装されました。OS サーバー上で実行されているリリースよりも新しい Solaris リリースを実行しているシステムでのディスクレスサポートの追加も、サポートされていない構成です。問題が発生する可能性を回避するために、ディスクレスクライアントサポートを追加する前に最新の Solaris リリースをインストールすることをお勧めします。

smosservice および smdiskless コマンドでサポートされる Solaris リリースおよびアーキテクチャーの種類は次のとおりです。

- **SPARC** ベースのサーバー: Solaris 8、Solaris 9、および Solaris 10 リリースでサポートされます。
- **SPARC** ベースのクライアント: Solaris 8、Solaris 9、および Solaris 10 リリースでサポートされます。
- **x86** ベースのサーバー: Solaris 9 および Solaris 10 リリースでサポートされます。
- **x86** ベースのクライアント: Solaris 9 および Solaris 10 リリースでサポートされません。

次の表に、smosservice および smdiskless コマンドでサポートされる x86 OS クライアントサーバー構成を示します。この情報は、Solaris 9 および Oracle Solaris 10 FCS (3/05) リリースに適用されます。

Solaris 10 1/06 リリース以降を実行している場合は、ディスクレスクライアントサポートを追加する前に、同じリリースをインストールするか、同じリリースにアップグレードすることをお勧めします。

表 6-3 クライアントとサーバーでの x86 OS のサポート

	ディスクレスクライアント OS	
サーバー OS	<b>Oracle Solaris 10 3/05</b>	<b>Solaris 9</b>
<b>Oracle Solaris 10 3/05</b>	サポートされています	サポートされています
<b>Solaris 9</b>	サポートされていません	サポートされています



次の表に、`smosservice` コマンドと `smdiskless` コマンドでサポートされる SPARC OS クライアントサーバー構成を示します。この情報は、Solaris 8 と Solaris 9 リリース、および 10 5/08 OS までの Oracle Solaris OS に適用されます。

Solaris 10 10/08 リリース以上を実行している場合は、ディスクレスクライアントサポートを追加する前に、同じリリースをインストールするか、同じリリースにアップグレードすることをお勧めします。

表 6-4 クライアントとサーバーでの SPARC OS のサポート

サーバー OS	ディスクレスクライアント OS		
	Oracle Solaris 10 3/05 から Solaris 10 5/08	Solaris 9	Solaris 8
Oracle Solaris 10 3/05 から Solaris 10 5/08	サポートされています	サポートされています	サポートされています
Solaris 9	サポートされていません	サポートされています	サポートされています
Solaris 8	サポートされていません	サポートされていません	サポートされています

## ディスクレスクライアント管理機能

`smosservice` コマンドおよび `smdiskless` コマンドを使うと、ネットワークにディスクレスクライアントサポートを追加したり、維持したりすることができます。ネームサービスを使うと、システム情報を一元管理できるので、ホスト名などの重要なシステム情報をネットワーク上のすべてのシステムに複製する必要がありません。

`smosservice` コマンドおよび `smdiskless` コマンドを使うと、次の作業を実行できます。

- ディスクレスクライアントサポートを追加および変更します
- OS サービスを追加および削除します
- LDAP、NIS、NIS+、files の各ネームサービス環境でのディスクレスクライアント情報を管理します

x86 システム上で GRUB ベースのブートを実行する場合は、DHCP 構成を手動で設定する必要があります。詳細は、163 ページの「[x86: GRUB ベースのブート環境にディスクレスクライアントを追加するための準備方法](#)」を参照してください。

注-ディスクレスクライアントコマンドは、ディスクレスクライアントのブートの設定にのみ使用できます。このコマンドは、リモートインストールまたはプロファイルサービスなど、ほかのサービスの設定では使用できません。リモートインストールを設定するには、`sysidcfg` ファイルにディスクレスクライアント仕様を定義する必要があります。詳細は、『[Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド \(カスタム JumpStart/上級編\)](#)』を参照してください。

## ディスクレスクライアントコマンドの使用

次の表のコマンドを使って独自のシェルスクリプトを記述すると、簡単にディスクレスクライアント環境を設定および管理できます。

表 6-5 ディスクレスクライアントコマンド

コマンド	サブコマンド	作業
<code>/usr/sadm/bin/smosservice</code>	<code>add</code>	OS サービスを追加します
	<code>delete</code>	OS サービスを削除します
	<code>list</code>	OS サービスをリスト表示します
	<code>patch</code>	OS サービスのパッチを管理します
<code>/usr/sadm/bin/smdiskless</code>	<code>add</code>	ディスクレスクライアントを OS サーバーに追加します
	<code>delete</code>	ディスクレスクライアントを OS サーバーから削除します
	<code>list</code>	OS サーバー上のディスクレスクライアントをリスト表示します
	<code>modify</code>	ディスクレスクライアントの属性を変更します

次に示す 2 種類の方法で、これらのコマンドに関するヘルプを参照することができます。

- 次の例に示すように、コマンド、サブコマンド、および必要なオプションを入力するときに `-h` オプションを使用します。

```
% /usr/sadm/bin/smdiskless add -p my-password -u my-user-name -- -h
```

- `smdiskless(1M)` および `smosservice(1M)` のマニュアルページを参照します。

## ディスクレスクライアント管理に必要な RBAC 権限

`smosservice` コマンドおよび `smdiskless` コマンドはスーパーユーザーとして使用できます。役割によるアクセス制御 (RBAC) を使用している場合、割り当てられた RBAC 権限に応じて、すべてのディスクレスクライアントコマンドまたはそのサブセットのいずれかを使用できます。次の表にディスクレスクライアントコマンドを使用するのに必要な RBAC 権限を示します。

表 6-6 ディスクレスクライアント管理に必要な RBAC 権限

RBAC 権限	コマンド	作業
基本的な Solaris ユーザー、ネットワーク管理	<code>smosservice list</code>	OS サービスをリスト表示します
	<code>smosservice patch</code>	OS サービスのパッチリストを表示します
	<code>smdiskless list</code>	OS サーバー上のディスクレスクライアントのリストを表示します
Network Management	<code>smdiskless add</code>	ディスクレスクライアントを追加します
システム管理者	すべてのコマンド	すべての作業

## OS サービスの追加

Oracle Solaris OS サーバーとは、ディスクレスクライアントシステムをサポートするオペレーティングシステム (OS) サービスを提供するサーバーのことです。OS サーバーを新たにサポートすることも、`smosservice` コマンドを使ってスタンドアロンシステムを OS サーバーに変換することもできます。

サポートする各プラットフォームグループおよび Oracle Solaris リリース用に、特定の OS サービスを OS サーバーに追加する必要があります。たとえば、Oracle Solaris リリースが動作する SPARC sun-4u システムをサポートするには、`sun-4u/Oracle Solaris 10 OS サービス` を OS サーバーに追加する必要があります。サポートするディスクレスクライアントごとに、そのクライアント用の OS サービスを OS サーバーに追加する必要があります。たとえば、Oracle Solaris 10 や Solaris 9 リリースが動作する SPARC sun-4m システムまたは x86 システムは、それぞれ異なるプラットフォームグループに属しているため、それぞれのシステムをサポートするための OS サービスを追加する必要があります。

OS サービスを追加するには、該当する Oracle Solaris ソフトウェア CD、DVD、またはディスクイメージへのアクセス権が必要です。

## OS サーバーにパッチが適用された場合に OS サービスを追加する

OS サーバーに OS サービスを追加しようとする、サーバー上の OS と追加するサービスの OS のバージョンが一致しないというエラーメッセージが表示される場合があります。このエラーメッセージは、OS サーバーにインストールされている OS のパッケージにパッチが適用されていても、追加しようとしている OS サービスのパッケージにはパッチが適用されていない (パッチがパッケージに組み込まれているため) 場合に表示されます。

たとえば、最新の Solaris リリースまたは Oracle Solaris OS が動作するサーバーがあるとして、このサーバーには、パッチがすでに適用された Solaris 9 SPARC sun-4m OS サービスなど、追加の OS サービスがロードされている可能性があります。このため、Solaris 8 SPARC sun-4u OS サービスを CD-ROM からこのサーバーに追加しようとする、次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
Error: inconsistent revision, installed package appears to have been
patched resulting in it being different than the package on your media.
You will need to backout all patches that patch this package before
retrying the add OS service option.
```

## OS サーバーに必要なディスク容量

ディスクレスクライアント環境を設定する前に、ディスクレスクライアントの各ディレクトリに必要なディスク容量があるかどうかを確認する必要があります。

以前のバージョンの Solaris リリースでは、インストール中にディスクレスクライアントサポートについてのプロンプトが表示されました。Solaris 9 以降のリリースでは、手動で、インストール中に `/export` ファイルシステムを割り当てるか、インストール後に作成する必要があります。具体的なディスク容量要件については、次の表を参照してください。

表 6-7 Solaris OS サーバーおよびディスクレスクライアントのディスク容量に関する推奨事項

サーバー OS/アーキテクチャタイプ	ディレクトリ	必要なディスク容量
Oracle Solaris 10 SPARC の OS サーバー	<code>/export</code>	5 - 6.8G バイト
Oracle Solaris 10 x86 の OS サーバー	<code>/export</code>	5 - 6.8G バイト
Oracle Solaris 10 SPARC のディス クレスクライアント	<code>/export</code>	1 台のディスクレスクライアントにつき 200 - 300M バイトの容量を確保してください。
Oracle Solaris 10 x86 のディス クレスクライアント	<code>/export</code>	1 台のディスクレスクライアントにつき 200 - 300M バイトの容量を確保してください。

---

注-ディスク容量に関する推奨事項は、インストールされている Oracle Solaris リリースによって異なる場合があります。最新の Solaris リリースでのディスク容量に関する推奨事項の詳細については、『[Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド \(インストールとアップグレードの計画\)](#)』の「ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量」を参照してください。

---



## ディスクレスクライアントの管理 (手順)

---

この章では、Oracle Solaris OS でディスクレスクライアントを管理する方法について説明します。

---

注 - Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムがインストールされているシステムでは、`smosservice` および `smdiskless` コマンドを使用できません。これは、ZFS ルートファイルシステムのインストールがサポートされているすべての Solaris リリースでの既知の問題です。

Solaris Flash インストール機能を使用すると、UFS ルートファイルシステムまたは ZFS ルートファイルシステムを実行するシステムをすばやくプロビジョニングできます。詳細は、『Oracle Solaris ZFS 管理ガイド』の「ZFS ルートファイルシステムのインストール (Oracle Solaris フラッシュアーカイブインストール)」を参照してください。

---

この章の内容は次のとおりです。

- 160 ページの「ディスクレスクライアントの管理 (作業マップ)」
- 161 ページの「ディスクレスクライアントの管理の準備」
- 179 ページの「ディスクレスクライアント OS サービスにパッチを適用する」
- 182 ページの「ディスクレスクライアントのインストールの問題」

ディスクレスクライアントの管理の概要については、第 6 章「クライアントとサーバーサポートの管理 (概要)」を参照してください。

## ディスクレスクライアントの管理 (作業マップ)

次の表に、ディスクレスクライアントの管理に必要な手順を示します。

作業	説明	参照先
1. (省略可能) Solaris 管理コンソールのログインを有効にしてディスクレスクライアントのエラーメッセージを表示します。	コンソールのメインウィンドウからログビューアを選択し、ディスクレスクライアントのエラーメッセージを表示します。	46 ページの「Solaris 管理コンソールを起動する」
2. ディスクレスクライアントを追加する準備をします。	サポートされているリリースを確認し、各ディスクレスクライアントのプラットフォーム、メディアパス、およびクラスタ (またはソフトウェアグループ) を確認します。	163 ページの「x86: GRUB ベースのブート環境にディスクレスクライアントを追加するための準備方法」 166 ページの「Oracle Solaris 10 にディスクレスクライアントを追加するための準備方法」
3. 必要な OS サービスを OS サーバーに追加します。	smossservice コマンドを使用して、サポートするディスクレスクライアントの OS サービスを追加します。サポートする各ディスクレスクライアントプラットフォームのプラットフォームおよびメディアパスを識別する必要があります。	168 ページの「ディスクレスクライアントサポートの OS サービスの追加方法」
4. OS サービスをサーバーに追加したときに失われた ARCH=all パッケージをすべて検出してインストールします。  注- これらのパッケージを各ディスクレスクライアントに個別に追加しなくてもいいように、ディスクレスクライアントサポートを追加する前にこの作業を行ってください。	smossservice add コマンドを実行しても、ARCH=all が指定されているルート (/) および /usr パッケージはどれもインストールされません。これらのパッケージは、OS サービスを OS サーバーに追加したあとに、手動でインストールする必要があります。	182 ページの「失われた ARCH=all パッケージを検出してインストールする方法」
5. ディスクレスクライアントを追加します。	smdiskless コマンドですべての必須情報を指定し、ディスクレスクライアントサポートを追加します。	170 ページの「x86: GRUB ベースのブート環境にディスクレスクライアントを追加する方法」 173 ページの「Oracle Solaris 10 でディスクレスクライアントを追加する方法」



作業	説明	参照先
6. ディスクレスクライアントをブートします。	ディスクレスクライアントをブートして、ディスクレスクライアントが正常に追加されたことを確認します。	176 ページの「x86: GRUB を使用してディスクレスクライアントをブートする方法」 177 ページの「SPARC: Oracle Solaris 10 でディスクレスクライアントをブートする方法」
7. (省略可能) ディスクレスクライアントサポートを削除します。	必要がなくなった場合には、ディスクレスクライアントのサポートを削除します。	177 ページの「ディスクレスクライアントサポートの削除方法」
8. (省略可能) ディスクレスクライアントの OS サービスを削除します。	必要がなくなった場合には、ディスクレスクライアントの OS サービスを削除します。	178 ページの「ディスクレスクライアントの OS サービスを削除する方法」
9. (省略可能) OS サービスにパッチを適用します。	ディスクレスクライアント OS サービスのパッチを追加、削除、リスト表示、または同期化します。	180 ページの「ディスクレスクライアントの OS パッチの追加方法」

## ディスクレスクライアントの管理の準備

この節では、ディスクレスクライアントの管理に必要な準備作業について説明します。

ディスクレスクライアントを管理する場合には、次の点に注意してください。

- Oracle Solaris インストールプログラムでは、ディスクレスクライアントサポートのセットアップを促すメッセージが表示されません。ディスクレスクライアントをサポートするには、手動で `/export` パーティションを作成する必要があります。`/export` パーティションの作成は、インストール中またはインストール後に行なってください。
- `/export` パーティションには、サポートするクライアントの数に応じて、5G バイト以上の容量が必要です。詳細は、「OS サーバーに必要なディスク容量」を参照してください。
- `smossservice` コマンドまたは `smdiskless` コマンドで指定したネームサービスは、`/etc/nsswitch.conf` ファイルで指定された一次ネームサービスと一致していなければなりません。`smdiskless` コマンドまたは `smossservice` コマンドにネームサービスを指定しない場合、デフォルトのネームサービスは `files` になります。ネームサーバーを指定するには、`smossservice` コマンドおよび `smdiskless` コマンドの `-D` オプションを使用します。詳細は、[smossservice\(1M\)](#) および [smdiskless\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

**Solaris 10 8/07** リリース以降、Oracle Solaris 10 で配布されていた `set_nfs4_domain` スクリプトは、NFSv4 ドメインの設定に使用されなくなりました。NFSv4 ドメインを設定するには、`nfs4_domain` キーワードをディスクレスクライアントの `sysidcfg` ファイル (たとえば `server:/export/root/client/etc/sysidcfg`) に追加してください。

クライアントシステムの `sysidcfg` ファイルに `nfs4_domain` キーワードがある場合は、ディスクレスクライアントの最初のブート時にドメインが適切に設定されません。また、OS サーバーは起動して稼働している必要があり、ディスクレスクライアントの NFSv4 ドメイン設定は OS サーバーの `/var/run/nfs4_domain` ファイル内の設定と一致している必要があります。

詳細は、『[Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド \(ネットワークインストール\)](#)』の「[sysidcfg ファイルによる事前設定](#)」を参照してください。

- OS サーバーとディスクレスクライアントは、同じサブネット上になければなりません。
- EFI ラベル付きディスク上にある UFS ファイルシステムには OS やディスクレスクライアントのサービスを追加「できない」ため、マルチテラバイト UFS ファイルシステムではクライアントサービスを提供できません。

---

注 - EFI ラベル付きディスク上に存在している UFS ファイルシステムに OS およびディスクレスクライアントサービスを追加しようとする、ディスク容量が不足していることを示す次のようなエラーメッセージが表示されます。

```
The partition /export does not have enough free space.
1897816 KB (1853.34 MB) additional free space required.
Insufficient space available on
/dev/dsk/c0t5d0s0 /export
```

---

各ディスクレスクライアントについてプラットフォーム、メディアパス、およびクラストラスタを決定したら、OS サービスを追加する準備ができたことになります。

追加する各 OS サービスについて、次のディレクトリが作成され移植されます。

- `/export/Solaris_version/Solaris_version-instruction-set.all` (`/export/exec/Solaris_version/Solaris_version-instruction-set.all` へのシンボリックリンク)
- `/export/Solaris_version`
- `/export/Solaris_version/var`
- `/export/Solaris_version/opt`
- `/export/share`
- `/export/root/templates/Solaris_version`
- `/export/root/clone`
- `/export/root/clone/Solaris_version`

- `/export/root/clone/Solaris_version/ machine-class`

追加する各ディスクレスクライアントについて、次のデフォルトのディレクトリが OS サーバー上に作成されます。

- `/export/root/diskless-client`
- `/export/swap/diskless-client`
- `/tftpboot/diskless-client-ipaddress-in-hex/export/dump/diskless-client (-x dump オプションを指定した場合)`

---

注 - `smosservice` および `smdiskless` コマンドの `x` オプションを使うと、ルート (`/`)、`/swap-`、および `/dump` ディレクトリのデフォルト位置を変更することができます。ただし、`/export` ファイルシステムの下にはこれらのディレクトリを作成しないでください。

---

## ▼ x86: GRUB ベースのブート環境にディスクレスクライアントを追加するための準備方法

ディスクレスクライアントの追加の準備をするには、次の手順を実行します。この手順は、x86 システムでの一般的な説明になっています。

`smosservice add` コマンドを使用して OS サービスを追加する場合は、サポートする各ディスクレスクライアントプラットフォームのプラットフォーム、メディアパス、およびクラスタ(またはソフトウェアグループ)を指定する必要があります。

始める前に サポートしているリリースが、OS サービスに指定されたシステム上で実行されていることを確認します。さらに、OS サーバーリリースとディスクレスクライアントリリースの組み合わせがサポートされていることも確認します。詳細は、[152 ページ](#)の「OS サーバーおよびディスクレスクライアントのサポート情報」を参照してください。

- 1 次の形式で使用されるディスクレスクライアントプラットフォームを識別します。

`instruction-set.machine-class.Solaris-version`

次に例を示します。

`i386.i86pc.Solaris_10`

次に、利用できるプラットフォームのオプションを示します。

命令セット	マシンクラス	Solaris バージョン
sparc	sun4v	Solaris 10 1/06 OS 以降
	sun4u、sun4m、sun4d、および sun4c	Oracle Solaris 10、Solaris 9、および Solaris 8
i386	i86pc	Oracle Solaris 10、Solaris 9、および Solaris 8

注 - sun-4c アーキテクチャーは、Solaris 8、Solaris 9、Oracle Solaris 10 の各リリースではサポートされていません。sun-4d アーキテクチャーは、Solaris 9、Oracle Solaris 10 の各リリースではサポートされていません。sun-4m アーキテクチャーは、Oracle Solaris 10 OS ではサポートされていません。

## 2 メディアパスを特定します。

メディアパスは、ディスクスクリクライアントにインストールする OS を含むディスクイメージのフルパスです。

一部の Oracle Solaris リリースでは、OS は複数の CD で提供されます。ただし、smosservice コマンドでは、複数の CD から OS を読み込むことはできません。続く手順で説明するように、Oracle Solaris ソフトウェア CD (とオプションの Language CD)、または Oracle Solaris DVD 上のスクリプトを実行する必要があります。

注 - この Oracle Solaris リリースでは、ソフトウェアは DVD のみで提供されます。

## 3 サーバー上にインストールイメージを作成します。

インストールサーバーの設定方法については、『[Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド \(ネットワークインストール\)](#)』を参照してください。

## 4 CD または DVD イメージから必要な OS サービスを読み込みます。

実行しているリリースの Oracle Solaris が複数の CD で提供されている場合は、次のいずれかのスクリプトを使用します。

- `CD 1 - /cdrom/cdrom0/Solaris_10/Tools/setup_install_server`
- その他の Oracle Solaris SOFTWARE CD -  
`/cdrom/cdrom0/Solaris_10/Tools/add_to_install_server`
- Language CD - `/cdrom/cdrom0/Solaris_10/Tools/add_to_install_server`

たとえば、ローカルに接続された CD-ROM デバイス上の Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD から `setup_install_server` スクリプトを使用する場合は、次のような構文になります。

```
# mkdir /export/install/sol_10_x86
# cd /cd_mount_point/Solaris_10/Tools

# ./setup_install_server /export/install/sol_10_x86
```

- 5 `BootFile` および `BootSrvA` `DHCP` オプションを `DHCP` サーバー構成に追加して、`PXE` ブートを有効にします。

次に例を示します。

```
Boot server IP (BootSrvA) : svr-addr
(BootFile) : 01client-macro
```

`svr-addr` は OS サーバーの IP アドレスです。`client-macro` は、クライアントの Ethernet タイプ (01) とクライアントの MAC (Media Access Control) アドレスに基づいて作成された名前です。この番号は、インストールサーバーの `/tftpboot` ディレクトリで使用されるファイルの名前としても使われます。

---

注 - `client-macro` は大文字で表記します。コロンは含めないでください。

---

これらのオプションは、コマンド行から、または `DHCP Manager` を使用して追加できます。詳細は、例 7-4 を参照してください。

詳細は、289 ページの「x86: GRUB ベースのブートをネットワークから実行する方法」、『Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド (ネットワークインストール)』の「`DHCP` サービスによるシステム構成情報の事前設定 (作業)」、および『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』のパート III 「`DHCP`」を参照してください。

- 6 ディスクに **Oracle Solaris** イメージをインストールしたあと、ディスクのメディアパスを書き留めておきます。次に例を示します。

```
/net/export/install/sol_10_x86
```

このディスクのメディアパスは、`smosservice` コマンドを使用するときに指定する必要があります。

- 7 **OS** サービスを追加するときに `SUNWCxall` クラスタを特定します。

同じシステム上で同じ OS が動作しているディスクレスクライアントには、同じクラスタを使用する必要があります。

---

注 - クラスタには常に `SUNWCxall` を指定してください。

---

## ▼ Oracle Solaris 10 にディスクレスクライアントを追加するための準備方法

`smosservice add` コマンドを使用して OS サービスを追加する場合は、サポートする各ディスクレスクライアントプラットフォームのプラットフォーム、メディアパス、およびクラスタ (またはソフトウェアグループ) を指定する必要があります。

始める前に サポートしているリリースが、OS サービスに指定されたシステム上で実行されていることを確認します。さらに、OS サーバーリリースとディスクレスクライアントリリースの組み合わせがサポートされていることも確認します。詳細は、[152 ページ](#)の「OS サーバーおよびディスクレスクライアントのサポート情報」を参照してください。

- 1 次の形式で使用されるディスクレスクライアントプラットフォームを識別します。

`instruction-set.machine-class.Solaris- version`

次に例を示します。

`sparc.sun4u.Solaris_10`

次に、利用できるプラットフォームのオプションを示します。

<i>instruction-set</i>	<i>machine-class</i>	<i>Solaris_version</i>
sparc	sun4v	Solaris 10 1/06 OS 以降
	sun4c, sun4d, sun4m, sun4u	Solaris_10, Solaris_9, および Solaris_8
i386	i86pc	Solaris_10, Solaris_9, および Solaris_8

注 - sun-4c アーキテクチャーは、Solaris 8、Solaris 9、Oracle Solaris 10 の各リリースではサポートされていません。sun-4d アーキテクチャーは、Solaris 9、Oracle Solaris 10 の各リリースではサポートされていません。sun-4m アーキテクチャーは、Oracle Solaris OS ではサポートされていません。

- 2 メディアパスを特定します。

メディアパスは、ディスクレスクライアントにインストールする OS を含むディスクイメージのフルパスです。

一部の Oracle Solaris リリースでは、OS は複数の CD で提供されます。ただし、`smosservice` コマンドでは、複数の CD から OS を読み込むことはできません。続く手順で説明するように、Solaris ソフトウェア CD (とオプションの Language CD)、または DVD 上のスクリプトを実行する必要があります。

---

注 - この Oracle Solaris リリースでは、ソフトウェアは DVD のみで提供されます。 .

---

**3** サーバー上にインストールイメージを作成します。

インストールサーバーの設定方法については、『[Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド \(ネットワークインストール\)](#)』を参照してください。

**4** **CD** または **DVD** イメージから必要な **OS** サービスを読み込みます。

実行している Oracle Solaris リリースで、OS が複数の CD で提供されている場合は、次のいずれかのスクリプトを使用します。

- CD 1 - /cdrom/cdrom0/Solaris\_10/Tools/setup\_install\_server
- その他の Solaris Software CD -  
/cdrom/cdrom0/Solaris\_10/Tools/add\_to\_install\_server
- Language CD - /cdrom/cdrom0/Solaris\_10/Tools/add\_to\_install\_server

たとえば、ローカルに接続された CD-ROM デバイス上の Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD から setup\_install\_server スクリプトを使用する場合は、次のような構文になります。

```
# mkdir /export/install/sparc_10
# cd /cd_mount_point/Solaris_10/Tools
# ./setup_install_server /export/install/sparc_10
```

**5** ディスクに **Oracle Solaris CD** または **DVD** イメージをインストールしたあと、ディスクのメディアパスを指定します。次に例を示します。

```
/export/install/sparc_10
```

**6** **OS** サービスを追加するときに SUNWCxall クラスタを特定します。

同じシステム上で同じ OS が動作しているディスクレスクライアントには、同じクラスタを使用する必要があります。

たとえば、次の Solaris 9 ディスクレスクライアントについて考えてみましょう。

- sparc.sun4m.Solaris\_9
- sparc.sun4u.Solaris\_9

sun4u および sun4m システムでは SUNWCxall クラスタを要求するため、これらのディスクレスクライアントをセットアップするには、各ディスクレスクライアントに SUNWCxall クラスタを指定する必要があります。また、同じシステム上で同じオペレーティングリリース (この例では Solaris\_9) が動作しているディスクレスクライアントには、同じクラスタを使用する必要があります。

---

注 - sun4u システム、または 8 ビットの高速カラーメモリーフレームバッファ (cgsix) が搭載されたシステムを使用している場合には、クラスタに必ず SUNWCxall を指定してください。

---

## ▼ ディスクレスクライアントサポートの OS サービスの追加方法

ディスクレスクライアントの OS サービスをサーバーに追加するには、次の手順を実行します。

---

注 - smosservice add コマンドを使用して OS サービスを追加するときに、ARCH=all タイプのルート (/) パッケージと /usr パッケージはインストールされません。これらのパッケージは読み飛ばされます。警告やエラーメッセージは表示されません。OS サービスを OS サーバーに追加したあとに、失われたパッケージを手動でインストールする必要があります。手順については、「[失われた ARCH=all パッケージを検出してインストールする方法](#)」を参照してください。

---

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 Solaris 管理コンソールサーバーが実行中であり、システムでディスクレスクライアントツールが使用できることを確認します。

```
# /usr/sadm/bin/smosservice list -H host-name:898 --
```

- 3 OS サービスを追加します。

```
# /usr/sadm/bin/smosservice add -H host-name  
:898 -- -o  
host-name  
-x mediapath=path -x platform=  
instruction-set.machine-class  
.Solaris_version  
-x cluster=cluster-name  
-x locale=locale-name
```

add

指定された OS サービスを追加します。

```
-H host-name:898
```

接続するホスト名とポートを指定します。ポートを指定しない場合は、デフォルトポート 898 に接続されます。



---

注 - `smossservice` コマンドを使って OS サービスを追加する場合は、`-H` オプションは必要ありません。

---

- これ以降のサブコマンド引数が始まることを示します。
- x *mediapath=path*  
Solaris イメージのフルパスを指定します。
  - x *platform=instruction-set.machine-class.Solaris\_version*  
追加する命令アーキテクチャー、マシンクラス、および Solaris バージョンを指定します。
  - x *cluster=cluster-name*  
インストールする Solaris クラスタを指定します。
  - x *locale=locale-name*  
インストールするロケールを指定します。

---

注 - サーバーの処理速度および選択した OS サービスの構成により、インストールプロセスには 45 分ほどかかることがあります。

---

詳細は、`smossservice(1M)` のマニュアルページを参照してください。

- 4 (省略可能) ほかの OS サービスを追加します。
- 5 OS サービスを追加し終わったら、OS サービスがインストールされているかどうか確認します。

```
# /usr/sadm/bin/smossservice list -H host-name:898 --
```

#### 例 7-1 SPARC: ディスクレスクライアントサポートの OS サービスを追加する

この例では、サーバー `jupiter` で SPARC 版 Solaris 10 の OS サービスを追加する方法を示します。サーバー `jupiter` では Oracle Solaris OS が動作しています。SPARC 版 Oracle Solaris 10 OS の CD イメージは、インストールサーバー `myway` の `/export/s10/combined.s10s_u2wos/61` にあります。

```
# /usr/sadm/bin/smossservice add -H jupiter:898 -- -o jupiter
-x mediapath=/net/myway/export/s10/combined.s10s_u2wos/61
-x platform=sparc.sun4u.Solaris_10
-x cluster=SUNWCXall -x locale=en_US
```

```
# /usr/sadm/bin/smossservice list -H jupiter:898
Authenticating as user: root
```

Type `/?` for help, pressing enter accepts the default denoted by [ ]

```

Please enter a string value for: password :: xxxxxx
Loading Tool: com.sun.admin.osservicemgr.cli.OsServerMgrCli
from jupiter:898
Login to jupiter as user root was successful.
Download of com.sun.admin.osservicemgr.cli.OsServerMgrCli from jupiter:898
was successful.

```

## 例 7-2 x86: ディスクレスクライアントサポートの OS サービスを追加する

この例では、サーバー orbit で x86 版 Solaris 10 の OS サービスを追加する方法を示します。サーバー orbit では Oracle Solaris OS が動作しています。x86 版 Oracle Solaris 10 OS の CD イメージは、インストールサーバー seriously の /export/s10/combined.s10x\_u2wos/03 にあります。

```

# /usr/sadm/bin/smoservice add -H orbit:898 -- -o orbit -x
mediapath=/net/seriously/export/s10u2/combined.s10x_u2wos/03 -x
platform=i386.i86pc.Solaris_10 -x cluster=SUNWCxall -x locale=en_US

# /usr/sadm/bin/smoservice list - H orbit:898
Type /? for help, pressing <enter> accepts the default denoted by [ ]
Please enter a string value for: password ::
Starting Solaris Management Console server version 2.1.0.
endpoint created: :898
Solaris Management Console server is ready.
Loading Tool: com.sun.admin.osservicemgr.cli.OsServerMgrCli from orbit:898
Login to orbit as user root was successful.
Download of com.sun.admin.osservicemgr.cli.OsServerMgrCli from orbit:898 was successful.
Client          Root Area
                Swap Area
                Dump Area
-----
.
.
.
#

```

次の手順 smoservice add コマンドを実行して OS サービスを OS サーバーに追加したときに失われた ARCH=all パッケージをすべて検出し、それらをインストールします。詳細は、「失われた ARCH=all パッケージを検出してインストールする方法」を参照してください。

## ▼ x86: GRUB ベースのブート環境にディスクレスクライアントを追加する方法

Solaris 10 1/06 リリース以降では、OS サービスを追加したあとに、次の手順を実行してディスクレスクライアントを追加します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 ディスクレスクライアントを追加します。

```
# /usr/sadm/bin/smdiskless add -- -i
ip-address -e ethernet-address
-n client-name -x os=
instruction-set.machine-class.Solaris_
version
-x root=/export/root/client-name
-x swap=/export/swap/client-name
-x swappsize=size -x tz=
time-zone -x locale=
locale-name
```

add

指定したディスクレスクライアントを追加します。

--

これ以降のサブコマンド引数が始まることを示します。

-i *ip-address*

ディスクレスクライアントのIPアドレスを指定します。

-e *ethernet-address*

ディスクレスクライアントのイーサネットアドレスを識別します。

-n *client-name*

ディスクレスクライアントの名前を指定します。

-x *os=instruction-set.machine-class.Solaris\_version*

ディスクレスクライアントの命令アーキテクチャー、マシンクラス、OS、および Solaris バージョンを指定します。

-x *root=/export/root/client-name*

ディスクレスクライアントのルート(/)ディレクトリを指定します。

-x *swap=/export/swap/client-name*

ディスクレスクライアントのスワップファイルを指定します。

-x *swappsize=size*

スワップファイルのサイズをメガバイト(Mバイト)で指定します。デフォルトは 24M バイトです。

-x *tz=time-zone*

ディスクレスクライアントの時間帯を指定します。

-x *locale=locale-name*

ディスクレスクライアントをインストールするロケールを指定します。

詳細は、`smdiskless(1M)` のマニュアルページを参照してください。

- 3 まだ作成されていない場合は、DHCP サーバー構成に `BootSrvA` および `BootFile` DHCP オプションを追加して、PXE ブートを有効にします。

次に例を示します。

```
Boot server IP (BootSrvA) : svr-addr
Boot file (BootFile) : 01client-macro
```

*svr-addr* はサーバーの IP アドレスです。*client-macro* は、クライアントの Ethernet タイプ (01) とクライアントの MAC アドレスに基づいて作成された名前です。この番号は、インストールサーバーの `/tftpboot` ディレクトリで使用されるファイルの名前としても使われます。

---

注 *-client-macro* は大文字で表記します。コロンは含めないでください。

---

次のファイルとディレクトリが `/tftpboot` ディレクトリに作成されます。

```
drwxr-xr-x  6 root sys      512 Dec 28 14:53 client-host-name
lrwxrwxrwx  1 root root      31 Dec 28 14:53 menu.lst.01ethernet-address
-> /tftpboot/client-host-name/grub/menu.lst
-rw-r--r--  1 root root 118672 Dec 28 14:53 01ethernet-address
```

- 4 コンソールがシリアルポート上にある場合は、`/tftpboot/menu.lst.01ethernet-address` ファイルを編集し、`tty` 設定を指定する行のコメントを解除します。
- クライアントに作成されるデフォルトの `menu.lst` ファイルを変更する場合は、`/usr/sadm/lib/wbem/config_tftp` ファイルの `echo` 行を編集します。
- 詳細は、286 ページの「x86 システムをネットワークからブートする」を参照してください。
- 5 ディスクレスクライアントがインストールされたことを確認します。
- ```
# /usr/sadm/bin/smdiskless list -H host-name:898 --
```
- 6 (省略可能) `smdiskless add` コマンドを続けて使用して、各ディスクレスクライアントを追加します。

### 例 7-3 x86: GRUB ブート環境の x86 システムにディスクレスクライアントサポートを追加する

この例では、Solaris 10 x86 ベースのディスクレスクライアント `mikey1` を追加する方法を示します。

```
rainy-01# /usr/sadm/bin/smdiskless add -H sdts-01-qfe0 -- -o sdts-01-qfe0
-n mikey1 -i 192.168.20.22 -e 00:E0:88:55:33:BC -x os=i386.i86pc.Solaris_10
-x root=/export/root/mikey1 -x swap=/export/swap/mikey1
```

```

Loading Tool: com.sun.admin.ossvermgr.cli.OsServerMgrCli
from sdtc-01-qfe0
Login to rainy-01-qfe0 as user root was successful.
Download of com.sun.admin.ossvermgr.cli.OsServerMgrCli from
rainy-01-qfe0 was successful.

# /usr/sadm/bin/smdiskless list -H mikey1:898 --
Loading Tool: com.sun.admin.ossvermgr.cli.OsServerMgrCli from mikey1:898
Login to mikey1 as user root was successful.
Download of com.sun.admin.ossvermgr.cli.OsServerMgrCli from mikey1:898 was
successful.
Platform
-----
i386.i86pc.Solaris_10
sparc.sun4us.Solaris_10
sparc.sun4u.Solaris_10
i386.i86pc.Solaris_9

```

#### 例 7-4 x86:BootSrvA および BootFile DHCP オプションを DHCP サーバー構成に追加する

この例では、PXE ブートを有効にするために必要な BootSrvA および BootFile DHCP オプションを追加する方法を示します。

```

rainy-01# pntadm -A mikey1 -m 0100E0885533BC -f 'MANUAL+PERMANENT' \
-i 0100E0885533BC 192.168.0.101

```

```

rainy-01# dhtadm -A -m 0100E0885533BC -d \
":BootSrvA=192.168.0.1:BootFile=0100E0885533BC:"

```

この例のサーバーアドレスはサーバーの IP アドレスであり、クライアントマクロの名前はクライアントの Ethernet タイプ (01) と MAC アドレスに基づいて作成されています。この番号は、インストールサーバーの /tftpboot ディレクトリで使用されるファイルの名前としても使われます。クライアントマクロの表記は大文字で構成されます。また、このマクロにコロンを含まないようにしてください。

## ▼ Oracle Solaris 10 でディスクレスクライアントを追加する方法

OS サービスを追加した後に、ディスクレスクライアントを追加するには、次の手順を実行します。特に記載している場合を除いて、この手順は、SPARC と x86 プラットフォームに共通の一般的な説明になっています。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。

## 2 ディスクレスクライアントを追加します。

```
# /usr/sadm/bin/smdiskless add -- -i  
ip-address -e ethernet-address  
-n client-name -x os=  
instruction-set.machine-class.Solaris_  
version  
-x root=/export/root/client-name  
-x swap=/export/swap/client-name  
-x swapsize=size -x tz=  
time-zone -x locale=  
locale-name
```

add

指定したディスクレスクライアントを追加します。

--

これ以降のサブコマンド引数が始まることを示します。

-i *ip-address*

ディスクレスクライアントのIPアドレスを指定します。

-e *ethernet-address*

ディスクレスクライアントのイーサネットアドレスを識別します。

-n *client-name*

ディスクレスクライアントの名前を指定します。

-x *os=instruction-set.machine-class. .Solaris\_version*

ディスクレスクライアントの命令アーキテクチャー、マシンクラス、OS、およびSolarisバージョンを指定します。

-x *root=/export/root/client-name*

ディスクレスクライアントのルート(/)ディレクトリを指定します。

-x *swap=/export/root/client-name*

ディスクレスクライアントのスワップファイルを指定します。

-x *swapsize=size*

スワップファイルのサイズをメガバイト(Mバイト)で指定します。デフォルトは24Mバイトです。

-x *tz=time-zone*

ディスクレスクライアントの時間帯を指定します。

-x *locale=locale-name*

ディスクレスクライアントをインストールするロケールを指定します。

詳細は、[smdiskless\(1M\)](#)のマニュアルページを参照してください。

## 3 (省略可能) smdiskless add コマンドを続けて使用して、各ディスクレスクライアントを追加します。

- 4 ディスクレスクライアントがインストールされたことを確認します。

```
# /usr/sadm/bin/smdiskless list -H host-name:898 --
```

#### 例 7-5 SPARC: ディスクレスクライアントサポートを SPARC システムに追加する

この例では、サーバー `bearclaus` から Solaris 10 sun4u ディスクレスクライアント `starlite` を追加する方法を示します。

```
# /usr/sadm/bin/smdiskless add -- -i 172.20.27.28 -e 8:0:20:a6:d4:5b
-n starlite -x os=sparc.sun4u.Solaris_10 -x root=/export/root/starlite
-x swap=/export/swap/starlite -x swappsize=128 -x tz=US/Mountain
-x locale=en_US
```

```
# /usr/sadm/bin/smdiskless list -H starlite:898 --
Loading Tool: com.sun.admin.ossservermgr.cli.OsServerMgrCli from line2-v480:898
Login to line2-v480 as user root was successful.
Download of com.sun.admin.ossservermgr.cli.OsServerMgrCli from line2-v480:898 was
successful.
Platform
```

```
-----
i386.i86pc.Solaris_10
sparc.sun4us.Solaris_10
sparc.sun4u.Solaris_10
i386.i86pc.Solaris_9
sparc.sun4m.Solaris_9
sparc.sun4u.Solaris_9
sparc.sun4us.Solaris_9
```

`smdiskless list -H` コマンド出力には SPARC と x86 の両方のシステムが表示されます。

#### 例 7-6 x86: Oracle Solaris 10 の動作する x86 システムにディスクレスクライアントサポートを追加する

この例では、サーバー `bearclaus` から Oracle Solaris 10 x86 のディスクレスクライアント `mars` を追加する方法を示します。

```
# /usr/sadm/bin/smdiskless add -- -i 172.20.27.176 -e 00:07:E9:23:56:48
-n mars -x os=i386.i86pc.Solaris_10 -x root=/export/root/mars
-x swap=/export/swap/mars -x swappsize=128 -x tz=US/Mountain
-x locale=en_US
```

## ▼ x86: GRUB を使用してディスクレスクライアントをブートする方法

Solaris 10 1/06 OS 以降をインストールした場合、または Solaris 10 1/06 OS 以降にアップグレードした場合は、ディスクレスクライアントのブート手順が変更されています。GRUB を使用してディスクレスクライアントをブートする場合は、次の手順で行います。

---

注 - Solaris 10 6/06 リリース以降、フェイルセーフアーカイブを起動するときに、ブートアーカイブの自動更新を要求されることがなくなりました。ブートアーカイブの更新を要求されるのは、矛盾したブートアーカイブが検出された場合だけです。詳細は、[282 ページの「x86 システムをフェイルセーフモードでブートする方法」](#)を参照してください。

---

始める前に システムをネットワークブートできるように、OS サーバーが次の要件を満たしていることを確認してください。

- ディスクレスクライアントおよび OS サービスの追加に使用するネームサービスがサーバーの `/etc/nsswitch.conf` ファイルのプライマリ名に一致していることを確認します。
- DHCP サービスと `tftp` ブートサービスが実行中であることを確認します。
- ネットワークから起動するために、システム BIOS の PXE ROM オプションが有効になるように設定します。

PXE 対応ネットワークアダプタの中には、ブート時にしばらく表示されるプロンプトに対して特定のキーを押すと、PXE ブートを実行する機能を持つものがあります。ブートの優先順位を BIOS で設定する方法については、ハードウェアのマニュアルを参照してください。

- 1 適切なキーの組み合わせを入力して、ディスクレスクライアントをブートします。GRUB メニューが表示されます。

ネットワークインストールサーバーの設定によっては、使用するシステムに表示される GRUB メニューがここで示した GRUB メニューと異なる可能性があります。

- 2 矢印キーを使ってブートエントリを選択して、**Enter** キーを押します。

選択しない場合は、数秒後にデフォルトの OS インスタンスが自動的にブートします。

- ブート時に **GRUB** メニューを編集して **GRUB** カーネル動作を変更する必要がある場合には、矢印キーを使ってブートエントリを選択したあと、`e` と入力してそのエントリを編集します。

編集するブートコマンドが、GRUB 編集画面に表示されます。



ブート時にカーネルの動作を変更する方法については、第11章「Oracle Solaris ブート動作の変更(手順)」を参照してください。

- 編集を保存して前のメニューに戻るには、**Enter**キーを押します。GRUBメニューが開き、ブートコマンドに加えた編集が表示されます。
- **b**キーを押して、ネットワークからシステムをブートします。

## ▼ SPARC: Oracle Solaris 10 でディスクレスクライアントをブートする方法

始める前に OS サーバーの次の必要条件を確認します。

- ディスクレスクライアントおよびOSサービスの追加に使用するネームサービスがサーバーの `/etc/nsswitch.conf` ファイルのプライマリ名に一致していることを確認します。  
一致しない場合は、ディスクレスクライアントがブートしません。
  - `rpc.bootparamd` デーモンが実行中かどうか確認します。実行中でない場合には起動します。
- ディスクレスクライアントをブートします。

```
ok boot net
```

## ▼ ディスクレスクライアントサポートの削除方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 ディスクレスクライアントサポートを削除します。  

```
# /usr/sadm/bin/smdiskless delete -- -o host-name  
:898 -n client-name
```
- 3 ディスクレスクライアントサポートが削除されたことを確認します。  

```
# /usr/sadm/bin/smosservice list -H host-name:898 --
```

### 例 7-7 ディスクレスクライアントサポートを削除する

この例では、OSサーバー `starlite` からディスクレスクライアント `holoship` を削除する方法を示します。

```
# /usr/sadm/bin/smdiskless delete -- -o starlite:898 -n holoship

Authenticating as user: root

Type /? for help, pressing enter accepts the default denoted by [ ]
Please enter a string value for: password ::
Starting SMC server version 2.0.0.
endpoint created: :898
SMC server is ready.

# /usr/sadm/bin/smosservice list -H starlite:898 --
Loading Tool: com.sun.admin.ossvermgr.cli.OsServerMgrCli from starlite
Login to starlite as user root was successful.
Download of com.sun.admin.ossvermgr.cli.OsServerMgrCli from starlite
was successful.
```

## ▼ ディスクレスクライアントのOSサービスを削除する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solarisのシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 ディスクレスクライアントのOSサービスを削除します。

```
# /usr/sadm/bin/smosservice delete -H $HOST:$PORT -u root -p $PASSWD --
-x instruction-set.all.Solaris_version
```

---

注 - machine-class は all のみがサポートされています。

---

- 3 OSサービスが削除されたことを確認します。

```
# /usr/sadm/bin/smosservice list -H host-name:898 --
```

### 例7-8 ディスクレスクライアントのOSサービスを削除する

次の例では、サーバー starlite からディスクレスクライアントのOSサービス (sparc.all.Solaris\_10) を削除する方法を示します。

```
# /usr/sadm/bin/smosservice delete -H starlite:898 -u root \
-p xxxxxx -- -x sparc.all.solaris_10
Authenticating as user: root
Type /? for help, pressing enter accepts the default denoted by [ ]
Please enter a string value for: password ::

# /usr/sadm/bin/smosservice list -H starlite:898 --
Loading Tool: com.sun.admin.ossvermgr.cli.OsServerMgrCli from starlite:898
Login to starlite as user root was successful.
```

---

Download of com.sun.admin.osservicepatch from starlite:898 was successful

## ディスクレスクライアント OS サービスにパッチを適用する

smoservice patch コマンドを使って、次の操作を実行します。

- OS サーバー上に /export/diskless/Patches パッチスプールディレクトリを設定します。
- パッチスプールディレクトリにパッチを追加します。追加するパッチにより、スプールの既存のパッチが不要になると、不要なパッチは /export/diskless/Patches/Archive に移動されます。
- パッチスプールディレクトリからパッチを削除します。
- パッチスプールディレクトリ内のパッチをリスト表示します。
- スプールされたパッチをクライアントに同期させます。クライアントが更新されたパッチを認識できるように、同期させた各クライアントをリポートする必要があります。あることに留意してください。

---

注 - 推奨 OS パッチを定期的にインストールして、OS サーバーを最新の状態に保ってください。

---

パッチのダウンロード方法については、[482 ページの「パッチをダウンロードおよび適用する方法」](#)を参照してください。

## ディスクレスクライアントの OS パッチの表示

ディスクレスクライアントのパッチは、パッチのタイプに応じて、異なるディレクトリにロギングされます。

- カーネルパッチは、ディスクレスクライアントの /var/sadm/patch ディレクトリにロギングされます。カーネルパッチを表示するには、ディスクレスクライアントで次のコマンドを入力します。

```
% patchadd -p
```

---

注 - このコマンドを実行するには、ディスクレスクライアントにログインしている必要があります。OS サーバー上で patchadd -p コマンドを実行すると、OS サーバー用のカーネルパッチだけが表示されます。

---

- /usrパッチは、OS サーバーの /export/Solaris\_version/var/patch ディレクトリにログインされます。パッチ ID ごとにディレクトリが作成されます。/usrパッチを表示するには、OS サーバーで次のコマンドを入力します。

```
% patchadd -S Solaris_version -p
Patch: 111879-01 Obsoletes: Requires: Incompatibles: Packages: SUNWwsr
```

OS およびアーキテクチャーによりスプールされたすべてのパッチを表示するには、-P オプションを指定した smossservice コマンドを使用します。

## ▼ ディスクレスクライアントの OS パッチの追加方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 ディスクレスクライアントシステムにログインし、シャットダウンします。

```
# init 0
```

- 3 パッチをスプールディレクトリに追加します。

```
# /usr/sadm/bin/smossservice patch -- -a /var/patches/ patch-ID-revision
```

追加するパッチが別のパッチに依存する場合は、次のメッセージが表示され、パッチを追加できません。

```
The patch patch-ID-revision could not be added
because it is dependent on other patches which have not yet been spooled.
You must add all required patches to the spool first.
```

- 4 パッチがスプールされたことを確認します。

```
# /usr/sadm/bin/smossservice patch -- -P
```

- 5 スプールされたパッチをディスクレスクライアントにプッシュします。

```
# /usr/sadm/bin/smossservice patch -- -m -U
```

---

注-パッチをディスクレスクライアントにプッシュおよび同期させるには、1パッチあたり最大90分ほどかかることがあります。

---

- 6 パッチがディスクレスクライアントに適用されたことを確認します。

```
# /usr/sadm/bin/smossservice patch -- -P
```

## 例 7-9 ディスクレスクライアントの OS パッチを追加する

この例では、Solaris 8 パッチ (111879-01) をサーバーのディスクレスクライアントの OS サービスに追加する方法を示します。

```
# /usr/sadm/bin/smosservice patch -- -a /var/patches/111879-01
Authenticating as user: root

Type /? for help, pressing <enter> accepts the default denoted by [ ]
Please enter a string value for: password ::
Loading Tool: com.sun.admin.osservicemgr.cli.OsServerMgrCli from starlite
Login to starlite as user root was successful.
Download of com.sun.admin.osservicemgr.cli.OsServerMgrCli from starlite
was successful..
.
# /usr/sadm/bin/smosservice patch -- -P
Patches In Spool Area
Os Rel Arch Patch Id Synopsis
-----
8      sparc 111879-01 SunOS 5.8: Solaris Product Registry patch SUNWwsr

Patches Applied To OS Services
Os Service Patch
-----
Solaris_8

Patches Applied To Clone Areas
Clone Area Patch
-----
Solaris_8/sun4u Patches In Spool Area
Os Rel Arch Patch Id Synopsis
-----
8      sparc 111879-01 SunOS 5.8: Solaris Product Registry patch SUNWwsr
.
.
.
# /usr/sadm/bin/smosservice patch -- -m -U
Authenticating as user: root

Type /? for help, pressing <enter> accepts the default denoted by [ ]
Please enter a string value for: password ::
Loading Tool: com.sun.admin.osservicemgr.cli.OsServerMgrCli from starlite
Login to starlite as user root was successful.
Download of com.sun.admin.osservicemgr.cli.OsServerMgrCli from starlite
was successful.

# /usr/sadm/bin/smosservice patch -- -P
Authenticating as user: root
.
.
.
Patches In Spool Area
Os Rel Arch Patch Id Synopsis
-----
8      sparc 111879-01 SunOS 5.8: Solaris Product Registry patch SUNWwsr

Patches Applied To OS Services
```

```

Os Service                               Patch
-----
Solaris_8

Patches Applied To Clone Areas
Clone Area                               Patch
-----
Solaris_8/sun4u

```

## ディスクレスクライアント問題のトラブルシューティング

この節では、ディスクレスクライアントを管理するときに発生する問題と、それらに適用できる解決方法について説明します。

### ディスクレスクライアントのインストールの問題

`smosservice add` コマンドを実行しても、ルート (/) および `/usr` ファイルシステム内の `ARCH=all` が指定されているパッケージは、いずれもインストールされません。つまり、これらのパッケージは読み飛ばされます。警告やエラーメッセージは表示されません。これらのパッケージは、新規に作成した Oracle Solaris OS サービスに手動で追加する必要があります。この作業は、Solaris 2.1 OS 以降で発生します。この作業は、SPARC および x86 の両方のクライアントに適用されます。失われるパッケージのリストは、稼働している Oracle Solaris リリースによって異なります。

#### ▼ 失われた ARCH=all パッケージを検出してインストールする方法

ここでは、Oracle Solaris OS サービスをサーバー上に作成したあとに、失われた `ARCH=all` パッケージを検出してインストールする方法について説明します。この手順で取り上げる例は、Solaris 10 6/06 OS を対象としています。

- 1 ARCH=all パラメータが指定されたすべてのパッケージを検出します。

- a. Oracle Solaris 10 イメージ用のメディアの Product ディレクトリに移動します。次に例を示します。

```
% cd /net/server/export/Solaris/s10u2/combined.s10s_u2wos/latest/Solaris_10/Product
```

- b. `pkginfo` ファイルにあるパッケージのうち、`ARCH=all` パラメータが指定されているパッケージの一覧を表示します。

```
% grep -w ARCH=all */pkginfo
```

引数のリストが長すぎるというエラーメッセージが表示される場合は、次のコマンドを代わりに実行してリストを生成できます。

```
% find . -name pkginfo -exec grep -w ARCH=all {} /dev/null \;
```

このコマンドは、結果の生成に少し時間がかかります。

出力は、次のようになります。

```
./SUNWjdmk-base/pkginfo:ARCH=all
./SUNWjhdev/pkginfo:ARCH=all
./SUNWjhrt/pkginfo:ARCH=all
./SUNWjhdem/pkginfo:ARCH=all
./SUNWjhdoc/pkginfo:ARCH=all
./SUNWmlibk/pkginfo:ARCH=all
```

このリストの情報を使用して、`/usr` ファイルシステムにインストールされているパッケージと、ルート (`/`) ファイルシステムにインストールされているパッケージを特定できます。

- c. 生成されたパッケージリストで、`SUNW_PKGTYPE` パラメータの値を確認します。

`/usr` ファイルシステムに属しているパッケージには、`pkginfo` ファイルで `SUNW_PKGTYPE=usr` が設定されています。ルート (`/`) ファイルシステムに属しているパッケージには、`pkginfo` ファイルで `SUNW_PKGTYPE=root` が設定されています。この出力では、すべてのパッケージが `/usr` ファイルシステムに属しています。

- 2 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 3 一時インストール管理ファイルを作成します。

ルート (`/`) ファイルシステムにインストールされているパッケージと、`/usr` ファイルシステムにインストールされているパッケージには、それぞれ個別にインストール管理ファイルを作成する必要があります。

- `/usr` ファイルシステムにインストールされている `ARCH=all` パッケージのために、次の一時インストール管理ファイルを作成します。

```
# cat >/tmp/admin_usr <<EOF
mail=
instance=unique
partial=nocheck
runlevel=nocheck
idepend=nocheck
rdepend=nocheck
space=nocheck
setuid=nocheck
conflict=nocheck
action=nocheck
basedir=/usr_sparc.all
EOF
#
```

- ルート (/) ファイルシステムにインストールされている ARCH=all パッケージのために (パッケージが存在する場合)、次の一時インストール管理ファイルを作成します。

```
# cat >/tmp/admin_root <<EOF
mail=
instance=unique
partial=nocheck
runlevel=nocheck
idepend=nocheck
rdepend=nocheck
space=nocheck
setuid=nocheck
conflict=nocheck
action=nocheck
EOF
#
```

#### 4 失われた ARCH=all パッケージをインストールします。

- a. 現在のディレクトリが **Oracle Solaris 10** イメージ用のメディアの **Product** ディレクトリでない場合は、このディレクトリに移動します。次に例を示します。

```
# cd /net/server/export/Solaris/s10u2/combined.s10s_u2wos/latest/Solaris_10/Product
pwd コマンドを実行して、現在のディレクトリを確認できます。
```

- b. /usr ファイルシステム内の失われた ARCH=all パッケージをインストールします。

```
# pkgadd -R /export/Solaris_10 -a /tmp/admin_usr -d 'pwd' [
package-A package-B ...]
```

pkgadd コマンドを実行するときに、複数のパッケージを指定できます。

- c. ARCH=all パッケージがインストールされたことを確認します。

```
# pkginfo -R /export/Solaris_10 [package-A
package-B ...]
```

- d. ルート (/) ファイルシステム内の失われた ARCH=all パッケージをインストールします。

これらのパッケージが存在しないこともあります。

```
# pkgadd -R /export/root/clone/Solaris_10/sun4u -a /tmp/admin_root -d 'pwd' [
package-X package-Y ...]
```

- e. ARCH=all パッケージがインストールされたことを確認します。

```
# pkginfo -R /export/root/clone/Solaris_10/sun4u [
package-X package- ...]
```

#### 5 失われた ARCH=all パッケージの追加が完了したら、一時インストール管理ファイルを削除します。

```
# rm /tmp/administration-file
```



## 例 7-10 失われた ARCH=all パッケージを検出してインストールする

この例では、失われた ARCH=all パッケージ SUNWjdmk-base を /usr ファイルシステムにインストールする方法を示します。

```
% uname -a
SunOS t1fac46 5.10 Generic_118833-02 sun4u sparc SUNW,UltraSPARC-IIi-cEngine

% cat /etc/release
        Solaris 10 6/06 s10s_u2wos_03 SPARC
        Copyright 2006 Sun Microsystems, Inc. All Rights Reserved.
        Use is subject to license terms.
        Assembled 06 February 2006

% cd /net/ventor/export/Solaris/s10u2/combined.s10s_u2wos/latest/Solaris_10/Product
% grep -w ARCH=all */pkginfo
Arguments too long

% find . -name pkginfo -exec grep -w ARCH=all {} /dev/null \;
./SUNWjdmk-base/pkginfo:ARCH=all
./SUNWjhdev/pkginfo:ARCH=all
./SUNWjhrt/pkginfo:ARCH=all
./SUNWjhdem/pkginfo:ARCH=all
./SUNWjhdoc/pkginfo:ARCH=all
./SUNWmlibk/pkginfo:ARCH=all

% grep -w SUNW_PKGTYPE=usr ./SUNWjdmk-base/pkginfo ./SUNWjhdev/pkginfo ...
./SUNWjdmk-base/pkginfo:SUNW_PKGTYPE=usr
./SUNWjhdev/pkginfo:SUNW_PKGTYPE=usr
./SUNWjhrt/pkginfo:SUNW_PKGTYPE=usr
./SUNWjhdem/pkginfo:SUNW_PKGTYPE=usr
./SUNWjhdoc/pkginfo:SUNW_PKGTYPE=usr

% grep -w SUNW_PKGTYPE=root ./SUNWjdmk-base/pkginfo ./SUNWjhdev/pkginfo ...
% su
Password: xxxxxx
# cat >/tmp/admin_usr <<EOFmail=
instance=unique
partial=nocheck
runlevel=nocheck
idepend=nocheck
rdepend=nocheck
space=nocheck
setuid=nocheck
conflict=nocheck
action=nocheck
basedir=/usr_sparc.all
EOF

# pwd
/net/ventor/export/Solaris/s10u2/combined.s10s_u2wos/latest/Solaris_10/Product

# pkginfo -R /export/Solaris_10 SUNWjdmk-base
ERROR: information for "SUNWjdmk-base" was not found

# pkgadd -R /export/Solaris_10 -a /tmp/admin_usr -d 'pwd' SUNWjdmk-base
```

```
Processing package instance <SUNWjdkm-base> </net/ventor/export/Solaris/s10u2/combined.s10s_u2wos...
```

```
Java DMK 5.1 minimal subset(all) 5.1,REV=34.20060120
Copyright 2005 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
Using </export/Solaris_10/usr_sparc.all>
## Processing package information.
## Processing system information.
```

```
Installing Java DMK 5.1 minimal subset as <SUNWjdkm-base>
```

```
## Installing part 1 of 1.
2438 blocks
```

```
Installation of <SUNWjdkm-base> was successful.
```

```
# pkginfo -R /export/Solaris_10 SUNWjdkm-base
application SUNWjdkm-base Java DMK 5.1 minimal subset
```

```
# rm /tmp/admin_usr
```

## ディスクレスクライアントの一般的な問題のトラブルシューティング

この節では、ディスクレスクライアントで発生する可能性がある一般的な問題とその解決策について説明します。

**問題:** /usr ファイルシステムが nobody によって所有されているときにログインを試みると、ディスクレスクライアントから Owner of the module /usr/lib/security/pam\_unix\_session.so.1 is not root というメッセージが出力される。

**対処方法:** この問題を修正するには、次の対処方法に従います。

1. テキストエディタを使用して、ディスクレスクライアントの server:/export/root/client/etc/default/nfs ファイルを変更します。
2. #NFSMAPID\_DOMAIN=domain 行を次のように変更します。  
NFSMAPID\_DOMAIN=the\_same\_value\_as\_in\_server's\_/var/run/nfs4\_domain
3. OS サーバーとディスクレスクライアントが同じ nfsmapid ドメインを使用していることを確認します。この情報を確認するには、/var/run/nfs4\_domain ファイルを調べます。



**注意** - ディスクレスクライアントの nfs4\_domain ファイル内の値が、OS サーバーの /var/run/nfs4\_domain ファイル内の値と異なっている場合は、ディスクレスクライアントのブート後にシステムにログインすることができません。

---

## 4. ディスクレスクライアントをリブートします。

詳細は、『Oracle Solaris カーネルのチューンアップ・リファレンスマニュアル』の第3章「NFS チューニング可能パラメータ」および `nfsmapid(1M)` のマニュアルページを参照してください。

問題: OS サーバーが次の処理に失敗する。

- クライアントの RARP (Reverse Address Resolution Protocol) 要求に対する応答
- クライアントの `bootparam` 要求に対する応答
- ディスクレスクライアントのルート (*/*) ファイルシステムのマウント

対処方法: ファイル環境で次の解決法を適用できます。

- OS サーバーの `/etc/nsswitch.conf` ファイルの `hosts`、`ethers`、および `bootparams` の最初の参照元として `files` が設定されていることを確認します。
- クライアントの IP アドレスが `/etc/inet/hosts` ファイルに含まれていることを確認します。

---

注 - Solaris 10 8/07 以降のリリースを実行していない場合、クライアントの IP アドレスが `/etc/inet/ipnodes` ファイルに含まれていることも確認する必要があります。

この Oracle Solaris リリースでは、`/etc/inet/hosts` ファイルが、IPv4 エントリと IPv6 エントリの両方を含む単一のファイルとなります。常に同期させる必要がある 2 つの `hosts` ファイルに、IPv4 エントリを保持する必要はありません。`/etc/inet/ipnodes` ファイルは、下位互換性のために、`/etc/inet/hosts` ファイルへの同名のシンボリックリンクに置き換えられています。詳細は、[hosts\(4\)](#) のマニュアルページを参照してください。

---

- クライアントのイーサネットアドレスが `/etc/ethers` ファイルに表示されていることを確認します。
- `/etc/bootparams` ファイルにクライアントのルート (*/*) ディレクトリとスワップ空間への次のパスが含まれていることを確認します。

```
client root=os-server:/export/root/
client swap=os-server:
/export/swap/client
```

スワップのサイズは、ディスクレスクライアントの追加時に `-x swapsize` オプションを指定したかどうかによって異なります。ディスクレスクライアントの追加時に `-x dump` オプションを指定した場合は、次の行が表示されます。

```
dump=os-server:/export/dump/client
dumpsize=512
```

ダンプサイズも、ディスクレスクライアントの追加時に `-x dumpsize` オプションを指定したかどうかによって異なります。

- OS サーバーの IP アドレスが `/export/root/client/etc/inet/hosts` ファイルに設定されていることを確認します。

問題: OS サーバーが次の処理に失敗する。

- クライアントの RARP 要求に対する応答
- クライアントの `bootparam` 要求に対する応答
- ディスクレスクライアントのルート (*/*) ファイルシステムのマウント

対処方法: ネームサービス環境で次の解決法を適用できます。

- OS サーバーとクライアントのイーサネットアドレスおよび IP アドレスが正しくマップされていることを確認します。
- `/etc/bootparams` ファイルにクライアントのルート (*/*) ディレクトリとスワップ空間へのパスが含まれていることを確認します。

```
client root=os-server:/export/  
root/client swap=os-server:/export/  
swap/client swapsize=24
```

スワップのサイズは、ディスクレスクライアントの追加時に `-x swapsize` オプションを指定したかどうかによって異なります。ディスクレスクライアントの追加時に `-x dump` オプションを指定した場合は、次の行が表示されます。

```
dump=os-server:/export/dump/  
client dumpsize=24
```

ダンプサイズも、ディスクレスクライアントの追加時に `-x dumpsize` オプションを指定したかどうかによって異なります。

問題: ディスクレスクライアントパニック

対処方法: 次の内容を確認します。

- OS サーバーのイーサネットアドレスが IP アドレスに正しくマップされていることを確認します。システムをあるネットワークから別のネットワークに物理的に移動した場合、システムの新しい IP アドレスを再マップするのを忘れている可能性があります。
- クライアントの RARP、TFTP (Trivial File Transfer Protocol)、または `bootparam` 要求に応答する「同じサブネット」にある別のサーバーのデータベースに、クライアントのホスト名、IP アドレス、およびイーサネットアドレスが存在しないことを確認します。インストールサーバーから OS をインストールするために、しばしばテストシステムがセットアップされます。このような場合、インストールサーバーはクライアントの RARP または `bootparam` 要求に対して、正しくない IP アドレスを返します。この不正なアドレスにより、間違ったアーキテクチャーのブートプログラムをダウンロードしたり、クライアントのルート (*/*) ファイルシステムのマウントが失敗したりしている可能性があります。

- ディスクレスクライアントの TFTP 要求にインストールサーバー(または以前の OS サーバー)が応答しないことを確認します。このサーバーは不正なブートプログラムを転送しています。ブートプログラムのアーキテクチャーが異なる場合は、クライアントがただちにパニックになります。ブートプログラムが非 OS サーバーから読み込まれた場合、クライアントはそのルートパーティションを非 OS サーバー上に確保し、`/usr` パーティションを OS サーバー上に確保することがあります。この状況では、ルートおよび `/usr` パーティションのアーキテクチャーまたはバージョンが競合する場合、クライアントがパニックに陥ります。
- インストールサーバーと OS サーバーの両方を使用している場合は、`/etc/dfs/dfstab` ファイルに次のエントリがあることを確認してください。

```
share -F nfs -o -ro
/export/exec/Solaris_version- \
instruction-set.all/usr
```

ここで、`version` は 8、9、10 であり、`instruction-set` は `sparc` または `i386` です。

- ディスクレスクライアントのルート (`/`)、`/swap`、`/dump` (指定されている場合) の各パーティションに次の共有エントリがあることを確認します。

```
share -F nfs -o rw=client,root=client
/export/root/client
share -F nfs -o rw=client,root=client /export/swap/
client
share -F nfs -o rw=client,root=client /export/dump/
client
```

- OS サーバーで次のコマンドを入力し、共有されているファイルを確認します。

```
% share
```

OS サーバーでは、ディスクレスクライアントを追加したときに指定した `/export/root/client` および `/export/swap/client_name` (デフォルト)、またはルート、`/swap`、`/dump` の各パーティションを共有する必要があります。

次のエントリが `/etc/dfs/dfstab` ファイルにあることを確認します。

```
share -F nfs -o ro /export/exec/Solaris_version-
instruction-set.all/usr
share -F nfs -o rw=client,root=client /export/root/
client
share -F nfs -o rw=client,root=client /export/swap/
client
```

問題: OS サーバーがディスクレスクライアントの RARP 要求に応答しない

対処方法: クライアントの目的の OS サーバーから、次のクライアントのイーサネットアドレスを使って `snoop` コマンドをスーパーユーザー (`root`) として実行します。

```
# snoop xx:xx:xx:xx:xx:xx
```

問題: ブートプログラムをダウンロードしたが、プロセスの初期にパニックが発生した

対処方法: `snoop` コマンドを使用して、対象の OS サーバーがクライアントの TFTP および NFS 要求に応答するかどうかを確認します。

問題: ディスクレスクライアントがハングアップする

対処方法: OS サーバーで次のデーモンを再起動します。

```
# /usr/sbin/rpc.bootparamd  
# /usr/sbin/in.rarpd -a
```

問題: ディスクレスクライアントの RARP 要求に対するサーバーの応答が不正である

対処方法: OS サーバーで次のデーモンを再起動します。

```
# /usr/sbin/rpc.bootparamd  
# svcadm enable network/rarp
```

# システムのシャットダウンとブートの概要

---

Oracle Solaris は、電子メールとネットワークリソースをいつでも利用できるように、停止することなく動作するように設計されています。この章では、システムのシャットダウンとブートについて概要を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 191 ページの「システムのシャットダウンとブートに関する新機能」
- 197 ページの「シャットダウンとブートについての参照先」
- 197 ページの「シャットダウンとブートの用語」
- 198 ページの「システムのシャットダウンに関するガイドライン」
- 199 ページの「システムのブートに関するガイドライン」
- 200 ページの「システムをシャットダウンする場合」
- 201 ページの「システムをブートする場合」

Oracle Solaris リリースで利用できるすべてのブート機能および方法の概要は、[第 9 章「システムのシャットダウンとブート \(概要\)」](#) を参照してください。

システムのブート手順については、[第 12 章「Oracle Solaris システムのブート \(手順\)」](#) を参照してください。

## システムのシャットダウンとブートに関する新機能

この節では、この Oracle Solaris リリースでの新しいブート機能について説明します。Oracle Solaris リリースの新機能の完全な一覧やその説明については、『[Oracle Solaris 10 9/10 の新機能](#)』を参照してください。

### Oracle Solaris 自動登録の導入

**Oracle Solaris 10 9/10:** Oracle Solaris 自動登録機能は、インストールやアップグレード後の初回システムブート時、またシステム構成が変更された場合にはその後のシス

テムリブート時に、新規インストールされたソフトウェア製品が My Oracle Support に自動的に登録される機構です。自動登録には、ネットワーク上で製品を検出してローカルレジストリに登録することを可能にする、既存のサービスタグ技術が利用されます。

自動登録機能は、SMF サービスにより管理されます。このサービスはデフォルトで有効になっており、ブート時に1回実行されて、新規インストールされた製品を確認します。新製品が検出されると、これらの製品に関するサービスタグ情報が、HTTPS (Hypertext Transfer Protocol Secure) 接続を使って Oracle 製品登録システムに自動的に転送されます。

特権を持つシステム管理者は、この機能に含まれるコマンド行インタフェース (CLI) `usr/sbin/regadm` を使って、インストールやアップグレードプロセスとは関係なく、自動登録 SMF サービスや製品登録を管理できます。

詳細は、[第 17 章「Oracle Solaris 自動登録コマンド regadm の操作 \(手順\)」](#)を参照してください。

## ブートアーカイブの自動復旧

**Oracle Solaris 10 9/10:** このリリースから、SPARC プラットフォームのブートアーカイブ復旧が自動化されました。

x86 プラットフォームでブートアーカイブの自動復旧をサポートするために、新しい `auto-reboot-safe` プロパティがブート構成サービス `svc:/system/boot-config:default` に追加されています。デフォルトでは、不明なブートデバイスからシステムが自動的にリブートすることがないように、このプロパティの値は `false` に設定されています。Oracle Solaris 10 がインストールされている BIOS ブートデバイスと GRUB メニューエントリを自動的に指し示すようにシステムが構成されている場合は、プロパティの値を `true` に設定できます。この値を `true` に設定すると、期限切れのブートデバイスを復旧する目的で、システムを自動的にリブートできるようになります。

このプロパティの値を設定または変更するには、`svccfg` および `svcadm` コマンドを使用します。[svccfg\(1M\)](#) および [svcadm\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

この拡張機能の一般的な情報については、[boot\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

手順については、[297 ページの「x86:auto-reboot-safe プロパティを使用して自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法」](#)を参照してください。



## SPARCでのインストール時更新のサポート

**Oracle Solaris 10 9/10:** このリリースから `itu` ユーティリティが変更され、インストール時更新 (ITU) を使用した SPARC システムのブートがサポートされるようになりました。ほかのベンダーは、ドライバの更新をフロッピーディスク、CD、DVD、および USB ストレージで配布できます。また、新しいパッケージやパッチを使って Oracle Solaris インストールメディアを変更可能な新規ツールも導入されました。これらのツールを使って、ハードウェアプラットフォーム用のソフトウェア更新を配布したり、カスタマイズしたインストールメディアを生成したりできます。作業に関する情報は、[233 ページの「SPARC: 新規作成した ITU を使ってシステムをブートする方法」](#) を参照してください。

また、次のマニュアルページも参照してください。

- [itu\(1M\)](#)
- [mkbootmedia\(1M\)](#)
- [pkg2du\(1M\)](#)
- [updatemedia\(1M\)](#)

## iSCSI ブート

iSCSI ブート機能を使用すると、遠隔地 (ストレージディスクアレイなど) からネットワーク経由でオペレーティングシステムを初期化できます。iSCSI ブートは、SPARC と x86 の両方のシステムからのブートをサポートしています。通常、iSCSI ブートはイニシエータまたはディスクレスクライアントにロードされます。ハードディスクはネットワークに接続された SCSI ターゲット上に存在します。この機能では標準の Ethernet ベースのインフラストラクチャが使用されるため、データ、ストレージ、およびネットワークトラフィックを標準のネットワークに集約できます。

iSCSI ブートを使用した SPARC システムのネットワークブートは、通常の SPARC ネットワークブートと次の点で異なります。

- iSCSI ブートプロセスは、ネットワークブートとローカルディスクからのブートを組み合わせたプロセスである。
- Oracle Solaris OS は、ネットワーク経由ではなくローカルディスクからブートする。

iSCSI ブートを使用した x86 システムのネットワーク経由でのブートは、通常の x86 ネットワークブートと次の点で異なります。

- GRUB ベースのネットワークブートには、PXE クライアント用に構成された DHCP サーバーが必要だが、iSCSI ブートには不要である。ただし、iSCSI ブートで DHCP サーバーを使用することも可能である。
- PXE ブートにはミニルートまたは RAM ディスクのイメージを提供するブートサーバーが必要であるが、iSCSI ブートには不要である。詳細は、[289 ページ](#)の「[x86: GRUB ベースのブートをネットワークから実行する方法](#)」を参照してください。

このリリースで利用可能な iSCSI ブート機能の使用方法については、<http://wikis.sun.com/display/OpenSolarisInfo/iSCSI+Boot+for+OpenSolaris+User%27s+Guide> を参照してください。

## Oracle Solaris 10 のインストール時およびブート時における 2T バイトディスクのサポート

**10 10/09:** 以前の Solaris リリースでは、1T バイトを超えるディスクに Solaris OS をインストールしてブートすることはできませんでした。このリリースからは、最大 2T バイトのディスクに Oracle Solaris OS をインストールしてブートできます。以前のリリースでは、1T バイトを超えるディスクには EFI ラベルを使用する必要がありました。このリリースでは、どのサイズのディスクでも VTOC ラベルを使用できます。ただし、VTOC ラベルでアドレス指定可能な領域は 2T バイトに制限されます。

詳細は、『[Solaris のシステム管理 \(デバイスとファイルシステム\)](#)』の「[ディスク管理の新機能](#)」を参照してください。

## Oracle Solaris での ZFS ブートのサポート

**Solaris 10 10/08:** このリリースには、Oracle Solaris ZFS インストール、および ZFS ブートサポートが含まれます。ZFS ルートファイルシステムをインストールしてブートできるようになりました。この拡張機能は、SPARC プラットフォームと x86 プラットフォームの両方に適用されます。ブート方法、システム操作、およびインストール手順は、この変更をサポートするように修正されました。

詳細は、[211 ページ](#)の「[Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブート](#)」を参照してください。

## x86: findroot コマンド

Solaris Live Upgrade など、すべての Oracle Solaris インストール方法では、ブート対象の x86 システム上のディスクスライスを指定する際に `findroot` コマンドを使用するようになりました。この実装は、UFS ルートだけでなく Oracle Solaris ZFS ルートを含むシステムのブートもサポートします。以前は、`root` コマンド、`root (hd0.0.a)` を使ってブート対象のディスクスライスを明示的に指定していました。この情報は、GRUB で使用される `menu.lst` ファイルに格納されています。

GRUB `menu.lst` エントリのもっとも一般的な書式は次のとおりです。

```
findroot (rootfs0,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/kernel/$ISADIR/unix -B $ZFS-BOOTFS
module$ /platform/i86pc/$ISADIR/boot_archive
```

一部の Oracle Solaris 10 リリースでは、このエントリは次のようになります。

```
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive
```

詳細は、[246 ページの「x86: findroot コマンドの実装」](#)を参照してください。

## bootadm コマンドによるプラットフォーム指定のサポート

`bootadm` コマンドに `-p` オプションが新たに追加されました。

このオプションを使用すると、クライアントプラットフォームがサーバープラットフォームと異なる場合 (ディスクレスクライアントを管理している場合など) に、クライアントシステムのプラットフォームまたはマシンのハードウェアクラスを指定できます。

---

注 `--p` オプションは、`-R` オプションと組み合わせて使用する必要があります。

---

```
# bootadm -p platform -R [altroot]
```

次のいずれかのプラットフォームを指定します。

- `i86pc`
- `sun4u`
- `sun4v`

詳細は、[bootadm\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## SPARC ブートストラッププロセスの再設計

Oracle SPARC ブートストラッププロセスは、Solaris x86 ブートアーキテクチャーとの共通性を高めるために再設計されました。

そのほかの機能拡張として、ブートアーキテクチャーの改善があげられます。DVD、NFS、または HTTP からシステムをブートできるだけでなく、追加のファイルシステムタイプ (Oracle Solaris ZFS ファイルシステムなど) やインストール用の単一のミニルートからもブートできるようになりました。これらの機能拡張により、SPARC システムの柔軟性が向上し、保守の必要性が軽減されます。

この再設計の一貫として、以前は x86 プラットフォームでしか使用できなかったブートアーカイブと `bootadm` コマンドが SPARC ブートアーキテクチャーに不可欠な要素となりました。

SPARC と x86 のブートアーキテクチャーの主な違いは、ブート時のブートデバイスおよびファイルの選択方法です。SPARC プラットフォームでは、引き続き OpenBoot PROM (OBP) を主要な管理インタフェースとして使用し、OBP コマンドを使ってブートオプションを選択します。x86 システムでは、BIOS と GRUB (GRand Unified Bootloader) メニューを介してブートオプションを選択します。

---

注 - SPARC ブートプロセスは変更されましたが、SPARC システムをブートするための管理手順にはまったく影響はありません。システム管理者が行うブート作業は、ブートアーキテクチャーを設計し直す前と何も変わりません。

---

詳細は、[boot\(1M\)](#) および [bootadm\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

また、このマニュアルの 205 ページの「新しい SPARC ブートアーキテクチャーについて」も参照してください。

## x86: 電源ボタンによるシステムシャットダウン開始のサポート

x86 システムで電源ボタンを押して離すと、システムの正常なシャットダウンが開始され、システムの電源が切れます。この機能は、`init 5` コマンドを使ってシステムをシャットダウンするのと同様です。一部の x86 システムでは、BIOS の設定によって、電源ボタンを押してもシャットダウンが開始されない可能性があります。電源ボタンを使ってシステムの正常なシャットダウンを実行できるようにするには、BIOS を設定し直します。

注 - 1999年よりも前に製造され、かつ古いリリースが稼働する一部の x86 システム上では、電源ボタンを押すとすぐにシステムの電源が切れてしまい、正しくシャットダウンされません。acpi-user-options によって無効化された ACPI サポートを使用して稼働しているシステム上で電源ボタンを押しても、これと同じ動作が起こりません。

acpi-user-options の詳細は、[eeprom\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## シャットダウンとブートについての参照先

システムをシャットダウンおよびブートする手順については、次を参照してください。

| シャットダウンとブート作業                         | 詳細                                              |
|---------------------------------------|-------------------------------------------------|
| SPARC システムまたは x86 システムのシャットダウン        | 第 10 章「システムのシャットダウン(手順)」                        |
| ブート動作の変更                              | 第 11 章「Oracle Solaris ブート動作の変更(手順)」             |
| SPARC システムまたは x86 システムのブート            | 第 12 章「Oracle Solaris システムのブート(手順)」             |
| Solaris ブートアーカイブの管理                   | 第 13 章「Oracle Solaris ブートアーカイブの管理(手順)」          |
| SPARC または x86 システムでのブート動作のトラブルシューティング | 305 ページの「SPARC プラットフォームのブートのトラブルシューティング(作業マップ)」 |

## シャットダウンとブートの用語

この節では、システムのシャットダウン時およびブート時に使用する用語について説明します。

### 実行レベルと `init` 状態

「実行レベル」とは、システムの状態を表す文字または数字のことで、どのシステムサービスを使用できるのかが示します。システムは常に定義済み実行レベルの 1 つで動作します。実行レベルは `init` プロセスによって維持されるため、実行レベルは「`init` 状態」と呼ばれることもあります。システム管理者は、`init` コマンドまたは `svcadm` コマンドを使用して、実行レベルを変更します。このマニュアルでは、`init` 状態を実行レベルと呼びます。

ブートオプション 「ブートオプション」とは、システムのブート方法を表します。

次のようなブートオプションがあります。

- 対話式ブート - システムのブート方法に関する情報 (カーネルやデバイスのパス名など) を入力するプロンプトが表示されます。
- 再構成ブート - システムが再構成され、新しく追加されたハードウェアや新しい擬似デバイスがサポートされるようになります。
- 回復ブート - システムがハング状態になったとき、無効なエントリがあるためシステムが正常にブートできないとき、またはユーザーがログインできないときに使用します。

GRUB ベースのブート特有の用語については、[318 ページの「x86: GRUB の用語」](#)を参照してください。

## システムのシャットダウンに関するガイドライン

システムをシャットダウンするときは、次の点に注意してください。

- システムのシャットダウンには、`init` および `shutdown` コマンドを使用します。これらのコマンドは、すべてのシステムプロセスとサービスを正常に終了させてからシャットダウンします。

---

**x86 のみ** - Solaris 10 6/06 以降のリリースが稼働する x86 システムでは、電源ボタンを押して離すことで、システムの正常なシャットダウンを開始できます。この方法で x86 システムをシャットダウンすることは、`init 5` コマンドを使ってシステムをシャットダウンするのと同様です。一部の x86 システムでは、BIOS の設定によって、電源ボタンを押してもシステムのシャットダウンが開始されない可能性があります。電源ボタンを使用するには、BIOS を設定し直します。

---

- サーバーをシャットダウンする場合は、`shutdown` コマンドを使用します。ログインしているユーザーやサーバーのリソースをマウントしているシステムは、サーバーがシャットダウンされる前に通知を受けます。システムのシャットダウンについては、ユーザーが予定を立てられるようあらかじめ電子メールで知らせておくようにします。
- `shutdown` または `init` コマンドを使用してシステムをシャットダウンするには、スーパーユーザー権限が必要です。

- shutdown および init コマンドはどちらも実行レベルを引数に指定します。

もっともよく使用される実行レベルは次の3つです。

- 実行レベル3 - すべてのシステムリソースを使用でき、ユーザーもログインできます。デフォルトでは、システムをブートすると実行レベル3になります。通常の運用で使用されます。この実行レベルは、NFS リソースを共有できるマルチユーザーレベルとも呼ばれます。
- 実行レベル6 - オペレーティングシステムを停止して、/etc/inittab ファイルの initdefault エントリに定義されている状態でリブートします。
- 実行レベル0 - オペレーティングシステムがシャットダウンされ、安全に電源が切断されます。システムの設置場所を変更したり、ハードウェアを追加または削除する場合は、システムを実行レベル0にする必要があります。

実行レベルの詳細は、第18章「サービスの管理(概要)」を参照してください。

## システムのブートに関するガイドライン

システムをブートするときは、次の点に注意してください。

- SPARC システムをシャットダウンしたあとでブートするには、PROM レベルで boot コマンドを使用します。
- x86 システムをシャットダウンしたあとでブートするには、GRUB メニューで OS インスタンスを選択します。
- Solaris 9 リリースと一部の Oracle Solaris 10 リリースでは、x86 システムをシャットダウンしたあとでブートするには、一次ブートサブシステムメニューで boot コマンドを使用します。
- 電源を切断した後に再投入すればシステムをリブートできます。



注意 - このシャットダウン方法をサポートしているリリースが稼働する x86 システムを使用するのでないかぎり、この方法は正常なシャットダウンとは言えません。196 ページの「x86: 電源ボタンによるシステムシャットダウン開始のサポート」を参照してください。このシャットダウン方法は、緊急の場合にだけ使用してください。システムサービスやプロセスが突然終了するため、ファイルシステムに損傷を与えることがあります。この種の損傷の修復作業には手間がかかり、さまざまなユーザーファイルやシステムファイルをバックアップコピーから復元する必要性が生じる可能性があります。

- SPARC システムと x86 システムとでは、ブート時に使用するハードウェアが異なります。これらの違いについては、第15章「x86: GRUB ベースのブート(参照情報)」を参照してください。

# システムをシャットダウンする場合

次の表に、システム管理作業とそれに伴って必要となるシャットダウン方法の種類を示します。

表 8-1 システムのシャットダウン

| システムシャットダウンの理由                                     | 適切な実行レベル                         | 詳細                                                                                                          |
|----------------------------------------------------|----------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 停電のためシステムの電源を切断します。                                | 実行レベル 0。安全に電源を切れる状態              | 第 10 章「システムのシャットダウン(手順)」                                                                                    |
| /etc/system ファイル内のカーネルパラメータを変更します。                 | 実行レベル 6(システムのリブート)               | 第 10 章「システムのシャットダウン(手順)」                                                                                    |
| ファイルシステムを保守します(システムデータのバックアップや復元など)。               | 実行レベル S(シングルユーザーレベル)             | 第 10 章「システムのシャットダウン(手順)」                                                                                    |
| /etc/system などのシステム構成ファイルを修復します。                   | 201 ページの「システムをブートする場合」を参照してください  | なし                                                                                                          |
| システムにハードウェアを追加します(または、システムからハードウェアを削除する)。          | 再構成ブート(ハードウェアを追加または削除したら電源を切断する) | 『Solaris のシステム管理(デバイスとファイルシステム)』の「システムへ周辺デバイスを追加する」                                                         |
| ブート失敗の原因となっていた重要なシステムファイルを修復します。                   | 201 ページの「システムをブートする場合」を参照してください  | なし                                                                                                          |
| カーネルデバッグ(kmdb)をブートして、システムの障害を調査します。                | 実行レベル 0(可能な場合)                   | 第 10 章「システムのシャットダウン(手順)」                                                                                    |
| ハング状態から回復させ、クラッシュダンプを強制します。                        | 201 ページの「システムをブートする場合」を参照してください  | なし                                                                                                          |
| カーネルデバッグ(kmdb)を使用してシステムをリブートします(実行時にデバッグを読み込めない場合) | 実行レベル 6(システムのリブート)               | 311 ページの「SPARC: カーネルデバッグ(kmdb)を使ってシステムをブートする方法」<br>314 ページの「x86: GRUB ブート環境でカーネルデバッグ(kmdb)を使ってシステムをブートする方法」 |

サーバーまたはスタンドアロンシステムのシャットダウンの例については、第 10 章「システムのシャットダウン(手順)」を参照してください。



# システムをブートする場合

次の表に、システム管理作業とそれに伴って必要となるブートオプションを示します。

表 8-2 システムのブート

| システムリブートの理由                                               | 適切なブートオプション                                       | SPARC システムの参照先                                                   | x86 システムの参照先                                                     |
|-----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| 停電のためシステムの電源を切断します                                        | システムの電源を再投入します。                                   | 第 10 章「システムのシャットダウン(手順)」                                         | 第 10 章「システムのシャットダウン(手順)」                                         |
| /etc/system ファイル内のカーネルパラメータを変更します                         | システムを実行レベル 3 でリブートします (NFS リソースを共有できるマルチユーザーレベル)。 | 253 ページの「SPARC: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法」              | 271 ページの「x86: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法」                |
| ファイルシステムを保守します (システムデータのバックアップや復元など)                      | 実行レベル S で Control + D を押して、システムを実行レベル 3 に戻します。    | 254 ページの「SPARC: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法」             | 272 ページの「x86: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法」               |
| /etc/system などのシステム構成ファイルを修復します                           | 対話式ブート。                                           | 255 ページの「SPARC: システムを対話式でブートする方法」                                | 275 ページの「x86: システムを対話式でブートする方法」                                  |
| システムにハードウェアを追加します (または、システムからハードウェアを削除する)                 | 再構成ブート (ハードウェアを追加または削除したら電源を投入する)。                | 『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の「システムディスクまたは二次ディスクの追加 (作業マップ)」 | 『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の「システムディスクまたは二次ディスクの追加 (作業マップ)」 |
| カーネルデバッグ (kadb) を使用してシステムをブートし、システムの障害を調査します              | kadb オプションを使ってブートします。                             | 311 ページの「SPARC: カーネルデバッグ (kadb) を使ってシステムをブートする方法」                | 314 ページの「x86: GRUB ブート環境でカーネルデバッグ (kadb) を使ってシステムをブートする方法」       |
| フェイルセーフモードでシステムをブートし、システムのブート失敗の原因となっている重要なシステムファイルを修復します | フェイルセーフアーカイブをブートします。                              | 264 ページの「SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする方法」                          | 282 ページの「x86 システムをフェイルセーフモードでブートする方法」                            |
| ハング状態から回復させ、クラッシュダンプを強制します。                               | 回復ブートを実行します                                       | 307 ページの「SPARC: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする方法」                      | 313 ページの「x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする方法」                        |



## システムのシャットダウンとブート (概要)

---

この章では、システムのブートについての概要を説明します。Oracle Solaris ブートデザイン、ブートプロセス、および Oracle Solaris OS でシステムをブートする各種方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 204 ページの「Oracle Solaris ブートデザインの基礎」
- 205 ページの「新しい SPARC ブートアーキテクチャーについて」
- 208 ページの「SPARC でのブートアーカイブの実装」
- 209 ページの「x86: GRUB ブートローダーの管理」
- 211 ページの「Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブート」

Oracle Solaris システムのブート手順については、第 12 章「Oracle Solaris システムのブート(手順)」を参照してください。

GRUB を実装していない Solaris システムのブート手順については、第 16 章「x86: GRUB を実装しないシステムのブート(手順)」を参照してください。

システムのシャットダウンとブートに関する新機能については、191 ページの「システムのシャットダウンとブートに関する新機能」を参照してください。

ブートローダーの管理とブート動作の変更に関する概要と手順については、第 11 章「Oracle Solaris ブート動作の変更(手順)」を参照してください。

サービス管理機能 (SMF) によるブートサービスの管理については、388 ページの「SMF とブート」を参照してください。

# Oracle Solaris ブートデザインの基礎

---

注 - この節の情報は、SPARCとx86の両方のプラットフォームに適用されます。

---

Oracle Solaris の基本ブート設計には、次の特徴があります。

- ブートアーカイブの使用

ブートアーカイブとは、システムのブートに必要なすべてのファイルが含まれているRAM ディスクイメージのことです。Solaris OS をインストールすると、一次アーカイブとフェイルセーフアーカイブの2つのブートアーカイブが作成されます。詳細については、[208 ページの「SPARC でのブートアーカイブの実装」](#)を参照してください。

`bootadm` コマンドも、SPARC プラットフォームで使用できるように変更されました。このコマンドは、x86 プラットフォームの場合と同じように機能します。`bootadm` コマンドは、アーカイブの更新と検証を細部にわたって自動的に処理します。インストールまたはシステムのアップグレード中に、`bootadm` コマンドによって初期ブートアーカイブが作成されます。正常なシステムシャットダウンの処理中に、シャットダウンプロセスで、ブートアーカイブの内容がルートファイルシステムと突き合わせてチェックされます。何らかの不一致が検出されると、システムはブートアーカイブを再構築して、リブート時に必ずブートアーカイブとルート (*/*) ファイルシステムの同期がとれるようにします。`bootadm` コマンドを使用してブートアーカイブを手動で更新することもできます。[299 ページの「bootadm コマンドを使用してブートアーカイブを管理する」](#)を参照してください。

---

注 - SPARC システムでは、`bootadm` コマンドの一部のオプションを使用できません。

---

詳細は、[bootadm\(1M\)](#) および [boot\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- インストールおよびフェイルセーフ処理中に **RAM** ディスクイメージをルートファイルシステムとして使用

このプロセスは、SPARC および x86 の両方のプラットフォームで同じになりました。RAM ディスクイメージは、ブートアーカイブから生成されたあと、ブートデバイスからシステムに転送されます。

---

注 - SPARC プラットフォームでは、OpenBoot PROM を引き続き使用して、ブートデバイスにアクセスし、ブートアーカイブをシステムのメモリーに転送します。反対に、x86 プラットフォームでは、システムは最初に BIOS によって制御されます。BIOS を使用して、ネットワークデバイスからのブートアーカイブの転送を開始するか、ブートローダーを実行します。Oracle Solaris OS では、ディスクからのブートアーカイブの転送に使用する x86 ブートローダーは GRUB です。317 ページの「x86: ブートプロセス」を参照してください。

---

ソフトウェアをインストールする場合、RAM ディスクイメージは、インストールプロセス全体に使用されるルートファイルシステムになります。この目的で RAM ディスクイメージを使用すると、リムーバブルメディアからシステムをブートする必要がなくなります。RAM ディスクファイルシステムのタイプには、HSFS (High Sierra File System) または UFS を指定できます。

## 新しい SPARC ブートアーキテクチャーについて

SPARC プラットフォームのブートプロセスは、x86 ブート動作との共通性を高めるために再設計および改善されました。新しい SPARC ブートデザインでは、ブートチェーンの複数の部分に変更を加えなくても、新しいファイルシステムタイプなどの新機能を追加できます。変更には、ブートフェーズの独立性の実装も含まれます。

これらの改善の重要点は、次のとおりです。

- SPARC および x86 プラットフォームでのブートプロセスの共通性
- ネットワークブート動作の共通性
- さまざまなファイルシステムタイプからシステムをより簡単にブートできるようにする、ブートアーキテクチャーの柔軟性

次の4つのブートフェーズは、互いに独立しています。

### 1. OBP (Open Boot PROM) フェーズ

SPARC プラットフォームでのブートプロセスの OBP フェーズは変わっていません。

ディスクデバイスの場合、ファームウェアドライバは通常 OBP ラベルパッケージの「読み込み」メソッドを使用します。このメソッドは、ディスクの先頭にある VTOC ラベルを解析して、指定されたパーティションを見つけます。そして、パーティションのセクター 1-15 がシステムのメモリーに読み込まれます。この領域は一般にブートブロックと呼ばれ、通常はファイルシステムリーダーが格納されています。

### 2. ブーターフェーズ

このフェーズの間に、ブートアーカイブが読み取られ、実行されます。ブートファイルシステムの形式を認識しておく必要があるのは、ブートプロセスのこのフェーズだけです。場合によっては、ブートアーカイブがインストールミニルートでもあることがあります。ブートローダーとブートアーカイブの転送に使用されるプロトコルには、ローカルディスクアクセス、NFS、および HTTP があります。

### 3. RAM ディスクフェーズ

RAM ディスクは、Oracle Solaris OS のインスタンスのブートに必要なカーネルモジュールおよびその他のコンポーネント、またはインストールミニルートで構成されるブートアーカイブです。

SPARC ブートアーカイブは、x86 ブートアーカイブと同じです。ブートアーカイブのファイルシステム形式は非公開です。そのため、システムのブート時に使用されるファイルシステムタイプ (HSFS または UFS ファイルシステムなど) の情報は、ブーターやカーネルには必要ありません。RAM ディスクはブートアーカイブからカーネルイメージを抽出して、それを実行します。RAM ディスク、特にシステムのメモリーに常駐するインストールミニルートのサイズを最小化するため、ミニルートの内容が圧縮されます。この圧縮はファイルレベルごとに行われ、個々のファイルシステム内で実装されます。ファイルを圧縮して、ファイルに圧縮済みのマークを付けるには、`/usr/sbin/fiocompress` ユーティリティーが使用されます。

---

注 - このユーティリティーには、ファイル圧縮ファイルシステム `dcfs` との非公開インタフェースが備わっています。

---

### 4. カーネルフェーズ

カーネルフェーズは、ブートプロセスの最終段階です。このフェーズの間に、Oracle Solaris OS が初期化され、ブートアーカイブから構築された RAM ディスク上に最小ルートファイルシステムがマウントされます。ブートアーカイブがインストールミニルートである場合、OS は引き続きインストールプロセスを実行します。それ以外の場合は、指定されたルートデバイス上にルートファイルシステムをマウントするために十分な 1 組のカーネルファイルおよびドライバが RAM ディスクに格納されます。

そして、カーネルはブートアーカイブから主モジュールの残りを抽出し、それ自体を初期化し、実際のルートファイルシステムをマウントして、ブートアーカイブを破棄します。

## ミニルートの圧縮と展開

RAM ディスクベースのミニルートは、`root_archive` コマンドによって圧縮および展開されます。新しいブートアーキテクチャーをサポートする SPARC システムだけがミニルートの圧縮版を圧縮および展開できます。



注意 - Oracle Solaris 10 バージョンの `root_archive` ツールは、ほかの Oracle Solaris リリースに含まれているツールのバージョンと互換性がありません。そのため、RAM ディスクの操作はアーカイブと同じリリースが動作するシステムでのみ行うようにしてください。

ミニルートの圧縮および展開の詳細については、`root_archive(1M)` のマニュアルページを参照してください。

## ソフトウェアのインストールとアップグレード

Oracle Solaris OS をインストールまたはアップグレードするには、CD/DVD またはネットワークからブートする必要があります。どちらの場合も、ミニルートのルートファイルシステムは RAM ディスクです。このプロセスを使用すると、システムをリブートしなくても Solaris ブート CD または DVD を取り出すことができます。ブートアーカイブにはミニルート全体が含まれています。インストール DVD の構築は、HSFS ブートブロックを使用するように変更されました。ミニルートは、RAM ディスクとして読み込まれる単一の UFS ファイルに圧縮されます。ミニルートはすべての OS インストールタイプに使用されます。

## インストールのメモリー要件

Oracle Solaris 10 9/10 では、SPARC システムをインストールするための最小メモリー要件は 384M バイトです。このメモリー容量では、テキストベースのインストールだけが可能になります。x86 システムの場合、最小メモリー要件は 768M バイトです。また、インストール GUI プログラムを実行するには、768M バイト以上のメモリーが必要です。

## ネットワークブートサーバーの設定プロセスの変更点

ネットワークブートサーバーの設定プロセスが変更されました。ブートサーバーは、ブートストラッププログラムだけでなく、RAM ディスクにも対応するようになりました。RAM ディスクは、CD/DVD からブートしようと、NFS または HTTP を使ってネットワークインストールを実行しようと、すべてのインストールの単一のミニルートとしてダウンロードされ、ブートされます。NFS または `wanboot` プログラム (HTTP) によるネットワークブート用のネットワークブートサーバーの管理は何も変わりません。ただし、ネットワークブートプロセスの内部実装は、次のように変更されました。

1. ブートサーバーはブートアーカイブの形でブートストラップをターゲットシステムに転送する。

- ターゲットシステムはブートアーカイブを RAM ディスクに展開する。
- ブートアーカイブは読み取り専用の初期ルートデバイスとしてマウントされる。

SPARC システムのブートについては、[251 ページの「SPARC システムのブート \(作業マップ\)」](#)を参照してください。

## 複数のカーネルのブートのサポート

SPARC システムでは、`ok` プロンプトからシステムをブートすると、デフォルトのブートデバイスが自動的に選択されます。代替ブートデバイスを指定するには、`boot-device` の NVRAM 変数を変更します。ブート時にコマンド行から代替ブートデバイスまたは代替カーネル (ブートファイル) を指定することもできます。[257 ページの「SPARC: デフォルトのカーネル以外のカーネルをブートする方法」](#)を参照してください。

## SPARCでのブートアーカイブの実装

以前は x86 プラットフォームでしか使用できなかったブートアーカイブが SPARC ブートアーキテクチャーに不可欠な要素となりました。

`bootadm` コマンドは、SPARC プラットフォームでも使用できるように変更されました。このコマンドは、x86 プラットフォームの場合と同じように機能します。`bootadm` コマンドは、アーカイブの更新と検証を細部にわたって処理します。x86 プラットフォームでは、インストールまたはシステムのアップグレード中に、`bootadm` コマンドによって GRUB メニューが更新されます。ブートアーカイブを手動で管理する場合にも、`bootadm` コマンドを使用できます。

`boot-archive` サービスは、サービス管理機能 (SMF) によって管理されます。ブートアーカイブのサービスインスタンスは `svc:/system/boot-archive:default` です。このサービスを有効、無効、または更新するには、`svcadm` コマンドを使用します。SMF を使用したサービスの管理については、[第 18 章「サービスの管理 \(概要\)」](#)を参照してください。

サポートされている Solaris リリースでは、SPARC と x86 の両方のシステムに 2 種類のブートアーカイブが用意されています。

- 一次ブートアーカイブ
- フェイルセーフブートアーカイブ

SPARC ブートアーカイブに含まれるファイルは、`/platform` ディレクトリにあります。



/platform ディレクトリの内容は2つのグループのファイルに分けられます。

- sun4u ブートアーカイブに必要なファイル
- sun4v ブートアーカイブに必要なファイル

ブートアーカイブの管理については、293 ページの「Oracle Solaris ブートアーカイブの管理 (作業マップ)」を参照してください。

## x86: GRUB ブートローダーの管理

オープンソースの GRUB (GRand Unified Bootloader) は、x86 システムのデフォルトのブートローダーです。GRUB は、ブートアーカイブをシステムのメモリーに読み込むソフトウェアです。ブートアーカイブは、システムの起動中にルートファイルシステムがマウントされる前に必要な、重要なファイルの集まりです。ブートアーカイブとは、Oracle Solaris OS のブートに使用されるインタフェースのことです。GRUB の詳細は、<http://www.gnu.org/software/grub/grub.html> を参照してください。grub(5) のマニュアルページも参照してください。

### GRUB ベースのブートの動作

x86 システムの電源を入れると、BIOS (Basic Input/Output System) により、CPU、メモリー、およびプラットフォームハードウェアが初期化されます。初期化フェーズが完了すると、BIOS が構成済みブートデバイスからブートローダーをロードし、システムの制御をブートローダーに移します。「ブートローダー」は、システムの電源を投入したあとに最初に動作するソフトウェアプログラムです。このプログラムによってブートプロセスが開始されます。

GRUB は、menu.lst ファイルと呼ばれる構成ファイルに定義済みのブートオプションが含まれているメニューインタフェースを実装します。また、デフォルトのブート動作の変更など、さまざまなブート機能の実行に使用できる GUI メニューインタフェースからアクセス可能なコマンド行インタフェースも備えています。Solaris OS では、GRUB の実装はマルチブート仕様に準拠しています。マルチブート仕様の詳細は、<http://www.gnu.org/software/grub/grub.html> を参照してください。

Oracle Solaris カーネルはマルチブート仕様に完全に準拠しているため、GRUB を使用して x86 システムをブートできます。GRUB を使用すると、単一の x86 システムにインストールされている各種オペレーティングシステムをブートできます。たとえば、ブート時に GRUB メニューでブートエントリを選択するか、デフォルトで特定の OS をブートするように menu.lst ファイルを設定することで、Oracle Solaris、Linux、または Windows を個別にブートできます。

GRUB では、ファイルシステムとカーネル実行可能ファイルの形式が認識されるため、ディスク上のカーネルの物理的な位置を記録しておかなくても、オペレーティングシステムを読み込むことができます。GRUB ベースのブートで

は、カーネルは、カーネルのファイル名、およびカーネルが存在するドライブとパーティションを指定することでロードされます。詳細は、[321 ページの「GRUB の構成に使用される命名規則」](#)を参照してください。

GRUB を使ってシステムをブートする手順については、[270 ページの「GRUB を使用して x86 システムをブートする \(作業マップ\)」](#)を参照してください。

また、次のマニュアルページも参照してください。

- [boot\(1M\)](#)
- [bootadm\(1M\)](#)
- [grub\(5\)](#)
- [installgrub\(1M\)](#)

## findroot コマンドの GRUB サポート

findroot コマンドは、以前に GRUB が使用していた root コマンドと同様に機能しますが、ブートデバイスに関係なく、目的のディスクを発見する機能が強化されました。findroot コマンドは、Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブートもサポートします。

このコマンドの menu.lst エントリのもっとも一般的な形式は次のとおりです。

```
findroot (rootfs0,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/kernel/$ISADIR/unix
module$ /platform/i86pc/$ISADIR/boot_archive
```

一部の Oracle Solaris リリースでは、このエントリは次のようになります。

```
title Solaris 10 10/08 s10x_u6wos_03 X86
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive

title Solaris failsafe
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

詳細は、[246 ページの「x86: findroot コマンドの実装」](#)を参照してください。

GRUB の参照情報については、[第 15 章「x86: GRUB ベースのブート \(参照情報\)」](#)を参照してください。

# Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブート

Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブートが、Oracle Solaris でサポートされるようになりました。インストールソフトウェアには、ZFS ルートを含むシステムのアップグレードやパッチ適用のサポートも含まれています。ブート方法、システム操作、およびインストール手順は、この変更をサポートするように修正されました。ブートに関する変更には、SPARC プラットフォームでの新しいブートアーキテクチャーの実装があります。新しい SPARC ブート設計では、Solaris x86 ブートアーキテクチャーとの共通性を高める機能強化が行われています。

この機能を使用する前に、『Oracle Solaris 10 9/10 ご使用にあたって』で既知の問題に関する情報を確認してください。

用語の完全なリストなど、Oracle Solaris ZFS の詳細は、『Oracle Solaris ZFS 管理ガイド』の「ZFS の用語」を参照してください。

## Oracle Solaris ZFS のインストール要件

Oracle Solaris の新規インストールを実行する前、または Oracle Solaris Live Upgrade を使って UFS ルートファイルシステムを Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムに移行する前に、次の要件が満たされていることを確認してください。

### ■ Solaris リリース情報

Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからインストールやブートを行う機能は、Solaris 10 10/09 リリースから使用できます。Oracle Solaris Live Upgrade の操作を実行して ZFS ルートファイルシステムに移行するには、Solaris 10 10/09 リリースをインストールしておくか、そのリリースにアップグレードしておく必要があります。

### ■ Oracle Solaris ZFS ストレージプールの容量要件:

スワップデバイスとダンプデバイスは ZFS ルート環境で共有されないため、ブート可能な ZFS ルートファイルシステムに必要なプールの最小容量は、ブート可能な UFS ルートファイルシステムの場合よりも大きくなります。

スワップボリュームのサイズは物理メモリーのサイズの 1/2 (ただし 2G バイト以下かつ 512M バイト以上) として計算されます。ダンプボリュームのサイズは、dumpadm の情報と物理メモリーのサイズに基づいて、カーネルによって計算されます。新しいサイズがシステムの運用をサポートする限り、Oracle Solaris JumpStart プロファイルで、または最初のインストール時に、スワップボリュームとダンプボリュームのサイズを好きなサイズに調整できます詳細は、『Oracle Solaris ZFS 管理ガイド』の「スワップデバイスおよびダンプデバイスの ZFS サポート」を参照してください。

## Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブートの動作

Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブート動作は、UFS ファイルシステムからブートする場合とは異なります。ZFS はインストールやブートに新しい概念をいくつか適用するため、システムのブートに関する基本的な管理業務がいくつか変更されました。ZFS ルートファイルシステムからのブートと UFS ルートファイルシステムからのブートのもっとも重要な違いは、ZFS からのブートでは、デバイス識別子がルートファイルシステムを一意に特定しないことです。これはつまり、ブート環境 (BE) であると言えます。ZFS を使用した場合は、デバイス識別子によって「ストレージプール」が一意に識別されます。ストレージプールには、複数のブート可能データセット (ルートファイルシステム) が含まれていることがあります。そのため、ブートデバイスを指定するほかに、ブートデバイスによって識別されるプール内のルートファイルシステムも指定する必要があります。

x86 システムでは、GRUB によって識別されるブートデバイスに ZFS ストレージプールが含まれている場合、GRUB メニューの作成に使われる `menu.lst` ファイルがそのプールのデータセット階層のルートにあるデータセットに格納されています。このデータセットには、プールと同じ名前が付いています。各プールにそのようなデータセットが 1 つあります。

「デフォルトのブート可能データセット」は、ブート時にマウントされ、ルートプールの `bootfs` プロパティによって定義される、プールのブート可能データセットです。ルートプール内のデバイスがブートすると、このプロパティによって指定されるデータセットがルートファイルシステムとしてマウントされます。

新しい `bootfs` プールプロパティは、指定されたプールのデフォルトのブート可能データセットを指定するためにシステムが使用するメカニズムです。ルートプール内のデバイスが起動すると、デフォルトでルートファイルシステムとしてマウントされるデータセットは `bootfs` プールプロパティによって識別されるデータセットになります。

SPARC システムでは、`boot` コマンドの新しい `-z dataset` オプションを使用することで、デフォルトの `bootfs` プールプロパティが上書きされます。

x86 システムでは、ブート時に GRUB メニューで代替ブート環境を選択することで、デフォルトの `bootfs` プールプロパティが上書きされます。

## SPARC: Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブートをサポートするオプション

SPARC プラットフォームでは、次の2つのブートオプションが新たに追加されました。

- `-L` オプション。システム上の使用可能なすべての BE のリストを表示します。

```
ok boot -L
```

---

注 `-L` オプションは、`ok` プロンプトから実行されます。このオプションは、システム上の使用可能な BE のリストを表示するだけです。システムをブートするには、`-Z` ブートオプションを使用します。

---

- `-Z` オプション。`boot` コマンドでこのオプションを使用すると、`bootfs` プールプロパティによって指定されるデフォルトのデータセット以外のブート可能データセットを指定できます。

```
ok boot -Z dataset
```

ZFS ブートローダーを備えたデバイスで `-L` オプションを使用したときに表示される BE のリストは、当該システムで使用可能な `menu.lst` エントリを反映しています。使用可能な BE のリストのほかに、BE を選択する方法や `-Z` オプションを使ってシステムをブートする方法も表示されます。メニュー項目の `bootfs` 値によって指定されたデータセットは、ブーターによって読み込まれる後続のすべてのファイル (`/etc` ディレクトリに格納されているブートアーカイブや各種の構成ファイルなど) に使用されます。その後、このデータセットはルートファイルシステムとしてマウントされます。

手順については、259 ページの「SPARC システムで指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする」を参照してください。

## x86: ZFS ルートファイルシステムからのブートをサポートするオプション

x86 プラットフォームでは、新しい GRUB キーワード `$ZFS-BOOTFS` が導入されました。x86 システムのブート時に、GRUB メニューエントリに対応するルートファイルシステムが ZFS データセットである場合は、GRUB メニューエントリに、デフォルトで `-$ZFS-BOOTFS` トークンを持つ `B` オプションが含まれます。ZFS ブートローダーをサポートするリリースをインストールする場合は、GRUB `menu.lst` ファイルがこの情報で自動的に更新されます。デフォルトのブート可能データセットは、`bootfs` プロパティによって識別されます。

ZFS ブートローダーをサポートするリリースが稼働する x86 システムでは、この情報は GRUB menu.lst ファイルに組み込まれます。

ZFS からシステムをブートする手順については、[277 ページの「x86: x86 システムで指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする」](#)を参照してください。

# ◆◆◆ 第 10 章

## システムのシャットダウン(手順)

---

この章では、システムのシャットダウン手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 215 ページの「システムのシャットダウン(作業マップ)」
- 216 ページの「システムのシャットダウン」
- 224 ページの「すべてのデバイスの電源を落とす」

システムの実行レベルの概要については、第 18 章「サービスの管理(概要)」を参照してください。

実行レベルとブートファイルに関連した手順については、215 ページの「システムのシャットダウン(作業マップ)」を参照してください。

## システムのシャットダウン(作業マップ)

| 作業                       | 説明                                                               | 参照先                               |
|--------------------------|------------------------------------------------------------------|-----------------------------------|
| システムにログインしているユーザーを確認します。 | <code>who</code> コマンドを使用して、システムにログインしているユーザーを確認します。              | 218 ページの「システムにログインしているユーザーを知る方法」  |
| サーバーをシャットダウンします。         | 適切なオプションで <code>shutdown</code> コマンドを使用して、サーバーをシャットダウンします。       | 218 ページの「サーバーをシャットダウンする方法」        |
| スタンドアロンシステムをシャットダウンします。  | <code>init</code> コマンドを使用し、適切な実行レベルを指定して、スタンドアロンシステムをシャットダウンします。 | 222 ページの「スタンドアロンシステムをシャットダウンする方法」 |

| 作業                 | 説明                                                                                                                                  | 参照先                         |
|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|
| すべてのデバイスの電源を落とします。 | システムの電源を落とすデバイスは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ CPU</li> <li>■ モニター</li> <li>■ 外部デバイス(ディスク、テープ、プリンタなど)</li> </ul> | 224 ページの「すべてのデバイスの電源を落とす方法」 |

## システムのシャットダウン

Oracle Solaris ソフトウェアは、電子メールやネットワークソフトウェアをいつでも利用できるように、停止することなく動作するように設計されています。しかし、システム管理作業を行う場合や緊急事態が発生した場合は、システムをシャットダウンして安全に電源を切断できる状態にする必要があります。場合によっては、システムを一部のシステムサービスしか利用できない中間の実行レベルまで移行する必要があります。

次のような場合がそれに該当します。

- ハードウェアを追加または削除する
- 予定された停電に備える
- ファイルシステムの保守を行う(バックアップなど)

システムのシャットダウンを必要とするシステム管理作業の詳細については、第9章「システムのシャットダウンとブート(概要)」を参照してください。

システムの電源管理機能を使用する方法については、`pmconfig(1M)` のマニュアルページを参照してください。

## システムシャットダウンコマンド

システムをシャットダウンするもっとも基本的な方法は、`init` と `shutdown` の各コマンドを使用する方法です。どちらのコマンドも、システムを「正常な状態でシャットダウンする」ため、すべてのファイルシステムに対する変更がディスクに書き出され、すべてのシステムサービス、プロセス、オペレーティングシステムが正常に終了します。

システムのアボートキーシーケンスを使用したり、電源をオフにしてからオンにする方法では、システムサービスが突然終了してしまうので、正常なシャットダウン方法とはいえません。しかし、緊急時には、これらの方法が必要となる場合もあります。システムの復旧方法については、第12章「Oracle Solaris システムのブート(手順)」 and 第13章「Oracle Solaris ブートアーカイブの管理(手順)」を参照してください。



注 - Solaris 10 6/06 以降のリリースが稼働する x86 システムでは、電源ボタンを押して離すとシステムの正常なシャットダウンが開始されます。この方法は、`init 5` コマンドを使用するのと同様です。

次の表に、各種シャットダウンコマンドとその用途を要約します。

表 10-1 シャットダウンコマンド

| コマンド                                      | 説明                                                                                    | 用途                                                                                                                             |
|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>shutdown</code>                     | <code>init</code> プログラムを呼び出してシステムをシャットダウンする実行可能なシェルスクリプト。デフォルトでは、システムは実行レベル S に移行します。 | 実行レベル 3 で動作しているサーバーで使用します。サーバーにログインしているユーザーに、サーバーが間もなくシャットダウンされることが通知されます。シャットダウンされるサーバーのリソースをマウントしているシステムにも通知されます。            |
| <code>init</code>                         | すべてのアクティブなプロセスを終了し、ディスクを同期させてから実行レベルを変更する実行可能ファイル。                                    | ほかのユーザーが影響を受けないスタンダードシステムで使用します。ユーザーはまもなく行われるシャットダウンについて通知されないため、シャットダウンにかかる時間が短くて済みます。                                        |
| <code>reboot</code>                       | ディスクを同期させ、ブート命令を <code>uadmin</code> システムコールに渡す実行可能ファイル。このシステムコールによってプロセッサが停止します。     | <code>init</code> コマンドを使用するのが望ましい方法です。                                                                                         |
| <code>halt</code> 、 <code>poweroff</code> | ディスクを同期させ、プロセッサを停止する実行可能ファイル。                                                         | すべてのプロセスを正常にシャットダウンしないで、残りのファイルシステムをすべてマウント解除するため、推奨されていません。正常なシャットダウンを行わずにサービスを停止する操作は、緊急時またはほとんどのサービスがすでに停止している場合に限って行うべきです。 |

## システムのダウン時間をユーザーに通知する

`shutdown` コマンドは起動時に、ログインしているすべてのユーザーと、システムリソースをマウントしているすべてのシステムに、警告と最終メッセージという形でシャットダウンを通知します。

サーバーをシャットダウンする必要がある場合に、`init` コマンドではなく `shutdown` コマンドを使用することを推奨するのはこのためです。どちらを使用するにしても、ユーザーには予定されているシャットダウンについてあらかじめ電子メールで知らせるようにしてください。

システム上のどのユーザーに通知する必要があるかを確認するには、`who` コマンドを使用します。このコマンドは、システムの現在の実行レベルを調べる場合にも役立ちます。詳細は、[390 ページの「システムの実行レベルを確認する」](#)と、`who(1)` のマニュアルページを参照してください。

## ▼ システムにログインしているユーザーを知る方法

- 1 シャットダウンするシステムにログインします。
- 2 システムにログインしているすべてのユーザーを表示します。

```
$ who
```

### 例 10-1 システムにログインしているユーザーを知る

次の例は、システムにログインしているユーザーを表示する方法を示しています。

```
$ who
holly      console      May  7 07:30
kryten     pts/0        May  7 07:35  (starlite)
lister     pts/1        May  7 07:40  (bluemidget)
```

- 1 列目のデータはログインしているユーザーのユーザー名を示します。
- 2 列目のデータはログインしているユーザーの端末回線を示します。
- 3 列目のデータはユーザーがログインした日時を示します。
- 4 列目のデータ(省略可能)は、ユーザーがリモートシステムからログインしている場合のホスト名を示します。

## ▼ サーバーをシャットダウンする方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 システムにユーザーがログインしているか調べます。

```
# who
```

ログインしているすべてのユーザーがリスト表示されます。システムがシャットダウンされることを、メールかブロードキャストメッセージで知らせることをお勧めします。

### 3 システムをシャットダウンします。

```
# shutdown -iinit-level -ggrace-period -y
```

**-iinit-level** システムをデフォルトのS以外のinitレベルにします。0、1、2、5、6のいずれかを指定できます。

実行レベル0および5は、システムのシャットダウン用に予約された状態です。実行レベル6はシステムをリブートします。実行レベル2はマルチユーザーオペレーティング状態として使用できます。

**-ggrace-period** システムがシャットダウンするまでの時間(秒)を示します。デフォルト値は60秒です。

**-y** ユーザーの介入なしにシャットダウンを継続します。このオプションを指定しないと、シャットダウンを継続するかどうか60秒後にたずねられます。

詳細は、[shutdown\(1M\)](#)のマニュアルページを参照してください。

### 4 シャットダウンを継続するかどうかたずねられたら、yを入力します。

```
Do you want to continue? (y or n): y
```

-y オプションを指定した場合、このプロンプトは表示されません。

### 5 プロンプトが表示されたら、スーパーユーザーのパスワードを入力します。

```
Type Ctrl-d to proceed with normal startup,  
(or give root password for system maintenance): xxxxxx
```

### 6 システム管理作業を終了したら、**Control+D**を押してデフォルトの実行レベルに戻ります。

### 7 次の表を使用して、システムが shutdown コマンドで指定した実行レベルに移行したことを確認します。

| 指定した実行レベル                        | SPARC システムのプロンプト        | x86 システムのプロンプト          |
|----------------------------------|-------------------------|-------------------------|
| S(シングルユーザーレベル)                   | #                       | #                       |
| 0(電源切断レベル)                       | okまたは>                  | Press any key to reboot |
| 実行レベル3(リモートリソースを共有できるマルチユーザーレベル) | hostname console login: | hostname console login: |

**例 10-2 SPARC: サーバーを実行レベル S にする**

次の例では、shutdown コマンドを使用して、3 分後に、SPARC システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) にしています。

```
# who
root  console      Jun 14 15:49    (:0)

# shutdown -g180 -y

Shutdown started.    Mon Jun 14 15:46:16 MDT 2004

Broadcast Message from root (pts/4) on venus Mon Jun 14 15:46:16...
The system venus will be shut down in 3 minutes .
.
.
Broadcast Message from root (pts/4) on venus Mon Jun 14 15:46:16...
The system venus will be shut down in 30 seconds .
.
.
INIT: New run level: S
The system is coming down for administration.  Please wait.
Unmounting remote filesystems: /vol nfs done.
Shutting down Solaris Management Console server on port 898.
Print services stopped.
Jun 14 15:49:00 venus syslogd: going down on signal 15
Killing user processes: done.

Requesting System Maintenance Mode
SINGLE USER MODE

Root password for system maintenance (control-d to bypass): xxxxxx
single-user privilege assigned to /dev/console.
Entering System Maintenance Mode
#
```

**例 10-3 SPARC: サーバーを実行レベル 0 にする**

次の例では、shutdown コマンドを使用して、SPARC システムを 5 分後に実行レベル 0 にしています。確認用プロンプトが表示されないように -y オプションを指定しています。

```
# who
root      console      Jun 17 12:39
userabc   pts/4         Jun 17 12:39    (:0.0)

# shutdown -i0 -g300 -y

Shutdown started.    Thu Jun 17 12:40:25 MST 2004

Broadcast Message from root (console) on pretend Thu Jun 17 12:40:25...
The system pretend will be shut down in 5 minutes
.
.
.
Changing to init state 0 - please wait
#
```

```

INIT: New run level: 0
The system is coming down. Please wait.
System services are now being stopped.
.
.
.
The system is down.
syncing file systems... done
Program terminated
Type help for more information
ok

```

システムを実行レベル0にしてすべてのデバイスの電源を落とす場合は、[224 ページ](#)の「[すべてのデバイスの電源を落とす方法](#)」を参照してください。

#### 例 10-4 SPARC: サーバーをリブートして実行レベル3にする

次の例では、shutdown コマンドを使用して SPARC システムをリブートし、2分後に実行レベル3にしています。確認用プロンプトが表示されないように `y` オプションを指定しています。

```

# who
root          console      Jun 14 15:49    (:0)
userabc      pts/4          Jun 14 15:46    (:0.0)
# shutdown -i6 -g120 -y
Shutdown started.   Mon Jun 14 15:46:16 MDT 2004

Broadcast Message from root (pts/4) on venus Mon Jun 14 15:46:16...
The system venus will be shut down in 2 minutes

Changing to init state 6 - please wait
#
INIT: New run level: 6
The system is coming down. Please wait.
.
.
.
The system is down.
syncing file systems... done
rebooting...
.
.
.
venus console login:

```

**参照** システムをシャットダウンした理由にかかわらず、すべてのファイルリソースが利用可能かつユーザーがログイン可能な、実行レベル3にシステムが戻ることを想定しているでしょう。システムをマルチユーザーレベルに戻す手順については、[第 12 章「Oracle Solaris システムのブート\(手順\)」](#)を参照してください。

## ▼ スタンドアロンシステムをシャットダウンする方法

スタンドアロンシステムをシャットダウンする必要がある場合は、次の手順を実行します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 システムをシャットダウンします。  

```
# init 5
```

 詳細は、[init\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。
  - 別の方法として、`uadmin` コマンドを使ってシステムをシャットダウンすることもできます。  

```
# uadmin 2 0
```
  - **Solaris 10 6/06** 以降のリリースが稼働する **x86** システムを使用する場合、電源ボタンを押して離すことで、システムの正常なシャットダウンの開始とシステムの電源切断を行えます。  
この機能は、`init 5` コマンドを使ってシステムをシャットダウンするのと同様です。詳細については、[191 ページ](#)の「[システムのシャットダウンとブートに関する新機能](#)」を参照してください。
- 3 次の表を使用して、システムが `init` コマンドで指定した実行レベルに移行したことを確認します。

| 指定した実行レベル                    | SPARC システムのプロンプト        | x86 システムのプロンプト          |
|------------------------------|-------------------------|-------------------------|
| S (シングルユーザーレベル)              | #                       | #                       |
| 2 (マルチユーザーレベル)               | #                       | #                       |
| 0 (電源切断レベル)                  | ok または >                | Press any key to reboot |
| 3 (NFS リソースを共有できるマルチユーザーレベル) | hostname console login: | hostname console login: |

### 例 10-5 `uadmin` コマンドを使ってシステムをシャットダウンする

```
# uadmin 2 0
syncing file systems... done
Program terminated
```

**例 10-6** スタンドアロンシステムを実行レベル0にする

次の例では、`init` コマンドを使用して、x86 スタンドアロンシステムを、電源を安全に落とせるレベルにします。

```
# init 0
#
INIT: New run level: 0
The system is coming down. Please wait.
.
.
.
The system is down.
syncing file systems... [11] [10] [3] done
Press any key to reboot
```

システムを実行レベル0にしてすべてのデバイスの電源を落とす場合は、[224 ページの「すべてのデバイスの電源を落とす方法」](#)を参照してください。

**例 10-7** SPARC: スタンドアロンシステムを実行レベルSにする

次の例では、`init` コマンドを使用して、SPARC スタンドアロンシステムを実行レベルS(シングルユーザーレベル)にしています。

```
# init s
#
INIT: New run level: S
The system is coming down for administration. Please wait.
Unmounting remote filesystems: /vol nfs done.
Print services stopped.
syslogd: going down on signal 15
Killing user processes: done.

SINGLE USER MODE

Root password for system maintenance (control-d to bypass): xxxxxx
single-user privilege assigned to /dev/console.
Entering System Maintenance Mode
#
```

**参照** システムをシャットダウンした理由にかかわらず、すべてのファイルリソースが利用可能かつユーザーがログイン可能な、実行レベル3にシステムが戻ることを想定しているでしょう。システムをマルチユーザーレベルに戻す手順については、[第12章「Oracle Solaris システムのブート\(手順\)」](#)を参照してください。

## すべてのデバイスの電源を落とす

次のような場合は、すべてのシステムデバイスの電源を落とす必要があります。

- ハードウェアを置換または追加する。
- システムの設置場所を変更する。
- 予定された停電や自然災害(接近中の雷雨など)に備える。

電源を落とすシステムデバイスには、CPU、モニター、外部デバイス(ディスク、テープ、プリンタ)などがあります。

すべてのシステムデバイスの電源を落とす前に、前の節の説明に従って、システムを正常にシャットダウンしてください。

### ▼ すべてのデバイスの電源を落とす方法

- 1 次の方法のどちらかを選択して、システムをシャットダウンします。
  - サーバーをシャットダウンする場合は、[218 ページの「サーバーをシャットダウンする方法」](#)を参照してください。
  - スタンドアロンシステムをシャットダウンする場合は、[222 ページの「スタンドアロンシステムをシャットダウンする方法」](#)を参照してください。
- 2 システムをシャットダウンしたら、すべてのデバイスの電源を落とします。必要な場合は、電源ケーブルをコンセントから引き抜きます。
- 3 電源が回復したら、次の手順に従ってシステムとデバイスの電源を投入します。
  - a. 電源ケーブルをコンセントに差し込みます。
  - b. モニターの電源を入れます。
  - c. ディスクドライブ、テープドライブ、プリンタの電源を入れます。
  - d. CPUの電源を入れます。  
システムが実行レベル3になります。



## Oracle Solaris ブート動作の変更(手順)

---

この章では、Solaris システムのブート動作の変更方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 225 ページの「SPARC システムでのブート動作の変更(作業マップ)」
- 235 ページの「x86 システムでのブート動作の変更(作業マップ)」

ブートに関する新機能とブートプロセスの概要については、第 8 章「システムのシャットダウンとブートの概要」を参照してください。

Oracle Solaris システムのブート手順については、第 12 章「Oracle Solaris システムのブート(手順)」を参照してください。

### SPARC システムでのブート動作の変更(作業マップ)

| 作業                      | 説明                                                   | 参照先                                        |
|-------------------------|------------------------------------------------------|--------------------------------------------|
| PROM のリビジョン番号を確認します。    | ok プロンプトで banner コマンドを使用して、システムの PROM リビジョン番号を表示します。 | 227 ページの「SPARC: システムの PROM リビジョン番号を確認する方法」 |
| ブートできるシステム上のデバイスを確認します。 | ブート PROM を使用してブート動作を変更する前に、システム上のデバイスを確認します。         | 227 ページの「SPARC: システム上のデバイスを確認する方法」         |
| 現在のブートデバイスを表示します。       | この手順を使用して、システムのブート元となる現在のデフォルトのブートデバイスを調べます。         | 229 ページの「SPARC: デフォルトのブートデバイスを調べる方法」       |

| 作業                               | 説明                                                                                                                                                                                                                             | 参照先                                                                                                                       |
|----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| デフォルトのブートデバイスを変更します。             | デフォルトのブートデバイスを変更するには、次のいずれかの方法を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ブート PROM で <code>boot-device</code> パラメータを変更する。</li> <li>■ <code>eeprom</code> コマンドを使用して <code>boot-device</code> パラメータを変更する。</li> </ul>        | 229 ページの「SPARC: ブート PROM を使用してデフォルトのブートデバイスを変更する方法」<br>231 ページの「SPARC: <code>eeprom</code> コマンドを使用してデフォルトのブートデバイスを変更する方法」 |
| システムをリセットします。                    | システムをリセットすると、ハードウェアの診断テストが実行されたあとで、システムがリブートします。                                                                                                                                                                               | 231 ページの「SPARC: システムのリセット」                                                                                                |
| デフォルトのブートファイルを変更します。             | システムがブートするデフォルトのカーネルを変更するには、次のいずれかの方法を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ブート PROM を使用して <code>boot-file</code> パラメータを変更する。</li> <li>■ <code>eeprom</code> コマンドを使用して <code>boot-file</code> パラメータを変更する。</li> </ul> | 232 ページの「SPARC: ブート PROM を使用してデフォルトのカーネルを変更する方法」<br>232 ページの「SPARC: <code>eeprom</code> コマンドを使用してデフォルトのカーネルを変更する方法」       |
| インストール時更新 (ITU) を使ってシステムをブートします。 | 新しい ITU ユーティリティを使用すると、作成したインストール時更新で SPARC システムをブートできます。                                                                                                                                                                       | 233 ページの「SPARC: 新規作成した ITU を使ってシステムをブートする方法」                                                                              |

## SPARC: ブート PROM の使用

ブート PROM はシステムのブートに使用します。必要に応じて、システムのブート方法を変更します。たとえば、システムをマルチユーザーレベルにする前に、どのデバイスからブートするかを設定し直したり、ハードウェア診断プログラムを実行したりする場合があります。

システム管理者は、通常 PROM レベルを使ってシステムをブートします。PROM レベルでデフォルトのブートファイルやブートデバイスを変更することもできます。

次のいずれかの作業を行う必要がある場合は、デフォルトのブートデバイスを変更する必要があります。

- 新しいドライブを永久または一時的にシステムに追加します
- ネットワークブート方法を変更します
- スタンドアロンシステムを一時的にネットワークからブートします

すべての PROM コマンドについては、[monitor\(1M\)](#) および [eeprom\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## ▼ SPARC: システムの PROM リビジョン番号を確認する方法

- システムの PROM リビジョン番号を表示するには、`banner` コマンドを使用します。

```
ok banner
Sun Ultra 5/10 UPA/PCI (UltraSPARC-III 333MHz), No Keyboard
OpenBoot 3.15, 128 MB memory installed, Serial #number.
Ethernet address number, Host ID: number.
```

ハードウェア構成情報が表示され、その中に PROM のリビジョン番号があります。この例では、PROM のリビジョン番号は 3.15 です。

## ▼ SPARC: システム上のデバイスを確認する方法

システム上のデバイスを確認して、ブートに適したデバイスを見極めることが必要な場合があります。

始める前に `probe` コマンドを使用してシステムに接続されているデバイスを安全に確認するためには、次のことを行なっておく必要があります。

- PROM の `auto-boot?` パラメータの値を `false` に変更します。

```
ok setenv auto-boot? false
```

- `reset-all` コマンドを発行して、システムのレジスタをクリアします。

```
ok reset-all
```

`sifting probe` コマンドを使用すると、システム上で利用可能な `probe` コマンドを表示できます。

```
ok sifting probe
```

システムのレジスタをクリアしないで `probe` コマンドを実行すると、次のメッセージが表示されます。

```
ok probe-scsi
This command may hang the system if a Stop-A or halt command
has been executed. Please type reset-all to reset the system
before executing this command.
Do you wish to continue? (y/n) n
```

- 1 システム上のデバイスを確認します。

```
ok probe-device
```

- 2 (省略可能) 電源障害後や reset コマンドの使用後にシステムをリブートするには、auto-boot? パラメータを **true** にリセットします。

```
ok setenv auto-boot? true
auto-boot? = true
```

- 3 システムをマルチユーザーモードでブートします。

```
ok reset-all
```

### 例 11-1 SPARC: システム上のデバイスを確認する

次の例は、Ultra 10 システムに接続されているデバイスの確認方法を示しています。

```
ok setenv auto-boot? false
auto-boot? = false
ok reset-all
Resetting ...
```

```
Sun Ultra 5/10 UPA/PCI (UltraSPARC-IIi 333MHz), No Keyboard
OpenBoot 3.15, 128 MB memory installed, Serial #10933339.
Ethernet address 8:0:20:a6:d4:5b, Host ID: 80a6d45b.
```

```
ok probe-ide
Device 0 ( Primary Master )
      ATA Model: ST34321A

Device 1 ( Primary Slave )
      Not Present

Device 2 ( Secondary Master )
      Removable ATAPI Model: CRD-8322B

Device 3 ( Secondary Slave )
      Not Present
```

```
ok setenv auto-boot? true
auto-boot? = true
```

別の方法として、devalias コマンドを使うと、システムに接続されている「可能性のある」デバイスの別名と関連パスを確認できます。次に例を示します。

```
ok devalias
screen          /pci@1f,0/pci@1,1/SUNW,m64B@2
net             /pci@1f,0/pci@1,1/network@1,1
cdrom           /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/cdrom@2,0:f
disk            /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@0,0
disk3          /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@3,0
disk2          /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@2,0
disk1          /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@1,0
disk0          /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@0,0
ide            /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3
floppy         /pci@1f,0/pci@1,1/ibus@1/fdthree
ttyb           /pci@1f,0/pci@1,1/ibus@1/se:b
ttya           /pci@1f,0/pci@1,1/ibus@1/se:a
keyboard!     /pci@1f,0/pci@1,1/ibus@1/su@14,3083f8:forcemode
```

```
keyboard      /pci@1f,0/pci@1,1/ebus@1/su@14,3083f8
mouse         /pci@1f,0/pci@1,1/ebus@1/su@14,3062f8
name          aliases
```

## ▼ SPARC: デフォルトのブートデバイスを調べる方法

- 1 システムを **ok PROM** プロンプトにします。

詳細は、[222 ページの「スタンドアロンシステムをシャットダウンする方法」](#)を参照してください。

- 2 `printenv` コマンドを使用して、デフォルトのブートデバイスを調べます。

```
ok printenv boot-device
```

`boot-device` ブートするデバイスを設定するパラメータを示します。

`device[n]` `boot-device` の値 (disk または net) を設定します。 `n` はディスク番号です。

次のような形式で、デフォルトのブートデバイス (`boot-device`) が表示されます。

```
boot-device = /pci@1f,4000/scsi@3/disk@1,0:a
```

デフォルトのブートデバイスがネットワークブートデバイスの場合は、次のような出力が表示されます。

```
boot-device = /sbus@1f,0/SUNW,fas@e,8800000/sd@a,0:a \
/sbus@1f,0/SUNW,fas@e,8800000/sd@0,0:a disk net
```

## ▼ SPARC: ブート PROM を使用してデフォルトのブートデバイスを変更する方法

デフォルトのブートデバイスをほかのデバイスに変更するには、まずシステム上のデバイスを確認しておく必要があります。システム上のデバイスを確認する方法については、[227 ページの「SPARC: システム上のデバイスを確認する方法」](#)を参照してください。

- 1 実行レベル **0** に変更します。

```
# init 0
```

`ok PROM` プロンプトが表示されます。詳細は、[init\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 2 `boot-device` パラメータの値を変更します。

```
ok setenv boot-device device[n]
```

ディスク番号を確認する必要がある場合は、probe コマンドのいずれかを使用します。

- 3 デフォルトのブートデバイスが変更されていることを確認します。

```
ok printenv boot-device
```

- 4 新しい boot-device 値を保存します。

```
ok reset-all
```

新しい boot-device 値が PROM に書き込まれます。

### 例 11-2 SPARC: デフォルトのブートデバイスを変更する

この例では、デフォルトのブートデバイスをディスクに設定しています。

```
# init 0
#
INIT: New run level: 0
.
.
.
The system is down.
syncing file systems... done
Program terminated
ok setenv boot-device /pci@1f,4000/scsi@3/disk@1,0
boot-device =          /pci@1f,4000/scsi@3/disk@1,0
ok printenv boot-device
boot-device            /pci@1f,4000/scsi@3/disk@1,0
ok boot
Resetting ...

screen not found.
Can't open input device.
Keyboard not present.  Using ttya for input and output.

Sun Enterprise 220R (2 X UltraSPARC-II 450MHz), No Keyboard
OpenBoot 3.23, 1024 MB memory installed, Serial #13116682.
Ethernet address 8:0:20:c8:25:a, Host ID: 80c8250a.
```

```
Rebooting with command: boot disk1
Boot device: /pci@1f,4000/scsi@3/disk@1,0  File and args:
```

この例では、デフォルトのブートデバイスをネットワークに設定しています。

```
# init 0
#
INIT: New run level: 0
.
.
.
The system is down.
syncing file systems... done
Program terminated
```

```
ok setenv boot-device net
boot-device = net
ok printenv boot-device
boot-device net disk
ok reset
Sun Ultra 5/10 UPA/PCI (UltraSPARC-III 333MHz), No Keyboard
OpenBoot 3.15, 128 MB memory installed, Serial #number.
Ethernet address number, Host ID: number.
```

```
Boot device: net File and args:
.
.
.
pluto console login:
```

## ▼ SPARC: eeprom コマンドを使用してデフォルトのブートデバイスを変更する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 ブートする代替カーネルを指定します。  
`# eeprom boot-device new-boot-device`
- 3 新しいパラメータが設定されていることを確認します。  
`# eeprom boot-device`  
この出力には、boot-device パラメータの新しい eeprom 値が表示されるはずですが、

## SPARC: システムのリセット

ok プロンプトで次のコマンドを実行します。

```
ok reset-all
```

自己診断プログラムが実行され、ハードウェアの診断テストが行われたあと、auto-boot? パラメータが true に設定されていれば、システムがリブートします。

## ▼ SPARC: ブート PROM を使用してデフォルトのカーネルを変更する方法

- 1 実行レベル 0 に変更します。

```
# init 0
```

ok PROM プロンプトが表示されます。詳細は、[init\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 2 boot-file プロパティを代替カーネルに設定します。

```
ok setenv boot-file boot-file
```

- 3 デフォルトのブートデバイスが変更されていることを確認します。

```
ok printenv boot-file
```

- 4 新しい boot-file 値を保存します。

```
ok reset-all
```

新しい boot-file 値が PROM に書き込まれます。

## ▼ SPARC: eeprom コマンドを使用してデフォルトのカーネルを変更する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 ブートする代替カーネルを指定します。

```
# eeprom boot-file new boot-file
```

次に例を示します。

```
# eeprom boot-file=kernel.name/sparcv9/unix
```

- 3 新しいパラメータが設定されていることを確認します。

```
# eeprom boot-file
```

この出力には、指定したパラメータの新しい eeprom 値が表示されるはずですが、



## SPARCでのITU構築ツールのサポート

ITUユーティリティーを使用して、ソフトウェアパッケージとパッチのドライバ更新(DU)形式への変換、およびOracle Solaris インストールメディアへのパッチ適用を行います。これにより、これらの新規パッケージとパッチを使用してシステムをブートできるようになります。Oracle Solaris 10 9/10以降、ituコマンドが変更され、SPARCシステム上にITUを作成して格納し、新規作成したITUを使ってシステムをブートできるようになりました。

### ▼ SPARC: 新規作成したITUを使ってシステムをブートする方法

ITUユーティリティーを使用すると、インストール時にドライバをすぐにインストールして、バグ修正を適用できます。次の手順は、SPARCシステムでITUを作成および格納し、新規作成したITUを使ってシステムをブートするプロセスを示します。

- 1 ITUを使ってブートするシステムで、ユーパーユーザーになります。
- 2 ituコマンドに次のオプションを指定して、ITUを作成します。

```
# itu makedu -r solaris-release -o iso-file package1-name package2-name...
```

makedu            1つ以上のドライバパッケージを入力として取り、パッケージをDU形式に変換します。

-r solaris-release    ドライバを更新するOracle Solaris リリースの番号を指定します。使用されるリリース番号の形式は、5.10です

-o iso-file            作成するISOイメージファイルのパスを指定します。

ituコマンドおよびそのオプションすべての詳細は、[itu\(1M\)](#)のマニュアルページを参照してください。

- 3 システムをok PROMプロンプトにします。
- 4 auto-bootプロパティを無効にします。  
ok setenv auto-boot?=false
- 5 システムをリセットします。  
ok reset-all

---

注 - 前の手順により、システムのブート時にitu-device文字列が消去されないことが保証されます。このため、この手順は重要です。

---

- 6 cdrom別名を見つけます。  
ok devalias cdrom

この別名は、システムに接続されている CD または DVD ドライブのデバイスパスです。この出力は、システムによって変化することに留意してください。たとえばこの手順では、`cdrom` 別名の場所は次のようになります。

```
/pci@8,700000/scsi@1/disk@6,0:f
```

- 7 ITU のインストールに使用される `itu-device` のパスを設定します。

次の例に示すように、`config-string` の最初の部分で手順 6 の出力が使用されます。

```
ok> " /pci@8,700000/scsi@1/disk@6,0:f" d# 80 config-string itu-device
```

---

注 - 80 は文字列の最大長を表します。`cdrom` 別名を変更して 80 文字より長くする場合は、この数値を必要に応じて大きくします。

---

- 8 ITU を使ってシステムをブートします。

```
ok boot
```

システムをブートし、Solaris インストールプロセスが始まると、`itu-device` に格納されている ITU がシステムにより検出されます。次に、`itu-device` で使用可能なシステムコンポーネントがシステムで識別および構成されます。これらのドライバ用のデバイスも識別および構成されます。インストールが完了すると、デバイスがインストール先として使用可能になります。

- 9 インストールの完了後に、`auto-boot` プロパティのデフォルト値が復元されて、システムがブートします。

```
ok setenv auto-boot?=true
```

前述の例では、`auto-boot` プロパティのデフォルト値が `true` であることを前提としています。

- 10 システムをブートします。

```
ok boot
```

## x86 システムでの ブート動作の変更(作業マップ)

| 作業                                                         | 説明                                                                                                                                         | 参照先                                                           |
|------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| <p>eeeprom コマンドを使用してブートファイルパラメータを設定します。</p>                | <p>eeeprom コマンドを使用して、x86 システムのブート動作を変更します。eeeprom コマンドを使って設定するブートオプションは、ブート時に GRUB メニューでカーネルの動作を変更してオプションを上書きしないかぎり、システムをリブートしても持続します。</p> | <p>236 ページの「x86: eeeprom コマンドを使用してブート動作を変更する方法」</p>           |
| <p>ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更します。</p>                    | <p>ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更します。GRUB メニューでブート動作を変更することで指定するブートオプションは、次にシステムをリブートするまでしか持続しません。</p>                                       | <p>239 ページの「x86: ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更する方法」</p>        |
| <p>手動で menu.lst ファイルを編集してブート動作を変更します。</p>                  | <p>menu.lst 構成ファイルを編集して新しい OS エントリを追加するか、コンソールをリダイレクトすることで、ブート動作を変更します。ファイルに加えた変更は、システムをリブートしても持続します。</p>                                  | <p>242 ページの「x86: menu.lst ファイルを編集してブート動作を変更する方法」</p>          |
| <p>menu.lst ファイルを、findroot コマンドをサポートするエントリを含むように変更します。</p> | <p>インストールまたはアップグレードが完了したら、findroot コマンドを使用するそのほかのメニューエントリを menu.lst ファイルメニューに追加できます。</p>                                                   | <p>248 ページの「x86: findroot コマンドを使用する GRUB メニューエントリを追加する方法」</p> |

## x86 システムのブート動作を変更する

x86 システムのブート動作を変更する主な方法は、次のとおりです。

- eeeprom コマンドを使用する方法。

eeeprom コマンドを使用して、一連の標準プロパティに別の値を割り当てます。これらの値は、SPARC の OpenBoot PROM NVRAM 変数と等価で、/boot/solaris/bootenv.rc ファイルに格納されます。eeeprom コマンドを使用してブート動作に加えた変更は、システムをリブートしても持続し、ソフトウェアのアップグレード中も保持されます。これらの変更を上書きするに

は、ブート時に GRUB メニューを編集するか、`menu.lst` ファイルを編集します。詳細は、[eeprom\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

注 - `bootenv.rc` ファイルを直接編集して加えた変更は、ソフトウェアのアップグレード中に必ずしも保持されるとは限りません。そのため、この方法はお勧めしません。この種類の変更を加える場合は、`eeprom` コマンドを使用する方法をお勧めします。

- ブート時に GRUB メニューを編集する方法。  
ブート時に GRUB カーネルの動作を変更して加えた変更は、`eeprom` コマンドを使用して設定するオプションより優先されます。ただし、これらの変更の効果は、次にシステムをブートするまでしか持続しません。詳細は、[kernel\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。
- 手動で `GRUBmenu.lst` ファイルを編集する方法。



注意 - `menu.lst` エントリに加えられたシステム生成の変更はすべて、システムのアップグレード中に変更されるか、失われます。ただし、手動で追加した新しいブートエントリは、アップグレード後も維持されます。`eeprom` の設定を上書きするには、ブート時に GRUB メニューを編集するか、`menu.lst` ファイルを編集します。ブート時に GRUB メニューを編集して加えた変更は持続しません。ただし、`menu.lst` ファイルを編集して加えた変更は、システムをリブートしても持続します。

## ▼ x86: `eeprom` コマンドを使用してブート動作を変更する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 指定されたパラメータを変更します。  

```
# eeprom parameter=new-value
```
- 3 新しいパラメータが設定されていることを確認します。  

```
# eeprom parameter
```

  
この出力には、指定したパラメータの新しい `eeprom` 値が表示されるはずですが、

**例 11-3 x86: eeprom コマンドを使用して boot-file パラメータを設定する**

次の例は、システムが 64 ビットカーネルをブートするように手動で指定する方法を示しています。64 ビット対応のシステムが必要です。

```
# eeprom boot-file=kernel/amd64/unix
```

次の例は、64 ビット対応システムで 32 ビットカーネルを手動でブートする方法を示しています。

```
# eeprom boot-file=kernel/unix
```

次の例は、システム上で自動検出されたデフォルトのブート動作を復元する方法を示しています。

```
# eeprom boot-file=""
```

**x86: ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更する**

次の例は、ZFS ルートファイルシステムからのシステムのブートをサポートする Oracle Solaris リリースの GRUB メインメニューを示しています。このメニューは、menu.lst ファイルの内容に基づいて、システム上のブート可能なすべての OS インスタンスのメニューエントリを含んでいます。特に指定がないかぎり、メニューの最初のエントリはデフォルトです。別のブートエントリをデフォルトとして指定するには、default=n コマンドを menu.lst ファイルに追加します。この場合の n は 0 (最初のブートエントリ) から始まる数値です。

```
GNU GRUB  version 0.95  (637K lower / 3144640K upper memory)
+-----+
be1)
be1 failsafe
be3
be3 failsafe
be2
be2 failsafe
+-----+
      Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted.
      Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
      commands before booting, or 'c' for a command-line.
```

---

注 - menu.lst ファイルに含まれる情報は、Oracle Solaris のリリースと使用したインストール方法によって異なります。

---

GRUB メニューのブートエントリを編集するには、矢印キーを使ってエントリを選択してから、e と入力します。

```

GNU GRUB  version 0.95  (637K lower / 3144640K upper memory)
+-----+
findroot (BE_be1,0,a)
bootfs rpool/ROOT/szboot_0508
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive
+-----+
      Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted.
      Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
      commands before booting, or 'c' for a command-line.

```

ブート時に GRUB メニューを編集する方法については、239 ページの「[x86: ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更する方法](#)」を参照してください。

## Oracle Solaris 10 で GRUB メニューを編集する

次の例は、さまざまな GRUB 実装の編集メニューを示しています。

### GRUB ZFS をサポートしている場合

```

grub edit> kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS,prop=value
[.prop=value...][-asrvxk] [-m smf-options] [-i altinit]

```

---

注 - ZFS をサポートしているシステムでブート引数を追加するときは、デフォルトの `-B $ZFS-BOOTFS` 引数の後ろに追加の `-B` オプションを含めるようにしてください。

---

### GRUB UFS をサポートしている場合

```

grub edit> kernel /platform/i86pc/multiboot [-asrvxk] [-m smf-options]
[-i altinit][-B prop=value [.prop=value...]]

```

## ブート時に GRUB メニューを編集して指定できるブート引数

次の一覧では、ブート時に GRUB メニューを編集して指定できるブート引数とオプションについて説明します。

|                        |                                                                   |
|------------------------|-------------------------------------------------------------------|
| <code>multiboot</code> | ブートするカーネルを指定します                                                   |
| <code>-a</code>        | 構成情報の入力を求めるプロンプトを表示します                                            |
| <code>-s</code>        | システムをシングルユーザーモードでブートします                                           |
| <code>-r</code>        | 再構成用ブートを指定します                                                     |
|                        | 接続されているすべてのハードウェアデバイスを検索してから、実際に見つかったデバイスだけに、ファイルシステムのノードを割り当てます。 |

|                                      |                                                                                                     |
|--------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| -v                                   | 詳細メッセージを有効にした状態でシステムをブートします                                                                         |
| -x                                   | クラスタモードではシステムをブートしません                                                                               |
| -k                                   | カーネルデバッグを有効にした状態でシステムをブートします                                                                        |
| -m <i>smf-options</i>                | サービス管理機能 (Service Management Facility、SMF) のブート動作を制御します<br><br>復元オプションとメッセージオプションという、2種類のオプションがあります |
| -i <i>altinit</i>                    | 代替実行可能ファイルを原始プロセスとして指定します。 <i>altinit</i> は実行可能ファイルへの有効なパスです。                                       |
| -B <i>prop=value[,prop=value]...</i> | カーネルのブートプロパティを指定します。                                                                                |

次に、`-B prop=val` オプションを使用して GRUB メニューでブート動作を変更できる各種方法を示します。

|                                      |                                                                      |
|--------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|
| -B <i>console=ttya</i>               | 出力先をコンソールから <i>ttya</i> に変更します。                                      |
| -B <i>acpi-enum=off</i>              | デバイスの ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) 列挙を使用不可にします。 |
| -B <i>console=ttya,acpi-enum=off</i> | 出力先をコンソールから <i>ttya</i> に変更し、デバイスの ACPI 列挙を使用不可にします。                 |
| -B <i>acpi-user-options=0x2</i>      | ACPI を完全に使用不可にします。                                                   |

注- プロパティを指定するときに、`eeeprom` コマンドと GRUB コマンド行を使用した場合には、GRUB コマンドが優先されます。

## ▼ x86: ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更する方法

ブート時に GRUB メニューを編集して GRUB カーネルの動作を変更すると、その変更はシステムをリブートするまでしか持続しません。次にシステムをブートすると、デフォルトのブート動作が復元されます。

- 1 システムを再起動します。  
ブートシーケンスが始まると、GRUB メインメニューが表示されます。

- 2 矢印キーを使用して、編集するブートエントリを選択します。
- 3 eと入力して、**GRUB** 編集メニューにアクセスします。
- 4 このメニューで、kernel 行または kernel\$ 行を選択します。
- 5 eと入力して、ブート引数をその行に追加します。
- 6 指定する追加のブート引数を入力します。
- 7 **Return** キーを押して変更を保存し、前のメニューに戻ります。

---

注- 変更を保存せずに GRUB メインメニューに戻るには、Escape キーを押します。

---

- 8 システムをブートするために、bと入力します。  
適用した変更は、システムをブートしたあとで有効になります。

#### 例 11-4 x86: 64 ビット対応のシステムで 32 ビットのカーネルをブートする

64 ビット対応のシステムで 32 ビットのカーネルをブートするには、kernel/unix 引数を追加します。

```
grub edit> kernel /platform/i86pc/multiboot kernel/unix
```

#### 例 11-5 x86: シリアルコンソールをリダイレクトする

シリアルコンソールを ttyb にリダイレクトするには、-B console=ttyb 引数を追加します。

```
grub edit> kernel /platform/i86pc/multiboot -B console=ttyb
```

また、次の例に示すように、input-device/output-device プロパティを使用することもできます。

```
grub edit> kernel /platform/i86pc/multiboot -B input-device=ttyb,output-device=ttyb
```

次の例は、シリアル回線速度を上書きする方法を示しています。

```
grub edit> kernel /platform/i86pc/multiboot -B ttyb-mode="115200,8,n,1,-"
```

注意: この例のプロパティ値には、プロパティの区切り文字としてのコンマも含まれています。プロパティの構文解析部と混同しないようにするため、二重引用符を使用してプロパティ値全体を囲んでください。



## x86: menu.lst ファイルを編集してブート動作を変更する

GRUB メニューは、menu.lst 構成ファイルに基づいており、カスタマイズできません。システムをインストールまたはアップグレードすると、bootadm コマンドによって自動的に menu.lst ファイルが更新されて、そのリリースでサポートされているメニューエントリが反映されます。新しくインストールした OS は、このファイルに登録され、システムのリブート時に GRUB メニューのブートエントリとして表示されます。Oracle Solaris 以外のオペレーティングシステムをインストールしたときは、あとでそのメニューエントリを menu.lst ファイルに手動で追加する必要があります。

次の例は、menu.lst ファイルの内容に基づいた、一般的な GRUB メインメニューを示しています。GRUB メインメニューは、使用可能なすべてのブートエントリ、およびフェイルセーフアーカイブで構成されます。

```
GNU GRUB  version 0.95  (631K lower / 2095488K upper memory)
+-----+
| Solaris 10.1 ... X86                               |
| Solaris failsafe                                   |
|  |
+-----+
```

デフォルトで登録されている OS ブートでは、設定可能なタイムアウトを利用できません。ブート対象となるデフォルトの OS ブートエントリは、default コマンドによって設定可能です。インストールソフトウェアでは通常、有効なブートエントリのいずれかがブートするようにこのコマンドを設定します。Oracle Solaris OS の別のインスタンスをブートするか(適切な場合)、別の OS をブートするには、矢印キーを使用して別のブートエントリを強調表示します。次に、Enter キーを押してそのエントリをブートします。default コマンドが設定されていない場合は、GRUB メニューの最初のブートエントリがブートされます。

システムのブートに使用されるのは、アクティブな menu.lst ファイルだけです。システムのブート時に表示される GRUB メニューを変更するには、アクティブな GRUB menu.lst ファイルを編集します。それ以外の menu.lst ファイルに変更を加えても、システムのブート時に表示されるメニューに影響はありません。アクティブな menu.lst ファイルの場所を調べるには、bootadm コマンドの list-menu サブコマンドを使用します。bootadm コマンドの使用法の詳細は、[299 ページ](#)の「bootadm コマンドを使用してブートアーカイブを管理する」を参照してください。

Solaris OS のそれぞれの GRUB 実装での menu.lst ファイルの詳細は、[323 ページ](#)の「x86: サポートされる GRUB のバージョン」を参照してください。

## ▼ x86: menu.lst ファイルを編集してブート動作を変更する方法

次のいずれかの理由により、menu.lst ファイルの変更が必要になる場合があります。

- 新しい OS エントリを追加するため
- GRUB コンソールのリダイレクション情報を追加するため

始める前に システムのブートにはアクティブな GRUB menu.lst ファイルしか使用できないため、必ず適切なファイルを編集するようにしてください。それ以外の GRUB menu.lst ファイルに変更を加えても、システムのブート時に表示されるメニューに影響はありません。

アクティブな menu.lst ファイルの場所は、稼働するシステムに UFS ルートと ZFS ルートのどちらが含まれるかで異なります。

- UFS ルートの場合、アクティブな menu.lst ファイルは /boot/grub/menu.lst です。
- ZFS ルートの場合、アクティブな menu.lst ファイルは /pool-name/boot/grub/menu.lst です。

アクティブな GRUB menu.lst ファイルの場所を調べるには、bootadm コマンドで list-menu サブコマンドを指定します。

```
# bootadm list-menu
```

bootadm コマンドの詳細は、[bootadm\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 アクティブな menu.lst ファイルに新しい OS エントリを追加するには、テキストエディタを使ってファイルを変更します。  
menu.lst ファイル内のコメントを読めば、新しい OS エントリを追加するのに必要な情報が得られます。

次の例は、ZFS ブート対応のリリースが稼働するシステムの menu.lst ファイルを示しています。menu.lst ファイルに含まれるブートエントリは、実行している Oracle Solaris リリースに応じて異なります。

```
#----- ADDED BY BOOTADM - DO NOT EDIT -----
title Solaris Solaris 10 s10x_nbu6wos_nightly X86
```

```
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive
#-----END BOOTADM-----
```



注意 - menu.lst ファイルの元の内容を直接編集しないでください。このファイルの OS エントリに変更を加えるには、ファイルを手動で編集して既存の内容を複製します。次に、複製した内容に変更を加えます。

また、手動でこのファイルに新しいエントリを追加するときは、「Added by bootadm」などの保護コメントを決して含めないでください。これらのコメントは、システムで予約されています。保護コメントを含めないことで、これらのエントリはソフトウェアアップグレード中にそのまま維持されます。

デフォルトのエントリ以外に、エントリを新しく追加した場合は、同等の変更をすべて手動で行なってください。

[-B\*] フラグと [\*] フラグが元の menu.lst ファイルに存在する場合は、これらのフラグを保持する必要があります。また、failsafe エントリには常に -s フラグが付いているはずです。

### 3 必要な情報を追加したあとで、ファイルを保存します。

ファイルに加えた変更は、次にシステムをリブートしたときに有効になります。

ヒント - Linux が稼働しているマシンに Oracle Solaris をインストールすると、システムのリブート時に Linux のエントリは GRUB メニュー内に保持されません。システムをインストールまたはアップグレードする前に、Linux 情報が含まれている menu.lst ファイルのコピーを保存します。インストールが完了したら、Solaris パーティションに新しく作成された menu.lst ファイルに Linux 情報を追加します。

menu.lst ファイルに加えた変更は、Oracle Solaris OS と直接の関係がありません。このため、eeprom コマンドを使用して変更を行うことはできません。ファイルを直接編集する必要があります。ソフトウェアのアップグレード処理では、menu.lst ファイルに加えた変更内容がすべて保持されます。



注意 - GRUB では、Linux と Oracle Solaris の両方をブートできます。ただし、Linux GRUB では Oracle Solaris をブートできません。

必ず次のいずれかの条件が満たされていることを確認してください。

- fdisk パーティションがアクティブになっていて、そこに GRUB がインストールされていること。また、menu.lst ファイルがアクティブな GRUB メニューであること
  - Oracle Solaris GRUB がマスターブートレコード (MBR) にインストールされ、fdisk パーティションにある menu.lst を参照すること
- 

各 Oracle Solaris リリースに関連する GRUB menu.lst の詳細は、323 ページの「x86: サポートされる GRUB のバージョン」を参照してください。

**例 11-6 Oracle Solaris ZFS ブートローダーを備えたシステムの menu.lst ファイル**

次の例は、Oracle Solaris ZFS ブートローダーを備えたシステムで menu.lst ファイルがどのように表示されるかを示しています。デフォルトでは、このシステムは ZFS ルートファイルシステムからブートします。このファイルの内容は、インストールの種類によって異なります。

新規インストールまたは標準アップグレードの場合:

```
title Solaris 10 s10x_nbu6wos_nightly X86
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive

title Solaris failsafe
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

**Oracle Solaris Live Upgrade**

```
title bel
findroot (BE_bel,0,a)
bootfs rpool/ROOT/szboot_0508
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive

title bel failsafe
findroot (BE_bel,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-sa
```

**例 11-7 UFS ブートローダーを備えたシステムの menu.lst ファイル**

次の例は、UFS ルートファイルシステムがインストールされているシステムで menu.lst ファイルがどのように表示されるかを示しています。デフォルトでは、このシステムは UFS ルートファイルシステムからブートします。

新規インストールまたは標準アップグレードの場合:

```
title Solaris 10 s10x_nbu6wos_nightly X86
findroot (rootfs0,0,a)
kernel /platform/i86pc/multiboot
module /platform/i86pc/boot_archive

title Solaris failsafe
findroot (rootfs0,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

**Oracle Solaris Live Upgrade:**

```
title bel
findroot (BE_bel,0,a)
kernel /platform/i86pc/multiboot
module /platform/i86pc/boot_archive

title bel failsafe
findroot (BE_bel,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

## x86: アクティブな GRUB menu.lst ファイルを検出する

ZFS ルートを含むシステムでは、アクティブな menu.lst ファイルは通常 `/pool-name/boot/grub/menu.lst` にあります。

UFS ルートを含むシステムでは、アクティブな menu.lst ファイルは通常 `/boot/grub/menu.lst` にあります。

アクティブな GRUB メニューを検出するには、`bootadm` コマンドで `list-menu` サブコマンドを指定します。

```
# bootadm list-menu
```

このコマンドを使用すると、アクティブな menu.lst ファイルの内容も表示できます。

```
# bootadm list-menu
The location for the active GRUB menu is: /pool-name/boot/grub/menu.lst
default 0
timeout 10
0 bel
1 bel failsafe
2 be3
3 be3 failsafe
4 be2
5 be2 failsafe
```

`bootadm` コマンドの使用法の詳細は、[299 ページの「bootadm コマンドを使用してブートアーカイブを管理する」](#)を参照してください。

## x86: findroot コマンドの実装

Oracle Solaris Live Upgrade など、すべてのインストール方法では、ブート対象の x86 システム上のディスクスライスを指定する際に `findroot` コマンドを使用するようになりました。この拡張機能は、UFS ルートだけでなく Oracle Solaris ZFS ルートを含むシステムのブートもサポートします。この情報は、GRUB が使用する menu.lst

ファイル内に格納されます。以前は、root コマンド `root (hd0.0,a)` を使ってブート対象のディスクスライスを明示的に指定していました。

インストール方法には、Oracle Solaris Live Upgrade、Oracle Solaris JumpStart、インストール GUI プログラムなどがあります。

`findroot` コマンドのほかに、スライス (`mysign, 0, a`) 上の署名ファイルも使用されます。この場合の `mysign` は `/boot/grub/bootsign` ディレクトリにある署名ファイルの名前です。ZFS ルートからシステムをブートすると、ZFS GRUB プラグインが ZFS ファイルシステムを探して、`fdisk` パーティション `0` のスライス `a` にマウントしようとしています。

署名ファイルの名前は、使用したインストール方式に応じて異なります。`findroot` コマンドで使用される命名規則の詳細は、[321 ページの「findroot コマンドで 사용되는命名規則」](#)を参照してください。

インストールまたはアップグレードが完了したら、`findroot` コマンドを使用するそのほかのメニューエントリを GRUB メニューに追加できます。方法については、[248 ページの「x86: findroot コマンドを使用する GRUB メニューエントリを追加する方法」](#)を参照してください。



注意 - ブートの署名は一意にする必要があります。Oracle Solaris ソフトウェアの複数のインスタンス間で複製される、システム生成の署名またはユーザーの署名を使用したり削除したりしないでください。そうすると、正しくない OS インスタンスがブートされたり、システムがブートできなくなる場合があります。

`root` コマンドは、Windows のブートなどの特定の場合に `menu.lst` ファイルで引き続き使用できます。ただし、`findroot` コマンドが優先される場合は、`root` コマンドは使用しないでください。

例 11-8 x86: UFS ブートローダーをサポートするシステムのデフォルトの `menu.lst` ファイル  
次の例は、`findroot` コマンドを使用する `menu.lst` ファイルエントリの形式を示しています。

```
title Solaris 10 s10x_nbu6wos_nightly X86
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive

title Solaris failsafe
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

例 11-9 x86: Oracle Solaris ZFS ブートローダーをサポートするデフォルトの `menu.lst` ファイル  
 次の例は、Oracle Solaris ZFS ブートローダーをサポートするシステムの `menu.lst` ファイルを示しています。Oracle Solaris Live Upgrade を実行すると、ZFS ルートファイルシステムからブートするための情報がこのファイルに自動的に追加されます。

```
title bel
findroot (BE_bel,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive

title bel failsafe
findroot (BE_bel,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

## ▼ x86: findroot コマンドを使用する GRUB メニューエントリを追加する方法

この手順は、`findroot` コマンドを使用するユーザー定義エントリで `menu.lst` ファイルを手動で更新する方法を示しています。通常、これらのエントリはインストールまたはアップグレード後に追加されます。`findroot` コマンドを使用するユーザー定義エントリを追加するためのガイドラインについては、246 ページの「[x86: findroot コマンドの実装](#)」を参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
 役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 ブート対象のルート (/) ファイルシステムまたはルートプールのブート署名ファイルを作成します。
  - ZFS プール `my-pool` の場合、ブート署名ファイルを `/my-pool/boot/grub/bootsign` ディレクトリに作成します。
 

```
# touch /my-pool/boot/grub/bootsign/user-sign
```
  - UFS ファイルシステムの場合、ブート署名ファイルをブート対象のルートファイルシステムの `/boot/grub/bootsign` ディレクトリに作成します。
 

```
# touch /boot/grub/bootsign/user-sign
```



---

注- ブート署名用に選択したファイル名が一意であることを確認してください。Oracle Solaris の複数のインスタンス間で複製されるシステム生成の署名またはユーザーの署名の名前を使用しないでください。そのようにすると、システムがブートできなくなったり、間違った Oracle Solaris インスタンスがブートされたりする場合があります。

---

**3** findroot コマンドを含むメニューエントリを追加します。

**a.** アクティブな menu.lst ファイルを検出します。

```
# bootadm list-menu
```

**b.** テキストエディタを使用して、アクティブな menu.lst ファイルを編集し、次のエントリを追加します。

```
title    User Solaris boot entry
findroot (user-sign, 3, c)
kernel$  /platform/i86pc/multiboot
module   /platform/i86pc/boot_archive
```

前の例で、3 は 4 番目の fdisk パーティション (パーティションは 0 から始まる) を表します。c は Solaris fdisk パーティション内のスライス (スライスは a から始まる) を表します。

**4** システムを再起動します。

新しいエントリが GRUB メニューに表示され、指定の Oracle Solaris OS インスタンスをブートするために選択できます。



# ◆◆◆ 第 12 章

## Oracle Solaris システムのブート (手順)

---

この章では、SPARC システムおよび x86 システムで Oracle Solaris リリースをブートするための手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 251 ページの「SPARC システムのブート (作業マップ)」
- 270 ページの「GRUB を使用して x86 システムをブートする (作業マップ)」

ブートプロセスの概要については、第 9 章「システムのシャットダウンとブート (概要)」を参照してください。

---

注 - Solaris 10 1/06 リリース以降では、オープンソースの GRand Unified Bootloader (GRUB) が x86 システム上で実装されています。GRUB は、カーネルモジュールおよび構成ファイルが含まれているブートアーカイブをシステムのメモリーに読み込む役割を果たします。

---

GRUB ベースのブートを実装していない Solaris リリースで x86 システムをブートする方法については、第 16 章「x86: GRUB を実装しないシステムのブート (手順)」を参照してください。

## SPARC システムのブート (作業マップ)

| 作業                          | 説明                                                  | 参照先                                                 |
|-----------------------------|-----------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| SPARC システムを実行レベル 3 でブートします。 | このブート方法は、システムのシャットダウン後またはシステムのハードウェア保守作業の実行後に使用します。 | 253 ページの「SPARC: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法」 |

| 作業                                           | 説明                                                                                                                                                                             | 参照先                                                      |
|----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| SPARC システムを実行レベル S でブートします。                  | このブート方法は、ファイルシステムのバックアップなど、システムの保守作業の実行後にシステムをブートする場合に使用します。このレベルでは、一部のファイルシステムだけがマウントされ、ユーザーはシステムにログインできません。                                                                  | 254 ページの「SPARC: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法」     |
| SPARC システムを対話式でブートします。                       | このブート方法は、テストのためにシステムファイルまたはカーネルを一時的に変更したあとで使用します。                                                                                                                              | 255 ページの「SPARC: システムを対話式でブートする方法」                        |
| デフォルト以外の Solaris カーネルをブートします。                | この手順は、デフォルトのカーネル以外の Solaris カーネルをブートする場合に使用します。<br><br>別の方法として、代替ブートファイルのコピーを取得し、デフォルトのカーネルを新しいカーネルに変更してから、新しいデフォルトのブートデバイスをブートするように <code>boot-file</code> パラメータを設定することもできます。 | 257 ページの「SPARC: デフォルトのカーネル以外のカーネルをブートする方法」               |
| SPARC システム上の使用可能な ZFS ブート可能データセットのリストを表示します。 | システム上の ZFS プール内の使用可能な BE のリストを表示する場合は、 <code>boot -L</code> コマンドを使用します。<br><br>注-このオプションは、ZFS プールを含むブートデバイスでのみサポートされています。                                                      | 259 ページの「SPARC: ZFS ルートプール内の使用可能なブート可能データセットのリストを表示する方法」 |
| SPARC システムを ZFS ルートファイルシステムからブートします。         | 指定の ZFS データセットをブートする場合は、 <code>boot -Z</code> オプションを使用します。<br><br>注-このオプションは、ZFS プールを含むブートデバイスでのみサポートされています。                                                                   | 261 ページの「SPARC: 指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする方法」           |
| SPARC システムでフェイルセーフアーカイブをブートします。              | この手順を使用して、SPARC システムをフェイルセーフモードでブートします。次に、 <code>bootadm</code> コマンドを実行してブートアーカイブを更新します。                                                                                       | 264 ページの「SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする方法」                  |
| SPARC システムをネットワークからブートします。                   | このブート方法は、システムをネットワークからブートする場合に使用します。この方法は、ディスクレスクライアントのブートにも使用されます。                                                                                                            | 268 ページの「SPARC: システムをネットワークからブートする方法」                    |

## SPARC システムのブート

システムの電源を切ってから入れ直すと、マルチユーザーのブートシーケンスが開始されます。このあとに示す手順では、ok PROM プロンプトからさまざまな実行レベルでブートする方法を説明します。これらの手順では、特に指示がない限り、システムが正常な状態でシャットダウンしていることを前提とします。

who -r コマンドを使って、システムが指定した実行レベルになっていることを確認します。実行レベルについては、第 18 章「サービスの管理 (概要)」を参照してください。

### ▼ SPARC: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法

次の手順に従って、現時点で実行レベル 0 になっているシステムを実行レベル 3 でブートします。

- 1 システムを実行レベル 3 でブートします。

```
ok boot
```

自動ブート処理によって、一連の起動メッセージが表示され、システムが実行レベル 3 になります。詳細は、[boot\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 2 システムが実行レベル 3 になっていることを確認します。

ブートプロセスが正常に終了すると、ログイン画面かログインプロンプトが表示されます。

```
hostname console login:
```

#### 例 12-1 SPARC: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする

次の例は、システムを実行レベル 3 でブートしたときに表示されるメッセージを示しています。

```
ok boot
Sun Ultra 5/10 UPA/PCI (UltraSPARC-IIIi 333MHz)
OpenBoot 3.15, 128 MB memory installed, Serial #number.
Ethernet address number, Host ID: number.

Rebooting with command: boot
Boot device: /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@0,0:a File and args: kernel/sparcv9/unix
SunOS Release 5.10 Version s10_60 64-bit
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
configuring IPv4 interfaces: hme0.
add net default: gateway 172.20.27.248
Hostname: starlite
```

```
The system is coming up. Please wait.
NIS domain name is example.com
starting rpc services: rpcbind keyserv ypbind done.
Setting netmask of hme0 to 255.255.255.0
Setting default IPv4 interface for multicast: add net 224.0/4: gateway starlite
syslog service starting.The system is ready.
Starting Sun(TM) Web Console Version 2.1-dev..
volume management starting.
The system is ready.
starlite console login:
```

前の例では、`sparcv9` が例として使用されました。この文字列は、`isainfo -k` コマンドの出力と一致します。

## ▼ SPARC: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法

次の手順に従って、現時点で実行レベル 0 になっているシステムを実行レベル S でブートします。この実行レベルは、ファイルシステムのバックアップなど、システムの保守作業に使用されます。

- 1 システムを実行レベル S でブートします。  
`ok boot -s`
- 2 次のメッセージが表示されたら、スーパーユーザーのパスワードを入力します。  
SINGLE USER MODE  
Root password for system maintenance (control-d to bypass): **xxxxxx**
- 3 システムが実行レベル S になっていることを確認します。  
`# who -r`
- 4 実行レベルを S に移行して行う必要がある保守作業を行います。
- 5 システム保守作業が完了したら、**Ctrl+D** キーを押してシステムをマルチユーザー状態にします。

### 例 12-2 SPARC: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする

次の例は、システムを実行レベル S でブートしたときに表示されるメッセージを示しています。

```
ok boot -s
.
.
.
Sun Microsystems Inc. SunOS 5.10 Version Generic_120012-14 32-bit
```

```

Copyright 1983-2003 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
configuring IPv4 interfaces: hme0.
Hostname: starlite

SINGLE USER MODE

Root password for system maintenance (control-d to bypass): xxxxxx
single-user privilege assigned to /dev/console.
Entering System Maintenance Mode
Oct 14 15:01:28 su: 'su root' succeeded for root on /dev/console
Sun Microsystems Inc. SunOS 5.10
# who -r
.          run-level S Sep 19 08:49      S      0  ?
      (Perform some maintenance task)
# ^D

```

## ▼ SPARC: システムを対話式でブートする方法

代替カーネルまたは /etc/system ファイルを指定する必要がある場合は、このブートオプションを使用します。

始める前に boot -a コマンドを使用して、SPARC システムを対話式でブートするときに代替ファイル /etc/system を指定するには、システムをブートする前に次の手順を実行する必要があります。

- 1. /etc/system ファイルと boot/solaris/filelist.ramdisk ファイルのバックアップコピーを作成します。
 

```
# cp /etc/system /etc/system.bak
# cp /boot/solaris/filelist.ramdisk /boot/solaris/filelist.ramdisk.orig
```
- 2. etc/system.bak ファイル名を /boot/solaris/filelist.ramdisk ファイルに追加します。
 

```
# echo "etc/system.bak" >> /boot/solaris/filelist.ramdisk
```
- ブートアーカイブを更新します。
 

```
# bootadm update-archive -v
```

1 システムを対話式でブートします。

```
ok boot -a
```

2 次のようにシステムプロンプトに回答します。

- a. プロンプトが表示されたら、ブートに使用するカーネルの名前を入力します。デフォルトのカーネルファイル名を使用する場合は、Enter キーを押します。そうでない場合は、代替カーネルの名前を入力して、Enter キーを押します。

- b. プロンプトが表示されたら、modules ディレクトリの代替パスを入力します。  
デフォルトのモジュールディレクトリを使用する場合は、Enter キーを押します。そうでない場合は、モジュールディレクトリへの代替パスを入力して、Enter キーを押します。
  - c. プロンプトが表示されたら、代替システムファイルの名前を入力します。  
/etc/system ファイルが破損している場合、/dev/null を入力します。
  - d. プロンプトが表示されたら、root ファイルシステムを入力します。  
ローカルディスクからのブートに UFS (デフォルト) を選択する場合は Enter キーを押し、ネットワークブートの場合は NFS と入力します。
  - e. プロンプトが表示されたら、ルートデバイスの物理名を入力します。  
代替デバイス名を入力します。デフォルトを使用する場合は Return キーを押します。
- 3 これらの質問に応答するためのプロンプトが表示されない場合は、boot -a コマンドを正しく入力しているかどうか確認してください。

### 例 12-3 SPARC: システムを対話式でブートする

次の例では、利用できるデフォルトの選択例 ([ ] で囲まれた部分) を示します。boot -a コマンドを使用して代替ファイルシステムをブートする方法と例については、255 ページの「SPARC: システムを対話式でブートする方法」を参照してください。

```
ok boot -a
.
.
.
Rebooting with command: boot -a
Boot device: /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@0,0:a
File and args: -a
Enter filename [kernel/sparcv9/unix]:      Press Return
Enter default directory for modules [/platform/SUNW,Ultra-5_10/kernel
      /platform/sun4u/kernel /kernel /usr/kernel]:      Press Return
Name of system file [etc/system]:      Press Return
SunOS Release 5.10 Version S10_60 64-bit
Copyright (c) 1983-2004 by Sun Microsystems, Inc. All rights reserved
Use is subject to license terms.
root filesystem type [ufs]:      Press Return
Enter physical name of root device
[/pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@0,0:a]:      Press Return
configuring IPv4 interfaces: hme0.
Hostname: starlite
The system is coming up. Please wait.
checking ufs filesystems
```



```

.
.
.
The system is ready.
starlite console login:

```

## ▼ SPARC: デフォルトのカーネル以外のカーネルをブートする方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 既存の Oracle Solaris カーネルのコピーを取得し、その名前を変更します。
- 3 手順2でコピーして名前を変更したカーネルを `/etc/boot/solaris/filelist.ramdisk` ファイルに追加します。  

```
# echo "kernel.name" >> /boot/solaris/filelist.ramdisk
```
- 4 代替カーネルが `/etc/boot/solaris/filelist.ramdisk` ファイルに追加されていることを確認します。  

```
# cat > /etc/boot/solaris/filelist.ramdisk
```
- 5 `bootadm` コマンドを使用してブートアーカイブを更新します。  

```
# bootadm update-archive
```
- 6 実行レベル0に変更します。  

```
# init 0
```

ok PROM プロンプトが表示されます。
- 7 代替カーネルをブートします。  

```
ok boot alternate-kernel
```

次に例を示します。

```
ok boot kernel.myname/sparcv9/unix
```

  - デフォルトで代替カーネルをブートするには、次の手順に従います。
    - a. **boot-file** パラメータを新しいカーネルに設定します。  

```
ok setenv boot-file kernel.name/sparcv9/unix
```

b. **boot-file** プロパティーが変更されていることを確認します。

```
ok printenv boot-file
```

c. システムを再起動します。

```
ok boot
```

8 システムのブートが完了したら、代替カーネルがブートされたことを確認します。

```
# prtconf -vp | grep whoami
```

#### 例 12-4 デフォルトのブートファイルを変更して代替カーネルをブートする

```
# cp -r /platform/sun4v/kernel /platform/sun4vu/kernel.caiobella
# echo "kernel.caiobella" >> /boot/solaris/filelist.ramdisk
```

```
# cat > /etc/boot/solaris/filelist.ramdisk
/platform/sun4v/kernel.caiobella
^D (control D)
```

```
ok setenv boot-file kernel.caiobella/sparcv9/unix
ok printenv boot-file
boot-file = kernel.caiobella/sparcv9/unix
```

```
ok boot
```

```
SC Alert: Host System has Reset
```

```
SC Alert: Host system has shut down.
```

```
Sun Fire T200, No Keyboard Copyright 2006 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
OpenBoot 4.25.0.build_01***PROTOTYPE BUILD***, 32760 MB memory available, Serial
#69060038.
Ethernet address 0:x:4f:x:c5:c6, Host ID: 8xxc5c6.
```

```
Rebooting with command: boot
Boot device: /pci@7c0/pci@0/pci@1/pci@0,2/LSILogic,sas@2/disk@0,0:a File and
args: kernel.caiobella/sparcv9/unix
SunOS Release 5.10
Copyright 1983-2007 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
DEBUG enabled
misc/forthdebug (176650 bytes) loaded
Hostname: seasonz
NIS domain name is lab.domain.sun.com
Reading ZFS config: done.
```

```
seasonz console login:
Password:
Last login: Mon Nov 12 18:02:00 on console
Sun Microsystems Inc. SunOS 5.10
.
.
.
```

```
You have new mail.  
#  
#  
# prtconf -vp | grep whoami  
whoami: '/platform/sun4v/kernel.caibella/sparcv9/unix'
```

## SPARC システムで指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする

SPARC プラットフォームでの Oracle Solaris ZFS からのブートをサポートするために、2つの新しいブートオプションが追加されました。

-L ZFS プール内の使用可能なブート可能データセットのリストを表示します。

---

注 -boot -L コマンドは、コマンド行からではなく OBP から実行されません。

---

-Z dataset 指定の ZFS ブート可能データセットのルートファイルシステムをブートします。

ZFS ルートファイルシステムからシステムをブートする場合は、最初に OBP から -L オプションを指定して boot コマンドを実行して、システム上の使用可能な BE のリストを表示します。次に、-Z オプションを使用して指定の BE をブートします。

詳細は、[boot\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

### ▼ SPARC: ZFS ルートプール内の使用可能なブート可能データセットのリストを表示する方法

SPARC システムでは、menu.lst ファイルに次の 2 つの GRUB コマンドが含まれています。

- title - ブート環境 (BE) のタイトルを指定する
- bootfs - ブート可能データセットのフルネームを指定する

ZFS プール内のブート可能データセットのリストを表示するには、次のどちらかの方法を選択します。

- lustatus コマンドを使用する。このコマンドを実行すると、指定の ZFS プール内のすべての BE のリストが表示されます。  
lustatus コマンドは x86 システムでも使用できます。

- `boot -L` コマンドを使用する。このコマンドを実行すると、指定の ZFS プール内の使用可能な BE のリストが表示され、システムをブートするための方法も示されます。

次の手順は、`boot -L` コマンドを使用してシステム上の使用可能な BE のリストを表示する方法を示しています。このコマンドの実行後に指定の BE をブートするには、画面に表示された指示に従います。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 システムを `ok PROM` プロンプトにします。  
`# init 0`
- 3 ZFS プール内の使用可能な BE のリストを表示します。  
`ok boot device-specifier -L`
- 4 表示されているいずれかのエントリをブートするには、そのエントリに対応する番号を入力します。
- 5 画面に出力される指示に従って、指定した BE からブートします。  
方法については、261 ページの「SPARC: 指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする方法」を参照してください。

#### 例 12-5 SPARC: `boot -L` を使用してシステム上の使用可能な BE のリストを表示する

```
# init 0
# svc.startd: The system is coming down. Please wait.
svc.startd: 94 system services are now being stopped.
svc.startd: The system is down.
syncing file systems... done
Program terminated
ok boot -L
.
.
.
Boot device: /pci@1f,0/pci@1/scsi@8/disk@0,0 File and args: -L
zfs-file-system
Loading: /platformsun4u/bootlst
1.s10s_nbu6wos
2 zfs2BE
Select environment to boot: [ 1 - 2 ]: 2
```

```
to boot the selected entry, invoke:  
boot [<root-device>] -Z rpool/ROOT/zfs2BE
```

参照 詳細は、『Oracle Solaris ZFS 管理ガイド』の第 5 章「Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムのインストールと起動」を参照してください。

## ▼ SPARC: 指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする方法

Oracle Solaris ZFS からブートする方法は、UFS からブートする方法とは異なります。ZFS からブートするときは、デバイス識別子によって単一のルートファイルシステムではなく、ストレージプールが識別されます。ストレージプールには、複数のブート可能データセット (ルートファイルシステム) が含まれていることがあります。そのため、ZFS からブートするときは、ブートデバイスによってデフォルトと見なされるプール内のルートファイルシステムも識別する必要があります。デフォルトでは、デフォルトのブートデバイスはプールの `bootfs` プロパティによって識別されます。この手順では、ZFS ブート可能データセットを指定してシステムをブートする方法を示します。使用可能なすべてのブートオプションの詳細は、`boot(1M)` のマニュアルページを参照してください。

---

注 - `bootfs` プロパティを以前に正しく設定した場合 (`luactivate` コマンドを使用して BE をアクティブにした場合など)、システムは自動的に ZFS ルートをブートします。

---

詳細は、`zpool(1M)` のマニュアルページを参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 システムを `ok PROM` プロンプトにします。  

```
# init 0
```
- 3 (省略可能) 使用可能な BE のリストを表示するには、`-L` オプションを指定して `boot` コマンドを実行します。  
方法については、259 ページの「SPARC: ZFS ルートプール内の使用可能なブート可能データセットのリストを表示する方法」を参照してください。

- 4 指定のエントリをブートするには、そのエントリの番号を入力し、**Return** キーを押します。

```
Select environment to boot: [1 - 2]:
```

- 5 システムをブートするには、画面に表示された指示に従います。

```
To boot the selected entry, invoke:  
boot [<root-device>] -Z rpool/ROOT/dataset
```

```
ok boot -Z rpool/ROOT/dataset
```

次に例を示します。

```
# boot -Z rpool/ROOT/zfs2BE
```

- 6 システムのブートが完了したら、次のコマンドを入力してアクティブな **BE** を確認します。

```
# prtconf -vp | grep whoami
```

- アクティブな **BE** のブートパスを表示するには、次のコマンドを入力します。

```
# prtconf -vp | grep bootpath
```

- 別の方法として、`df -lk` コマンドを使用して、正しい **BE** がブートされたかどうかを確認することもできます。

#### 例 12-6 SPARC: 指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする

次の例は、`boot -z` コマンドを使用して SPARC システムで ZFS データセットをブートする方法を示しています。

```
# init 0  
# svc.startd: The system is coming down. Please wait.  
svc.startd: 79 system services are now being stopped.  
svc.startd: The system is down.  
syncing file systems... done  
Program terminated  
ok boot -Z rpool/ROOT/zfs2BEe  
Resetting  
LOM event: =44d+21h38m12s host reset  
g ...  
  
rProcessor Speed = 648 MHz  
Baud rate is 9600  
8 Data bits, 1 stop bits, no parity (configured from lom)  
  
Firmware CORE Sun Microsystems, Inc.  
@(#) core 1.0.12 2002/01/08 13:00  
software Power ON  
Verifying nVRAM...Done  
Bootmode is 0  
[New I2C DIMM address]
```

```

.
.
.
Environment monitoring: disabled
Executng last command: boot -Z rpool/ROOT/zfs2BE
Boot device: /pci@1f,0/pci@1/scsi@8/disk@0,0 File and args: -Z rpool/ROOT/zfs2Be
zfs-file-system
Loading: /platform/SUNW,UltraAX-i2/boot_archive
Loading: /platform/sun4u/boot_archive
ramdisk-root hsfs-file-system
Loading: /platform/SUNW,UltraAX-i2/kernel/sparcv9/unix
Loading: /platform/sun4u/kernel/sparcv9/unix
.
.
.
Hostname: mallory
NIS domainname is boulder.Central.Sun.COM
Reading ZFS config: done.
Mounting ZFS filesystems: (6/6)

mallory console login:

```

参照 指定の ZFS ブート可能データセットのフェイルセーフアーカイブをブートする方法については、[264 ページの「SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする方法」](#)を参照してください。

## SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする

ブートアーカイブであるルートファイルシステムイメージからシステムをブートし、そのあとでこのファイルシステムを実際のルートデバイスに再マウントすると、ブートアーカイブとルートファイルシステムが一致しなかったり、「矛盾」していたりすることがあります。このような状況では、システムの適切な処理や完全性が損なわれます。システムでは、ルート (/) ファイルシステムがマウントされると、メモリー内のファイルシステムを放棄する前に、2つのファイルシステムを照合して整合性検査を行います。不一致が検出されると、通常のブートシーケンスが中断され、システムは「フェイルセーフモード」に戻ります。

カーネルファイルの更新の直後に、システム障害、電源障害、またはカーネルパニックが発生した場合も、ブートアーカイブとルートファイルシステムが同期していない可能性があります。矛盾したブートアーカイブを使用してシステムが引き続きブートする場合でも、フェイルセーフアーカイブをブートしてブートアーカイブを更新することをお勧めします。bootadm コマンドを使用してブートアーカイブを手動で更新することもできます。詳細は、[299 ページの「bootadm コマンドを使用してブートアーカイブを管理する」](#)を参照してください。

復旧やブートアーカイブの更新を行う目的で、フェイルセーフアーカイブをブートできます。

SPARC プラットフォームでは、フェイルセーフアーカイブは次のとおりです。

```
/platform/'uname -m'/failsafe
```

次の構文を使用してフェイルセーフアーカイブをブートします。

```
ok boot -F failsafe
```

フェイルセーフブートは、Oracle Solaris ZFS からブートされるシステムでもサポートされます。ZFS をルートとした BE からブートするときは、各 BE に独自のフェイルセーフアーカイブが用意されています。フェイルセーフアーカイブは、UFS をルートとした BE と同様に、ルートファイルシステムが置かれている場所にあります。デフォルトのフェイルセーフアーカイブは、デフォルトのブート可能ファイルシステムにあるアーカイブです。デフォルトのブート可能ファイルシステム (データセット) は、プールの `bootfs` プロパティの値で示されます。

x86 ベースのフェイルセーフアーカイブのブートについては、281 ページの「[x86 システムをフェイルセーフモードでブートする](#)」を参照してください。

自動ブートアーカイブ障害の除去方法については、297 ページの「[x86: auto-reboot-safe プロパティを使用して自動ブートアーカイブ更新障害を除去する方法](#)」を参照してください。

## ▼ SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする方法

次の手順は、ブートアーカイブを更新するために SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする方法を示しています。ブートアーカイブが更新されたあとでシステムがブートしない場合は、シングルユーザーモードでシステムをブートする必要がある場合があります。詳細は、254 ページの「[SPARC: システムを実行レベル S \(シングルユーザーレベル\) でブートする方法](#)」を参照してください。

---

注- 次の手順では、特定の ZFS データセットをフェイルセーフモードでブートする方法も示します

---

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 システムを `ok` プロンプトにします。  

```
# init 0
```



### 3 フェイルセーフアーカイブをブートします。

- デフォルトのフェイルセーフアーカイブをブートするには、次のように入力します。

```
ok boot -F failsafe
```

- 特定の ZFS データセットのフェイルセーフアーカイブをブートするには、次のように入力します。

```
ok boot -F failsafe -Z dataset
```

次に例を示します。

```
ok boot -F failsafe -Z rpool/ROOT/zfsBE2
```

---

注-ブートするデータセットの名前を調べるには、最初に `boot -L` コマンドを使用して、システム上の使用可能な BE のリストを表示します。詳細は、[259 ページの「SPARC: ZFS ルートプール内の使用可能なブート可能データセットのリストを表示する方法」](#)を参照してください。

---

矛盾したブートアーカイブが検出されると、メッセージが表示されます。

### 4 ブートアーカイブを更新するには、y と入力して Return キーを押します。

```
An out of sync boot archive was detected on rpool.
The boot archive is a cache of files used during boot
and should be kept in sync to ensure proper system operation.
```

```
Do you wish to automatically update this boot archive? [y,n,?] y
```

アーカイブが正常に更新されると、メッセージが表示されます。

```
The boot archive on rpool was updated successfully.
```

## 例 12-7 SPARC: システムをフェイルセーフモードでブートする

次の例は、SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする方法を示しています。デバイスを指定しない場合は、デフォルトのブートデバイスのフェイルセーフアーカイブがブートされます。

```
ok boot -F failsafe
Resetting ...
screen not found.
Can't open input device. Keyboard not present. Using ttya for input and output.
```

```
Sun Enterprise 220R (2 X UltraSPARC-II 450MHz), No Keyboard
OpenBoot 3.23, 1024 MB memory installed, Serial #13116682.
Ethernet address 8:0:20:c8:25:a, Host ID: 80c8250a.
```

```
Rebooting with command: boot -F failsafe
```

```
Boot device: /pci@1f,4000/scsi@3/disk@1,0:a File and args: -F failsafe
SunOS Release 5.10t
Copyright 1983-2007 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
Configuring /dev Searching for installed OS instances...

An out of sync boot archive was detected on /dev/dsk/c0t1d0s0.
The boot archive is a cache of files used during boot and
should be kept in sync to ensure proper system operation.

Do you wish to automatically update this boot archive? [y,n,?] y
Updating boot archive on /dev/dsk/c0t1d0s0.
The boot archive on /dev/dsk/c0t1d0s0 was updated successfully.

Solaris 5.10 was found on /dev/dsk/c0t1d0s0.
Do you wish to have it mounted read-write on /a? [y,n,?] n
Starting shell.
#
```

### 例 12-8 SPARC: 指定した ZFS データセットをフェイルセーフモードでブートする

この例は、ZFS データセットをフェイルセーフモードでブートする方法を示しています。最初に `boot -L` コマンドを使用して、使用可能なブート環境のリストを表示します。このコマンドは、`ok` プロンプトで実行する必要があります。

```
ok boot -L
Rebooting with command: boot -L
Boot device: /pci@1f,4000/scsi@3/disk@1,0 File and args: -L
1 zfsBE2
Select environment to boot: [ 1 - 1 ]: 1

To boot the selected entry, invoke:
boot [<root-device>] -Z rpool/ROOT/zfsBE2

Program terminated
{0} ok
```

Resetting ...

```
screen not found.
Can't open input device.
Keyboard not present. Using ttya for input and output.
```

```
Sun Enterprise 220R (2 X UltraSPARC-II 450MHz), No Keyboard
OpenBoot 3.23, 1024 MB memory installed, Serial #13116682.
Ethernet address 8:0:20:c8:25:a, Host ID: 80c8250a.
```

```
{0} ok boot -F failsafe -Z rpool/ROOT/zfsBE2
Boot device: /pci@1f,4000/scsi@3/disk@1,0 File and args: -F failsafe -Z
rpool/ROOT/zfsBE2
SunOS Release 5.10
Copyright 1983-2008 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
Configuring /dev
Searching for installed OS instances...
```

```
ROOT/zfsBE2 was found on rpool.
Do you wish to have it mounted read-write on /a? [y,n,?] y
mounting rpool on /a
```

```
Starting shell.
```

```
#
#
# zpool list
NAME      SIZE  USED  AVAIL    CAP  HEALTH  ALTROOT
rpool    16.8G  6.26G  10.5G   37%  ONLINE  /a
#
```

```
# zpool status
pool: rpool
state: ONLINE
scrub: none requested
config:
```

| NAME     | STATE  | READ | WRITE | CKSUM |
|----------|--------|------|-------|-------|
| rpool    | ONLINE | 0    | 0     | 0     |
| c0t1d0s0 | ONLINE | 0    | 0     | 0     |

```
errors: No known data errors
```

```
#
# df -h
Filesystem                size  used  avail  capacity  Mounted on
/ramdisk-root:a           163M  153M   0K    100%     /
/devices                   0K    0K    0K     0%     /devices
/dev                       0K    0K    0K     0%     /dev
ctfs                       0K    0K    0K     0%     /system/contract
proc                       0K    0K    0K     0%     /proc
mnttab                     0K    0K    0K     0%     /etc/mnttab
swap                      601M  344K  601M   1%     /etc/svc/volatile
objfs                      0K    0K    0K     0%     /system/object
sharefs                    0K    0K    0K     0%     /etc/dfs/sharetab
swap                      602M  1.4M  601M   1%     /tmp
/tmp/root/etc              602M  1.4M  601M   1%     /.tmp_proto/root/etc
fd                          0K    0K    0K     0%     /dev/fd
rpool/ROOT/zfsBE2         16G   5.7G  9.8G   37%     /a
rpool/export               16G    20K  9.8G   1%     /a/export
rpool/export/home         16G    18K  9.8G   1%     /a/export/home
rpool                      16G   63K  9.8G   1%     /a/rpool
```

## SPARC システムをネットワークからブートする

次のような場合に、システムをネットワークからブートする必要があります。

- システムを最初にインストールする場合
- システムをローカルディスクからブートできない場合
- システムがディスクレスクライアントである場合

次の2つのネットワーク構成ブート方法が利用できます。

- 逆アドレス解決プロトコル (RARP) および ONC+ RPC Bootparams プロトコル
- 動的ホスト構成プロトコル (DHCP)

ネットワークデバイスの場合、ローカルエリアネットワーク (LAN) 上でブートするプロセスと広域ネットワーク (WAN) 上でブートするプロセスは多少異なっています。どちらのネットワークブートシナリオでも、PROM によってブーター (この場合 `inetboot`) がブートサーバーまたはインストールサーバーからダウンロードされます。

LAN 上でブートするときは、ファームウェアは RARP と BOOTP または DHCP を使用して、ブートサーバーまたはインストールサーバーを検出します。そして、ブーター (この場合は `inetboot`) のダウンロードには TFTP が使用されます。

WAN 上でブートするときは、ファームウェアは DHCP または NVRAM プロパティを使用して、システムをネットワークからブートするために必要なインストールサーバー、ルーター、およびプロキシを検出します。ブーターのダウンロードに使用されるプロトコルは HTTP です。さらに、定義済みの非公開鍵を使ってブーターの署名が確認される場合もあります。

### ▼ SPARC: システムをネットワークからブートする方法

ブートサーバーが利用できれば、どのようなシステムもネットワークからブートできます。たとえば、スタンドアロンシステムがローカルディスクからブートできない場合は、そのシステムをネットワークからブートしてみてください。デフォルトのブートデバイスを変更または再設定する方法については、[229 ページの「SPARC: ブート PROM を使用してデフォルトのブートデバイスを変更する方法」](#)を参照してください。

`sun-4u` システムでは、次の2つのネットワーク構成ブート方法を使用できます。

- RARP – Reverse Address Resolution Protocol and ONC+ RPC Bootparams Protocol
- DHCP – Dynamic Host Configuration Protocol

デフォルトのネットワークブート方法は RARP に設定されています。ネットワークで利用できるブートサーバーによって、RARP または DHCP を選択できます。

---

注 - Sun Ultra システムで DHCP ネットワークブート方法を使用するには、PROM のバージョンが 3.25.nn 以上でなければなりません。PROM のバージョンの確認方法については、227 ページの「SPARC: システムの PROM リビジョン番号を確認する方法」を参照してください。

---

RARP と DHCP の両方のプロトコルを使用できる場合、どちらのプロトコルを使用するかを `boot net` コマンドに一時的に指定できます。あるいは、NVRAM 別名を設定すれば、システムをリブートしても有効に PROM レベルでネットワークブート方法を永続的に保存することができます。次の `nvalias` コマンドの例では、Sun Ultra 10 システムにおいてデフォルトで DHCP を使ってブートするように、ネットワークデバイスの別名を設定します。

```
ok nvalias net /pci@1f,4000/network@1,1:dhcp
```

結果として、`boot net` と入力するだけで、システムは DHCP を使用してブートします。

---

注 - `nvalias` コマンドと `nvunalias` コマンドの構文を十分理解するまで、`nvalias` コマンドで NVRAMRC ファイルを変更しないでください。これらのコマンドの使用方法については、『OpenBoot 3.x コマンド・リファレンスマニュアル』を参照してください。

---

始める前に どちらのプロトコルでブートする場合でも、RARP または DHCP のブートサーバーがネットワークに設定済みである必要があります。

- 1 必要に応じてシステムをシャットダウンします。
- 2 ネットワークからブートする方法を決定してから、次のどちらかを選択します。
  - a. DHCP を使用してシステムをネットワークからブートするには、次のように入力します。

```
ok boot net[:dhcp]
```

上記 `nvalias` の例のように、デフォルトで DHCP を使ってブートするように PROM 設定を変更してある場合は、`boot net` と指定するだけで、システムは DHCP でブートします。
  - b. RARP を使用してシステムをネットワークからブートするには、次のように入力します。

```
ok boot net[:rarp]
```

RARP はデフォルトのネットワークブート方法です。このため、デフォルトで DHCP でブートするように PROM 値を変更してある場合にだけ、boot net:rarp と指定しなければなりません。

## GRUB を使用して x86 システムをブートする (作業マップ)

| 作業                                                 | 説明                                                                                                                                                                                                                                       | 参照先                                                      |
|----------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| x86 システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートします。             | このブート方法は、システムのシャットダウン後またはシステムのハードウェア保守作業の実行後にシステムをマルチユーザーレベルに戻す場合に使用します。                                                                                                                                                                 | 271 ページの「x86: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法」        |
| x86 システムをシングルユーザーモードでブートします。                       | このブート方法は、ファイルシステムのバックアップなど、システムの保守作業を実行する場合に使用します。                                                                                                                                                                                       | 272 ページの「x86: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法」       |
| x86 システムを対話式でブートします。                               | このブート方法は、テストのためにシステムファイルまたはカーネルを一時的に変更したあとで使用します。                                                                                                                                                                                        | 275 ページの「x86: システムを対話式でブートする方法」                          |
| x86 システム上のブート可能な ZFS データセットのリストを表示します。             | ZFS ルートファイルシステムを含む x86 システム上の使用可能な BE を表示する場合は、次のどちらかの方法を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ lustatus</li> <li>■ bootadm list-menu</li> </ul>                                                                                | 277 ページの「x86: 使用可能な ZFS ブート環境のリストを表示する方法」                |
| x86 システムを ZFS ルートファイルシステムからブートします。                 | ZFS ブートローダーをサポートする Oracle Solaris リリースをシステムにインストールするか、そのリリースにシステムをアップグレードする場合は、デフォルトの ZFS BE の GRUB メニューエントリに、デフォルトで <code>-B \$ZFS-BOOTFS</code> ブート引数が含まれます。システムは ZFS から自動的にブートします。<br><br>注- このオプションは、ZFS プールを含むブートデバイスでのみサポートされています。 | 278 ページの「x86: 指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする方法」             |
| x86 システムをフェイルセーフモードでブートします。                        | この手順を使用して、x86 システムでフェイルセーフアーカイブをブートします。次に、bootadm コマンドを実行してブートアーカイブを更新します。                                                                                                                                                               | 282 ページの「x86 システムをフェイルセーフモードでブートする方法」                    |
| x86 システムをフェイルセーフモードでブートして、破壊されたブートアーカイブを強制的に更新します。 | この手順は、ブートアーカイブが破壊されていて、システムが正常にブートすることを拒否する場合、または矛盾したブートアーカイブを更新するように要求されない場合に使用します。                                                                                                                                                     | 284 ページの「x86: フェイルセーフモードでブートして、破壊されたブートアーカイブを強制的に更新する方法」 |

| 作業                                  | 説明                                                                                                | 参照先                                        |
|-------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|
| GRUB を使用して x86 システムをネットワークからブートします。 | この方法は、PXE または非 PXE デバイスをデフォルトのネットワーク構成方法でネットワークからブートする場合に使用します。この方法は、ディスクレスクライアントをブートする場合にも使用します。 | 289 ページの「x86: GRUB ベースのブートをネットワークから実行する方法」 |

## ▼ x86: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法

次の手順に従って、現時点で実行レベル 0 になっているシステムを実行レベル 3 でブートします。

- 1 システムを再起動します。

```
# reboot
```

Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。

あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。

ブートシーケンスが始まると、GRUB メニューが表示されます。

- 2 GRUB メニューが表示されたら、**Enter** キーを押してデフォルトの OS インスタンスをブートします。

エントリを 10 秒以内に選択しない場合、システムは自動的に実行レベル 3 でブートします。

ブートプロセスが正常に終了すると、ログイン画面かログインプロンプトが表示されます。

- 3 システムにログインします。

```
hostname console login:
```

- 4 システムが実行レベル 3 になっていることを確認します。

```
# who -r
system% who -r
.          run-level 3  Mar  2 09:44    3      0  5
```

### 例 12-9 x86: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする

```
# reboot
```

```
Jul 24 11:29:52 bearskin reboot: rebooted by root
```

```
syncing file systems... done
rebooting...

Adaptec AIC-7899 SCSI BIOS v2.57S4
(c) 2000 Adaptec, Inc. All Rights Reserved.

Press <Ctrl><A> for SCSISelect(TM) Utility!

Ch B, SCSI ID: 0 SEAGATE ST336607LSUN36G 160

GNU GRUB version 0.95 (637K lower / 2096064K upper memory)
=====
Solaris 10 10/08 s10x_u6wos_03 X86
Solaris failsafe

=====
Use the and keys to select which entry is highlighted.
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
commands before booting, or 'c' for a command-line.

SunOS Release 5.10 Version Generic_137138-04 32-bit
Copyright 1983-2008 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
Hostname: pups
NIS domain name is ...sfbay.sun.com
Reading ZFS config: done.
Mounting ZFS filesystems: (5/5)

pups console login:

# who -r
. run-level 3 Jul 24 11:31 3 0 5
```

## ▼ x86: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法

次の手順に従って、実行レベル 0 になっているシステムを実行レベル S でブートします。シングルユーザーレベルは、システムを保守する場合に使用します。

---

注 - この手順は、すべての GRUB 実装で使用できます。ただし、GRUB メインメニューに表示されるブートエントリは、実行している Oracle Solaris リリースに応じて異なります。

---

ブート時に指定できるすべてのカーネルオプションについては、[237 ページの「x86: ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更する」](#)を参照してください。

- 1 システムを再起動します。

```
# reboot
```



Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。

あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。

ブートシーケンスが始まると、GRUB メニューが表示されます。

- 2 GRUB メインメニューが表示されたら、e と入力して GRUB メニューを編集します。
- 3 実行しているリリースによっては、矢印キーを使用して kernel または kernel\$ 行を選択します。  
矢印キーを使用できない場合は、キャレットキー (^) を使って上方へスクロールしたり、英字キー v を使って下方へスクロールしたりします。
- 4 e と再度入力してブートエントリを編集します。  
ここから、kernel 行または kernel\$ 行にオプションと引数を追加できます。
- 5 システムをシングルユーザーモードでブートするには、ブートエントリ行の末尾に -s を入力してから、Return キーを押して前の画面に戻ります。
  - 他のブート動作を指定するには、-s オプションを適切なブートオプションに置き換えます。  
この方法で、次の代替ブート動作を指定できます。
    - 再構成用ブートを実行する
    - 64 ビット対応のシステムを 32 ビットモードでブートする
    - カーネルデバッガを使ってシステムをブートする
    - コンソールをリダイレクトする
 詳細は、[boot\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。
- 6 システムをシングルユーザーモードでブートするには、b と入力します。
- 7 プロンプトが表示されたら、ルートパスワードを入力します。
- 8 システムが実行レベル S になっていることを確認します。  

```
# who -r
.          run-level S  Jun 13 11:07    S    0  0
```
- 9 実行レベルを S に移行して行う必要があるシステム保守作業を行います。
- 10 システムの保守作業が完了したら、システムをリブートします。

## 例 12-10 x86: システムをシングルユーザーモードでブートする

```

# reboot
Jul  2 14:30:01 pups reboot: initiated by root on /dev/console
syncing files...

Press <Ctrl><A> forPSCSISelect(TM) Utility!

GNU GRUB  version 0.95  (637K lower / 2096064K upper memory)
=====
Solaris 10 10/08 s10x_u6wos_03 X86
Solaris failsafe
=====
          Use the  and  keys to select which entry is highlighted.
          Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
          commands before booting, or 'c' for a command-line.
=====

GNU GRUB  version 0.95  (637K lower / 2096064K upper memory)
=====
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive
=====
          Use the  and  keys to select which entry is highlighted.
          Press 'b' to boot, 'e' to edit the selected command in the
          boot sequence, 'c' for a command-line, 'o' to open a new line
          after ('O' for before) the selected line, 'd' to remove the
          selected line, or escape to go back to the main menu.

[ Minimal BASH-like line editing is supported.  For the first word, TAB
lists possible command completions.  Anywhere else TAB lists the possible
completions of a device/filename.  ESC at any time exits. ]

grub edit> kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS -s

GNU GRUB  version 0.95  (637K lower / 2096064K upper memory)
=====
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS -s
module /platform/i86pc/boot_archive
=====
          Use the  and  keys to select which entry is highlighted.
          Press 'b' to boot, 'e' to edit the selected command in the
          boot sequence, 'c' for a command-line, 'o' to open a new line
          after ('O' for before) the selected line, 'd' to remove the
          selected line, or escape to go back to the main menu.
.
.
.
SunOS Release 5.10
Copyright 1983-2008 Sun Microsystems, Inc.  All rights reserved.
Use is subject to license terms.
Booting to milestone "milestone/single-user:default".

```

```

Hostname: pups Requesting System Maintenance Mode SINGLE USER MODE
Root password for system maintenance (control-d to bypass):
single-user privilege assigned to /dev/console.
Entering System Maintenance Mode
Jul  2 14:41:48 su: 'su root' succeeded for root on /dev/console Sun Microsystems Inc.
# who -r
who -r      .      run-level S Jul  2 14:39      S      0  0 #

```

## ▼ x86: システムを対話式でブートする方法

代替のカーネルまたは代替の `/etc/system` ファイルを指定する必要がある場合は、次の手順に従ってシステムをブートします。

始める前に `boot a` コマンドを使用して x86 システムを対話式でブートするとき、代替の `-/etc/system` ファイルを指定するには、次の手順を実行します。

- 1. `/etc/system` ファイルと `boot/solaris/filelist.ramdisk` ファイルのバックアップコピーを作成します。
 

```
# cp /etc/system /etc/system.bak
# cp /boot/solaris/filelist.ramdisk /boot/solaris/filelist.ramdisk.orig
```
- 2. `/etc/system.bak` ファイル名を `/boot/solaris/filelist.ramdisk` ファイルに追加します。
 

```
# echo "etc/system.bak" >> /boot/solaris/filelist.ramdisk
```
- ブートアーカイブを更新します。
 

```
# bootadm update-archive -v
```

### 1 システムを再起動します。

```
# reboot
```

Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。

あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。

ブートシーケンスが始まると、GRUB メインメニューが表示されます。

### 2 GRUB 編集メニューにアクセスするには、`e` と入力します。

### 3 矢印キーを使用して、`kernel` 行または `kernel$` 行を選択します。

### 4 `e` と入力してブートエントリ行を編集します。

### 5 `-a` と入力して、システムを対話式でブートします。次に、**Enter** キーを押して前のメニューに戻ります。

- 6 システムを対話式でブートするために、b と入力します。
- 7 モジュールのデフォルトディレクトリを入力するか、**Enter** キーを押してデフォルトを受け入れます。  
Enter default directory for modules [/platform/i86pc/kernel /kernel /usr/kernel]:
- 8 代替システムファイル名 *alternate-file* を入力します。  
Name of system file [etc/system]: **/etc/system.bak**  
代替ファイルを入力しないで Enter キーを押すと、デフォルトが受け入れられます。  
破損した /etc/system ファイルを修復します。
- 9 システムを実行レベル 3 でリブートします。

### 例 12-11 x86: システムを対話式でブートする

```
# reboot
syncing file systems... done
rebooting...

GNU GRUB version 0.95 (637K lower / 2096064K upper memory)
=====
Solaris 10 10/08 s10x_u6wos_03 X86
Solaris failsafe
=====
          Use the  and  keys to select which entry is highlighted.
          Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
          commands before booting, or 'c' for a command-line.
=====

GNU GRUB version 0.95 (637K lower / 2096064K upper memory)
=====
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive
=====
          Use the  and  keys to select which entry is highlighted.
          Press 'b' to boot, 'e' to edit the selected command in the
          boot sequence, 'c' for a command-line, 'o' to open a new line
          after ('O' for before) the selected line, 'd' to remove the
          selected line, or escape to go back to the main menu.

[ Minimal BASH-like line editing is supported. For the first word, TAB
lists possible command completions. Anywhere else TAB lists the possible
completions of a device/filename. ESC at any time exits. ]

grub edit> kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS -a
GNU GRUB version 0.95 (637K lower / 2096064K upper memory)
=====
findroot (pool_rpool,0,a)
```

```
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS -a
module /platform/i86pc/boot_archive
=====
.
.
.
Enter default directory for modules [/platform/i86pc/kernel /kernel /usr/kernel]:
Name of system file [/etc/system]: /etc/system.bak
SunOS Release 5.10 Version Generic_137138-04 32-bit
Copyright 1983-2008 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
Hostname: pups
NIS domain name is ...sfbay.sun.com
Reading ZFS config: done.
Mounting ZFS filesystems: (5/5)
pups console login:
```

## x86:x86 システムで指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする

x86 プラットフォームで Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムのブートをサポートするために、新しい GRUB キーワード `$ZFS-BOOTFS` が導入されました。ルートデバイスに ZFS プールが含まれている場合は、このキーワードに値が割り当てられ、その値が `-B` オプションを使ってカーネルに渡されます。このオプションにより、ブートするデータセットが識別されます。ZFS ブートローダーをサポートする Oracle Solaris リリースをシステムにインストールするか、そのリリースにアップグレードする場合は、GRUB `menu.lst` ファイルおよび GRUB ブートメニューにデフォルトでこの情報が含まれます。

### ▼ x86: 使用可能な ZFS ブート環境のリストを表示する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 システム上の使用可能な BE のリストを表示するには、次のコマンドを入力します。  

```
~# bootadm list-menu
```

```
# lustatus
```

lustatus コマンドは、SPARC システムでも使用できます。

注 - `lustatus` コマンドの実行時に次のエラーが表示される場合は、インストールを新たに実行したときに Solaris Live Upgrade が使用されなかったことを示しています。BE が `lustatus` の出力で認識されるようにするには、最初にシステムで BE を新しく作成する必要があります。

```
# lustatus
ERROR: No boot environments are configured on this system
ERROR: cannot determine list of all boot environment names
```

Solaris Live Upgrade を使用して UFS ルートファイルシステムを ZFS ルートファイルシステムに移行する方法の詳細は、『Oracle Solaris ZFS 管理ガイド』の「UFS ルートファイルシステムから ZFS ルートファイルシステムへの移行 (Oracle Solaris Live Upgrade)」を参照してください。

## 例 12-12 `lustatus` コマンドを使って使用可能な ZFS ブート可能データセットのリストを表示する

次の例では、`lustatus` コマンドの出力は 3 つの ZFS ブート可能データセットの状態を示しています。デフォルトのブート環境は `be1` であるため、これを削除することはできません。

```
# lustatus
Boot Environment      Is      Active Active   Can   Copy
Name                  Complete Now    On Reboot Delete Status
-----
s10s_nbu6wos          yes     no     no       yes   -
zfs2BE                yes     yes    yes      no    -
zfsbe3                no      no     no       yes   -
#
```

BE が作成され、ブート可能になっている場合は、`Is Complete` 列に「yes」が表示されます。BE が作成され、まだアクティブになっていない場合は、この列に「no」が表示されます。BE をアクティブにするには、`luactivate` コマンドを使用します。そのあとで `lustatus` コマンドを実行して、BE が正常にアクティブ化されたことを確認します。

詳細は、`lustatus(1M)` および `luactivate(1m)` のマニュアルページを参照してください。

## ▼ x86: 指定した ZFS ルートファイルシステムからブートする方法

次の手順では、ZFS ブートローダーをサポートする x86 システムで ZFS ルートファイルシステムからブートする方法について説明します。

ZFS ブートローダーをサポートする Oracle Solaris リリースをシステムにインストールするか、そのリリースにアップグレードする場合は、GRUB メニューエントリに、デフォルトで `-B $ZFS-BOOTFS` ブート引数が含まれます。そのため、追加のブート引数を指定しなくてもシステムは ZFS からブートします。

## 1 システムを再起動します。

### # reboot

Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。

あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。

ブートシーケンスが始まると、GRUB メインメニューが表示されます。デフォルトのブートエントリが ZFS ファイルシステムの場合は、次のようなメニューが表示されます。

```
GNU GRUB version 0.95 (637K lower / 3144640K upper memory)
+-----+
| be1
| be1 failsafe
| be3
| be3 failsafe
| be2
| be2 failfafa
+-----+
      Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted.
      Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
      commands before booting, or 'c' for a command-line.
```

## 2 GRUB メニューが表示されたら、Enter キーを押してデフォルトの OS インスタンスをブートします。

エントリを 10 秒以内に選択しない場合、システムは自動的に実行レベル 3 でブートします。

## 3 別の BE をブートするには、矢印キーを使用して指定のブートエントリを強調表示します。

## 4 このエントリをブートする場合は b と入力し、このエントリを編集する場合は e と入力します。

ブート時の GRUB メニューエントリの詳細は、[239 ページの「x86: ブート時に GRUB メニューを編集してブート動作を変更する方法」](#)を参照してください。

## 例 12-13 x86:x86 システムで新しいブート環境をアクティブにする

次の例は、システム上でブート環境 `be10` をアクティブにするために従う手順を示しています。最初に `lustatus` コマンドを実行して、システム上のどの BE がアクティブになっているか、またどの BE をアクティブにする必要があるかを確認します。

```
# lustatus
Boot Environment      Is      Active Active   Can   Copy
Name                  Complete Now    On Reboot Delete Status
-----
be1                    yes     yes   yes     no
be10                   yes     no    no      yes

# luactivate be10
System has findroot enabled GRUB Generating boot-sign, partition and slice
information for PBE <be1>
WARNING: The following file s have change on both the current boot environment
<be1> zone <global> and the boot environment to be activitate <be10>
/etc/zfs/zpool.cache
INFORMATION: The files listed above are in conflict between the current
boot environment <be1> zone <global> and the boot environment to be
activated <be10>. These files will not be automatically synchronized from
the current boot environment <be1> when boot environment <be10> is activated.

Setting failsafe console to <ttyb>
Generating boot-sign for ABE <be10>
Generating partition and slice information for ABE <be10>
Copied boot menu from top level dataset.
Generating direct boot menu entries for PBE.
Generating direct boot menu entries for ABE.
Disabling splashimage
Current GRUB menu default setting is not valid
title Solaris bootenv rc
No more bootadm entries. Deletion of bootadm entries is complete.
GRUB menu default setting is unchanged
Done eliding bootadm entries.
*****
The target boot environment has been activated. It will be used when you
reboot. NOTE: You MUST NOT USE the reboot, halt, or uadmin commands. You
MUST USE either the init or the shutdown command when you reboot. If you
do not use either init or shutdown, the system will not boot using the
target BE.
*****
'''

# reboot
May 30 09:52:32 pups reboot: initiated by root on /dev/console
syncing file systems... done
rebooting...

CE SDRAM BIOS P/N GR-xlint.007-4.330
*

BIOS Lan-Console 2.0
```



```

Copyright (C) 1999-2001 Intel Corporation
.
.
.
GNU GRUB version 0.95 (637K lower / 3144640K upper memory)
+-----+
| be1
| be1 failsafe
| be10
| be10 failsafe
+-----+
      Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted.
      Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
      commands before booting, or 'c' for a command-line.

SunOS Release 5.10 32-bit
Copyright 1983-2008 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.

Hostname: pups
NIS domain name is sunsoft.eng.sun.com
Reading ZFS config: done.
Mounting ZFS filesystems: (8/8)

pups console login:
# lustatus
Boot Environment      Is      Active Active   Can   Copy
Name                  Complete Now    On Reboot Delete Status
-----
be1                    yes     yes    yes     no
be10                   yes     yes    yes     no
#

```

## x86 システムをフェイルセーフモードでブートする

x86 システムをフェイルセーフモードでブートするには、システムのブート時に GRUB メニューが表示されたら、フェイルセーフブートエントリを選択します。フェイルセーフブートの手順で、一次ブートアーカイブを更新するかどうかを確認されたら、y と入力します。

フェイルセーフブートは、ZFS からブートされるシステムでもサポートされます。UFS をルートとした BE からブートするときは、各 BE に独自のフェイルセーフアーカイブが用意されています。フェイルセーフアーカイブは、ZFS をルートとした BE と同様に、ルートファイルシステムが置かれている場所にあります。x86 システムでは、プール全体の GRUB メニューに各フェイルセーフアーカイブのエントリが 1 つあります。デフォルトのフェイルセーフアーカイブは、デフォルトのブート可能ファイルシステムにあるアーカイブです。デフォルトのブート可能ファイルシステム(データセット)は、プールの `bootfs` プロパティの値で示されます。

ブートアーカイブ復旧の詳細は、[第 13 章「Oracle Solaris ブートアーカイブの管理\(手順\)」](#)を参照してください。

## ▼ x86 システムをフェイルセーフモードでブートする方法

注 - 一部の Oracle Solaris では、GRUB フェイルセーフの対話操作により、矛盾したブートアーカイブが検出されるかどうかに関係なく、ブートアーカイブを更新するように要求されます。このリリースでは、矛盾したブートアーカイブが検出された場合にだけ、ブートアーカイブの更新を要求されます。

- 1 313 ページの「x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法」の手順で説明されている方法のいずれかを使用してシステムを停止します。
- 2 Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。  
あるいは、リセットボタンを使用することもできます。あるいは、電源スイッチを使用してシステムをリブートします。

ブートシーケンスが始まると、GRUB メニューが表示されます。

```
GNU GRUB version 0.95 (637K lower / 3144640K upper memory)
+-----+
| be1
| be1 failsafe
| be3
| be3 failsafe
| be2
| be2 failfafa
+-----+
      Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted.
      Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
      commands before booting, or 'c' for a command-line.
```

注 - 表示される GRUB メニューは、実行している Oracle Solaris リリースに応じて異なります。

- 3 矢印キーを使用して GRUB メニューをナビゲートし、**failsafe** エントリを選択します。
- 4 Return キーを押してフェイルセーフアーカイブをブートします。  
インストール済みの OS インスタンスが検索されます。矛盾したブートアーカイブが検出されると、次のようなメッセージが表示されます。

```
Searching for installed OS instances...

An out of sync boot archive was detected on /dev/dsk/c0t0d0s0.
The boot archive is a cache of files used during boot and
should be kept in sync to ensure proper system operation.

Do you wish to automatically update this boot archive? [y,n,?]
```

5 y と入力して、ブートアーカイブを更新します。

矛盾したブートアーカイブが複数検出された場合は、矛盾したブートアーカイブごとに y と入力してアーカイブを更新するように要求されます。

アーカイブが正常に更新されるごとに、次のメッセージが表示されます。

```
Updating boot archive on /dev/dsk/c0t0d0s0.
The boot archive on /dev/dsk/c0t0d0s0 was updated successfully.
```

ブートアーカイブの更新が完了すると、インストール済みのすべての OS インスタンスが再度検索され、/a にマウントするデバイスの選択を要求されます。矛盾したブートアーカイブが検出されない場合にシステムが最初にブートすると、これと同じメッセージが表示されます。

```
Searching for installed OS instances...
```

```
Multiple OS instances were found. To check and mount one of them
read-write under /a, select it from the following list. To not mount
any, select 'q'.
```

```
1 pool10:13292304648356142148    ROOT/be10
2 rpool:14465159259155950256    ROOT/be01
```

```
Please select a device to be mounted (q for none) [?,??,q]:
```

- デバイスをマウントしないことを選択する場合は、q と入力してブートプロセスを続行します。
- デバイスをマウントすることを選択する場合は、次の手順を実行します。
  - a. デバイスの番号を入力して **Return** キーを押します。  
デバイスが /a にマウントされ、シェルプロンプトに戻ります。
  - b. クリティカルなシステムリソースを修復します。
  - c. クリティカルなシステムリソースの修復が完了したら、デバイスのマウントを解除します。  
# **umount /a**
  - d. システムを再起動します。  
# **reboot**

## ▼ x86: フェイルセーフモードでブートして、破壊されたブートアーカイブを強制的に更新する方法

次の手順では、ブートアーカイブの更新を要求されない場合、またはシステムのハンガアップやループシーケンスが発生した場合に、矛盾したブートアーカイブまたは破壊されたブートアーカイブを再構築する方法を示します。

- 1 313 ページの「x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法」の手順で説明されている方法のいずれかを使用してシステムを停止します。

- 2 システムを再起動します。

# reboot

Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。

あるいは、リセットボタンを使用することもできます。

ブートシーケンスが始まると、GRUB メニューが表示されます。

```
+-----+
| Solaris 10.1... X86                               |
| Solaris failsafe                                 |
|  |
+-----+
Use the and keys to select which entry is highlighted.
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
commands before booting, or 'c' for a command-line.
```

注 - GRUB メニューの内容は、実行している Solaris リリースに応じて異なります。

- 3 矢印キーを使用して GRUB メニューをナビゲートし、**failsafe** エントリを選択します。
- 4 Return キーを押してフェイルセーフアーカイブをブートします。

期限切れのブートアーカイブが存在する場合は、次のようなメッセージが表示されます。

```
Searching for installed OS instances...
```

```
An out of sync boot archive was detected on /dev/dsk/c0t0d0s0.
The boot archive is a cache of files used during boot and
should be kept in sync to ensure proper system operation.
```

```
Do you wish to automatically update this boot archive? [y,n,?]
```

- 5 y と入力してから **Enter** キーを押して、矛盾したブートアーカイブを更新します。次のメッセージが表示されます。

```
Updating boot archive on /dev/dsk/c0t0d0s0.
The boot archive on /dev/dsk/c0t0d0s0 was updated successfully.
```

矛盾したブートアーカイブが見つからない場合は、次のようなメッセージが表示されます。

```
Searching for installed OS instances...
```

```
Solaris 10.1... X86 was found on /dev/dsk/c0t0d0s0.
Do you wish to have it mounted read-write on /a? [y,n,?]
```

このメッセージは、矛盾したブートアーカイブの更新に成功した場合にも表示されます。

- 6 ブートアーカイブが破壊されているデバイスを /a にマウントします。デバイスに対応する番号を入力してから、**Enter** キーを押します。

---

注 - 前の手順で矛盾したアーカイブを更新した場合は、デバイスはすでに /a にマウントされています。

---

- 7 破壊されたブートアーカイブを強制的に更新する場合は、次のように入力します。

```
# bootadm update-archive -f -R /a
```

- 8 デバイスをマウント解除します。

```
# umount /a
```

- 9 システムを再起動します。

```
# reboot
```

#### 例 12-14 x86: フェイルセーフモードでブートして、破壊されたブートアーカイブを強制的に更新する

次の例では、フェイルセーフアーカイブをブートして、破壊されたブートアーカイブを強制的に更新する方法を示します。

```
GNU GRUB version 0.95 (635K lower / 523200K upper memory)
```

```
+-----+
| Solaris 10 1/06 s10x_ulwos_19a X86                               |
| >Solaris failsafe<   |
|   |
+-----+
```

```
Use the and keys to select which entry is highlighted.
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
commands before booting, or 'c' for a command-line.
```

```
SunOS Release 5.10
Copyright 1983-2006 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
Booting to milestone "milestone/single-user:default".
Configuring devices.
Searching for installed OS instances...

Multiple OS instances were found. To check and mount one of them
read-write under /a, select it from the following list. To not mount
any, select 'q'.

  1 /dev/dsk/c0t0d0s0   Solaris 10 1/06 s10x_ulwos_19a X86
  2 /dev/dsk/c0t1d0s0   Solaris 10 5/08 X86

Please select a device to be mounted (q for none) [?,??,q]: 1
mounting /dev/dsk/c0t0d0s0 on /a

Starting shell.
# rm /a/platform/i86pc/boot_archive
# bootadm update-archive -f -R /a
Creating boot_archive for /a
updating /a/platform/i86pc/amd64/boot_archive
updating /a/platform/i86pc/boot_archive
# umount /a
# reboot
syncing file systems... done
rebooting...
.
.
```

## x86 システムをネットワークからブートする

この節では、GRUB ベースのブートをネットワークから実行するときの要件と注意事項について説明します。

ブートサーバーが利用できれば、どのようなシステムもネットワークからブートできます。スタンドアロンのシステムがローカルディスクからブートできない場合、そのシステムを復旧目的でネットワークからブートしなければならないことがあります。x86 システムは、PXE ネットワークブートプロトコルをサポートするネットワークから直接ブートすることができます。

---

注 - PXE ネットワークブートは、Intel の PXE 仕様を実装しているデバイスでのみ動作します。

---

GRUB ベースで PXE ネットワークブートを実行するときには、デフォルトでは DHCP が使用されます。PXE 以外のデバイスの場合には、DHCP または RARP を使用してブートできます。使用するブート方法は、ネットワークで使用できるブート

サーバーの種類によって異なります。PXE または DHCP サーバーを使用できない場合は、GRUB をフロッピーディスク、CD-ROM、またはローカルディスクから読み込むことができます。

GRUB ベースのネットワークブートを実行するには、PXE クライアント用に構成されている DHCP サーバーが必要です。また、tftp サービスを提供するブートサーバーも必要です。クライアントのネットワークインタフェースの構成に必要な情報は、DHCP サーバーから提供されます。

DHCP サーバーは、DHCP クラス PXEClient および GRUBClient に次の情報を返せるように設定されている必要があります。

- ファイルサーバーの IP アドレス
- ブートファイルの名前 (pxegrub)

Oracle Solaris OS の PXE ネットワークブートは、次の順序で実行されます。

1. BIOS が、ネットワークインタフェースからブートするように構成されます。
2. BIOS が DHCP 要求を送信します。
3. DHCP サーバーが、サーバーのアドレスとブートファイルの名前を返します。
4. BIOS が、tftp を使用して pxegrub をダウンロードし、pxegrub を実行します。
5. tftp を使用して GRUB メニューファイルがダウンロードされます。  
このファイルによって、利用可能なブートメニューエントリが表示されます。
6. メニューエントリを選択すると、Oracle Solaris OS のロードが開始されます。

詳細は、『Solaris のシステム管理 (IP サービス)』の「ネットワーク構成サーバーの設定方法」を参照してください。

add\_install\_client コマンドを実行すると、/tftpboot\_01ethernet-address ファイルが作成されます。このファイルは、pxegrub および /tftpboot/menu.lst.01ethernet-address ファイルにリンクされています。/tftpboot/menu.lst.01 ethernet-address ファイルは、GRUB メニューファイルです。このファイルが存在しないときには、pxegrub は、DHCP オプション 150 が指定されている場合はそのオプションを使用する状態に戻り、指定されていない場合は /tftpboot/boot/grub/menu.lst ファイルに戻ります。通常は、1つのシステムで両方の機能を提供できるように設定します。このようなシステムでは、add\_install\_client コマンドを実行すると、/tftpboot ファイルと一緒に、適切に設定された pxegrub メニューファイルと Oracle Solaris ファイルが設定されます。DHCP サービスは、add\_install\_client コマンドを使用して、別の手順として設定します。設定は、クライアントごとに1回行うだけで完了します。詳細は、288 ページの「x86: DHCP マクロについて」および 289 ページの「x86: GRUB ベースのブートをネットワークから実行する方法」を参照してください。

## x86: DHCP マクロについて

`add_install_client -d` スクリプトを使用してインストールサーバーにクライアントを追加すると、このスクリプトから DHCP 設定情報が標準出力に報告されます。この情報は、ネットワークインストール情報をクライアントに伝えるために必要なオプションとマクロを作成する際に使用できます。

DHCP サーバーを使用して DHCP クライアントをネットワークインストールする場合は、DHCP オプションを作成する必要があります。この情報は、Oracle Solaris OS をインストールするときに必要になります。

クライアントから DHCP 要求を送信するときには、サーバーに次のようなクライアント情報を渡す必要があります。

- クライアントの ID。通常は Ethernet アドレス
- クライアント要求のクラス
- クライアントの存在するサブネット

DHCP サーバーは、応答を作成します。この応答は、クライアント要求に対応する次の「マクロ」に基づいて作成されます。

**クラスマクロ**                      クラスマクロは、DHCP 要求に含まれる「クラス文字列」に基づいて作成されます。x86 システムでは、クラス `PXEClient:Arch:00000:UNDI:002001` を含む DHCP 要求が、BIOS によってすでに作成されています。この名前前のマクロが DHCP サーバー構成に定義されている場合には、そのマクロの内容が x86 クライアントに送信されます。

**ネットワークマクロ**              ネットワークマクロの名前は、クライアントが存在するサブネットの IP アドレスになっています。マクロ `129.146.87.0` が DHCP サーバーに定義されている場合には、そのマクロの内容がそのサブネット上のすべてのクライアントに送信されます。送信されるマクロの内容は、DHCP 要求に含まれるクラスに関係ありません。クラスマクロとネットワークマクロの両方に DHCP オプションが定義されている場合は、ネットワークマクロが優先されます。

**IP マクロ**                              IP マクロの名前は、IP アドレスになっています。このマクロはほとんど使用されません。

**クライアントマクロ**              クライアントマクロの名前は、クライアントの種類 (Ethernet の場合は 01) およびクライアントの MAC アドレスに基づいて、大文字の名前が付けられます。Ethernet アドレスが `0:0:39:fc:f2:ef` のクライアントの場合には、対応するマクロの名前は `01000039FCEF` になります。クライアントマクロにはコロンが付きません。



たとえば、サブネット 192.168.100.0 に存在し、Ethernet アドレスとして 0:0:39:fc:f2:ef が割り当てられ、クラス PXEClient の DHCP 要求を作成するクライアントの場合には、DHCP サーバー上に次のような対応するマクロが存在します。

```
PXEClient
  BootSrvA: 192.168.100.0
  BootFile: pxegrub
129.146.87.0
  Router: 129.146.87.1
  NISdomain: sunsoft.eng.sun.com
01000039FCEF
  BootFile: 01000039FCEF
The actual DHCP response will be
  BootSrvA: 192.168.100.0
  BootFile: 01000039FCEF
  Router: 129.146.87.1
  NISdomain: sunsoft.eng.sun.com
```

クライアントマクロの BootFile は、クラスマクロの BootFile より優先されます。

詳細については、『Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド (ネットワークインストール)』の「DHCP サービスによるシステム構成情報の事前設定 (作業)」を参照してください。

## ▼ x86: GRUB ベースのブートをネットワークから実行する方法

GRUB ベースのネットワークブートを実行するには、PXE クライアント用に構成されている DHCP サーバーが必要です。また、tftp サービスを提供するブートサーバーも必要です。この DHCP サーバーは、ファイルサーバーの IP アドレスとブートファイル (pxegrub) を取得するために、DHCP クラスの PXEClient と GRUBClient に応答できるように設定されている必要があります。デフォルトでは、メニューファイルは /tftpboot/menu.lst.01ethernet-address です。このファイルが存在しないときには、pxegrub は、DHCP オプション 150 が指定されている場合はそのオプションに戻り、指定されていない場合は /tftpboot/boot/grub/menu.lst ファイルに戻ります。

システムを Solaris ソフトウェアメディアからブートする場合、システムは自動的にブートします。

始める前に GRUB を使用して x86 システム上でネットワークブートを実行する前に、次の準備を行います。

- システムをネットワークからブートするために必要なコマンドをインストールサーバー上で実行します。
- クライアントシステムをインストールクライアントとして追加します。

詳細は、『Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド(ネットワークインストール)』の第4章「ネットワークからのインストール(概要)」を参照してください。

1 DHCP サーバー上で、次の2つのオプションを使用して、DHCP サービスのクライアントマクロを作成します。

- `BootSrvA: svr-addr`
- `BootFile: client-macro`

`dhtadm` コマンドを実行するには、DHCP サーバー上のスーパーユーザー特権が必要です。

`svr-addr` はサーバーの IP アドレスです。`client-macro` は、クライアントの Ethernet タイプ(01)とクライアントの MAC アドレスに基づいて作成された、大文字の名前です。この番号は、インストールサーバーの `/tftpboot` ディレクトリで使用されるファイルの名前としても使われます。

---

注 - `client-macro` には、コロンを含めてはいけません。

---

クライアントマクロは、DHCP GUI またはコマンド行インタフェースから作成できます。

クライアントマクロをコマンド行から作成するには、次のように入力します。

```
# dhtadm -[MA] -m client macro -d
":BootFile=client-macro:BootSrvA=svr-addr:"
```

2 システムを再起動します。

3 ネットワークからブートするように BIOS に指示します。

- 特定のキーストロークシーケンスを使用してネットワークブートするように設定されている場合は、BIOS 画面が表示されたときにそのキーストロークを入力します。
- ネットワークブートのために BIOS 設定を手動で変更する必要がある場合は、BIOS 設定ユーティリティにアクセスするためのキーストロークシーケンスを入力します。その画面で、ネットワークブートのブート優先順位を変更します。

- 4 **GRUB** メニューが表示されたら、インストールするネットワークインストールイメージを選択します。



# ◆◆◆ 第 13 章

## Oracle Solaris ブートアーカイブの管理 (手順)

---

この章では、Oracle Solaris ブートアーカイブを管理する方法を説明します。bootadm コマンドの詳細な使用手順も説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 293 ページの「Oracle Solaris ブートアーカイブの管理 (作業マップ)」
- 295 ページの「Oracle Solaris ブートアーカイブの説明」
- 296 ページの「boot-archive サービスの管理」
- 297 ページの「ブートアーカイブの自動復旧」
- 299 ページの「bootadm コマンドを使用してブートアーカイブを管理する」

ブートプロセスの概要については、第 9 章「システムのシャットダウンとブート (概要)」を参照してください。システムのブート手順については、第 12 章「Oracle Solaris システムのブート (手順)」を参照してください。

## Oracle Solaris ブートアーカイブの管理 (作業マップ)

表 13-1 ブートアーカイブの管理 (作業マップ)

| 作業                       | 説明                                                                                                                                   | 参照先                            |
|--------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------|
| boot-archive サービスを管理します。 | boot-archive サービスは、サービス管理機能 (SMF) によって制御されます。サービスを有効/無効にするには、svcadm コマンドを使用します。boot-archive サービスが実行されているかどうかを確認するには、svcs コマンドを使用します。 | 296 ページの「boot-archive サービスの管理」 |

表 13-1 ブートアーカイブの管理 (作業マップ) (続き)

| 作業                                                                 | 説明                                                                                                     | 参照先                                                                       |
|--------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| <b>x86:</b> auto-reboot-safe プロパティを使ってブートアーカイブ更新障害を消去します。          | auto-reboot-safe プロパティが false に設定されているために、x86 システムでブートアーカイブ更新が失敗した場合に、この手順を使用します。                      | 297 ページの「x86: auto-reboot-safe プロパティを使用して自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法」           |
| bootadm コマンドを使用して、ブートアーカイブ更新障害を消去します。                              | auto-reboot-safe プロパティが true に設定されている場合に、SPARC プラットフォームと x86 プロットフォームで、この手順を使用してブートアーカイブ更新障害を手動で消去します。 | 298 ページの「bootadm コマンドを使って自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法」                           |
| bootadm コマンドを使ってブートアーカイブを手動で更新します。                                 | ブートアーカイブを手動で更新する場合は、bootadm update-archive コマンドを使用します。                                                 | 299 ページの「bootadm コマンドを使ってブートアーカイブを手動で更新する方法」                              |
| Solaris ボリュームマネージャー (SVM) メタデバイスミラールートのあるシステム上で、ブートアーカイブを手動で更新します。 | メタデバイスミラーを使用するシステム上で、bootadm コマンドを使用してデバイスを手動でマウントしてから、ブートアーカイブを更新する必要があります。                           | 300 ページの「Solaris ボリュームマネージャー RAID-1 (ミラー) ルートパーティション上のブートアーカイブを手動で更新する方法」 |
| bootadm コマンドを使用してブートアーカイブの内容を一覧表示します。                              | ブートアーカイブの内容を一覧表示する場合は、bootadm list-archive コマンドを使用します。                                                 | 302 ページの「ブートアーカイブの内容を一覧表示する方法」                                            |
| <b>x86:</b> bootadm コマンドを使用してアクティブな GRUB メニューを検出します。               | アクティブな GRUB メニューの場所を調べる場合は、bootadm list-menu コマンドを使用します。                                               | 302 ページの「x86: アクティブな GRUB メニューを検出し、現在のメニューエントリを一覧表示する方法」                  |
| <b>x86:</b> bootadm コマンドを使用して GRUB メニューのデフォルトブートエントリを設定します。        | GRUB メニューのデフォルトのブートエントリを設定する場合は、bootadm set-menu コマンドを使用します。                                           | 303 ページの「x86: アクティブな GRUB メニューのデフォルトのブートエントリを設定する方法」                      |

## Oracle Solaris ブートアーカイブの説明

Oracle Solaris OS をシステムにインストールすると、`bootadm` コマンドによって一次ブートアーカイブとフェイルセーフアーカイブが1つずつ作成されます。

「一次ブートアーカイブ」は、ルート (*/*) ファイルシステムのサブセットです。このブートアーカイブには、すべてのカーネルモジュール、`driver.conf` ファイル、およびいくつかの構成ファイルが含まれています。これらのファイルは、`/etc` ディレクトリにあります。ブートアーカイブ内のファイルは、ルート (*/*) ファイルシステムがマウントされる前に、カーネルによって読み取られます。ルート (*/*) ファイルシステムがマウントされると、ブートアーカイブはカーネルによってメモリーから破棄されます。次に、ファイル I/O がルートデバイスに実行されます。

SPARC ブートアーカイブを構成するファイルは、`/platform` ディレクトリにあります。

このディレクトリの内容は、3つのグループのファイルに分けられます。

- `sun4u` ブートアーカイブに必要なファイル
- `sun4v` ブートアーカイブに必要なファイル
- `sun4us` ブートアーカイブに必要なファイル

x86 ブートアーカイブを構成するファイルは、`/platform/i86pc` ディレクトリにあります。

ブートアーカイブに含まれるファイルとディレクトリを一覧表示するには、`bootadm list-archive` コマンドを使用します。

アーカイブ内のファイルが更新された場合は、ブートアーカイブを再構築する必要があります。変更を有効にするには、次にシステムがリブートする前にアーカイブを再構築する必要があります。

「フェイルセーフ」ブートアーカイブは、Solaris OS のインストール時に作成される2番目の種類のアーカイブです。

フェイルセーフブートアーカイブには、次のような利点と特徴があります。

- 独立したブートアーカイブである
- ブートアーカイブ自体でブートできる
- デフォルトでは OS のインストール中に作成される
- 保守の必要がない

フェイルセーフモードでのシステムのブートについては、[263 ページ](#)の「SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする」および[281 ページ](#)の「x86 システムをフェイルセーフモードでブートする」を参照してください。

## boot-archive サービスの管理

boot-archive サービスは、サービス管理機能 (SMF) によって制御されます。boot-archive サービスインスタンスは、`svc:/system/boot-archive:default` です。サービスを有効/無効にするには、`svcadm` コマンドを使用します。

boot-archive サービスが実行されているかどうかを確認するには、`svcs` コマンドを使用します。

詳細は、[svcadm\(1M\)](#) および [svcs\(1\)](#) のマニュアルページを参照してください。

### ▼ boot-archive サービスを有効または無効にする方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。

- 2 boot-archive サービスを有効または無効にするには、次のように入力します。

```
# svcadm enable | disable system/boot-archive
```

- 3 boot-archive サービスの状態を確認するには、次のように入力します。

```
% svcs boot-archive
```

サービスが実行されている場合は、オンラインサービスの状態が表示されます。

```
STATE          STIME      FMRI
online          9:02:38   svc:/system/boot-archive:default
```

サービスが実行されていない場合は、サービスがオフラインになっていることが表示されます。

**注意事項** 自動ブートアーカイブ更新障害の消去については、[297 ページ](#)の「ブートアーカイブの自動復旧」を参照してください。



## ブートアーカイブの自動復旧

Oracle Solaris 10 9/10 リリース以降、SPARC プラットフォームでのブートアーカイブ復旧が完全に自動化されました。x86 プラットフォームでは、ブートアーカイブの復旧は部分的に自動化されています。

x86 プラットフォームでブートアーカイブの自動復旧をサポートするために、新しい `auto-reboot-safe` プロパティがブート構成 SMF サービス `svc:/system/boot-config:default` に追加されています。このプロパティの値は、デフォルトでは `false` に設定されています。これにより、システムが不明のブートデバイスで自動的にリブートすることが回避されます。ただし、Oracle Solaris OS のインストールされている BIOS ブートデバイスおよびデフォルト GRUB メニューエントリで自動的にリブートするようにシステムが構成されている場合は、このプロパティの値を `true` に設定してブートアーカイブの自動復旧を有効にできます。次の手順は、x86 プラットフォームで自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法を示しています。

`bootadm` コマンドを使用して自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法については、298 ページの「[bootadm コマンドを使って自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法](#)」を参照してください。

### ▼ x86:auto-reboot-safe プロパティを使用して自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法

x86 システムで、システムのブートプロセス中に次のような警告が表示される場合、以降の手順で説明する操作を実行してください。

```
WARNING: Reboot required.  
The system has updated the cache of files (boot archive) that is used  
during the early boot sequence. To avoid booting and running the system  
with the previously out-of-sync version of these files, reboot the  
system from the same device that was previously booted.
```

ここで、システムは保守モードに入ります。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 システムを再起動します。

```
# reboot
```

このタイプの障害を防ぐため、アクティブな BIOS ブートデバイスおよび GRUB メニューエントリが現在のブートインスタンスを指し示している場合に、次の操作を実行してください。

- 3 次のように入力して、`svc:/system/boot-config` SMF サービスの `auto-reboot-safe` プロパティを `true` に設定します。

```
# svccfg -s svc:/system/boot-config:default setprop config/auto-reboot-safe = true
```

- 4 `auto-reboot-safe` プロパティの設定が正しいことを確認します。

```
# svccfg -s svc:/system/boot-config:default listprop |grep config/auto-reboot-safe
config/auto-reboot-safe          boolean true
```

## ▼ bootadm コマンドを使って自動ブートアーカイブ更新障害を消去する方法

システムのブートプロセス中に次のような警告メッセージが表示される場合は、適切な操作を実行します。

```
WARNING: Automatic update of the boot archive failed.
Update the archives using 'bootadm update-archive'
command and then reboot the system from the same device that
was previously booted.
```

次の手順は、`bootadm` コマンドを使用して期限切れのブートアーカイブを手動で更新する方法を示しています。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 ブートアーカイブを更新するには、次のように入力します。

```
# bootadm update-archive
```

`bootadm` システム上のブートアーカイブを管理します。

`update-archive` 必要に応じて、現在のブートアーカイブを更新します。SPARC と x86 の両方のシステムに適用されます。

- 3 システムを再起動します。

```
# reboot
```

# bootadm コマンドを使用してブートアーカイブを管理する

/sbin/bootadm コマンドを使用すると、次の作業を行えます。

- システム上の現在のブートアーカイブを手動で更新する。
- システム上のブートアーカイブに含まれるファイルとディレクトリを一覧表示する。
- **x86** のみ: GRUB メニューを保守する。
- **x86** のみ: アクティブな GRUB メニューと現在の GRUB メニューエントリを検出する。

このコマンドの構文は次のとおりです。

```
/sbin/bootadm [subcommand] [-option] [-R altroot]
```

bootadm コマンドの詳細は、[bootadm\(IM\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## ▼ bootadm コマンドを使ってブートアーカイブを手動で更新する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 ブートアーカイブを更新するには、次のように入力します。

```
# bootadm update-archive
```

bootadm                   システム上のブートアーカイブを管理します。

update-archive           必要に応じて、現在のブートアーカイブを更新します。SPARC と x86 の両方のシステムに適用されます。

- 代替ルートのブートアーカイブを更新するには、次のように入力します。

```
# bootadm update-archive -R /a
```

-R altroot           update-archive サブコマンドに適用する代替ルートパスを指定します。

---

注 -R オプションを使用して非大域ゾーンのルート (/) ファイルシステムを参照してはいけません。そのようにすると、大域ゾーンのファイルシステムが損傷したり、大域ゾーンのセキュリティが低下したり、非大域ゾーンのファイルシステムが損傷したりする場合があります。 [zones\(5\)](#) のマニュアルページを参照してください。

---

- 3 システムを再起動します。

```
# reboot
```

## ▼ Solaris ボリュームマネージャー RAID-1 (ミラー) ルートパーティション上のブートアーカイブを手動で更新する方法

次の手順は、フェイルセーフブート時にミラーメタデバイスをマウントする方法を示しています。この手順で使用されるルート (/) ファイルシステムは、`/dev/dsk/c0t0d0s0` です。

- 1 フェイルセーフアーカイブをブートします。

- **SPARC** プラットフォーム: `ok` プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
ok boot -F failsafe
```

システムがすでに動作している場合は、端末ウィンドウを開いてスーパーユーザーになり、次のコマンドを入力します。

```
# reboot -- "-F failsafe"
```

詳細は、[264 ページ](#)の「[SPARC システムをフェイルセーフモードでブートする方法](#)」を参照してください。

- **x86** プラットフォーム: **GRUB** メニューでフェイルセーフブートエントリを選択して、システムをブートします。

詳細は、[282 ページ](#)の「[x86 システムをフェイルセーフモードでブートする方法](#)」を参照してください。

フェイルセーフモードでシステムをブートすると、次の出力が生成されます。

```
Starting shell.  
#
```

- 2 フェイルセーフブート時に、システムによりマウントするデバイスの選択が求められたら、何もマウントしないことを意味する `q` を入力します。  
Please select a device to be mounted (q for none)[?,??,q]: `q`
- 3 ルート (/) ファイルシステムのサブミラーを、`/a` ディレクトリに読み取り専用で一時的にマウントします。  
`# mount -o ro /dev/dsk/c0t0d0s0 /a`
- 4 `md.conf` ファイルを `/kernel/drv` ディレクトリにコピーします。  
`# cp /a/kernel/drv/md.conf /kernel/drv/`
- 5 `/a` ディレクトリのマウントを解除します。  
`# umount /a`
- 6 `devfsadm` コマンドを使って、`md` ドライバを読み込みます。  
`# update_drv -f md`  
このコマンドを実行すると、構成が読み込まれて必要なデバイスが作成されます。

---

注- 次の手順に進む前に、数秒間待って `md` ドライバが確実に読み込まれるようにします。

---

- 7 `metasync` コマンドを使って、ルート (/) ファイルシステムを確実に同期します。次に例を示します。  
`# metasync d0`
- 8 ルートミラーメタデバイスを `/a` ディレクトリにマウントします。  
`# mount /dev/md/dsk/d0 /a`
- 9 前の手順でマウントしたデバイスのブートアーカイブを更新します。  
`# bootadm update-archive -v -R /a`  
ブートアーカイブの更新に失敗するか、エラーメッセージが表示されたら、次の手順を実行します。
  - a. `/a` ディレクトリの `md.conf` ファイルのタイムスタンプを更新します。これにより、ブートアーカイブが強制的に更新されます。  
`# touch /a/kernel/drv/md.conf`
  - b. `bootadm` コマンドを実行してブートアーカイブを更新します。  
`# bootadm update-archive -v -R /a`

ブートアーカイブの更新が完了するまで、数分かかります。ブートアーカイブの更新が成功したら、次のようなメッセージが表示されます。

```
changed /a/etc/system
cannot find: /a/etc/cluster/nodeid: No such file or directory
cannot find: /a/etc/devices/mdm_ib_cache: No such file or directory
Creating ram disk on /a
updating /a/platform/i86pc/boot_archive
```

10 /a をマウント解除します。

```
# unmount /a
```

11 システムを再起動します。

## ▼ ブートアーカイブの内容を一覧表示する方法

1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

2 ブートアーカイブに含まれるファイルとディレクトリを一覧表示するには、次のように入力します。

```
# bootadm list-archive
```

list-archive ブートアーカイブに含まれるファイルとディレクトリを一覧表示します。SPARC と x86 の両方のシステムに適用されます。

## ▼ x86: アクティブな GRUB メニューを検出し、現在のメニューエントリを一覧表示する方法

次の手順に従って、アクティブな GRUB メニューの場所を調べ、現在の GRUB メニューエントリを一覧表示します。

1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 アクティブな **GRUB** メニューの場所と現在の **GRUB** メニューエントリを一覧表示するには、次のように入力します。

```
# bootadm list-menu
```

```
list-menu    アクティブな GRUB メニューの場所と現在の GRUB メニューエントリ
              を一覧表示します。autoboot-timeout、デフォルトのエントリ番
              号、および各エントリのタイトルに関する情報がこのリストに表示さ
              れます。x86 システムだけに適用されます。
```

- 例 13-1 アクティブな GRUB メニューの場所と現在の GRUB メニューエントリを一覧表示する

```
# bootadm list-menu
```

```
The location for the active GRUB menu is: /stubboot/boot/grub/menu.lst
default=0
timeout=10
(0) Solaris10
(1) Solaris10 Failsafe
(2) Linux
```

## ▼ x86: アクティブな **GRUB** メニューのデフォルトのブートエントリを設定する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 アクティブな **GRUB** メニューのデフォルトのブートエントリを設定するには、次のように入力します。

```
# bootadm set-menu menu-entry
```

```
set-menu    GRUB メニューを保守します。アクティブな GRUB メニューの場所は
              boot/grub/menu.lst です。x86 システムだけに適用されます。
```

```
menu-entry  デフォルトとして設定する GRUB メニューエントリを指定します。
```

- 3 デフォルトのメニューエントリが変更されていることを確認するには、次のように入力します。

```
# bootadm list-menu
```

新しいデフォルトのメニューエントリが表示されるはずですが、

### 例 13-2 GRUB のデフォルトのメニューエントリを切り替える

次の例は、デフォルトの GRUB メニューを、前の例に表示されているメニューエントリのいずれかに切り替える方法を示しています。選択したメニューエントリは、Linux (メニューエントリ 2) です。

```
# bootadm set-menu default=2
```

参照 各 GRUB 実装における menu.lst ファイルについては、[323 ページの「x86: サポートされる GRUB のバージョン」](#)を参照してください。



# Oracle Solaris システムのブートのトラブルシューティング (手順)

---

この章では、SPARC システムおよび x86 システムで Oracle Solaris をブートする手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 305 ページの「SPARC プラットフォームのブートのトラブルシューティング (作業マップ)」
- 312 ページの「x86 プラットフォームのブートのトラブルシューティング (作業マップ)」

## SPARC プラットフォームのブートのトラブルシューティング (作業マップ)

| 作業                                  | 説明                                                   | 参照先                                         |
|-------------------------------------|------------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| 復旧を目的としてシステムを停止します。                 | 破損したファイルによってシステムのブートが正常に行えない場合は、最初にシステムを停止して復旧を試みます。 | 306 ページの「SPARC: 復旧を目的としてシステムを停止する方法」        |
| 強制的にシステムのクラッシュダンプを実行し、システムをリポートします。 | トラブルシューティング手段としてシステムのクラッシュダンプとリポートを強制的に実行できます。       | 307 ページの「SPARC: クラッシュダンプを強制してシステムをリポートする方法」 |
| 復旧を目的として SPARC システムをブートします。         | システムをブートして、システムの正常なブートを妨げている重要なシステムファイルを修復します。       | 309 ページの「SPARC: 復旧を目的としてシステムをブートする方法」       |

| 作業                                                   | 説明                                                                                                                               | 参照先                                                      |
|------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| Oracle Solaris ZFS ルートの存在する SPARC システムを、復旧目的でブートします。 | システムをブートして、Oracle Solaris ZFS ルート環境への正常なログインを妨げている root パスワードまたは類似の問題から復旧します。エラーの重大度に応じて、フェイルセーフモードでブートするか、代替メディアからブートする必要があります。 | 311 ページの「SPARC: ZFS ルート環境をブートして、パスワード消失または類似の問題から復旧する方法」 |
| カーネルデバッグを使ってシステムをブートします。                             | カーネルデバッグを使ってシステムをブートして、ブート問題のトラブルシューティングを実行できます。システムのブートには kmdb コマンドを使用します。                                                      | 311 ページの「SPARC: カーネルデバッグ (kmdb) を使ってシステムをブートする方法」        |

システムの正常なブートを妨げている問題のトラブルシューティングには、次の方法が1つ以上必要になることがあります。

- システムのブート時にエラーメッセージのトラブルシューティングを行います。
- システムを停止して復旧を試みます。
- 復旧を目的としてシステムをブートします。
- 強制的にクラッシュダンプを実行し、システムをリブートします。
- kmdb コマンドを使用してカーネルデバッグでシステムをブートします。

## ▼ SPARC: 復旧を目的としてシステムを停止する方法

- 1 システムのアポートキーシーケンスを入力します。  
モニターに、ok PROM プロンプトが表示されます。  
ok  
アポートキーシーケンスは、キーボードのタイプによって異なります。たとえば、Stop + A または L1 + A キーを押します。端末では、Break キーを押します。
- 2 ファイルシステムを同期させます。  
ok sync
- 3 syncing file systems... というメッセージが表示されたら、アポートキーシーケンスをもう一度入力します。
- 4 該当する boot コマンドを入力して、ブートプロセスを起動します。  
詳細は、boot(1M) のマニュアルページを参照してください。
- 5 システムが指定した実行レベルになっていることを確認します。

```
# who -r
.          run-level s  May  2 07:39    3    0  S
```

## 例 14-1 SPARC: 復旧を目的としてシステムを停止する

```

    Press Stop-A
ok sync
syncing file systems...
    Press Stop-A
ok boot

```

## SPARC: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする

場合によっては、トラブルシューティングの目的でクラッシュダンプを強制実行し、システムをリブートする必要があります。デフォルトでは、`savecore` 機能を使用できます。

システムのクラッシュダンプについては、『Solaris のシステム管理 (上級編)』の第 17 章「システムクラッシュ情報の管理 (手順)」を参照してください。

### ▼ SPARC: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする方法

システムのクラッシュダンプを強制実行するには、次の手順を実行します。この手順のあとに紹介する例は、`halt -d` コマンドを使用してシステムのクラッシュダンプを強制実行する方法を示しています。このコマンドの実行後は、手動でシステムをリブートする必要があります。

- 1 システムのアポートキーシーケンスを入力します。

アポートキーシーケンスは、キーボードのタイプによって異なります。たとえば、`Stop + A` または `L1 + A` キーを押します。端末では、`Break` キーを押します。

ok PROM プロンプトが表示されます。

- 2 ファイルシステムを同期させ、クラッシュダンプを書き出します。

```

> n
ok sync

```

クラッシュダンプがディスクに書き出されると、システムはそのままリブートします。

- 3 システムが実行レベル 3 になっていることを確認します。

ブートプロセスが正常に終了すると、ログイン画面かログインプロンプトが表示されます。

```
hostname console login:
```

## 例 14-2 SPARC:halt -d コマンドを使用してシステムのクラッシュダンプとリブートを強制実行する

次の例は、halt -d と boot の各コマンドを使用して、システム jupiter のクラッシュダンプとリブートを強制実行する方法を示しています。システムのクラッシュダンプとリブートを強制実行する場合は、この方法を使用してください。

```
# halt -d
Jul 21 14:13:37 jupiter halt: halted by root

panic[cpu0]/thread=30001193b20: forced crash dump initiated at user request

000002a1008f7860 genunix:kadmin+438 (b4, 0, 0, 0, 5, 0)
  %l0-3: 0000000000000000 0000000000000000 0000000000000004 0000000000000004
  %l4-7: 00000000000003cc 0000000000000010 0000000000000004 0000000000000004
000002a1008f7920 genunix:uadmin+110 (5, 0, 0, 6d7000, ff00, 4)
  %l0-3: 0000030002216938 0000000000000000 0000000000000001 0000004237922872
  %l4-7: 000000423791e770 0000000000004102 0000030000449308 0000000000000005

syncing file systems... 1 1 done
dumping to /dev/dsk/c0t0d0s1, offset 107413504, content: kernel
100% done: 5339 pages dumped, compression ratio 2.68, dump succeeded
Program terminated
ok boot
Resetting ...

Sun Ultra 5/10 UPA/PCI (UltraSPARC-IIi 333MHz), No Keyboard
OpenBoot 3.15, 128 MB memory installed, Serial #10933339.
Ethernet address 8:0:20:a6:d4:5b, Host ID: 80a6d45b.

Rebooting with command: boot
Boot device: /pci@1f,0/pci@1,1/ide@3/disk@0,0:a
File and args: kernel/sparcv9/unix
SunOS Release 5.10 Version s10_60 64-bit
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
configuring IPv4 interfaces: hme0.
add net default: gateway 172.20.27.248
Hostname: jupiter
The system is coming up. Please wait.
NIS domain name is example.com
.
.
.
System dump time: Wed Jul 21 14:13:41 2004
Jul 21 14:15:23 jupiter savecore: saving system crash dump
in /var/crash/jupiter/*.0
Constructing namelist /var/crash/jupiter/unix.0
Constructing corefile /var/crash/jupiter/vmcore.0
100% done: 5339 of 5339 pages saved

Starting Sun(TM) Web Console Version 2.1-dev...
```

## ▼ SPARC: 復旧を目的としてシステムをブートする方法

次の手順は、`/etc/passwd` などの重要なファイルに、無効なエントリがあり正常にブートできない場合に使用します。

`root` パスワードがわからない場合やシステムにログインできない場合は、この手順で示すアポルトキーシーケンスを使用します。詳細は、[306 ページの「SPARC: 復旧を目的としてシステムを停止する方法」](#)を参照してください。

次の手順で使用されている変数 `device-name` は、修復するファイルシステムのデバイス名に置き換えてください。システムのデバイス名を調べる場合は、『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の「デバイス構成情報の表示」を参照してください。

- 1 システムのアポルトキーシーケンスを使用して、システムを停止します。
- 2 システムをシングルユーザーモードでブートします。
  - Oracle Solaris インストールメディアからシステムをブートします。
    - Oracle Solaris インストールメディアをドライブに挿入します。
    - Solaris SOFTWARE - 1 CD または DVD から、シングルユーザーモードでブートします。

```
ok boot cdrom -s
```

- ネットワーク (インストールサーバーまたはリモート CD/DVD ドライブが使用できない場合) からシステムをブートします。

```
ok boot net -s
```

- 3 ファイル内に無効なエントリがあるファイルシステムをマウントします。

```
# mount /dev/dsk/device-name /a
```

- 4 新しくマウントしたファイルシステムに移動します。

```
# cd /a/file-system
```

- 5 端末タイプを設定します。

```
# TERM=sun  
# export TERM
```

- 6 エディタを使って、ファイルから無効なエントリを削除します。

```
# vi filename
```

- 7 ルート (/) ディレクトリに変更します。

```
# cd /
```

- 8 /aディレクトリのマウントを解除します。

```
# umount /a
```

- 9 システムを再起動します。

```
# init 6
```

- 10 システムが実行レベル3になっていることを確認します。

ブートプロセスが正常に終了すると、ログイン画面かログインプロンプトが表示されます。

```
hostname console login:
```

#### 例 14-3 SPARC: 復旧を目的としてシステムをブートする (パスワードファイルが損傷した場合)

次の例は、ローカルの CD-ROM からブートしたあとで重要なシステムファイル (この場合は /etc/passwd) を修復する方法を示しています。

```
ok boot cdrom -s
# mount /dev/dsk/c0t3d0s0 /a
# cd /a/etc
# TERM=vt100
# export TERM
# vi passwd
  (Remove invalid entry)
# cd /
# umount /a
# init 6
```

#### 例 14-4 SPARC: root パスワードを忘れた場合にシステムをブートする

次の例は、root パスワードを忘れた場合にネットワークからシステムをブートする方法を示しています。この例では、ネットワークのブートサーバーが利用可能になっていることを前提とします。システムをリブートしたあとで必ず新しい root パスワードを適用してください。

```
ok boot net -s
# mount /dev/dsk/c0t3d0s0 /a
# cd /a/etc
# TERM=vt100
# export TERM
# vi shadow
  (Remove root's encrypted password string)
# cd /
# umount /a
# init 6
```

## ▼ SPARC: ZFS ルート環境をブートして、パスワード消失または類似の問題から復旧する方法

- 1 システムをフェイルセーフモードでブートします。

```
ok boot -F failsafe
```

- 2 プロンプトが表示されたら、ZFS BE を /a にマウントします。

```
.
.
ROOT/zfsBE was found on rpool.
Do you wish to have it mounted read-write on /a? [y,n,?] y
mounting rpool on /a
Starting shell.
```

- 3 スーパーユーザーになります。

- 4 /a/etc ディレクトリに移動します。

```
# cd /a/etc
```

- 5 passwd または shadow ファイルを修正します。

```
# vi passwd
```

- 6 システムを再起動します。

```
# init 6
```

## ▼ SPARC: カーネルデバッガ (kmdb) を使ってシステムをブートする方法

この手順では、カーネルデバッガ (kmdb) を読み込むための基本的な操作を示します。詳細は、『Oracle Solaris モジューラデバッガ』を参照してください。

---

注 - システムを対話式でデバッグする時間がない場合は、-d オプションを指定して reboot コマンドと halt コマンドを使用します。-d オプションを指定して halt コマンドを実行するには、実行後にシステムを手動でリブートする必要があります。これに対し、reboot コマンドを使用した場合、システムは自動的にブートします。詳細は、[reboot\(1m\)](#) のマニュアルページを参照してください。

---

- 1 システムを停止します。これにより、ok プロンプトが表示されます。

システムを正常に停止するには、/usr/sbin/halt コマンドを使用します。

- 2 boot kmdb または boot -k のどちらかを入力して、カーネルデバッガの読み込みを要求します。Return キーを押します。

### 3 カーネルデバッグを入力します。

デバッグを入力するための方法は、システムのアクセスに使用するコンソールのタイプによって異なります。

- ローカル接続されたキーボードを使用している場合は、キーボードのタイプに応じて **Stop + A** または **L1 + A** キーを押してください。
- シリアルコンソールを使用している場合は、使用中のシリアルコンソールのタイプに適した方法でブレイクを送信します。

カーネルデバッグを初めて入力したときに、ウェルカムメッセージが表示されません。

```
Rebooting with command: kadb
Boot device: /iommu/sbus/espdma@4,800000/esp@4,8800000/sd@3,0
.
.
.
```

#### 例 14-5 SPARC: システムをカーネルデバッグ (kadb) でブートする

```
ok boot kadb
Resetting...

Executing last command: boot kadb -d
Boot device: /pci@1f,0/ide@disk@0,0:a File and args: kadb -d
Loading kadb...
```

## x86 プラットフォームのブートのトラブルシューティング(作業マップ)

| 作業                                  | 説明                                                                                       | 参照先                                                        |
|-------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|
| 復旧を目的としてシステムを停止します。                 | 破損したファイルによってシステムのブートが正常に行えない場合は、最初にシステムを停止して復旧を試みます。                                     | 313 ページの「x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法」                         |
| 強制的にシステムのクラッシュダンプを実行し、システムをリポートします。 | トラブルシューティング手段としてシステムのクラッシュダンプとリポートを強制的に実行できます。                                           | 313 ページの「x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリポートする方法」                  |
| カーネルデバッグを使ってシステムをブートします。            | カーネルデバッグを使ってシステムをブートして、ブート問題のトラブルシューティングを実行できます。システムのブートには <code>kadb</code> コマンドを使用します。 | 314 ページの「x86: GRUB ブート環境でカーネルデバッグ (kadb) を使ってシステムをブートする方法」 |



## ▼ x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法

- 1 可能であれば、次のいずれかのコマンドを使用してシステムを停止します。
  - キーボードとマウスを使用できる場合は、スーパーユーザーになります。次に、`init 0` と入力してシステムを停止します。Press any key to reboot プロンプトが表示されたら、任意のキーを押してシステムをリブートします。
  - キーボードやマウスが動作する場合は、スーパーユーザーになり、`init 6` と入力してシステムをリブートします。
- 2 マウスまたはキーボードからの入力にシステムが応答しない場合、リセットキーがあればそのキーを押してシステムをリブートします。  
あるいは、電源スイッチを使用してシステムをリブートします。

## x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする

場合によっては、トラブルシューティングの目的でクラッシュダンプを強制実行し、システムをリブートする必要があります。デフォルトでは、`savecore` 機能を使用できます。

システムのクラッシュダンプについては、『Solaris のシステム管理 (上級編)』の第 17 章「システムクラッシュ情報の管理 (手順)」を参照してください。

## ▼ x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする方法

`reboot -d` コマンドまたは `halt -d` コマンドを使用できない場合は、カーネルデバッガ `kldb` を使用してクラッシュダンプを強制的に実行できます。次の手順を実行するには、ブート時または `mdb -k` コマンド経由でカーネルデバッガが読み込まれている必要があります。

---

注 - カーネルデバッガ (`kldb`) にアクセスするにはテキストモードでなければなりません。したがって、まずウィンドウシステムを終了してください。

---

- 1 カーネルデバッガにアクセスします。  
デバッガにアクセスするための方法は、システムへのアクセスに使用するコンソールのタイプによって異なります。
  - ローカル接続されているキーボードを使用している場合は、F1-A を押します。
  - シリアルコンソールを使用している場合は、そのシリアルコンソールタイプに適した方法でブレークを送信します。

`kldb` プロンプトが表示されます。

- 2 クラッシュを強制実行するために、`systemdump` マクロを使用します。  

```
[0]> $<systemdump
```

 パニックメッセージが表示され、クラッシュダンプが保存され、システムがリブートします。
- 3 コンソールログインプロンプトでログインして、システムがリブートされていることを確認します。

#### 例 14-6 x86:halt -d コマンドを使用してシステムのクラッシュダンプとリブートを強制実行する

この例は、`halt -d` コマンドと `boot` コマンドを使って、x86 システム `neptune` のクラッシュダンプとリブートを強制実行する方法を示しています。システムのクラッシュダンプを強制するには、この方法を使用してください。このあとに、システムを手動でリブートします。

```
# halt -d
4ay 30 15:35:15 wacked.Central.Sun.COM halt: halted by user

panic[cpu0]/thread=ffffffff83246ec0: forced crash dump initiated at user request

fffffe80006bbd60 genunix:kadmin+4c1 ()
fffffe80006bbec0 genunix:uadmin+93 ()
fffffe80006bbf10 unix:sys_syscall32+101 ()

syncing file systems... done
dumping to /dev/dsk/clt0d0s1, offset 107675648, content: kernel
NOTICE: adpu320: bus reset
100% done: 38438 pages dumped, compression ratio 4.29, dump succeeded

Welcome to kmdb
Loaded modules: [ audiosup crypto ufs unix krtld s1394 sppp nca uhci lofs
genunix ip usba specfs nfs md random sctp ]
[0]>
kmdb: Do you really want to reboot? (y/n) y
```

## ▼ x86:GRUB ブート環境でカーネルデバグ (kmdb) を使ってシステムをブートする方法

この手順では、カーネルデバグ ( `kmdb` ) を読み込むための基本的な操作を示します。デフォルトでは、`savecore` 機能を使用できます。カーネルデバグの使用方法の詳細については、『[Solaris モジュールデバグ](#)』を参照してください。

- 1 システムをブートします。  
システムがブートすると、GRUB メニューが表示されます。
- 2 GRUB メニューが表示されたら、`e` と入力して GRUB 編集メニューにアクセスします。

- 3 矢印キーを使用して、`kernel$` 行を選択します。  
矢印キーを使用できない場合は、`^`キーを使って上方へスクロールしたり、`v`キーを使って下方へスクロールしたりします。
- 4 `e` と入力して、その行を編集します。  
ブートエントリメニューが表示されます。このメニューで、`kernel$` 行の末尾に追加のブート引数を指定して、ブート動作を変更できます。
- 5 行の終わりに `-k` と入力します。
- 6 **Enter** キーを押して、**GRUB** メインメニューに戻ります。
- 7 カーネルデバッグが使用可能な状態でシステムをブートするために、`b` と入力します。
- 8 カーネルデバッグにアクセスします。  
デバッグにアクセスするための方法は、システムへのアクセスに使用するコンソールのタイプによって異なります。
  - ローカル接続されているキーボードを使用している場合は、`F1-A` を押します。
  - シリアルコンソールを使用している場合は、そのシリアルコンソールタイプに適した方法でブレイクを送信します。
 カーネルデバッグに初めてアクセスした場合、ウェルカムメッセージが表示されます。

#### 例 14-7 x86: カーネルデバッグ (GRUB マルチブート実装) を使用してシステムをブートする

次の例は、64 ビット対応 x86 システムをカーネルデバッグが使用可能な状態で手動でブートする方法を示しています。

```
kernel$ /platform/i86pc/multiboot kernel/amd64/unix -k -B $ZFS-BOOTFS
```

次の例は、64 ビット対応 x86 システムをカーネルデバッグ使用可能な状態で 32 ビットモードでブートする方法を示しています。

```
kernel$ /platform/i86pc/multiboot kernel/unix -k -B $ZFS-BOOTFS
```



# ◆◆◆ 15

## 第 15 章

# x86: GRUB ベースのブート (参照情報)

---

この章には、GRUB 実装の詳細や GRUB の追加の参照情報など、x86 ブートプロセスに関する情報が記載されています。

概要については、第 9 章「システムのシャットダウンとブート (概要)」を参照してください。

システムのブート手順については、第 12 章「Oracle Solaris システムのブート (手順)」を参照してください。

## x86: ブートプロセス

この節では、x86 システムに固有のブートプロセスについて説明します。

### x86: システム BIOS

x86 システムの電源が入っているときには、システムは読み取り専用メモリー (ROM) の BIOS (Basic Input/Output System) によって制御されます。BIOS は、64 ビットおよび 32 ビットの x86 をサポートする、Oracle Solaris オペレーティングシステムのファームウェアインタフェースです。

ハードウェアアダプタには通常、そのデバイスの物理特性を表示するオンボード BIOS が搭載されています。この BIOS は、デバイスにアクセスするときに使用されます。システムの BIOS は、起動プロセス中に、アダプタの BIOS が存在するかどうかを調べます。アダプタが見つかった場合は、そのアダプタの BIOS を読み込んで実行します。アダプタの BIOS はそれぞれセルフテスト診断を実行してから、デバイス情報を表示します。

ほとんどのシステムの BIOS には、ブートデバイスの優先順位を選択するためのユーザーインタフェースが用意されており、次の項目が表示されます。

- フロッピーディスク
- CD または DVD
- ハードディスク
- ネットワーク

BIOS は、ブート可能なプログラムがある有効なデバイスが見つかるまで、このリストに従って各デバイスからブートを試みます。

## x86: カーネル初期化プロセス

`/platform/i86pc/multiboot` プログラムは、マルチブート仕様に定義されているヘッダーを含む、ELF32 実行可能ファイルです。

マルチブートプログラムは、次のタスクを実行します。

- ブートアーカイブの内容を解釈する
- 64 ビット対応のシステムを自動検出する
- システムのブートに最適なカーネルモードを選択する
- コアカーネルモジュールをメモリー内でアセンブルする
- システムの制御を Solaris カーネルに渡す

システムの制御を渡されたカーネルは、CPU、メモリー、およびデバイスサブシステムを初期化します。カーネルは次に、ルートデバイスをマウントします。`/boot/solaris/bootenv.rc` ファイルに指定されている `bootpath` および `fstype` プロパティに対応するデバイスがマウントされます。このファイルはブートアーカイブに含まれます。これらのプロパティが `bootenv.rc` ファイルまたは GRUB コマンド行に指定されていない場合には、ルートファイルシステムはデフォルトで `/devices/ramdisk:a` 上の UFS に設定されます。インストールミニルートをブートする場合には、ルートファイルシステムはデフォルトで UFS に設定されます。ルートデバイスがマウントされたあと、カーネルは `sched` コマンドと `init` コマンドを初期化します。これらのコマンドは、サービス管理機能 (SMF) サービスを開始します。

## x86: Oracle Solaris OS での GRUB のサポート

この節には、Oracle Solaris OS で GRUB を管理するための追加の参照情報が記載されています。

### x86: GRUB の用語

GRUB の概念を十分に把握するには、次の用語を理解することが不可欠です。

注- このリストに記載されている用語の中には、GRUB ベースのブートだけに限定されないものもあります。

|                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|---------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ブートアーカイブ            | <p>Oracle Solaris OS のブートに使用されるクリティカルなファイルの集まり。これらのファイルは、ルートファイルシステムがマウントされる前、システムの起動中に必要です。システムは、複数のブートアーカイブを維持管理しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「一次ブートアーカイブ」は、x86 システムで Oracle Solaris OS をブートするために使用されます。</li> <li>■ 「フェイルセーフブートアーカイブ」は、一次ブートアーカイブが損傷を受けたとき、回復のために使用されます。このブートアーカイブは、ルートファイルシステムをマウントすることなくシステムを起動します。GRUB メニューでは、このブートアーカイブは「フェイルセーフ」と呼ばれます。このアーカイブの主な目的は一次ブートアーカイブを再生成することであり、通常は一次ブートアーカイブがシステムのブートに使用されます。</li> </ul> |
| ブートローダー             | <p>システムの電源を入れたあとに最初に実行されるソフトウェアプログラム。このプログラムがブートプロセスを開始します。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| フェイルセーフアーカイブ        | <p>ブートアーカイブを参照してください。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| <b>GRUB</b>         | <p>GRUB (GNU GRand Unified Bootloader) は、メニューインタフェースを備えたオープンソースのブートローダーです。このメニューには、システムにインストールされているオペレーティングシステムの一覧が表示されます。GRUB を使用すると、Oracle Solaris OS、Linux、または Windows などのさまざまなオペレーティングシステムを、簡単にブートすることができます。</p>                                                                                                                                                                                                                                             |
| <b>GRUB</b> メインメニュー | <p>システムにインストールされているオペレーティングシステムがリストされたブートメニュー。このメニューから、BIOS または fdisk パーティションの設定を変更することなく、簡単にオペレーティングシステムをブートできます。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |

|               |                                                                                                                                                                                                          |
|---------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| GRUB 編集メニュー   | GRUB メインメニューのサブメニュー。このサブメニューには、GRUB コマンドが表示されます。これらのコマンドを編集して、ブート動作を変更できます。                                                                                                                              |
| menu.lst ファイル | システムにインストールされているすべてのオペレーティングシステムがリストされた構成ファイル。このファイルの内容は、GRUB メニューに表示されるオペレーティングシステムの一覧を記述したものです。GRUB のメニューから、BIOS または fdisk パーティションの設定を変更することなく、簡単にオペレーティングシステムをブートできます。                                |
| ミニルート         | ブート可能な最小ルート (/) ファイルシステム。Solaris インストールメディアに収録されています。ミニルートは、システムのインストールおよびアップグレードに必要な Solaris ソフトウェアで構成されます。x86 システムでは、ミニルートはシステムにコピーされて、フェイルセーフブートアーカイブとして使用されます。フェイルセーフブートアーカイブの詳細は、ブートアーカイブを参照してください。 |
| 一次ブートアーカイブ    | ブートアーカイブを参照してください。                                                                                                                                                                                       |

## x86: GRUB の機能コンポーネント

GRUB は、次の機能コンポーネントで構成されています。

- stage1 - fdisk パーティションの最初のセクターにインストールされるイメージです。installgrub コマンドに -m オプションを指定して、stage1 をマスターブートセクターにインストールすることもできます。詳細は、[installgrub\(1M\)](#) のマニュアルページと『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の「GRUB ブート環境でのディスク管理」を参照してください。
- stage2 - fdisk パーティションの予約済み領域にインストールされるイメージです。stage2 イメージは GRUB のコアイメージです。
- menu.lst ファイル - 通常は UFS ルートを含むシステムの /boot/grub ディレクトリおよび ZFS ルートを含むシステムの /pool-name/boot/grub ディレクトリにあります。このファイルは、GRUB stage2 ファイルによって読み取られます。詳細は、[241 ページの「x86: menu.lst ファイルを編集してブート動作を変更する」](#)の節を参照してください。

dd コマンドを使用して、stage1 および stage2 のイメージをディスクに書き込むことはできません。stage1 イメージは、ディスク上にある stage2 イメージの場所に関す



る情報を受け取れる必要があります。installgrub コマンドを使用してください。このコマンドは、GRUB ブートブロックをインストールするためにサポートされている方法です。

## GRUB の構成に使用される命名規則

GRUB が使用するデバイス命名規則は、以前の Solaris リリースの場合と多少異なっています。GRUB デバイス命名規則を理解すると、使用しているシステムで GRUB を構成するときに、ドライブとパーティションの情報を正しく指定できます。

次の表に、この Oracle Solaris リリースの GRUB デバイス命名規則を示します。

表 15-1 GRUB デバイスの規則

| デバイス名      | 説明                                   |
|------------|--------------------------------------|
| (fd0)      | 最初のフロッピーディスク                         |
| (fd1)      | 2 番目のフロッピーディスク                       |
| (nd)       | ネットワークデバイス                           |
| (hd0,0)    | 最初のハードディスク上の最初の fdisk パーティション        |
| (hd0,1)    | 最初のハードディスク上の 2 番目の fdisk パーティション     |
| (hd0,0,a), | 最初のハードディスク上の最初の fdisk パーティションのスライス a |
| (hd0,0,b)  | 最初のハードディスク上の最初の fdisk パーティションのスライス b |

注 - GRUB デバイス名はすべて括弧で囲む必要があります。

fdisk パーティションの詳細については、『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の「fdisk パーティションの作成上のガイドライン」を参照してください。

## findroot コマンドで使用される命名規則

Solaris 10 10/08 リリース以降では、GRUB で以前使用されていた root コマンドが findroot コマンドに置き換わりました。findroot コマンドは、ブートデバイスに関係なく対象ディスクを見つけるための拡張機能を提供します。findroot コマンドは、ZFS ルートファイルシステムからのブートもサポートします。

次に、さまざまな GRUB 実装で `findroot` コマンドが使用するデバイス命名規則についての説明を示します。

- Oracle Solaris Live Upgrade:

```
findroot (BE_x,0,a)
```

`x` 変数はブート環境の名前です。

- ZFS をサポートしているシステムの標準アップグレードおよび新規インストール:

```
findroot(pool_p,0,a)
```

`p` 変数はルートプールの名前です。

- UFS をサポートしているシステムの標準アップグレードおよび新規インストール:

```
findroot (rootfsN,0,a)
```

`N` 変数は 0 から始まる整数です。

## GRUB で複数のオペレーティングシステムをサポートする方法

この節では、同じディスク上にある複数のオペレーティングシステムを GRUB でサポートする方法について説明します。次の例は、Solaris 10 10/08 OS、Solaris 9 OS、Linux、および Windows が同じディスク上にインストールされている x86 システムを示しています。

表 15-2 GRUB メニュー設定の例

| オペレーティングシステム        | ディスク上の場所        |
|---------------------|-----------------|
| Windows             | fdisk パーティション 0 |
| Linux               | fdisk パーティション 1 |
| Oracle Solaris      | fdisk パーティション 2 |
| Solaris 9 OS        | スライス 0          |
| Solaris 10 10/08 OS | スライス 3          |

この情報に基づいて、GRUB メニューが次のように表示されます。

```
title Oracle Solaris 10
    findroot (pool_rpool,0,a)
    kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
    module /platform/i86pc/boot_archive
title Solaris 9 OS (pre-GRUB)
    root (hd0,2,a)
```

```

        chainloader +1
        makeactive
title Linux
        root (hd0,1)
        kernel <from Linux GRUB menu...>
        initrd <from Linux GRUB menu...>
title Windows
        root (hd0,0)
        chainloader +1

```

---

注 - Oracle Solaris スライスを実アクティブなパーティションにする必要があります。また、Windows メニューの下に、`makeactive` を指定しないでください。そうすると、毎回 Windows がブートされることとなります。Linux が GRUB をマスターブートブロック上にインストールした場合には、Oracle Solaris ブートオプションにアクセスできません。Solaris パーティションを実アクティブなパーティションにしたかどうかにかかわらず、Solaris ブートオプションにアクセスできなくなります。

---

このような場合には、次のいずれかの操作を実行できます。

- Linux 上でメニューを変更して、Linux GRUB からチェーンロードする。  
「チェーンロード」は、別のブートローダーを使用して、サポートされていないオペレーティングシステムを読み込むためのメカニズムです。
- `m` オプションを指定した `-installgrub` コマンドを実行して、マスターブートブロックを Solaris GRUB に置き換える。

```
# installgrub -m /boot/grub/stage1 /boot/grub/stage2 /dev/rdisk/root-slice
```

詳細は、[installgrub\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

Oracle Solaris Live Upgrade ブート環境の詳細については、『[Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド \(Solaris Live Upgrade とアップグレードの計画\)](#)』を参照してください。

## x86: サポートされる GRUB のバージョン

Oracle Solaris 10 では、GRUB はマルチブートを使用します。`menu.lst` ファイルの内容は、実行している Oracle Solaris リリース、使用するインストール方法、およびシステムを Oracle Solaris ZFS ルートまたは UFS ルートのどちらからブートしているかに応じて異なります。

- **GRUB** での **Oracle Solaris ZFS** ブートのサポート

サポート対象の Oracle Solaris リリースを実行している場合、Oracle Solaris ZFS または UFS ファイルシステムからブートを選択できます。`menu.lst` ファイルと例については、[324 ページの「menu.lst ファイルの説明 \(ZFS サポート\)」](#)を参照してください。

- **GRUB UFS** ブートのサポート

menu.lst ファイルと例については、324 ページの「[menu.lst ファイルの説明 \(UFS サポート\)](#)」を参照してください。

## menu.lst ファイルの説明 (ZFS サポート)

次に、ZFS ブートローダーを含むブート環境の menu.lst ファイルのさまざまな例を示します。

---

注- ミニルートは実際のルートファイルシステムとしてマウントされるため、フェイルセーフアーカイブが ZFS データセットから読み取られても、menu.lst ファイル内のフェイルセーフブート用のエントリが ZFS bootfs プロパティーに変わることはありません。ブートローダーがミニルートを読み取ったあとは、ZFS データセットはアクセスされません。

---

例 15-1 デフォルトの menu.lst ファイル (新規インストールまたは標準アップグレード)

```
title Solaris 10 5/08 s10x_nbu6wos_nightly X86
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive

title Solaris failsafe
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

例 15-2 デフォルトの menu.lst ファイル (Oracle Solaris Live Upgrade)

```
title be1
findroot (BE_be1,0,a)
bootfs rpool/ROOT/szboot_0508
kernel$ /platform/i86pc/multiboot -B $ZFS-BOOTFS
module /platform/i86pc/boot_archive

title be1 failsafe
findroot (BE_be1,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

## menu.lst ファイルの説明 (UFS サポート)

次に、UFS からのブートをサポートするシステムの menu.lst ファイルの例を示します。

例 15-3 デフォルトの GRUB menu.lst ファイル (新規インストールまたは標準アップグレード)

```
title Solaris 10 5/08 s10x_nbu6wos_nightly X86
findroot (pool_rpool,0,a)
kernel /platform/i86pc/multiboot
module /platform/i86pc/boot_archive
```

例 15-3 デフォルトの GRUB menu.lst ファイル (新規インストールまたは標準アップグレード) (続き)

```
title Solaris failsafe
findroot (rootfs0,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console-ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```

例 15-4 デフォルトの GRUB menu.lst ファイル (Oracle Solaris Live Upgrade)

```
title bel
findroot (BE_bel,0,a)
kernel /platform/i86pc/multiboot
module /platform/i86pc/boot_archive

title bel failsafe
findroot (BE_bel,0,a)
kernel /boot/multiboot kernel/unix -s -B console=ttyb
module /boot/x86.miniroot-safe
```



# ◆◆◆ 第 16 章

## x86: GRUB を実装しないシステムのブート(手順)

---

この章では、GRUB を実装しないリリースの Oracle Solaris で x86 システムをブートする手順について説明します。

---

注 - Solaris 10 1/06 リリース以降では、オープンソースの GRand Unified Bootloader (GRUB) が x86 システム上で実装されています。GRUB は、カーネルモジュールおよび構成ファイルが含まれているブートアーカイブをシステムのメモリーに読み込む役割を果たします。GRUB ベースのブートについての詳細は、270 ページの「GRUB を使用して x86 システムをブートする(作業マップ)」を参照してください。

---

ブートプロセスの概要については、第 9 章「システムのシャットダウンとブート(概要)」を参照してください。

SPARC システムのブート手順については、第 12 章「Oracle Solaris システムのブート(手順)」を参照してください。

### x86: システムのブート(作業マップ)

| ヘッダー                         | ヘッダー                                                              | ヘッダー                                               |
|------------------------------|-------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| x86 システムを実行レベル 3 でブートします。    | 実行レベル 3 でブートします。システムをシャットダウンするか、なんらかのシステムハードウェアの保守作業を行ったあとで使用します。 | 329 ページの「x86: システムを実行レベル 3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法」  |
| x86 システムをシングルユーザーモードでブートします。 | 実行レベル S でブートする。システム保守作業(ファイルシステムのバックアップなど)を行ったあとで使用します。           | 332 ページの「x86: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法」 |

| ヘッダー                                                                                                                                                                                                 | ヘッダー                                                                                                                                         | ヘッダー                                                                                                                         |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| x86 システムを対話式でブートします。                                                                                                                                                                                 | 対話式でブートする。テストのために、システムファイルまたはカーネルを一時的に変更したあとで使用します。                                                                                          | 333 ページの「x86: システムを対話式でブートする方法」                                                                                              |
| x86 システムをネットワークからブートします。                                                                                                                                                                             | PXE または非 PXE デバイスをデフォルトのネットワーク構成方法でネットワークからブートするときに使用します。この方法は、ディスクレスクライアントをブートする場合に使用します。                                                   | 336 ページの「x86: システムをネットワークからブートする方法」                                                                                          |
| <b>Solaris 10:</b> Oracle Solaris x86 システムで Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を使用します。<br><br>注 - Solaris 10 1/06 リリース以降では、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) が GRUB メニューで置き換えられました。 | システムのハードウェア構成を変更したあとで使用します。このユーティリティーを使用すると、異なるブートデバイスから Solaris システムをブートする、新しいハードウェアを構成する、間違って構成したハードウェアを構成し直すなど、デバイス関連やブート関連の作業を行うことができます。 | 338 ページの「x86: Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を表示する方法」                                                            |
| 復旧を目的としてシステムをブートします。                                                                                                                                                                                 | 損傷したファイルが原因で、ブートを実行できないシステムをブートするために使用します。復旧を目的としてブートするには、必要に応じて次のどちらかまたは両方の作業を行います。                                                         | 339 ページの「x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法」<br><br>344 ページの「x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする」<br><br>339 ページの「x86: 復旧を目的としてシステムをブートする方法」 |
| カーネルデバッガ (kldb) を使ってシステムをブートします。                                                                                                                                                                     | システムの障害のトラブルシューティングに使用します。                                                                                                                   | 342 ページの「x86: カーネルデバッガ (kldb) を使ってシステムをブートする方法」                                                                              |
| 64 ビットコンピューティングに対応するシステムにおけるブート問題のトラブルシューティングを行います。                                                                                                                                                  | 64 ビットモードに対応していないデバイスドライバを読み込むシステムを要求するハードウェアがある場合、システムを 64 ビットモードでブートできない可能性があります。この場合、システムを 32 ビットモードでブートする必要があります。                        | 346 ページの「x64: 64 ビットブートの失敗のトラブルシューティング」                                                                                      |



## x86: GRUB を実装しないシステムをブートする

次に、リセットボタンを使ってシステムを再起動する手順を示します。システムにリセットボタンがない場合は、電源スイッチを使ってシステムを再起動します。システムの状態によっては Ctrl + Alt + Del キーを使って、システムの動作に割り込むことができます。

### ▼ x86: システムを実行レベル3 (マルチユーザーレベル) でブートする方法

次の手順に従って、現時点で実行レベル0になっているシステムを実行レベル3でブートします。

- 1 Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。  
あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。  
「Current Boot Parameters」メニューが、数分後に表示されます。

- 2 システムを実行レベル3でブートするには、bを入力して、**Enter** キーを押します。5秒以内に選択しない場合、システムは自動的に実行レベル3でブートします。

- 3 システムが実行レベル3になっていることを確認します。  
ブートプロセスが正常に終了すると、ログイン画面かログインプロンプトが表示されます。

```
hostname console login:
```

#### 例 16-1 x86: システムを実行レベル3 (マルチユーザーレベル) でブートする

新しくインストールした場合、ブートプロンプトでbと入力すると、64ビット対応のx86システムは自動的に64ビットモードでブートします。アップグレードした場合も、eepromのboot-fileパラメータがkernel/unix以外の値にあらかじめ設定されていないかぎり、ブートプロンプトでbと入力すると、64ビット対応のx86システムは64ビットモードでブートします。

次の例は、64ビットコンピューティング対応のx86システムを実行レベル3でブートする方法を示しています。

```
Press any key to reboot
.
.
.
```

```

                <<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
Boot args:
Type    b [file-name] [boot-flags] <ENTER>    to boot with options
or      i <ENTER>                              to enter boot interpreter
or      <ENTER>                                to boot with defaults

                <<< timeout in 5 seconds >>>

Select (b)oot or (i)nterpreter: b
SunOS Release 5.10 Version amd64-gate-2004-09-27 64-bit
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
DEBUG enabled
Hostname: venus
NIS domain name is example.com
checking ufs filesystems
/dev/rdisk/c1d0s7: is logging.
venus console login:

```

#### 例 16-2 x64: 64 ビットコンピューティング対応のシステムを、手動で、64 ビットモードかつ実行レベル3 (マルチユーザーレベル) でブートする

新しくインストールした場合、ブートプロンプトで **b** と入力すると、64 ビット対応の x86 システムは自動的に 64 ビットモードでブートします。アップグレードした場合も、`eeprom` の `boot-file` パラメータが `kernel/unix` 以外の値にあらかじめ設定されていないかぎり、ブートプロンプトで **b** と入力すると、64 ビット対応の x86 システムは 64 ビットモードでブートします。

次の例は、このタイプのシステムを「手動で」64 ビットモードかつ実行レベル3でブートする方法を示しています。

```

# init 0
# svc.startd: The system is coming down. Please wait.
svc.startd: 68 system services are now being stopped.
umount: /etc/svc/volatile busy
svc.startd: The system is down.
syncing file systems... done
Press any key to reboot.

```

```

Initializing system
Please wait...

```

```

                <<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
Boot args:

Type    b [file-name] [boot-flags] <ENTER>    to boot with options
or      i <ENTER>                              to enter boot interpreter
or      <ENTER>                                to boot with defaults

                <<< timeout in 5 seconds >>>

```

```

Select (b)oot or (i)nterpreter: b kernel/amd64/unix
SunOS Release 5.10 Version amd64-gate-2004-09-27 64-bit
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
DEBUG enabled
Hostname: venus
NIS domain name is example.com
checking ufs filesystems
/dev/rdisk/c1d0s7: is logging.
venus console login:

```

### 例 16-3 64ビットコンピューティング対応のシステムを、手動で、32ビットモードかつ実行レベル3(マルチユーザーレベル)でブートする

新しくインストールした場合、ブートプロンプトで**b**と入力すると、64ビット対応のx86システムは自動的に64ビットモードでブートします。アップグレードした場合も、eepromのboot-fileパラメータがkernel/unix以外の値にあらかじめ設定されていないかぎり、ブートプロンプトで**b**と入力すると、64ビット対応のx86システムは64ビットモードでブートします。

次の例は、このタイプのシステムを「手動で」32ビットモードかつ実行レベル3でブートする方法を示しています。

```

# init 0
# svc.startd: The system is coming down. Please wait.
svc.startd: 68 system services are now being stopped.
umount: /etc/svc/volatile busy
svc.startd: The system is down.
syncing file systems... done
Press any key to reboot.
Resetting...
If the system hardware has changed, or to boot from a different
device, interrupt the autoboot process by pressing ESC.

Initializing system
Please wait...

<<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
Boot args:

Type   b [file-name] [boot-flags] <ENTER>   to boot with options
or     i <ENTER>                           to enter boot interpreter
or     <ENTER>                             to boot with defaults

<<< timeout in 5 seconds >>>

Select (b)oot or (i)nterpreter: b kernel/unix
SunOS Release 5.10 Version amd64-gate-2004-09-30 32-bit
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
DEBUG enabled

```

```
Hostname: venus
NIS domain name is example.com
checking ufs filesystems
/dev/rdisk/c1d0s7: is logging.
venus console login:
```

## ▼ x86: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする方法

次の手順に従って、現時点で実行レベル 0 になっているシステムを実行レベル S でブートします。

- 1 Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。

あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。

「Current Boot Parameters」メニューが、数分後に表示されます。

- 2 システムを実行レベル S でブートするには、b -s と入力して、**Enter** キーを押します。

5 秒以内に選択しない場合、システムは自動的に実行レベル 3 でブートします。

- 3 プロンプトが表示されたら、スーパーユーザーのパスワードを入力します。

- 4 システムが実行レベル S になっていることを確認します。

```
# who -r
.          run-level S  Jul 19 14:37      S      0  3
```

- 5 実行レベルを S に移行して行う必要がある保守作業を行います。

- 6 システム保守作業が完了したら、**Ctrl+D** キーを押してシステムをマルチユーザー状態にします。

### 例 16-4 x86: システムを実行レベル S (シングルユーザーレベル) でブートする

```
Press any key to reboot.
Resetting...
.
.
.
Initializing system
Please wait...
```

<<< Current Boot Parameters >>>

```

Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
Boot args:

Type    b [file-name] [boot-flags] <ENTER>    to boot with options
or      i <ENTER>                            to enter boot interpreter
or      <ENTER>                              to boot with defaults

        <<< timeout in 5 seconds >>>

Select (b)oot or (i)nterpreter: b -s
SunOS Release 5.10 Version amd64-gate-2004-09-30 32-bit
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
DEBUG enabled
Booting to milestone "milestone/single-user:default".
Hostname: venus
NIS domain name is example.com
Requesting System Maintenance Mode
SINGLE USER MODE

Root password for system maintenance (control-d to bypass): xxxxxx
Entering System Maintenance Mode
.
.
.
# who -r
.      run-level S  Jul 19 14:37      S      0  3
      (Perform some maintenance task)
# ^D

```

## ▼ x86: システムを対話式でブートする方法

代替のカーネルまたは /etc/system ファイルを指定する必要がある場合、次の手順に従ってシステムをブートします。

- 1 Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。

あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。

「Primary Boot Subsystem」メニューが、数分後に表示されます。
- 2 **Solaris** パーティションにアクティブを示すマークが付いていない場合、その **Solaris** パーティションをリストから選択します。Enter キーを押します。

5 秒以内に選択しない場合、アクティブなブートパーティションが自動的に選択されます。

「Current Boot Parameters」メニューが、数分後に表示されます。
- 3 b -a と入力して、システムを対話式でブートします。Enter キーを押します。

5 秒以内に選択しない場合、システムは自動的に実行レベル 3 でブートします。

- 4 次のようにシステムプロンプトに応答します。
  - a. プロンプトが表示されたら、ブートに使用するカーネルの名前を入力します。  
デフォルトのカーネルファイル名を使用する場合は、Enter キーを押します。そうでない場合は、代替カーネルの名前を入力して、Enter キーを押します。
  - b. プロンプトが表示されたら、モジュールディレクトリの代替パスを入力します。  
デフォルトのモジュールディレクトリを使用する場合は、Enter キーを押します。そうでない場合は、モジュールディレクトリへの代替パスを入力して、Enter キーを押します。
  - c. プロンプトが表示されたら、代替システムファイルの名前を入力します。  
/etc/system ファイルが破損している場合、/dev/null を入力します。
  - d. プロンプトが表示されたら、root ファイルシステムのタイプを入力します。  
UFS によるローカルディスクブート (デフォルト) を選択する場合は Enter キーを押し、ネットワークブートを選択する場合は NFS と入力します。
  - e. プロンプトが表示されたら、ルートデバイスの物理名を入力します。  
代替デバイス名を入力します。デフォルトを使用する場合は Return キーを押します。
- 5 これらの質問に応答するためのプロンプトが表示されない場合は、boot -a コマンドを正しく入力しているかどうか確認してください。

#### 例 16-5 x86: システムを対話式でブートする

次の例では、利用できるデフォルトの選択例 ([ ] で囲まれた部分) を示します。

```
Press any key to reboot.
Resetting...
.
.
.
Autobooting from bootpath: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
```

```
If the system hardware has changed, or to boot from a different
device, interrupt the autoboot process by pressing ESC.
```

```
Initializing system
Please wait...
```

```
<<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
```

Boot args:

```
Type   b [file-name] [boot-flags] <ENTER>   to boot with options
or     i <ENTER>                           to enter boot interpreter
or     <ENTER>                             to boot with defaults
```

```
Running Configuration Assistant...
      <<< timeout in 5 seconds >>>
```

Select (b)oot or (i)nterpreter: **b -a**

```
Enter default directory for modules [/platform/i86pc/kernel /kernel /usr/kernel]:
      Press Enter
```

```
Name of system file [etc/system]:      Press Enter
```

```
SunOS Release 5.10 Version amd64-gate-2004-09-30 32-bit
```

```
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
```

```
Use is subject to license terms.
```

```
DEBUG enabled
```

```
root filesystem type [ufs]:      Press Enter
```

```
Enter physical name of root device[/pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a]:      Press
Enter
```

```
Hostname: venus
```

```
NIS domain name is example.com
```

```
checking ufs filesystems
```

```
/dev/rdisk/c1d0s7: is logging.
```

```
venus console login:
```

## x86: ネットワークからのブート

ブートサーバーが利用できれば、どのようなシステムもネットワークからブートできます。スタンドアロンのシステムがローカルディスクからブートできない場合、そのシステムを復旧目的でネットワークからブートできます。

PXE (Preboot Execution Environment) ネットワークブートプロトコルをサポートしている x86 システムでは、Solaris ブートフロッピーディスクを使用しなくても、ネットワークから直接 Solaris x86 システムをブートできます。PXE ネットワークブートは、Intel の PXE 仕様を実装しているデバイスでのみ動作します。システムが PXE ネットワークブートに対応している場合は、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ブートフロッピーディスクや Solaris SOFTWARE - 1 CD または DVD を使用しなくても、ネットワークから直接システムをブートできます。

---

注 - この Oracle Solaris リリースでは、ソフトウェアは DVD のみで配布されます。

---

## ▼ x86: システムをネットワークからブートする方法

ここに示す手順には、Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を使用してネットワークから x86 システムをブートする方法が含まれています。Oracle Solaris 以降の OS では、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) の動作は変更されています。

Solaris 1/06 10/ リリース以降では、Solaris OS が動作する x86 システム上で GRUB ベースのブートが実装されています。Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) は GRUB メニューに置き換えられています。GRUB を使用したネットワークからの x86 システムのブートについては、[286 ページの「x86 システムをネットワークからブートする」](#)を参照してください。

ネットワークの構成方法には、RARP (Reverse Address Resolution Protocol)、DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) の 2 種類があります。PXE ネットワークブートのデフォルトのネットワークブート方法は、DHCP です。非 PXE デバイスのデフォルトのネットワークブート方法は、RARP です。非 PXE デバイスの場合、ネットワーク上で RARP ブートサーバー、DHCP ブートサーバーのいずれが利用可能であるかに応じて、いずれかの方法を使用できます。

---

注 - PXE ネットワークブートに DHCP サーバーを使用する場合は、DHCP の設定を追加する必要があります。DHCP の設定の概要については、『[Solaris のシステム管理 \(IP サービス\)](#)』のパート III 「DHCP」を参照してください。インストールに対応するように DHCP サーバーを設定する場合は、『[Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド \(ネットワークインストール\)](#)』を参照してください。

---

PXE ネットワークブートを実行する場合、あるいは Solaris SOFTWARE のメディアからシステムをブートする場合、システムは自動的にブートします。Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のメニューはデフォルトで表示されなくなりました。非 PXE デバイスをブートする場合、次の手順内で、ネットワーク構成を変更するために Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のメニューを表示する方法を記述した部分の手順に従う必要があります。

- 1 **Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ブートフロッピーディスク、または Solaris SOFTWARE のメディアを適切なドライブに挿入します。**
  - あるいは、システムまたはネットワークアダプタの BIOS 構成プログラムを使用して、PXE ネットワークブートを使用可能にします。
    - ブートフロッピーディスクを使用する場合、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) の最初のメニューが表示されます。
    - Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD または DVD を使用するか、ネットワークから PXE デバイスをブートする場合、システムは自動的にブートします。



ネットワーク構成を変更し、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のメニューを表示させたい場合、次のメッセージが表示されたときに Esc キーを押します。

If the system hardware has changed, or to boot from a different device, interrupt the autoboot process by pressing ESC.

Press ESCape to interrupt autoboot in 5 seconds.

「Device Configuration Assistant」画面が表示されます。

- 2 Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。  
あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。
- 3 「F2\_Continue」(F2 キー)を押して、デバイスを走査します。  
デバイスの識別処理が実行されます。続いて、「Identified Devices」画面が表示されます。
- 4 「F2\_Continue」(F2 キー)を押して、ドライバを読み込みます。  
ブート可能なドライバが読み込まれます。続いて、「Boot Solaris」メニューが表示されます。
- 5 Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を使用してネットワーク構成を変更します。
  - a. 「F4\_BootTasks」(F4 キー)を押します。
  - b. 「Set Network Configuration Strategy」を選択します。「F2\_Continue」(F2 キー)を押します。
  - c. 「RARP」または「DHCP」を選択して、「F2\_Continue」(F2 キー)を押します。

---

注- 上記手順は、非 PXE デバイスをネットワークからブートする場合にのみ適用されます。PXE ネットワークブートの場合は、デフォルトのネットワークブート方法である DHCP を使用する必要があります。

---

新しいネットワークブート方法を確認するメッセージが表示されます。ここで選択したネットワークブート方法は、以降、フロッピーディスクでブートしたときのデフォルトのネットワークブート方法として保存されます。

- d. 「F3\_Back」を押して、「Boot Solaris」メニューに戻ります。
- 6 「NET」をブートデバイスとして選択します。

- 7 F2キーを押して、ネットワークデバイスをブートします。  
「Solaris boot option」画面が表示されます。

## x86: Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) の使用

---

注 - この Solaris リリースでは、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) は GRUB メニューに置き換えられています。この機能についての詳細は、[270 ページ](#)の「GRUB を使用して x86 システムをブートする (作業マップ)」を参照してください。

---

**Solaris 10:** Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) (Oracle Solaris x86 版) は、さまざまなハードウェア構成作業やブート作業を実行するためのプログラムです。

Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のメニューにアクセスするには、次のいずれかの方法を使用します。

- Solaris ブートフロッピーディスク
- Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD または DVD
- PXE ネットワークブート
- Solaris OS がインストールされたハードディスク

この章で説明する手順では、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ブートフロッピーディスクを挿入して Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) をブートするように要求されることがあります。システムの BIOS が CD または DVD からのブートをサポートしている場合は、Solaris SOFTWARE - 1 CD または DVD を挿入して Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) をブートすることも可能です。

### ▼ x86: Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を表示する方法

**Solaris 10:** この手順では、ブートプロセスに割り込んで Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を表示する方法を示します。現在の Solaris リリースでは、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) は GRUB メニューに置き換えられています。

- 1 システムをブートします。
  - Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ブートフロッピーディスクからブートした場合、数分後に Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) の最初のメニューが表示されます。

- Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD、DVD、またはハードディスクからブートしたか、PXE ネットワークブートを実行した場合、次のメッセージが表示されます。

If the system hardware has changed, or to boot from a different device, interrupt the autoboot process by pressing ESC.

Press ESCape to interrupt autoboot in 5 seconds.

Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のメニューを表示させたい場合、Esc キーを押して自動ブートプロセスに割り込みをかけます。

「Device Configuration Assistant」メニューが表示されます。

- 2 Press any key to reboot プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。  
あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。

## ▼ x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法

- 1 可能であれば、次のいずれかのコマンドを使用してシステムを停止します。
  - システムが動作している場合、スーパーユーザーになって `init 0` と入力してシステムを停止します。Press any key to reboot プロンプトが表示されたら、任意のキーを押してシステムをリブートします。
  - システムが動作している場合、スーパーユーザーになって `init 6` と入力してシステムをリブートします。
- 2 マウスまたはキーボードからの入力にシステムが応答しない場合、リセットキーがあればそのキーを押してシステムをリブートします。あるいは、電源スイッチを使用してシステムをリブートします。

## ▼ x86: 復旧を目的としてシステムをブートする方法

重要なシステムリソースを修復するには、次の手順に従ってシステムをブートします。この例は、Oracle Solaris SOFTWARE - CD、DVD、またはネットワークからブートし、ルート (*/*) ファイルシステムをディスクにマウントし、`/etc/passwd` ファイルを修復する方法を示しています。

次の手順で使用されている *device-name* 変数は、修復するファイルシステムのデバイス名に置き換えてください。システムのデバイス名を調べる場合は、『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の「デバイス構成情報の表示」を参照してください。

- 1 システムのアボートキーシーケンスを使用して、システムを停止します。  
システムのアボートキーシーケンスは、root のパスワードがわからない場合やシステムにログインできない場合に使用します。詳細は、[339 ページの「x86: 復旧を目的としてシステムを停止する方法」](#)を参照してください。
- 2 **Oracle Solaris SOFTWARE - CD** または **DVD** から、あるいはネットワークから、システムをシングルユーザーモードでブートします。
  - a. **Device Configuration Assistant** (デバイス構成用補助) ブートフロッピーディスク、または **Oracle Solaris SOFTWARE - CD** または **DVD** を適切なドライブに挿入します。

---

注-ブートフロッピーディスクを使用する場合、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のメニューが表示されます。Oracle Solaris SOFTWARE - CD または DVD を使用する場合、システムは自動的にブートします。Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のメニューを表示するには、システムによるプロンプトが表示されたときに Esc キーを押してブートプロセスに割り込みをかけます。

---

- b. **Press any key to reboot** プロンプトが表示されている場合は、任意のキーを押してシステムをリブートします。  
あるいは、リセットボタンを使用することもできます。システムが停止している場合は、電源スイッチを押してシステムを起動します。
- 3 「**Current Boot Parameters**」メニューが、数分後に表示されます。
- 4 プロンプトで **b -s** と入力して、**Enter** キーを押します。  
数分後に、シングルユーザーモードの # プロンプトが表示されます。
- 5 無効な **passwd** ファイルがあるルート (/) ファイルシステムをマウントします。
- 6 新しくマウントした **etc** ディレクトリに移動します。
- 7 エディタを使用して **passwd** ファイルに必要な変更を加えます。
- 8 ルート (/) ディレクトリに変更します。
- 9 /a ディレクトリのマウントを解除します。
- 10 システムを再起動します。システムが実行レベル 3 になっていることを確認します。  
ブートプロセスが正常に終了すると、ログイン画面かログインプロンプトが表示されます。

*host-name* console login:

## 例 16-6 x86: Solaris 10: 復旧を目的としてシステムをブートする

次の例は、Oracle Solaris 10 で、ローカルの CD-ROM からシステムが自動的にブートしたあとに、`/etc/passwd` ファイルを修復する方法を示しています。GRUB ベースのブートは、Solaris 10 1/06 リリースで導入されました。GRUB ベースのブート環境での復旧を目的としたシステムのブートについては、282 ページの「[x86 システムをフェイルセーフモードでブートする方法](#)」を参照してください。

```
SunOS Secondary Boot version 3.00
```

```
Solaris Booting System
```

```
Running Configuration Assistant...
```

```
If the system hardware has changed, or to boot from a different
device, interrupt the autoboot process by pressing ESC.
```

```
Press ESCape to interrupt autoboot in 5 seconds.
```

```
Initializing system
Please wait...
```

```
<<< Current Boot Parameters >>>
```

```
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@1/sd@0,0:a
```

```
Boot args:
```

```
Select the type of installation you want to perform:
```

- 1 Solaris Interactive
- 2 Custom JumpStart
- 3 Solaris Interactive Text (Desktop session)
- 4 Solaris Interactive Text (Console session)

```
Enter the number of your choice followed by the <ENTER> key.
Alternatively, enter custom boot arguments directly.
```

```
If you wait for 30 seconds without typing anything,
an interactive installation will be started.
```

```
Select type of installation: b -s
```

```

:
```

```
# mount /dev/dsk/c0t0d0s0 /a
```

```
.  
.  
.  
# cd /a/etc  
# vi passwd  
  (Remove invalid entry)  
# cd /  
# umount /a  
# init 6
```

## ▼ x86: カーネルデバグ (kmdb) を使ってシステムをブートする方法

この手順では、Oracle Solaris 10 においてカーネルデバグ (kmdb) を読み込むための基本的な操作を示します。デフォルトでは、`savecore` 機能を使用できます。カーネルデバグの使用法の詳細については、『[Solaris モジュールデバグ](#)』を参照してください。

現在の Solaris リリースにおいて、カーネルデバグを使用してシステムをブートする手順については、[314 ページの「x86: GRUB ブート環境でカーネルデバグ \(kmdb\) を使ってシステムをブートする方法」](#)を参照してください。

- 1 システムをブートします。
- 2 `Select (b)oot or (i)nterpreter` プロンプトで `b -k` と入力します。Enter キーを押します。
- 3 カーネルデバグにアクセスします。  
デバグを入力するための方法は、システムのアクセスに使用するコンソールのタイプによって異なります。
  - ローカル接続されたキーボードを使用している場合、`F1+A` キーを押します。
  - シリアルコンソールを使用している場合、そのシリアルコンソールの種類に合った方法を使って改行を送信します

カーネルデバグに初めてアクセスした場合、ウェルカムメッセージが表示されません。

### 例 16-7 x86: システムをカーネルデバグ (kmdb) でブートする

`Select (b)oot or (i)nterpreter` ブートプロンプトで `-b k` と入力すると、システムはデフォルトのモードでブートして `kmdb` を読み込みます。次の例は、32 ビットコンピューティング対応の x86 システムを 32 ビットモードでブートして `kmdb` を読み込む方法を示しています。

```

Press any key to reboot.
.
.
.
<<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
Boot args:

Type    b [file-name] [boot-flags] <ENTER>    to boot with options
or      i <ENTER>                               to enter boot interpreter
or      <ENTER>                               to boot with defaults
Running Configuration Assistant...
                <<< timeout in 5 seconds >>>

Select (b)oot or (i)nterpreter: b -k
Loading kmdb...
SunOS Release 5.10 Version gate:2004-10-21 32-bit
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
.
.
.

```

**例 16-8** x64: 64 ビットコンピューティング対応のシステムを、カーネルデバグ (kmdb) を使って 64 ビットモードで手動ブートする

次の例は、64 ビットコンピューティング対応の x86 システムを、kmdb を使って 64 ビットモードで手動ブートする方法を示しています。

```

Press any key to reboot
.
.
.
                <<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
Boot args:
Type    b [file-name] [boot-flags] <ENTER>    to boot with options
or      i <ENTER>                               to enter boot interpreter
or      <ENTER>                               to boot with defaults

                <<< timeout in 5 seconds >>>

Select (b)oot or (i)nterpreter: b kernel/amd64/unix -k
Loading kmdb...

```

**例 16-9** 32 ビット x64: 64 ビットコンピューティング対応のシステムを、カーネルデバグ (kmdb) を使って 32 ビットモードで手動ブートする

次の例は、64 ビットコンピューティング対応の x86 システムを、kmdb を使って 32 ビットモードで手動ブートする方法を示しています。

```

Press any key to reboot
.
.

```

```

    <<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
Boot args:
Type      b [file-name] [boot-flags] <ENTER>    to boot with options
or        i <ENTER>                               to enter boot interpreter
or        <ENTER>                                  to boot with defaults

    <<< timeout in 5 seconds >>>

Select (b)oot or (i)nterpreter: b kernel/unix -k
Loading kmdb...

```

## x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする

場合によっては、トラブルシューティングの目的でクラッシュダンプを強制実行し、システムをリブートする必要があります。デフォルトでは、`savecore` 機能を使用できます。

システムのクラッシュダンプについては、『Solaris のシステム管理 (上級編)』の第 17 章「システムクラッシュ情報の管理 (手順)」を参照してください。

### ▼ x86: クラッシュダンプを強制してシステムをリブートする方法

`reboot -d` コマンドまたは `halt -d` コマンドを使用できない場合は、カーネルデバッグ `kmdb` を使用してクラッシュダンプを強制的に実行できます。次の手順を実行するには、ブート時または `mdb -k` コマンド経由でカーネルデバッグが読み込まれている必要があります。

---

注 - カーネルデバッグ (`kmdb`) に入るにはテキストモードでなければなりません。したがって、まずウィンドウシステムを終了してください。

---

- ローカル接続されたキーボードをシステムコンソールとして使用している場合、そのキーボード上で **F1+A** キーを押します。リモート (シリアル) コンソールを使用するようにシステムが設定されている場合、そのコンソールに合った機構を使って改行文字を送信します。  
`kmdb` プロンプトが表示されます。
- `systemdump` マクロを使ってクラッシュを誘発します。  

```
[0]> $<systemdump
```

 パニックメッセージが表示され、クラッシュダンプが保存され、システムがリブートします。



- 3 コンソールログインプロンプトでログインして、システムがリブートされていることを確認します。

### 例 16-10 x86:halt -d コマンドを使用してシステムのクラッシュダンプとリブートを強制実行する

この例は、halt -d コマンドと boot コマンドを使って、x86 システム neptune のクラッシュダンプとリブートを強制実行する方法を示しています。システムのクラッシュダンプを強制するには、この方法を使用してください。-d オプションを指定して halt コマンドを実行したあと、手動でリブートする必要があります。

```
# halt -d
Aug 11 12:51:27 neptune halt:
halted by <user> panic[cpu45]/thread=d3971a00: forced crash dump initiated at user request

d363ae58 genunix:kadmin+bd (5, 0, 0, d3fefac0)
d363af88 genunix:uadmin+88 (5, 0, 0, 0, 0, d363afb4)

syncing file systems... done
dumping to /dev/dsk/c0t0d0s1, offset 107806720, content: kernel
100% done: 40223 pages dumped, compression ratio 4.11, dump succeeded
Press any key to reboot.
Resetting...
.
.
.
SunOS Secondary Boot version 3.00
Autobooting from bootpath: /pci@0,0/pci1028,10a@3/sd@0,0:a
Running Configuration Assistant...
If the system hardware has changed, or to boot from a different
device, interrupt the autoboot process by pressing ESC.

Initializing system
Please wait...

<<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci1028,10a@3/sd@0,0:a
Boot args:

Type      b [file-name] [boot-flags] <ENTER>    to boot with options
or        i <ENTER>                        to enter boot interpreter
or        <ENTER>                          to boot with defaults

<<< timeout in 5 seconds >>>

Select (b)oot or (i)nterpreter:
Loading kmdb...
SunOS Release 5.10 Version s10_62 32-bit
Copyright 1983-2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Use is subject to license terms.
configuring IPv4 interfaces: iprb0.
add net default: gateway 172.20.26.248
Hostname: neptune
The system is coming up. Please wait.
```

```
checking ufs filesystems
/dev/rdisk/c0t0d0s7: is logging.
NIS domain name is example.com
starting rpc services: rpcbind keyserv ypbind done.
Setting netmask of iprb0 to 255.255.255.0
Setting default IPv4 interface for multicast: add net 224.0/4: gateway venus
syslog service starting.
System dump time: Wed Aug 11 12:51:29 2004
Aug 11 13:13:26 venus savecore: saving system crash dump in /var/crash/venus/*.1
Constructing namelist /var/crash/venus/unix.1
Constructing corefile /var/crash/venus/vmcore.1
100% done: 42157 of 42157 pages saved
volume management starting.
The system is ready.
.
.
.
```

## x64: 64 ビットブートの失敗のトラブルシューティング

場合によって、64 ビット対応の x86 システムが 64 ビットモードでのブートに失敗することがあります。この失敗によって、次のようなエラーが生成されます。

```
Select (b)oot or (i)nterpreter: b kernel/amd64/unix
.
.
.
pci: cannot load driver
Cannot load drivers for /pci@0,0/pci1022,7450@a/pci17c2,10@4/sd@0,0:a
(Can't load the root filesystem)
Press any key to reboot.
.
.
.
```

このような失敗が起きる場合は、Select (b)oot or (i)nterpreter ブートプロンプトで次のコマンドを入力して、システムを 32 ビットモードでブートしてください。

```
Select (b)oot or (i)nterpreter: b kernel/unix
```

詳細は、[例 16-3](#) を参照してください。

## x86: ブートプロセス (参照情報)

次の節には、GRUB ベースのブートを実装しない Solaris x86 システムのブートに関連する参照情報が記載されています。

---

注 - このリリースでは、Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) が GRUB メニューに置き換えられました。この Oracle Solaris リリースでの x86 システムのブートの詳細は、270 ページの「GRUB を使用して x86 システムをブートする (作業マップ)」を参照してください。

---

## x86: ブートサブシステム

ブートプロセス中は、ブートサブシステムメニューは異なるデバイスとブートオプションを表示します。システムは何回かのタイムアウトのあとで応答を受け付けなくなった場合、デフォルトの設定値を使って自動的にブートを継続します。ブートサブシステムメニューが表示されるたびに、ブートプロセスを停止することができます。また、自動的に継続させることもできます。

Solaris のブート時に、ブートシステムについて次の選択を行えます。

- 一次ブートサブシステム (「Partition Boot」メニュー) - この最初のメニューは、複数のオペレーティングシステムがディスク上にある場合に表示されます。このメニューで、インストールされたどのオペレーティングシステムからブートするかを指定できます。デフォルトでは、アクティブなオペレーティングシステムからブートします。

Oracle Solaris OS 以外のシステムからブートする場合、次の2つのメニューは表示されません。
- 自動ブートプロセスへの割り込み - 自動ブートプロセスに割り込むと、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) のメニューにアクセスできます。

Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を使用すると、異なるブートデバイスから Solaris システムをブートする、新しいハードウェアを構成する、間違っって構成したハードウェアを構成し直すなど、デバイス関連やブート関連の作業を実行できます。
- 「Current Boot Parameters」メニュー - このメニューには2つの形式があります。1つは、通常の Solaris ブート用のメニューで、もう1つは Solaris インストールブート用のメニューです。
  - 通常の「Current Boot Parameters」メニューでは、オプションを付けて Solaris システムをブートしたり、ブートインタプリタを実行したりできます。
  - インストール用の「Current Boot Parameters」メニューでは、インストールの種類を選択したり、ブートプロセスをカスタマイズしたりできます。

次の表に、主な x86 システムのブートインタフェースの目的を示します。以降の節では、各ブートインタフェースを詳細に説明し、例を示します。

表 16-1 x86: ブートサブシステム

| ブートサブシステム                                                       | 目的                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 一次ブートサブシステム<br>(「Partition Boot」メニュー)                           | このメニューは、現在ブート中のディスクに複数のオペレーティングシステム (Oracle Solaris OS (Solaris OS) を含む) が含まれている場合に表示されます。                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 二次ブートサブシステム                                                     | このメニューは、Oracle Solaris リリースをブートするたびに表示されます。自動ブートプロセスに割り込んで、Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を実行することを選択していない限り、システムが自動的にブートされます。                                                                                                                                                                                          |
| Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ブートフロッピーディスク | <p>「Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助)」メニューを表示するには次の 2 つの方法があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ブートフロッピーディスクまたは Oracle Solaris SOFTWARE - CD (CD-ROM ドライブからブートできるシステムのみ) を使用してシステムをブートします。</li> <li>■ インストールしたディスクから Solaris ソフトウェアをブートするときに自動ブートプロセスに割り込みます。</li> </ul> |
| 「Current Boot Parameters」メニュー                                   | このメニューは、Oracle Solaris をソフトウェアのメディアまたはネットワークからブートするときに使用します。このメニューにはブートオプションが表示されます。                                                                                                                                                                                                                                                       |

注 - Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) ブートフロッピーディスクを作成する必要がある場合は、[http://www.sun.com/bigadmin/hcL/drivers/dca\\_diskettes/](http://www.sun.com/bigadmin/hcL/drivers/dca_diskettes/) を参照してください。

## x86: Solaris リリースのブート

このリリースでは、Oracle Solaris SOFTWARE - CD または DVD を使って x86 システムをブートする場合や PXE ネットワークブートを実行する場合には、システムが自動的にブートされます。Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を使用するには、システムプロンプトが表示された際に、Esc キーを押してブートプロセスに割り込む必要があります。

デバイスを識別する段階では、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) は次の処理を実行します。

- システムにインストールされているデバイスを走査します。
- 識別されたデバイスを表示します。

- キーボードの選択やデバイスとそのリソースの編集などのオプションの作業を可能にします。

ブートの段階では、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) は次の処理を実行します。

- ブートするデバイスのリストを表示します。アスタリスク (\*) が付いたデバイスがデフォルトのブートデバイスです。
- 自動ブート設定やプロパティ設定の編集、ネットワーク構成方法の選択などのオプションの作業を可能にします。

次の節では、デバイスを識別する段階で表示されるメニューの例を示します。デバイス出力は、各システム構成によって異なります。

## x86: デバイス識別段階で表示される画面

Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) がシステム上のデバイスを識別するときに、いくつかの画面が表示されます。

この節では、次のブートサブシステム画面の例を示します。

- Device Configuration Assistant 画面
- Bus Enumeration 画面
- Scanning Devices 画面
- Identified Devices 画面

## x86: Device Configuration Assistant 画面

---

注 - この Oracle Solaris リリースでは、x86 システムにおいて「Device Configuration Assistant」画面が GRUB メニューに置き換えられています。詳細は、[270 ページの「GRUB を使用して x86 システムをブートする \(作業マップ\)」](#)を参照してください。

---

Solaris 10 の初期のリリースでは、ブート段階でシステムプロンプトが表示された際にユーザーが Esc キーを押さない限り、自動ブートプロセスで Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) メニューが省略されます。Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を使用する選択を行なった場合、次の画面が表示されます。

Solaris Device Configuration Assistant

```
The Solaris(TM)Device Configuration Assistant
scans to identify system hardware, lists identified devices, and can
boot the Solaris software from a specified device. This program must be
used to install the Solaris operating environment, add a driver,
```

or change the hardware on the system.

- > To perform a full scan to identify all system hardware, choose Continue.
- > To diagnose possible full scan failures, choose Specific Scan.
- > To add new or updated device drivers, choose Add Driver.

About navigation...

- The mouse cannot be used.
- If the keyboard does not have function keys or they do not respond, press ESC. The legend at the bottom of the screen will change to show the ESC keys to use for navigation.
- The F2 key performs the default action.

F2\_Continue

F3\_Specific Scan

F4\_Add Driver

F6\_Help

## x86: Bus Enumeration 画面

この画面は、Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) が自動検出できるデバイスのハードウェア構成データを集めているときに一時的に表示されます。

Bus Enumeration

Determining bus types and gathering hardware configuration data ...

Please wait ...

## x86: Scanning Devices 画面

この画面は、特別なドライバだけで検出できるデバイスを Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) が手動で走査しているときに表示されます。

Scanning Devices

The system is being scanned to identify system hardware.

If the scanning stalls, press the system's reset button. When the system reboots, choose Specific Scan or Help.

Scanning: Floppy disk controller

#####

|            |            |            |            |            |            |  
0            20            40            60            80            100

Please wait ...

## x86: Identified Devices 画面

この画面は、システムで識別されたデバイスを表示します。この画面からは、「Boot Solaris」メニューに移動できます。

また、次のオプションのデバイス作業も実行できます。

- キーボード構成の設定
- デバイスの表示と編集
- シリアルコンソールの設定
- 構成の保存と削除

#### Identified Devices

The following devices have been identified on this system. To identify devices not on this list or to modify device characteristics, such as keyboard configuration, choose Device Tasks. Platform types may be included in this list.

```
ISA: Floppy disk controller
    ISA: Motherboard
    ISA: PnP bios: 16550-compatible serial controller
    ISA: PnP bios: 16550-compatible serial controller
    ISA: PnP bios: Mouse controller
    ISA: PnP bios: Parallel port
    ISA: System keyboard (US-English)
PCI: Bus Mastering IDE controller
PCI: Universal Serial Bus
PCI: VGA compatible display adapter
```

F2\_Continue F3\_Back F4\_Device Tasks F6\_Help

## x86: ブート段階で表示されるメニュー

---

注 - Solaris 10 1/06 リリース以降では、システムのブート時に GRUB が表示されます。GRUB ベースのブートについての詳細は、270 ページの「GRUB を使用して x86 システムをブートする (作業マップ)」を参照してください。

---

この段階では、システムをブートする方法を指定できます。

ブート段階で表示されるメニューは次のとおりです。

- 「Boot Solaris」メニュー
- 「Current Boot Parameters」メニュー

### x86: Boot Solaris メニュー

「Boot Solaris」メニューからは、Oracle Solaris リリースをブートするデバイスを選択できます。また、autoboot やプロパティ設定の表示や編集など、オプションの作業も実行できます。ブートデバイスを選択し、「Continue」を選択すると、Solaris カーネルがブートを開始します。

#### Boot Solaris

Select one of the identified devices to boot the Solaris kernel and choose Continue.

To perform optional features, such as modifying the autoboot and property settings, choose Boot Tasks.

An asterisk (\*) indicates the current default boot device.

> To make a selection use the arrow keys, and press Enter to mark it [X].

```
[X] DISK: (*) Target 0:QUANTUM FIREBALL1280A
on Bus Mastering IDE controller on Board PCI at Dev 7, Func 1
[ ] DISK: Target 1:ST5660A
on Bus Mastering IDE controller on Board PCI at Dev 7, Func 1
[ ] DISK: Target 0:Maxtor 9 0680D4
    on Bus Mastering IDE controller on Board PCI at Dev 7, Func 1
[ ] CD : Target 1:TOSHIBA CD-ROM XM-5602B 1546
    on Bus Mastering IDE controller on Board PCI at Dev 7, Func 1
```

F2\_Continue F3\_Back F4\_Boot Tasks F6\_Help

## x86: 「Current Boot Parameters」メニュー

このメニューは、ローカルディスクから Oracle Solaris リリースをブートするたびに表示されます。デフォルトのカーネルからブートする場合は、5 秒間のタイムアウトが経過するのを待ちます。別のオプションでブートする場合は、タイムアウト期間が経過する前に、適切なオプションを選択します。

```
<<< Current Boot Parameters >>>
Boot path: /pci@0,0/pci-ide@7,1/ide@0/cmdk@0,0:a
Boot args:
Type      b [file-name] [boot-flags] <ENTER>    to boot with options
or        i <ENTER>                             to enter boot interpreter
or        <ENTER>                               to boot with defaults
```

```
<<< timeout in 5 seconds >>>
```

Select (b)oot or (i)nterpreter:

## x86: ブートプロセス

次の表では、x86 システムのブートプロセスについて説明します。

表 16-2 x86: ブートプロセスの説明

| ブート段階 | 説明                                                                                                                                                                              |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| BIOS  | <p>1. システムの電源をオンにすると、BIOS がセルフテスト診断を実行してシステムのハードウェアとメモリーを検査します。エラーが検出されなければ、システムは自動的にブートを開始します。エラーが検出されると、復元オプションを示すエラーメッセージが表示されます。</p> <p>追加のハードウェアデバイスの BIOS がここで実行されます。</p> |



表 16-2 x86: ブートプロセスの説明 (続き)

| ブート段階    | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ブートプログラム | <p>2. BIOS ブートプログラムが、ブートデバイスの最初のディスクセクターを読もうとします。ブートデバイス上のこの最初のディスクセクターにはマスターブートレコード <code>mboot</code> が格納されており、このレコードが読み込まれて実行されます。<code>mboot</code> ファイルが見つからなかった場合は、エラーメッセージが表示されます。</p> <p>3. マスターブートレコード <code>mboot</code> には、アクティブなパーティションと、Solaris ブートプログラム <code>pboot</code> の位置を見つけるのに必要なディスク情報が格納されており、<code>mboot</code> は、<code>pboot</code> を読み込んで実行します。</p> <p>4. Solaris ブートプログラム <code>pboot</code> が一次ブートプログラム <code>bootblk</code> を読み込みます。<code>bootblk</code> の目的は、UFS ファイルシステム内に格納された二次ブートプログラムを読み込むことにあります。</p> <p>5. ブート可能なパーティションが複数ある場合、<code>bootblk</code> は <code>fdisk</code> テーブルを読んでデフォルトのブートパーティションを探し、利用可能なパーティションのメニューを作成して表示します。ブートするパーティションを選択する際に、30 秒経過するとタイムアウトになります。これは、ブート可能なパーティションが複数ある場合にのみ発生します。</p> <p>6. <code>bootblk</code> はルート (<code>/</code>) ファイルシステムで二次ブートプログラム <code>boot.bin</code> または <code>ufsboot</code> を探し、実行します。Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を起動するときは、5 秒以内に自動ブートに割り込みをかけます。</p> <p>7. 二次ブートプログラム <code>boot.bin</code> または <code>ufsboot</code> が <code>/etc/bootrc</code> スクリプトを実行するコマンドインタプリタを起動します。このスクリプトによってシステムのブート方法を選択するメニューが表示されます。デフォルトでは、カーネルが読み込まれ、実行されます。ブートオプションを指定したり、ブートインタプリタを起動したりするときは、5 秒以内に行います。</p> |
| カーネル初期設定 | <p>8. カーネルは二次ブートプログラム <code>boot.bin</code> または <code>ufsboot</code> を使用してファイルを読み込み、カーネル自身を初期化して、モジュールの読み込みを開始します。カーネルはルート (<code>/</code>) ファイルシステムをマウントするのに十分なモジュールを読み込むと、二次ブートプログラムの対応づけを解除し、自身のリソースを使って動作を続けます。</p> <p>9. カーネルはユーザープロセスを作成し、<code>/sbin/init</code> プロセスを起動します。このプロセスは <code>/etc/inittab</code> ファイルを読み込んで他のプロセスを起動します。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

表 16-2 x86: ブートプロセスの説明 (続き)

| ブート段階 | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| init  | <p>10. この Oracle Solaris リリースでは、<code>/sbin/init</code> プロセスが <code>/lib/svc/bin/svc.startd</code> を開始し、さらにその <code>svc.startd</code> が次の各処理を行うシステムサービスを開始します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ファイルシステムの検査とマウント</li> <li>■ ネットワークとデバイスの設定</li> <li>■ 各種プロセスの起動とシステム保守作業の実行</li> </ul> <p>さらに、<code>svc.startd</code> は互換性を維持する目的で実行制御 (rc) スクリプトを実行します。</p> |

## x86: ブートファイル

実行制御スクリプトおよびブートファイル以外にも、x86 システムのブートに関する追加ブートファイルがあります。

表 16-3 x86: ブートファイル

| ファイル                                | 説明                                                                                                             |
|-------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>/etc/bootrc</code>            | Oracle Solaris リリースのブートに使用するメニューとオプションを含みます。                                                                   |
| <code>/boot</code>                  | システムをブートするために必要なファイルとディレクトリを含みます。                                                                              |
| <code>/boot/mdboot</code>           | 第 1 レベルのブートストラッププログラム ( <code>strap.com</code> ) をディスクからメモリーにロードする DOS 実行可能ファイル。                               |
| <code>/boot/mdbootbp</code>         | 第 1 レベルのブートストラッププログラム ( <code>strap.com</code> ) をフロッピーディスクからメモリーにロードする DOS 実行可能ファイル。                          |
| <code>/boot/rc.d</code>             | インストールスクリプトを含むディレクトリ。内容の変更はできません。                                                                              |
| <code>/boot/solaris</code>          | ブートサブシステムの項目を含むディレクトリ。                                                                                         |
| <code>/boot/solaris/boot.bin</code> | Solaris カーネルまたはスタンドアロンの <code>kmbd</code> をロードします。この実行可能ファイルは、ブートファームウェアサービスも提供します。                            |
| <code>/boot/solaris/boot.rc</code>  | x86 システム上の Oracle Solaris オペレーティングシステムを出力し、DOS エミュレーションモードで Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) を実行します。 |

表 16-3 x86: ブートファイル (続き)

| ファイル                       | 説明                                                                                 |
|----------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| /boot/solaris/bootconf.exe | Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) の DOS 実行可能ファイル。                         |
| /boot/solaris/bootconf.txt | Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) の国際化されたメッセージを含むテキストファイル (bootconf.exe)。 |
| /boot/solaris/bootenv.rc   | ブート環境の設定用の eeprom 変数を格納します。                                                        |
| /boot/solaris/devicedb     | master ファイル (リアルモードドライバでサポートされるすべての有効なデバイスのデータベース) を含むディレクトリ。                      |
| /boot/solaris/drivers      | リアルモードドライバを含むディレクトリ。                                                               |
| /boot/solaris/itup2.exe    | インストール時更新 (ITU) プロセスで実行される DOS 実行可能ファイル。                                           |
| /boot/solaris/machines     | 以前は使用されていたが、現在はもう使用されていないディレクトリ。                                                   |
| /boot/solaris/nbp          | ネットワークブート関連ファイル。                                                                   |
| /boot/solaris/strap.rc     | どのロードモジュールをロードするか、メモリー内のどこにロードするかを指示を含むファイル。                                       |
| /boot/strap.com            | 第2レベルのブートストラッププログラムをメモリーにロードする DOS 実行可能ファイル。                                       |



# Oracle Solaris 自動登録コマンド regadm の操作(手順)

---

この章では、Oracle Solaris 10 9/10 で新たに追加された Oracle Solaris 自動登録機能に含まれる regadm コマンドの使用方法を説明します。

自動登録は、システムの構成データを、目録処理およびサポート目的で収集して、Oracle 製品登録システムに自動的に登録可能な組み込み機構です。特権を持つシステム管理者は、regadm コマンド行インタフェース (CLI) を使用することで、インストールやアップグレード処理に関係なく、自動登録機能を管理したり、システムを明示的に登録したりできます。

---

注- この章では、インストールやアップグレードに含まれる自動登録処理の詳細を説明することはしません。また、自動登録でサポートされるインストールの方法や構成に関する情報も含まれていません。

自動登録の概要およびインストール時のこの機能の動作について詳しくは、『[Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド \(インストールとアップグレードの計画\)](#)』の「[Oracle Solaris 自動登録](#)」を参照してください。

---

この章の内容は次のとおりです。

- 358 ページの「[Oracle Solaris 自動登録 \(概要\)](#)」
- 362 ページの「[regadm コマンドの開始](#)」
- 363 ページの「[自動登録 SMF サービスの管理](#)」
- 365 ページの「[regadm コマンドを使用した自動登録機能の構成](#)」
- 373 ページの「[regadm コマンドを使ってシステムを登録する](#)」
- 377 ページの「[自動登録に関する問題のトラブルシューティング](#)」

## Oracle Solaris 自動登録 (概要)

Oracle Solaris 自動登録は、Oracle Solaris 10 9/10 で組み込まれた機構です。この機能を使用すると、インストールやアップグレードしたあとでリブートする際、およびそれ以降、システム構成を変更したあとでリブートする際に、「サービスタグ」と呼ばれる基本的なシステム資産情報を Oracle 製品登録システムに転送できます。Oracle 製品登録システムは、パブリックインターネット上に配備された Web サービスで構成されます。システム資産の登録は、これらのサービスにより実装されます。Oracle は、この情報を製品およびサービスの改善に使用します。また、この情報を入手して活用することで、目録をより効率的に管理することもできます。

自動登録には、ネットワーク上のシステム資産を検出してローカルレジストリに登録することが可能な既存のサービスタグ技術が利用されます。サービスタグには、OS のバージョンやハードウェア構成など、システムにインストールされている製品に関する情報が含まれます。サービスタグごとに、記述されている製品が異なります。サービスタグを送信可能にするには、My Oracle Support の資格を使用します。詳細は、358 ページの「Oracle Solaris 10 9/10 システムの登録方法」を参照してください。

サービスタグの機能の詳細は、<http://wikis.sun.com/display/ServiceTag/Download+OS+Service+Tag> を参照してください。

サービスタグの一般的な情報については、[stclient\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

My Oracle Support への初回アクセス方法に関する一般的な質問および情報については、<http://www.oracle.com/us/support/044753.html#SS6> を参照してください。

## Oracle Solaris 10 9/10 システムの登録方法

Oracle は、インストールやアップグレードの前および実行中に収集されるサポート資格およびネットワーク接続情報を使用して、製品登録を特定のユーザーアカウントに関連付けます。サポート資格は、インストール後に `regadm auth` コマンドを使って指定することもできます。371 ページの「名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する」を参照してください。サポート資格やネットワーク接続情報が指定されない場合、自動登録処理により直接 HTTP ネットワーク接続（プロキシなし）と見なされ、登録は匿名で行われます。

サポート資格を指定してシステムを登録するには、有効な My Oracle Support アカウントまたは有効な Sun Online アカウントが必要です。サポート資格は、Oracle のサポートポータルおよび Oracle 製品登録システムで認証可能なユーザー名とパスワードで構成されます。

My Oracle Support アカウントの入手方法については、<http://www.oracle.com/support/premier/myoraclesupport.html> を参照してください。

Sun Online アカウントの入手方法については、<https://reg.sun.com/register> を参照してください。

Oracle Solaris 10 9/10 が稼働している場合、次の方法でサポート資格を指定できます。

- インストールやアップグレードの前または実行中
  - 自動インストールや自動アップグレードを(ネットワークインストールまたは Oracle Solaris JumpStart を使用して) 実行する前に、新しい `auto_reg` キーワードを `sysidcfg` ファイルに追加して、サポート資格を指定できます。同じキーワードを使用して、匿名の登録を設定したり、自動登録機能を無効にしたりできます。`auto_reg` キーワードを `sysidcfg` ファイルに追加しない場合、インストールまたはアップグレードの処理中にサポート資格を指定するよう求められます。
  - 対話型のインストールまたはアップグレードの実行中に、サポート資格の指定が求められます。または、匿名で登録することもできます。対話型インストールまたはアップグレードの実行中に、プロキシサーバーやプロキシポートなどのネットワーク構成情報を指定することもできます。
  - インストールまたはアップグレードの実行中に、新しい Oracle Solaris Live Upgrade の `-k` コマンドオプションを使ってサポート資格とプロキシ情報を指定するか、匿名で登録できます。

インストールの前または実行中にサポート資格を指定する方法については、『Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド(インストールとアップグレードの計画)』の「Oracle Solaris 自動登録」を参照してください。

- インストールまたはアップグレードのあと
 

インストール後に、`regadm` コマンドを使って名前付きサポート資格を指定することにより、システムを匿名登録から完全登録に移行させることができます。`regadm` コマンドを使って、プロキシサーバーやプロキシポートなどのネットワーク構成情報を指定することもできます。詳細は、[371 ページの「名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する」](#)を参照してください。

## サービスタグデータを転送する場合と方法

自動登録の管理には、`svc:/application/autoreg` SMF サービスが使用されます。このサービスは、システム構成の変更を確認するためにブート時に 1 回実行されます。

何らかの変更が行われると、サービスタグデータが Oracle 製品登録システムに自動的に送信されます。

- インストールまたはアップグレード後の初回リブート時
 

インストールまたはアップグレードしたあとでシステムをリブートする際、新たにインストールした製品の情報が Oracle 製品登録システムに自動的に送信されず。
- システム構成変更後のリブート時

インストールまたはアップグレード後に、製品データベースが変更されると、情報が Oracle 製品登録システムに自動的に送信されます。

- `regadm register` コマンドを使用して明示的に登録する場合

`regadm register` コマンドを使用したシステムの登録は、システムのリポートと基本的に同じです。システム構成が変更された場合、このコマンドを実行するとただちに製品登録が行われます。構成データは Oracle 製品登録システムに自動的に転送されます。システムをリポートする必要はありません。`regadm` コマンドを使用したシステムの登録について詳しくは、374 ページの「`regadm` コマンドを使ってシステムを登録する方法」を参照してください。

登録済み製品の情報を入手する方法については、<https://inventory.sun.com/inventory/data.jsp> を参照してください。サービスタグに関する一般的な情報は、<http://wikis.sun.com/display/ServiceTag/Download+OS+Service+Tag> を参照してください。

## 自動登録構成の管理

インストールまたはアップグレード後に、`regadm` コマンドを使って自動登録構成を管理できます。

インストール後に、特権を持つシステム管理者は `regadm` コマンドを使って次のタスクを実行できます。

- 自動登録プロセスを管理する SMF サービスを保守する。
- 現在の自動登録構成を表示する。
- My Oracle Support で名前付きのサポート資格を指定して、特定のユーザーまたはアカウントを認証する。
- 自動登録のプロパティを構成または再構成する。
- 自動登録のプロパティを消去する。
- インストールプロセスに関係なく、システムを明示的に登録する。

詳細については、`regadm(1M)` のマニュアルページを参照してください。

タスク関連の情報については、373 ページの「`regadm` コマンドを使ってシステムを登録する」を参照してください。

## 自動登録プロセスが動作する方法

システムのリポート時に、自動登録 SMF サービスによりシステムの構成がサービスタグレジストリ内の情報と照合され、前回のリポート以降に変更が発生したかどうか判定されます。変更が検出されると、新たにインストールされた製品（例:



Oracle Solaris 10 9/10 OS) のサービスタグが Oracle 製品登録システムに送信され、記録されたサポート資格を使って登録されます。サポート資格が指定されない場合、登録は匿名で行われます。データの転送には、HTTPS (Hypertext Transfer Protocol Secure) 接続が使用されます。レポート時に変更が検出されない場合、登録は行われません。

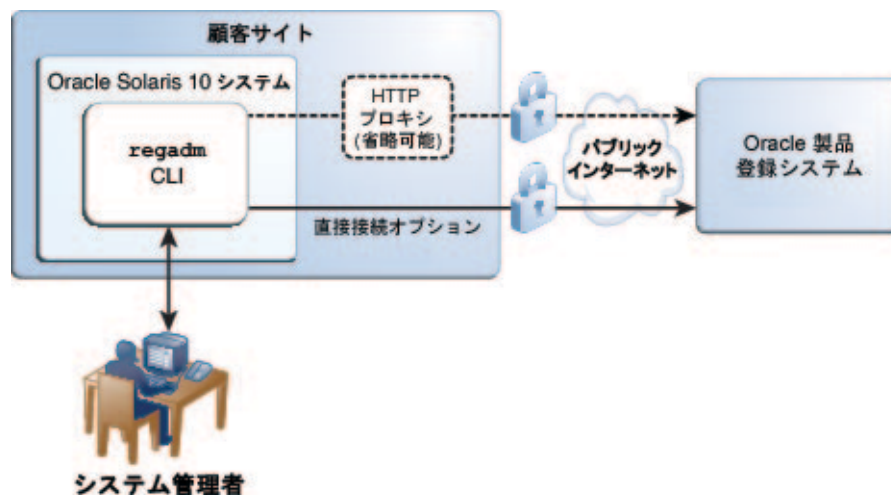
自動登録機能はデフォルトで有効になっていますが、必要に応じて無効にすることも可能です。詳細は、[364 ページの「自動登録 SMF サービスを無効にする方法」](#)を参照してください。

---

注 - 自動登録 SMF サービスは、大域ゾーンでのみ動作します。

---

自動登録 SMF サービスに加え、自動登録プロセスを構成するいくつかのコンポーネントが協調動作して、システム資産の自動登録に影響を及ぼします。次の図は、これらのコンポーネントおよびその相互関係を示します。



自動登録は、次のコンポーネントで構成されます。

- 自動登録コマンド行インタフェース

特権を持つシステム管理者は、自動登録 CLI (`/usr/sbin/regadm`) を使って、Oracle Solaris システム上で自動登録を行うことができます。1つのコマンドをコマンド行から実行できます。また、大規模サーバー環境内のスクリプトを使用してコマンドの実行を自動化することもできます。詳細は、[regadm\(1M\)](#)のマニュアルページおよび[373 ページの「regadm コマンドを使ってシステムを登録する」](#)を参照してください。

- **Oracle 製品登録システム**

Oracle 製品登録システムは、パブリックインターネット上に配備された Web サービスで構成されます。これらのサービスにより、製品の登録が実装されます。

- **セキュリティー保護された転送機構**

Oracle は、登録システムへのアクセスにセキュリティー保護された一方向転送システムを使用します。クライアントで生成された情報は、非公開鍵を使って暗号化されます。登録された製品は、サービススタグレジストリから抽出され、セキュリティー保護された HTTPS 接続 (ポート 443) を使って My Oracle Support にアップロードされます。HTTPS 接続の使用により、セキュリティー保護されていないネットワーク上にセキュリティー保護されたチャンネルが作成されます。登録時に HTTP プロキシやポートが指定されていない場合、直接ネットワーク接続が使用されます。通信は、顧客のシステムからのみ発信および開始されます。

- **自動登録のデータ要素**

登録を構成するデータ要素は、サービススタグスキーマで使用されるデータ要素と同じです。Oracle 製品登録システムに転送されるデータの詳細は、<https://inventory.sun.com/inventory/> を参照してください。

## regadm コマンドの開始

ここでは、regadm コマンドを使って自動登録の管理を開始するのに役立つ情報を示します。

### regadm コマンド行インタフェースを使用する場合

次に、regadm コマンドの使用が必要になる状況を示します。

- **自動登録機能を有効にする**

以前に無効にした自動登録を、再び有効にすることが必要になった場合。この場合、regadm enable コマンドを使って自動登録 SMF サービスを有効にする必要があります。

- **サポートを得るために、名前付きサポート資格を登録済みのシステムに添付する**

以前に製品を匿名で登録したが、サポートを得るために、名前付きサポート資格をこれらの製品に添付することが必要になった場合。

- **インストールやアップグレードのプロセスとは無関係に、システムを明示的に登録する**

インストールやアップグレードのプロセスとは無関係に、システムを明示的に登録したい場合。

注 - `regadm register` コマンドを使ってシステムを登録する場合、コマンドを実行するとすぐにサービスタグデータが Oracle 製品登録システムに転送されます。サービスタグを送信するためにシステムをリポートする必要はありません。

## regadm コマンドの使用要件

次に、`regadm` コマンドの使用要件を示します。

- スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受ける必要があります。  
`regadm` コマンドは、Software Installation 権利プロファイルにも割り当てられません。
- ターゲットシステムがネットワーク接続を保持している必要があります。  
 ターゲットシステムがネットワークに接続されていない状態で登録が試みられると、登録は暗黙のうちに失敗します。次のリポート時に自動登録プロセスが再度試みられます。

## 自動登録 SMF サービスの管理

自動登録機能の管理には、SMF サービスが使用されます。このサービスは、デフォルトで有効になっています。`regadm disable` コマンドを使用して、このサービスを手動で無効にできます。次の手順は、自動登録 SMF サービスを管理する方法を示しています。

注 - 自動登録 SMF サービスは、大域ゾーンでのみ動作します。

表 17-1 自動登録 SMF サービスの管理 (作業マップ)

| 作業                      | 説明                                                                                    | 参照先                                   |
|-------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|
| 自動登録 SMF サービスの状態を表示します。 | <code>regadm</code> コマンドを使って、自動登録 SMF サービスが動作しているかどうかを確認できます。このサービスは、デフォルトで有効になっています。 | 364 ページの「自動登録 SMF サービスが有効かどうかを確認する方法」 |
| 自動登録 SMF サービスを無効にします。   | 登録しないか、あとで登録する場合は、必要に応じて <code>regadm</code> コマンドを使って、自動登録 SMF サービスを無効にできます。          | 364 ページの「自動登録 SMF サービスを無効にする方法」       |

表 17-1 自動登録 SMF サービスの管理 (作業マップ) (続き)

| 作業                    | 説明                                                      | 参照先                                             |
|-----------------------|---------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 自動登録 SMF サービスを有効にします。 | 以前に自動登録 SMF サービスを無効にした場合は、システムを登録する前にサービスを有効にする必要があります。 | <a href="#">365 ページの「自動登録 SMF サービスを有効にする方法」</a> |

## ▼ 自動登録 **SMF** サービスが有効かどうかを確認する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 自動登録サービスの現在の状態を表示します。

```
# regadm status
Solaris Auto-Registration is currently enabled
```

## ▼ 自動登録 **SMF** サービスを無効にする方法

自動登録機能はデフォルトで有効になっています。regadm disable コマンドを使用して、このサービスを手動で無効にできます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 自動登録サービスの現在の状態を表示します。

```
# regadm status
Solaris Auto-Registration is currently enabled
```

- 3 自動登録サービスを無効にします。

```
# regadm disable
```

- 4 サービスが無効になっていることを確認します。

```
# regadm status
Solaris Auto-Registration is currently disabled
```

## ▼ 自動登録 **SMF** サービスを有効にする方法

1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

2 自動登録サービスの現在の状態を表示します。

```
# regadm status
Solaris Auto-Registration is currently disabled
```

3 自動登録サービスを有効にします。

```
# regadm enable
```

4 サービスが有効になっていることを確認します。

```
# regadm status
Solaris Auto-Registration is currently enabled
```

## regadm コマンドを使用した自動登録機能の構成

regadm コマンドを使用して、自動登録を構成したり、構成の詳細を表示したりできます。システムを登録する前に、認証などの特定の構成タスクを実行する必要があります。詳細は、[366 ページの「登録前に実行する必要があるタスク」](#)を参照してください。

表 17-2 自動登録プロパティの構成 (作業マップ)

| 作業                     | 説明                                                                               | 参照先                                            |
|------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|
| 現在の自動登録構成を表示します。       | regadm list コマンドを使用して、現在の自動登録構成を表示します。このコマンドにより、ユーザーアカウント資格およびネットワーク接続情報が表示されます。 | <a href="#">366 ページの「現在の自動登録構成を表示する」</a>       |
| 現在の自動登録構成を消去します。       | regadm cclear コマンドを使用して、現在の自動登録構成をリセットします。この処理により、プロパティがすべて消去されることに留意してください。     | <a href="#">367 ページの「現在の自動登録構成を消去する方法」</a>     |
| HTTP プロキシとポート設定を構成します。 | regadm set コマンドを使用して、ネットワーク接続情報を構成します。                                           | <a href="#">369 ページの「HTTP プロキシとポートを設定する方法」</a> |

表 17-2 自動登録プロパティの構成(作業マップ) (続き)

| 作業                                                     | 説明                                                                          | 参照先                                                    |
|--------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| HTTP プロキシ認証設定を構成します。                                   | サイトのポリシーおよび要件ごとに HTTP プロキシ認証設定を構成する場合にも <code>regadm set</code> コマンドを使用します。 | 369 ページの「 <a href="#">HTTP プロキシ認証を構成する方法</a> 」         |
| My Oracle Support で名前付きの資格を指定して、特定のユーザーまたはアカウントを認証します。 | 登録済みのシステムを特定のユーザーまたはアカウントに関連付ける場合には、 <code>regadm auth</code> コマンドを使用します。   | 371 ページの「 <a href="#">名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する方法</a> 」 |

## 登録前に実行する必要があるタスク

`regadm` コマンドを使用したシステムの登録プロセスには、登録前の情報収集、および特定タスクの実行が含まれます。次にタスクフローを示します。

1. HTTP プロキシ情報を、必要に応じ、サイトポリシーごとに構成します。
2. HTTP プロキシ認証を、必要に応じ、サイトポリシーごとに構成します。  
HTTP プロキシ設定の構成については、[368 ページの「自動登録プロパティを構成する」](#)を参照してください。
3. 登録方法を選択します。

登録方法は、名前付きのサポート資格を指定する方法と、匿名で登録する方法があります。

- My Oracle Support 資格を指定するか、Sun Online アカウントを使って登録する場合は、登録前にこれらのサポート資格を指定する必要があります。手順については、[371 ページの「名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する方法」](#)を参照してください。
- 匿名で登録する場合は、そのまま登録を続けてかまいません。[374 ページの「regadm コマンドを使ってシステムを登録する方法」](#)を参照してください。

## 現在の自動登録構成を表示する

現在認証されているユーザー名とネットワーク接続情報を表示するには、`regadm list` コマンドを次のように使用します。

```
# regadm list
```

構成のプロパティ設定をすべてリセットする必要がある場合は、`regadm clear` コマンドを使用します。詳細は、[367 ページの「現在の自動登録構成を消去する方法」](#)を参照してください。

次に、さまざまな種類の自動登録構成の例を示します。

例 17-1 認証済みユーザー (プロキシなし)

```
# regadm list
My Oracle Support username      user@example.com
HTTP Proxy                       <not configured>
HTTP proxy port                   <not configured>
HTTP proxy user                   <not configured>
HTTP proxy password              <not configured>
```

例 17-2 認証済みユーザー (オープンプロキシ、認証なし)

```
# regadm list
My Oracle Support username      user@example.com
HTTP Proxy                       webproxy.example.com
HTTP proxy port                   8080
HTTP proxy user                   <not configured>
HTTP proxy password              <not configured>
```

例 17-3 認証済みユーザー (認証の必要なプロキシ)

```
# regadm list
My Oracle Support username      user@example.com
HTTP Proxy                       webproxy.example.com
HTTP proxy port                   8080
HTTP proxy user                   webuser
HTTP proxy password              *****
```

## ▼ 現在の自動登録構成を消去する方法

現在の構成を消去すると、すべての自動登録プロパティがデフォルトに設定されます。この操作は、ファクトリリセットを実行した場合と基本的に同じ効果が得られます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 現在の自動登録構成をリスト表示します。

```
# regadm list
```

- 3 現在の自動登録構成を消去します。

```
# regadm clear
```

- 4 現在の構成が消去されたことを確認します。

```
# regadm list
```

すべてのプロパティ値のデフォルト設定が、出力に表示されます。デフォルトのプロパティ値は not configured です。

## 例 17-4 現在の自動登録構成を消去する

次の例では、`regadm clear` コマンドを使って現在の自動登録構成のプロパティ値を消去します。

```
# regadm list
My Oracle Support username      user@example.com
HTTP Proxy                       webproxy.example.com
HTTP proxy port                  8080
HTTP proxy user                  webuser
HTTP proxy password             *****

# regadm clear
# regadm list
My Oracle Support username      <not configured>
HTTP Proxy                       <not configured>
HTTP proxy port                  <not configured>
HTTP proxy user                  <not configured>
HTTP proxy password             <not configured>
```

## 自動登録プロパティを構成する

`regadm` コマンドを使用して、次の自動登録プロパティを構成できます。

- My Oracle Support または Sun Online アカウントのユーザー名とパスワード (省略可能)

ユーザー名とパスワードは、`regadm auth` コマンドを使って設定できます。このコマンドは、対話型モードまたは非対話型モードで実行できます。手順については、[371 ページの「名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する方法」](#)を参照してください。

- HTTP プロキシ名 (省略可能)
- HTTP プロキシポート (省略可能)

デフォルトでは、登録前にその他の方法を指定しない限り、直接ネットワーク接続が登録プロセスで使用されます。必要に応じ、`regadm set` コマンドを使って HTTP プロキシとポートを設定できます。手順については、[369 ページの「HTTP プロキシとポートを設定する方法」](#)を参照してください。

---

注 - 使用する HTTP プロキシ名とポート情報については、サイト管理者に問い合わせてください。HTTP プロキシ認証情報を指定する必要があるかどうかを判断するには、サイトに実装されているポリシーを確認してください。

---

- 認証用の HTTP プロキシサーバー名とパスワード (HTTP プロキシ認証がサイトで実装されている場合にのみ必要)



サイトのポリシーで、HTTP プロキシユーザー名とパスワードの設定が必須であると指定されている場合は、登録前に `regadm set` コマンドを使ってこのプロパティを設定できます。手順については、[369 ページの「HTTP プロキシ認証を構成する方法」](#)を参照してください。

以前に設定した HTTP プロキシとポートを、`regadm clear` コマンドを使って直接ネットワーク接続に変更またはリセットできます。手順については、[367 ページの「現在の自動登録構成を消去する方法」](#)を参照してください。

## ▼ HTTP プロキシとポートを設定する方法

以前に直接ネットワーク接続を使ってシステムを登録した場合、または新たな登録を実行する場合、システムを登録する前に HTTP プロキシとポートの設定が必要になることがあります。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 HTTP プロキシを設定します。

```
# regadm set -n http_proxy -v webproxy-host
```

Web プロキシは、IP アドレス、完全指定でないホスト名、または完全指定のホスト名の場合があります。

- 3 HTTP ポートを設定します。

```
# regadm set -n http_port -v port-number
```

## ▼ HTTP プロキシ認証を構成する方法

サイトで HTTP プロキシ認証が実装されている場合は、HTTP プロキシ認証設定 (ユーザー名とパスワード) も構成する必要があります。パスワードをテキストファイル内で 1 行で指定して、`regadm` コマンドに渡す必要があります。次の手順は、パスワードファイルをその使用中に保護する方法を示します。`regadm` コマンドの実行後、ただちにこのファイルを削除してください。

`regadm` コマンドがパスワードファイルを受け付けるのは、次の 2 つの場合です。

- `regadm auth` コマンドを使ってユーザー名とパスワードを設定する場合。
- `regadm set` コマンドを使って、HTTP プロキシのユーザー名とパスワードを設定する場合。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 HTTP プロキシのユーザー名を設定します。

```
# regadm set -n http_proxy_user -v webuser
```

`webuser` には、HTTP プロキシサーバーでのユーザー認証に使用する、サイトで指定された値を設定します。

- 3 一時パスワードファイルを作成します。  
# touch *pwfile*
- 4 ファイルのアクセス権をセキュリティー保護します。  
# chmod 600 *pwfile*
- 5 テキストエディタを使用して一時パスワードファイルを編集し、パスワード情報を含む 1 行のエントリを挿入します。
- 6 HTTP パスワード認証情報を設定します。  
# regadm set -n http\_proxy\_pw -v *pwfile*  
*pwfile* には、手順 3 で作成したパスワードファイルを指定します。
- 7 パスワードファイルを削除します。  
# rm *pwfile*

#### 例 17-5 HTTP プロキシ認証設定を構成する

次の例は、認証に HTTP ユーザー名とパスワードを必要とするサイトの HTTP 認証プロパティの構成方法を示します。

```
# regadm set -n http_proxy_user -v webuser
# touch myhttppasswd
# chmod 600 myhttppasswd
# vi myhttppasswd
.
.
.

# regadm set -n http_proxy_pw -v myhttppasswd
# rm myhttppasswd
```

#### 例 17-6 HTTP プロキシネットワーク構成から直接接続に切り替える

ネットワーク接続を直接接続に切り替える場合は、次の例に示すように、すべての HTTP プロキシ設定を null 値 (not configured) にする必要があります。

```
# regadm set -n http_proxy ""
# regadm set -n http_proxy_port ""
# regadm set -n http_proxy_user ""
# regadm set -n http_proxy_pw ""
# regadm list
My Oracle Support username    <not configured>
HTTP Proxy                    <not configured>
HTTP proxy port                <not configured>
HTTP proxy user                <not configured>
HTTP proxy password            <not configured>
```

## 名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する

システムの製品を登録する前に、有効な My Oracle Support 資格または有効な Sun Online アカウント資格を指定して、ユーザーまたはアカウントを認証する必要があります。サポート資格を指定しない場合、匿名の My Oracle Support アカウントを使ってシステムが登録されます。regadm コマンドと auth サブコマンドを対話的または非対話的に使用して、Oracle 製品登録システムで自分自身を認証できます。

---

注 - regadm register コマンドを使って登録を実行する前に、認証を行う必要があります。

---

次に示すように、regadm auth コマンドを -u および -p オプションと組み合わせて使用します。

```
# regadm auth -u username -p pwfile
```

-u オプションでは、有効なユーザー名を指定します。-p オプションでは、ユーザーアカウントのパスワード情報を含むファイルを指定します。

パスワードファイルは1行のファイルで、これに regadm コマンドに渡す資格を作成して追加します。パスワードファイルの内容は非公開です。セキュリティ上の理由で、情報を regadm コマンドに渡し、認証に成功したなら、このファイルをただちに削除してください。

---

注 - 成功した認証はリブート後も持続するため、指定する必要があるのは1回だけです。認証は、インストール前またはインストール中に行うか、インストール後に regadm auth コマンドを使って行えます。パスワードがシステムに保存されることはありません。認証が成功したあとも維持されるのは、不透明なトークンだけです。

---

### ▼ 名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する方法

My Oracle Support でユーザーを認証する場合、regadm auth コマンドを対話的または非対話的に使用できます。次の手順に、このコマンドを非対話的に使用方法を示します。次の例は、このコマンドを両方のモードで実行する方法を示しています。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 一時パスワードファイルを作成します。

```
# touch pwfile
```

- 3 ファイルのアクセス権をセキュリティー保護します。  
# `chmod 600 pwfile`
- 4 テキストエディタを使って、作成したばかりの一時パスワードファイルを編集します。パスワード情報を含む1行のエントリを挿入します。
- 5 **My Oracle Support** で、名前付きサポート資格を指定して認証を行います。  
# `regadm auth -u user@example.com -p pwfile`  
*user@example.com* には My Oracle Support または Sun Online アカунトのユーザー一名を、*pwfile* には手順2で作成したパスワードファイルをそれぞれ指定します。  
認証が成功した、または失敗したことを示すメッセージが表示されます。
- 6 次のいずれかを実行します。
  - 認証が成功した場合は、登録を続けることができます。  
手順については、[374 ページの「regadm コマンドを使ってシステムを登録する方法」](#)を参照してください。
  - 認証が失敗した場合は、[377 ページの「自動登録に関する問題のトラブルシューティング」](#)を参照してください。
- 7 一時パスワードファイルを削除します。  
# `rm pwfile`

#### 例 17-7 名前付きサポート資格を使ってユーザーを認証する (非対話型)

```
# touch mospwfile
# chmod 600 mospwfile
# vi mospwfile
.
.
.
# regadm auth -u jdoe@mycompany.com -p mospwfile
Authenticating "jdoe@mycompany.com" with My Oracle Support
Authentication successful

You can now register this system with My Oracle Support
via "regadm register"
# rm mospwfile
```

#### 例 17-8 名前付きサポート資格を使ってユーザーを認証する (対話型)

```
# regadm auth
Enter your My Oracle Support username: jdoe@mycompany.com
Enter password:
Enter password again:
Authenticating "jdoe@mycompany.com" with My Oracle Support
```

Authentication successful

You can now register this system with My Oracle Support  
via "regadm register"

## regadm コマンドを使ってシステムを登録する

| 作業                       | 説明                                                                                                                         | 参照先                                  |
|--------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------|
| 1.(省略可能) 製品登録の予行演習を行います。 | regadm register コマンドと -d オプションを使って、これから登録する製品のサービスタグ情報を、実際の登録前に表示します。コマンドの出力には、実際の登録時に My Oracle Support に転送されるデータが表示されます。 | 373 ページの「まだ登録していない製品の登録情報を表示する方法」    |
| 2. 製品の登録を行います。           | regadm register コマンドを使って、インストールかアップグレードかに関係なく、システムを明示的に登録します。                                                              | 374 ページの「regadm コマンドを使ってシステムを登録する方法」 |

### ▼ まだ登録していない製品の登録情報を表示する方法

regadm register コマンドの予行演習機能を使って、未登録製品のサービスタグ情報を表示できます。この機能は、My Oracle Support に送信される情報を、システム管理者が実際の登録前に確認するのに役立ちます。サービスタグを使用することで、システムにインストールされている製品を自動的に検出できます。register -d コマンドオプションを使用した場合は、Oracle 製品登録システムに転送されるサービスタグデータが表示されるだけです。

注- 予行演習コマンドオプションを使用するには、システムがネットワークに接続されている必要があります。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 regadm register コマンドと予行演習コマンドオプションを、次のように入力します。

```
# regadm register -d
```

コマンドの出力は XML ファイル形式で表示されます。

## 例 17-9 未登録製品の登録情報を表示する

次の例は、`regadm register` コマンドと `-d` オプションを実行した場合の出力を示しています。わかりやすくするために、コマンド出力を切り詰めています。

```
# regadm register -d
Registering with My Oracle Support using username user@example.com
<?xml version="1.0"?>
<st1:request>
  <agent>
    <agent_urn>urn:st:5eabd994-12d0-6c6c-bf6e-a2cca89a0287</agent_urn>
    <agent_version>1.1.5.</agent_version>
    <registry_version>1.1.5</registry_version>
    <system_info>
      <system>SunOS</system>
      <host>hs-t1000-1</host>
      <release>5.10</release>
      <architecture>sparc</architecture>
      <platform>SUNW,Sun-Fire-T1000::Generic_141444-09</platform>
      .
      .
    </system_info>
  </agent>
</st1:request>

<?xml version="1.0"?>
<st1:request>
  <service_tag>
    <instance_urn>urn:st:fd96de223-e190-6501-ff8d-dd76f1b708f5</instance_urn>
    <product_name>Solaris 10 Operating System</product_name>
  .
  .
  .
```

## ▼ regadm コマンドを使ってシステムを登録する方法

サービスタグレジストリ内の製品を My Oracle Support に登録するには、`regadm register` コマンドを使用します。登録は、現在の認証資格を使って行われます。資格を指定しない場合、匿名の My Oracle Support アカウントを使って匿名で登録が行われます。

始める前に [366 ページの「登録前に実行する必要があるタスク」](#) で前提条件を必ず確認してください。

次の情報も考慮してください。

- 以前に匿名でシステムを登録し、今回は名前付きサポート資格を指定して登録する場合は、`regadm auth` コマンドを使ってこれらの資格を認証する必要があります。認証プロセスは、登録前に実行する必要がある別個のタスクです。手順については、[371 ページの「名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する方法」](#)を参照してください。
- 以前に名前付きサポート資格を指定してシステムを登録し、今回は匿名で登録する場合は、登録前に現在の自動登録構成を消去する必要があります。手順については、[367 ページの「現在の自動登録構成を消去する方法」](#)を参照してください。

---

注 - `clear` サブコマンドにより、以前に構成されたネットワーク接続情報を含む、すべての構成済みプロパティが消去されます。

---

- 以前に直接ネットワーク接続を使ってシステムを登録し、今回は HTTP プロキシおよびポート情報を指定する場合は、登録前に `regadm set` コマンドを使ってこれらのプロパティを構成する必要があります。手順については、[369 ページの「HTTP プロキシとポートを設定する方法」](#)を参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 現在の自動登録構成をリスト表示します。

```
# regadm list
```

`regadm list` コマンドの出力に構成済みの自動登録プロパティ (ユーザー名) が一切表示されない場合、匿名で登録が行われます。それ以外の場合、登録は表示されたユーザー名に関連付けられます。システムを匿名で登録しているが、サポート資格を指定したい場合は、操作を続行する前に[371 ページの「名前付きサポート資格を指定してユーザーを認証する方法」](#)を参照してください。

`regadm list` コマンドの出力に HTTP プロキシやポートの情報が一切表示されない場合は、直接ネットワーク接続を使って登録が行われます。それ以外の場合、既存の HTTP プロパティ設定が使用されます。ネットワーク接続の自動登録プロパティを再構成する必要がある場合は、操作を続行する前に[369 ページの「HTTP プロキシとポートを設定する方法」](#)を参照してください。

- 3 システムを登録します。

```
# regadm register
```

---

注 - `regadm register` コマンドの出力は、システムでの自動登録機能の構成方法によって異なります。

---

## 例 17-10 システムを匿名で登録する

次の例は、登録前に名前付きサポート資格が構成されていないシステムでの匿名登録を示しています。この登録では、直接ネットワーク接続が使用されています。

```
# regadm list
My Oracle Support username      <not configured>
HTTP Proxy                      <not configured>
HTTP proxy port                 <not configured>
HTTP proxy user                 <not configured>
HTTP proxy password             <not configured>
# regadm register
Registered Solaris 10 Operating System
Registration Successful
```

## 例 17-11 名前付きサポート資格を指定してシステムを登録する

次の例は、登録前にサポート資格および HTTP プロキシとポート情報が構成されているシステムでの登録を示しています。

```
# regadm list
My Oracle Support username      user@example.com
HTTP Proxy                      webproxy.example.com
HTTP proxy port                 8080
HTTP proxy user                 <not configured>
HTTP proxy password             <not configured>
# regadm register
Registering with My Oracle Support using username user@example.com
Registered Solaris 10 Operating System
Registration successful
```

## 現在登録されている製品の情報を取得する

自動登録機能を使って、現在登録されている製品のサービスタグ情報を取得する方法については、<https://inventory.sun.com/inventory/data.jsp> を参照してください。

登録済み製品のサービスタグ情報にアクセスするには、最初に My Oracle Support のアカウント資格または Sun Online のアカウント資格を使ってログインする必要があります。

---

注 - 目録 Web サイトで提供される検出および登録方法の情報は、新しい自動登録機能とは関連付けられていないことに留意してください。これらほかの登録方法は、自発的に使用するものであり、登録は必須ではありません。Oracle Solaris 10 9/10 がインストール済みの場合は、インストールまたはアップグレード後の初回リブート時に、自動登録が行われます。

---



サービスタグを使用したシステム資産の管理方法に関する一般的な情報については、<http://wikis.sun.com/display/ServiceTag/Home> を参照してください。

## 自動登録に関する問題のトラブルシューティング

システムの認証や登録中に発生する可能性のあるより一般的なエラーは、次に示すトラブルシューティングの基本方針に従って解決できます。regadm コマンドの使用時にトラブルシューティングが必要になる可能性のある問題を、次に示します。

### 認証に失敗した

My Oracle Support で regadm auth コマンドを使って自分自身の認証を試みるが、認証に失敗する場合、ユーザー名とパスワードの入力後に次のメッセージが表示されません。

```
Authentication failed
```

この問題のトラブルシューティングを行うには、使用しているアカウント資格 (My Oracle Support のユーザー名とパスワードまたは Sun Online アカウントのユーザー名とパスワード) が正しいことを確認します。アカウント設定の確認方法については、<https://reg.sun.com/accounthelp> を参照してください。

My Oracle Support への初回アクセス方法に関する一般的な質問および情報については、<http://www.oracle.com/us/support/044753.html#S6> を参照してください。

### HTTP プロキシパスワードを送信できない

セキュリティ上の理由で、HTTP プロキシパスワードはコマンド行で指定するのではなく、ファイル内に存在する必要があります。ファイル内にパスワードが指定されていない場合、regadm コマンドはパスワードを見つけることができません。その結果、パスワードの設定を試みると、次のエラーメッセージが表示されます。

```
# regadm set -n http_proxy_pw -v secret1  
Cannot find file 'secret1'
```

HTTP プロキシパスワードの設定方法については、[369 ページの「HTTP プロキシ認証を構成する方法」](#) を参照してください。

### HTTP 通信エラー

HTTP の構成に問題がある場合、次のエラーメッセージが表示されることがあります。

HTTP Communications error with Oracle Support Center

Please check your HTTP settings and retry your request.

このエラーメッセージが表示される場合、1つ以上の原因が考えられます。問題を解決するには、次の手順に従います。

1. 次のコマンドを入力して、HTTP 構成が正しいことを確認します。

```
# regadm list
```

2. 構成が正しい場合は、次の情報を確認します。

- システムが、直接またはHTTPプロキシ経由でパブリックインターネットにアクセスしているか。アクセスしていない場合、regadm コマンドを使って自動登録機能を管理することはできません。
- HTTPプロキシがサイトに必要か。必要な場合、HTTPプロキシのホストとポートが正しく構成されていることを確認してください。手順については、[369 ページの「HTTPプロキシとポートを設定する方法」](#)を参照してください。
- 認証されたプロキシアクセスがサイトに必要か。必要な場合は、プロキシのユーザー名とパスワードが正しく構成および入力されていることを確認してください。手順については、[369 ページの「HTTPプロキシ認証を構成する方法」](#)を参照してください。

3. HTTPプロキシホスト設定が、稼働中で解決可能な名前を持つ有効なWebプロキシホストとして解釈処理できることを確認します。

たとえば、構成済みのHTTPプロキシホストがwebproxy.example.comである場合、次に示すように、これは解決可能であり、かつpingユーティリティーの要求に応答可能でなければなりません。

```
# getent hosts webproxy.example.com
192.168.1.1 webproxy.example.com
# ping webproxy.example.com
webproxy.example.com is alive
```

詳細は、[getent\(1M\)](#) および [ping\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

4. 上記のトラブルシューティングの手順を実行しても問題が解決されない場合は、サイト管理者に問い合わせ設定を確認してください。

## サービスの管理 (概要)

---

この章では、サービス管理機能 (SMF) の概要について説明します。さらに、実行レベルについても説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 379 ページの「SMF について」
- 381 ページの「SMF の概念」
- 386 ページの「SMF 管理およびプログラミングインタフェース」
- 387 ページの「SMF コンポーネント」
- 388 ページの「SMF 互換性」
- 389 ページの「実行レベル」
- 391 ページの「/etc/inittab ファイル」

SMF に関連する手順については、393 ページの「サービスの管理 (作業マップ)」を参照してください。実行レベルに関連する手順については、409 ページの「実行制御スクリプトの使用 (作業マップ)」を参照してください。

### SMF について

SMF は、従来の UNIX の起動スクリプト、init 実行レベル、および構成ファイルを補強するインフラストラクチャーを提供します。SMF には、次の機能が備わっています。

- 管理エラー、ソフトウェアのバグ、修復不可能なハードウェアエラーなどの原因によって失敗したサービスを、依存関係の順番に自動的に再起動します。依存関係の順番は依存記述で定義されます。
- 表示可能なサービスオブジェクトを新しいコマンド `svcs` を使って作成したり、管理可能なサービスオブジェクトをコマンド `svcadm` と `svccfg` を使って作成したりします。SMF サービスおよび従来の `init.d` スクリプトのどちらにおいても、`svcs -p` を使用すると、サービスとプロセスの関係を表示することができます。

- サービス構成のスナップショットを自動的に取ることで、バックアップ、復元、およびサービスへの変更の取り消しを容易にします。
- サービスが実行できない原因を `svcs -x` で明らかにし、デバッグおよびサービスに関する質問を容易にします。また、この処理は、各サービスの個別の永続的なログファイルを使用するとより楽に行えます。
- `svcadm` を使用してサービスを有効化および無効化します。この変更は、更新後やリブート後も維持できます。-t オプションを使用した場合、変更は一時的です。
- ルート以外のユーザーに対して管理者がタスクを安全に委任する機能を拡張します。この機能には、プロパティの変更と、システムのサービスの有効化、無効化、および再起動とが含まれます。
- 大規模システムにおけるブートを高速化します。これは、サービス間の依存関係に従って各サービスを並列的に起動することで実現しています。シャットダウン時にはその逆の処理が実行されます。
- ブートコンソールの出力をカスタマイズして、表示を最小限にする(デフォルト)か、表示を多くする(`boot -m verbose` を使用)かを選択できます。
- 可能な場合には既存の管理業務との互換性を維持します。たとえば、顧客およびISVから提供されるrcスクリプトの大部分は、通常どおり動作します。

「依存記述」では、サービス間の関係を定義します。これらの関係を使用すると、すべてのサービスを再起動するのではなく、障害の影響を直接受けているサービスのみを再起動することにより、障害を的確に封じ込めることができます。依存記述のもう1つの利点は、スケーラブルで再現可能な初期化プロセスを実現できることです。また、依存性をすべて定義することにより、独立したすべてのサービスを並列に起動できるため、今日の高並列マシンをうまく利用することができます。

SMFでは、管理者がサービスに対して呼び出すことのできる一連のアクションを定義します。これらのアクションには、有効化、無効化、再表示、再起動、維持などがあります。各サービスは、管理アクションを実行するサービスリスタートによって管理されます。通常、アクションを実行する場合、リスタートはサービスに対していくつかのメソッドを実行します。各サービスのメソッドは、サービス構成リポジトリで定義されます。リスタートは、これらのメソッドを使って、サービスのある状態から別の状態へ移行できます。

サービス構成リポジトリでは、フォールバックができるように、各サービスが正常に起動されたときにサービスごとのスナップショットを取ります。また、リポジトリを使用すると、一貫した永続的な方法でサービスを有効または無効にしたり、サービスの状態を一貫して表示したりできます。この機能は、サービスの構成に関する問題を修正するのに役立ちます。

## SMF 使用時の動作に関する変更

SMF が提供する機能のほとんどが、ユーザーの目に触れることなく実行されます。それ以外の機能には新しいコマンドでアクセスします。動作に関する可視的な変更は次のとおりです。

- ブートプロセスで生成されるメッセージが少なくなりました。デフォルトでは、サービスの起動時にメッセージは表示されません。ブートメッセージによって提供されていた情報は、`/var/svc/log`にある各サービス用のログファイルで提供されるようになりました。ブートの問題の診断には `svcs` コマンドが役立ちます。なお、`boot` コマンドで `-v` オプションを使用すれば、ブートプロセス中に各サービスが起動されるたびにメッセージが生成されます。
- サービスは可能なかぎり自動的に再起動されるため、プロセスを終了させないように見えます。サービスに障害があれば保守モードに切り替わりますが、通常、対応するプロセスを強制終了してもサービスは再起動されます。SMF サービスが実行されないようにするには、`svcadm` コマンドを使用してそのプロセスを停止する必要があります。
- `/etc/init.d` および `/etc/rc*.d` のスクリプトが多数削除されました。サービスの有効化および無効化に、これらのスクリプトはもう必要ありません。`/etc/inittab` のエントリも削除され、サービスの管理に SMF が使用できるようになりました。ISV によって提供されるスクリプトおよび `inittab` エントリ、あるいはローカルで開発されたそれらは、従来どおり機能します。ブートプロセス中で、これらのサービスが起動される時点が以前と異なる可能性があります。必ず SMF サービスのあとに起動されるため、サービス依存関係に問題は起きません。

## SMF の概念

この節では、SMF フレームワーク内で使われる用語とその定義をいくつか紹介します。これらの用語は、マニュアル全体で使用されます。SMF の概念を理解するには、これらの用語を理解する必要があります。

### SMF サービス

SMF フレームワークでの基本的な管理単位は「サービスインスタンス」です。それぞれの SMF サービスでは、構成された複数のバージョンを保持することができます。さらに、1つの Oracle Solaris システム上で同じバージョンの複数のインスタンスが動作できます。「インスタンス」とは、サービスの特定の構成のことです。Web サーバーはサービスです。ポート 80 で待機するよう構成された Web サーバーデーモンはインスタンスです。Web サーバーサービスの各インスタンスには、異なる構成要件を設定できます。サービスにはシステム全体の構成要件が設定されています。

が、各インスタンスでは必要に応じて特定の要件を無効にできます。1つのサービスの複数のインスタンスは、サービスオブジェクトの子オブジェクトとして管理されます。

サービスは、`in.dhcpd` や `nfsd` などの標準の長年続いているシステムサービスだけではなく、Oracle ソフトウェアなどの ISV アプリケーションを含むさまざまなシステムエンティティーも意味します。また、次のような今まであまり使われなかったエンティティーを組み込むこともできます。

- 物理ネットワークデバイス
- IP アドレス構成
- カーネル構成情報
- マルチユーザー実行レベルなど、システムの `init` 状態に対応するマイルストーン

一般に、サービスはアプリケーションやほかのサービス(ローカルやリモート)に機能リストを提供するエンティティーです。サービスは、暗黙のうちに宣言されたローカルサービスのリストに依存しています。

「マイルストーン」とは、特殊なタイプのサービスです。マイルストーンサービスは、システムの高レベルの属性を表します。たとえば、実行レベル `S`、`2`、および `3` を構成するサービスはマイルストーンサービスによってそれぞれ表されます。

## サービス識別子

各サービスインスタンスの名前は、障害管理リソース識別子(FMRI)によって付けられます。FMRI には、サービス名とインスタンス名が含まれます。たとえば、`rlogin` サービスの FMRI は `svc:/network/login:rlogin` となり、ここでの `network/login` はサービスを、`rlogin` はサービスインスタンスをそれぞれ示します。

次の FMRI の形式はどれも同じです。

- `svc://localhost/system/system-log:default`
- `svc:/system/system-log:default`
- `system/system-log:default`

また、SMF コマンドの中には、`svc:/system/system-log` という FMRI 形式を使用できるものや、あいまいさがまったくない場合に、使用するインスタンスを推測するものもあります。適切な FMRI 形式を判断する方法については、`svcadm(1M)` や `svcs(1)` などの SMF コマンドのマニュアルページを参照してください。

通常、サービス名には一般的な機能カテゴリが含まれます。カテゴリには、次のものがあります。

- `application`
- `デバイス`
- `milestone`

- network
- platform
- site
- system

また、従来の `init.d` スクリプトは、`svc` ではなく `lrc` で始まる FMRI (たとえば、`lrc:/etc/rcS_d/S35cacheos_sh`) で表現されます。従来のサービスは、SMF を使用して監視できますが、管理することはできません。

SMF を使用してシステムを初めてブートしたときに、`/etc/inetd.conf` に示されたサービスが自動的に SMF サービスに変換されます。これらのサービスの FMRI は多少異なります。変換された `inetd` サービスの構文は次のとおりです。

```
network/<service-name>/<protocol>
```

また、RPC プロトコルを使用するサービスの構文は次のとおりです。

```
network/rpc-<service-name>/rpc_<protocol>
```

ここで、`<service-name>` は `/etc/inetd.conf` に定義されている名前であり、`<protocol>` はそのサービスに使用されるプロトコルです。たとえば、`rpc.cmsd` サービスの FMRI は `network/rpc-100068_2-5/rpc_udp` となります。

## サービスの状態

`svcs` コマンドは、サービスインスタンスの状態、開始時刻、および FMRI を表示します。各サービスの状態は次のいずれかになります。

- `degraded` – サービスインスタンスは有効ですが、限られた能力で実行されています。
- `disabled` – サービスインスタンスは無効で、実行されていません。
- `legacy_run` – 従来のサービスは SMF によって管理されませんが、監視することはできます。この状態は従来のサービスでのみ使用されます。
- `maintenance` – サービスインスタンスに、管理者が解決しなければならないエラーが発生しました。
- `offline` – サービスインスタンスは有効ですが、サービスが実行されていないか、利用できる状態がありません。
- `online` – サービスインスタンスは有効で、正常に起動されました。
- `uninitialized` – この状態は、すべてのサービスの構成が読み込まれる前の初期状態です。

## SMF 目録

SMF の「目録」とは、サービスまたはサービスインスタンスに関連付けられた完全なプロパティセットを含む XML ファイルのことです。これらのファイルは `/var/svc/manifest` に格納されます。目録は、サービスプロパティの変更には使用しないでください。サービス構成リポジトリは、信頼できる構成情報ソースです。情報を目録からリポジトリに取り込むには、`svccfg import` を実行するか、システムのブート時に、サービスが情報をインポートできるようにする必要があります。

SMF 目録の詳細な内容については、[service\\_bundle\(4\)](#) のマニュアルページを参照してください。サービスのプロパティを変更する必要がある場合には、[svccfg\(1M\)](#) または [inetadm\(1m\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## SMF プロファイル

SMF の「プロファイル」とは、サービスインスタンスの一覧とそれぞれを有効にするかどうかを示す XML ファイルのことです。この Oracle Solaris リリースで配布されるプロファイルには、次のようなものがあります。

- `/var/svc/profile/generic_open.xml` – このプロファイルは、以前の Solaris リリースではデフォルトで起動されていた標準のサービスを有効化します。
- `/var/svc/profile/generic_limited_net.xml` – このプロファイルは、以前の Solaris リリースではデフォルトで起動されていた標準のインターネットサービスの多くを無効化します。ネットワーク接続を提供するために `network/ssh` サービスは有効化されます。
- `/var/svc/profile/ns_*.xml` – これらのプロファイルは、システムで実行されるよう設定されているネームサービスに関連するサービスを有効化します。
- `/var/svc/profile/platform_*.xml` – これらのプロファイルは、特定のハードウェアプラットフォームに関連するサービスを有効化します。

Oracle Solaris OS を新規にインストールした場合やこの OS にアップグレードした場合は、そのあとの最初のブート時に、いくつかの Solaris プロファイルが自動的に適用されます。具体的には、`/var/svc/profile/generic.xml` プロファイルが適用されます。通常、このファイルには、`generic_open.xml` または `generic_limited_net.xml` へのシンボリックリンクが設定されています。また、最初のブート時に `site.xml` というプロファイルが `/var/svc/profile` に存在している場合や、次のブートまでに追加された場合は、このプロファイルの内容が適用されます。管理者は `site.xml` プロファイルを使用して、有効にするサービスの初期セットをカスタマイズすることができます。

プロファイルの使用方法については、[403 ページの「SMF プロファイルを適用する方法」](#)を参照してください。



## サービス構成リポジトリ

「サービス構成リポジトリ」には、永続的な構成情報と SMF 実行時サービスデータが格納されます。リポジトリは、ローカルメモリーとローカルファイルの間で割り当てられます。SMF は、最終的にサービスデータをネットワークディレクトリサービスで表現できるように設計されています。ネットワークディレクトリサービスはまだ利用できません。サービス構成リポジトリ内のデータを使用すると、多数の Solaris インスタンス間で構成情報の共有や管理の簡素化ができます。サービス構成リポジトリは、SMF インタフェースを使ってのみ操作または照会できます。リポジトリの操作やアクセスの方法については、[svccfg\(1M\)](#) および [svccprop\(1\)](#) のマニュアルページを参照してください。サービス構成リポジトリデーモンについては、[svc.configd\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。サービス構成ライブラリについては、[libscf\(3LIB\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## SMF リポジトリのバックアップ

SMF では、次に示すリポジトリのバックアップを自動的に行います。

- ブートバックアップは、システムを起動するたびに、リポジトリに対する最初の変更が行われる直前に行われます。
- `manifest_import` バックアップは、`svc:/system/manifest-import:default` によって新しい目録がインポートされたりアップグレードスクリプトが実行されたりした場合、このサービスの完了後に行われます。

タイプごとに 4 つのバックアップがシステムによって管理されます。必要に応じて、もっとも古いバックアップから削除されます。バックアップは `/etc/svc/repository -type-YYYYMMDD_HHMMSSWS` という名前で格納されます。ここでの `YYYYMMDD` (年、月、日) と `HHMMSS` (時、分、秒) は、バックアップが行われた日時です。時間は 24 時間形式で表されます。

エラーが発生した場合は、これらのバックアップからリポジトリを復元できません。そのためには、`/lib/svc/bin/restore_repository` コマンドを使用します。詳細は、[412 ページの「破壊されたりリポジトリを修復する方法」](#)を参照してください。

## SMF スナップショット

サービス構成リポジトリ内のデータには、編集可能な構成情報のほかに「スナップショット」もあります。各サービスインスタンスに関するデータは、スナップショットに格納されます。標準のスナップショットは、次のとおりです。

- `initial` - 目録の最初のインポート時に取られる
- `running` - サービスメソッドが実行されるときに使用される
- `start` - 最後に起動が成功したときに取られる

SMF サービスは常に `running` スナップショットを使って実行します。このスナップショットが存在しない場合は、自動的に作成されます。

`svcadm refresh` コマンド (ときどきこのあとに `svcadm restart` コマンドが実行される) によってスナップショットがアクティブになります。以前のスナップショットに含まれるインスタンス構成を表示したり、そこに戻ったりするには、`svccfg` コマンドを使用します。詳細については、401 ページの「別の SMF スナップショットに戻す方法」を参照してください。

## SMF 管理およびプログラミングインタフェース

この節では、SMF の使用時に利用できるインタフェースについて簡単に説明します。

### SMF コマンド行管理ユーティリティー

SMF には、SMF とやりとりしたり、標準の管理タスクを実行したりする 1 連のコマンド行ユーティリティーが用意されています。SMF の管理には、次のユーティリティーを使用できます。

表 18-1 サービス管理機能のユーティリティー

| コマンド名                 | 機能                                               |
|-----------------------|--------------------------------------------------|
| <code>inetadm</code>  | <code>inetd</code> によって制御されるサービスを監視または構成できます     |
| <code>svcadm</code>   | サービスインスタンスの有効化、無効化、再起動などの一般的なサービス管理タスクを実行できます    |
| <code>svccfg</code>   | サービス構成リポジトリの内容を表示および操作できます                       |
| <code>svccprop</code> | シェルスクリプトでの使用に適した出力形式で、サービス構成リポジトリからプロパティ値を取り出します |
| <code>svcs</code>     | サービス構成リポジトリ内のすべてのサービスインスタンスのサービス状態を詳細に表示できます     |

### サービス管理構成ライブラリインタフェース

SMF には、`svc.configd` デーモンを介してサービス構成リポジトリとのやりとりを行うための一連のプログラミングインタフェースが用意されています。このデーモンは、ローカルのリポジトリデータストアに対するすべての要求を判定します。サービス構成リポジトリ内のサービスとの最低レベルのやりとりの手段として、1 連の基本的なインタフェースが定義されています。これらのインタフェースを使うと、トランザクションやスナップショットなどのサービス構成リポジトリのすべての機能にアクセスできます。

多くの開発者は、SMF とやりとりするための一般的なタスクのみを必要としています。これらのタスクは、便利な機能として基本サービスの上位で実装され、実装にかかる負荷を軽減しています。

## SMF コンポーネント

SMF には、マスターリスタートデーモンと委任リスタートがあります。

### SMF マスターリスタートデーモン

`svc.startd` デーモンは、Solaris OS のマスタープロセススタートおよびリスタートです。このデーモンは、システム全体のサービス依存性を管理する役割を担っています。適切な実行レベルで適切な `/etc/rc*.d` スクリプトを起動することは、以前は `init` の役割でしたが、現在はこのデーモンの役割です。まず、`svc.startd` はサービス構成リポジトリに格納されている情報を取り出します。次に、サービス依存性が満たされたときにそのサービスを起動します。また、失敗したサービスの再起動や、依存性が満たされなくなったサービスの停止も行います。このデーモンは、プロセスの消滅などのイベントを通してオペレーティングシステムの可用性の点からサービス状態を追跡します。

### SMF 委任リスタート

一部のサービスは、起動時に共通の動きが見られます。これらのサービス間に共通性を持たせるために、委任リスタートがこれらのサービスに対する責任を負うことがあります。また、より複雑な再起動やアプリケーション固有の再起動を行えるようにする場合にも委任リスタートを使用できます。委任リスタートは、別のメソッド群をサポートできますが、マスターリスタートと同じサービス状態をエクスポートします。リスタートの名前は、サービスとともに格納されます。委任リスタートの例には、インターネットサービスを常に実行しておくのではなく、要求に応じて起動できる `inetd` があります。

## SMFとブート

SMFには、システムをブートするための新しい方法が用意されています。次に例を示します。

- allマイルストーンに関連付けられるシステム状態が追加されています。allマイルストーンでは、multi-user-serverマイルストーン上で定義済みの依存関係を持つすべてのサービスと、定義済みの依存関係を持たないすべてのサービスが起動されます。Sun以外の製品など、サービスを追加しても、次のコマンドを実行するまでそれらのサービスが自動的に起動されないことがあります。

```
ok boot -m milestone=all
```

- システムをブートするときに、冗長オプションを使用して詳細なメッセージを表示することができます。デフォルトでは、これらのメッセージは表示されません。冗長モードでブートするには、次のコマンドを使用します。

```
ok boot -mverbose
```

- noneマイルストーンに関連付けられた新しいシステム状態が存在します。このマイルストーンを使ってシステムをブートすると、init、svc.startd、およびsvc.configdだけが起動されます。この状態は、ブートに関する問題のデバッグを行う際、非常に役立つ場合があります。特に、サービスが一切起動されないため、SMFサービスの設定に関する問題のデバッグがより単純になります。noneマイルストーンの使用手順については、415ページの「どのサービスも起動しないでブートする方法」を参照してください。

## SMF互換性

標準のSolarisサービスの多くはSMFによって管理されていますが、実行レベルの移行に対しては/etc/rc\*.d内にあるスクリプトが引き続き実行されます。以前のSolarisリリースに含まれていた/etc/rc\*.dスクリプトの大半は、SMFの一環として削除されました。残りのスクリプトを引き続き実行できることにより、SMFを使用するようにサービスを変換しなくてもSun以外のアプリケーションを追加できます。

また、/etc/inittabと/etc/inetd.confは、インストール後のスクリプトで修正するパッケージで利用可能でした。これらは、従来の実行サービスと呼ばれます。inetconvコマンドは、これらの従来の実行サービスをサービス構成リポジトリに追加する場合に実行されます。従来の実行サービスの状態は表示できますが、ほかの変更は一切SMFでサポートされていません。この機能を使用するアプリケーションは、SMFが提供する高精度の障害の封じ込めによるメリットを受けられません。

SMFを利用するように変換されたアプリケーションは、/etc/inittabと/etc/inetd.confの各ファイルに対して変更を行えなくなります。変換されたアプリケーションは、/etc/rc\*.dスクリプトを使用しません。また、新しいバージョンのinetdは/etc/inetd.confのエントリを検索しません。

## 実行レベル

システムの「実行レベル」(「init 状態」とも呼ばれる)は、ユーザーが利用できるサービスとリソースを定義します。システムが一度に持つことのできる実行レベルは1つだけです。

Solaris OS には8つの実行レベルがあります(次の表を参照)。デフォルトの実行レベル3は、`/etc/inittab` ファイルに指定されています。

表 18-2 Solaris 実行レベル

| 実行レベル   | init 状態                 | 種類       | 目的                                                                                                       |
|---------|-------------------------|----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 0       | 電源切断状態                  | 電源切断     | オペレーティングシステムをシャットダウンして、システムの電源を安全に落とせるようにします。                                                            |
| s または S | シングルユーザー状態              | シングルユーザー | 一部のファイルシステムがマウントされ使用可能な状態で、シングルユーザーとして動作します。                                                             |
| 1       | システム管理状態                | シングルユーザー | すべての使用可能なファイルシステムにアクセスします。ユーザーログインは使用できません。                                                              |
| 2       | マルチユーザー状態               | マルチユーザー  | 通常の運用に使用します。複数のユーザーがシステムとすべてのファイルシステムにアクセスできます。NFS サーバーデーモンを除く、すべてのデーモンが動作します。                           |
| 3       | NFS リソースを共有したマルチユーザーレベル | マルチユーザー  | NFS リソースを共有する通常の運用に使用します。Solaris OS におけるデフォルトの実行レベルです。                                                   |
| 4       | マルチユーザー状態 (予備)          |          | デフォルトでは設定されていませんが、顧客用に使用できます。                                                                            |
| 5       | 電源切断状態                  | 電源切断     | オペレーティングシステムをシャットダウンしてシステムの電源を安全に落とせるようにします。可能であれば、この機能をサポートしているシステムでは電源を自動的に切断します。                      |
| 6       | リブート状態                  | リブート     | システムをシャットダウンして実行レベル0にしたあと、NFS リソースを共有するマルチユーザーレベル(または <code>inittab</code> ファイルに指定されたデフォルトのレベル)でリブートします。 |

また、svcadm コマンドを使用してシステムの実行レベルを変更することもできます。その場合は、実行するときのマイルストーンを選択してください。次の表に、各マイルストーンに対応する実行レベルを示します。

表 18-3 Solaris 実行レベルと SMF マイルストーン

| 実行レベル | SMF マイルストンの FMRI                    |
|-------|-------------------------------------|
| S     | milestone/single-user:default       |
| 2     | milestone/multi-user:default        |
| 3     | milestone/multi-user-server:default |

## 実行レベルとマイルストンの使い分け

ほとんどの状況下では、init コマンドといずれかの実行レベルを使用してシステムの状態を変更するだけで十分です。マイルストーンを使用したシステム状態の変更は複雑であり、予期しない動作につながる可能性があります。さらに、init コマンドではシステムのシャットダウンも行えます。したがって、init が、システムの状態を変更するための最適なコマンドであると言えます。

ただし、none マイルストーンによるシステムのブートは、起動時の問題のデバッグを行う際に非常に役立つ可能性があります。none マイルストーンと同等の実行レベルはありません。具体的な手順については、[415 ページの「どのサービスも起動しないでブートする方法」](#)を参照してください。

## システムの実行レベルを確認する

who -r コマンドを使用すると、実行レベルに関する情報が表示されます。

```
$ who -r
```

システムの現在の実行レベルを調べるには、who -r コマンドを使用します。

例 18-1 システムの実行レベルを確認する

次の例では、システムの現在の実行レベルと以前の実行レベルに関する情報を表示します。

```
$ who -r
.      run-level 3  Dec 13 10:10  3  0  S
$
```

## 例 18-1 システムの実行レベルを確認する (続き)

| who -r コマンドの出力 | 説明                            |
|----------------|-------------------------------|
| run-level 3    | 現在の実行レベル                      |
| Dec 13 10:10   | 実行レベルが最後に変更された日時              |
| 3              | 現在の実行レベル                      |
| 0              | 最後にリブートしてからシステムがこの実行レベルになった回数 |
| S              | 以前の実行レベル                      |

## /etc/inittab ファイル

init または shutdown コマンドを使用してシステムをブートしたり、実行レベルを変更したりすると、init デーモンは /etc/inittab ファイルから情報を読み取ってプロセスを起動します。/etc/inittab ファイルには、init プロセスにとって重要な次の情報が定義されています。

- init プロセスが再起動すること
- 起動、監視するプロセス、および停止時に再起動するプロセス
- システムが新しい実行レベルに移行したとき行う処理

/etc/inittab ファイル内の各エントリは、次のフィールドからなります。

*id*:*rstate* :*action*:*process*

次の表に、inittab エントリの各フィールドを要約します。

表 18-4 inittab ファイルのフィールドの説明

| フィールド          | 説明                                                                                                                                                       |
|----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>id</i>      | エントリに固有の(一意の)識別子。                                                                                                                                        |
| <i>rstate</i>  | このエントリが適用される実行レベルのリスト。                                                                                                                                   |
| アクション          | プロセスフィールドに指定されたプロセスの実行方法。指定できる値は、sysinit、boot、bootwait、wait、および respawn です。<br><br>ほかの action キーワードについては、 <a href="#">inittab(4)</a> のマニュアルページを参照してください。 |
| <i>process</i> | 実行するコマンドまたはスクリプトを定義します。                                                                                                                                  |

#### 例 18-2 デフォルトの inittab ファイル

次の例では、Solaris リリースでインストールされるデフォルトの inittab ファイルを示します。そのあとに、この例の出力の各行についての説明も示します。

```
ap::sysinit:/sbin/autopush -f /etc/iu.ap          (1)
sp::sysinit:/sbin/soconfig -f /etc/sock2path      (2)
smf::sysinit:/lib/svc/bin/svc.startd    >/dev/msglog 2<>/dev/msglog    (3)
p3:s1234:powerfail:/usr/sbin/shutdown -y -i5 -g0 >/dev/msglog 2<>/dev/... (4)
```

1. STREAMS モジュールを初期化します
2. ソケット転送プロバイダを構成します
3. SMF 用のマスターリスタータを初期化します
4. 電源障害の場合のシャットダウンを指定します

## システムが実行レベル 3 になると実行される処理

1. init プロセスが起動されます。init プロセスは、/etc/default/init ファイルを読み取って環境変数を設定します。デフォルトでは、TIMEZONE 変数だけが設定されます。
2. init は inittab ファイルを読み取り、次の処理を行います。
  - a. action フィールドが sysinit になっているすべてのプロセスエントリを実行して、ユーザーがログインする前に特別な初期設定処理がすべて行われるようにします。
  - b. 起動アクティビティを svc.startd に渡します。

init プロセスが inittab ファイルを使用する方法については、[init\(1M\)](#)のマニュアルページを参照してください。



## サービスの管理 (手順)

---

この章では、サービス管理機能 (Service Management Facility: SMF) の管理と監視に必要な作業について説明します。さらに、実行レベルスクリプトの管理方法に関する情報も提供します。次の項目について説明します。

- 393 ページの「サービスの管理 (作業マップ)」
- 394 ページの「SMF サービスの監視」
- 397 ページの「SMF サービスの管理」
- 404 ページの「SMF サービスの設定」
- 409 ページの「実行制御スクリプトの使用」
- 412 ページの「サービス管理機能のトラブルシューティング」

### サービスの管理 (作業マップ)

次の作業マップに、SMF を使用するために必要な手順を示します。

| 作業                      | 説明                                                             | 参照先                               |
|-------------------------|----------------------------------------------------------------|-----------------------------------|
| サービスインスタンスの状態を表示します。    | 実行中のすべてのサービスインスタンスの状態を表示します。                                   | 394 ページの「サービスの状態を一覧表示する方法」        |
| 特定のサービスに依存するサービスを表示します。 | 指定されたサービスに依存するサービスを表示します。                                      | 396 ページの「特定のサービスに依存するサービスを表示する方法」 |
| 特定のサービスが依存するサービスを表示します。 | 指定されたサービスが依存するサービスを表示します。この情報があれば、特定のサービスが起動できない原因を特定しやすくなります。 | 396 ページの「特定のサービスが依存するサービスを表示する方法」 |
| サービスインスタンスを無効にします。      | 正常に動作していないサービスや、セキュリティを高めるためにオフにする必要があるサービスを無効にします。            | 398 ページの「サービスインスタンスを無効にする方法」      |

| 作業                        | 説明                                                                                                                 | 参照先                                                                                                           |
|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| サービスインスタンスを有効にします。        | 特定のサービスを起動します。                                                                                                     | 399 ページの「サービスインスタンスを有効にする方法」                                                                                  |
| サービスインスタンスを再起動します。        | 無効化と有効化に各コマンドを使用することなしにサービスを再起動します。                                                                                | 400 ページの「サービスを再起動する方法」                                                                                        |
| サービスインスタンスを変更します。         | 指定されたサービスインスタンスの設定パラメータを変更します。<br><br>inetd によって制御されるサービスの設定プロパティを変更します。<br><br>inetd によって制御されるサービスの起動オプションを変更します。 | 404 ページの「サービスを変更する方法」<br><br>406 ページの「inetd 制御サービスのプロパティを変更する方法」<br><br>407 ページの「inetd 制御サービスのコマンド行引数を変更する方法」 |
| inetd.conf エントリを変換します。    | inetd サービスを、SMF で監視可能な従来の実行サービスに変換します。                                                                             | 408 ページの「inetd.conf エントリを変換する方法」                                                                              |
| 破壊されたサービス設定リポジトリを修復します。   | 破壊されたりポジトリをデフォルトのバージョンと交換します。                                                                                      | 412 ページの「破壊されたりポジトリを修復する方法」                                                                                   |
| どのサービスも起動しないでシステムをブートします。 | ブートを妨げている設定の問題を解決できるように、どのサービスも起動せずにシステムをブートします。                                                                   | 415 ページの「どのサービスも起動しないでブートする方法」                                                                                |

## SMF サービスの監視

次の各作業は、SMF サービスの監視方法を示したものです。

### ▼ サービスの状態を一覧表示する方法

この手順は、実行中のサービスを表示する場合に使用できます。

- `svcs` コマンドを実行します。  
オプションを指定しないでこのコマンドを実行した場合、FMRI で指定されたサービスの状態レポートが表示されます。

```
% svcs -l FMRI
```

#### 例 19-1 rlogin サービスの状態を表示する

この例では、多くの契約を含むサービスの状態を表示しています。

```
% svcs -l network/login:rlogin
fmri          svc:/network/login:rlogin
enabled      true
```

```

state      online
next_state none
restarter  svc:/network/inetd:/default
contract_id 42325 41441 40776 40348 40282 40197 39025 38381 38053\
33697 28625 24652 23689 15352 9889 7194 6576 6360 5387 1475 3015\
6545 6612 9302 9662 10484 16254 19850 22512 23394 25876 26113 27326\
34284 37939 38405 38972 39200 40503 40579 41129 41194

```

### 例 19-2 sendmail サービスの状態を表示する

この例では、依存するサービスを持つサービスの状態を表示しています。

```

% svcs -l network/smtp:sendmail
fmri      svc:/network/smtp:sendmail
enabled   true
state     online
next_state none
restarter svc:/system/svc/restarter:default
contract_id 29462
dependency require_all/refresh file://localhost/etc/nsswitch.conf (-)
dependency require_all/refresh file://localhost/etc/mail/sendmail.cf (-)
dependency optional_all/none svc:/system/system-log (online)
dependency require_all/refresh svc:/system/identity:domain (online)
dependency require_all/refresh svc:/milestone/name-services (online)
dependency require_all/none svc:/network/service (online)
dependency require_all/none svc:/system/filesystem/local (online)

```

### 例 19-3 すべてのサービスの状態を表示する

次のコマンドを実行すると、システムにインストールされているすべてのサービスが一覧表示されます。その際、各サービスの状態も表示されます。このコマンドでは、有効になっているサービスだけでなく、無効になっているサービスも表示されます。

```

% svcs -a

```

### 例 19-4 inetd によって制御されるサービスの状態を表示する

次のコマンドを実行すると、inetd によって制御されるサービスが一覧表示されます。サービスごとに、FMRI のほかに、実行状態と有効になっているかどうかが表示されます。

```

% inetadm

```

## ▼ 特定のサービスに依存するサービスを表示する方法

この手順は、指定されたサービスに依存するサービスインスタンスを確認する方法を示しています。

- 特定のサービスに依存するサービスを表示します。

```
% svcs -D FMRI
```

### 例 19-5 マルチユーザーマイルストーンに依存するサービスインスタンスを表示する

次の例は、マルチユーザーマイルストーンに依存するサービスインスタンスを確認する方法を示しています。

```
% svcs -D milestone/multi-user
STATE      STIME      FMRI
online     Apr_08     svc:/milestone/multi-user-server:default
```

## ▼ 特定のサービスが依存するサービスを表示する方法

この手順は、指定されたサービスインスタンスが依存するサービスを確認する方法を示しています。

- 特定のサービスが依存するサービスを表示します。

```
% svcs -d FMRI
```

### 例 19-6 マルチユーザーマイルストーンが依存するサービスインスタンスを表示する

次の例では、マルチユーザーマイルストーンが依存するサービスインスタンスを表示しています。

```
% svcs -d milestone/multi-user:default
STATE      STIME      FMRI
disabled   Aug_24     svc:/platform/sun4u/sf880drd:default
online     Aug_24     svc:/milestone/single-user:default
online     Aug_24     svc:/system/utmp:default
online     Aug_24     svc:/system/system-log:default
online     Aug_24     svc:/system/system-log:default
online     Aug_24     svc:/system/rmtmpfiles:default
online     Aug_24     svc:/network/rpc/bind:default
online     Aug_24     svc:/milestone/name-services:default
```

```

online      Aug_24  svc:/system/filesystem/local:default
online      Aug_24  svc:/system/mdmonitor:default

```

## SMF サービス (作業マップ)

| 作業                                      | 説明                                                                                            | 参照先                                           |
|-----------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| サービスインスタンスを無効にします。                      | 実行中のサービスを停止し、サービスが再び起動しないようにします。                                                              | 398 ページの「サービスインスタンスを無効にする方法」                  |
| サービスインスタンスを有効にします。                      | 特定のサービスを起動します。また、以降のリポート時にサービスが再起動されます。                                                       | 399 ページの「サービスインスタンスを有効にする方法」                  |
| 特定のサービスを再起動します。                         | サービスの停止と起動を1つのコマンドで行います。                                                                      | 400 ページの「サービスを再起動する方法」                        |
| 保守状態のサービスを復元します。                        | 保守状態のサービスをクリーンアップして再起動する方法を示します。                                                              | 400 ページの「保守状態のサービスを復元する方法」                    |
| スナップショットに戻します。                          | 以前のスナップショットを使用して、サービスの問題を修正します。                                                               | 401 ページの「別の SMF スナップショットに戻す方法」                |
| プロファイルを作成します。                           | 必要に応じてサービスを無効または有効にするために、プロファイルを作成します。                                                        | 402 ページの「SMF プロファイルを作成する方法」                   |
| プロファイルを適用します。                           | プロファイルの情報を使用して、必要に応じてサービスを無効または有効にします。                                                        | 403 ページの「SMF プロファイルを適用する方法」                   |
| netsservices コマンドを使用して、サービスとその設定を変更します。 | generic_limited.xml プロファイルまたは generic_open.xml プロファイルの情報を使用して、サービスを無効または有効にし、サービスの設定の変更も行います。 | 403 ページの「ネットワークに提供するサービスを generic*.xml で変更する」 |

## SMF サービスの管理

この節では、SMF サービスの管理について説明します。

## RBAC 権利プロファイルを使って SMF を管理する

RBAC 権利プロファイルを使用して root アクセス権を付与していないユーザーに、一部の SMF サービスの管理を許可することができます。権利プロファイルには、そのユーザーが実行できるコマンドを定義します。SMF のために次のプロファイルが作成されています。

- Service Management: サービスを追加、削除、または変更できます。
- Service Operator: 再起動や再表示など、サービスインスタンスの状態の変更を要求できます。

承認については、[smf\\_security\(5\)](#) のマニュアルページを参照してください。権利プロファイルを割り当てる手順については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「ユーザーの RBAC プロパティを変更する方法」を参照してください。

### ▼ サービスインスタンスを無効にする方法

サービスを無効にするには、次の手順に従います。サービスの状態変化はサービス設定リポジトリ内に記録されます。サービスがいったん無効になると、その無効な状態はリブート後も維持されます。サービスを実行中の状態に戻す唯一の方法は、そのサービスを有効にすることです。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 無効にするサービスに依存するサービスの有無を確認します。  
必要とするサービスがこのサービスに依存していた場合、このサービスを無効にできません。  

```
# svcs -D FMRI
```
- 3 サービスを無効にします。  

```
# svcadm disable FMRI
```

#### 例 19-7 rlogin サービスを無効にする

最初のコマンドの出力結果から、rlogin サービスに依存するサービスは存在しないことがわかります。この例の 2 番目のコマンドは、rlogin サービスを無効にしています。3 番目のコマンドの結果から、rlogin サービスインスタンスの状態が無効になっていることがわかります。

```
# svcs -D network/login:rlogin
# svcadm disable network/login:rlogin
STATE          STIME         FMRI
# svcs network/login:rlogin
STATE          STIME         FMRI
disabled      11:17:24     svc:/network/login:rlogin
```

## ▼ サービスインスタンスを有効にする方法

サービスを有効にするには、次の手順に従います。サービスの状態変化はサービス設定リポジトリ内に記録されます。サービスがいったん有効になると、そのサービスの依存関係に問題がない限り、その有効な状態はシステムのリブート後も維持されます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 サービスの依存関係に問題がないか確認します。  
依存するサービスが有効になっている場合、サービスの依存関係に問題はありませぬ。そうでない場合は、`svcadm enable -r FMRI` を使用して、すべての依存関係を再帰的に有効にします。

```
# svcs -l FMRI|grep enabled
```

- 3 サービスを有効にします。

```
# svcadm enable FMRI
```

### 例 19-8 rlogin サービスを有効にする

この例の 2 番目のコマンドは、`rlogin` サービスを有効にしています。3 番目のコマンドの結果から、`rlogin` サービスインスタンスの状態がオンラインになっていることがわかります。

```
# svcs -l network/login:rlogin|grep enabled
enabled      false
# svcadm enable network/login:rlogin
# svcs network/login:rlogin
STATE          STIME         FMRI
online        12:09:16     svc:/network/login:rlogin
```

### 例 19-9 シングルユーザーモードでサービスを有効にする

次のコマンドは `rpcbind` を有効にします。-t オプションは、サービスリポジトリを変更しないモードでサービスを一時的に起動します。このリポジトリにシングルユーザーモードで書き込むことはできません。-r オプションは、指定されたサービスのすべての依存関係を再帰的に有効にします。

```
# svcadm enable -rt rpc/bind
```

## ▼ サービスを再起動する方法

設定が変更されたなどの理由により現在実行中のサービスを再起動する必要が生じた場合、サービスの停止時と起動時に個々のコマンドを入力することなく、サービスの再起動を行えます。サービスの無効化と有効化を別々に行う必要があるのは、サービスの無効化後かつ有効化前に変更を反映する必要がある場合だけです。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 特定のサービスを再起動します。

```
# svcadm restart FMRI
```

## ▼ 保守状態のサービスを復元する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 そのサービスに依存するプロセスのうち、停止していないものが存在しないかどうかを確認します。

通常、サービスインスタンスが保守状態になっている場合、そのインスタンスに関連付けられたすべてのプロセスが停止しています。しかしながら、処理を進める前にそのことを確認する必要があります。次のコマンドを実行すると、特定のサービスインスタンスに関連付けられたすべてのプロセスが一覧表示されます。その際、各プロセスのPIDも表示されます。

```
# svcs -p FMRI
```

- 3 (省略可能)残っているプロセスをすべて強制終了します。

svcs コマンドで表示されたすべてのプロセスに対して、この手順を繰り返します。

```
# pkill -9 PID
```

- 4 必要であれば、サービスの設定を修復します。

`/var/svc/log` 内の対応するサービスログファイルを開き、エラーが発生していないか確認します。



- 5 サービスを復元します。

```
# svcadm clear FMRI
```

## ▼ 別の SMF スナップショットに戻す方法

サービスの設定が間違っている場合、正常に起動した最後のスナップショットに戻すことで問題を解決できます。この手順では、console-login サービスの以前のスナップショットを使用します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 svccfg コマンドを実行します。

```
# svccfg
svc:>
```

- a. 修正するサービスインスタンスを選択します。

---

注- インスタンスを完全に定義した FMRI を使用する必要があります。短縮形は使えません。

---

```
svc:> select system/console-login:default
svc:/system/console-login:default>
```

- b. 利用可能なスナップショットの一覧を生成します。

```
svc:/system/console-login:default> listsnap
initial
running
start
svc:/system/console-login:default>
```

- c. 戻し先として start スナップショットを選択します。

start スナップショットとは、サービスが正常に起動した最後のスナップショットのことです。

```
svc:/system/console-login:default> revert start
svc:/system/console-login:default>
```

- d. svccfg を終了します。

```
svc:/system/console-login:default> quit
#
```

- 3 サービス設定リポジトリ内の情報を更新します。  
この手順では、start スナップショットの設定情報に基づいてリポジトリを更新します。  

```
# svcadm refresh system/console-login
```
- 4 サービスインスタンスを再起動します。  

```
# svcadm restart system/console-login
```

## ▼ SMF プロファイルを作成する方法

プロファイルとは、SMF サービスの一覧とそれぞれを有効にするかどうかを示す XML ファイルのことです。プロファイルは、多くのサービスを一度に有効または無効にするために使用されます。すべてのサービスをプロファイルに含める必要はありません。効果的なプロファイルを作成するには、各プロファイルには有効または無効にする必要のあるサービスだけを含めるようにします。

- 1 プロファイルを作成します。  
この例では、svccfg コマンドを使用して、現在のシステムで有効になっているサービスと無効になっているサービスを反映するプロファイルを作成します。代わりに、既存のプロファイルのコピーを作成し、それを編集することもできます。  

```
# svccfg extract> profile.xml
```

  
Oracle Solaris JumpStart を使用する場合、同一のシステムが多数ある場合、またはあとで復元できるようにシステムの設定のアーカイブを作成する場合は、この手順を使用して単一の SMF プロファイルを作成することができます。
- 2 profile.xml ファイルを編集して、必要な変更を加えます。
  - a. service\_bundle 宣言内のプロファイルの名前を変更します。  
この例では、profile という名前に変更しています。

```
# cat profile.xml
...
<service_bundle type='profile' name='profile'
  xmlns::xi='http://www.w3.org/2003/XInclude'
  ...
```

- b. このプロファイルで管理すべきでないサービスをすべて削除します。  
各サービスについて、サービスを説明する 3 行を削除します。各サービスの説明は、<service で始まり、</service で終わります。この例は、LDAP クライアントサービスの行を示しています。

```
# cat profile.xml
...
<service name='network/ldap/client' version='1' type='service'>
  <instance name='default' enabled='true' />
</service>
```

- c. このプロファイルで管理すべきサービスをすべて追加します。  
上記の3行の構文を使用して各サービスを定義する必要があります。
- d. 必要に応じて、選択したサービスの **enabled** フラグを変更します。  
この例では、sendmail サービスを無効にしています。

```
# cat profile.xml
...
<service name='network/smtp' version='1' type='service'>
  <instance name='sendmail' enabled='false' />
</service>
...
```

- 3 必要に応じて、この新しいプロファイルを適用します。  
手順については、403 ページの「SMF プロファイルを適用する方法」を参照してください。

## ▼ SMF プロファイルを適用する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 プロファイルを適用します。  
この例では、profile.xml プロファイルを使用しています。

```
# svccfg apply profile.xml
```

---

注-generic\_limited\_net.xml と generic\_open.xml を切り替えるための具体的な手順、およびこの切り替えを行うときに適用する必要のあるプロパティについては、403 ページの「ネットワークに提供するサービスを generic\*.xml で変更する」を参照してください。

---

## ▼ ネットワークに提供するサービスを generic\*.xml で変更する

netservices コマンドを使用すると、ネットワークに最小限のシステムサービスを公開するか、従来の(以前の Solaris リリースと同じ)サービスを公開するかを切り替えることができます。この切り替えは、generic\_limited.xml プロファイルと generic\_open.xml プロファイルによって行われます。また、このコマンドによって一部のサービスのプロパティが変更され、それによってサービスがローカル専用モードや従来モードに制限されます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 `netservices` コマンドを実行します。  
この例では、`open`、つまり従来のネットワークサービスの公開を選択しています。  

```
# /usr/sbin/netservices open
```

#### 例 19-10 ネットワークサービスの公開を制限する

このコマンドは、一部のサービスをローカルモードで実行するようにプロパティを変更し、有効にするサービスを `generic_limited_net` プロファイルによって制限します。このコマンドは、`generic_open.xml` プロファイルが適用されている場合のみ使用するようにしてください。

```
# /usr/sbin/netservices limited
```

## SMF サービスの設定

### ▼ サービスを変更する方法

次の手順は、`inetd` サービスによって管理されていないサービスの設定を変更する方法を示します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 必要に応じて設定ファイルを変更します。  
多くのサービスは、起動方法などの設定情報を定義するための設定ファイルを1つ以上持っています。それらのファイルはサービス実行中でも変更可能です。ファイルの内容がチェックされるのはサービス起動時です。
- 3 サービスを再起動します。  

```
# svcadm restart FMRI
```

## 例 19-11 NFS ファイルシステムを共有する

NFS サービスを使って特定のファイルシステムを共有するには、そのファイルシステムを `/etc/dfs/dfstab` ファイル内に定義したあと、NFS サービスを再起動する必要があります。この例は、`dfstab` ファイルの内容とサービスの起動方法を示しています。

```
# cat /etc/dfs/dfstab
:
:
share -F nfs -o rw /export/home
# svcadm restart svc:/network/nfs/server
```

## ▼ サービスの環境変数を変更する方法

この手順は、デバッグに役立つよう `cron` 環境変数を変更する方法を示します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。

- 2 サービスが実行されていることを確認します。

```
# svcs system/cron
STATE      STIME      FMRI
online     Dec_04     svc:/system/cron:default
```

- 3 環境変数を設定します。

次の例では、環境変数 `UMEM_DEBUG` および `LD_PRELOAD` を設定しています。setenv サブコマンドについては、[svccfg\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

```
# svccfg -s system/cron:default setenv UMEM_DEBUG default
# svccfg -s system/cron:default setenv LD_PRELOAD libumem.so
```

- 4 サービスの再表示と再起動を行います。

```
# svcadm refresh system/cron
# svcadm restart system/cron
```

- 5 正しく変更されたことを確認します。

```
# pargs -e 'pgrep -f /usr/sbin/cron'
100657: /usr/sbin/cron
envp[0]: LOGNAME=root
envp[1]: LD_PRELOAD=libumem.so
envp[2]: PATH=/usr/sbin:/usr/bin
envp[3]: SMF_FMRI=svc:/system/cron:default
envp[4]: SMF_METHOD=/lib/svc/method/svc-cron
envp[5]: SMF_RESTARTER=svc:/system/svc/restarter:default
envp[6]: TZ=GB
```

```
envp[7]: UMEM_DEBUG=default  
#
```

## ▼ inetd 制御サービスのプロパティを変更する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 特定のサービスのプロパティを一覧表示します。  
このコマンドを実行すると、FMRI で指定されたサービスのすべてのプロパティが表示されます。  

```
# inetadm -l FMRI
```
- 3 サービスのプロパティを変更します。  
inetd 制御サービスの各プロパティは、プロパティ名とその値によって定義されます。値を指定せずにプロパティ名を指定した場合、そのプロパティはデフォルト値にリセットされます。特定のサービスのプロパティの詳細については、そのサービスのマニュアルページを参照してください。  

```
# inetadm -m FMRI property-name=value
```
- 4 プロパティが変更されたことを確認します。  
プロパティを再度一覧表示し、適切に変更されていることを確認します。  

```
# inetadm -l FMRI
```
- 5 変更が適用されていることを確認します。  
プロパティに対する変更が期待どおりに適用されていることを確認します。

### 例 19-12 telnet の tcp\_trace プロパティを変更する

次の例は、telnet の tcp\_trace プロパティを true に設定する方法を示しています。telnet コマンドの実行後の syslog 出力の結果から、変更が適用されていることがわかります。

```
# inetadm -l svc:/network/telnet:default  
SCOPE      NAME=VALUE  
           name="telnet"  
.  
.  
default   inherit_env=TRUE  
default   tcp_trace=FALSE
```

```

default tcp_wrappers=FALSE
# inetadm -m svc:/network/telnet:default tcp_trace=TRUE
# inetadm -l svc:/network/telnet:default
SCOPE   NAME=VALUE
        name="telnet"
.
.
default inherit_env=TRUE
        tcp_trace=TRUE
default tcp_wrappers=FALSE
# telnet localhost
Trying 127.0.0.1...
Connected to localhost.
Escape character is '^'.
login: root
Password:
Last login: Mon Jun 21 05:55:45 on console
Sun Microsystems Inc. SunOS 5.10      s10_57   May 2004
# ^D
Connection to localhost closed by foreign host.
# tail -1 /var/adm/messages
Jun 21 06:04:57 yellow-19 inetd[100308]: [ID 317013 daemon.notice] telnet[100625]
    from 127.0.0.1 32802

```

## ▼ inetd 制御サービスのコマンド行引数を変更する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理\(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBACの構成\(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 特定のサービスの `exec` プロパティを表示します。  
このコマンドを実行すると、FMRI で指定されたサービスのすべてのプロパティが表示されます。`grep` コマンドを追加することで、サービスの `exec` プロパティに出力を制限しています。  

```
# inetadm -l FMRI|grep exec
```
- 3 サービスの `exec` プロパティを変更します。  
`exec` プロパティに設定される `command-syntax` は、サービス起動時に実行されるコマンド文字列を定義します。  

```
# inetadm -m FMRI exec="command-syntax"
"
```
- 4 プロパティが変更されたことを確認します。  
プロパティを再度一覧表示し、適切に変更されていることを確認します。  

```
# inetadm -l FMRI
```

### 例 19-13 ftp コマンドに接続ロギング (-l) オプションを追加する

この例では、ftp デーモンの起動オプションに -l オプションを追加しています。この変更が適用されたことを確かめるには、ftp ログインセッション完了後に syslog 出力を調べます。

```
# inetadm -l svc:/network/ftp:default | grep exec
      exec="/usr/sbin/in.ftpd -a"
# inetadm -m svc:/network/ftp:default exec="/usr/sbin/in.ftpd -a -l"
# inetadm -l svc:/network/ftp:default
SCOPE   NAME=VALUE
        name="ftp"
        endpoint_type="stream"
        proto="tcp6"
        isrpc=FALSE
        wait=FALSE
        exec="/usr/sbin/in.ftpd -a -l"
.
.
# ftp localhost
Connected to localhost.
220 yellow-19 FTP server ready.
Name (localhost:root): mylogin
331 Password required for mylogin.
Password:
230 User mylogin logged in.
Remote system type is UNIX.
Using binary mode to transfer files.
ftp> quit
221-You have transferred 0 bytes in 0 files.
221-Total traffic for this session was 236 bytes in 0 transfers.
221-Thank you for using the FTP service on yellow-19.
221 Goodbye.
# tail -2 /var/adm/messages
Jun 21 06:54:33 yellow-19 ftpd[100773]: [ID 124999 daemon.info] FTP LOGIN FROM localhost
[127.0.0.1], mylogin
Jun 21 06:54:38 yellow-19 ftpd[100773]: [ID 528697 daemon.info] FTP session closed
```

## ▼ inetd.conf エントリを変換する方法

次の手順では、inetd.conf エントリを SMF サービス目録に変換します。inetd に依存する Sun 以外のアプリケーションをシステムに追加するたびに、この手順を実行する必要があります。また、/etc/inetd.conf 内のエントリに設定変更を行う必要がある場合にも、この手順を実行してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBAC の構成(作業マップ)」を参照してください。



- 2 `inetd.conf` エントリを変換します。

`inetconv` コマンドは、選択されたファイル内の各エントリをサービス目録に変換します。

```
# inetconv -i filename
```

例 19-14 `/etc/inet/inetd.conf` エントリを SMF サービス目録に変換する

```
# inetconv -i /etc/inet/inetd.conf
```

## 実行制御スクリプトの使用 (作業マップ)

| 作業                | 説明                                                       | 参照先                                         |
|-------------------|----------------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| サービスを起動または停止します。  | 実行制御スクリプトを使用してサービスを起動または停止します。                           | 409 ページの「実行制御スクリプトを使用して従来のサービスを起動または停止する方法」 |
| 実行制御スクリプトを追加します。  | 実行制御スクリプトを作成し、それを <code>/etc/init.d</code> ディレクトリに追加します。 | 410 ページの「実行制御スクリプトを追加する方法」                  |
| 実行制御スクリプトを無効にします。 | ファイル名を変更することで実行制御スクリプトを無効にします。                           | 411 ページの「実行制御スクリプトを無効にする方法」                 |

## 実行制御スクリプトの使用

### ▼ 実行制御スクリプトを使用して従来のサービスを起動または停止する方法

実行レベルごとに対応するスクリプトを持つことの利点は、`/etc/init.d` ディレクトリ内の個々のスクリプトを実行することによって、システムの実行レベルを変更しないで(現在の実行レベルの) システムサービスを停止できる点です。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。

- 2 システムサービスを停止します。

```
# /etc/init.d/filename
stop
```

- 3 システムサービスを再開します。

```
# /etc/init.d/filename
start
```

- 4 サービスが停止または起動されたことを確認します。

```
# pgrep -f service
```

### 例 19-15 実行制御スクリプトを使用してサービスを起動または停止する

NFS サーバーデーモンを停止するには、次のように入力します。

```
# /etc/init.d/nfs.server stop
# pgrep -f nfs
```

そして、NFS サーバーデーモンを再開するには、次のように入力します。

```
# /etc/init.d/nfs.server start
# pgrep -f nfs
101773
101750
102053
101748
101793
102114
# pgrep -f nfs -d, | xargs ps -fp
      UID      PID  PPID  C   STIME TTY          TIME CMD
daemon 101748    1    0   Sep 01 ?      0:06 /usr/lib/nfs/nfsmapid
daemon 101750    1    0   Sep 01 ?     26:27 /usr/lib/nfs/lockd
daemon 101773    1    0   Sep 01 ?      5:27 /usr/lib/nfs/statd
   root 101793    1    0   Sep 01 ?     19:42 /usr/lib/nfs/mountd
daemon 102053    1    0   Sep 01 ?    2270:37 /usr/lib/nfs/nfsd
daemon 102114    1    0   Sep 01 ?      0:35 /usr/lib/nfs/nfs4cbd
```

## ▼ 実行制御スクリプトを追加する方法

サービスを起動または停止するための実行制御スクリプトを追加するには、そのスクリプトを `/etc/init.d` ディレクトリにコピーします。次に、サービスを起動または停止する `rcn.d` ディレクトリ内にリンクを作成します。

実行制御スクリプトの命名法の詳細については、`/etc/rcn.d` ディレクトリ内の README ファイルを参照してください。次に、実行制御スクリプトを追加する方法について説明します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBAC の構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 スクリプトを `/etc/init.d` ディレクトリに追加します。
 

```
# cp filename/etc/init.d
# chmod 0744 /etc/init.d/filename
# chown root:sys /etc/init.d/filename
```
- 3 適切な `rcn.d` ディレクトリへのリンクを作成します。
 

```
# cd /etc/init.d
# ln filename /etc/rc2.d/Snnfilename
# ln filename /etc/rcn.d/Knnfilename
```
- 4 スクリプトのリンクが指定のディレクトリ内にあることを確認します。
 

```
# ls /etc/init.d/*filename /etc/rc2.d/*filename /etc/rcn.d/*filename
```

### 例 19-16 実行制御スクリプトを追加する

次の例は、`xyz` サービスの実行制御スクリプトを追加する方法を示しています。

```
# cp xyz /etc/init.d
# chmod 0744 /etc/init.d/xyz
# chown root:sys /etc/init.d/xyz
# cd /etc/init.d
# ln xyz /etc/rc2.d/S99xyz
# ln xyz /etc/rc0.d/K99xyz
# ls /etc/init.d/*xyz /etc/rc2.d/*xyz /etc/rc0.d/*xyz
```

## ▼ 実行制御スクリプトを無効にする方法

実行制御スクリプトを無効にするには、ファイル名の先頭に下線 (`_`) を付けてファイル名を変更します。下線またはドット (`.`) で始まるファイルは実行されません。接尾辞を追加してファイルをコピーすると、両方のファイルが実行されます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理 \(セキュリティサービス\)](#)』の「[RBAC の構成 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。
- 2 新しいファイルの先頭に下線 (`_`) を付けて、スクリプト名を変更します。
 

```
# cd /etc/rcn.d
# mv filename_filename
```
- 3 スクリプトの名前が変更されたことを確認します。
 

```
# ls _*
_filename
```

### 例 19-17 実行制御スクリプトを無効にする

次の例は、`S99datainit` スクリプトの名前を変更する方法を示しています。

```
# cd /etc/rc2.d
# mv S99datainit _S99datainit
# ls _*
_S99datainit
```

## サービス管理機能のトラブルシューティング

### ▼ 起動していないサービスをデバッグする

この手順では、印刷サービスが無効になっています。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 ハングしたサービスに関する情報を要求します。

```
# svcs -xv
svc:/application/print/server:default (LP Print Service)
  State: disabled since Wed 13 Oct 2004 02:20:37 PM PDT
Reason: Disabled by an administrator.
  See: http://sun.com/msg/SMF-8000-05
  See: man -M /usr/share/man -s 1M lpsched
Impact: 2 services are not running:
  svc:/application/print/rfc1179:default
  svc:/application/print/ipp-listener:default
```

-x オプションを指定すると、影響を受けたサービスインスタンスに関する情報も表示されます。

- 3 サービスを有効にします。

```
# svcadm enable application/print/server
```

### ▼ 破壊されたりリポジトリを修復する方法

この手順は、破壊されたりリポジトリをデフォルトのリポジトリと交換する方法を示しています。リポジトリデーモン `svc.configd` が起動すると、設定リポジトリの整合性チェックが行われます。このリポジトリは、`/etc/svc/repository.db` に格納されています。このリポジトリは、次のいずれかが原因で破壊されることがあります。

- ディスク障害
- ハードウェアのバグ
- ソフトウェアのバグ
- 過失によるファイルの上書き

整合性チェックに失敗すると、`svc.configd` デーモンは次のようなメッセージをコンソールに書き出します。

```
svc.configd: smf(5) database integrity check of:

    /etc/svc/repository.db

failed. The database might be damaged or a media error might have
prevented it from being verified. Additional information useful to
your service provider is in:

    /etc/svc/volatile/db_errors

The system will not be able to boot until you have restored a working
database. svc.startd(1M) will provide a sulogin(1M) prompt for recovery
purposes. The command:

    /lib/svc/bin/restore_repository

can be run to restore a backup version of your repository. See
http://sun.com/msg/SMF-8000-MY for more information.
```

その後 `svc.startd` デーモンが終了し、`sulogin` が起動して保守作業を行えるようになります。

- 1 `sulogin` プロンプトで `root` パスワードを入力します。`sulogin` では、`root` ユーザーはシステム保守モードに入ってシステムを修復できます。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
# /lib/svc/bin/restore_repository
```

このコマンドを実行すると、破壊されていないバックアップの復元に必要な手順が示されます。SMF では、システムの重要な局面でリポジトリのバックアップが自動的に作成されます。詳細は、[385 ページの「SMF リポジトリのバックアップ」](#)を参照してください。

`/lib/svc/bin/restore_repository` コマンドが起動すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
Repository Restore utility
See http://sun.com/msg/SMF-8000-MY for more information on the use of
this script to restore backup copies of the smf(5) repository.
```

```
If there are any problems which need human intervention, this script
will give instructions and then exit back to your shell.
```

```
Note that upon full completion of this script, the system will be
rebooted using reboot(1M), which will interrupt any active services.
```

復元するシステムがローカルゾーンでない場合は、読み取り権と書き込み権を付けて `/` ファイルシステムおよび `/usr` ファイルシステムをマウントし直しデータベースを復元する方法が表示されます。これらの説明を表示したあと、スクリプトは終了します。エラーの発生に特に注意しながら、これらの説明に従います。

書き込み権を付けてルート (/) ファイルシステムをマウントしたあと、またはシステムがローカルゾーンである場合は、復元するリポジトリのバックアップを選択するよう求められます。

The following backups of /etc/svc/repository.db exists, from oldest to newest:

... list of backups ...

バックアップには、バックアップのタイプとバックアップが作成された時間に基づいて名前が付けられています。boot で始まっているのは、システムのブート後、リポジトリに対して最初の変更が行われる前に作成されたバックアップです。manifest\_import で始まっているのは、svc:/system/manifest-import:default のプロセス終了後に作成されたバックアップです。バックアップ時間は、YYYYMMDD\_HHMMSS 形式で記録されます。

### 3 適切な応答を入力します。

通常は、最新のバックアップオプションを選択します。

Please enter one of:

- 1) boot, for the most recent post-boot backup
- 2) manifest\_import, for the most recent manifest\_import backup.
- 3) a specific backup repository from the above list
- 4) -seed-, the initial starting repository. (All customizations will be lost.)
- 5) -quit-, to cancel.

Enter response [boot]:

復元するバックアップを指定しないで Enter キーを押した場合は、[] で囲まれたデフォルトの応答が選択されます。-quit- を選択すると、restore\_repository スクリプトが終了して、シェルスクリプトに戻ります。

---

注 --seed- を選択すると、seed リポジトリが復元されます。このリポジトリは、初期インストールとアップグレード時に使用する目的で作成されたものです。seed リポジトリを回復の目的で使用するのには、最後の手段にしてください。

---

復元するバックアップを選択すると、妥当性検査が行われ、その整合性がチェックされます。なんらかの問題があると、restore\_repository コマンドによってエラーメッセージが表示され、別のバックアップを選択するよう促されます。有効なバックアップを選択すると、次の情報が表示され、最終確認を入力するよう促されます。

After confirmation, the following steps will be taken:

```
svc.startd(1M) and svc.configd(1M) will be quiesced, if running.
/etc/svc/repository.db
-- renamed --> /etc/svc/repository.db_old_YYYYMMDD_HHMMSS
/etc/svc/volatile/db_errors
-- copied --> /etc/svc/repository.db_old_YYYYMMDD_HHMMSS_errors
```

```
repository_to_restore
-- copied --> /etc/svc/repository.db
and the system will be rebooted with reboot(1M).
```

Proceed [yes/no]?

- 4 yes と入力して障害を修復します。

restore\_repository コマンドが表示されたアクションをすべて実行すると、システムがリブートします。

## ▼ どのサービスも起動しないでブートする方法

サービスの起動に関する問題が発生した場合、ブート時にシステムがハングアップする可能性があります。この手順は、そうした問題のトラブルシューティングを行う方法を示しています。

- 1 どのサービスも起動しないでブートします。

このコマンドを実行すると、svc.startd デーモンはすべてのサービスを一時的に無効にし、コンソール上で sulogin を起動します。

```
ok boot -m milestone=none
```

- 2 システムに root としてログインします。

- 3 すべてのサービスを有効にします。

```
# svcadm milestone all
```

- 4 ブートプロセスがどこでハングアップするのかを確認します。

ブートプロセスがハングアップしたら、動作していないサービスを確認するために、svcs -a を実行します。/var/svc/log のログファイル内でエラーメッセージの有無を確認します。

- 5 問題が解決したら、すべてのサービスが起動していることを確認します。

- a. 必要なサービスがすべてオンラインになっていることを確認します。

```
# svcs -x
```

- b. console-login サービスの依存関係に問題がないことを確認します。

このコマンドを使えば、コンソール上の login プロセスが実行されるかどうかを確認できます。

```
# svcs -l system/console-login:default
```

- 6 通常のブートプロセスを継続します。

## ▼ ブート中に `system/filesystem/local:default` サービスで障害が発生した場合に `sulogin` プロンプトを強制的に表示する方法

Solaris OS のブートに必要なでないローカルファイルシステムは、`svc:/system/filesystem/local:default` サービスによってマウントされます。これらのファイルシステムのいずれかがマウントできない場合、このサービスは保守状態になります。システムの起動は続行され、`filesystem/local` に依存しないサービスは起動されます。依存関係を介して起動されるサービスで、オンラインになるために `filesystem/local` を必要とするものは、起動されません。

サービスで障害が発生した場合に、システムの起動の続行を許可する代わりに、ただちに `sulogin` プロンプトを表示するようシステムの設定を変更するには、次の手順に従ってください。

- 1 `system/console-login` サービスを変更します。

```
# svccfg -s svc:/system/console-login
svc:/system/console-login> addpg site,filesystem-local dependency
svc:/system/console-login> setprop site,filesystem-local/entities = fmri: svc:/system/filesystem/local

svc:/system/console-login> setprop site,filesystem-local/grouping = astring: require_all

svc:/system/console-login> setprop site,filesystem-local/restart_on = astring: none

svc:/system/console-login> setprop site,filesystem-local/type = astring: service

svc:/system/console-login> end
```

- 2 サービスを再表示します。

```
# svcadm refresh console-login
```

### 例 19-18 Oracle Solaris JumpStart を使用して `sulogin` プロンプトを強制的に表示する

次に示すコマンドをスクリプトに保存し、`/etc/rcS.d/S01site-customfs` として保存します。

```
#!/bin/sh
#
# This script adds a dependency from console-login -> filesystem/local
# This forces the system to stop the boot process and drop to an sulogin prompt
# if any file system in filesystem/local fails to mount.

PATH=/usr/sbin:/usr/bin
export PATH

svccfg -s svc:/system/console-login << EOF
addpg site,filesystem-local dependency
```



```
setprop site,filesystem-local/entities = fmri: svc:/system/filesystem/local
setprop site,filesystem-local/grouping = astring: require_all
setprop site,filesystem-local/restart_on = astring: none
setprop site,filesystem-local/type = astring: service
EOF
```

```
svcadm refresh svc:/system/console-login
```

```
[ -f /etc/rcS.d/S01site-customfs ] &&
  rm -f /etc/rcS.d/S01site-customfs
```

**注意事項** system/filesystem/local:default サービスで障害が発生したときは、svcs -vx コマンドを使用して障害を特定するようにしてください。障害が修正されたら、次のコマンドでエラー状態をクリアし、システムのブートを続行できるようにします。

```
svcadm clear filesystem/local。
```



## ソフトウェアの管理 (概要)

---

ソフトウェアの管理には、スタンドアロンシステム、サーバー、およびそのクライアントへのソフトウェアの追加や削除が含まれます。この章では、ソフトウェアのインストールや管理に使用できる各種ツールについて説明します。

この章では、新しいシステムでの Oracle Solaris OS のインストールについては説明しません。また、新バージョンの Oracle Solaris OS のインストールやそれへのアップグレードについても説明しません。Oracle Solaris OS のインストールやアップグレードについては、『Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド (基本編)』を参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- 420 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムでのソフトウェア管理における新機能」
- 423 ページの「ソフトウェア管理作業についての参照先」
- 423 ページの「ソフトウェアパッケージの概要」
- 426 ページの「ソフトウェアパッケージを管理するためのツール」
- 427 ページの「ソフトウェアパッケージの追加または削除 (pkgadd)」
- 428 ページの「ソフトウェアパッケージの追加にあたっての重要な注意点 (pkgadd)」
- 428 ページの「パッケージの削除に関するガイドライン (pkgrm)」
- 429 ページの「ゾーンに対応していない Solaris リリースでソフトウェアパッケージおよびパッチを追加および削除する際の制限」
- 429 ページの「パッケージ追加時のユーザーの対話操作を省略する (pkgadd)」

ソフトウェアを管理する手順については、第 21 章「Oracle Solaris システム管理ツールによるソフトウェアの管理 (手順)」および第 22 章「Oracle Solaris パッケージコマンドによるソフトウェアの管理 (手順)」を参照してください。

Oracle Solaris ゾーンがインストールされているシステムでソフトウェアを管理する方法については、『Oracle Solaris のシステム管理 (Oracle Solaris コンテナ: 資源管理と Oracle Solaris ゾーン)』の第 26 章「ゾーンがインストールされている Solaris システムでのパッケージとパッチの追加および削除 (手順)」を参照してください。

# Oracle Solaris オペレーティングシステムでのソフトウェア管理における新機能

この節では、この Oracle Solaris リリースの新しいソフトウェア管理機能について説明します。

新機能の完全な一覧や各 Oracle Solaris リリースの説明については、『[Oracle Solaris 10 9/10 の新機能](#)』を参照してください。

## Oracle Solaris 自動登録

**Oracle Solaris 10 9/10:** 自動登録は、目録作成およびサポートの目的で、お使いのシステムの構成データを収集して Oracle Product Registration System に自動的に登録を行う、組み込みメカニズムです。特権システム管理者は `regadm` コマンドを使用して、自動登録機能を管理したり、インストールやアップグレードプロセスとは無関係にシステムを明示的に登録したりすることができます。

詳細は、[第 17 章「Oracle Solaris 自動登録コマンド regadm の操作\(手順\)」](#)を参照してください。

## Oracle Solaris ゾーンをサポートするためのパッケージおよびパッチツールの拡張

**Oracle Solaris 10 10/09:** このリリースから、複数の非大域ゾーンがインストールされているシステムをサポートするために、パッケージおよびパッチツールに対して次の拡張が行われています。

- ゾーンの並列パッチ

ゾーンの並列パッチ機能は、標準の Oracle Solaris 10 パッチ適用ツールを強化して、非大域ゾーンに並列してパッチを適用できるようにします。この機能拡張により、システムのパッチにかかる時間が短縮され、複数の非大域ゾーンがシステムにインストールされている場合のパッチ処理のパフォーマンスが向上します。ゾーンは分離された環境のため、複数のゾーンに対する並列パッチを安全に行うことができます。この機能は、疎ルートゾーンおよび完全ルートゾーンの両方に適用されます。

これらの機能強化は、主に `patchadd` および `patchrm` コマンドに対する変更によるものです。新しい構成ファイル `/etc/patch/pdo.conf` は、並列してパッチするゾーンの数を定義する数値を指定するように変更することができます。

---

注 - Solaris 10 10/09 リリース以上を実行していない場合は、この機能はパッチ 119254-66 以降のリビジョン (SPARC) および 119255-66 以降のリビジョン (x86) で実装されます。これまでどおり、大域ゾーンには、非大域ゾーンよりも前にパッチが適用されます。

---

詳細は、[patchadd\(1M\)](#) と [patchrm\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- **SVr4** パッケージコマンドのターボチャージ

この機能は、SVr4 パッケージコマンドを使用して、Solaris OS のインストール、Solaris Live Upgrade の使用、または非大域ゾーンのインストールにかかる時間を短縮します。この機能は無効にできません。

ゾーン環境でのパッケージおよびパッチツールの使用をサポートするこれらの機能強化の詳細については、次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Solaris のシステム管理 (Oracle Solaris コンテナ: 資源管理と Oracle Solaris ゾーン)』の第 26 章「ゾーンがインストールされている Solaris システムでのパッケージとパッチの追加および削除 (手順)」
- 『Oracle Solaris のシステム管理 (Oracle Solaris コンテナ: 資源管理と Oracle Solaris ゾーン)』の第 23 章「非大域ゾーンの移動と移行 (手順)」
- 『Oracle Solaris のシステム管理 (Oracle Solaris コンテナ: 資源管理と Oracle Solaris ゾーン)』の第 29 章「非大域ゾーンにインストールされている Solaris 10 システムのアップグレード」

## 遅延起動パッチ

パッチツールが大規模なパッチを処理できるように変更されました。パッチ 119254-42 および 119255-42 以降、パッチインストールコマンド `patchadd` および `patchrm` が変更され、新しい機能を提供する特定のパッチの処理方法が変わりました。この変更は、これらのパッチをどの Oracle Solaris OS にインストールする場合にも影響を与えます。これらの「遅延起動」パッチによって、機能パッチで提供される大規模な変更の処理能力が向上します。

詳細は、<http://www.sun.com/bigadmin/sundocs/articles/patch-wn.jsp> を参照してください。

## Oracle Solaris OS に組み込まれた Common Agent Container

Common Agent Container は、Java 管理アプリケーションのコンテナを実装する、スタンドアロンの Java プログラムです。このプログラムが提供する管理インフラストラ

クチャーは、Java Management Extensions (JMX) および Java Dynamic Management Kit (Java DMK) ベースの管理機能向けに設計されています。このソフトウェアは SUNWcacaoort パッケージによってインストールされ、`/usr/lib/cacao` ディレクトリに置かれます。

通常、このコンテナは表示されません。

ただし、次の2つの場合は、コンテナデーモンとの対話が必要になることがあります。

- Common Agent Container 用に予約されているネットワークポートを、別のアプリケーションが使用しようとしている場合。
- 証明書ストアが危殆化した場合。この衝突が発生した場合は、Common Agent Container 証明書鍵の再生成が必要になることがあります。

これらの問題のトラブルシューティングの方法については、『Solaris のシステム管理 (上級編)』の「Oracle Solaris OS での共通エージェントコンテナの問題解決」を参照してください。

## patchadd -M コマンドが複数のパッチを処理する方法の改善

**Oracle Solaris 10:** このリリース以降、`patchadd -M` コマンドの機能が強化され、複数のパッチおよびパッチ間のあらゆる依存関係をもっと効果的かつ効率的に処理できるようになりました。このため、`patchadd` コマンドの使用時に、パッチ ID を番号順に指定する必要がなくなりました。

パッチ ID を指定しないで `patchadd -M` コマンドを使用した場合でも、ディレクトリ内のすべてのパッチが自動的にシステムにインストールされます。特定のパッチをインストールする場合は、`patchadd -M` コマンドを使用するときそのパッチ ID を指定する必要があります。

詳細は、[patchadd\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## パッケージおよびパッチツールの拡張

**Oracle Solaris 10:** Oracle Solaris 10 では、パッケージツールとパッチツールが拡張されており、パフォーマンスの向上と機能の強化が図られています。

そうした拡張の一部として、ファイルをパッケージに対応付けするための新しいオプションが、`pkgchk` コマンドに追加されました。ファイルとパッケージ間のマッピングを行うには、`grep -pattern/var/sadm/install/contents` の代わりに `pkgchk P` オプションを使用します。`-P` オプションでは部分パスが使えます。このオプションを `-l`

オプションと組み合わせると、指定した部分パスを含むファイルの情報が一覧表示されます。詳細は、471 ページの「インストール済みオブジェクトの整合性を検査する方法 (pkgchk -p、pkgchk -P)」と、pkgchk(1M) のマニュアルページを参照してください。

## ソフトウェア管理作業についての参照先

ソフトウェアを管理する手順については、次の表を参照してください。

| ソフトウェア管理作業                   | 詳細                                                                                                    |
|------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Oracle Solaris 10 のインストール    | 『Oracle Solaris 10 9/10 インストールガイド (基本編)』                                                              |
| インストール後のソフトウェアパッケージの追加または削除  | 第 21 章「Oracle Solaris システム管理ツールによるソフトウェアの管理 (手順)」および第 22 章「Oracle Solaris パッケージコマンドによるソフトウェアの管理 (手順)」 |
| インストール後の Solaris パッチの追加または削除 | 478 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムでのパッチ管理」                                                          |
| ソフトウェアパッケージの問題のトラブルシューティング   | 『Solaris のシステム管理 (上級編)』の第 21 章「ソフトウェアパッケージで発生する問題の解決 (手順)」                                            |

## ソフトウェアパッケージの概要

ソフトウェア管理には、ソフトウェア製品のインストールと削除が含まれます。Sun および Sun 以外の ISV は、ソフトウェアを 1 つ以上の「パッケージ」の集まりとして提供します。

「パッケージング」という用語は一般に、ソフトウェア製品が使用されるシステムにその製品を配布してインストールする方法を指します。パッケージは、定義済みフォーマットによるファイルとディレクトリの集まりです。このフォーマットは、アプリケーションバイナリインタフェース (ABI) に準拠します。ABI は、System V インタフェース定義を補足するものです。Solaris OS には、このフォーマットを解釈し、パッケージをインストールまたは削除したり、パッケージインストールを検査したりする方法を提供する 1 組のユーティリティがあります。

「パッチ」とは、Solaris OS 内またはその他のサポート対象ソフトウェア内の既知または潜在的な問題に対する修正をまとめたものです。また、パッチは、特定のソフトウェアリリースに対する新機能や機能拡張の提供も行います。パッチは、既存のファイルやディレクトリを置換または更新するファイルやディレクトリから構成されます。ほとんどの Solaris パッチは、一連の疎パッケージとして提供されます。

「疎パッケージ」には、そのパッケージが Solaris ディストリビューションの一部として初めて提供されたあとで変更されたオブジェクトのみが含まれます。疎パッケージには、ソフトウェア更新を提供するために完全なパッケージとして再配

布した場合よりも小さなパッチが収められています。また、疎パッケージとして提供すると、顧客の環境に対する変更も最小限に抑えられます。パッチの詳細については、478 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムでのパッチ管理」を参照してください。

## 署名付きのパッケージ、パッチ、およびソフトウェア更新

パッケージには、デジタル署名を含めることができます。有効なデジタル署名付きのパッケージは、署名が適用された以降はパッケージの変更が行われていないことを保証します。署名付きパッケージを使用すると、パッケージをシステムに追加する前にデジタル署名を検証できるため、パッケージを安全にダウンロードまたは追加できます。

同じことが、署名付きパッチにも言えます。有効なデジタル署名付きのパッチは、署名が適用された以降はパッチの変更が行われていないことを保証します。署名付きパッチを使用すると、パッチをシステムに適用する前にデジタル署名を検証できるため、パッチを安全にダウンロードまたは適用できます。

署名付きパッチをシステムに「適用」する方法の詳細については、481 ページの「[patchadd コマンドによるパッチの管理 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

署名付きパッケージの作成方法については、『[アプリケーションパッケージ開発者ガイド](#)』を参照してください。

署名付きパッケージは、デジタル署名が含まれる点以外は、署名なしパッケージとまったく同一です。このパッケージのインストール、照会、または削除は、既存の Solaris パッケージツールを使って行うことができます。また、署名付きパッケージと署名なしパッケージは、バイナリレベルで互換性があります。

`pkgadd` と `patchadd` を使ってデジタル署名付きのパッケージまたはパッチをシステムに追加するには、信頼される証明書を使ってパッケージキーストアを設定しておく必要があります。これらの証明書は、パッケージやパッチ上のデジタル署名の有効性を確認する際に使用されます。

Oracle の証明書をシステムのパッケージキーストアにインポートするときに特別なパスワードを使用することで、パッケージキーストアへのアクセスを保護できます。

証明書を使って署名付きのパッケージとパッチを検証する手順については、[http://download.oracle.com/docs/cd/E17476\\_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html](http://download.oracle.com/docs/cd/E17476_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html) を参照してください。

次では、署名付きのパッケージおよびパッチに関する一般的な用語を説明します。



- キーストア 証明書と鍵を格納するためのリポジトリ。それらの情報が必要になると、このリポジトリが検索されます。
- Java キーストア - Solaris リリースでデフォルトでインストールされる証明書のリポジトリ。Java キーストアは通常、`/usr/j2se/jre/lib/security` ディレクトリに格納されます。
  - パッケージキーストア - 署名付きパッケージおよびパッチをシステムに追加する際にインポートする証明書用のリポジトリ。
- パッケージキーストアは、デフォルトで `/var/sadm/security` ディレクトリに格納されます。
- 信頼される証明書 別のエンティティに属する公開鍵を備えた証明書。「信頼される証明書」という呼び名は、証明書に含まれている公開鍵が、その証明書のサブジェクトまたは所有者によって示された本人のものであることを、キーストアの所有者が信頼することに由来しています。この信頼を表明するために、証明書の発行者はその証明書に署名します。
- 信頼される証明書は、署名を検証する際やセキュリティー保護されたサーバー (SSL サーバー) への接続を確立する際に使用されます。
- ユーザー鍵 暗号鍵に関する機密情報を保持します。この情報は、不正なアクセスを防ぐために、セキュリティーが施された形式で格納されます。ユーザー鍵は、ユーザーの非公開鍵と対応する公開鍵証明書から構成されます。
- pkgadd コマンドまたは patchadd コマンドを使って署名付きのパッケージまたはパッチをシステムに追加する手順は、基本的に次の3つから構成されます。
1. pkgadm コマンドを使ってシステムのパッケージキーストアに証明書を追加します。
  2. (省略可能) pkgadm コマンドを使って証明書を一覧表示します。
  3. pkgadd コマンドを使ってパッケージを追加するか、patchadd コマンドを使ってパッチを適用します。
- patchadd コマンドを使って署名付きパッチをシステムに適用する詳細な手順については、481 ページの「patchadd コマンドによるパッチの管理 (作業マップ)」を参照してください。

## ソフトウェアパッケージを管理するためのツール

次の表に、Oracle Solaris がシステムにインストールされたあと、システムに対してソフトウェアパッケージを追加および削除するためのツールを示します。

表 20-1 ソフトウェアパッケージを管理するためのツールまたはコマンド

| ツールまたはコマンド                                         | 説明                                                                                                                                                              | マニュアルページ                      |
|----------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|
| installer                                          | Oracle Solaris インストール GUI などのインストーラを起動して、Oracle Solaris インストールメディアからソフトウェアを追加します。インストーラがローカル、リモートのいずれかで利用可能になっている必要があります。                                       | <a href="#">installer(1M)</a> |
| prodreg (GUI)                                      | インストーラを起動して、ソフトウェア製品情報を追加、削除、または表示します。Oracle Solaris インストール GUI または pkgadd コマンドを使ってインストールされたソフトウェア製品に関する情報を削除または表示する場合は、Oracle Solaris Product Registry を使用します。 | <a href="#">prodreg(1M)</a>   |
| Oracle Solaris Product Registry prodreg ビューア (CLI) | prodreg コマンドでは、Oracle Solaris インストール GUI または pkgadd コマンドを使ってインストールされたソフトウェア製品に関する情報を削除または表示できます。                                                                | <a href="#">prodreg(1M)</a>   |
| pkgadd                                             | ソフトウェアパッケージをインストールします。                                                                                                                                          | <a href="#">pkgadd(1M)</a>    |
| pkgchk                                             | ソフトウェアパッケージのインストールを検査します。                                                                                                                                       | <a href="#">pkgchk(1M)</a>    |
| pkginfo                                            | ソフトウェアパッケージ情報を表示します。                                                                                                                                            | <a href="#">pkginfo(1)</a>    |
| pkgparam                                           | ソフトウェアパッケージのパラメータ値を表示します。                                                                                                                                       | <a href="#">pkgparam(1)</a>   |
| pkgrm                                              | ソフトウェアパッケージを削除します。                                                                                                                                              | <a href="#">pkgrm(1M)</a>     |

表 20-1 ソフトウェアパッケージを管理するためのツールまたはコマンド (続き)

| ツールまたはコマンド | 説明                                                                                              | マニュアルページ    |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| pkgtrans   | インストール可能なパッケージをある形式から別の形式に変換します。-g オプションを指定して pkgtrans コマンドを実行すると、署名が生成され、該当するデータストリーム内に格納されます。 | pkgtrans(1) |

これらのコマンドの詳細は、第 21 章「Oracle Solaris システム管理ツールによるソフトウェアの管理(手順)」および第 22 章「Oracle Solaris パッケージコマンドによるソフトウェアの管理(手順)」を参照してください。

## ソフトウェアパッケージの追加または削除 (pkgadd)

表 20-1 に記載されているソフトウェア管理ツールはすべて、ソフトウェアを追加したり、インストール済みソフトウェアを削除したり、それらのソフトウェアに関する情報を照会したりするために使用されます。Solaris Product Registry の prodreg ビューアと Solaris インストール GUI はどちらも、Solaris Product Registry に格納されているインストールデータにアクセスします。pkgadd コマンドや pkgrm コマンドといったパッケージツールも、インストールデータにアクセスしたりインストールデータを変更したりします。

パッケージを追加する際、pkgadd コマンドは、ファイルを解凍して、インストール用メディアからローカルシステムのディスクにコピーします。パッケージを削除する際、pkgrm コマンドは、そのパッケージに関連するファイルがほかのパッケージと共有されている場合を除いて、それらをすべて削除します。

パッケージファイルはパッケージ形式で配布され、配布されたままの状態では使用できません。pkgadd コマンドは、ソフトウェアパッケージの制御ファイルを解釈してから、製品ファイルを解凍して、システムのローカルディスクにインストールします。

pkgadd と pkgrm の各コマンドは、標準の場所にそのログ出力を記録しませんが、インストールまたは削除されるパッケージを常時追跡しています。pkgadd と pkgrm の各コマンドは、インストールまたは削除されたパッケージに関する情報をソフトウェア製品用データベースに格納します。

このデータベースを更新することによって、pkgadd および pkgrm の各コマンドは、システムにインストールされたすべてのソフトウェア製品の記録を追跡します。

## ソフトウェアパッケージの追加にあたっての重要な注意点 (pkgadd)

システム上でパッケージをインストールまたは削除する場合には、次の点に注意する必要があります。

- パッケージの命名規則 – Sun パッケージは、SUNWaccr、SUNWadmap、SUNWcsu などのように、必ず接頭辞 SUNW で始まります。Sun 以外のパッケージは、通常、その会社を表す接頭辞で始まります。
- インストール済みのソフトウェア – Solaris インストール GUI、Solaris Product Registry の prodreg ビューア (GUI または CLI)、pkginfo コマンドのいずれかを使えば、システム上にすでにインストールされているソフトウェアを特定できます。
- サーバーとクライアントによるソフトウェアの共有の状態 – クライアントのソフトウェアは、一部がサーバーに、一部がクライアントに置かれる場合があります。このような場合、クライアントにソフトウェアを追加するには、サーバーとクライアントの両方にパッケージを追加する必要があります。

## パッケージの削除に関するガイドライン (pkgrm)

rm コマンドを使ってパッケージを削除しても問題ないと感じる場合があっても、そのようにはせず、[表 20-1](#) に示されているツールのいずれかを使用してください。たとえば、rm コマンドを使用すると、バイナリ実行可能ファイルを削除することができます。しかしながら、そのような操作は、pkgrm コマンドを使ってそのバイナリ実行可能ファイルを含むソフトウェアパッケージを削除する操作と等価ではありません。rm コマンドを使用してパッケージのファイルを削除すると、ソフトウェア製品用データベースが破壊されます。1 つのファイルだけを削除する場合は、removef コマンドを使用することができます。このコマンドを使用した場合、該当ファイルがパッケージから削除されるように、ソフトウェア製品データベースが正しく更新されます。詳細は、[removef\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

複数のバージョンのパッケージをインストールしておきたい場合は、pkgadd コマンドを使ってインストール済みパッケージとは別のディレクトリに新しいバージョンをインストールしてください。たとえば、複数のバージョンの文書処理アプリケーションをインストールしておきたい場合などが考えられます。パッケージがインストールされているディレクトリは、ベースディレクトリと呼ばれます。ベースディレクトリは、管理ファイルと呼ばれる特殊ファイルに basedir キーワードを設定することによって操作できます。管理ファイルの使用法やベースディレクトリの設定方法の詳細は、[429 ページの「パッケージ追加時のユーザーの対話操作を省略する \(pkgadd\)」](#) と、[admin\(4\)](#) のマニュアルページを参照してください。

---

注 - Solaris ソフトウェアをインストールするときにアップグレードオプションを使用すると、Solaris インストール用ソフトウェアは、ソフトウェア製品用データベースを調べて、すでにシステムにインストールされている製品があるかどうかを確認します。

---

## ゾーンに対応していない **Solaris** リリースでソフトウェアパッケージおよびパッチを追加および削除する際の制限

ゾーンに対応していない Oracle Solaris リリースが稼働するシステム上では、`-R` オプションを指定できるコマンドを使って、非大域ゾーンがインストールされた大域ゾーンの代替ルートパスを指定しても、そのコマンドは正しく動作しません。

それらのコマンドは次のとおりです。

- `pkgadd`
- `pkgrm`
- `patchadd`
- `patchrm`

[pkgadd\(1M\)](#)、[pkgrm\(1M\)](#)、[patchadd\(1M\)](#)、および [patchrm\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

追加情報については、[482 ページ](#)の「[patchadd -R を使って代替 root パスを作成する際の制限](#)」を参照してください。

## パッケージ追加時のユーザーの対話操作を省略する (pkgadd)

この節では、`pkgadd` コマンドを使用してパッケージを追加する際にユーザーの対話操作を省略する方法について説明します。

### 管理ファイルの使用

`pkgadd -a` コマンドを使用した場合、特殊な管理ファイルからインストールの処理方法に関する情報が取得されます。通常、`pkgadd` コマンドはいくつかのチェックを行い、指定されたパッケージを実際に追加する前に、プロンプトを表示してユーザーに確認します。ただし、管理ファイルを作成すれば、このようなチェックを省略して、ユーザーの確認なしでパッケージをインストールするように `pkgadd` コマンドに指示できます。

デフォルトでは、`pkgadd` コマンドは現在の作業用ディレクトリに管理ファイルがないか調べます。現在の作業用ディレクトリの中に管理ファイルを見つけないことができなかった場合、`pkgadd` コマンドは `/var/sadm/install/admin` ディレクトリに指定の管理ファイルがないか調べます。また、`pkgadd` コマンドには管理ファイルへの絶対パスも使用できます。

---

注-管理ファイルは注意して使用してください。管理ファイルを使用して、`pkgadd` が通常実行するチェックとプロンプトを省略する場合は、事前にパッケージのファイルがインストールされている場所や、パッケージのインストール用スクリプトがどのように実行されるのかを知っておく必要があります。

---

次の例は、`pkgadd` コマンドがパッケージのインストール前にユーザーに確認のプロンプトを表示しないようにするための管理ファイルを示しています。

```
mail=
instance=overwrite
partial=nocheck
runlevel=nocheck
idepend=nocheck
rdepend=nocheck
space=nocheck
setuid=nocheck
conflict=nocheck
action=nocheck
networktimeout=60
networkretries=3
authentication=quit
keystore=/var/sadm/security
proxy=
basedir=default
```

管理ファイルは、パッケージ追加時にユーザーの対話操作を省略する以外にも、さまざまな用途で使用できます。たとえば、管理ファイルを使用すれば、エラーが発生した場合に(ユーザーの対話操作なしに)パッケージのインストールを終了したり、`pkgrm` コマンドでパッケージを削除する場合に対話操作を省略できます。

また、特別なインストールディレクトリをパッケージに割り当てることもできます。この方法は、1つのシステム上で複数のバージョンのパッケージを管理する場合に役に立ちます。これを行うには、`basedir` キーワードを使って管理ファイル内に代替ベースディレクトリを設定します。このキーワードは、パッケージがインストールされる場所を示します。詳細は、[admin\(4\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## 応答ファイルの使用 (pkgadd)

応答ファイルには、「対話型パッケージ」で尋ねられる特定の質問に対するユーザーの応答が格納されます。対話型パッケージには、パッケージをインス

インストール前にいくつかの質問(たとえば、パッケージのオプションをインストールするかどうかなど)をユーザーに尋ねる request スクリプトが格納されています。

インストールするパッケージが対話型パッケージであることがインストール前にわかっていて、今後インストールする際にユーザーの対話操作を省略できるように応答を格納しておきたい場合は、`pkgask` コマンドを使ってユーザーの応答を保存します。このコマンドの詳細は、[pkgask\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

`request` スクリプトが尋ねる質問への応答を格納した後は、`pkgadd -r` コマンドを使用して、ユーザーの対話操作なしにパッケージをインストールすることができます。





## Oracle Solaris システム管理ツールによるソフトウェアの管理 (手順)

---

この章では、Oracle Solaris インストール GUI (Graphical User Interface) と Oracle Solaris Product Registry を使ってソフトウェアパッケージを追加、確認、および削除する方法について説明します。

このリリースで新しく追加されたソフトウェア管理機能についての詳細は、420 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムでのソフトウェア管理における新機能」を参照してください。

ソフトウェアの管理作業に関連する手順については、次の節を参照してください。

- 434 ページの「Oracle Solaris インストール GUI によるソフトウェアの追加」
- 436 ページの「Oracle Solaris Product Registry の GUI によるソフトウェアの管理 (作業マップ)」
- 440 ページの「Oracle Solaris Product Registry のコマンド行インタフェースによるソフトウェアの管理 (作業マップ)」

## Oracle Solaris Product Registry および Solaris インストール GUI ツール (ソフトウェア管理用)

次の表は、ソフトウェアパッケージインストールを追加、削除、および確認する際に使用するコマンド (Oracle Solaris インストール GUI および Oracle Solaris Product Registry ツール) の一覧です。

表 21-1 ソフトウェアパッケージ管理用のシステム管理ツール

| ツール       | 説明                                    | マニュアルページ                      |
|-----------|---------------------------------------|-------------------------------|
| installer | インストーラを使用してソフトウェアパッケージをインストールまたは削除します | <a href="#">installer(1M)</a> |

表 21-1 ソフトウェアパッケージ管理用のシステム管理ツール (続き)

| ツール     | 説明                                                                    | マニュアルページ    |
|---------|-----------------------------------------------------------------------|-------------|
| prodreg | Oracle Solaris Product Registry 内のソフトウェアのブラウズ、登録解除、およびアンインストールを可能にします | prodreg(1M) |

## Oracle Solaris インストール GUI によるソフトウェアの追加

この節では、Oracle Solaris OS がすでにインストールされているシステムに、Oracle Solaris インストール GUI を使ってソフトウェアを追加する方法を説明します。インストール GUI では、Oracle Solaris を最初にインストールしたときにインストール対象から外したソフトウェアグループのコンポーネントだけをインストールします。OS のインストールまたはアップグレード後に別のソフトウェアグループにアップグレードすることはできません。

### ▼ Oracle Solaris インストール GUI プログラムを使ってソフトウェアをインストールする方法

注- この手順では、システムがボリューム管理 (vol) を実行しているものとしません。システムがボリューム管理を実行していない場合は、『Solaris のシステム管理 (デバイスとファイルシステム)』の第 3 章「リムーバブルメディアへのアクセス (手順)」を参照してください。この章では、ボリューム管理を使用しないでリムーバブルメディアにアクセスする方法について説明しています。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 OS のインストールを CD、DVD、ネットワークのどこから行うかによって、次のいずれかの操作を実行します。
  - CD を使用するリリースを実行する場合は、CD を CD-ROM ドライブに挿入します。  
Solaris 10 LANGUAGES CD を挿入すると、インストール GUI が自動的に起動します。手順 5 に進みます。

---

注 - この Oracle Solaris リリースでは、ソフトウェアは DVD のみで配布されます。

---

- DVD からインストールする場合は、DVD-ROM ドライブに DVD を挿入します。
- ネットワークからインストールする場合は、インストールするソフトウェアのネットイメージを見つけます。

**3 Oracle Solaris インストール GUI インストーラが見つかるまで、ディレクトリを変更します。**

Oracle Solaris インストール GUI インストーラは、CD や DVD 上のさまざまなディレクトリにあります。

- Oracle Solaris 10 SOFTWARE CD または DVD。
- Oracle Solaris 10 Documentation DVD。
- Oracle Solaris 10 LANGUAGES CD。この CD を挿入すると、Solaris インストール GUI が自動的に起動されます。

**4 指示に従って、ソフトウェアをインストールします。**

- コマンド行から次のコマンドを入力します。

```
% ./installer [options]
```

- nodisplay GUI を使用しないでインストーラを実行します。
- noconsole 対話式のテキストコンソールデバイスを使用しないで実行します。ソフトウェアをインストールするための UNIX スクリプトに `installer` コマンドを組み込んだときは、このオプションを `-nodisplay` オプションと合わせて使用します。
- ファイルマネージャから、「インストール (Installer)」をダブルクリックします。  
「インストール (Installer)」ウィンドウが表示され、続いて「installation GUI」ダイアログボックスが表示されます。

**5 画面の指示に従ってソフトウェアをインストールします。**

**6 ソフトウェアの追加が終わったら、「終了 (Exit)」をクリックします。  
インストール GUI が終了します。**

## Oracle Solaris Product Registry の GUI によるソフトウェアの管理 (作業マップ)

次の作業マップに、Oracle Solaris Product Registry を使って行うことができるソフトウェアの管理作業を示します。

| 作業                                                                    | 説明                                                                                                                 | 参照先                                                                                      |
|-----------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| インストールまたはアンインストールしたソフトウェアを Oracle Solaris Product Registry を使って表示します。 | インストールまたはアンインストールしたソフトウェアについて調べたい場合に使用します。                                                                         | 437 ページの「インストールまたはアンインストールしたソフトウェアの情報を Oracle Solaris Product Registry の GUI を使って表示する方法」 |
| Oracle Solaris Product Registry を使ってソフトウェアをインストールします。                 | Oracle Solaris Product Registry を使ってソフトウェアを検索し、Oracle Solaris インストール GUI を起動できます。このプログラムの指示に従ってソフトウェアのインストールを行います。 | 438 ページの「Oracle Solaris Product Registry の GUI を使ってソフトウェアをインストールする方法」                    |
| Oracle Solaris Product Registry を使ってソフトウェアをアンインストールします。               | Oracle Solaris Product Registry を使ってソフトウェアをアンインストールする場合に使用します。                                                     | 439 ページの「Oracle Solaris Product Registry の GUI を使ってソフトウェアをアンインストールする方法」                  |

Oracle Solaris Product Registry は、インストールされているソフトウェアをユーザーが管理するためのツールです。ソフトウェアのインストールが終わると、Product Registry は、Oracle Solaris インストール GUI または pkgadd コマンドを使用してインストールされた、すべてのソフトウェアの一覧を表示します。

Oracle Solaris Product Registry は、GUI またはコマンド行インタフェース (CLI) で使用できます。Oracle Solaris Product Registry CLI の使用方法の詳細については、440 ページの「Oracle Solaris Product Registry のコマンド行インタフェースによるソフトウェアの管理 (作業マップ)」を参照してください。

Oracle Solaris Product Registry の GUI インタフェースでは、次の作業を実行できます。

- インストールおよび登録されているソフトウェアとソフトウェア属性の一覧表示
- System Software Localizations ディレクトリにインストールされている地域対応版のすべての Oracle Solaris システム製品の表示
- インストーラの選択と起動
- 追加のソフトウェア製品のインストール
- ソフトウェアや個々のソフトウェアパッケージのアンインストール。

Oracle Solaris Product Registry の GUI のメインウィンドウは、次の3つの情報区画から構成されています。

- インストール、登録、削除されたソフトウェア
- 選択されているソフトウェアの標準属性
- カスタマイズされた属性と登録されているソフトウェアの内部属性

## ▼ インストールまたはアンインストールしたソフトウェアの情報を Oracle Solaris Product Registry の GUI を使って表示する方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。

- 2 Oracle Solaris Product Registry ツールを起動します。

```
# prodreg &
```

「Oracle Solaris Product Registry」メインウィンドウが表示されます。

- 3 「登録されているソフトウェア (Registered Software)」ボックスの「システムレジストリ (System Registry)」ディレクトリの左側にあるアイコンをクリックします。

右側を指していたアイコンが下側を指すように変わります。レジストリの項目は、左側にテキストファイルアイコンがあるものを除き、どの項目も展開または縮小できます。

「登録されているソフトウェア (Registered Software)」ボックスにインストールされているソフトウェアには、必ず次のコンポーネントが含まれます。

- Oracle Solaris のインストール時に選択した構成ソフトウェアグループ。ソフトウェアグループは、「簡易ネットワークサポート (Reduced Network Support)」、「コアシステムサポート (Core System Support)」、「エンドユーザーシステムサポート (End User System Support)」、「開発者システムサポート (Developer System Support)」、「全体ディストリビューション (Entire Distribution)」、「全体ディストリビューションと OEM サポート (Entire Distribution plus OEM Support)」のいずれかです。
- 追加のシステムソフトウェア (選択したソフトウェアグループに含まれていない Oracle Solaris 製品を含む)。
- 分類されていないソフトウェア (非 Oracle Solaris 製品またはソフトウェアグループに含まれていない製品)。このソフトウェアには、pkgadd コマンドを使ってインストールしたすべてのパッケージが含まれます。

- 4 表示するソフトウェアアプリケーションが見つかるまでディレクトリを選択し  
ます。  
ディレクトリを開くと、リストが展開されます。
- 5 属性を表示する場合は、ディレクトリまたはファイルを選択します。  
属性情報が「一覧 (Summary)」ボックスと「詳細情報 (more information)」ボ  
ックスに表示されます。
  - インストール GUI でインストールしたソフトウェア製品の場合、Oracle Solaris Product Registry には次の値が必ず表示されます。「タイトル (Title)」、「バージョン (Version)」、「インストール場所 (Location)」、および「インストール日時 (Installed on)」。製品またはソフトウェアグループの下で展開されているリスト内の項目の場合、その製品のバージョン情報が表示され  
ます。
  - pkgrm コマンドを使って製品のすべてまたは一部を削除した場合は、ソフト  
ウェア製品の名前の横にそれを警告するアイコンが表示されます。

## ▼ Oracle Solaris Product Registry の GUI を使ってソフト ウェアをインストールする方法

Oracle Solaris Product Registry を使用すると、ソフトウェアを検索してインストール GUI を起動できます。このプログラムの指示に従ってソフトウェアのインストールを行います。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 Oracle Solaris Product Registry ツールを起動します。  

```
# prodreg
```

「Oracle Solaris Product Registry」メインウィンドウが表示されます。
- 3 インストールを CD、DVD、ネットワークのどこから行うかによって、次のいずれかの操作を実行します。
  - CD を使用するリリースを実行する場合は、CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
  - DVD からインストールする場合は、DVD-ROM ドライブに DVD を挿入します。
  - ネットワークからインストールする場合は、インストールするソフトウェアのネットイメージを見つけます。

---

注 - この Oracle Solaris リリースでは、ソフトウェアは DVD のみで配布されます。

---

- 4 インストールおよび登録されているソフトウェアの一覧を表示するには、その左側にあるアイコンをクリックします。
- 5 「Oracle Solaris Product Registry」ウィンドウの下にある「新規インストール (New Install)」ボタンをクリックします。  
「Select Installer」ダイアログボックスが表示され、最初は /cdrom ディレクトリまたは現在使用中のディレクトリが選択されています。
- 6 Oracle Solaris インストール GUI インストーラが見つかるまで、ディレクトリを選択します。  
Oracle Solaris インストール GUI インストーラは、CD や DVD 上のさまざまなディレクトリにあります。
  - Solaris 10 SOFTWARE CD または DVD。
  - Solaris 10 Documentation DVD。
  - Solaris 10 LANGUAGES CD。この CD を挿入すると、インストール GUI が自動的に起動されます。
- 7 起動するインストーラを見つけたら、「ファイル (Files)」ボックスでそのインストーラの名前を選択します。
- 8 「了解 (OK)」をクリックします。  
選択したインストーラが起動されます。
- 9 インストーラによって表示される手順に従って、ソフトウェアをインストールします。

## ▼ Oracle Solaris Product Registry の GUI を使ってソフトウェアをアンインストールする方法

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 Oracle Solaris Product Registry ツールを起動します。  

```
# prodreg
```

「Oracle Solaris Product Registry」メインウィンドウが表示されます。

- 3 インストールおよび登録されているソフトウェアの一覧を表示するには、その左側にあるアイコンをクリックします。
- 4 アンインストールするソフトウェアの名前が見つかるまでディレクトリを選択します。
- 5 ソフトウェア属性を読んで、このソフトウェアがアンインストールするソフトウェアであることを確認します。
- 6 「Oracle Solaris Product Registry」ウィンドウの下にある「アンインストール (Uninstall)」ボタンをクリックします。  
選択したソフトウェアがアンインストールされます。

## Oracle Solaris Product Registry のコマンド行インタフェースによるソフトウェアの管理 (作業マップ)

次の作業マップに、Oracle Solaris Product Registry のコマンド行インタフェースを使って行うことができるソフトウェアの管理作業を示します。

| 作業                               | 説明                                                                             | 参照先                                                     |
|----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| インストールまたはアンインストールしたソフトウェアを表示します。 | browse サブコマンドを使ってソフトウェア情報を表示できます。                                              | 442 ページの「インストールまたはアンインストールしたソフトウェアの情報を表示する方法 (prodreg)」 |
| ソフトウェア属性を表示します。                  | info サブコマンドを使って特定のソフトウェア属性を表示できます。                                             | 445 ページの「ソフトウェア属性を表示する方法 (prodreg)」                     |
| ソフトウェアコンポーネント間の依存関係を確認します。       | info サブコマンドを使って特定のソフトウェアコンポーネントに依存するコンポーネントを表示できます。                            | 446 ページの「ソフトウェアの依存関係を確認する方法 (prodreg)」                  |
| 損傷を受けたソフトウェア製品を特定します。            | 適切なアンインストーラを使用しないでインストール済みのソフトウェアファイルやパッケージを削除すると、システム上のソフトウェアが損傷を受ける可能性があります。 | 447 ページの「損傷を受けたソフトウェア製品を特定する方法 (prodreg)」               |



| 作業                              | 説明                                                                                                     | 参照先                                                 |
|---------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| ソフトウェアをアンインストールします。             | <code>uninstall</code> サブコマンドを使ってソフトウェアをシステムから削除できます。                                                  | 449 ページの「ソフトウェアをアンインストールする方法 (prodreg)」             |
| 損傷を受けたソフトウェアをアンインストールします。       | ソフトウェアコンポーネントのアンインストールをシステムから削除した場合は、損傷を受けたコンポーネントのアンインストールが失敗することがあります。                               | 452 ページの「損傷を受けたソフトウェアをアンインストールする方法 (prodreg)」       |
| 損傷を受けたソフトウェアコンポーネントを再インストールします。 | 損傷を受けたソフトウェアコンポーネントに依存するソフトウェアがある場合は、損傷を受けたコンポーネントと依存ソフトウェアをアンインストールするのではなく、損傷を受けたコンポーネントを再インストールできます。 | 454 ページの「損傷を受けたソフトウェアコンポーネントを再インストールする方法 (prodreg)」 |

## Oracle Solaris Product Registry のコマンド行インタフェースによるソフトウェアの管理

`prodreg` コマンドは、Oracle Solaris Product Registry のコマンド行インタフェース (CLI) です。`prodreg` コマンドは、システム上のソフトウェアを管理するための複数のサブコマンドをサポートしています。

端末ウィンドウで `prodreg` コマンドを実行して、次の作業を行うことができます。

- インストールおよび登録されているソフトウェアとソフトウェア属性の一覧表示。
- System Software Localizations ディレクトリにインストールされている地域対応版のすべての Oracle Solaris システム製品の表示。
- 損傷を受けたソフトウェアの特定。
- Oracle Solaris Product Registry のソフトウェアエントリの削除。
- ソフトウェアや個々のソフトウェアパッケージのアンインストール。

コマンド行インタフェース経由で Oracle Solaris Product Registry を管理する方法については、[prodreg\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## ▼ インストールまたはアンインストールしたソフトウェアの情報を表示する方法 (prodreg)

Oracle Solaris Product Registry 内のソフトウェアに関する情報を確認するには、端末ウィンドウで `prodreg` コマンドのサブコマンド `browse` を実行します。

- 1 端末ウィンドウを開きます。
- 2 Oracle Solaris Product Registry の内容を表示します。

```
% prodreg browse
  BROWSE # +/-/.  UUID                                     #  NAME
  =====  =====  =====
  1          -      root                                     1  System
   Registry
  2          +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b  1  Solaris 10
   System
   Software
  3          +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b  1  Unclassified
   Software
```

`prodreg` のサブコマンド `browse` では、登録済みソフトウェアに関する次の情報を表示できます。

**BROWSE #** `prodreg browse` コマンドを実行すると、Oracle Solaris Product Registry により、登録済みの各ソフトウェアコンポーネントの「ブラウザ番号」が生成されます。この番号を `prodreg browse` コマンドや `prodreg info` コマンドの引数に指定することにより、登録済みの特定のコンポーネントの下位コンポーネントを表示できます。

---

注-ブラウザ番号(BROWSE#)は、システムのリブートや再インストールによって変更される可能性があります。ブラウザ番号をスクリプト内に記述したり、その他のログインセッションで再利用したりすることはできません。

---

**+/-/.** このフィールドは、ソフトウェアコンポーネントが Oracle Solaris Product Registry に登録された子コンポーネントを持っているかどうかを示します。

このフィールドには、次の文字が表示されます。

- +- ソフトウェアコンポーネントは、現在表示されていないが子コンポーネントを持っていることを示します。
- -- ソフトウェアコンポーネントは、現在表示されている子コンポーネントを持っていることを示します。

- .-ソフトウェアコンポーネントが子コンポーネントを持っていないことを示します。

|      |                                                                                                                                                  |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| UUID | このフィールドには、Oracle Solaris Product Registry に格納されているソフトウェア固有の識別子が表示されます。                                                                           |
| #    | このフィールドには、システム上のソフトウェアコンポーネントのインスタンス番号が表示されます。システム上に複数のソフトウェアコンポーネントインスタンスがある場合、Oracle Solaris Product Registry はそれぞれのインスタンスに別々のインスタンス番号を割り当てます。 |
| NAME | このフィールドには、ソフトウェアの地域対応化された名前が表示されます。この出力例では、Oracle Solaris OS の名前は「Oracle Solaris 10 System Software」になっています。                                     |

- 3 Oracle Solaris Product Registry 内の任意のソフトウェアコンポーネント 1 個の情報をブラウズします。

```
% prodreg browse -m "name"
```

-m "name" コマンドは、*name* を名前に持つソフトウェアコンポーネントの情報を表示します。

- 4 システム上に *name* ソフトウェアのインスタンスが複数存在する場合は、次のコマンドを実行して Oracle Solaris Product Registry をブラウズします。

```
% prodreg browse -u name-UUID -i
instance -n number
```

-u *name-UUID*

一意の識別子 *name-UUID* で指定された *name* ソフトウェアコンポーネントの情報を表示します。

-i *instance*

インスタンス番号 *instance* で指定された *name* ソフトウェアコンポーネントの情報を表示します。

-n *number*

コンポーネントのブラウザ番号 *number* を参照することでソフトウェアの情報を表示します。

- 5 ブラウズするソフトウェアコンポーネントごとに、手順 3 と手順 4 を繰り返します。

#### 例 21-1 コンポーネント名によるソフトウェア情報の表示 (prodreg)

次の例では、コンポーネント名を指定してソフトウェア情報を表示します。

```
% prodreg browse
  BROWSE # +/-/.  UUID                                     #  NAME
  =====
  =====
```

```

1      -      root                                1 System
  Registry
2      +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b 1 Solaris 10
  System
  Software
3      +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b 1 Unclassified
  Software

```

```
% prodreg browse -m "Solaris 10 System Software"
```

### 例 21-2 コンポーネントのブラウザ番号によるソフトウェア情報の表示 (prodreg)

次の例では、`prodreg browse` コマンドの `-n` オプションでコンポーネントのブラウザ番号を指定して、ソフトウェアの情報を表示します。

```

% prodreg browse
  BROWSE # +/-/.  UUID                                #  NAME
  =====
1      -      root                                1  System
  Registry
2      +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b 1  Solaris 10
  System
  Software
3      +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b 1  Unclassified
  Software

```

```
% prodreg browse -n 2
```

### 例 21-3 コンポーネントの UUID によるソフトウェア情報の表示 (prodreg)

次の例では、`prodreg browse` コマンドの `-u` オプションでコンポーネントの UUID を指定して、ソフトウェアの情報を表示します。UUID は、Oracle Solaris Product Registry におけるソフトウェアの一意的識別子です。

```

% prodreg browse
  BROWSE # +/-/.  UUID                                #  NAME
  =====
1      -      root                                1  System
  Registry
2      +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b 1  Solaris 10
  System
  Software
3      +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b 1  Unclassified
  Software

```

```
% prodreg browse -u a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b
```

## ▼ ソフトウェア属性を表示する方法 (prodreg)

prodreg info コマンドを使って、特定のソフトウェア属性を表示できます。

prodreg info コマンドは、登録済みソフトウェアに関するさまざまな情報を表示します。次に例を挙げます。

- ソフトウェアコンポーネントの名前
- ソフトウェアコンポーネントの説明
- ソフトウェアの必須コンポーネント
- このソフトウェアを必要とするその他のコンポーネント
- ソフトウェアのベースディレクトリ
- ソフトウェアコンポーネントのパス

- 1 端末ウィンドウを開きます。
- 2 Oracle Solaris Product Registry の内容を表示します。

```
% prodreg browse
  BROWSE # +/-/.  UUID                                     #  NAME
  =====  =====  =====
  1         -      root                                     1  System
   Registry
  2         +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b  1  Solaris 10
   System
   Software
  3         +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b  1  Unclassified
   Software
```

- 3 表示されたソフトウェアコンポーネントのいずれかの属性を表示します。

```
% prodreg info -m "name"
```

-m "name" コマンドは、name を名前に持つソフトウェアコンポーネントの属性を表示します。

- 4 表示するソフトウェアコンポーネントごとに、手順3を繰り返します。

### 例 21-4 コンポーネント名によるソフトウェア属性の表示 (prodreg)

次の例では、コンポーネント名を指定してソフトウェア属性を表示します。

```
% prodreg browse
  BROWSE # +/-/.  UUID                                     #  NAME
  =====  =====  =====
  1         -      root                                     1  System
   Registry
  2         +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b  1  Solaris 10
   System
   Software
  3         +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b  1  Unclassified
```

Software

```
% prodreg info -m "Solaris 10 System Software"
```

### 例 21-5 コンポーネントのブラウザ番号によるソフトウェア属性の表示 (prodreg)

次の例では、`prodreg info` コマンドの `-n` オプションでコンポーネントのブラウザ番号を指定して、ソフトウェアの属性を表示します。

```
% prodreg browse
BROWSE # +/-/.  UUID                                     #  NAME
===== =====
1         -      root                                     1  System
Registry
2         +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b  1  Solaris 10
System
Software
3         +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b  1  Unclassified
Software
```

```
% prodreg info -n 2
```

### 例 21-6 コンポーネントの UUID によるソフトウェア属性の表示 (prodreg)

次の例では、`prodreg info` コマンドの `-u` オプションでコンポーネントの UUID を指定して、ソフトウェア属性を表示します。UUID は、Oracle Solaris Product Registry におけるソフトウェアの一意の識別子です。

```
% prodreg browse
BROWSE # +/-/.  UUID                                     #  NAME
===== =====
1         -      root                                     1  System
Registry
2         +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b  1  Solaris 10
System
Software
3         +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b  1  Unclassified
Software
```

```
% prodreg info -u a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b
```

## ▼ ソフトウェアの依存関係を確認する方法 (prodreg)

特定のソフトウェアコンポーネントに依存するコンポーネントを表示するには、`prodreg info` コマンドを使用します。特定のコンポーネントをアンインストールする前に、ソフトウェア製品間の依存関係を確認できます。

- 1 端末ウィンドウを開きます。

## 2 Oracle Solaris Product Registry の内容を表示します。

```
% prodreg browse
  BROWSE # +/-/.  UUID                                     #  NAME
  =====
  1      -         root                                     1  System
   Registry
  2      +         a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b  1  Solaris 10
   System
   Software
  3      +         8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b  1  Unclassified
   Software
```

確認するソフトウェアコンポーネントが表示されるまで、`prodreg browse` コマンドを繰り返します。`prodreg browse` コマンドを使って Oracle Solaris Product Registry をブラウズする方法の詳細については、[442 ページの「インストールまたはアンインストールしたソフトウェアの情報を表示する方法 \(prodreg\)」](#)を参照してください。

## 3 特定のソフトウェアコンポーネントの依存関係を表示します。

```
% prodreg info -m "name" -a "Dependent Components"
```

`-m "name"` *name* で名前を指定されたソフトウェアコンポーネントの属性を表示します。

`-a "Dependent Components"` `Dependent Components` 属性の値を表示することにより、*name* ソフトウェアに依存するコンポーネントを表示します。

このコマンドの出力には、*name* ソフトウェアに依存するソフトウェアコンポーネントの一覧が表示されます。

### 例 21-7 その他のソフトウェア製品に依存するコンポーネントの表示 (prodreg)

次の例では、`ExampleSoft` というソフトウェア製品に依存するコンポーネントを一覧表示します。

```
% prodreg -m "ExampleSoft" -a "Dependent Components"
Dependent Components:
Name                                     UUID                                     #
-----
ExampleSoftA                             7f49ecvb-1ii2-11b2-a3f1-0800119u7e8e  1
```

## ▼ 損傷を受けたソフトウェア製品を特定する方法 (prodreg)

適切なアンインストーラを使用しないでインストール済みのソフトウェアファイルやパッケージを削除すると、システム上のソフトウェアが損傷を受ける可能性があります。

ります。損傷を受けたソフトウェアは、正しく機能しない場合があります。prodreg info コマンドを使って、ソフトウェア製品が損傷を受けていないかどうかを確認できます。

- 1 確認するソフトウェアの **Oracle Solaris Product Registry** 情報を表示します。  
% **prodreg browse -m name**
- 2 ソフトウェアコンポーネントが損傷を受けていないかどうかを検証します。  
% **prodreg info -u name-UUID -i 1 -d**
- 3 *name-UUID* ソフトウェアコンポーネントを構成するパッケージを特定します。  
% **prodreg info -u name-UUID -i 1 -a PKGS**  
このコマンドの出力に、複数のパッケージが表示されることもあります。
- 4 前の手順で表示されたパッケージがシステムにインストールされていることを確認するため、パッケージごとに **pkginfo** コマンドを実行します。  
% **pkginfo component-a-pkg**  
% **pkginfo component-b-pkg**  
.  
.  
.

#### 例 21-8 損傷を受けたソフトウェアコンポーネントの特定 (prodreg)

次の例では、ExampleSoft ソフトウェアが損傷を受けていないかどうかを確認します。

```
% prodreg browse -m Examplesoft
BROWSE # +/-/. UUID # NAME
=====
1 - root 1 System
Registry
2 + a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b 1 Solaris 10
System
Software
3 + 8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b 1 Unclassified
Software
4 - 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be 1 ExampleSoft
233 . 90209809-9785-b89e-c821-0472985982be 1 Example Doc
234 . EXS0zzt 1
235 . EXS0blob 1 Example Data
```

NAME フィールドに、ExampleSoft の子コンポーネント EXS0zzt のエントリがありません。ExampleSoft ソフトウェアは損傷を受けている可能性があります。prodreg info コマンドに -u、-i、および -d オプションを指定して、ExampleSoft ソフトウェアが損傷を受けているかどうかを確認します。



```
% prodreg info -u 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be -i 1 -d
```

```
isDamaged=TRUE
```

isDamaged=TRUE という出力結果から、ExampleSoft ソフトウェアが損傷を受けていることがわかります。prodreg info コマンドの -a PKGS オプションを実行して、ExampleSoft ソフトウェアパッケージを特定します。

```
% prodreg info
  -u 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be
  -i 1 -a PKGS
```

```
pkgs:
EXS0ztt EXS0blob
```

パッケージ EXS0ztt と EXS0blob がシステムにインストールされていることを確認するために、pkginfo コマンドを使用します。

```
% pkginfo EXS0ztt
ERROR: information for "EXS0ztt" was not found
```

```
% pkginfo EXS0blob
application EXS0blob      Example Data
```

pkginfo コマンドの出力結果から、EXS0ztt パッケージがシステムにインストールされていないことがわかります。したがって、ExampleSoft ソフトウェアは損傷を受けています。

## ▼ ソフトウェアをアンインストールする方法 (prodreg)

prodreg uninstall コマンドを使って、システムからソフトウェアを削除できません。prodreg uninstall コマンドを使ってソフトウェアをアンインストールすると、指定のソフトウェアとそのソフトウェアに関連付けられている子コンポーネントがすべて削除されます。アンインストールするソフトウェアに依存するソフトウェアがないことを確認してから、ソフトウェアを削除してください。[446 ページの「ソフトウェアの依存関係を確認する方法 \(prodreg\)」](#)を参照してください。

ソフトウェアのアンインストールが完了したら、prodreg unregister -r コマンドを使って、ソフトウェアそのものと、その子コンポーネント全部を Oracle Solaris Product Registry から削除できます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。

- 2 アンインストールするソフトウェアの情報を表示します。

```
# prodreg browse -u name-UUID
```

- 3 ソフトウェアをアンインストールします。

```
# prodreg uninstall -u name-UUID
```

- 4 アンインストールするソフトウェアの依存関係を確認します。

```
# prodreg info -u name-UUID
```

prodreg info コマンドによって出力された次の情報を確認します。

- 「Child Components」 - *name* ソフトウェアコンポーネントに関連付けられたソフトウェアコンポーネントを一覧表示します。 *name* ソフトウェアの登録を解除すると、その子コンポーネントの登録も解除されます。前出の prodreg info コマンドでは、すべての子コンポーネントが一覧表示されます。これらの子コンポーネントの登録を解除してもよいかどうか確認してください。
- 「Required Components」 - *name* ソフトウェアによって必要とされているソフトウェアコンポーネントを一覧表示します。ソフトウェアコンポーネントは、子コンポーネント以外のコンポーネントを必要とする場合があります。コンポーネントとともにアンインストールされ、登録を解除されるのは、子コンポーネントだけです。
- 「Dependent Components」 - *name* ソフトウェアがないと実行できないコンポーネントを一覧表示します。 *name* ソフトウェアの登録を解除すると、その依存コンポーネントの登録も解除されます。prodreg info コマンドの出力結果に依存コンポーネントが含まれていた場合、それらの依存コンポーネントの登録を解除してもよいかどうか確認してください。

前出の出力例では、 *name* ソフトウェアに依存コンポーネントはありません。

- 5 *name* ソフトウェアの子コンポーネントの依存関係を確認します。

```
# prodreg info -u component-a-UUID -i l -a "Dependent Components"
```

この出力例では、 *name* ソフトウェアの子コンポーネントに依存するソフトウェアはありません。

- 6 ソフトウェアコンポーネントとその子コンポーネントの登録を解除します。

```
# prodreg unregister -r -u name-UUID -i l
```

```
-r
```

一意の識別子 *name-UUID* を指定して、ソフトウェアとその子コンポーネント全部の登録を再帰的に解除します。

```
-u name-UUID
```

登録を解除するソフトウェアを表す一意の識別子を指定します。

-i l 登録を解除するソフトウェアのインスタンスを指定します。

### 例 21-9 ソフトウェアコンポーネントのアンインストール(prodreg)

次の例では、ExampleSoft ソフトウェアとその子コンポーネントすべてをアンインストールします。

```
# prodreg browse -m "ExampleSoft"
BROWSE # +/-/. UUID # NAME
=====
1 - root 1 System
Registry
2 + a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b 1 Solaris 10
System
Software
3 + 8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b 1 Unclassified
Software
1423 - 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be 1 ExampleSoft
1436 . 90209809-9785-b89e-c821-0472985982be 1 Example Doc
1437 - EXS0zzt 1 Example Data
1462 . EXS0blob 1 Example Data

# prodreg uninstall -u 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be -i 1

# prodreg info -u 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be
Title: ExampleSoft Software
.
.
.
Child Components:
Name UUID #
-----
Example Doc 90209809-9785-b89e-c821-0472985982be 1
Example Data EXS0zzt 1

Required Components:
Name UUID #
-----
Example Doc 90209809-9785-b89e-c821-0472985982be 1
Example Data EXS0zzt 1

# prodreg info -u 90209809-9785-b89e-c821-0472985982be -i 1
-a "Dependent Components"
Dependent Components:
Name UUID #
-----
ExampleSoft 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be 1

# prodreg info -u EXS0zzt -i 1 -a "Dependent Components"
Dependent Components:
Name UUID #
-----
ExampleSoft 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be 1
```

```
# prodreg info -u EXS0bLob -i 1 -a "Dependent Components"
Dependent Components:
Name                               UUID                               #
-----
Example Data                       EXS0zzt                           1

# prodreg unregister -r -u 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be -i 1
```

## ▼ 損傷を受けたソフトウェアをアンインストールする方法 (prodreg)

損傷を受けたソフトウェアコンポーネントを `prodreg uninstall` コマンドでアンインストールしようとする、と失敗します。これは、ソフトウェアコンポーネントのアンインストールプログラムがシステムから削除されている場合に発生する現象です。

システム上にソフトウェアコンポーネントのアンインストールプログラムがない場合は、次の手順に従ってアンインストールを行なってください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 アンインストールするソフトウェアの情報を表示します。  
`# prodreg browse -m "name"`
- 3 ソフトウェアをアンインストールします。  
`# prodreg uninstall -u UUID -i 1`
- 4 ソフトウェアコンポーネントのアンインストールプログラムを特定します。  
`# prodreg info -m "name" -a uninstallprogram`
- 5 登録場所にアンインストーラが存在するかどうか確認します。  
`# ls uninstaller-location uninstaller-location`
- 6 次のいずれかの方法でシステムからソフトウェアを削除します。
  - システムのバックアップを使用できる場合は、次の手順に従います。
    - a. バックアップからアンインストールプログラムをロードします。
    - b. 端末ウィンドウなどのシェルコマンド行インタフェースからアンインストールプログラムを実行します。

- バックアップのアンインストールプログラムにアクセスできない場合は、次の手順に従います。
  - a. ソフトウェアコンポーネントの登録を解除します。
 

```
# prodreg unregister -u UUID -i 1
```
  - b. 削除するソフトウェアによって必要とされている登録済みコンポーネントをすべて削除します。
 

```
# pkgrm component-a-UUID
```

### 例 21-10 損傷を受けたソフトウェアのアンインストール (prodreg)

次の例では、損傷を受けた ExampleSoft ソフトウェアをアンインストールします。この例では、システムバックアップ上のアンインストールプログラムにはアクセスできないものとしします。

```
# prodreg browse -m Examplesoft
BROWSE # +/-/.  UUID                                     #  NAME
=====
1      -      root                                     1  System
   Registry
2      +      a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b  1  Solaris 10
   System
   Software
3      +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b  1  Unclassified
   Software
4      -      95842091-725a-8501-ef29-0472985982be  1  ExampleSoft
233    .      90209809-9785-b89e-c821-0472985982be  1  Example Doc
234    .      EXS0zzt                                     1
235    .      EXS0blob                                    1  Example Data

# prodreg uninstall -u 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be -i 1
The install program requested could not be found

# prodreg info -m "ExampleSoft" -a uninstallprogram
uninstallprogram: /usr/bin/java -mx64m -classpath
/var/sadm/prod/org.example.ExampleSoft/987573587 uninstall_ExampleSoft

# ls /var/sadm/prod/org.example.ExampleSoft/987573587
/var/sadm/prod/org.example.ExampleSoft/987573587:
No such file or directory

# prodreg unregister -u 95842091-725a-8501-ef29-0472985982be -i 1

# pkgrm EXS0blob
```

## ▼ 損傷を受けたソフトウェアコンポーネントを再インストールする方法 (prodreg)

損傷を受けたソフトウェアコンポーネントに依存するソフトウェアがある場合は、損傷を受けたコンポーネントと依存ソフトウェアをアンインストールするのではなく、損傷を受けたコンポーネントを再インストールできます。-f オプションを指定して `prodreg unregister` コマンドを実行すれば、損傷を受けたコンポーネントの登録を強制的に解除できます。その後、そのコンポーネントを再インストールできます。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 再インストールするソフトウェアの情報を表示します。  
`# prodreg browse -m "name"`
- 3 再インストールするソフトウェアに依存するソフトウェアを特定します。  
`# prodreg info -m "name" -a "Dependent Components"`
- 4 再インストールするソフトウェアコンポーネントの登録を解除します。  
`# prodreg unregister -f -u UUID`
- 5 ソフトウェアコンポーネントを再インストールします。  
`# /usr/bin/java -cp /usr/installers/installer`  
`installer` オプションには、`name` ソフトウェアのインストーラプログラム名を指定します。

### 例 21-11 損傷を受けたソフトウェアコンポーネントの再インストール (prodreg)

次の例では、損傷を受けたソフトウェアコンポーネント `ComponentSoft` を、依存コンポーネントである `ExampleSoft` の登録解除やアンインストールを行うことなく再インストールします。

```
# prodreg browse -m "ComponentSoft"
BROWSE # +/-/.  UUID                                     # NAME
=====  =====
1      -          root                                     1 System
Registry
2      +          a01ee8dd-1dd1-11b2-a3f2-0800209a5b6b  1 Solaris 10
System
Software
```

```
3          +      8f64eabf-1dd2-11b2-a3f1-0800209a5b6b  1  Unclassified
                                     Software
4          .      86758449-554a-6531-fe90-4352678362fe  1  ComponentSoft

# prodreg info -m "ComponentSoft" -a "Dependent Components"
Dependent Components:
Name                               UUID                                     #
-----
ExampleSoft                        95842091-725a-8501-ef29-0472985982be  1

# prodreg unregister -f -u 86758449-554a-6531-fe90-4352678362fe -i 1

# /usr/bin/java -cp /usr/installers/org.example.componentsoft
```





## Oracle Solaris パッケージコマンドによるソフトウェアの管理 (手順)

---

この章では、Oracle Solaris パッケージコマンドを使ってソフトウェアパッケージを追加、確認、および削除する方法について説明します。

各作業の実行に関連する手順については、以下の作業マップを参照してください。

- 457 ページの「[pkgadd コマンドによる署名付きパッケージの追加および削除 \(作業マップ\)](#)」
- 462 ページの「[パッケージコマンドによるソフトウェアパッケージの管理 \(作業マップ\)](#)」

### pkgadd コマンドによる署名付きパッケージの追加および削除 (作業マップ)

次の作業マップは、署名付きパッケージコマンドを使って実行可能なソフトウェア管理作業を示したものです。

---

注 - pkgadd コマンドを使用して署名付きパッケージを追加および削除するプロセスには、信頼される証明書を `keytool` ユーティリティを使用して取得および適用する作業が含まれます。Oracle Solaris のこのリリースでの `keytool` ユーティリティの使用に関連する手順については、この章では詳しく説明していません。`keytool` ユーティリティを使用して信頼される証明書をインポートおよびエクスポートする詳細な手順については、[http://download.oracle.com/docs/cd/E17476\\_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html](http://download.oracle.com/docs/cd/E17476_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html) を参照してください。

---

| 作業                   | 説明                                                              | 参照先                                       |
|----------------------|-----------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| 1つ以上の証明書の詳細情報を表示します。 | <code>pkgadm listcert</code> コマンドを使って証明書の詳細情報を表示できます。           | 458 ページの「証明書の情報を表示する方法 (pkgadm listcert)」 |
| 証明書を削除します。           | <code>pkgadm removecert</code> コマンドを使って証明書を削除できます。              | 459 ページの「証明書を削除する方法 (pkgadm removecert)」  |
| プロキシサーバーをセットアップします。  | この手順は、プロキシを備えたファイアウォールの背後にシステムが存在している場合に使用します。                  | 459 ページの「プロキシサーバーをセットアップする方法 (pkgadd)」    |
| 署名付きパッケージを追加します。     | ルート証明書がインポートされると、 <code>pkgadd</code> コマンドを使って署名付きパッケージを追加できます。 | 461 ページの「署名付きパッケージを追加する方法 (pkgadd)」       |

## pkgadd コマンドによる署名付きパッケージの追加および削除

次の手順では、`pkgadd` コマンドを使って署名付きパッケージを追加および削除する方法について説明します。

### ▼ 証明書の情報を表示する方法 (pkgadm listcert)

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 パッケージキーストアの内容を表示します。  
`# pkgadm listcert -p passarg`

#### 例 22-1 証明書の情報を表示する

次の例は、ローカルに格納されている証明書の詳細情報を表示する方法を示しています。

```
# pkgadm listcert -P pass:test123
Keystore Alias: /C=US/O=VeriSign, Inc./OU=Class 2 Public Primary Certification Authority - G2/O
Common Name: /C=US/O=VeriSign, Inc./OU=Class 2 Public Primary Certification Authority - G2/O
```

```

Certificate Type: Trusted Certificate
Issuer Common Name: /C=US/O=VeriSign, Inc./OU=Class 2 Public Primary Certification Authority - G2/O
Validity Dates: <May 18 00:00:00 1998 GMT> - <Aug 1 23:59:59 2028 GMT>
MD5 Fingerprint: 2D:BB:E5:25:D3:D1:65:82:3A:B7:0E:FA:E6:EB:E2:E1
SHA1 Fingerprint: B3:EA:C4:47:76:C9:C8:1C:EA:F2:9D:95:B6:CC:A0:08:1B:67:EC:9D

```

## ▼ 証明書を削除する方法 (pkgadm removecert)

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

- 2 信頼される証明書をパッケージキーストアから削除します。

```
# pkgadm removecert -n "certfile"
```

removecert の -n "certfile" オプションには、ユーザー証明書/鍵ペアの別名、信頼される証明書の別名のいずれかを指定します。

---

注 - 証明書の別名を表示するには、pkgadm listcert コマンドを使用します。

---

### 例 22-2 証明書を削除する

次の例は、証明書を削除する方法を示しています。

```

# pkgadm listcert
Keystore Alias: /C=US/O=VeriSign, Inc./OU=Class 2 Public Primary Certification Authority - G2/O
Common Name: /C=US/O=VeriSign, Inc./OU=Class 2 Public Primary Certification Authority - G2/O
Certificate Type: Trusted Certificate
Issuer Common Name: /C=US/O=VeriSign, Inc./OU=Class 2 Public Primary Certification Authority - G2/O
Validity Dates: <May 18 00:00:00 1998 GMT> - <Aug 1 23:59:59 2028 GMT>
MD5 Fingerprint: 2D:BB:E5:25:D3:D1:65:82:3A:B7:0E:FA:E6:EB:E2:E1
SHA1 Fingerprint: B3:EA:C4:47:76:C9:C8:1C:EA:F2:9D:95:B6:CC:A0:08:1B:67:EC:9D
# pkgadm removecert -n "/C=US/O=VeriSign, Inc./OU=Class 2 Public Primary Certification Authority - G2/O"

Enter Keystore Password: storepass
Successfully removed Certificate(s) with alias \
</C=US/O=VeriSign, Inc./OU=Class 2 Public Primary Certification Authority - G2/O>

```

## ▼ プロキシサーバーをセットアップする方法 (pkgadd)

プロキシを備えたファイアウォールの背後にシステムが存在している場合、先にプロキシサーバーをセットアップします。そのあとに、pkgadd コマンドを使用して HTTP サーバーからパッケージを追加します。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。
- 2 次のいずれかの方法を使ってプロキシサーバーを指定します。

- a. 環境変数 `http_proxy`、`HTTPPROXY`、`HTTPPROXYPORT` のいずれかを使ってプロキシサーバーを指定します。

次に例を示します。

```
# setenv http_proxy http://mycache.domain:8080
```

または、次のいずれかを指定します。

```
# setenv HTTPPROXY mycache.domain
# setenv HTTPPROXYPORT 8080
```

- b. `pkgadd` コマンド行でプロキシサーバーを指定します。

次に例を示します。

```
# pkgadd -x mycache.domain:8080
-d http://myserver.com/pkg SUNWpkg
```

- c. プロキシサーバーの情報を含む管理ファイルを作成します。

次に例を示します。

```
# cat /tmp/admin
mail=
instance=unique
partial=ask
runlevel=ask
idepend=ask
rdepend=ask
space=ask
setuid=ask
conflict=ask
action=ask
networktimeout=60
networkretries=3
authentication=quit
keystore=/var/sadm/security
basedir=default
proxy=mycache.domain:8080
```

続いて、`pkgadd -a` コマンドでこの管理ファイルを指定します。次に例を示します。

```
# pkgadd -a /tmp/admin -d http://myserver.com/pkg SUNWpkg
```

## ▼ 署名付きパッケージを追加する方法 (pkgadd)

この手順では、Oracle のルート CA 証明書が、すでにインポートされているものと仮定しています。詳細は、[http://download.oracle.com/docs/cd/E17476\\_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html](http://download.oracle.com/docs/cd/E17476_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html) を参照してください。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 署名付きパッケージを追加します。

```
# pkgadd -d /pathname/device-name
```

`-d device-name` オプションには、パッケージのインストール元デバイスを指定します。デバイスとして指定できるのは、ディレクトリ、テープ、フロッピーディスク、リムーバブルディスクのいずれかです。また、`pkgtrans` コマンドによって作成されたデータストリームをデバイスとして指定することもできます。

### 例 22-3 署名付きパッケージを追加する

次の例は、システム上に格納された署名付きパッケージを追加する方法を示しています。

```
## pkgadd -d /tmp/signed_pppd
The following packages are available:
  1 SUNWpppd      Solaris PPP Device Drivers
                    (sparc) 11.10.0,REV=2003.05.08.12.24

Select package(s) you wish to process (or 'all' to process
all packages). (default: all) [?,??,q]: all
Enter keystore password:
## Verifying signature for signer <User Cert 0>

.
.
.
```

次の例は、デバイス名として HTTP URL を指定して署名付きパッケージをインストールする方法を示しています。指定した URL は、ストリーム形式のパッケージを指している必要があります。

```
# pkgadd -d http://install/signed-video.pkg

## Downloading...
.....25%.....50%.....75%.....100%
## Download Complete
.
```

## パッケージコマンドによるソフトウェアパッケージの管理 (作業マップ)

次の作業マップは、署名付きパッケージと署名なしパッケージの両方に対して、パッケージコマンドで行えるソフトウェア管理作業を示したものです。

| 作業                                    | 説明                                                                                                                                                                              | 参照先                                                                                     |
|---------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| ソフトウェアパッケージをローカルシステムに追加します。           | <code>pkgadd</code> コマンドを使ってソフトウェアパッケージをローカルシステムに追加できます。                                                                                                                        | 463 ページの「ソフトウェアパッケージを追加する方法 ( <code>pkgadd</code> )」                                    |
| ソフトウェアパッケージをスプールディレクトリに追加します。         | ソフトウェアを実際にインストールしないで、ソフトウェアパッケージをスプールディレクトリに追加できます。                                                                                                                             | 466 ページの「ソフトウェアパッケージをスプールディレクトリに追加する」                                                   |
| インストールされたすべてのソフトウェアパッケージに関する情報を表示します。 | <code>pkginfo</code> コマンドを使用して、インストール済みのパッケージに関する情報を表示できます。                                                                                                                     | 468 ページの「インストール済みのすべてのパッケージに関する情報を表示する方法 ( <code>pkginfo</code> )」                      |
| インストールされたソフトウェアパッケージの整合性を検査します。       | <code>pkgchk</code> コマンドを使って、インストールされたソフトウェアパッケージの整合性を検査できます。                                                                                                                   | 469 ページの「インストール済みのソフトウェアパッケージの整合性を検査する方法 ( <code>pkgchk</code> )」                       |
| インストール済みオブジェクトの整合性を検査します。             | <code>pkchk</code> コマンドでオプション <code>-p</code> または <code>-P</code> を指定すると、インストールされたオブジェクトの整合性を検証できます。 <code>-p</code> オプションには絶対パス名を指定します。新しい <code>-P</code> オプションには部分パス名を指定します。 | 471 ページの「インストール済みオブジェクトの整合性を検査する方法 ( <code>pkgchk -p</code> 、 <code>pkgchk -P</code> )」 |
| ソフトウェアパッケージを削除します。                    | <code>pkgrm</code> コマンドを使って不要になったソフトウェアパッケージを削除できます。                                                                                                                            | 473 ページの「ソフトウェアパッケージを削除する方法 ( <code>pkgrm</code> )」                                     |

## パッケージコマンドによるソフトウェアパッケージの管理

次の手順では、パッケージコマンドを使ってソフトウェアパッケージを管理する方法を説明します。

## ▼ ソフトウェアパッケージを追加する方法 (pkgadd)

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 インストール済みのパッケージの中で、追加しようとしているものと同じ名前のものがあれば、すべて削除します。  
この手順によって、追加および削除されたソフトウェアの正しい記録が取れます。同じアプリケーションの複数のバージョンをシステムで管理する場合もあります。ソフトウェアの複数のコピーを管理する方法については、[428 ページ](#)の「パッケージの削除に関するガイドライン (pkgrm)」を参照してください。この作業の手順については、[473 ページ](#)の「ソフトウェアパッケージを削除する方法 (pkgrm)」を参照してください。
- 3 ソフトウェアパッケージをシステムに追加します。

```
# pkgadd -a admin-file
-d device-name pkgid ...
```

**-a admin-file** (省略可能) インストール時に pkgadd コマンドが確認する管理ファイルを示します。管理ファイルの使用方法については、[429 ページ](#)の「管理ファイルの使用」を参照してください。

**-d device-name** ソフトウェアパッケージのあるディレクトリの絶対パスを指定します。device-name には、デバイス、ディレクトリ、またはスプールディレクトリへのパスを指定できます。パッケージのあるパスを指定しないと、pkgadd コマンドはデフォルトのスプールディレクトリ (/var/spool/pkg) をチェックします。パッケージがそこにない場合、パッケージのインストールは失敗します。

**pkgid** (省略可能) インストールする 1 つまたは複数のパッケージの名前を空白で区切って指定します。省略した場合、pkgadd コマンドは、指定されたデバイス、ディレクトリ、またはスプールディレクトリで利用可能なすべてのパッケージをインストールします。

パッケージのインストール中に pkgadd コマンドによって問題が検出されると、その問題に関連するメッセージに続いて、次のプロンプトが表示されます。

```
Do you want to continue with this installation?
```

このプロンプトには、yes、no、またはquitのいずれかで応答します。複数のパッケージを指定した場合は、no と入力して、インストール中のパッケージのインストールを中止してください。ほかのパッケージのインストールが続行されません。インストールを中止するには、quit と入力してください。

- 4 指定したパッケージが正常にインストールされていることを確認します。

```
# pkgchk -v pkgid
```

エラーがない場合は、インストールされたファイルのリストが返されます。エラーがある場合は、pkgchk コマンドによってエラーが報告されます。

#### 例 22-4 マウント済みの CD からソフトウェアパッケージを追加する

次の例は、マウント済みの Oracle Solaris 10 CD から SUNWpl5u パッケージをインストールする方法を示しています。また、パッケージファイルが正しくインストールされているかどうかを確認する方法も示します。

```
# pkgadd -d /cdrom/cdrom0/Solaris_10/Product SUNWpl5u
```

```
.
.
.
Installation of <SUNWpl5u> was successful.
# pkgchk -v SUNWpl5u
/usr
/usr/bin
/usr/bin/perl
/usr/perl5
/usr/perl5/5.8.4
.
.
.
```

この例は、Solaris 10 10/08 リリース以上を実行していない場合に使用するパスを示しています。

```
# pkgadd -d /cdrom/cdrom0/s0/Solaris_10/Product SUNWpl5u
```

```
.
.
.
Installation of <SUNWpl5u> was successful.
# pkgchk -v SUNWpl5u
/usr
/usr/bin
/usr/bin/perl
/usr/perl5
/usr/perl5/5.8.4
.
.
.
```



## 例 22-5 リモートパッケージサーバーからソフトウェアパッケージをインストールする

インストールするパッケージがリモートシステムから利用できる場合は、そのパッケージが(パッケージ形式で)格納されているディレクトリを手動でマウントして、ローカルシステムにパッケージをインストールすることができます。

次の例は、リモートシステムからソフトウェアパッケージをインストールする方法を示しています。この例では、`package-server` というリモートシステムの `/latest-packages` ディレクトリにソフトウェアパッケージが格納されているものとします。`mount` コマンドはパッケージをローカルの `/mnt` 上にマウントします。`pkgadd` コマンドは `SUNWpl5u` パッケージをインストールします。

```
# mount -F nfs -o ro package-server:/latest-packages /mnt
# pkgadd -d /mnt SUNWpl5u
.
.
.
Installation of <SUNWpl5u> was successful.
```

オートマウンタがサイトで実行されている場合は、リモートパッケージサーバーを手動でマウントする必要はありません。代わりに、オートマウンタパス(この場合は `/net/package-server/latest-packages`)を、`-d` オプションの引数として使用します。

```
# pkgadd -d /net/package-server/latest-packages SUNWpl5u
.
.
.
Installation of <SUNWpl5u> was successful.
```

## 例 22-6 管理ファイルを指定してリモートパッケージサーバーからソフトウェアパッケージをインストールする

この例は、前の例に似ていますが、`-a` オプションを使って `noask-pkgadd` という管理ファイルを指定している点が異なります。この管理ファイルについては、[429 ページ](#)の「[パッケージ追加時のユーザーの対話操作を省略する \(pkgadd\)](#)」を参照してください。この例では、`noask-pkgadd` 管理ファイルがデフォルトの格納場所である `/var/sadm/install/admin` にあるものとします。

```
# pkgadd -a noask-pkgadd -d /net/package-server/latest-packages SUNWpl5u
.
.
.
Installation of <SUNWpl5u> was successful.
```

**例 22-7** ソフトウェアパッケージを特定の HTTP URL からインストールする

次の例は、特定の HTTP URL をデバイス名として使ってパッケージをインストールする方法を示しています。指定した URL は、ストリーム形式のパッケージを指している必要があります。

```
# pkgadd -d http://install/xf86-4.3.0-video.pkg

## Downloading...
.....25%.....50%.....75%.....100%
## Download Complete
```

```
The following packages are available:
 1 SUNWxf86r   XFree86 Driver Porting Kit (Root)
                (i386) 4.3.0,REV=0.2003.02.28
 2 SUNWxf86u   XFree86 Driver Porting Kit (User)
                (i386) 4.3.0,REV=0.2003.02.28
```

```
.
.
.
```

## ソフトウェアパッケージをスプールディレクトリに追加する

頻繁にインストールするパッケージをスプールディレクトリにコピーしておくとう便利です。パッケージをデフォルトのスプールディレクトリ `/var/spool/pkg` にコピーする場合、`pkgadd` コマンドを使用するときに、コピー元のパッケージの位置 (`-d device-name` 引数) を指定する必要はありません。`pkgadd` コマンドは、デフォルトで `/var/spool/pkg` ディレクトリを調べて、コマンド行に指定されたパッケージをすべて見つけます。パッケージをスプールディレクトリにコピーすることと、パッケージをシステム上にインストールすることとは異なることに注意してください。

### ▼ ソフトウェアパッケージをスプールディレクトリに追加する方法 (pkgadd)

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。

- 2 スプール済みのパッケージの中で、追加しようとしているものと同じ名前のものがあれば、すべて削除します。  
スプール済みのパッケージを削除する方法については、[例 22-19](#)を参照してください。

- 3 ソフトウェアパッケージをスプールディレクトリに追加します。

```
# pkgadd -d device-name
-s spooldir pkgid ...
```

`-d device-name` ソフトウェアパッケージのあるディレクトリの絶対パスを指定します。`device-name`には、デバイス、ディレクトリ、またはスプールディレクトリへのパスを指定できます。

`-s spooldir` パッケージがスプールされるスプールディレクトリの名前を指定します。`spooldir`を指定する必要があります。

`pkgid` (省略可能) スプールディレクトリに追加する1つまたは複数のパッケージの名前を空白で区切って指定します。この引数を省略すると、使用可能なすべてのパッケージがコピーされます。

- 4 指定したパッケージがスプールディレクトリに正常にコピーされていることを確認します。

```
$ pkginfo -d spooldir
| grep pkgid
```

`pkgid`が正常にコピーされた場合、`pkginfo`コマンドによって、`pkgid`に関する1行の情報が返されます。正常にコピーされなかった場合は、`pkginfo`コマンドによってシステムプロンプトが返されます。

### 例 22-8 マウント済みのCDからスプールディレクトリを設定する

次の例は、shows how to transfer the SUNWman パッケージをマウント済みの SPARC Oracle Solaris 10 CD からデフォルトのスプールディレクトリ (`/var/spool/pkg`) に転送する方法を示しています。

```
# pkgadd -d /cdrom/cdrom0/Solaris_10/Product -s /var/spool/pkg SUNWman
```

```
Transferring <SUNWman> package instance
```

### 例 22-9 リモートソフトウェアパッケージサーバーからスプールディレクトリを設定する

コピーするパッケージがリモートシステムから利用できる場合は、そのパッケージが(パッケージ形式で)格納されているディレクトリを手動でマウントして、ローカルスプールディレクトリにパッケージをコピーすることができます。

次の例は、そのためのコマンドを示したものです。この例では、`package-server` というリモートシステムの `/latest-packages` ディレクトリにソフトウェアパッケージが格納されているものとします。`mount` コマンドはパッケージディレクトリをローカルの `/mnt` 上にマウントします。`pkgadd` コマンドは、`SUNWpl5p` パッケージを `/mnt` からデフォルトのスパールディレクトリ (`/var/spool/pkg`) にコピーします。

```
# mount -F nfs -o ro package-server:/latest-packages /mnt
# pkgadd -d /mnt -s /var/spool/pkg SUNWpl5p
Transferring <SUNWpl5p> package instance
```

オートマウントが実行されている場合は、リモートパッケージサーバーを手動でマウントする必要はありません。代わりに、オートマウントパス(この場合は、`/net/package-server/latest-packages`)を、`-d` オプションの引数として使用してください。

```
# pkgadd -d /net/package-server/latest-packages -s /var/spool/pkg SUNWpl5p
Transferring <SUNWpl5p> package instance
```

#### 例 22-10 デフォルトのスパールディレクトリからソフトウェアパッケージをインストールする

次の例は、デフォルトのスパールディレクトリから `SUNWpl5p` パッケージをインストールする方法を示しています。オプションを何も指定しないと、`pkgadd` コマンドは `/var/spool/pkg` ディレクトリを検索して名前付きのパッケージを見つけます。

```
# pkgadd SUNWpl5p
.
.
.
Installation of <SUNWpl5p> was successful.
```

### ▼ インストール済みのすべてのパッケージに関する情報を表示する方法 (`pkginfo`)

- インストール済みのパッケージに関する情報を表示するには、`pkginfo` コマンドを使用します。

```
$ pkginfo
```

**例 22-11** インストール済みのパッケージを表示する

この例は、システムがスタンドアロンシステム、サーバーのいずれであるかにかかわらず、そのローカルシステム上にインストールされているすべてのパッケージを表示する方法を示しています。基本カテゴリ、パッケージ名、およびパッケージの説明が表示されています。

```
$ pkginfo
system      SUNWaccr      System Accounting, (Root)
system      SUNWaccu      System Accounting, (Usr)
system      SUNWadmap     System administration applications
system      SUNWadmc     System administration core libraries
.
.
.
```

**例 22-12** ソフトウェアパッケージに関する詳細情報を表示する

この例は、システム上にインストールされているすべてのパッケージを長形式で表示する方法を示しています。この表示には、指定されたパッケージで利用可能なすべての情報が含まれます。

```
$ pkginfo -l SUNWcar
PKGINST:  SUNWcar
NAME:     Core Architecture, (Root)
CATEGORY: system
ARCH:    sparc.sun4u
VERSION: 11.9.0,REV=2002.04.06.15.27
BASEDIR: /
VENDOR:  Sun Microsystems, Inc.
DESC:    core software for a specific hardware platform group
PSTAMP:  leo20031003183400
INSTDATE: Feb 20 2004 16:57
HOTLINE: Please contact your local service provider
STATUS:  completely installed
FILES:   114 installed pathnames
         36 shared pathnames
         40 directories
         57 executables
         21469 blocks used (approx)
```

## ▼ インストール済みのソフトウェアパッケージの整合性を検査する方法 (pkgchk)

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。

## 2 インストール済みのパッケージの状態を調べます。

- ファイルの属性または内容を検査するには、次のように入力します。

```
# pkgchk -a| -c -v pkid...
```

- スプールディレクトリの絶対パスを指定するには、次のように入力します。

```
# pkgchk -d spooldir pkgid ...
```

-a ファイルの属性と内容(デフォルト)ではなく、ファイルの属性(アクセス権)だけを検査することを指定します。

-c ファイルの内容と属性(デフォルト)ではなく、ファイルの内容だけを検査することを指定します。

-v 冗長モードを指定します。このモードでは、処理されるたびにファイル名が表示されます。

-d *spooldir* スプールディレクトリへの絶対パスを指定します。

*pkgid* (省略可能)1つまたは複数のパッケージの名前を空白で区切って指定します。*pkgid*を指定しない場合は、システムにインストールされているすべてのソフトウェアパッケージが検査されます。

### 例 22-13 インストール済みのソフトウェアパッケージの内容を検査する

次の例は、パッケージの内容を検査する方法を示しています。

```
# pkgchk -c SUNWbash
```

エラーがない場合は、システムプロンプトが返されます。エラーがある場合は、`pkgchk` コマンドによってエラーが報告されます。

### 例 22-14 インストール済みのソフトウェアパッケージのファイル属性を検査する

次の例は、パッケージのファイル属性を検査する方法を示しています。

```
# pkgchk -a SUNWbash
```

エラーがない場合は、システムプロンプトが返されます。エラーがある場合は、`pkgchk` コマンドによってエラーが報告されます。

### 例 22-15 スプールディレクトリにインストールされているソフトウェアパッケージを検査する

次の例は、スプールディレクトリ (`/export/install/packages`) にコピーされたソフトウェアパッケージを検査する方法を示しています。

```
# pkgchk -d /export/install/packages
## checking spooled package <SUNWadmap>
## checking spooled package <SUNWadmfw>
## checking spooled package <SUNWadmc>
## checking spooled package <SUNWsadmL>
```

スプールされたパッケージの検査には限界があります。これは、パッケージがインストールされないときすべての情報を検査できないからです。

## ▼ インストール済みオブジェクトの整合性を検査する方法 (pkgchk -p、pkgchk -P)

この手順は、pkgchk コマンドを使ってインストール済みオブジェクトの整合性を検査する方法を示しています。新しい -P オプションを使用すると、部分パスを指定できます。このオプションは、ファイルとパッケージ間のマッピングを支援する目的で追加されました。このオプションを -l オプションと組み合わせると、指定した部分パスを含むファイルの情報が一覧表示されます。インストール済みオブジェクトの整合性を絶対パスを指定して検査するには、-p オプションを使用します。詳細は、[pkgchk\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

### 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理(セキュリティサービス)』の「RBACの構成(作業マップ)」を参照してください。

### 2 インストール済みオブジェクトの整合性を検査します。

- 1つまたは複数の絶対パス名に対するインストール済みオブジェクトの整合性を検査するには、次のように入力します。

```
# pkgchk -lp path-name
```

- 1つまたは複数の部分パス名に対するインストール済みオブジェクトの整合性を検査するには、次のように入力します。

```
# pkgchk -lP partial-path-name
```

**-p path** 指定された1つまたは複数のパス名に対する整合性のみを検査します。パスは、1つまたは複数のパス名をコンマで区切って指定します。ファイルの属性と内容(デフォルト)ではなく、ファイルの属性(アクセス権)だけを検査することを指定します。

**-P partial-path** 指定された1つまたは複数の部分パス名に対する整合性のみを検査します。部分パスは、1つまたは複数の部分パス名をコンマで区切って指定します。部分パスに含まれる文字列を含むすべてのパス名に一致します。ファイルの内容と属性(デフォルト)ではなく、ファイルの内容だけを検査することを指定します。

-l 同一パッケージに属する選択されたファイルに関する情報を表示します。このオプションを、-a、-c、-f、-g、-v の各オプションと同時に使用することはできません。冗長モードを指定します。このモードでは、処理されるたびにファイル名が表示されます。

#### 例 22-16 絶対パス名を指定してインストール済みオブジェクトの整合性を検査する

この例では、`pkgchk -lp` コマンドで絶対パス名を指定してファイルシステム上の特定のオブジェクトの内容/属性を検査する方法を示しています。-l オプションは、同一パッケージに属する選択されたファイルに関する情報を表示します。

```
# pkgchk -lp /usr/sbin/pkgadd
Pathname: /usr/sbin/pkgadd
Type: regular file
Expected mode: 0555
Expected owner: root
Expected group: sys
Expected file size (bytes): 867152
Expected sum(1) of contents: 45580
Expected last modification: Jul 02 02:20:34 2004
Referenced by the following packages:
    SUNWpkgcmdsu
Current status: installed
```

#### 例 22-17 部分パス名を指定してインストール済みオブジェクトの整合性を検査する

この例では、`pkgchk -lP` コマンドでファイル名やディレクトリ名などの部分パス名を指定してファイルシステム上の特定のオブジェクトの内容/属性を検査する方法を示しています。-l オプションは、同一パッケージに属する選択されたファイルに関する情報を表示します。

```
# pkgchk -lP /sbin/pkgadd
Pathname: /usr/sbin/pkgadd
Type: regular file
Expected mode: 0555
Expected owner: root
Expected group: sys
Expected file size (bytes): 867152
Expected sum(1) of contents: 45580
Expected last modification: Jul 02 02:20:34 2004
Referenced by the following packages:
    SUNWpkgcmdsu
Current status: installed

Pathname: /usr/sbin/pkgask
Type: linked file
Source of link: ../../usr/sbin/pkgadd
Referenced by the following packages:
```



```
SUNWpkgcmdsu
Current status: installed
```

## ソフトウェアパッケージを削除する

ソフトウェアパッケージを削除 (アンインストール) するには、そのパッケージの追加 (インストール) 時に使用した関連ツールを使用します。たとえば、Oracle Solaris インストール GUI を使ってインストールしたソフトウェアは、Oracle Solaris インストール GUI を使ってアンインストールします。



注意-ソフトウェアパッケージを削除するのに `rm` コマンドを使用しないでください。それを行なった場合、システム上にインストールされたすべてのパッケージを追跡しているデータベースの整合性がとれなくなります。

### ▼ ソフトウェアパッケージを削除する方法 (pkgrm)

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理 (セキュリティサービス)』の「RBAC の構成 (作業マップ)」を参照してください。
- 2 インストール済みのパッケージを削除します。

```
# pkgrm pkgid ...
```

`pkgid` は、削除する 1 つまたは複数のパッケージの名前 (空白で区切られている) を識別します。この引数を省略すると、使用可能なパッケージがすべて削除されます。

#### 例 22-18 ソフトウェアパッケージを削除する

次の例は、パッケージの削除方法を示しています。

```
# pkgrm SUNWctu

The following package is currently installed:
  SUNWctu      Netra ct usr/platform links (64-bit)
                (sparc.sun4u) 11.9.0,REV=2001.07.24.15.53

Do you want to remove this package? y

## Removing installed package instance <SUNWctu>
## Verifying package dependencies.
## Processing package information.
## Removing pathnames in class <none>
.
```

⋮

### 例 22-19 スプールされたソフトウェアパッケージを削除する

次の例は、スプールされたパッケージの削除方法を示しています。

```
# pkgrm -s /export/pkg SUNWaudh
The following package is currently spooled:
  SUNWaudh          Audio Header Files
                    (sparc) 11.10.0,REV=2003.08.08.00.03
Do you want to remove this package? y
Removing spooled package instance <SUNWaudh>
```

## patchadd コマンドによるパッチの管理 (手順)

---

パッチの管理には、パッチとソフトウェア更新のシステムへの「適用」が含まれます。また、不要なパッチや障害の発生したパッチの削除が含まれる場合もあります。パッチの削除は、パッチの「バックアウト」とも呼ばれます。

この章では、`patchadd` コマンドを使ってパッチを管理する手順について説明します。追加情報については、[patchadd\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- 475 ページの「パッチの種類」
- 476 ページの「Oracle Solaris パッチへのアクセス」
- 478 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムでのパッチ管理」
- 479 ページの「パッチ管理の用語と定義」
- 481 ページの「`patchadd` コマンドによるパッチの管理 (作業マップ)」

### パッチの種類

「パッチ」とは、Oracle Solaris OS 内またはその他のサポート対象ソフトウェア内の既知または潜在的な問題に対する修正をまとめたものです。また、パッチは、特定のソフトウェアリリースに対する新機能や機能拡張の提供も行います。パッチは、既存のファイルやディレクトリを置換または更新するファイルやディレクトリから構成されます。ほとんどのパッチは、一連の疎パッケージとして提供されます。パッケージの詳細は、[第 20 章「ソフトウェアの管理 \(概要\)」](#) を参照してください。

ソフトウェアの「更新」とは、既存の問題を訂正したり機能を導入したりするために、ソフトウェアに適用する変更のことです。また、更新は、ソフトウェア更新をシステムに適用するプロセスでもあります。

`patchadd` コマンドを使用すれば、Oracle Solaris システム上でパッチを管理できます。

## 署名付きパッチと署名なしパッチ

「署名付き」とは、「デジタル署名」が適用されたパッチのことです。パッチのデジタル署名が検証されると、その署名の適用後にそのパッチが変更されていないことが保証されます。パッチがユーザーのシステムに「ダウンロードされた」後、署名付きパッチのデジタル署名は検証されます。

2.6以降のリリースの Oracle Solaris 用パッチは、署名付きパッチおよび「署名なしパッチ」として利用可能です。署名なしパッチにはデジタル署名は含まれていません。

---

注-patchadd コマンドを使用して署名付きパッチを追加および削除するプロセスには、信頼される証明書を keytool ユーティリティを使用して取得および適用する作業が含まれます。Oracle Solaris のこのリリースでの keytool ユーティリティの使用に関連する手順については、この章では詳しく説明していません。keytool ユーティリティを使用して信頼される証明書をインポートおよびエクスポートする詳細な手順については、[http://download.oracle.com/docs/cd/E17476\\_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html](http://download.oracle.com/docs/cd/E17476_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html) を参照してください。

---

patchadd コマンドを使ってシステムにパッチを適用する方法については、481 ページの「[patchadd コマンドによるパッチの管理 \(作業マップ\)](#)」を参照してください。

署名付きパッチに関するその他の概要情報については、424 ページの「[署名付きのパッケージ、パッチ、およびソフトウェア更新](#)」を参照してください。

## Oracle Solaris パッチへのアクセス

パッチは、<http://sunsolve.sun.com> の Web サイトから取得できます。SunSolve Patch Portal Web サイトからパッチにアクセスするには、システムがインターネットに接続されており、かつ Mozilla Web ブラウザなどの Web ブラウザを実行できる必要があります。

個々のパッチにアクセスしたり、パッチクラスタから一連のパッチにアクセスしたり、パッチレポートを参照したりできます。

各パッチには、そのパッチに関する情報を含む README ファイルが関連付けられています。

## パッチの番号付け

パッチは、一意の「パッチ ID」によって識別されます。パッチ ID とは、パッチのベースコードとパッチのバージョン番号を表す数字とをハイフンでつなぎ合わせた英数字文字列のことです。たとえば、パッチ 118833-10 は、SunOS 5.10 カーネル更新用パッチ、第 10 リビジョンのパッチ ID です。

## Oracle Solaris パッチの管理

この節では、利用可能なパッチツールを使って Oracle Solaris パッチを管理する方法について説明します。

パッチツールは次のことを行います。

- 管理ホストとターゲットホストの Oracle Solaris バージョン番号を確認する。
- パッチパッケージの `pkginfo` ファイル内に含まれる次の情報を更新する。
  - 適用するパッチによって「**廃棄**」されたパッチ
  - このパッチが必要とするその他のパッチ
  - このパッチと「**互換性のない**」パッチ

パッチを適用している間は、`patchadd` コマンドによって `/var/sadm/patch/patch-id` `/log` ファイル内に情報がロギングされます。

---

注 - `patchadd -M` コマンドは機能が向上しています。このコマンドを使用してシステムにパッチを適用するときに、パッチ ID を番号順に指定する必要がなくなりました。パッチ ID を指定しないで `patchadd -M` コマンドを使用すれば、ディレクトリ内のすべてのパッチがシステムにインストールされます。これらの変更の詳細は、[patchadd\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

---

この `patchadd` コマンドは、次の場合にはパッチまたはソフトウェア更新を適用できません。

- パッケージが、システムに完全にインストールされていない。
- パッチパッケージのアーキテクチャーが、システムのアーキテクチャーと異なる。
- パッチパッケージのバージョンが、インストール済みパッケージのバージョンと一致しない。
- 同じベースコードと上位のバージョン番号を持つパッチが、すでに適用されている。
- このパッチを廃棄するパッチが、すでに適用されている。
- このパッチと互換性のないパッチが、すでにシステムに適用されている。この情報は、適用済みの各パッチの `pkginfo` ファイル内に格納されている。

- 適用するパッチが依存するパッチのいずれかが、まだ適用されていない。

## Oracle Solaris オペレーティングシステムでのパッチ管理

次の情報に基づいて、パッチの管理作業を特定してください。各作業から追加の作業が派生します。

| 作業                               | 説明                                                                                                                  | 参照先                                                    |
|----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 署名付きパッチと署名なしパッチのどちらを適用するかを決定します。 | 現在の環境にとって署名付きパッチと署名のないパッチのどちらが適しているかを判断します。                                                                         | 478 ページの「システムに署名付きパッチ、署名なしパッチのいずれを適用するかの決定」            |
| システムにパッチを適用します。                  | Solaris 2.6、Solaris 7、Solaris 8、Solaris 9、または Oracle Solaris 10 システムで、 <code>patchadd</code> コマンドを使って署名なしパッチを適用します。 | 481 ページの「 <code>patchadd</code> コマンドによるパッチの管理 (作業マップ)」 |

### システムに署名付きパッチ、署名なしパッチのいずれを適用するかの決定

システムに署名付きパッチ、署名なしパッチのいずれを適用するかを決定する際に重要となるのは、パッチの供給元を信頼するかどうかです。

パッチの供給元 (既知の販売店から入手したパッチ CD や信頼できる Web サイトとの HTTPS 接続など) を信頼する場合、署名なしパッチを使用できます。一方、供給元を信頼しない場合は署名付きパッチを使用します。

パッチの供給元を信頼できるかどうかわからない場合は、署名付きパッチを使用してください。

### 信頼される証明書のパッケージキーストアとの間のインポートおよびエクスポート

`patchadd` コマンドを使って「署名付きパッチ」をシステムに適用するには、その署名付きパッチの署名を検証できるように、Oracle のルート CA 証明書を最低限追加しておく必要があります。この証明書は、Java 「キーストア」からパッケージキーストアへインポートできます。

信頼される証明書をインポートおよびエクスポートする手順については、[http://download.oracle.com/docs/cd/E17476\\_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html](http://download.oracle.com/docs/cd/E17476_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html) を参照してください。

## パッチ管理の用語と定義

次の用語は、パッチ管理に関する各章で使用されているものです。

|              |                                                                                                                                                                              |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 適用           | パッチをシステムにインストールすること。                                                                                                                                                         |
| バックアウト       | パッチをシステムから削除すること。                                                                                                                                                            |
| バックアウトデータ    | パッチを適用したときに作成されるデータ。そのパッチを削除(バックアウト)した場合に、システムを元の状態に戻せるようにするためのデータ。                                                                                                          |
| バックアウトディレクトリ | バックアウトデータが格納されるディレクトリ。デフォルトでは、パッチによってインストールされた各パッケージの <code>save</code> ディレクトリです。                                                                                            |
| 依存関係         | 下記の <b>パッチの依存関係</b> を参照してください。                                                                                                                                               |
| デジタル署名       | 電子署名の1つ。署名が適用されたあとに、ドキュメントが変更されていないことを保証するために使用されます。                                                                                                                         |
| ダウンロード       | パッチソース(Sun パッチサーバーなど)の1つ以上のパッチを、それらの適用先のシステムにコピーすること。                                                                                                                        |
| ダウンロードディレクトリ | パッチソースからダウンロードされたパッチが格納されるディレクトリ。このディレクトリに格納されたパッチがシステムに適用されます。デフォルトの場所は <code>/var/sadm/spool</code> 。                                                                      |
| キーストア        | 署名付きパッチを適用しようとするときに照会される証明書と鍵のリポジトリ。                                                                                                                                         |
| 非標準パッチ       | 非標準パッチは、 <code>patchadd</code> コマンドを使ってインストールすることができません。非標準パッチは通常、パッケージ形式で提供されないファームウェアやソフトウェアアプリケーションの修正を提供するために使用されますが、こうしたパッチはその README ファイル内で指定された手順に従ってインストールする必要があります。 |
| 順序付け         | 一連のパッチを適用しやすいようにソートすること。                                                                                                                                                     |
| パッケージ        | システムに配布してインストールするためのソフトウェア製品の形式。定義済みフォーマットによるファイルとディレクトリの集まり。                                                                                                                |
| <b>patch</b> | 既存の問題を訂正したり特定の機能を導入するためのソフトウェア更新。                                                                                                                                            |
| パッチ解析        | システムに適したパッチを判断するためにシステムを検査する方式。                                                                                                                                              |
| パッチの依存関係     | あるパッチが、システム上に存在するほかのパッチと依存関係を持っていること。1つ以上のパッチと依存関係を持っているパッチを適用するには、依存関係を持つパッチがシステムにすでに適用されている必要があります。                                                                        |

---

|                 |                                                                                                                                                                                         |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| パッチ ID          | 一意の英数字の文字列。パッチのベース番号、ハイフン(-)、パッチの改訂バージョン番号を表す数字で構成されます。                                                                                                                                 |
| パッチの非互換性        | まれに、2つのパッチが同じシステム上で共存できないこと。この問題は、パッチの相互関係で、各パッチが互いに互換性を持っていないために発生します。適用しようとするパッチがシステムに適用済みのパッチと互換性を持っていない場合には、適用済みのパッチを最初に削除する必要があります。適用済みのパッチを削除すれば、新しいパッチを適用できます。                   |
| パッチ一覧           | パッチの一覧が含まれるファイル。各行にパッチ ID が付いています。パッチ一覧は、パッチ操作を実行するときに使用されます。パッチ一覧は、システムの解析またはユーザー入力に基づいて生成されます。<br><br>パッチ一覧の各行は2つの列で構成されています。第1列はパッチ ID、第2列はパッチの機能説明です。                               |
| パッチの廃棄          | あるパッチが別のパッチを置き換える際、古いパッチを廃棄すること。古いパッチがシステムに適用されていない場合も含まれます。あるパッチによって1つ以上のパッチが廃棄されると、それらの古いパッチは完全に置き換えられます。新しいパッチを適用する前に、古いパッチが適用されている必要はありません。                                         |
| パッチサーバー         | パッチ解析の結果をもとに、システムによって使用される適切なパッチソースを取得するためのサーバー。                                                                                                                                        |
| 署名付きパッチ         | 有効なデジタル署名によって署名されたパッチ。署名付きパッチでは、署名のないパッチに比べて高いセキュリティが保証されます。パッチがシステムに適用される前に、パッチのデジタル署名が検証されます。有効なデジタル署名は、署名が適用された以降にパッチの変更が行われていないことを保証します。署名付きパッチは、Java Archive (JAR) 形式のファイルに格納されます。 |
| ソフトウェア更新        | 既存の問題を訂正したり特定の機能を導入するために適用する、ソフトウェアへの変更。                                                                                                                                                |
| 特殊処理            | シングルユーザーモードでインストールする必要があることを示すプロパティーを含むパッチ。また、適用後にシステムを再起動する必要のあるパッチは、「特殊処理要件」を持つパッチ、と呼ばれます。                                                                                            |
| 標準パッチ           | Oracle Solaris パッチ仕様に準拠したパッチ。patchadd コマンドを使ってインストールできます。非標準パッチは、patchadd コマンドを使ってインストールすることができません                                                                                      |
| SunSolve Online | パッチ、パッチ情報、およびパッチクラスタへのアクセスを提供するパッチポータル Web サイト。詳細は、 <a href="http://sunsolve.sun.com">http://sunsolve.sun.com</a> を参照してください。                                                            |
| 署名なしパッチ         | デジタル署名を使用して署名されていないパッチ。                                                                                                                                                                 |
| Web プロキシ        | システムをインターネットに接続するために使用されるサーバー。システムからインターネットに直接接続することはできず、必ず Web プロキシを使用して接続を確立します。                                                                                                      |



# patchadd コマンドによるパッチの管理 (作業マップ)

| 作業                                    | 説明                                                                                 | 参照先                                   |
|---------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|
| 2. (オプション) Web プロキシを指定します。            | Web プロキシを備えたファイアウォールの背後にシステムが存在している場合、パッチサーバーからパッチを取得するには、その Web プロキシを指定する必要があります。 | 481 ページの「Web プロキシを指定する方法」             |
| 3. パッチをダウンロードおよび適用します。                | patchadd コマンドを使ってパッチをシステムにダウンロードおよび適用します。                                          | 482 ページの「パッチをダウンロードおよび適用する方法」         |
| 4. (オプション) システムに適用済みのパッチに関する情報を表示します。 | すでにシステムに適用されているパッチに関する情報を表示するには、patchadd、showrev、pkgparam のいずれかのコマンドを使用します。        | 484 ページの「パッチの情報を表示する方法」               |
| 5. (オプション) システムからパッチを削除します。           | 必要に応じて、patchrm コマンドを使ってシステムからパッチを削除します。                                            | 485 ページの「patchrm コマンドを使用してパッチを削除する方法」 |

## ▼ Web プロキシを指定する方法

Web プロキシを備えたファイアウォールの背後にシステムが存在している場合、patchadd を使ってパッチを「適用」するには、その Web プロキシを指定する必要があります。

- 1 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
- 2 次のいずれかの方法を使って Web プロキシを指定します。
  - 環境変数 `http_proxy`、`HTTPPROXY`、`HTTPPROXYPORT` のいずれかを使って Web プロキシを指定します。  
次に例を示します。  

```
# setenv http_proxy http://mycache.domain:8080
```

または、次のいずれかを指定します。  

```
# setenv HTTPPROXY mycache.domain  
# setenv HTTPPROXYPORT 8080
```
  - patchadd コマンド行で Web プロキシを指定します。

次に例を示します。

```
# patchadd -x mycache.domain:8080 \  
-M http://www.sun.com/solaris/patches/latest 101223-02 102323-02
```

## patchadd -R を使って代替 root パスを作成する際の制限

ゾーンに対応していない Oracle Solaris リリースが稼働するシステム上では、patchadd コマンドまたは -R オプションを指定できる任意のコマンドを使って、非大域ゾーンがインストールされた大域ゾーンの代替 root パスを指定しても、そのコマンドは正しく動作しません。

代替ブート環境で非大域ゾーンが構成済みであるがインストール済みではない場合、-R オプションを使ってソフトウェアパッケージとパッチを追加および削除できます。

潜在的な問題を回避するには、-R オプションを使って代替ルートパスを作成しないようにしてください。

Oracle Solaris 10 を実行している場合には、次のいずれかの方法を選択することもできます。

- Solaris 10 1/06 OS 以降で稼働していないすべてのシステムをアップグレードします。
- Oracle Solaris 10 初期 3/05 リリースを実行している場合、次のパッチをインストールすれば、-R オプションを指定できるコマンドを使って代替ルートパスを作成できるようになります。
  - **SPARC** システムの場合 - パッチ 119254 のリビジョン 19 以降をインストールします。
  - **x86** システムの場合 - パッチ 119255 のリビジョン 19 以降をインストールします。
- Oracle Solaris OS などの代替ルートを、アクティブな OS としてブートします。これで、-R オプションを使用しないでパッケージおよびパッチをインストールおよびアンインストールできるようになります。

詳細は、[patchadd\(1M\)](#)、[patchrm\(1M\)](#)、[pkgadd\(1M\)](#)、および [pkgrm\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## ▼ パッチをダウンロードおよび適用する方法

「署名なしパッチ」を「ダウンロード」し、それをシステムに適用するには、次の手順を実行します。

署名付きパッチを適用するには、パッケージキーストアを事前にセットアップしておく必要があります。詳細は、[http://download.oracle.com/docs/cd/E17476\\_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html](http://download.oracle.com/docs/cd/E17476_01/javase/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/keytool.html) を参照してください。

- 1 次のいずれかの方法でシステムにアクセスします。
  - パッチを適用するシステムにログインします。
  - パッチをダウンロードし、それを ftp コマンド経由でターゲットシステムにコピーします。
- 2 Web ブラウザを起動し、<http://sunsolve.Sun.COM> の SunSolve Online Patch Portal にアクセスします。
- 3 特定のパッチをダウンロードするのか、パッチクラスタをダウンロードするのかを決定したあと、次のいずれかを実行します。
  - 「パッチ検索」検索フィールドにパッチ番号 (*patch-id*) を入力し、「パッチ検索」をクリックします。

*patch-id* を入力すると、最新バージョンのパッチがダウンロードされます。

自由に使用できるパッチの場合、そのパッチの README が表示されます。このパッチが自由に使用できない場合は、ACCESS DENIED メッセージが表示されます。

SPARC システムと x86 システムのパッチ番号が異なることに注意してください。「パッチ ID」は、パッチの README 内に記載されています。システムのアーキテクチャーに適合したパッチを適用してください。
  - パッチを適用するシステム上で動作している Oracle Solaris リリースに適合した推奨パッチクラスタを選択します。
- 4 次の手順に従ってパッチをダウンロードします。
  - 署名付きパッチをダウンロードするには、「Download Signed Patch (*n bytes*)」ボタンをクリックします。
  - 署名なしパッチをダウンロードするには、「Download Patch (*n bytes*)」ボタンをクリックします。

1つまたは複数のパッチのダウンロードに成功したら、Web ブラウザを閉じます。
- 5 ダウンロードされたパッチが格納されているディレクトリに移動します。
- 6 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

- 7 (署名なしパッチ) 署名なしパッチをダウンロードした場合、パッチを解凍します。

```
# unzip patch-id
```

- 8 署名付きまたは署名なしのパッチを適用します。

次に例を示します。

```
# patchadd /tmp/111879-01
```

- 署名付きパッチをダウンロードした場合、それを適用します。  
次に例を示します。

```
# patchadd /tmp/111879-01.jar
```

- 署名なしパッチをダウンロードした場合、それを適用します。  
次に例を示します。

```
# patchadd /tmp/111879-01
```

- 9 パッチの適用に成功したことを確認します。

次に例を示します。

```
# patchadd -p | grep 111879
```

```
Patch: 111879-01 Obsoletes: Requires: Incompatibles: Packages: SUNWwsr
```

## ▼ パッチの情報を表示する方法

パッチの適用に先立ち、以前に適用されたパッチの詳細を確認することをお勧めします。

次のコマンドは、すでにシステムに適用されているパッチに関する有用な情報を提供します。

- `patchadd -p or showrev -p`

システムに適用されたすべてのパッチを表示します。

- `pkgparam pkgid PATCHLIST`

`pkgid` (SUNWadmap など) によって識別されるパッケージに適用されたすべてのパッチを表示します。

- `patchadd -S Oracle-Solaris-OS - p`

特定の OS サーバーに適用されたすべての `/usr` パッチを表示します。

- システムに適用されたパッチに関する情報を表示するには、次のいずれかの `patchadd` コマンド行を使用します。

- システムに適用されたすべてのパッチに関する情報を取得するには、次のように入力します。

```
$ patchadd -p
```

- 特定のパッチがシステムに適用されているかどうかを確認するには、たとえば次のように入力します。

```
$ patchadd -p | grep 111879
```

## ▼ patchrm コマンドを使用してパッチを削除する方法

- 1 スーパーユーザーになります。

- 2 パッチを削除します。

```
# patchrm 111879-01  
Checking installed patches...
```

```
Backing out patch 111879-01...
```

```
Patch 111879-01 has been backed out.
```

- 3 パッチが削除されたことを確認します。

```
# patchadd -p | grep 111879  
#
```



## SMF サービス

---

次の表に、SMFを使用するように変換されたサービスをいくつか示します。サービスごとに、デーモンまたはサービスの名前、サービスのFMRI、サービスを開始するための実行スクリプト、およびサービスがinetdによって開始されるかどうかを示します。

表A-1 SMF サービス

| サービス名       | FMRI                                               | 実行スクリプト  | inetd サービス |
|-------------|----------------------------------------------------|----------|------------|
| automount   | svc:/system/filesystem/autofs:default              | autofs   | 該当しない      |
| consadmd    | svc:/system/consadm:default                        | rootusr  | 該当しない      |
| coreadm     | svc:/system/coreadm:default                        | coreadm  | 該当しない      |
| cron        | svc:/system/cron:default                           | cron     | 該当しない      |
| cryptoadm   | svc:/system/cryptosvc:default                      | なし       | 該当しない      |
| cvcd        | svc:/system/cvc:default                            | cvcd     | 該当しない      |
| dcs         | svc:/platform/<arch>/dcs:default                   | なし       | 該当する       |
| dtlogin     | svc:/application/graphical-login/cde-login:default | dtlogin  | 該当しない      |
| dtprintinfo | svc:/application/cde-printinfo:default             | dtlogin  | 該当しない      |
| dtspcd      | svc:/network/cde-spc:default                       | なし       | 該当する       |
| dumpadm     | svc:/system/dumpadm:default                        | savecore | 該当しない      |
| efdaemon    | svc:/platform/<arch>/efdaemon:default              | efcode   | 該当しない      |
| fmd         | svc:/system/fmd:default                            | なし       | 該当しない      |
| gssd        | svc:/network/rpc/gss:default                       | なし       | 該当する       |

表 A-1 SMF サービス (続き)

| サービス名       | FMRI                             | 実行スクリプト     | inetd サービス |
|-------------|----------------------------------|-------------|------------|
| imapd       | svc:/network/imap/tcp:default    | なし          | 該当する       |
|             | svc:/network/imapnew/tcp:default |             |            |
| in.chargend | svc:/network/chargen:dgram       | なし          | 該当する       |
|             | svc:/network/chargen:stream      |             |            |
| in.comsat   | svc:/network/comsat:default      | なし          | 該当する       |
| in.daytimed | svc:/network/daytime:dgram       | なし          | 該当する       |
|             | svc:/network/daytime:stream      |             |            |
| in.dhcpd    | svc:/network/dhcp-server:default | dhcp        | 該当しない      |
| in.discardd | svc:/network/discard:dgram       | なし          | 該当する       |
|             | svc:/network/discard:stream      |             |            |
| in.echod    | svc:/network/echo:dgram          | なし          | 該当する       |
|             | svc:/network/echo:stream         |             |            |
| in.fingerd  | svc:/network/finger:default      | なし          | 該当する       |
| in.ftpd     | svc:/network/ftp:default         | なし          | 該当する       |
| in.named    | svc:/network/dns/server:default  | inetsvc     | 該当しない      |
| in.rarpd    | svc:/network/rarp:default        | boot.server | 該当しない      |
| in.rdisc    | svc:/network/initial:default     | inetinit    | 該当しない      |
| in.rexecd   | svc:/network/rexec:default       | なし          | 該当する       |
| in.rlogind  | svc:/network/login:rlogin        | なし          | 該当する       |
|             | svc:/network/login:eklogin       |             |            |
|             | svc:/network/login:klogin        |             |            |
| in.routed   | svc:/network/initial:default     | inetinit    | 該当しない      |
| in.rshd     | svc:/network/shell:default       | なし          | 該当する       |
|             | svc:/network/kshell              |             |            |
| in.talkd    | svc:/network/talk:default        | なし          | 該当する       |
| in.telnetd  | svc:/network/telnet:default      | なし          | 該当する       |
| in.tftpd    | svc:/network/tftp/udp6:default   | なし          | 該当する       |





表 A-1 SMF サービス (続き)

| サービス名           | FMRI                                                               | 実行スクリプト     | inetd サービス |
|-----------------|--------------------------------------------------------------------|-------------|------------|
| nfsd            | svc:/network/nfs/server:default                                    | nfs.server  | 該当しない      |
| nfsmapid        | svc:/network/nfs/client:default<br>svc:/network/nfs/server:default | nfs.server  | 該当しない      |
| nis_cachemgr    | svc:/network/rpc/nisplus:default                                   | rpc         | 該当しない      |
| nscd            | svc:/system/name-service-cache:default                             | nscd        | 該当しない      |
| ntpdate         | svc:/network/ntp:default                                           | xntpd       | 該当しない      |
| ocfserv         | svc:/network/rpc/ocfserv:default                                   | ocfserv     | 該当しない      |
| picld           | svc:/system/picl:default                                           | picld       | 該当しない      |
| pmconfig        | svc:/system/power:default                                          | power       | 該当しない      |
| printd          | svc:/application/print/cleanup:default                             | spc         | 該当しない      |
| quotaon         | svc:/system/filesystem/local:default                               | ufs_quota   | 該当しない      |
| rcapd           | svc:/system/rcap:default                                           | rcapd       | 該当しない      |
| rpcbind         | svc:/network/rpc/bind:default                                      | rpc         | 該当しない      |
| rpc.bootparamd  | svc:/network/rpc/bootparams:default                                | boot.server | 該当しない      |
| rpc.mdcomm      | svc:/network/rpc/mdcomm:default                                    | なし          | 該当する       |
| rpc.metad       | svc:/network/rpc/meta:default                                      | なし          | 該当する       |
| rpc.metamedd    | svc:/network/rpc/metamed:default                                   | なし          | 該当する       |
| rpc.metamhd     | svc:/network/rpc/metamh:default                                    | なし          | 該当する       |
| rpc.nisd        | svc:/network/rpc/nisplus:default                                   | rpc         | 該当しない      |
| rpc.nispasswdd  | svc:/network/rpc/nisplus:default                                   | rpc         | 該当しない      |
| rpc.rexd        | svc:/network/rpc/rex:default                                       | なし          | 該当する       |
| rpc.rstatd      | svc:/network/rpc/rstat:default                                     | なし          | 該当する       |
| rpc.rusersd     | svc:/network/rpc/rusers:default                                    | なし          | 該当する       |
| rpc.smsserverd  | svc:/network/rpc/smsserver:default                                 | なし          | 該当する       |
| rpc.sprayd      | svc:/network/rpc/spray:default                                     | なし          | 該当する       |
| rpc.ttdbserverd | svc:/network/rpc/ttdbserver:tcp                                    | なし          | 該当する       |
| rpc.walld       | svc:/network/rpc/wall:default                                      | なし          | 該当する       |

表 A-1 SMF サービス (続き)

| サービス名                                   | FMRI                                                               | 実行スクリプト    | inetd サービス |
|-----------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|------------|------------|
| rpc.yppasswdd およ<br>び rpc.yupdated      | svc:/network/nis/server:default                                    | rpc        | 該当しない      |
| rquotad                                 | svc:/network/nfs/rquota:default                                    | なし         | 該当する       |
| sadc                                    | svc:/system/sar:default                                            | perf       | 該当しない      |
| savecore                                | svc:/system/dumpadm:default                                        | savecore   | 該当しない      |
| sendmail                                | svc:/network/smtp:sendmail                                         | sendmail   | 該当しない      |
| sf880drd                                | svc:/platform/<arch>/sf880drd:default                              | sf880dr    | 該当しない      |
| slpd                                    | svc:/network/slp:default                                           | slpd       | 該当しない      |
| sshd                                    | svc:/network/ssh:default                                           | sshd       | 該当しない      |
| statd                                   | svc:/network/nfs/client:default<br>svc:/network/nfs/server:default | nfs.server | 該当しない      |
| svc.startd                              | svc:/system/svc/restarter:default                                  | なし         | 該当しない      |
| syseventd                               | svc:/system/sysevent:default                                       | devfsadm   | 該当しない      |
| sysidpm、sysidns、sysid<br>sysid、sysidnet | svc:/system/sysidtool:system                                       | sysid.sys  | 該当しない      |
| sysidnet                                | svc:/system/sysidtool:net                                          | sysid.net  | 該当しない      |
| syslogd                                 | svc:/system/system-log:default                                     | syslog     | 該当しない      |
| ttymon                                  | svc:/system/console-login:default                                  | inittab    | 該当しない      |
| utmpd                                   | svc:/system/utmp:default                                           | utmpd      | 該当しない      |
| vold                                    | svc:/system/filesystem/volfs:default                               | volmgt     | 該当しない      |
| xntpd                                   | svc:/network/ntp:default                                           | xntpd      | 該当しない      |
| ypbind                                  | svc:/network/nis/client:default                                    | rpc        | 該当しない      |
| ypserv                                  | svc:/network/nis/server:default                                    | rpc        | 該当しない      |
| ypxfrd                                  | svc:/network/nis/server:default                                    | rpc        | 該当しない      |
| zoneadm                                 | svc:/system/zones:default                                          | なし         | 該当しない      |
| なし                                      | svc:/network/loopback:default                                      | network    | 該当しない      |
| なし                                      | svc:/network/physical:default                                      | network    | 該当しない      |



# 索引

---

## 数字・記号

\$ZFS-BOOTFS, ZFS ブートオプション, 213-214

## A

ARCH=all パッケージ、失われたものの追加方法、  
ディスクレスクライアントのトラブル  
シューティング, 182-190

authTypes タグ, Java Web Console, 87

## B

banner コマンド (PROM), 227

basedir キーワード (管理ファイル), 428

bin グループ, 94

## BIOS

システム BIOS

GRUB ブート環境の, 317-318

boot-archive サービスの管理, 296

boot-file プロパティ, 変更, 232

bootadm コマンド, ブートアーカイブの管理に使用, 296

bootfs プールプロパティ, 212

## Bourne シェル

「ユーザー初期設定ファイル」も参照  
基本機能, 112, 113

Break キー, 306

## C

### CD-ROM デバイス

マウント済みの CD からソフトウェアを追加する  
例, 464

CDPATH 環境変数, 114

### .cshrc ファイル

カスタマイズ, 112, 119

説明, 110

### C シェル

環境変数, 113, 114, 118

基本機能, 112, 113

シェル (ローカル) 変数, 113, 114

ユーザー初期設定ファイル, 110, 119

「ユーザー初期設定ファイル」を参照  
作成, 112

## D

daemon グループ, 94

dfstab ファイル, ユーザーのホームディレクトリ  
の共有, 131

DHCP, GRUB ベースの PXE ブートの設定, 287

DHCP の設定, GRUB を使用したネットワークから  
のブート, 288-289

DHCP マクロ, GRUB での使用, 288-289

### -d オプション

regadm register

登録情報の事前取得, 373

**E**

- eeeprom コマンド
  - ブート動作の変更, 235-237
  - ブートパラメータの設定に使用する方法
    - GRUB, 236-237
- eeeprom コマンドを使用したブート動作の設定,
  - GRUB ベースのブート, 236-237
- env コマンド, 113
- /etc/dfs/dfstab ファイル, ユーザーのホームディレクトリの共有, 131
- /etc/init.d ディレクトリ, 411
- /etc/inittab ファイル, 391
  - エントリの説明, 391
  - デフォルトの例, 392
- /etc/passwd ファイル, 102
  - 説明, 102
  - フィールド, 102
  - 復元 (例)
    - x86, 285
  - 復旧
    - SPARC, 310
  - 復旧 (例)
    - x86, 341
  - ユーザー ID 番号の割り当て, 94
  - ユーザーアカウントの削除, 135
- /etc/passwd ファイルの修復, x86, 285
- /etc/shadow ファイル, 説明, 102
- /etc/vfstab ファイル, 132
- /etc ファイル
  - ユーザーアカウント情報, 100
- /export/home ファイルシステム, 99

**F**

- findroot コマンド
  - GRUB メニューエントリの追加, 248-249
  - menu.lst エントリ, 246-248
- FMRI, 説明, 382-383

**G**

- GID, 94
  - 大きな数値, 95

**GID (続き)**

- 定義, 97
- 割り当て, 97
- groups コマンド, 97
- group ファイル
  - 説明, 102
  - フィールド, 104
  - ユーザーアカウントの削除, 135
- GRUB
  - ブート動作の変更
    - menu.lst ファイルの編集, 242-246
    - 複数のオペレーティングシステムのサポート, 322-323
  - GRUBClient, GRUB ベースのネットワークブート, 286-291
  - GRUB 機能コンポーネント, 320-322
  - GRUB デバイスの命名規則, 321
  - GRUB によるブート, 参照情報, 209-210
  - GRUB の管理, 参照情報, 209-210
  - GRUB の機能コンポーネント, 320-322
  - GRUB のコンポーネント, 320-322
  - GRUB の通常アーカイブ
    - ブートアーカイブ
      - 参照情報, 208-209
  - GRUB の用語, 318-320
  - GRUB ブート環境でのカーネル初期化, 318
  - GRUB ブート環境での複数のオペレーティングシステム, 322-323
  - GRUB ブート環境のシステム BIOS, 317-318
  - GRUB ベースのネットワークブート, 286-291
  - GRUB ベースのブート
    - DHCP マクロについて, 288-289
    - 参照情報, 209-210
    - システムの対話式のブート, 275-277
    - システムを実行レベル S でブートする方法, 272-275
    - 破壊されたブートアーカイブを再構築する方法, 284-286
    - ブート時に GRUB カーネルの動作を変更, 239-240, 278-281
    - ブート時に GRUB メニューでカーネルの動作を変更, 237-238
    - フェイルセーフモードでのブート, 282-283

GRUB メニュー  
 GRUB カーネルの動作を変更, 237-238  
 説明, 241  
 GRUB メニューエントリの追加, findroot コマンド, 248-249  
 GRUB メニューでカーネルの使用法を変更, 239-240, 278-281  
 GRUB を使用した x86 システムの対話式のブート, 275-277  
 GRUB を使用したシステムのブート、概要, 323-325  
 GRUB を使用したネットワークからのブート, 286-291  
 DHCP 設定, 287  
 GRUB を使用してシステムを実行レベル s でブートする方法, 272-275

## H

halt コマンド, 217  
 history 環境変数, 114  
 HOME 環境変数, 114  
 /home ファイルシステム, ユーザーのホームディレクトリ, 99  
 HTTP 通信エラー, 自動登録のトラブルシューティング, 377  
 HTTP プロキシとポートの設定  
 自動登録構成  
 構成, 369  
 HTTP プロキシ認証, 自動登録構成, 369  
 HTTP プロキシパスワード  
 エラーメッセージ  
 自動登録のトラブルシューティング, 377  
 HTTP プロキシパスワードを送信できない  
 自動登録のトラブルシューティング  
 エラーメッセージ, 377

## I

ID 番号  
 グループ, 94, 97  
 ユーザー, 94, 95, 134  
 inetadm コマンド, 説明, 386

init コマンド  
 スタンドアロンシステムをシャットダウンする, 222  
 説明, 217  
 init 状態, 「実行レベル」を参照  
 IP マクロ, DHCP の設定, 288  
 iSCSI ブート, 193-194

## J

Java Web Console  
 authorizing users of applications, 87  
 authTypes タグの使用, 87  
 noaccess ユーザー ID, 72  
 アプリケーションの起動, 63  
 アプリケーションの登録, 81-82, 83  
 アプリケーションの登録解除, 82-83, 83-84  
 アプリケーションの特権, 85  
 アプリケーションへのアクセス, 85  
 (概要), 60  
 コンソールサービスの管理, 66-68  
 コンソールサービスの起動, 66  
 コンソールサービスの停止, 67  
 コンソールサービスの無効化, 67-68  
 コンソールサービスの有効化, 66-67  
 コンソールへのアクセス, 84  
 コンソールを実行するユーザー ID の変更, 72  
 状態, 76-79  
 セキュリティーに関する注意事項, 84  
 設定, 68  
 デフォルトロギングとデバッグロギングの違い, 69  
 トラブルシューティング, 76  
 内部パスワード, 86  
 配備済みアプリケーションの一覧表示, 80-81  
 プロパティ, 76-79  
 プロパティの設定, 71-72  
 プロパティの変更  
 監査実装, 70  
 コンソールのセッションタイムアウト, 69  
 ロギングレベル, 69  
 ほかのアプリケーションとの互換性, 61  
 リファレンス情報, 84-90

## Java Web Console (続き)

- リモートシステムへのアプリケーションのアクセス, 86
- レガシーアプリケーション, 79

**K**

## Korn シェル

- 基本機能, 112
- ユーザー初期設定ファイル, 110

**L**

L1 + Aキー, 306

LANG 環境変数, 114, 117, 118

LC 環境変数, 117, 118

\*LK\* パスワード, 135

local.cshrc ファイル, 110

local.login ファイル, 110

local.profile ファイル, 110

locale 環境変数, 114

.login ファイル

- カスタマイズ, 112, 119

- 説明, 110

LOGNAME 環境変数, 115

LPDEST 環境変数, 115

-L オプション

- ZFS ブートオプション

- 使用可能な BE の表示, 213

-L ブートオプション, SPARC プラットフォームで

- の ZFS ルートファイルシステムの

- ブート, 259-263

**M**

MAIL 環境変数, 114, 115

MANPATH 環境変数, 115

menu.lst, GRUB コンポーネント, 320-322

menu.lst ファイル

- findroot コマンドを使用するエントリの追

- 加, 248-249

- 場所, 242

menu.lst ファイル (続き)

- ブート時の対話処理

- 説明, 241

- ブート動作の変更, 242-246

- マルチブート実装, 324-325

menu.lst ファイルの編集, ブート動作の変

- 更, 242-246

My Oracle Support, アカウント情報, 358

My Oracle Support での認証

- 名前付きサポート資格の指定

- 自動登録, 358

My Oracle Support のサポート情報, 入手方法, 358

**N**

newgrp コマンド, 97

NIS

- ユーザーアカウント, 100, 102

NIS+, ユーザーアカウント, 135

noaccess ユーザー/グループ, 94

- Java Web Console, 72

noask\_pkgadd 管理ファイル, 430, 465

nobody ユーザー/グループ, 94

**O**

Oracle Java Web onsole, 59

Oracle Solaris OS での GRUB のバージョン, 323-325

Oracle Solaris 自動登録

- HTTP プロキシとポートの設定

- 構成, 369

- HTTP プロキシ認証

- 構成, 369

- regadm register コマンド, 374

- SMF サービスの管理, 363

- 概要, 358-362

- 構成の消去, 367

- 構成の表示, 366

- 設定の管理, 360

- 動作する方法, 360

- プロパティの構成, 368

Oracle Solaris 自動登録機能, トラブルシューティン

- グ, 377



Oracle Solaris ブート動作, 管理方法, 225-249

Oracle 製品登録システム

情報の取得, 376

データの転送, 359

OS サーバー, 説明, 155

## P

passwd ファイル, 102

passwd ファイル, フィールド, 102

passwd ファイル

復元 (例)

x86, 285

復旧

SPARC, 310

復旧 (例)

x86, 341

ユーザー ID 番号の割り当て, 94

ユーザーアカウントの削除, 135

patchadd コマンド, による作業, 481-485

PATH 環境変数

設定, 117

説明, 115, 116

path シェル変数, 113

pkgadd コマンド

-a オプション (管理ファイル), 429, 430, 463, 465

-d オプション (デバイス名), 463, 467

-s オプション (スプールディレクトリ), 467, 468

概要, 426

使用時の要件, 428

スプールディレクトリ, 467

スプールディレクトリ (例), 468

代替ベースディレクトリ, 430

パッケージの追加 (手順), 463

HTTP URL の使用, 466

ユーザーの対話操作の省略, 429, 430

pkgadm コマンド, 概要, 426

pkgchk コマンド

概要, 426

使用 (例), 470

pkginfo コマンド

概要, 426, 428

使用方法, 468

pkginfo コマンド (続き)

すべてのインストール済みパッケージの表示 (例), 469

pkgparam コマンド, 概要, 426

pkgrm コマンド

rm コマンド (比較), 428

概要, 426

使用時の要件, 428

注意, 428

pkgtrans コマンド, 概要, 426

/pkg ディレクトリ, 468

poweroff コマンド, 217

prodreg コマンド, 概要, 426

.profile ファイル

カスタマイズ, 112, 119

説明, 110

PROM, PROM リビジョンの確認, 227

prompt シェル変数, 115

PS1 環境変数, 115

PXEClient, GRUB ベースのネットワーク

ブート, 286-291

## R

reboot コマンド, 217

regadm register, 自動登録タスク, 374

regadm register -d, 登録情報の事前取得, 373

regadm コマンド

の使用要件, 363

プロパティの構成, 368

用途, 362

regadm コマンドの使用要件, 自動登録, 363

removef コマンド, 428

reset コマンド, 231

root パスワードの復元 (手順), SPARC, 310

root パスワード, 忘れる, SPARC, 310

root パスワードを忘れる, SPARC, 310

## S

setenv コマンド, 113, 114

set コマンド, 113

shadow ファイル, 説明, 102

shadowファイル,フィールド, 104  
SHELL 環境変数, 115  
shutdown コマンド  
    サーバーのシャットダウン, 198  
    サーバーのシャットダウン(方法), 219  
    説明, 217  
    ユーザーに通知する, 217  
smcwebserver コマンド, Java Web Console, 62  
SMF  
    委任リスタータ, 387  
    概要, 379  
    コマンド, 386  
    ライブラリインタフェース, 386-387  
smreg コマンド  
    Java Web Console, 62, 82  
Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助), 概要, 338-339  
Solaris 管理コンソール  
    RBAC と組み合わせた使用, 42  
    起動(方法), 47  
    使用する理由, 36  
    説明, 33  
    ツールの説明, 34  
Solaris 管理コンソールのナビゲーション区画, ノード, 37  
SPARC ブートオプション, Oracle Solaris ZFS ルートファイルシステムからのブート, 213  
SPARC プラットフォームでの ZFS ブート, 使用されるブートオプション, 259-263  
staff グループ, 97  
stage2, GRUB コンポーネント, 320-322  
Stop + A キー, 306  
stty コマンド, 117  
Java Web Console からのアプリケーションの登録解除, 82  
Java Web Console サービスの管理, 66-68  
Java Web Console のコマンド  
    smcwebserver, 62  
    smreg, 62  
    wadmin, 62  
Java Web Console の設定, 68  
Java Web Console のプロパティの変更, 監査実装の選択, 70  
Sun Online アカウント, 入手方法, 359

Sun Online アカウントの入手方法, 入手方法, 359  
SUNW 接頭辞, 428  
Sun ソフトウェアパッケージ  
    インストール, 465  
    追加(例), 464  
svc.startd デーモン, 説明, 387  
svcadm コマンド, 説明, 386  
svccfg コマンド, 説明, 386  
svccprop コマンド, 説明, 386  
svcs コマンド, 説明, 386  
sync コマンド, 307

## T

TERMINFO 環境変数, 115  
TERM 環境変数, 115  
ttys (擬似), 94  
ttytype 擬似ユーザーログイン, 94  
TZ 環境変数, 116

## U

UID, 134  
    大きな数値, 95  
    定義, 94  
    割り当て, 95  
umask コマンド, 118  
UNIX グループ, 97  
uucp グループ, 94

## V

/var/sadm/install/admin ディレクトリ, 430  
/var/sadm/patch ディレクトリ, 477  
/var/spool/pkg ディレクトリ, 466, 468

## W

wadmin コマンド, Java Web Console, 62  
Web ベースのシステム管理アプリケーション, Java Web Console, 60

who コマンド, 218, 390

## X

x86 ブートオプション, ZFS ルートファイルシステムからのブート, 213-214

## Z

ZFS ルートファイルシステム, SPARC プラットフォームでのブート, 259-263

ZFS ルートファイルシステムからのブート

SPARC ブートオプション, 213

SPARC プラットフォーム, 259-263

x86 ブートオプション, 213-214

-z オプション, ZFS ブートオプション, 213

-z ブートオプション, SPARC プラットフォームでの ZFS ルートファイルシステムのブート, 259-263

## あ

アーカイブ

フェイルセーフアーカイブのブート

GRUB, 282-283

アクセス権, 118

アクティブな menu.lst ファイル, 場所, 242

アクティブな menu.lst ファイルの場所, 242

アプライアンス, 定義, 150

アプリケーションの起動, Java Web Console の起動ページ, 63

アプリケーションの特権, Java Web Console, 85

アプリケーションへのアクセス, Java Web Console, 85

暗号化, 102

## い

依存記述 (SMF), 説明, 380

一次グループ, 97

委任リスタータ (SMF), 387

## う

失われた ARCH=all パッケージの追加 (例), 185-186

## え

エラーメッセージ

自動登録での問題のトラブルシューティング

HTTP 通信エラー, 377

HTTP プロキシのパスワード, 377

認証の失敗

自動登録, 377

## か

カーネルの動作, GRUB メニューで変更, 237-238

鍵, ユーザー, 「ユーザー鍵」を参照

確認

pkginfo コマンドによるソフトウェア

パッケージのインストール, 467

システムの実行レベル (方法), 390

ソフトウェアパッケージのインストール

pkginfo コマンド, 467

環境変数

LOGNAME, 115

LPDEST, 115

PATH, 115, 117

SHELL, 115

TZ, 116

説明, 113, 118

監査イベント, Java Web Console, 70

監査実装, Java Web Console, 70

管理ファイル, キーワード, 428

## き

キーストア, 424

擬似 ttys, 94

擬似ユーザーログイン, 94

- く
  - クライアントマクロ, DHCP の設定, 288
  - クラスマクロ, DHCP の設定, 288
  - グループ
    - ID 番号, 94, 97
    - UNIX, 97
    - 一次, 97
    - 一次グループの変更, 97
    - 管理用のガイドライン, 97, 98
    - 情報の格納, 102, 104
    - 説明, 97
    - デフォルト, 97
    - 名前
      - 説明, 97
    - 名前の説明, 97
    - 二次, 97
    - ネームサービス, 98
    - ユーザーが所属しているグループの表示, 97
  - グループ ID 番号, 94, 97
- け
  - 検査
    - インストール済みのパッケージ (例), 470
    - ソフトウェアインストール (例), 470
- こ
  - 構成リポジトリ (SMF), 「リポジトリ」を参照
  - コマンド (SMF), 一覧, 386
  - コンソールのセッションタイムアウト, Java Web Console のプロパティの変更, 69
  - コンソールへのアクセス, Java Web Console, 84
- さ
  - サーバー, OS サーバー, 155
  - サービス (SMF), 説明, 381
  - サービス管理機能
    - 「SMF」を参照
  - サービス構成リポジトリ, 「リポジトリ」を参照
  - サービスタグ, 製品登録, 376
  - サービスの管理, 自動登録用, 363
  - サービスの起動と停止, 410
  - サービスの状態, 説明, 383
  - 最小
    - ユーザーのパスワード長, 98
    - ユーザーのログイン名の長さ, 101
  - 最大
    - ユーザーのパスワード長, 98
    - ユーザーのログイン名の長さ, 101
  - 最大数, ユーザーが所属できる二次グループ, 97
  - 最大値, ユーザー ID 番号, 94
  - サイト初期設定ファイル, 111
  - 削除
    - 管理ファイルによるパッケージの削除, 430
    - ソフトウェアパッケージ
      - ガイドライン, 428
    - ディスクレスクライアントの OS サービス (方法), 178
    - ディスクレスクライアントの OS サービス (例), 178
  - パッチ
    - patchrm の使用, 485
  - ユーザーのホームディレクトリ, 135
  - ユーザーのメールボックス, 135
- サポート資格
  - Oracle Solaris 自動登録
    - 指定, 371
    - 指定, 358
    - 指定する場合, 359
    - 指定による登録
      - 例, 376
  - サポート資格を使用した登録 (例), 376
  - 参照情報, GRUB の管理, 209-210
- し
  - シェル
    - 環境, 113
    - 環境変数, 113, 114, 118
    - 基本機能, 112, 113
    - ユーザー初期設定ファイル, 119
    - ローカル変数, 113, 114
  - シェル変数, 114
  - 時間帯の環境変数, 116

- システムアカウント, 94
- システム資産の登録, Oracle Solaris 自動登録, 358-362
- システムシャットダウンコマンド, 217
- システム初期設定ファイル, 100
- システムタイプ
  - アプライアンス, 150
  - 概要, 147
  - スタンドアロンシステム, 149
  - 選択のガイドライン, 150
  - ディスクレスクライアント, 149
- システムのダウン時間をユーザーに通知する, 218
- システムの登録
  - Oracle Solaris 自動登録機能の使用, 358
  - regadm register コマンドの使用, 374
  - 自動登録が動作する方法, 360
- システムの登録に使用するコマンド
  - regadm register
    - 自動登録, 374
- 実行制御スクリプト
  - サービスの起動と停止, 410
  - 追加 (方法), 411
  - 無効にする (方法), 411
- 実行レベル
  - 0 (電源切断レベル), 389
  - 1 (シングルユーザーレベル), 389
  - 2 (マルチユーザーレベル), 389
  - 3 (NFS を使用したマルチユーザー)
    - システムが実行レベル 3 になると実行される処理, 392
    - ブート, 253, 271, 329
  - 3 (NFS を持つマルチユーザー), 389
  - 3 (マルチユーザーと NFS)
    - ブート, 176
  - 6 (リポートレベル), 389
  - s または S (シングルユーザー状態)
    - ブート, 254
  - s または S (シングルユーザーレベル), 389
    - ブート, 332
  - 確認 (方法), 390
  - 定義, 389
  - デフォルトの実行レベル, 389
- 実行レベル S でのシステムのブート
  - GRUB ベースのブート
    - 方法, 272-275
- 失敗した認証のトラブルシューティング, 自動登録での問題, 377
- 自動登録
  - HTTP プロキシとポート
    - 構成, 369
  - HTTP プロキシ認証, 369
  - Oracle Solaris 自動登録機能の使用, 358
  - regadm コマンド, 362
    - 要件, 363
  - SMF サービスの有効化, 365
    - 構成情報, 366
    - 構成情報の消去, 367
  - サポート資格の指定, 358
  - 情報の取得方法, 376
  - データ転送
    - サービスタグ, 359
  - 動作する方法, 360
  - 匿名での登録
    - 例, 376
  - 名前付きサポート資格の指定, 371
  - プロパティの構成, 368
  - 問題のトラブルシューティング, 377
    - 予行演習機能, 373
- 自動登録 CLI, regadm コマンド, 374
- 自動登録構成の消去, 367
- 自動登録構成の表示, 366
- 自動登録に関するトラブルシューティング, 377
- 自動登録の動作方法, Oracle Solaris 自動登録, 360
- 自動登録の問題
  - 認証の失敗
    - エラーメッセージ, 377
- 自動登録の問題のトラブルシューティング
  - HTTP 通信エラー, 377
  - HTTP プロキシパスワード
    - エラーメッセージ, 377
- 自動登録の有効化, SMF サービス, 365
- 自動登録プロパティの構成, 368
- 自動登録プロパティの設定, regadm コマンドの使用, 368
- 自動登録用 SMF サービス,
  - svc:/application/autoreg, 363

自動マウント, ユーザーのホームディレクトリ, 100  
シャットダウン  
  shutdown と init の各コマンドでシステムを正常にシャットダウンする, 216  
  システム, ガイドライン, 198-199  
修復/etc/passwd ファイル, SPARC, 310  
修復/etc/passwd ファイル, x86, 341  
障害管理リソース識別子, 「FMRI」を参照  
使用可能な BE のリストの表示  
  ZFS ルートのブート  
    boot -L オプション, 213  
証明書, 信頼される, 定義, 424  
初期設定ファイル, システム, 100  
署名付きパッチ, 476  
  「パッチ」も参照  
  使用する場合, 478  
署名なしパッチ, 476  
  使用する場合, 478  
新機能, SMF, 379  
シングルサインオン, 安全な https ポート, Java Web Console, 61  
シングルユーザーレベル, 「実行レベル s または S」を参照

## す

スーパーユーザー (root) パスワード, 忘れる, SPARC, 310  
スケルトンディレクトリ (/etc/skel), 110  
スタンドアロンシステム, 定義, 149  
スナップショット (SMF), 説明, 385-386  
スプールディレクトリ  
  ソフトウェアパッケージのインストール (方法), 467  
  ソフトウェアパッケージのインストール (例), 468, 470

## せ

制限, パッケージおよびパッチの追加および削除, 429  
正常なシャットダウン, 216

## 製品登録

  regadm register コマンドの使用, 374  
  サービスタグ情報, 359  
  動作する方法  
    自動登録, 360  
製品登録情報, 取得方法, 376  
製品登録情報の取得, 方法, 376  
製品の登録方法, Oracle Solaris 自動登録, 358  
セキュリティ, ユーザー ID 番号の再利用, 95  
セキュリティに関する注意事項, Java Web Console, 84  
セッションタイムアウト時間, Java Web Console のプロパティの変更, 72  
設定  
  自動登録構成  
    HTTP プロキシとポート, 369

## そ

ゾーン, パッケージおよびパッチの追加および削除に関する制限, 429  
ソフトウェア管理  
  ツール, 426  
  パッケージ, 423  
  パッケージの命名規則, 428  
ソフトウェアパッケージ  
  インストール, 468  
  スプールディレクトリからのインストール (例), 467

## た

対話式のブート, GRUB を使用した x86 システムのブート, 275-277  
ダウンロード  
  パッチ  
    patchadd の使用, 483

## つ

追加  
  管理ファイルによるパッケージの追加, 429

## 追加 (続き)

- 実行制御スクリプト (方法), 411
- スプールディレクトリからのパッケージの追加 (例), 468
- スプールディレクトリへのパッケージの追加 (例), 470
- ディスクレスクライアントの OS サービス (方法), 168
- パッケージ (要件), 428
- パッケージ、例, 465
- 複数のバージョンのパッケージ, 428
- マウント済みの CD からパッケージを追加する (例), 464
- ユーザー初期設定ファイル, 110
- リモートパッケージサーバーからパッケージを追加する (例), 465

## て

## 停止

- 復旧目的のシステム停止 (手順)
  - x86, 313, 339
- 復旧を目的としたシステムの停止
  - SPARC, 306

## ディスクレスクライアント

- OS サービスの削除 (方法), 178
- OS サービスの削除 (例), 178
- OS サービスの追加 (方法), 168
- 定義, 149
- ブート (方法), 177

## ディスクレスクライアントのインストールの問題

- のトラブルシューティング, 失われた ARCH=all
- パッケージの追加方法, 182-190

## ディスクレスクライアントの管理コマンド

- smossservice
  - OS サービスの追加, 155

## ディスクレスクライアントのトラブル

- シューティング, 失われた ARCH=all
- パッケージの追加方法, 182-190

## ディレクトリ

- PATH 環境変数, 115, 116, 117
- アクセス権の制御, 118
- スケルトン, 110
- ベースディレクトリ (basedir), 428

## ディレクトリ (続き)

- ホーム, 99
  - ユーザーアカウントの所有権の変更, 135
- データ転送, サービスタグ, 359
- データの転送, サービスタグ, 359
- デジタル署名, 署名付きパッチ, 476
- デバイスの命名規則
  - GRUB, 321

## と

- 登録情報の事前取得
  - 予行演習機能
    - 自動登録, 373
- 登録済み製品, 情報の取得, 376
- 匿名での登録 (例), 376
- トラブルシューティング
  - 64 ビットブートの失敗, 346
  - Java Web Console, 76

## な

## 名前

- SUNW 接頭辞, 428
- グループ
  - 説明, 97
  - ソフトウェアパッケージの命名規則, 428
- ユーザーログイン
  - 説明, 93
  - 変更, 134
- 名前付きサポート資格の指定, Oracle Solaris 自動登録, 371
- 名前付きサポート資格の指定による認証, Oracle Solaris 自動登録, 371

## に

- 二次グループ, 97
- 認証の失敗, 自動登録での問題のトラブルシューティング, 377

## ね

- ネームサービス
  - グループ, 98
  - ユーザーアカウント, 100, 102
- ネットワークブート, GRUB を使用, 286-291
- ネットワークマクロ, DHCP の設定, 288

## の

- ノード, Solaris 管理コンソールのナビゲーション  
区画, 37

## は

- 破壊されたブートアーカイブ, 再構築方  
法, 284-286
- 破壊されたブートアーカイブの再構築 (方  
法), 284-286
- パスワード (ユーザー)
  - \*LK\* パスワード, 135
  - 暗号化, 102
  - 設定, 98, 137
  - 説明, 98, 138
  - 選択, 98
  - 注意事項, 98
  - 変更
    - 頻度, 98
    - ユーザーツール, 137
    - ユーザーによる, 98
  - 有効期限, 102, 138
  - ユーザーアカウントの無効化/ロック, 135
  - ユーザーツール, 137
- パッケージ
  - 概要, 423
  - 署名付き
    - 「パッケージ、署名付き」を参照
  - 追加
    - 「pkgadd コマンド」も参照
  - 定義, 423
- パッケージおよびパッチの削除および追加  
制限
  - ゾーン, 429

パッケージおよびパッチの追加および削除  
制限

- ゾーン, 429
- パッケージ、署名付き, 概要, 424
- パッチ
  - 管理, 478
  - 使用される用語, 479-481
  - 情報の表示, 484-485
  - 署名付き, 476
    - 適用, 424
  - 署名なし, 476
  - ダウンロード
    - patchadd の使用, 483
    - 定義, 475
    - パッチの README ファイル, 476
    - パッチへのアクセス, 476-478
    - 番号付けの方式, 477
  - パッチ管理ツール, 製品概要, 478
  - パッチ関連の用語集, 479-481
  - パッチ関連用語の定義, 479-481
  - パッチの一覧
    - 表示
      - patchadd による, 484-485
  - パッチの適用, patchadd の使用, 482-484

## ひ

- 表示
  - インストール済みソフトウェアの情報, 468
  - 環境変数, 113
  - パッケージの情報 (例), 469
  - パッチの一覧
    - patchadd による, 484-485
  - ユーザーマスク, 118

## ふ

- ファイル
  - アクセス権の制御, 118
  - 新しくインストールされたパッケージの属性の  
検査, 470
  - ユーザーアカウントの所有権の変更, 135



- ファイルシステムと sync コマンドとの同期化, 307
  - ファイルとディレクトリのアクセス権の制御, 118
  - ブート
    - 64ビット対応の x86 システムを 32ビットモードでブートする(例), 343
    - iSCSI ブート, 193-194
    - Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助)(手順)
      - x86, 338
      - システム、ガイドライン, 199
    - 実行レベル S
      - SPARC, 254
    - 対話式(方法)
      - SPARC, 255
    - ディスクレスクライアント(方法), 177
  - ブートアーカイブ
    - 管理, 293-304
    - 種類, 208-209
    - 破壊されたブートアーカイブを再構築する方法, 284-286
  - ブートアーカイブの管理, 293-294
    - 手順, 293-304
  - ブートオプション
    - L
      - ZFS ルートファイルシステム, 259-263
    - Z
      - ZFS ルートファイルシステム, 259-263
  - ブート時の対話処理, GRUB メニュー, 241
  - ブート動作
    - GRUB menu.lst ファイルの編集
      - 方法, 242-246
    - GRUB メニューでの変更方法, 239-240, 278-281
    - 管理, 225-249
  - ブート動作、x86 システムでの変更, 235-249
  - ブート動作の管理, 225-249
  - ブート動作の変更
    - GRUB menu.lst ファイルの編集
      - 方法, 242-246
    - ブート時に GRUB メニューで, 235-237
  - ブート動作の変更(作業マップ), 235-249
  - ブートプロセス, x86, 352
  - ブートプロパティの変更, 232
- フェイルセーフ
    - GRUB ベースのブート
      - 復旧, 282-283
  - フェイルセーフアーカイブ
    - GRUB の参照情報
      - 説明, 208-209
    - ブート, 293-294
  - フェイルセーフアーカイブのブート, 破壊されたブートアーカイブを再構築するため, 284-286
  - フェイルセーフモード, SPARC システムでのブート, 264-267
  - フェイルセーフモードでのブート
    - GRUB ベースのブート, 282-283
    - SPARC システム, 264-267
  - 複数のバージョンのソフトウェア
    - パッケージ, 428, 430
  - 復旧
    - フェイルセーフアーカイブのブート
      - GRUB ベースのブート, 282-283
  - プライマリ管理者の役割
    - 権利の付与, 44
    - 作成(概要), 44
  - プロキシとポートの設定
    - 自動登録構成
      - 構成, 369
  - プロキシ認証
    - 自動登録構成
      - 構成, 369
  - プロセス, 自動登録が動作する方法, 360
  - プロパティ
    - boot-file プロパティの変更, 232
    - 自動登録構成, 368
  - プロファイル(SMF), 説明, 384
- へ
  - ベースディレクトリ(basedir), 428, 430
  - 別名, ユーザーログイン名との違い, 94
  - 変更
    - Java Web Console のプロパティ
      - セッションタイムアウト時間, 72
    - ユーザー ID 番号, 134
    - ユーザーアカウントのディレクトリ所有者, 135

## 変更 (続き)

- ユーザーアカウントのファイル所有権, 135
- ユーザーのパスワード
  - 頻度, 98
  - ユーザーによる, 98
- ユーザーパスワード
  - ユーザーツール, 137
- ユーザーログイン名, 134

## 変数

- 環境, 113, 118
- シェル (ローカル), 113

## ほ

- ほかのアプリケーションとの互換性, Java Web Console, 61

## ま

## マウント

- ユーザーのホームディレクトリ
  - 自動マウント, 100
- ユーザーのホームディレクトリ (方法), 132

## マクロ, DHCP, 288-289

## マルチブート実装, menu.lst ファイルの説明, 324-325

## マルチユーザーレベル, 「実行レベル 3」を参照

## む

## 無効化

- ユーザーアカウント
  - パスワード, 135
  - ユーザーツール, 135

## 無効にする, 実行制御スクリプト (方法), 411

## め

- メール別名 (エイリアス), ユーザーログイン名との違い, 94

## メニュー

- GRUB
  - 説明, 241

## も

## 目録

- サービスタグ, 376
- 自動登録機能を使用した登録, 358-362
- 目録 (SMF), 説明, 384

## ゆ

## ユーザー ID 番号, 94, 95, 134

## ユーザーアカウント, 93

## ID 番号, 94, 95, 134

## ガイドライン, 100

## 情報の格納, 100

## 設定

## 情報シート, 124

## 説明, 93

## ネームサービス, 100, 102

## 無効化/ロック

## パスワード, 135

## ユーザーツール, 135

## ログイン名, 93, 134

## ユーザー鍵, 424

## ユーザー初期設定ファイル

## カスタマイズ, 110, 119

## 概要, 111

## カスタマイズされたファイルの追加, 110

## 環境変数, 114, 118

## サイト初期設定ファイル, 111

## シェル変数, 114, 116

## ユーザーマスクの設定, 118

## ローカルシステムへの参照を避ける, 112

## シェル, 112, 119

## 説明, 100

## 例, 119

## ユーザーツール

## アカウントの無効化, 135

## パスワード管理, 137

## ユーザーのパスワードの有効期限, 138

ユーザーのホームディレクトリ  
 カスタマイズされた初期設定ファイル, 110  
 削除, 135  
 所有者の変更, 135  
 説明, 99  
 非ローカル参照 (\$HOME), 99, 112  
 マウント  
 自動マウント, 100  
 マウント(方法), 132  
ユーザーパスワードの有効期限, 102  
ユーザーマスク, 118  
ユーザーログイン(擬似), 94  
ユーザーログイン名  
 説明, 93  
 変更, 134

## よ

用語, GRUB, 318-320  
 予行演習オプション, `regadm register -d`, 373

## ら

ライブラリインタフェース, SMF, 386-387

## り

リスタータ (SMF), 387  
 説明, 380  
リセット, SPARC システム, 231  
リポジトリ (SMF)  
 説明, 380, 385  
リモートシステムへのアプリケーションのアクセス, Java Web Console, 86  
リモートパッケージサーバー  
 スプールディレクトリへのパッケージの追加  
 (例), 468  
 ソフトウェアのインストール, 465  
 ソフトウェアのインストール(例), 465

## れ

レガシーアプリケーション, Java Web Console, 79

## ろ

ログインレベルの選択, Java Web Console のプロパ  
 ティーの変更, 69  
ログイン名 (ユーザー)  
 説明, 93  
 変更, 134

